

# ママは私だけの校医さん

- 一. 診察室の二人 一ページ
- 二. 予期せぬ出会い 十二ページ
- 三. 二人、初めての夜 十八ページ
- 四. 深夜の目覚め 二八ページ
- 五. 朝の出来事 三四ページ
- 六. お出かけの時は 四一ページ
- 七. ようやくの帰宅、だけど…… 五七ページ
- 八. 変わり果てた整理箆笥 六四ページ
- 九. お家にいる時は 七〇ページ
- 十. 見送りの時も 七五ページ
- 十一. おむつの中は、いつも…… 八九ページ
- 十二. 突然の来訪者 一〇三ページ
- 十三. 幼なじみ、親友、そして…… 一一一ページ
- 十四. 新たな家族 一一九ページ
- 十五. 特別仕立てのおむつカバー 一二七ページ
- 十六. 屈辱の衣裳 一三三ページ
- 十七. 恥辱の食事風景 一四二ページ
- 十八. トイレはすぐそこなのに…… 一五一ページ
- 十九. 偽りの日常 一六九ページ
- 二十. 久々の登校 一八七ページ
- 二一. 保健室にて 一九七ページ
- 二二. それぞれの想い 二一五ページ
- 二三. 二度目の保健室 二二五ページ
- 二四. クラスメートの目の前で 二四二ページ
- 二五. もうひとりのお姉ちゃん 二五四ページ
- 二六. 特別補習 二六八ページ
- 二七. 抑えきれない想い 二八一ページ
- 二八. 再び流れ始める時間 二九五ページ

## 《一・診察室の二人》

四月も半ばを過ぎた、うららかな春の昼下がり。

「佐藤さん、佐藤真衣さん。お待ちせしました、お入りください」

診察室の扉が開いて、淡いピンクの白衣に身を包んだ若い女性看護師が姿を現し、待合室のソファに身を固くして腰かけている少女に向かって優しく呼びかけた。

「あ、はい……」

真衣と呼ばれた少女はどこか躊躇いがちに応え、おずおずと立ち上がった。

今日は土曜日。他の開業医と同様、ここ、鈴木医院も午後は休診だ。それに、午前の受付終了間際にやって来た真衣より先に受付を済ませていた患者たちは既に診察が済んで帰路についているから、真衣が診察室に姿を消すと、待合室はがらんとしてしまう。

「その後、具合はどうか？」

真衣が椅子にお尻をおろすのを待って、純白の白衣を身にまとった女医が話しかけた。白衣の胸元には、鈴木美幸と記された名札がクリップで留められている。

「あ、あの……どうと言われても、その……」

真衣は、おどおどした様子でそう応えるのが精一杯だった。もともと内気なところにもつてきて、鈴木医院を訪れた理由が理由だから、とてもではないが弾んだ声で返事などできるわけがない。

「そう。じゃ、変わりなしってことね」

美幸は穏やかな笑みを浮かべつつも、真衣の胸の内をすっかり見透かしてしまうかのようない瞥をくれて短く言い、細かな数字が並んだデータシートを机の上に広げて言葉を続けた。「先週の土曜日に採尿したでしょ？ その時のおしっこを詳しく調べた結果が出ているんだけど……」

美幸の言葉に、けれど真衣は口をつぐんで、ぎこちなく頷くだけだ。

そんな真衣の様子に、美幸は穏やかな笑顔のまま言った。

「心配しなくていいわよ、糖も蛋白も出てないし、雑菌の種類や個数の値も正常範囲内だから。それに、先週の診察でも特に異状は見受けられなかったから、体は大丈夫よ」

「……そ、そうなんですか？」

真衣は蚊の鳴くような声で言った。

「ええ、特に異状は見当たらないわね、私の診察の範囲内では。ただ、念のために、さっき採尿したおしっこの検査結果が出てから、それも合わせて判断することにしましょうか」

美幸は軽く頷いて言ってから、僅かに首をかしげて付け加えた。

「ああ、それと、前に渡しておいた問診票の内容も見ておかないとね。ちゃんと書いてきてくれた？」

「え、あ、は、はい……」

美幸に言われて、真衣は、頬を微かに赤く染め、おどおどした様子で茶色の封筒を差し出

した。

「いいわ。じゃ、見せてもらうわね」

美幸は、受け取った封筒の封を無造作に開け、引っ張り出した四つ折りの紙をさっと広げて、そこに記入されている幾つもの数値を一つ一つ丹念に目で追った。

一瞬、診察室がしんと静まりかえる。

「あの、あの……どうなんですか？」

静寂に耐えかねたかのように、真衣がいかにも不安そうな面持ちで問いかける。

だが、すぐには返事がない。

美幸が問診票を机の上に置き、真衣の顔に視線を戻したのは、それからしばらくしてからのことだった。

「あ、あの……」

改めて真衣が躊躇いがちに声をかける。

が、丁度その時、真衣を診察室に招き入れた看護師が、新しいデータシートを持って検査室から戻ってきた。

「ごめんなさい、もうちょっとだけ待っていてね」

美幸は、いったん真衣の顔に戻した視線を、今度は看護師から受け取った新しいデータシートに向け直した。

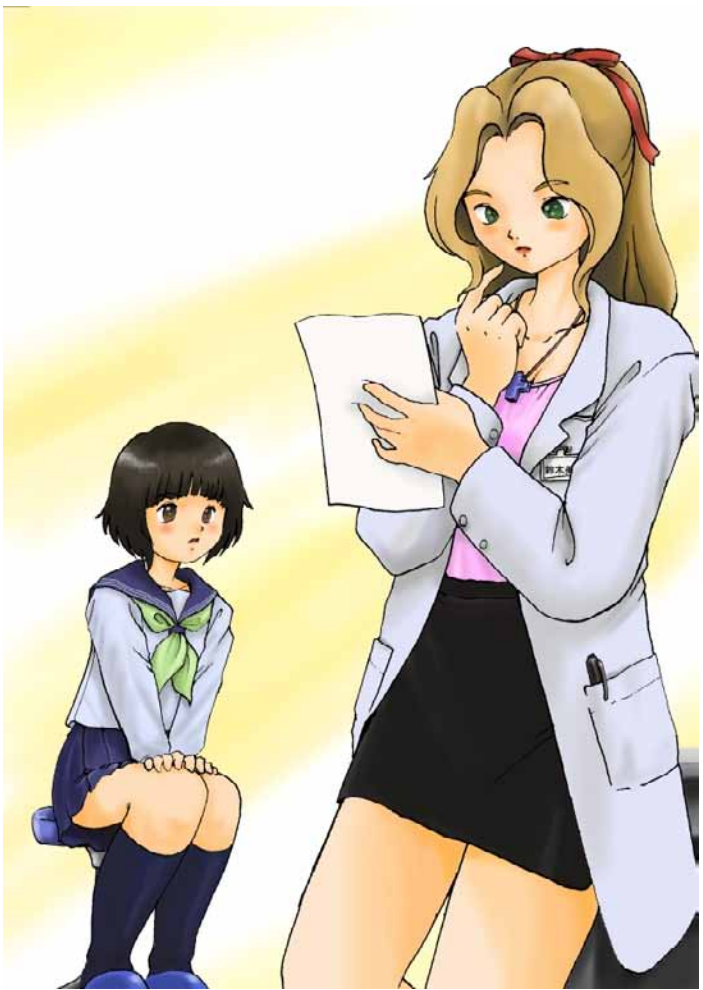
「……」

問いかけを遮られた真衣だが、不満そうな表情を浮かべる様子はなく、むしろ、ますます不安げな面持ちになつて唇をきゅつと噛み、時おり美幸の顔をちらちらと覗き見るばかりだ。

「うん、今日のおしっこにも変な数値は出ていないわね。このぶんなら、膀胱

の炎症とか、そういう心配はないわね。よかった、見立て通りで」

新しいデータシートに目を通しつつ、先週のデータシートとカルテにもちらちらと目をやっつて、美幸は、不安そうな表情を浮かべる真衣に向かって落ち着いた声でそう声をかけた。



その説明に一瞬は安堵の面持ちになった真衣だが、じきに、元通りの不安そうな表情を浮かべたかと思うと、よく注意していないと聞き取れないような力ない声で言うのだった。

「でも、でも………だったら、どうして? どうして治らないんですか、私の、お、おね……」

聞きようによってはどこか責めるみたいな調子でそう言った真衣だが、それ以上は続かなかった。言葉が最後まで言い終えることなく口ごもってしまう。

「肉体的な異状が認められないのだったら、精神的な原因があるってことになるわね」

殆ど間を置かず美幸は応じ、更に、真衣が途中で飲み込んでしまった言葉をずばりと口にした。

「おそらく心理的な要因が強いんだと思うわ、佐藤さんの夜尿——おねしよの原因は」

美幸の唇を衝いて出た『おねしよ』という言葉に、真衣の頬がかつと熱くなる。

そう、真衣が鈴木医院を訪れるようになったのは、高校入試の三週間ほど前から始まって、無事に第一志望の高校に入学できた今も続いている恥ずかしい病気を治療してもらったためだった——。

\*

幼い頃に母親を交通事故で亡くした真衣は、父親である優の男手一つで育てられた。少し内気ではあるものの、小さな頃から、まるでひねくれたところがなく、常に絶やすことのないおとなしそうな笑みのために周りの誰からも愛され、母親がいない寂しさというものを殆ど感じさせない、素直な少女だ。

そんな真衣が中学三年生になり、学校に提出する進路希望調査書に第一志望として記入したのは、啓明女学院高校の名前だった。

少し気の弱いところのある真衣にしてみれば、男女共学の公立学校が幾らか負担になっていたのは否めない。それでも義務教育はどうにか我慢していたのだが、高校に進む時には女子校がいいなという漠然とした思いを抱くようにもなっていた。そんな時、進路を決めるために父親の優とあれこれ相談していて、今は亡き母親が高校生の時に通っていたのが啓明女学院高校だと聞かされたのだった。優が言うには、真衣の母親は大学も啓明女学院を出て、卒業した後は或る製薬会社に営業事務として採用され、その製薬会社の先輩で営業職に就いていた優と知り合い、それがきっかけで結婚に至ったということだった。そんなことがあって、女子校に進みたいという漠然とした思いと、若かった頃の母親が過ごした青春時代を追体験してみたいという願望とが渾然となり、真衣は微塵も躊躇うことなく、第一志望として啓明女学院高校の名を挙げたのだった。

もつとも、自分でそうと決めても、実際に啓明に入学するのは容易なことではなかった。学区の中でも啓明は偏差値が高い方で、第一回の模試では合格判定はBしか取れなかった。それでも、いったんこうと決めた後の真衣は、日頃の内気な性格が嘘のように一途に勉強に打ち込んだ。そうして、模試の回数を重ねるたびにB判定とA判定とを行ったり来たりするようになり、昨年の年末と今年の一月に行われた模試では続けてA判定を取れるまでになっ

ていた。

が、ここから真衣は更に大変な目に遭うことになる。根を詰めて勉強に打ち込みすぎたせいか、いよいよあと三週間で入試という日になって、急に熱を出して寝込んでしまったのだ。学校から帰ってきて夕飯の支度をしている途中で感じ始めた体のだるさはまるで衰えることなく、出始めた熱はあつという間に三九度を超えてしまうといった具合で、父親の帰宅を待つことも辛くなって、せっかく用意した夕飯を口にすることもなく、とうとう、倒れ込むようにして布団に潜り込んでしまったほどだ。翌日も翌々日も熱が下がる気配はなく、うんうん唸りながら布団の中で体中を汗まみれにするしかない日が続いた。

父親の優としても愛娘の具合は気になって仕方ないのだが、インフルエンザが流行しているこの時期、製薬会社で営業次長の職にある身としては、自ら担当する病院や開業医との間の折衝をこなしながら部下のフォロワーや部署間のマネジメントも疎かにするわけにゆかず、とてもではないが休暇の取得を申し出られるような状況ではなかった。これまで男手一つで育てられてきた真衣にしてみれば父親の置かれたそんな立場も充分に理解しており、弱音を吐くようなこともなく、食事を摂るのが困難な中、自分でミルクを温めて飲んだりしながら、辛い日々をやり過ぎすしかなかった。

容態が好転したのは、そんな状況を我慢して四日ほどを辛うじて乗り切った頃だった。朝になって目を開ける時、それまでの何日かとは違う、体のだるさは残っているものの少しばかり呼吸が楽になったような感じがして、随分ほっとした気分になったものだった。そうなれば、持ち前の若さもあつて回復は早く、その日の夕方には熱も三七度五分ほどに下がり、それまでは牛乳やプリンだけで済ませていた食事も、どうにか自分で用意できるまでになっていたし、自分で用意した軽い夕飯を摂った後、帰宅の遅い父親を待とうかどうか迷ったものの、再び体調をくずさないようにと早めに床についたのがよかったのだろう、その翌朝には、久しぶりに爽やかな目覚めを迎えることができた。

しかし、実は、その朝こそが、それまで予想だにできなかった懊悩の日々の始まりだったのだ。

ベッドの中でうんと伸びをして、気怠さも感じずに瞼を開けた真衣だったが、ふと下腹部に違和感を覚えた。

ここ数日は高熱のせいひっきりなしに汗をかいていたから、下腹部に覚えるじとつとした感触もそのせいかと最初は思ったが、すぐに、そんなじゃないことがわかった。今はもうすっかり熱も下がって、上半身はさらつとしていりし、下半身でも、腿の下から足首、足の裏にかけては汗をかいている様子が無い。じとつと湿っぽいのは、おヘソのちよつと下から股間、お尻の膨らみから太腿にかけての下腹部に限られていた。

ひよつとしたらという思いと、まさかそんなという思いとが頭の中で交錯する。真衣は右手でおそるおそる掛布団の端を持ち上げた。

途端に、体臭と薬の成分とが入り混じった、なんともいい匂いがない匂いが鼻を打つ。

真衣は下唇をぎゅっと噛みしめ、のろのろと右手を動かした。

やがて掛布団がすっかりはだけ、長袖のパジャマを着た真衣の体があらわになる。

「あ……」  
左手を敷  
布団につい  
て上半身を  
起こした真  
衣の口か  
ら、短く弱  
々しい声が  
漏れた。

真衣の瞳  
に映ったの  
は、ぐっし  
より濡れた  
パジャマの  
ボトムと、  
お尻が載っ  
ているあたりがうつすらと黄色に染まったシーツだった。  
鼻につくその匂いと、一目でそれとわかる濡れ方。真衣の下腹部がぐっしより湿っているのが汗のせいなどでないことは火を見るより明かだった。



入試も近いから症状が少しでも軽くなればすぐに登校しようと思っていた真衣だが、結局、その日も学校を休まざるを得なかった。おねしよの事実を気づかれないようにするには、父親が会社へ行くため家を出るまで自分の部屋から出るわけにゆかず、父親が出社した後に、掛布団や敷布団、それに自分のパジャマや下着を処置しなければいけなかったからだ。布団から剥ぎ取ったシーツや下着を放り込んだ洗濯機をまわし、薄いシミになった布団を木陰に隠すようにしてベランダに干しす真衣にとって、目を覚ました時に一瞬だけ感じた朝の清々しさなど、とつくにずっと昔のことになってしまっていた。今はただ、この恥ずかしい粗相の痕跡を消し去ってしまうのに精一杯だった。

情けない洗濯を終え、その後は惚けたようにベッドの端に腰かけるだけの時間が過ぎて、その日の夕方には熱もすっかりひいたが、胸の内は鬱々とするばかりだった。そうして、結局、父親のために簡単な夕飯を用意した後は何もする気分になれず、『まだ体調がすぐれないから先に寝ます』という父親宛のメモを食卓に置いて布団にもぐりこむしかできない真衣だった。仕事に忙しい優が真衣のメモの内容に微塵の疑いも抱かなかったことがせめてもの救いといったところだろうか。

（あれは何かの間違いだったのよ。昨日のことは悪い夢に決まってる。もうあんな馬鹿なことがあるわけない）不安にかられながら自分にそう言い聞かせて無理矢理の眠りについた真衣を翌朝になって待ち受けていたのは、しかし、前の日の朝と同様の下腹部から伝わってくるじっとり湿っぽい感触だった。

突如として始まったおねしよは、その翌日になっても治らなかつた。そのせいで、熱のせいを合わせると、もう一週間近くも学校を休んでしまったことになる。

入試を目前に控えてこれ以上休むなんてとんでもない。それに、一週間以上も学校を休んだりしたら、いくらなんでも父親に怪しまれるに違いない。かといって、(あまり考えたくはないが) これからもこの恥ずかしい失敗が続くようだと、寝具をどう処置していいものか。学校に遅刻しないようにするには、父親の会社と殆ど同じ時刻に真衣も家を出なければならぬ。しかし、そうすると、シーツを洗ったり布団を干したりしている時間は取れない。だいいち、洗ったシーツやシミの付いた布団をベランダに干したまま出かけたしたりしたら、誰の目に触れるかしたたものではない。

その日は土曜日で真衣はもともと学校が休みだったが、幸いなことに、父親は忙しい時期のため休日出勤になっていた。

なんとかするチャンスは今日しかない。下腹部を包むいやな感触を我慢しながら父親が出かける時刻になるまでベッドにもぐりこんだまま、真衣は覚悟を決めるしかなかった。

なんの前触れもなく始まったおねしよだから、やはり突然に治るんじゃないか。そんな期待も少しはあったが、逆に、これで三日間も続いたおねしよがあっけなく治るわけがないという諦めに近い思いの方が強かつた。今の真衣にできるのは、おねしよをしてしまっても布団やパジャマを汚さずにすむ方法を実行に移すこと、それだけだつた。

ともあれ、あれこれ苦心しつつもどうにかこうにか入試を乗り切り、第一志望の啓明に入学できた真衣だったが、環境が変わつたらひよつとしてという淡い期待も裏切られ、高校に入つても、おねしよが治る気配は一向になかつた。

春になるとインフルエンザの流行も収まり、会社の決算期も済んで、優の仕事も、それまでに比べれば幾らかは落ち着いてくる。そのため残業も減つて、真衣と一緒にいる時間が増える。これまでの真衣なら、ただ一人の肉親である優と一緒にいられることを喜んだろうが、おねしよが始まつてからは、恥ずかしい秘密を父親に知られまいかと気が気ではないというのが偽らざるところだ。

そんな時に出会つたのが、鈴木医院の副院長である鈴木美幸だつた。

高校に入學してすぐに校内で行われた健康診断で内科の診察にあたっていたのが美幸だつた。美幸の父親である鈴木医院の院長がなかなかのやり手で、公立・私立を問わず、こいから一帯の多くの学校から校医としての指定を受けていたからだ。

健康診断で聴診器を胸に当てられ言葉を交わしたのはごく短い時間でしかなかったが、落ち着いた中に厳しさと優しさとを併せ持った美幸の雰囲気、なぜとはなしに真衣は心を惹かれてならなかつた。それがあつたからこそ、自分の恥ずかしい病気をこの美しい女医に相談してみようという気になつたのだ。中学校の時にも保健室の教諭なり校医なりに相談した方がいいかなと思つたこともあるのだが、保健室の教諭に相談したりすると、相談の内容がどこからともなく洩れ出して学校中の噂になるんじゃないかという不安が先に立ってしまった、また、校医に相談しようにも、中学校指定の校医が中年男性だつたこともあって、結局は誰

にも助けを求めることができずに中学校を卒業してしまっていたというのが実情だ。

初めての出会いからこちら、絶えず胸の中に美幸の顔を思い浮かべる日が続き、とうとう、健康診断があった週の土曜日、躊躇いながらも、真衣は鈴木医院を訪れていた。そして、美幸に問われるまま、羞じらいの表情を浮かべつつもこれまでの経緯を話し、おしっこを採尿カップに取り、内診台の上で羞恥の姿勢を取ったのだった。

\*

——そんなふうにして先週の土曜日に初めて鈴木医院を訪れ、いろいろと検査をもらった結果でも、二度目になる今日の検査でも、身体にこれといった異状は認められないと美幸は断言したわけだ。だから、おねしよの原因は精神的なものしか考えられないと。

「で、でも、あの、心理的って言われても……」

美幸の見立てに、真衣は戸惑いの表情を浮かべるばかりだ。高熱が原因で身体に異状をきたしたのだとばかり思い込んで、その治療さえ済めば恥ずかしい失敗も終わるに違いないと決めてかかっていただけに、『心理的な要因』と言われてもどう反応していいかわからない。

「……じゃ、じゃ、熱は関係なかったんですか？ 私、熱のせいで体のどこかがおかしくなつて、それで、毎晩、お、おね……しよを……」

「熱が全く無関係ということじゃないと思うわよ。ただ、それが全ての原因だってわけじゃなくて、なんていったらいいかな——そう、きっかけになったんじゃないかってことなのよ」

「きっかけ……ですか？」

真衣は要領を得ない顔で聞き返した。

それに対して美幸が、片方の眉をちよつと吊り上げるようにして問いかける。

「辛いことを聞くようで申し訳ないんだけど、佐藤さん、小さい頃にお母様をなくされていらっしゃるだったわよね？」

「え？ ええ、はい」

「だったら、夜尿のことをお母様には相談できない。それは仕方ないとして、で、お父様には相談した？」

「い、いえ……忙しい父に心配かけたくありませんから……」

考え考え言葉を選ぶようにして応じる真衣に対して、美幸が僅かに首をかしげ、重ねて訊いた。

「心配かけたくないから？ ——本当にそれだけ？」

「……」

思わず真衣が返答に詰まる。

「恥ずかしかつたからじゃないの？」

たたみかけるようにして美幸が問い質した。

「……そ、そうかもしれないけど……」



真衣は困ったような顔で目を伏せた。

それに対して美幸は、それまでよりもずっと穏やかな表情を浮かべて優しく言う。

「肉親とはいっても、男の人に夜尿のことを知られるのは恥ずかしいわよね？ いいのよ、それはそれで当たり前のことなんだから。ただ、佐藤さんの夜尿を治すために、私は、医師として、本当に些細なことでも一つ一つ正確に知っておかなきゃいけないの。だから、佐藤さんも、恥ずかしがらずにどんなことでもできるだけ正直に話してちょうだい。いいわね？」

「……あ、はい。ごめんなさい、先生」

叱りつけるわけでもなく、妙に甘やかすわけでもない、優しくせにどこか威圧感のある美幸の口調に、真衣は思わずこくと頷いてしまう。

「わかってくれればいいのよ、そんなに神妙な顔をしなくても。でも、念のためにもういちどだけ言っておくわね。お父様には恥ずかしくて打ち明けられないようなことでも、私には包み隠さず話してちょうだい。同じ女性どうし、少しは話しやすいでしょ？」

教え諭すようにそう言う美幸を目の前にして、突然、真衣の脳裏に、在りし日の母親の姿が蘇った。

それは、真衣が幼稚園の年長クラスだった時のこと。どちらかという手がかからず、おむつ離れも早かった真衣だったが、夏の盛り、暑くて、寝る前にジュースをたくさん飲み過ぎた日があった。しかも、その日は夏休みの最中で、昼間に遊園地へ連れて行ってもらい、幽霊屋敷にも入っていた。そんなこんなで、ぐっすり眠っている間に尿意を催した上、怖い夢を見て、ついおねしよをしてしまった。しかし、おねしよに気づいた母親は叱りもせず、「お父さんには内緒にしとこうね。真衣はこれまでずっといい子で、おもしろやおねしよでお母さんを困らせたことなんて一度もなかったんだから、今度のおねしよは何かの間違いに決まってる。だから、お父さんには話さないでおこう。でも、これから、何か困ったことがあったら、どんなことでも隠さないでお母さんには話してちょうだい。女どうし、ちゃんと相談に乗ってあげるから」と優しく言い聞かせて真衣の体をぎゅっと抱きしめてくれたのだ。

真衣の脳裏に蘇ったのは、その時の母親のこれ以上はないくらい優しい笑顔と、両手のぬくもりだった。しかし、そんなことがあった一ヶ月ほど後、買い物に出かけた母親は、交通事故に遭って還らぬ人となってしまったのだ。

「うん……あ、は、はい……」

真衣は頭をぶるんと振って、もういちど小さく頷いた。

「そう、それでいいのよ」

美幸はすっと目を細めて真衣の顔を覗き込んだ後、再びカルテに目を走らせながら続けて言った。

「ところで、佐藤さんはトイレが近い方かな？ 問診票には、この一週間、毎日トイレへ行った時間も書いてもらったんだけど、それを見ると、普通よりも回数が多いみたいね。そのあたりのことも少し詳しく聞いておきたいんだけど、自分でどう思う？」

「それは、あの……近い方だと思います」

真衣は少し口ごもりぎみに応えてから、意を決したようにこう言い直した。

「いえ、思うんじゃなく、近いです。問診票にも書いた通り、学校じゃ授業と授業の間の休憩時間になるたびにトイレへ行ってるし、小学校や中学校の遠足とか修学旅行じゃ、バスに乗っていても、いつになったらサービスエリアに停まってくれるか、そればかり気になって景色なんてちっとも見えてなかったくらいですから。今も、通学で電車に乗るたび、駅ごとにおりてトイレへ行った方がいいんじゃないかって不安になるほどです」

「そうなの。でも、トイレが近くても、今度の夜尿が始まるまでは夜尿は大丈夫だったんだから、それが直接の原因とは考えにくいわね。それに、トイレが近いのも、膀胱の機能に異常がある場合よりも精神的な原因の場合の方が多し——トイレが近い理由、自分なりに何か心当たりはないかな？」

真衣の返答に、美幸はカルテをペンの先でびんと弾いて言った。

「……心当たりなら、ないこともないですけど……」

いったんは意を決した真衣だが、再び明かな逡巡の表情を浮かべ、弱々しい声になってしまう。

「約束したでしょ、どんなことでも話してくれるって」

「あ、は、はい……」

美幸に励まされ、視線を床に落として真衣が口にしたのは、辛い思い出にまつわる事柄だった。

交通事故に遭って還らぬ人となってしまうた母親の通夜。真衣は、横たわる母親の亡骸に寄り添って泣き続けた。お腹が空くのも喉が渇くのも、時間の経過とともに次第に高まってくる尿意のことも忘れて、ひたすら泣き続けた。そうして、とうとう、大勢の弔問客の目の前でしくじってしまったのだった。けれど、一ヶ月前のおねしよの時とは違って、下着を濡らしてしまった真衣を暖かく抱きしめてくれる母親はもういない。そのことがまた悲しくて、真衣は流れ続ける涙を止めることができなかった。

無論、そんな真衣をなじる者などいない。親類も弔問客も、真衣のことを不憫がつて遠巻きに見守るだけだ。その中で、ただ一人、真衣の肩に手を載せる人物がいた。それは、自分も最愛の伴侶をなくして泣き出したいだろうに、それを堪えて優しい声をかけた父親・優だった。

優は真衣に対して叱るでもなく憐れむでもなく、ただ、これ以上はないだろうと思えるくらい優しい声で「真衣は幼稚園の年長さんだから、もうおもらしは卒業しなくちゃいけないね。いつまでも失敗しているとお母さんが安心して天国へ行けないだろう？ お母さんを安心させてあげるためにも、しっかりした子になろうね」と囁きかけた後、真衣を隣室に連れて行って、慣れない手つきで新しい下着と洋服に着替えさせたのだった。

お母さんを安心させてあげなくちゃ。安心して天国に行かせてあげなくちゃ。真衣は心の奥底に父親の言葉をしっかりと刻みつけていた。ただ、幼い真衣の心に、その言葉はあまりに深く強く刻みつけられてしまった。優の手で新しい洋服に着替えさせられた後は、涙ながらに眠りにつく前も、翌日の葬儀でも、そして再び幼稚園に通い始めてからも、僅かな尿意を

覚えただけですぐにトイレへ駆け込むのが習い性になってしまったのだ。それは、まさに、強迫観念さながらだった。そして、その習い性は、高校生になった今も続いている。

「そう、そんなことがあったの。ごめんなさいね、辛いことを思い出させちゃって」

途切れ途切れに話す真衣の説明を聞き終わった美幸は微かに表情を曇らせて言った。

「……いえ、どんなことでも話すって約束しましたから」

話している最中とは裏腹に、説明を終えた今、真衣はいっそ晴れ晴れしたような顔つきで小さくかぶりを振った。

「ありがたい、そう言ってくれると助かるわ。——で、頻尿の原因がそういうことで、小さい頃からこれまでずっと少しでもおしっこをしたくなるたびに我慢しないでトイレへ行っていたとすると、ひよつとしたら膀胱があまり成育していない可能性も考えられるわけか。初めてうちに来てくれた先週の土曜日は、そういうところまで気にしないで簡単に触診しただけだったけど、いずれ、膀胱の容量を測定するとか、もう少し詳しく調べなきゃいけないみたいね」

美幸は真衣の顔と下腹部とに交互に視線を走らせた後、カルテにボールペンで何やら横文字と記号を記入しながら言った。

「あの……そういう検査って、難しいことをするんでしょうか？」

美幸の言葉に表情をこわばらせて真衣が訊いた。

「あ、痛いわけじゃないし、そんなに時間がかかるってわけじゃないから、心配することはないわよ。とりあえず、心理療法と並行してそちらも進めてみましょう」

カルテへの記入を終えて、美幸は再び穏やかな笑顔に戻った。

「わかりました。……それで、心理療法って、私は具体的にどうすればいいんでしょうか？」

真衣は気持ちを切り替えるように軽く息を吸って、おずおずと美幸の顔を見た。

「あまり難しく考えることはないのよ。たとえば、そうね、学校で休み時間になるたびに行っているトイレを我慢して、二時限に一度しか行かないようにしてみるとか、おしっこをしなくなっても、まだ大丈夫だって自分に言い聞かせてみるとか。あとは——」

美幸は『心理療法』のための具体的な指示を幾つか申し伝え、真衣がそれを自分の手帳にメモを取ったのを確認して、穏やかな笑顔のまま言った。

「じゃ、今日はこれくらいにしましょう。私が言ったこと、無理しない範囲でいいから、なるべく気にかけて生活してみてちょうだい。中でも、学校でのトイレ我慢は重要だから、特にそのことは忘れないでね」

「わかりました。頑張ります、私」

真衣はもういちど手帳に視線を走らせ、自分を励ますようにわざと大きく頷いて診察椅子から立ち上がった。

「いいわ。じゃ、また来週」

「ありがたいございました。来週ここへ来るまでには一回でも二回でも失敗の回数が減っていればいいんですけど」

「そうなるよう、私も祈っているわ」  
くるりと踵を返して診察室から出て行く真衣の後ろ姿をじっと美幸は見送った。

「これでいいのね？」

真衣の足音が遠ざかってゆく様子を診察室の扉越しに確認して、美幸はわざとのようにゆっくり振り返り、それまで物陰にひそんで事の成り行きを見守っていた人物に声をかけた。

「うん、これでいいんだと僕は思うよ。真衣のためには、こうするのが一番だと思う」

物陰から姿を現し、真衣が出て行った扉を見据えてそう応えた人物は、真衣の父親・優だった。

「ん、わかった。優さんがそう言うなら私は一向に構わないわ。——あ、そうそう。学校との折衝も済んでいるから、そっちもいつでも大丈夫よ」

美幸も優の横に並び、診察室の扉にちらと目をやって言った。

「ありがとう。無理なお願いばかりして申し訳なく思っているよ。でも、これが真衣にとって——いいや、僕たち三人にとって一番いいことなんだ。天国のあいとも賛成してくれるに違いないさ」

優は扉を見据えたまま美幸の腰に手をまわした。

## 《二・予期せぬ出会い》

なるべく他の患者と顔を会わさないよう、真衣は、午後の診察がない土曜日の、それも受付終了間際に鈴木医院を訪れることにしている。もちろん、三度目の通院になる今週もそうするつもりだった。

だが、そんな予定は、まるで予想もしていない形で潰えてしまうことになるのだった。

いよいよ今週も金曜日。週末のどこか浮き浮きした感じと、明日はまた恥ずかしい診察の日だという陰鬱さが入り混じった、なんともいいようのない気分を抱いて学校から帰ってきた真衣は、玄関のドアに鍵を差し入れた直後、奇妙な表情を浮かべて体の動きを止めた。差し入れた鍵をまわしても手応えがないのだ。

（あれ、鍵が開いてる？ ひよっとしたら、朝出かける時にかけたのか）真衣は一瞬そう思ったが、今朝は優と一緒に玄関を出て、ちゃんと鍵をかけたのを二人で確認したことを思い出し、小さくかぶりを振った。

（まさか、泥棒？）今度はそう思っただけで体をすくめた真衣だが、おそろおそろ家の様子を探ろうとしてドアに耳を寄せた途端、隙間からいい匂いが漂い出てきたことに気がついて奇妙な表情を浮かべた。

「だ、誰かいるの!？」

鼻をひくつかせてしばらく逡巡していた真衣だが、やがて意を決した顔つきになってすつと息を吸い込むと、さっとドアを引き開け、玄関の中を覗き込むようにして大声を張り上げた。内気なところのある真衣とはいえ、小さい頃から母親に代わって家事を取り仕切ってきたから、家の一大事かもしれないという時は、開き直って度胸も据わる。

しかし、虚勢は必要なかった。

「ああ、真衣かい？ おかえり」

一瞬の間があつて廊下の奥から聞こえてきたのは、どこかのほほんとした優の声だった。

「え？ お、お父さんなの？ どうしたのよ、随分早いじゃない」

思いもしなかった声の主に、真衣はあからさまな安堵の表情を浮かべつつも、どこか戸惑ったような声で応じた。

「ああ、四月も後半になれば仕事も落ち着くからね。しばらくの間、金曜日は残業をさせない方針なんだよ、会社として」

廊下の一番禺にあるダイニングルームのドアが開いて優が姿を現し、悪戯めいた笑みを浮かべて続けた。

「それに、今日は特別なんだ。大事な話があるし、真衣に会って欲しい人がいるから、仕事を午前中で切り上げてきたんだよ」

「私に合わせたい人？ それに、大事な話？ わざわざ会社を早退けしてまで、どういうことなの、お父さん？」

下駄箱に革靴をしまつてスリッパに履き替えた真衣は、廊下を歩きながら、要領を得ない顔で優に訊き返した。

「すぐにわかるよ。さ、こつちに来て御挨拶しなさい。真衣のためにクリームシチューまで用意して待ってくれているんだから」

優はダイニングルームのドアを改めて大きく引き開けた。

途端に、玄関の外でも嗅いだいい匂いが、真衣の体を包み込まんばかりに廊下へ漂い出る。

「え、鈴木先生……!?!」

大好物であるクリームシチューの匂いに誘われるようにしてダイニングルームに足を踏み入れた真衣は、胴の長い鍋を丁寧に掻き混ぜている人物の顔を目にした途端、短い驚きの声をあげたきり、言葉を失った。

「おかえりなさい、佐藤さん——ううん、真衣さん。お父様から真衣さんはクリームシチューが好きだと教えてもらったから、時間をかけて煮込んでいたのよ」

こちらはまるで驚いた様子もなくそう言うてにこやかな笑みを浮かべたのは、見慣れた白衣ではなく、若やいだワンピースと花柄のエプロンを身に着けた美幸だった。

「びつくりしたかい？ ま、家に帰ってきたら、自分の通っている高校の校医さんがいるんだから、そりゃ、驚くのも無理はないだろうな」

優は、鳩が豆鉄砲をくらったような真衣の顔を見ておかしそうに言い、そのすぐ後、なにやら含むところのありそうな口調でこう付け加えた。

「ところで、真衣は一目で鈴木先生のことかわかったみたいだね？ でも、校医の先生と顔を会わせる機会なんてあまり頻繁にあることじゃないと思うんだ。まだ高校に入ったばかりだから、せいぜい、健康診断の時くらいしかないとと思うんだけど、でも、真衣はすぐにわかったんだよね。学校以外の所で何度か会ったことでもあるのかな？」

「あ……う、ううん……そんなこと……」



優に言われて、自分が驚きのあまりまずいことを口走ってしまったことに気がついた真衣だが、まさか、おねしよの治療のために土曜日ごとに鈴木医院を訪れているとも言えず、言葉が濁すばかりだった。

それに対して優は、わざとのほほんとした調子でこう言った。

「ま、いいさ。せっかくシチューをつくってもらったんだから、早速ご馳走になろうじやないか。少し早い夕飯にするから、さ、着替えておいで」

「う、うん……」

今の真衣には、曖昧に頷くのが精一杯だった。

\*

「どう、お味は？」

「あ、あの、すごくおいしいです。……自分でつくることもあるけど、学校から帰ってきて急いでつくるもんだから煮込みの時間が足りなくて、どうしても材料どうしの味がばらばらになっちゃうんですけど、このシチュー、材料がみんな一つになって、それに、チーズとミルクがたっぷり、あの、とにかくおいしいです」

着替えを終えてダイニングルームに戻り、美幸がよそってくれたシチューを口にふくんだ真衣は、全てお見通しといわんばかりの優の視線を意識しないよう、わざとおおげさに頷いてみせた。

「そう、よかった。真衣さんが気に入ってくれるかどうか、それだけが心配だったのよ」

少し冷たい感じのする白衣とは対照的なエプロン姿ながら、穏やかな口調でそう言う美幸のにこやかな笑みは、診察室で見るとまるで同じだった。

「よかった、どうやら仲良くやれそうだね。これで一安心だ」

テーブルの向こう側にある椅子に座って二人の様子をじっと見守っていた優が満足げに頷いた。

「じゃ、今から大事な話をするから、真衣、よく聞いてなさい。あ、でも、せっかく鈴木先生が丹精込めてつくってくれたシチューが冷めるといけないから、食べながらいいよ」

いつになく真剣なその口調に、それまでなるべく目を合わせないようにしていた真衣も、思わず優の顔を見てしまう。

それと同時に、美幸が真衣の隣に腰をおろした。

「単刀直入に言うよ」

並んで座っている二人の内でも特に真衣の顔をじっと見て優は言った。

「父さん、鈴木先生——美幸さんと結婚することにしたんだよ。そのことを真衣に話すために、美幸さんに家に来てもらったんだ」

「……!？」

驚きのあまり真衣は手にしていたスプーンをシチュー皿の中に取り落としてしまった。クリーム色の飛沫が飛び散る。

「あ、大丈夫、真衣さん？ 火傷はしてない？」

美幸が椅子から腰を浮かし、シチューの飛沫の付いた真衣のブラウスの胸元にオシボリを押し当てた。

真衣はのろのろと美幸の顔を振り仰ぐしかできないでいる。

「父さんとしても、たっぷり時間をかけて真衣に説明するつもりだったんだけど、でも、仕事の都合でどうしても急がなきゃいけないくなって、それで、こんな形で話すことになっちゃったんだ」

ほんの少し間を置いてから、再び優が口を開いた。

「父さんと美幸さんがおつきあいを始めたのは、今から二年くらい前だったかな。次長になる前から販路拡大のために問屋さんと共同で営業をかけていた病院や診療所の中に鈴木医院もあってね、最初は院長先生といろいろ話していたんだけど、途中から美幸さんが窓口になって、それで、仕事の話をしているうちにどちらからともなく意気投合しちゃってさ」

そこまで言って優は真衣の反応を確認しようとして口をつぐんだが、待つほどもなく言葉を続けた。

「美幸さんには弟さんがいて、そちらが鈴木医院を継ぐことになっているんだ。ただ、少し年が離れているから、弟さんが医大を出て研修を終えて戻ってくるまでの間、美幸さんが副院長として医院を切り盛りしていたんだよ。でも、その弟さんも昨年の春から鈴木医院に帰ってきて、美幸さん、今は、木曜日と土曜日の午前の診察だけを受け持っているんだ。それで、父さんが迷いながらも結婚を申し込んだら、もう仕事から離れても医院が困ることはないからって快く承諾してくれてね。父さんは再婚、美幸さんは初婚だけど、そんなこと気にしないって言うてくれて。ただ、急に新しい母親ができるってことになる、年頃の真衣が戸惑うだろうし、真衣が成人するまでは結婚を待っていてよかったことになったんだけど……」

もういちど優は真衣の様子を覗い、ひよいと肩をすくめて続けた。

「……ところが、先々週の月曜日、専務から直々にドイツへの出張を命じられちゃってね。うちの会社、ドイツの製薬会社と提携話を進めているんだけど、今ドイツへ行ってる担当者はどうも向こうの担当としっくりいかないみたいで、その代わりに行ってこいってことなんだよ。出発は明後日、来週の月曜日、期間はおよそ二ヶ月ほどになるかな」

「……来週の月曜日に出発!? でも父さん、そんなことちっとも言ってくれなかったじゃない。だいいち、先々週の月曜日に専務さんから話を聞いたとして、今まで黙ってるなんて……」

驚きの連続に、真衣は今にも泣き出しそうになりながら弱々しい声を絞り出すのが精々だった。

「今まで黙っていたのは悪かった。ただ、ちょっと考えなきゃいけない事情もあったものだから」

「何よ、考えなきゃいけない事情って?」

「専務から話を聞かされた後、父さんも迷ったんだよ。会社からの命令だし、やり甲斐のある仕事だから担当したい気持ちはやまやまだけど、二ヶ月間も真衣を独りぼっちにして大丈夫なのかどうか。それで、先々週の土曜日、相談にのってもらおうと思って美幸さんのところから」



ろへ行ったんだ。土曜日なら午後は休診で、ゆっくり話せるからね。で、昼前に車を駐車場に駐めたところで、医院のドアを開ける真衣の姿に気がついたんだよ。なんだか思い詰めた表情だったから声はかけなかったんだけど」

「あ……」

真衣の口から言葉にならない言葉が洩れた。

先々週の土曜日といえば、初めて鈴木医院を訪れた日。その時の様子を父親に見られていたのだ。しかも、診察してくれた美幸と父親とは結婚話も進めている仲。真衣がなぜ鈴木医院を訪れたのか、美幸が優に話していても不思議ではない。いや、むしろ、詳しく話していない方がおかしい。

「これまで真衣にはいろいろ苦勞させたね。父さんが仕事で忙しいものだから、小さい頃から家事を一切まかせきりにしていたし、町内会の寄り合いに出てもらったこともあったっけ。それに、高校入試が近づいた時に熱を出して苦しんでいる真衣を父さん、どうにもしてあげられなかったし、本当にすまないと思っている。——中でも一番すまなく思っているのは、初めて生理を迎えた時のことなんだ。母さんのいない真衣は、どうしたらいいのか父さんにも聞けなくて、保健室の先生や仲のいい友だちのお母さんに相談して自分で処置したんだってね。後から担任の先生との保護者面談で聞いて、父さんは随分と胸をいためたんだよ」

優は真衣の顔を正面から見た。

「だから、今度は、もう二度と同じような苦勞を真衣にさせるわけにはいかないんだ。今度こそ、困っている真衣の相談相手になってちゃんとしてあげなきゃね」

優が口にした『今度こそ』というのがおねしょのことを指しているのは明かだった。  
(やっぱり、お父さんに知られてたんだ) 真衣の頬に朱が差した。

「でも、さっき言った通り、仕事も放つてはおけない。今みたいな御時世、他の会社に少しでも後れを取ったが最後、どうなるかしたものでじゃないからね」

優は、真衣のブラウスに付いたシチューの飛沫を綺麗に拭き取ってオシボリをテーブルに戻す美幸の横顔をちらと見た。

「それで、あれこれ迷ったあげく、美幸さんに無理をお願いすることにしたんだよ。正式に結婚するのはまだ先のことにしても、父さんが出張している間だけでも真衣と一緒に暮らしてやってもらえないだろうか。それで、いろいろ相談にのってやってもらえれば助かるんだけどってね。——ま、いつかきちんと入籍して本当の家族になる前の予行演習みたいな感じになればいいなという気持ちもあつたんだけど」

「もちろん、私には断る理由なんてなかったわ。いつか私の可愛い娘になってくれる真衣さんと一緒に生活できるなんて、むしろ私の方からお願いたいくらいなもの」

再び椅子に腰をおろし、今度はテーブルクロスを布巾で綺麗にしながら、それまで優に説明を任せていた美幸が口を開いた。

「そ、そんな……そんなこと、急に……」

「あ、そうそう。このことも忘れずに言っとかなきゃね。副院長の座は今週の月曜日、正式に弟に引き継ぎ済みなよ。木曜日と土曜日の診察も弟にまかせることになったから、もう私は鈴木医院の業務からは完全に解放されたってわけ。もともと弟が独り立ちするまでの繋

ぎみたいなものだったから、医師っていう仕事にも未練はないし、これからずっと真衣さんの面倒をみてあげられるわよ」

どう応じていいか言葉に詰まる真衣をよそ目に、美幸はこともなげに言った。

「で、でも、だったら、明日の診察は？」

「そのことなら心配しないでいいわ。今日からこのお家で暮らすんだけど、真衣さんのカルテやデータシートのコピーはちゃんと持ってきてきているの。それに、簡単な検査キットもね。だから、わざわざ医院へ行かなくてもいいのよ。お家で診察できるんだからね。言ってみれば、私は今日から真衣さんのお母さんを兼ねた専属のお医者様ってわけ。——あ、でも、『お母さん』はまだ早いかな」

「き、今日から!? 困ります、そんな急な……」

思ってもみなかった事の成り行きに、真衣は思わず金切り声をあげてしまう。

「だけど、お父様は明後日から出張なのよ。その日になって私がお家に来て二人の関係がぎくしゃくしてしまうから、お父様がまだお家にいる間に馴染んでおいた方がいいと思わない？ ま、診察は、カルテもデータシートも原本は医院に置いてあるから、私がお家でしなくてもいいんだけど。なんなら、弟に電話しておこうか？ 明日、真衣さんがそっちに行くから丹念に診察してあげてねって」

真衣の動揺とは対照的に、美幸の方は落ち着き払ったものだ。

「い、いえ、それは……」

医大を出て研修を終えた後一年しか経っていないということだから、美幸の弟はまだ二十歳台だろう。三十歳台半ばの女医である美幸からおねしよの治療を受けるのも羞恥の極みなのに、まだ若い異性の医者に診察されるなんて。とはいえ、他の医院に転院しようにも、どこへ行けばいいのかまるで心当たりはない。

「だったら、いいわね」

「……」

優しい口調ながらもそう決めつける美幸に、もう何も言い返せない。いつの間にかどこにも逃げ場のない状況に自分が置かれたことを認めざるを得ない真衣だった。

### 《三・二人、初めての夜》

なんだかわけのわからないままといった感じで事態は推移し、気がつけば、夕飯を終えて入浴も済ませ、パジャマ姿でベッドの端に腰をおろしているという状態の真衣だった。（やだなあ、これからずっと鈴木先生と一緒にだなんて）真衣は、膝の上に置いた枕を抱き寄せた。

やだなあと呟いてはみたものの、美幸のことが嫌いなわけではない。健康診断で初めて会った時からずっと変わらぬにこやかな笑みと、なにより、机の上に置いてある写真に写る母親とどこか似た顔つきに真衣は心惹かれてしまっていたし、恥ずかしがる真衣をなだめずかして診察を続ける時の、厳しさを内にひめた優しさにぞっこんなのだから。

けれど、それでも、自分の恥ずかしい秘密を知っている相手と一緒に一つ屋根の下で暮らすとなると心穏やかではられない。

とんとん。

真衣が小さな溜息をつくのと殆ど同時に、ドアをノックする音が聞こえた。

続いて、

「ごめんね、真衣さん。まだ起きてるよね？ 入ってもいいかな？」  
という幾らか遠慮がちな美幸の声。

「……はい、どうぞ。鍵はかかかっていませんから」

ほんの少しだけ迷ってから真衣が応じた。

「じゃ、お邪魔するわよ」

ドアが開いて、もうこちらも入浴を済ませたらしく、足首のちよつと上あたりまで届く長さのネグリジェの上に薄手のカーデガンといういでたちの美幸が姿を現した。

部屋に入ってきた美幸は躊躇うそぶりもみせず、真衣のすぐ横に腰をおろした。仄かなシヤンプーの香りが真衣の鼻をくすぐる。

「少しお話をしようかなと思ってね。——私が急にお家に来たこと、怒ってる？」

美幸は僅かに首をかしげて言った。

「……」

大歓迎と言えば嘘になる。とはいえ、怒っているわけでも決してない。ただただ戸惑っているというのが正直なところだ。真衣には、無言で小さくかぶりを振ることしかできなかつた。

「机の上に置いてある写真、お母様と真衣さんかな。優しそうなお母様ね」

美幸は軽く首を巡らせ、机の隅に置いてある写真立てに目をやった。

そこに写っているのは、幼稚園の入園式当日の母親と真衣の姿だった。幼稚園の正門をバックに、これ以上はないくらい明るい笑顔の二人。

「それに、実物もそうだけど、写真の真衣さんの可愛らしいこと。お母様ご自慢の娘さんだ

ったんでしょね」

そう、「ご自慢『だった』。それは悲しい過去形。

「真衣さんが私のことをどう思ってくれるか、それは真衣さん自身にまかせるわ。そりや、私にしてみれば、実のお母様みたいに思ってたほしいわよ。だけど、私は決して本当のお母様にはなれない。それは仕方のないことだものね」

美幸はそこまで言って写真から目を離し、すぐそばにある真衣の横顔に視線を向けた。

「でも、随分と勝手な言い方になっちゃって申し訳ないんだけど、私は真衣さんのことを実の娘だと思って接するから、そのつもりでいてほしいの。たぶん、叱りつける時もあると思う。もちろん、真衣さんはそんな私に反発してもいい。ただ、そんなふうにするわよってことを前もって話しておきたかったの」

「……」

真衣はやはりどう応えていいかわからない。

「それと、もう一つ話しておくわね。優さんと一緒になっても、自分の子供は持たないつもりなの。私は今、三六歳。これから一緒になって子供ができたとして、早くても、その時は三七になっているわね。初産としちゃちよつと高齢かな。あ、今の医療技術は随分と進んでいるから、四十過ぎの初産でも問題はないわよ。これでも医師の端くれなんだから、そのことはよく知ってる。でも、万が一ってこともないわけじゃないのよ。不慮の事故が起きたとしても、私自身は納得できると思う。だけど、マスコミは絶対ヒステリックに騒ぎ立てるでしょうね。事実、医療スタッフは最善を尽くしているのに、さも医療体制に重大な瑕疵があったって言いたげな報道がされたのよ、これまでに何度も。そうして、担当の医師が何人も責任を取らされて。小さな子供が亡くなるような医療事故の場合は特にね。私、同じ仕事に命をかけている仲間をそんな目に遭わせたくない。だから……」

美幸はすつと息を吸い込んだ。

「……鈴木医院の娘として生まれてこなきゃ、ううん、鈴木医院の娘として生まれてきても、医師の資格さえ取ってなきゃ、私も早いうちに結婚して何の心配もなく母親になれたかもしれない。でも、今更そんなことを言っても愚痴になるだけ。だから、結婚を申し込まれた時、優さんにお嬢さんがいることを前もって聞かされていたからこそ、私はちっとも迷うことなくお受けしたの。血がつながっているわけじゃないけど、でも、今まで仕事だけに生きてきたこんな私にも娘ができるんだって直感したから」

「……」

「それにしても、不思議な縁ね。お父様が真衣さんと私を会わせてくれる前に、私たちはもう出会っていたんだもの。これって、神様の思し召しだと思わない？」

「え、ええ……」

ようやく真衣は短い言葉を絞り出した。

「ところで、眠る時はいつもそんなパジャマなの？」

ぎこちなく頷く真衣の様子をすつと両目を細めて覗いながら、美幸はさりげなく訊いた。

「あ、はい。パジャマは色違いのを何着か持っているけど、デザインはどれもこんな感じですよ。……それが何か？」

美幸に言われて、真衣は抱きかかえていた枕をベッドに置き、改めて自分の胸元から下に視線を走らせた。

「ええ、ちよつと、あれ？つて思ったものだから」

「……何か変ですか？」

「ううん、変というわけじゃないんだけど——夜尿が続く場合、なるべくお腹を冷やさないような格好をするのが普通なんだけど、真衣さんのパジャマ、そんなことまるで考えてないみたいにならぬ短いものだから、それで、ちよつと不思議に思ったの。それとも、少しくらいお腹が冷えても夜尿とは関係ないやつて思ってるのかな？」

美幸の言う通り、真衣が身に着けているのは、膝上二十センチくらいの丈しかない、短いワンピースタイプのナイティだった。しかも、足首まであるボトムスはおろか、短めのフレアパンツ等と組み合わせるでもない、言ってみれば、裾がふわつと広がった感じのベビードールのトップスだけのようなナイティだ。袖は七分袖になっているし、首回りは少し高めでフリルになった襟に包まれているため、肩口から胸元にかけての保温性はわるくなさそうだが、お腹まわりはすーすーして仕方ないに違いない。

「あ、あの……いえ、お腹が冷えてもいいやなんて思ってます。お布団はずっと前から羽毛布団を使ってるし、ちよつとでも寒くなりそうな夜は前もって暖房も入れてます」

真衣は言い訳がましい口調で抗弁した。

「でも、だからって、そのパジャマは無防備すぎるんじゃないかな？」

美幸は、真衣が両手でナイティの裾を押さえる様子を面白そうに眺めながら、なにやら含むところのある口調で言った。

「ま、だけど、ワンピースタイプでも丈が長かったり、トップスの丈は短くてもボトムスと組み合わせるタイプだと邪魔になったり窮屈だったりして困っちゃうわよね？ だから、お腹が冷えるのはお布団と暖房で防いでおいて、パジャマは丈の短いのにしておいた方が手間がかからなくていいのよね？」

「……」

まるで全てを見透かされてしまっているかのような美幸の口調に、真衣は再び言葉を失った。

「そうなんですよ？ 真衣さんが着ているような丈が短くて裾がふわつとしたパジャマの方が、パンツからおむつに置き替えたり、逆に、おむつからパンツに置き替えたりする時、手間がかからないのよね？」

顔を伏せる真衣の頬がうつすらとピンクに染まる様子をすぐそばから窺い見つつ、美幸はこともなげに決めつけた。

「そ、そんな……お、おむつだなんて……」

真衣は顔を伏せたまま、ナイティの裾を押さえている両手の掌をぎゅっと握りしめた。

「いいのよ、隠さなくても。寝具や寝間着を汚さないようにするためには一番効果的な方法なんだから。それで夜尿が治るというわけじゃないけど、寝具を汚してしまうかもしれないという精神的な負担からは解放してくれるんだから、ちゃんとした対症療法と言っているわ。立派な医療行為よ」

「……どうして？ どうしてわかったんですか？」

両手を拳に固めて、真衣はぼつりと言った。

「簡単なことよ。真衣さん、夜尿のこと、お父様には相談していないって言ってたわよね。私が優さんに確認したところでも、たしかにちっとも気がついていないみたいだった。でもそれって不思議なことなのよ。最初の一週間や二週間くらいはお布団を汚しても上手に立ち回れば気づかれずにすむかもしれない。だけど、高校入試の三週間くらい前から始まって今まで続いている夜尿を気づかれないようにしようとすれば、何度もお布団を濡らすわけにはいかない。だって、シーツみたいな嵩張る物を洗濯したりしたら、乾くにも時間がかかって、いつか絶対にはれちゃうに決まってるもの。お布団やベッドのマットを干してたりしたら家族の目につかないわけがないもの。特にお父様がお休みの日とかにね。なのに、真衣さんはこれまで上手に隠し通してこられた。それには何か特別な方法が必要だって思うのが普通よね。それも、防水シーツとかでお布団を濡らさないようにするだけじゃない、パジャマや下着も濡らさないですむような方法じゃなきゃいけないって。それで思いつく物ってえば、おむつしかないじゃない。それも、洗濯しないでいい使い捨てにできる紙おむつ」

美幸はそう解説してから、おどけたような表情で軽くウインクしてみせた。

「……父には黙っていてください。おねしょのことを知られただけでも我慢できないくらい恥ずかしいのに、その上、お、おむ……おむつのことまで……」

真衣は両腕をぶるぶる震わせながら、観念したように言った。

「いいわよ、話さない。お父様にしても、高校生になる娘がおむつのお世話になっていると知ったら心穏やかじゃないでしょうから」

美幸はいつものにこやかな笑みを浮かべた。

「それで、おやすみの用意はもう終わってるの？ ——もうおむつはあてちゃったの？」

「……まだです。なるべく普通のパンツでいたいから」

真衣はちらりとも美幸の顔を見ないで応じた。

「そう。ところで、どこのメーカーのおむつを使っているのかな？ できれば実物を見せて欲しいんだけど」

「ど、どうして……？」

あからさまに怯えの表情を浮かべて、真衣は一瞬だけ美幸の方に目をやった。

「真衣さんが使っている紙おむつの重さを知っておきたいのよ」

美幸は短くそう言っ、掌に載っけてしまいたいような小振りの計量秤を真衣の目の前に差し出した。体の後ろにでも隠し持っていたのか、突然の美幸の出現に驚いた真衣はそれまで全く気づかないでいた。

「な、何のために、そんなこと……」

真衣の顔に浮かぶ怯えの色がますます濃くなる。

「だって、最初に乾いた状態の紙おむつの重さを量っておいて、次に、おしっこを吸ったおむつの重さを量れば、真衣さんの夜尿の量がわかるでしょ？ 先週の土曜日の診察で、私、『ひよっとしたら真衣さんの膀胱が完全には発育していないのかもしれない』って言ったわよね。だから、『いずれきちんと膀胱の容量を調べてみた方がいいかな』って。そのための

準備みたいなものよ。こうすることで膀胱の容量におよその目安をつけて、その数値を基にして次に精密な検査に移るの。もつとも、目安とはいっても、なるべく誤差を小さくしておきたいから、これから当分の間、夜尿のたびにおしっここの量を量る作業を続けなきゃいけないだけだね。——さ、わかったら、おむつを出してちょうだい。先ず、乾いた状態の重さを量っておかなきゃいけないから」

最後の方はベッドから腰を浮かして言い、美幸は、持っていた計量秤を真衣の机の上、写真立てと向かい合う位置に置いた。

「あ、あの……自分でします。だから……」

「駄目よ。簡単そうに思うかもしれないけど、癖のない計量を何度も続けなきゃいけないんだから、素人にはまかせられないわ。今日から私は真衣さん専属の主治医なんだから、みんな私にまかせなさい。真衣さん、言ったでしょ？　どんなことでも包み隠さず話しますって。それと同じよ、どんなことでも私にまかせなさい。——これは医師としての指示です。いいわね？」

哀願するように言う真衣の言葉を途中で遮って、これまでこの家の中では見せたことなかったものの白衣を身に着けている時にはそれが当たり前になっている威厳と冷徹さを満ちた調子で、美幸はびしやりと決めつけた。

「……」

そんな態度に出られると、真衣としてはもう何も言い返せなくなってしまう。

「さ、出してちょうだい」

美幸はもういちど強い調子で促した。

「……はい……」

遂に覚悟を決めたのか、真衣はいかにもしゅんとした様子で立ち上がり、造り付けになっているクローゼットに向かって歩き出した。

「D社の大人用紙おむつ、パンツタイプのSサイズね。なるほど、女性用は薄いピンク色になっっているわけか。これなら、可愛らしい真衣さんにお似合いだわ」

真衣がクローゼットの中から持って来ておらずと差し出した紙おむつのパッケージを受け取り、引っ張り出した一枚をしげしげ眺めて美幸は言った。

「そんな、お似合いだなんて……」

真衣は恨みがましい目で美幸の顔を見たが、それも一瞬のこと、すぐに視線をそらしてしまう。

「で、おむつはどうやって買っているの？　通信販売を使っているとか？」

いたわるようにそう問いかける美幸の様子からは、さっきまでの強い調子はすっかりなりをひそめていた。

「いえ……始まった時は中学生だったし、今だって高校生だからクレジットカードをつくれなくて、通信販売なんて無理なんです。だから、薬局へ直接買いに行くしかなくて……知っている人に会わないよう、なるべく遠くにある薬局へ行くようにしています」

真衣は紙おむつのパッケージを差し出した後、ベッドのそばに所在なげに立ちすくんだま

ま言った。

「そう、大変だったのね。まだ高校に入ったばかりなのに、いろいろ苦勞してきたのね、真衣さんは。でも、それもこれからは私にまかせてちょうだい。仕事柄、紙おむつを安く入手するルートもあるから、真衣さんが薬局で恥ずかしい思いをすることもなくなるわ。これからずつといつまでも、私にまかせておけばいいんだからね」

美幸は『ずつといつまでも』という部分を妙に強調して言った。だが、そんなことに気づく余裕など真衣にはない。

「じゃ、早速、乾いた状態で重さを量っておきましょうね。一枚だけだと誤差が出るかもしれないから、三枚まとめて量って平均を取っておこうかな」

美幸は、床に視線を落として佇んでいる真衣を横目に見ながら、パッケージから引っ張り出したピンクの紙おむつを三枚重ねて計量秤に載せた。

そうすると、写真に写っている母親の目と、計量秤に載せられた紙おむつの高さとはほぼ同じになる。

（違うのよ、お母さん。私、私、もうおもらしなんてしなくなったのよ。でも、どうしてかわからないけど、ちよつと前からおねしょが始まっちゃって、それで、夜の間だけおむつを使わなきゃいけなくなって。本当よ、おは母さん。お友だちより早くおむつ離れして、それからはおむつのお世話になんかなくなっていなくなつたんだから）伏し目がちに美幸の行動を覗いていた真衣には、まるで写真の母親が紙おむつを見て呆れているかのように思われ、つい胸の中で言い訳をしようのを止められなかった。

一方、美幸は、そんな真衣の胸の内などまるで知らぬげに

「三枚でこの重さということは、一枚当たりXXグラムってことになるわね。あとは、夜の間にこれが何グラムになるかね。二週間くらい記録を取ればいいかしら」と独りごちながら、計量秤の表示窓に並ぶ数字を記録紙に写し取っていた。

\*

佐藤家には空き部屋が幾つもある。一階は浴室やダイニングキッチンとリビングルーム、今は優が一人で使っている夫婦用の寝室などで全て用途は決まっているものの、二階は、真衣が使っている部屋の他は全て空き部屋になっていた。家を建てる際、間取りを工務店と相談するにあたって、優は子供を二人以上つくるつもりで、一つ一つの面積は小さくしてもいいから子供部屋に当てる部屋を幾つかつくるようオーダーすると共に、夫婦が互いにプライベートの空間を持てるよう、こちらもこじんまりした和室を二つ設けるよう依頼していたのだが、思いもなかった事故のせいで子供は真衣一人しか恵まれず、優の部屋も一階の寝室だけで間に合うようになってしまったからだ。

その内、和室の一つを美幸が使うことになっていた。いずれ結婚するのだから一階の寝室を優と一緒に使ってもよさそうなものだが、思春期の真衣を気遣ったことだった。

新しい紙おむつの重さを量った後、自分の部屋に姿を消した筈の美幸が、それから一時間



ほど経った頃、再び真衣の部屋に戻ってきた。

「え、どうして……？」

もう朝まで美幸と顔を会わせることはないと思っていた真衣は、急にドアが開いて部屋の中に入ってきた人影を見て驚きの声をあげた。ショーツを脱いでパンツタイプの紙おむつを身に付け、ナイティの裾の乱れを整えた直後のことだったから、余計にどぎまぎしてしまう。「いやだ、そんなにびっくりしなくてもいいじゃない。今日から一緒に暮らす仲なのに」

美幸はくすつと笑ってみせ、少し嵩の減った紙おむつのパッケージにちらと目をやって言った。

「見たところ、もうおやすみの準備は済ませちゃったみたいね。せっかくだから私がおむつをあててあげようと思っと思っていさんでやってきたのに、残念なこと」

「な、何を言ってるんですか、鈴木先生たら。そんなこと、誰にもしてもらいません。自分でします！」

冗談めかして言う美幸に対して、どこかムキになって真衣は応じる。

「あら、どうして？ 私だって医師の端くれよ。看護師さんほどは上手じゃないけど、そういうことも一応は練習しているし、まかせてもらってもいいと思うんだけど？」

「だ、だって……赤ちゃんでもないのに、お、おむつのお世話を誰かにしてもらうなんて……」

ムキになっていたのが一転、今度は今にも消え入りそうな様子で呟く真衣。

「ふうん。だったら、いっそ、赤ちゃんになっちゃえばいいじゃない。赤ちゃんだったら、おねしょもおむつも恥ずかしくないわよ。それどころか、昼間のおもらしさえ普通のことなんだもの、赤ちゃんにとっては」

「そんな……」

「うふふ、冗談よ。高校生の真衣さんが赤ちゃんになれるわけないもんね」

困惑の表情を浮かべる真衣を『冗談よ』と軽くいなした美幸だったが、瞳に宿る妖しい光は、それが決して冗談などではないことを雄弁に物語っていた。

だが、今はまだ、真衣がそのことに気づく由もない。

「ま、いいわ。でも、せっかくだから、おむつがちゃんとできているかどうかだけでも調べておこうかな。真衣さん、ちよっとパジャマの裾をたくし上げてみて」

頬を淡いピンクに染めて俯く真衣の耳に、次なる美幸の言葉が飛び込んできた。

「え……？」

「え？ じゃないわよ。おむつからおしっこが横漏れしちゃまずいでしょ？ だから調べてあげるのよ。さ、パジャマの裾をたくし上げてちょうだい、ほら、こんなふうに」

美幸は穏やかな声ながらも有無を言わさぬ調子で言い、真衣が着ているナイティの裾をさつと捲り上げた。

もともと丈の短いナイティだから、さほど大きく手を動かす必要もない。真衣が慌てて押さえようとするのもかなわず、あつという間に、太腿からおへそまで丸見えになってしまう。もちろん、紙おむつに包まれた丸いお尻も。

女性用の薄いピンクの紙おむつは、一瞬だけなら、股上が深く、やや厚手の生地でできた、

少し野暮ったげな感じのする婦人用パンツに見えるかもしれない。しかし、厚手の生地の中でも殊更に厚ぼったく膨らんだ吸水帯や、飾りレースのフリルとは異なる腰回りと股ぐりのギャザーなど、それが普通の下着でないことは明らかだった。

「やめて、やめてください、先生」

「何を言ってるの、真衣さんたら。おやすみの間におしっこが横漏れしてお布団を汚しちゃったら困るでしょ？ 大きなシミの付いたシートがベランダで風に揺れているところを誰かに見られてもいいの？」

美幸はしれっとした顔で真衣を諭しながら、左手でナイティの裾を持ち上げたまますっと腰を折り、股ぐりを押し広げるようにして右手の指を紙おむつの中に差し入れた。

「ほら、ギャザーが内側に巻き込んだりして。一カ所でもこんなところがあると、そこから横漏れしちゃうのよ。これまでは独りぼっちだったから自分でしなきゃいけないんだけど、これからは私がしてあげるわね。じゃないと、ちゃんとできていないのに気がつかなくてお布団を汚しちゃうかもしれないんだから。——もつとも、お布団を汚しちゃうことがあっても、お洗濯も私がしてあげるから、真衣さんは何も困らないかもしれないけど」

美幸は、乱れたギャザーを整えた後も、紙おむつの中に差し入れた指をもぞもぞと動かし、太腿の内側を指の腹でそつとなぞりながら、ねっとり絡みつくような声で言った。

それからしばらくの間たっぷり時間をかけて『おむつの点検』を終えた後、

ようやく美幸の手が真衣の下腹部から離れた。

けれど、それで全て終わったわけではない。それまでしゃがんでいた美幸がさっと立ち上がったかと思うと、手早く掛布団を捲り上げ、さっさと真衣のベッドに横たわると、

「じゃ、おやすみしましょう。ほら、何をしているの？ 早くこっちへいらっしやい」と手招きするのだった。しかも、真衣の枕を自分の頭の下に置いて。

「な、何をしているんですか、先生……？」

予想だにできなかった美幸の行動に、真衣は、そう訊くのがせいぜいだった。



「よかった、真衣さんのベッドがこんなに大きなダブルサイズで。狭いベッドだったらどうやって二人で寝ればいいのか心配だったんだけど、これで一安心だわ。あら、どうしたの？早くいらつしやいってば」

不審げな顔でベッドの横に立ちすくむ真衣とは対照的に、美幸はこともなげにそう言うので、それまで手招きをしていた左手の動きを止め、自分の体と直角になるようベッドの上に伸ばした。

「枕のことなら心配しなくていいわよ。真衣さんの枕は私が使わせてもらうけど、真衣さんには、その代わりに私が腕枕をしてあげる。だから、さ、いらつしやい」

「あ、あの……先生の部屋は、二つ隣に……」

「ええ、わかっているわよ」

「でも、でも、だったら、どうして……」

「だって、別の部屋にいたんじゃ、真衣さんが失敗してもわからないじゃない？ 膀胱の容量の目安をつけるために、おしっこを吸った紙おむつの重さを量ることにしたのはいいけど、なるべく正確に量るためには、出ちやっつてすぐじゃないとね。とはいっても、おしっこが出てすぐ、真衣さんが目を覚まして私を呼んでくれるかどうかわからないでしょ？ だから、私が一緒に寝て気をつけてあげることにしたの。体がぶるつと震えるとか、内腿を擦り合わせるとか、何かのそぶりをみせる筈なものね、しちゃう瞬間か、そうじゃなくても、しちゃうつたすぐ後に」

美幸は、シーツの上に伸ばした左腕の肘の内側を右手の掌でとんとんと軽く叩きながら、真衣の顔を見上げて言った。

「朝、目が覚めてから自分で……」

「さつきも言った筈よ、素人の測定じゃ駄目って。それに、正確を期すためにも、出てすぐじゃないといけないの。何度言えばわかってもらえるのかしら。——この調子だと、真衣さんが私の指示に従ってくれないこと、お父様に相談した方がいいのかな？」

抗弁しかける弱々しい声に美幸の声が重なって、真衣は唇を噛んで押し黙ってしまった。

「さ、いらつしやい」

美幸は少し強い口調で短く言った。

諦めの表情を浮かべた真衣は、浅く息を吸ってから、おずおずとベッドに手をついた。

\*

「駄目じゃない、いつまでもそっぽを向いてちゃ。せつかく一緒に寝るんだから、こつちを向いてちょうだい」

言葉巧みに美幸になだめすかさされ、あるいは、さりげなく脅されて、洪々ベッドにもぐりこんだ真衣だったが、さすがに美幸と目を会わせることはできず、壁を睨みつけるようにして背を向けてしまっているのだ。

「ほら、そっぽを向いてると、お尻が見えちゃうわよ。ピンクのおむつに包まれたまん丸のお尻が」

美幸が、さもおかしそうに言った。たしかに、美幸の腕に頭を載せて体ごと壁の方に向いてしまっている真衣のナイティが僅かに捲れ上がって、お尻の膨らみが三分の一ほどあらわになっている。

言われて真衣が慌ててナイティの裾を引つ張りおろそうとする。が、美幸はその手を後ろから振り払い、ナイティの裾を更にたくし上げると、丸見えになってしまったお尻を紙おむつの上からぼんぼんと優しく叩き始めた。

それは、寢床にもぐりこんだ幼児を優しく寝つかせる母親の仕草さながらだ。

「や、やめてください、そんなところ叩くのは」

最初のうちは無反応の真衣だったが、美幸が三度四度とお尻を叩き続けると、とうとう我慢できなくなのか、のろのろと首だけを巡らせてこちらに向き直り、困ったような表情で懇願した。

「どうして？ どうして、お尻を叩いちゃ駄目なの？ 痛くないように優しく叩いてあげているのに」

ようやくこちらを向いた真衣の目を正面から覗き込んで、美幸は面白そうに訊いた。

「だって、だって……お、おむつが……」

そこまで言って、真衣は言葉に詰まった。真衣が何を言いたがっているのか、美幸には手に取るようにわかっている。高校生になったばかりの真衣にはまるで似つかわしくない下着である紙おむつ。美幸にお尻を叩かれると、その紙おむつの存在を意識せざるを得なくなるのだ。できるなら意識の外に追いやってしまいたい恥ずかしい下着の感触。なのに、美幸の手が触れるたび、その肌触りが下腹部から伝わってきてどうしようもなくなるのだった。

だが、それを面と向かって言葉にするのも躊躇われてならない。

「いいわ、お尻を叩くのはやめてあげる。だから、こつちを向いてちょうだい。こつちを向いて、可愛いお顔を見せてちょうだい」

恥ずかしそうに押し黙る真衣の耳元に唇を寄せて美幸が囁きかけた。

熱い吐息が耳たぶに触れて、真衣の頬がかつと火照る。

美幸は思わせぶりにお尻をもういちどぼんと叩いた。

真衣は思わず首を横に振ったが、そのすぐ後、今度は、よく注意していないと見落としてしまいそうになるほど小さく頷き、おずおずと体の向きを変え始めた。

けれど、美幸と向き合うような姿勢には至らず、美幸の腕に後頭部を載せて、天井を見上げるような格好で体の動きを止めてしまう。

「ま、いいわ。最初はそんなふうにしておいて、ゆっくり慣れていけばいいんだし。なんたって、これからずっと一緒に暮らすんだから、時間はたっぷりあるんだもの」

美幸は満足そうに呟き、今度は、真衣のお腹を二度三度と優しく叩いた。

#### 《四・深夜の目覚め》

誰かが「そごそ」している気配に真衣が目を覚ました。

反射的に窓の方に目をやったが、薄いカーテン越しに差し込んでるのは、まばゆい日差しではなく、月の冷たい光だった。

「あ、目が覚めちゃった？ 起こさないように気をつけていたんだけど、ちよつと注意が足りなかったかな」

呟くようにそう言う声の主は美幸だった。

真衣は手の甲で瞼をこすって、声のする方にのろのろと顔を向けた。

と、視線が美幸の姿をとらえる前に、捲り上げられた掛布団が目映る。いや、まだ焦点が合わずどこかぼんやりした視界に飛び込んできたのは、掛布団だけではなく、お腹の上までたくし上げられたナイティもだった。そして、ナイティの裾にかかっている美幸の白い手。

「な、何……!？」

真衣は慌てて体を起しかけた。

だが、

「駄目よ、おとなしくしていてちょうだい」

という美幸の声が聞こえると同時に両肩を敷布団に押しつけられてしまう。

「何をしているんですか、先生!？ 私のパジャマを捲くり上げて何をするつもりなんですか!？」

思わぬ事態に真衣は金切り声をあげて身をよじった。

しかし、両肩を押さええつけられてしまっている姿勢では、どうすることもできない。

「何も、ひどいことをしようってわけじゃないのよ。だから暴れないでちょうだい。ただ、おむつを取り替えてあげるだけなんだから」

ベッドサイドで腰をかがめた美幸は、怯えの色をに満ちた瞳でこちらを見上げる真衣に向かって、にこりと笑って言った。

「おむつを……!？」

真衣は思わず鸚鵡返しに聞き返し、その直後、自分で口にした『おむつ』という言葉に頬を赤らめてしまう。

「前の診察の時に見せてもらった問診票によると、真衣さんはいつも五時半ごろに起きているんだったわよね。ちなみに、今は夜中の一時なんだけど、こういう時間に目を覚ますことはいないの？」

「あ、ありません。大体いつも十一時過ぎに寝て、五時半までそのままです。夜中に目を覚ましたことなんてありません」

美幸に言われ、自分でもその言葉を口にした真衣は、知らぬうちに、おむつに包まれた下腹部に意識を集めていた。そこには、眠りにつく直前に身に着けた新しい紙おむつのさらった肌触りとは異なる、じつとりと湿っぽい感触があった。それがおねしょのせいだと直

感じた真衣は、抵抗する気力も失って、震える声でそう応えるのが精一杯だった。

「ということは、毎日、夜中におむつを濡らしちゃっても、それに気がつかないで朝までぐっすりってわけね。——でも、よかった、一緒に寝ておいて。そうしてなかったら、おしっこの重さを量る時、とんでもないミスをしでかすところだったわ。だって、眠りについて二時間ほどしか経っていないこんな時間に出ちやうんだったら、朝までにもう一度か二度しくじっても不思議じゃないってことよね？ そうだとすると、朝になってから紙おむつの重さを量っていたんじゃ、夜尿二回分とか三回分とかの重さを量ることになっちゃうじゃない？ そんなじゃ、膀胱の大きさにおよその見当をつけるにしても、信頼性のある測定なんて期待できないものね？」

真衣がおとなしくなるを待って肩からそっと手を離した美幸だったが、ふと何かを思い出したかのような顔つきになると、自分が着ているネグリジェの胸元を前方に突き出して更に深く腰をかがめた。

「あ、そうそう。おむつを取り替えてあげる前にちよつと確認しておきたいんだけど、ここ、ネグリジェの胸のところを見てちょうだい。そう、ここよ」

真衣の顔を真上から覗き込むような姿勢を取った美幸は、自分の胸元を人差し指で指し示した。

「ここが濡れてるの、わかるかな？ ちようど、おっぱいの先のあたりなんだけど、蛍光灯をつけなくてもお月様の光だけで見えるよね？ だって、今夜は満月だし、ネグリジェはこんなにびしょびしょに濡れちゃってるんだもの」

思いがけない美幸の言行に真衣は要領を得ない表情を浮かべながらも、美幸が指し示すあたりに目を向けた。

眠る時はブラを着けないのが癖になっているのだろう、薄手のネグリジェの生地を通して、形のいい乳房のみならず、ぴんと勃った乳首が透けて見える。一瞬、上向き加減の乳首に目が釘付けになりそうだったが、こちらの様子をしげしげ眺めている美幸の視線に気づいた真衣は、慌てて顔をそむけた。

「どう？ 何か心当たりはない？」

慌ててそっぽを向いてしまった真衣の視線の先に尚もネグリジェの胸元を突き出して、美幸は念を押すように言った。

「……知りません……」

心当たりがまるでないわけではない。けれど、正直に答えるのも躊躇われ、つつい口ごもってしまふ真衣。

「そう、知らないの。なら、仕方ないわね」

美幸は含むところのありそうな口調でそう言うと、ベッドの枕元に置いていた携帯電話を掴み上げた。

「真衣さんを寝かしつけて私もすっかり寝入った後のことなんだけど、急に真衣さんの体もぞもぞ動き出して、それで目が覚めたのよ。で、そのまま様子を見てみると、真衣さんたら、私が腕枕をしてあげている姿勢そのまま、すつと顔を近づけてきてね。その後、ちよつとびっくりするようなことを始めたわけ。そのことを目が覚めた後も憶えてるかどうか確認

しようと思って、一応、ケータイの動画機能で撮影しておいたの。ほら、これがそうよ」

美幸は携帯電話の画面を真衣の方に向けて、動画再生のボタンを押した。

待つほどもなく、美幸と真衣の姿が画面に映し出される。左腕で真衣に腕枕をしたまま右手だけで携帯電話を支え持って撮影したのだろう、時おり画面が揺れるが、二人の姿は鮮明にとらえられていた。

画面の中で、美幸の腕に頭を載せ、それまで上向きに寝ていた真衣が、ゆっくりと体をよじり、美幸の横顔を覗くような姿勢になったかと思うと、そのままじわじわと体を寄せ、遂には、顔を美幸の胸元に埋めてしまった。しかし、そのままじつとしていくわけではない。画面がアップになると、美幸の胸元に顔を埋めた真衣が何かを探るように少しずつ顔の位置を変えているのがわかる。そして、ようやく目的の物を探り当てたのか、意識があるわけでもないのにふっと微笑んだかと思うと、ネグリジェ越しに、美幸の乳首を口にふくみ、あるうことか、そのまま、ちゅうゆうと吸い始めたのだ。

「もういちど訊くわね。真衣さん、私のネグリジェの胸元が濡れている理由に心当たりはない？」

「……」

改めて問い質されても、真衣には、どう答えていいかわからない。

「それと、もうひとつ確認しておきたいことがあるの。大事なことだから、よく思い出してちょうだい」

動画の再生を止めた携帯電話を手にしたまま、美幸は真剣な面持ちで言った。

「夜尿が始まってから今まで、目が覚めた時にお布団やシーツが濡れていることはなかった？ ううん、おしっこで濡れちゃってるのは別にしてよ。お尻の方じゃなくて、顔のあるあたりが濡れていることがなかったかどうか、それを知りたいの」

「あ、あの、お、おねしょが始まった頃のこととはよく憶えていません。でも、最近のことなら……」

真衣は、画面に映し出された自分の痴態に頭の中が真っ白になりそうだったが、美幸の真剣な表情に促され、顔を羞じらいの色でいっぱいしながら弱々しく応じた。

「……あります。ううん、ありますっていうより、毎日、そんなです。朝になって目を覚ますと、毎日決まって掛布団のシーツや枕が濡れているんです。それで、鏡を見たら、唇の端に涎の跡があつて……わ、私、おねしょでお布団を汚すだけじゃなくて、涎を垂らして枕まで汚すようなだらしない子になっちゃったんです。ほんと、どうしようもないほどだらしない子に……」

恥ずかしい告白だった。相手が医師である美幸でなかったら、真衣は本当のことを口にしていないだろう。

「違うわよ。だらしがいないから眠っている間に涎を垂らしてお布団を汚しちゃうんだって思っているのなら、それは違うわよ、真衣さん」

美幸は軽く首を振って、いたわるように言った。

「え……？」

「さっきの動画を見てわかったんじゃないの？ 真衣さんが毎晩お布団や枕を濡らしちゃうのは、ただ単に涎が垂れるからってだけじゃないのよ。真衣さんはね、毎晩、枕カバーや掛布団のシーツに唇を押し付けて、ちゅうちゅう吸っているのよ。だから、濡れちゃうの。今夜は私が添い寝をしているから私のおっぱいを吸ったんだけど、これまでは独りぼっちで寝ていて相手がいないから、シーツや枕カバーしか吸う物がなかったのね」

美幸は真衣の髪をそつと撫でつけると、携帯電話の画面を再び真衣の方に向け、「一緒に寝て、真衣さんがどうしてそんな行動を取るようになったのか、およその見当がついたわ。さっき途中で止めた動画の続きを見てごらんさい。そこにヒントが隠されているから」

と囁きかけてから、改めて動画再生のボタンを押した。

輝きを取り戻した画面の中、しばらく美幸の乳首を吸い続けていた真衣の表情が不意に変化した。一心不乱にネグリジェ越しに乳首を口にふくんでいた真衣だが、それまで閉じていた臉が急に開いたかと思うと、そのすぐ後、とろんとした目つきになって再び両目を閉じると同時に、なんとも表現しようのない笑みを浮かべたのだ。そうして、力まかせに美幸の乳首を吸っていた唇の動きが幾らか遅くなり、それこそ幼い子供が母親に甘える時さながら、美幸の胸元に自分の額をそつと押し当てる。

「真衣さんの表情が変化してすぐは、それがどういふことなのか、私にはわからなかった。でも、じきに、ふと思いついたことがあったの」

美幸がそう言うと同時に動画の再生が止まった。「それを確かめるために、私は撮影を中断してケータイを枕元に戻したのよ。——真衣さんのおむつの具合を確かめようとすると、ケータイを持ってられなくなるから」

「……」

「私の勘は当たったわ。真衣さんの表情が変化したその瞬間こそが、おしっこが溢れ出した瞬間だったのよ。真衣さんが私の胸に顔を埋めている間、私はギャザーの隙間から指を差し入れて、おむつ中の様子を調べてみたの。そしたら、どんどんおしっこが溢れ出てきて紙おむつの内側を濡らしていたのよ。もつとも、吸収帯がちゃんと吸い取ってくれたおかげで外へは漏れ出さなかったけどね」

そこまで言って、美幸は思わせぶりに軽く頷いてみせた。

「それで、確信したの。真衣さんの夜尿については、やっぱり、心理的な要因が大きいんだって。でも、心配することはないのよ。精神的な病気とか神経系統の傷害とか、そんな怖いものじゃないから。ただ、ちよつと——」

美幸はそこでちよつと間を置き、くすつと笑って続けた。

「——ちよつと、赤ちゃん返りしちやってるだけなんだから」

「あ、赤ちゃん返り!？」

美幸の口を衝いて出た思ってもみなかった言葉に、真衣は思わず聞き返してしまふ。

「赤ちゃん返りって……下の子が生まれてお兄ちゃんやお姉ちゃんになった上の子が、母親の愛情を独占する下の子に嫉妬して自分も赤ちゃんになりたいって駄々をこねる、あの赤ちゃんと返りのこと……ですか？」



「よく知っているわね。ま、家庭科の保育の単元でも習うから知っているでも不思議じゃないけど。そう、その赤ちゃん返りのことよ、私が言っているのは」

「でも、でも……私には弟や妹なんていないし……」

「赤ちゃん返りするのは、なにも、下の子に対する嫉妬だけが原因ってわけじゃないのよ。とにかく、両親、とりわけ母親にべったり甘えたいという気持ちが高じて自分じゃどうしようもなくなつて抑制が利かなくなり、とうとう赤ちゃんみたいな行動を取るようになった状態が赤ちゃん返りなんだから。下の子への嫉妬は、ちよつとしたきっかけに過ぎない場合もあるの。だから、真衣さんみたいに、一人っ子でも赤ちゃん返りしちゃうケースも珍しくないのよ、実は」

美幸は軽く首を振って説明した。

「だけど……だけど、私には母がいないんですよ。いくら甘えたくても、甘える相手がいないんですよ。なのに……」

真衣が、どことなく恨みがしい口調でぽつりと言った。

「そうね。たとえ赤ちゃん返りしても、真衣さんには、思い切り甘えさせてくれるお母様はもういない」

美幸はもういちど真衣の髪を撫でつけてから、紙おむつ越しにお尻をぼんと叩いて言った。「だから、おねしょなのよ。赤ちゃん返りしてべったり甘えたくて仕方ないのに、誰も受け止めてくれない。だから、おねしょが始まっちゃったのね。赤ちゃん返りしてもお母さんが甘えさせてくれない子供が手をつけられないくらい駄々をこねたり、無意識のうちにおもらしをしちゃうようになるのと同じで」

「そんな……だって、私、もう高校生なんですよ。手のかかる小さな子供なんかじゃありません。どうして、今になってなんですか？ どうして、高校入試を控えた大事な時期にそうなっちゃったんですか？ どうして、お母さんが恋しくてたまらなかつた子供の時にじやなかつたんですか？ そんなの、理屈に合いません」

真衣は唇を「へ」の字に結んで言い返した。

「それは、むしろ、逆なのよ。『高校入試を控えた時期なのに』じゃなく、『高校入試を控えた時期だからこそ』なの。真衣さん、勉強に身を入れすぎて体調を崩しちゃったんだつたよね。熱にうなされてる間、どれほど苦しかったでしょうね。そして、どれほど寂しかったことでしょうか。こんな時、お母さんがいてくれたら——ついそう思っても不思議じゃないわ。人生の中でもそう何度もないくらい大事な時期に大変な目に遭って、そんな時にこそ、誰かの暖かい手が必要なのよ。誰かの胸にすがりついて涙が涸れるまで泣きたくなるのよ。だから、その時に真衣さんの赤ちゃん返りが始まったのね。そうして、かなえられない願いの捌け口として、おねしょも始まった。『お母さん、私、まだおねしょの治らない赤ちゃんなんだよ。なのに、どうして私のこと構ってくれないの？ どうして、よしよとしてしてくれないの？』そんな気持ちがあふつふつと湧き上がってくるのを止められなかつたんじゃない？」

「……」

「辛い言い方になるけど、お母様が生きていらして真衣さんを際限なく甘えさせてくれてい

たら、たとえ赤ちゃん返りしたとしても、すぐにおさまったのかもしれない。それがかなわないからこそ、真衣さんの赤ちゃん返りがこんなに長く続いているんでしょうね。そして、それに伴う夜尿も」

美幸は片方の眉を僅かに吊り上げた。

「ううん、でも、お母様がいらっしやらなくても、赤ちゃん返りがおさまるチャンスは無いこともなかったのよ。高校に入学した時こそ、真衣さんの気持ちの向けようによっては赤ちゃん返りから抜け出す絶好の機会だった筈。お母様が青春時代を過ごした高校に自分も進むことで、『お母さんが歩んだ道をこれから私が辿り直すんだ。そして、お母さんが生きられなかった未来を私が代わりに生きていくんだ』ひたすら未来をみつめる、そんな気持ちになることができたなら、過去にすがりつこうとする赤ちゃん返りの状態から抜け出せていたんじゃないかしら。なのに、真衣さんはそうしなかった。お母様が今の自分と同じ年代の時を過ごした学舎に足を踏み入れた途端、まるでお母様の胸に抱かれたかのように感じたからなのか、不安定な未来と向かい合うのではなく、お母様への追憶に浸るといって、甘い匂いを漂わせる蜜にべっとりまとわりつかれて逃げ出すことのかなわない畏に墮ちる途を自ら選んでしまったのよ」

「……」

「真衣さん、あなたはどうしたい？ お母様恋しさのあまりいつまでもおねしょが治らなくておむつ離れできない赤ちゃんでいたい？ それとも、辛い現実と向かい合える大人になりたい？ 選ぶのは自分よ」

「……いつまでもおねしょが治らないなんて、そんなの我慢できません……」

真衣は固い表情で言った。

「本当にいいのね？ 本当に、未来に向かって自分の足で歩いていけるのね？ 辛いこともいっぱいあるけど、本当にそれでいいのね？」

美幸は真剣な眼差しで真衣の顔をみつめた。

「……私、もう高校生なんです。小っちゃい子供じゃないのに、赤ちゃん返りだなんて、そんなの……」

本当にいいの？と繰り返して訊かれて躊躇いを覚えた真衣だったが、様々な思いを振り払うように何度か左右に首を振ると、潤んだ瞳で美幸の顔を見上げた。

「わかった。真衣さんは私に助けを求めて医院を訪れてくれた大事な患者さん。そして今は、義理とはいえ、かけがえのない愛娘。私が真衣さんの赤ちゃん返りを絶対に治してあげる。だから、私を信頼してちょうだい。どんなことがあっても私を信じて、どんなことでも私の指示に従ってちょうだい。——できるわね？」

「……」

事ここに至って否はあり得ない。真衣は美幸の言葉を受け容れるしかなかった。

そうすることで二度と引き返せぬ人生の回り道に足を踏み入れる結果になるとは思いもせず。

## 《五・朝の出来事》

ダイニングルームに姿を現した優の鼻をくすぐったのは、いつものコーヒーの香りとは異なる、味噌汁のいい匂いだった。

「おはよう、優さん」

ドアが開く気配を察したのか、玉杓子を持った美幸がぐるりとこちらに振り向いて、こやかな笑顔で言った。

「……おはよう、お父さん」

ご飯と味噌汁、それに焼き魚や卵焼きを盛りつけた食器をテーブルに並べながら真衣も挨拶をするのだが、なぜとはなしに優の視線から逃れようとするそぶりが見え隠れしていた。

「ああ、おはよう」

朝の挨拶

を返しながら自分の席についた優は、目を細めて誰にともなく言った。



うのは。なんて心温まる朝なんだろう」

「これまでは、まだ学生の真衣ちゃんに家事をまかせていたんでしょ？ でも、それじゃ真衣ちゃんが可哀想だから、まだ籍は入ってないけど、今日からはなるべく私がすることにしよう。真衣ちゃんには勉強に専念してもらいたいしね」

「ああ、そうだったのかい。正式に結婚するまでは家に馴染んでもらえるだけでいいと思っていただけだけど、そう言ってくれるなら大助かりだよ」

優は相手を崩して言った後、大きく頷き、いかにも満足そうな声で続けた。

「それにしても、美幸さんが真衣のことを早速『真衣ちゃん』なんて呼んでくれるのが嬉しいね。難しい年頃の女の子のことだから、いろいろあると思うんだけど、もうそんなに仲良

くなつたのかい？」

「ええ、そうですね。真衣ちゃんてば本当に素直ないい子だから、これからもずっと仲良くやっつけていけそうで私も嬉しくて」

「そりゃ、よかつた。ところで、真衣は美幸さんのことをどう呼んでいるんだい？」

「優は味噌汁のお椀を持ち上げながら、真衣の方に向き直った。」

「……先生。鈴木先生って……」

少し口ごもりぎみに、真衣はぼつりと答えた。

「そうか、真衣の方はまだ『お母さん』とは呼べないか。ま、亡くなつた本当のお母さんの思い出もあるし、無理強いはしたくないけど、できるだけ真衣の方からも美幸さんのことを……」

たしなめるようにそう言う優を押しとどめたのは美幸だった。

「いいんですよ。もっと仲良くなれば、自然と私のことも『お母さん』って呼んでくれるようになるんだから、今は成り行きにまかせましょう。ええ、そう呼んでくれるようになるに決まっているんです。——ね、真衣ちゃん？」

美幸は、そうなるのが当然とでも言いたげな口調だ。

それに対して真衣は

「……あ、は、はい……」

と、おどおどした様子で頷くしかなかった。

昨夜から今朝までのさほど長くない時間の内に三度もしくじつてしまい、そのたびに美幸の手で紙おむつを取り替えられた真衣には、それより他にできることなど一つもありはしなかった。

\*

夜中の一時に目を覚まし、自分でするからと幾ら訴えかけても聞き入れられず美幸の手で強引におむつを取り替えられ、まだ湯気を立てていそうなおしっこを吸収した紙おむつの重さを目の前で量られる屈辱。けれど、言葉では言い表せないほどの羞恥に身を焼かれつつも新しい紙おむつに下腹部を包み込まれて再び美幸の腕に頭を載せ、お腹をぼんぼんと優しく叩かれているうちに、いつもの睡眠習慣には抗うことができず、いつのまにか再びぐっすり寝入ってしまった真衣だった。

そんな真衣が改めて目を覚ましたのは、しかし、いつもの起床時間にはまだ早い午前三時ごろのことだった。その時も、一時ごろに目を覚ました時と同様、美幸がベッドから床におり立つ心配を察してのことだったし、おむつの内側がじっとり湿っているのも、僅か二時間前の時とそっくり同じだった。

しかも、それで終わつたわけではなかった。三たび、今度こそ空が白んでくるのに合わせるように目覚めた真衣だったが、それでも、まだ五時前のことだった。三十分とはいえ、いつもよりも早い目覚め。その理由がその夜三度目のおねしょのせいなのは、敢えて言うまでもないところだろう。

「やれやれ、本当に困った子だこと。立て続けに三回もおむつを汚しちゃうなんて」

診察室で会った時や、佐藤家にやって来てすぐの頃はまだ他人行儀な話し方だった美幸だが、さすがに三度目のおねしよに気づいた時には、真衣のことをすっかり子供扱いする口調に変わっていた。もともと、美幸の乳首をネグリジェ越しにちゅうちゅう吸いながらおむつを汚してしまう真衣の様子を繰り返す目にしていけば、そうなるのも当然といえば当然か。

「……そんな、小っちゃい子に言うみたいない方……」

それまでの二回と同じように今度もナイティの裾をお腹の上まで捲り上げられて、丸見えになった紙おむつの側部のステッチを美幸の手で破かれ、おしっこを吸ってじっとり濡れたおむつを外されながら、真衣は弱々しく首を振り、恨みがましい声を漏らした。

しかし、美幸の方は、そんな真衣の抗弁に耳を貸す気配もない。

「小っちゃい子みたいなんじゃなくて、小っちゃい子そのものなのよ、真衣ちゃんは。小っちゃい子だから、おっぱいを吸いながらおむつを汚しちゃうんじゃないのかな？ なんて、赤ちゃん返りの真っ最中なんだから、真衣ちゃんは」

真衣の下腹部から剥ぎ取った紙おむつをくるりと丸めて、外側に付いているテープで留め、それを計量秤に載せながら、美幸はあやすように言った。

「……真衣ちゃんだなんて、そんな呼び方……」

美幸の自分に対する呼び方がそれまでの『真衣さん』から『真衣ちゃん』に変わったことに気づいた真衣は、ますますの羞恥に、拗ねたような顔になる。

「だって、何度でも言うけど、真衣ちゃんは小っちゃい子どころか、それよりも小っちゃな赤ちゃんなんだから。——約束したんじゃないか？ 恥ずかしいおねしよ癖を治すためならどんなことでもしますって。その手始めが赤ちゃん扱いよって私は説明した筈よ」

「……」

初めて美幸の手でおむつを取り替えられた時、真衣は、自分が赤ちゃん返りしているのだと告げられた。その上で、赤ちゃん返りの状態から抜け出すには、赤ちゃん返りしているという事実を自ら認め、母親の代わりになつてくれる誰かに思い切り甘えることで、今まで胸の奥底に溜め込んでいた様々な思いを解き放つしかないと言明された。そして、その手助けをしてあげられるのは、新しい家族でありと同時に真衣だけの主治医になつた美幸しかいないのだとも。

要するに、中途半端な赤ちゃん返りの状態を終わらせるには、むしろ、徹底的に赤ちゃん扱いされるしか方法はないのよと美幸は真衣に教え諭したわけだ。

ちゃんとした医師免許を持ち、しかも、助けを求めて自らの意志で足を運んだ相手である美幸からそう告げられると、何も言い返せない。それも、おねしよで汚してしまったおむつを取り替えてもらいながらのことだから尚更だ。

「うふふ。思い出したみたいだね、私とどんなことを約束したのか」

唇を噛みしめて押し黙ってしまった真衣に向かって美幸は満足げに頷いてみせ、紙おむつのパッケージの横に置いてある丸い容器からウェットティッシュのような純白のシートをすつと抜き出して、それまで紙おむつに包み込まれていた真衣の下腹部に押し当てた。それは、

おむつを取り替える際に赤ん坊の下腹部を拭き清めるためのお尻拭きだった。

「あん……」

小さな子供の敏感な肌がただれないよう、刺激の強い薬剤は含んでいない。とはいえ、消毒用に薄いアルコール類を染みこませているため、肌に触れるとひやっとする。その感触に、真衣は思わず喘ぎ声を漏らしてしまった。

このお尻拭きは、もともと真衣が用意していた物ではない。真衣にしてみれば父親におねしよの事実を気づかれることを恐れ、布団やマットを汚すまいとして渋々ながら紙おむつを使うことにしたものの、それ以上のことには考えがまわらなかった。朝になって紙おむつを外してショーツに穿き替える際、下腹部を濡れタオルで拭いているとはいえ、それだけで雑菌を完全に拭い落とすことはできないのだが、そこまで気遣っているほどの精神的な余裕は持ち合わせていないため、ちゃんとしたお尻拭きを買って揃えることもしていなかったのだ。

「気持ちいいでしょ？　じつと濡れたおむつを外してもらって、ひんやりしたお尻拭きで綺麗にしてもらおうのって、とつても気持ちいいよね？　よかったわ、念のためにと思ってた。でも、お尻拭きが置いてないなんて、これまでどうしてたの？　パンツを穿く前にシャワーでも浴びていたのかな？」

美幸は、お尻拭きを持つ手をお尻の膨らみの方から股間の方へと滑らせ、あまり豊かとはいえない飾り毛を撫でるようにして、微かに付着しているおしっこを拭い取りながら言った。

「い、いいえ。…毎日、朝早くからシャワーなんて浴びていたら父に怪しまれますから」「そう。確かにそうね。洗面所で朝シャンするくらいならともかく、毎朝シャワーじゃね」「美幸は軽く頷いて同意してみせ、おしっこを拭き取ったお尻拭きをゴミ箱に捨てると、ごく自然な口調でこんなふうに付け加えた。

「さ、これで綺麗になったから、また新しいおむつをしようね。新しいおむつはふかふかのさらさらで気持ちいいわよ」

それは、これまで二度おむつを取り替えるたび真衣に言っただけで聞かせたそのまま、もうすっかり美幸の口に馴染んでしまった言葉だ。

それに対して真衣は慌ててかぶりを振り、「お、おむつは…もういいです。もう起きるから、パンツを穿かなきゃ…」

と、どこか哀願するような口調で応じた。「あら、本当にパンツでいいの、真衣ちゃん？　赤ちゃん返ししちゃった上の子は、生まれたばかりの下の子と同じように自分も扱ってもらいたくて、おむつをあてててせがむそうよ。真衣ちゃんも同じじゃないのかな？　一晩に三度もおねしよでおむつを汚しちゃうくらいなもの、本当はおむつが大好きになっちゃったんじゃないのかな？」

美幸は、心細そうな表情でこちらを見上げる真衣の目の前にパッケージから取り出した新しい紙おむつをさっと突き出して、面白そうに言った。

「そんな…おむつが好きになっちゃったなんて、そんな…」

「ま、いいわ。赤ちゃん返ししちゃっておむつをせがむような子でも、お出かけする時は他人の目を気にして、ちゃんとパンツを穿くことも多いらしいから、今日は真衣ちゃんもパン

ツにしてあげる。おむつはお家の中だけ、お出かけの時はパンツ。それでいいわね？」

真衣のうろたえぶりをおかしそうに眺めながら、美幸は、いったん取り出した紙おむつを改めてパッケージに戻した後、冗談めかした口調で続けて言った。

「でも、一度でもお出かけの途中でおもらししちゃったら、その時はおむつよ。そうだったら、それから先はずっとおむつにするから、そのつもりでいてね」

「お、おもらしなんてしません。赤ちゃん返りか何か知らないけど、私、高校生なんですよ。おもらしなんてするわけありません！」

美幸が言い終わるか終わらないかの内に、いささかムキになって真衣が言い返した。

だが、無理して虚勢を張っている様子が透けて見え、それが面白くて、つつい、なだめるというよりも半ばからかい気味に

「わかったわ。そうね、真衣ちゃんはお姉ちゃんのお姉ちゃんだもの、おもらしなんてしないわよね。本当はおむつの赤ちゃんなんかじゃないんだから、おねしょはともかく、おもらしなんてね」

と美幸が応じる。

すると、真衣は、頬を真っ赤にして押し黙ってしまった。おねしょのことを言われると何も言い返せなくなる自分自身が悔しい。

「じゃ、これから朝ご飯の用意をするから手伝ってちょうだい。パンツのお姉ちゃんだもの、上手にお手伝いできるわよね？」

丸裸の下腹部をあらわにして唇を震わせる真衣を、美幸は尚も子供扱いして言った。そうして、なんとも表現しようのない笑みを浮かべてこんなふうが続ける。

「朝ご飯を食べ終わったら、お父様の出張に必要な物を買ってお出かけするから、早速、真衣ちゃんがおもらしなんてしないかどうか確かめられるわよ。よかったわね、真衣ちゃん。これでちゃんとできたら、胸を張って、自分のこと、パンツのお姉ちゃんだって言えるんだもの。——さ、それじゃ、パンツを穿いちやおうね。いつまでもそんな格好だと風邪をひいちやうわ。風邪をひいちやったら、おねしょがもつとひどくなって、おむつがもつともつとたくさん要るようになっちゃうものね」

それに対して、あとのことは自分ですと言いつ張って身をよじったが、抵抗も虚しく、それこそ自分ではパンツも穿けない幼い子供同様に美幸の手でショーツを穿かされ、ナイティから普段着に着替えさせられてキッチンへ連れて行かれてしまう真衣だった。

\*

優の携帯電話が鳴ったのは、食後のお茶も終わり、美幸が食器を片付け終えてすぐのことだった。

「おはようございます、専務。——ええ、これから家を出ますので、ミーティングが始まる三十分前には社に着きます。——あ、はい。ああ、そうですか、法務部からは知財課のメンバーが二人参加してくれるんですね。ええ、心強い限りです。それと、転送していただいたメールは昨夜の内にチェックを終えて、添付資料にも目を通しておきました。はい、では、

後ほど」

電話は、優が勤めている製薬会社の重役からだったようだ。通話を終えた優はふっと溜息をついて携帯電話をポケットに戻し、シンクを離れてこちらに歩いてくる美幸に向かって言った。

「じゃ、そういうことだから、買い物はまかせるよ。必要な物は昨夜のリストの通りでいいけど、あまり安い物じゃなく、ちゃんとしたメーカーのを頼むよ。外国出張中に故障されたんじゃないから」

「まかせておいてちょうだい。これでも目利きは確かだから」

美幸は洗い物で濡れた両手をエプロンで拭い、にこやかな笑顔で頷いた。

が、真衣は二人の会話についていけない。

「……どうということなの、お父さん？ 出張中に要りそうな外国で使える電気髭剃りとかパソコン用のコンセントアダプチャメントとか、今日、一緒に買いに行く予定だったでしょ？」

ふと疑問に思った真衣は優に尋ねた。

それに対して優の口から返ってきたのは

「うん、三人で暮らし始めた記念に、今日は一緒に買い物に出る予定だったね。久しぶりに都心に出て、お昼は三人でおいしい物を食べようって約束したね。——でも、昨夜、専務から直々に電話が入ってね、今日は土曜日で本当は会社お休みなんだけど、緊急ミーティングを開くことになったんだよ。なんでも、父さんと入り替わりにドイツから帰ってくるようになってる担当者が、ちょっと強引な手段を使って、すごい資料を手に入れたらしいんだ。うまくすれば、ドイツの会社との提携話がこちらにとってすごく有利な条件で進められそうな価値のある資料だってことで、父さんたちのチームがドイツへ発つ前にどうしても資料の分析をおきたいんだそうだ。だから、昨夜、真衣が自分の部屋に戻った後、買ってほしい物のリストを作って美幸さんに渡しておいたんだ。そういうことだから、買い物は二人で頼むよ。お昼ご飯はHホテルのレストランに父さんの名前で予約を入れておいたから、そちらも二人で楽しんでくるといい」

「……そう。そうだったの……」

真衣はようやく事情が飲み込めた。

だが、納得したわけでは決していない。

これまではどんな些細なことでも真衣に話してくれていた筈の父親が、一緒に買い物に行けなくなったことを美幸だけに話していた。真衣が自分の部屋に戻っていて、ひよつとしたら既に寝入っているかもしれないという気遣いがあったのかもしれないが、それでも、必要な物のリストを美幸に渡しておいて、そのことを真衣が尋ねるまで話してくれなかったという事実には、言いしれぬ寂しさが掻き立てられる。

「そういうことだから、今日は女どうし、二人でショッピングとランチを楽しみましょうね。お父様の買い物なんてさっさと済ませて、あとは夏物のお洋服を見てまわるなんてどうかな？」



優の説明が終わってすぐ、浮かぬ顔の真衣とは対照的に晴れやかな笑みを浮かべた美幸が言った。

だが、真衣は力なく首を振ると

「……私、行かない」

とぼそつと言つて、のろのろと椅子から立ち上がった。なんだか父親に裏切られたような気がして、いたたまれなくなる。今はただ、自分の部屋に戻って独りきりになりたかった。

「そんなこと言つっちゃ駄目じゃない、真衣ちゃんてば。お父様と一緒にのお出かけを楽しみにしていたのはわかるけど、お父様はお仕事でどうしても都合がつかなくなつちやっただから、わかつてあげなきゃ。さ、駄々をこねてないで、私と一緒に行きましょうね」

美幸は、高校生をなだめすかすというよりも、年端もゆかぬ幼い子供をあやすかのような口調で真衣を諭した。

「……」

美幸が自分のことをわざと子供扱いしていることを察した真衣は、ますます拗ねたような表情になる。

「あらあら、今度はだんまりなの？ 真衣ちゃんのこと、素直でいい子だと思つていたのに、とんだ勘違いをしていたのかしら。自分の思い通りにいかないことがあるとすぐ拗ねちゃうなんて、まだまだ聞き分けのないお子ちゃまだったのね」

美幸はわざと呆れたように言いながら真衣の傍らに立つて耳元に唇を寄せると、優には聞こえないよう声をひそめて囁きかけた。

「本当は、お出かけするのが怖いんじゃないのかな？ 強がりを言つてパンツを穿いたけど、本当はお出かけの途中でおもらししちゃうんじゃないかって、それが怖くてお家にいたいんじゃないのかな？ お出かけの間パンツを濡らさない自信がないからお出かけしたくなくて、それで、お父様が一緒にじゃなきゃ嫌だって駄々をこねて自分だけお家に残ろうとしているんじゃないのかな？」

「そんな！ ……部屋でも言つたけど、おもらしなんてするわけありません。そんな理由なんかじゃありませんたら」

一瞬声を荒げた真衣だったが、優が聞き耳を立てる気配に、慌ててこちらも声をひそめ、美幸に向かって囁きかけた。

「だったら、私と二人でお出かけしましょう。じゃないと、お父様も心配するんじゃないかしら。それとも、出張を目前に控えたお父様に余計な心配をさせて真衣ちゃんは楽しいのかな？」

美幸は、どことなく挑発するように囁き返した。

「私が父を困らせて楽しいわけじゃないですか！ わかりました。先生と一緒に出かけます」

真衣は、ついつい、ひそひそながらも気色ばんだ声で応じてしまった。それが自分の仕掛けた罠に真衣を引きずり込むための美幸の企みだとも知らずに。

## 《六・お出かけの時は》

しばらく来ないうちに、電車の窓から見える都心の光景は随分と変化していた。歴史のある建物がいつのまにか姿を消していたり、こじんまりした雑居ビルの周りが有名な店舗の並ぶお洒落なショッピングモールになっていたり、以前来た時の記憶がまるで役にたたないほどの変わりようだった。

だが、真衣には、そんな光景の移り変わりに見取れている余裕はなかった。ターミナル駅に併設されている複合商業施設までは、郊外の住宅街にある家からバスと電車を乗り継いで一時間ほどの行程だ。家を出る直前にトイレを済ませてきたとはいえ、家から都心までよりも近い高校までの道のりでも途中でトイレへ行かなくて大丈夫か不安になるのが常の真衣だから、電車から駅におり立つと同時にトイレを探してきよろしてしまうのも無理はない。

なのに、そんな真衣の胸の内も知らぬげに（いや、正確に言うと、真衣の胸の内を手に取りるようにお見通しだからこそ）美幸は真衣の手を引いてさっさと歩き出すのだった。

「ちよ、ちよっと待ってください。そんなに急がなくても……」

真衣は、ずんずん歩いて行く美幸に抗うこともできず、渋々つき従いながら、せめて歩速を緩めてくれるよう懇願するのが精一杯だった。

「何を言ってるの、真衣ちゃん。さっさとお買い物を済ませないと、すぐお昼になっちゃうじゃない。お父様が予約を入れておいてくれたHホテルはショッピングセンターからまだタクシーで大分あるんだから、ほら、急いで」

美幸は真衣の方をちらと振り向いて言った。

「で、でも……」

真衣は窮状を訴えようとするのだが、さすがに、大勢の乗降客が行き交うターミナル駅の構内で本当のことを口にするのは躊躇われた。

「わかってるわよ。トイレへ行きたいんでしょ？」

言葉が濁す真衣の表情を読み取ったかのように美幸が短く言った。

「……」

凶星を指された真衣がますます言葉を失う。

「簡単なことよ。真衣ちゃん、電車をおりる前からそわそわしていたし、ホームにおりた時からきよろきよろしちゃって、あちこちにある表示板に『お手洗い』って書いてあるのを見るたび、何か言いたそうにしていたもの。それに、先週の土曜日、診察室で『通学の時も駅に着くたびに電車からおりたくなるほどトイレが近い』って言っていたじゃない。そのへんのことを考え合わせれば、真衣ちゃんがどうしたいのか推測するのは、そんなに難しいことじゃないわよ」

こともなげに美幸は言った。それでも、決して立ち止まろうとはしないばかりか、表示板

の矢印記号に従ってトイレの方へ行こうとする気配もみせない。

「わ、わかっているんだったら、トイレへ……」

周囲を歩き交う客たちに聞こえないよう、真衣は遠慮がちに訴えかけた。一人りでトイレへ行こうにも、美幸に手首を掴まれているせいでそれもかなわない。

だが、その声は美幸の耳には届かない。いや、届いているのに、わざと無視している様子がありありだ。その証拠に、美幸はこんなことを真衣に向かって囁き返すのだった。

「あと一時間くらいは我慢できるようならなきや駄目よ。真衣ちゃん、診察室で『学校じや休み時間になるたびにトイレへ行っている』とも言っていたわよね。それに対して私は、休憩時間ごとじゃなく、一回おきにして、トイレへ行く回数が半分になるよう頑張ってみなさいってアドバイスした筈よ。もっと我慢する努力をすれば、原因が精神的なものにせよ肉体的なものにせよ、膀胱の機能が高まっておしっこを溜めておける量が増えるんだからって。もちろん、我慢するのは学校の中でだけなんかじゃないわ。いつでもどこでも我慢する習性をつけること。そうしなきや、膀胱がおしっこを溜めておける量は、いつまでも限られたままになっちゃう。そんなだったら、赤ちゃん返りの状態からは抜け出せたとしても、膀胱の機能不全が原因で、いつまたおねしょが始まっちゃうか知れたものじゃないわ。ううん、赤ちゃん返りがおさまっても、おねしょは今のままずっと治らないかもしれない。そんなことにならないよう、もう訓練は始まっているのよ。だから、今も、あと一時間くらいは我慢できるよう頑張らなきやね」

「で、でも……」

思わず抗弁しかけた真衣だが、それもかなわなかった。美幸が口にする『おねしょ』や『赤ちゃん返り』といった言葉が耳に届いたのだろう、二人と同じ方向に歩いて行く人たちの内の何人かが不思議そうな目で真衣の顔をちらちら覗き見る気配を察したからだ。

今の真衣には、周囲の人間をやり過ぎし、尿意を我慢して美幸につき従うことしかできなかった。

\*

「さ、こんなもんかな。これで、優さんから受け取ったリストの物は揃ったかな」

ターミナル駅に併設された複合商業施設のワンフロアを占める家電量販店を出たところで、美幸は、レシートに記された商品名と、優から渡されたリストとを一つ一つ丹念に照らし合わせて、ようやく納得したように頷いた。

「……もういいでしょ？ 駅に着いてももうすぐ一時間になるんだから、もういいんですよ？」

美幸がレシートのチェックを終えるのを待ちわびて、今にも泣き出しそうな声の真衣が言った。

「ああ、そうね。本当はまだ五十分しか経っていないからもう少し我慢してほしいところだけど、最初からは無理よね。いいわ、行ってらっしゃい」

レシートから目を離れた美幸は、真衣の顔と腕時計とを見比べて、エレベーターホールの

斜め向かいにあるトイレの表示を指差した。

ようやくのお許しに真衣はこくと頷いて、ゆっくり歩き出した。本当は一目散に駆け出したいところだが、もう本当に我慢も限界に近づいているようで、下半身にあまり力を入れられない。

チンという音が鳴ってこの階にエレベーターが着いたのは、真衣がエレベーターホールを横切りにかけた時だった。

扉が開くと同時に、わつという歓声が聞こえて、新しいゲームを買いにやって来たのだろう、小学生とおぼしき男の子が三人、一団になってエレベーターから走り出た。

ちょうどそこに真衣が居合わせたからたまらない。周りの様子などまるで気にするふうもなくエレベーターから走り出てきた少年たちと真衣の体がぶつかった瞬間、そろりそろりと歩いていた真衣が少年たちの勢いに負けて、壁の方へ弾きとばされてしまう。

その様子を見た美幸が

「真衣ちゃん、大丈夫!？」

と叫び声をあげて、たつと駆け出した。

その間に少年たちは我先に家電量販店の入り口へと走り去ってしまい、真衣の方を振り返るうともしない。

弾きとばされた真衣の体は背中を壁にもたせかけるような格好になったおかげで、幸いなことに床に倒れるようなことはなかった。あの勢いで倒れ込み、床に後頭部を打ちつけたりしていたら、まず脳震盪は免れないところだ。

「大丈夫だった? どこか打ったりしてない?」

壁にもたれた真衣の肩を抱き寄せながら美幸は心配そうに言って、真衣の顔を正面から覗き込んだ。

その時の真衣は、目が虚ろで脛が小刻みに震え、唇は何かを求めて半分ほど開き、肩で息をするのが精一杯といった様子だった。

「しつかりしなさい、真衣ちゃん!」

頭は打っていない筈だと咄嗟に判断した美幸は、真衣の肩を強く揺さぶって大声で名前を呼んだ。

と、真衣の瞳に精気が戻ってきて、蒼白い色をしていた頬に赤みがさしてくる。

そうして、どこかとろんとしたような表情。

「せ、先生……!？」

直後、真衣は自分の目の前にあるのが美幸の顔だということに今更ながら気づいたかのよに驚きの声をあげ、両目を大きく見開いたかと思うと、慌てて身を退いた。

が、背後を壁に阻まれて後ろにさがることはできない。

「真衣ちゃん、あなた、ひよつとして……。いらっしやい。私について来るのよ!」

真衣の表情の変化と仕草が何を意味しているのか思い当たる節のある美幸は、真衣の手首を強引につかむと、トイレに向かって足早に歩き出した。

女性用トイレの一室に真衣を連れ込み、扉を閉じた美幸は、家電量販店の袋と自分の大ぶりのバッグを棚に置くのももどかしく、真衣のスカートの裾をさっと捲り上げた。

「いやっ」

真衣は慌ててスカートの裾を押さえたが、もう遅い。

「まさかとは思ったけど、やっぱりそうだったのね」

あらわになったショーツのクロッチ部分が濡れそぼり、太腿の内側を水滴が三つ四つ皮膚に沿って伝い落ちている様子を目にして、美幸はふっと溜息をついて言った。

ショーツの濡れ方と考え合わせれば、太腿を伝い滴っている水滴がおしっここの乗だということは火を見るより明らかだ。

「……さ、さっき、エレベーターから出てきた男の子たちとぶつかったせいで……」

真衣は言い訳じみた口調で弱々しく応え、涙目で力なく続けた。

「で、でも、すぐに力を入れて、おしっこは途中で止めることができたんだけど、その……」

真衣はスカートの裾を押さえることは諦め、顔をそむけて口をつぐんだ。

「そう。おもしろしはしちゃったけど、全部出ちゃったわけじゃないのね。要するに、ちびっっちゃったってことかな」

スカートの裾を捲り上げたまま、

美幸は少し意地悪な口調で確認するように言った。

「……」

「でも、普通、ちびっっちゃうっていうのは、パンツにうっすらとシミがつくくらいのことを言うんじゃないかしら。今の真衣ちゃん、それよりもたくさんおしっこが出ちゃったみたいだけど？」

美幸は尚も意地悪く言った。

それに対して、いったんは押し黙ってしまった真衣が、今度は唇をぎゅっと噛みしめ、

「……先生がいけないんだ！ 私がトイレへ行きたがってるのを知ってるくせに行かせてくれなかった先生がいけないんだ！ みんな、みんな、先生のせいなんだからね！」

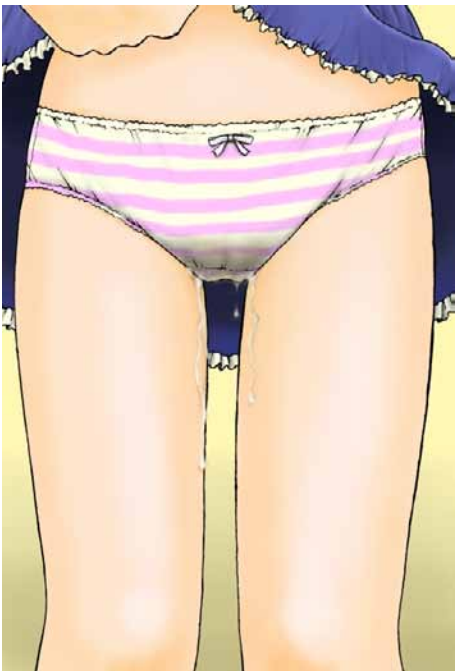
と金切り声をあげる。

だが、それも束の間。扉が開く音が聞こえ、隣の個室に誰かが入ってくる気配を察すると途端に弱気な表情に戻り、

「先生がいけないんだから。私、わるくないんだから……」

と、言葉の内容は同じでも、口調や語気が急におとなしくなって、ついさっきの責め立てるような様子がすっかりなりをひそめ、今にもしゃくりあげそうにしてしまうのだった。

それはまるで、おもしろしをみつかった幼い子供が、最初は逆ギレして母親に食ってかかったものの、結局はそれも続かなくなり、その後どうしていいのかわからなくなって泣き出し



そうにしてしまう姿さながらだった。

「そうね。真衣ちゃんの言う通り、私がいけなかったのね」

しゅんとしてしまつた真衣に対して、さっきの意地悪な調子が嘘のように、美幸は、これ以上はないくらい優しい声をかけた。

「あ、あの……」

なんだかんと言つても、真衣にしても、おもらしをしてしまつた自分が一番いけないんだということとは痛いほどわかっている。わかっているからこそ、それを認めるのが辛くて感情的になつてしまつたのだ。そんな時、美幸の方から「そうね、私がいけないのね」と言われると、どう応じていいかわからなくなつてしまう。それはちようど、駄々をこね続ける幼児に向かつて母親が「そうよ、××ちゃんはちつともわるくないのよ。いけないのはみんなママなんだから」と言つてあやすのと同じだった。

「ううん、いいのよ、みんな私のせいなんだから。真衣ちゃんは何も悪くないのよ。でも、このままだと、いつまたおもらししちゃうかshれないから、残つたおしっこを今の内に出しちゃおうね」

戸惑いの表情を浮かべる真衣に向かって、美幸は、優しいというよりも甘つたるいと表現した方がいいような声で囁きかけた。

「う、うん……」

不意に優しくされたせいでふと生じた心の隙間に美幸の聲が染み入り、ついつい頷いてしまふ。

「いい子ね、真衣ちゃんは。おねしよは治らないけど、とつても素直でいい子だわ。だから、おもらししちゃう前にちゃんとトイレでおしっこしようね。さ、パンツを脱がせてあげる」

そんな声にいざなわれるまま半歩だけ歩み寄つた真衣のショーツに美幸の指がかかった。

が、美幸がショーツを引きおろそうとした瞬間、

「いや……」

と真衣が我に返つて後ずさる。

「あらあら、どうしたの？　ちゃんとトイレでおしっこするんじゃないかな？　それとも、濡れたパンツのまま歩きまわつて、そのうち残りのおしっこもパンツの中に出しちゃう方がいいの？　でも、そうよね。毎晩おねしよでおむつを汚しちゃう真衣ちゃんだもの、トイレよりもパンツにおしっこしちゃうのがお似合いかもね」

扉を背にしているのは美幸の方だから、真衣が勝手に逃げ出すことはできない。そんな状況の中、美幸は、隣のトイレを使っている客にも聞こえるよう声を大きくして言った。

「だ、駄目……そんな大きな声で言つちややだ……」

さっきからずっと涙でうるうるしている真衣の瞳がますます潤む。

「だって、真衣ちゃんが言うことをきかないんだから仕方ないでしょ？　私だって、真衣ちゃんがいい子でいてくれたら大きな声なんて出さずに済むんだから。私は言った筈よ。真衣ちゃんがどう思うかしらないけど、私は真衣ちゃんのことを実の娘だと思つて、叱らなきゃいけない時は叱るつて。娘を叱るのに、小さな声しか出さない母親なんていないわよ。なんなら、もっと大きな声で叱つてあげてもいいのよ。まったく、いつまでもおむつ離れできな

い赤ちゃんなんだからって。そんなふうには叱ってから、真衣ちゃんを扉の外に出してあげましょうか？ トイレの順番を待っていて私の声が聞こえた人が、扉から出てきた真衣ちゃんを見てどんなふうと思うかな。お洒落な格好をした女子高生なのにおむつ離れできない可哀想な子だと思つて不憫がつてくれるわね、きつと」

少しだけ声をひそめて美幸は言った。

「それに、いつまでも濡れたパンツのままいるのは嫌でしょ？ しばらく我慢していれば真衣ちゃんの体温でパンツは乾くかもしれないけど、匂いはどうでしょうね。パンツに吸収されたおしっここの匂いつて、出てすぐよりも、パンツが乾いた後の方が強いらしいわよ。お洒落なお洋服を着ているくせにおしっここの匂いをさせて駅を歩いたり電車に乗ったりするつもりなのかな、真衣ちゃんは。だいいち、お家の近くで御近所の人におしっここの匂いを気づかれたらどうするのかしら。そんなことになったら、それがきっかけで、おねしよのことも知られちゃうかもしれないわね」

「……」

「こんなこともあるかもしれないと思つて、一応、替えの下着を持ってきてあげているのよ。真衣ちゃんが私の言うことをきいてちゃんとおしっこできたら替えの下着と穿き替えさせてあげる。でも、いつまでも駄々をこねるようなら、濡れたパンツのまま外に出してもらうことになるのよ。どっちがいいのかな、真衣ちゃんは？」

美幸はくすつと笑うと、棚に置いた自分のバッグを指差した。どうやら、不自然とも思える大振りのバッグを持って来ていたのには、そういう理由があるらしい。

「まだ若い頃、子供ができれば自分が必要な母親になるか夢想していたことがあるの。手作りのケーキをつくってあげたり、家族でピクニックに行ったりする光景を想像したりしてね。そんな想像の中に、時々、子供が幼稚園でパンツを濡らしちゃって、先生に新しいパンツと穿き替えさせてもらつて、濡れたパンツをビニール袋に入れてお家に持つて帰つてくるつていう光景も思い描いたりしていたの。想像の中だけなんだけど、その時の子供、はにかむような恥じらうような、とつても可愛い表情なんかしっちゃってね。それで、想像の中の私は、次の日、通園鞆に替えのパンツを入れて子供に持たせているのね、先生へのお詫びの手紙と一緒に。なんだか、そういうのつて、ありふれた日常なんだけど、とつても心温まる、絵に描いたような幸せつてそういうのなんだらうなつて夢想していたの。結局のところは昨夜も話した通り、自分の子供を持つことを諦めちゃったんだけど。でも、優さんと一緒になることになつて、真衣ちゃんが私の娘になるつてわかつて、若い頃に夢想したあの光景がまた頭の中に浮かんできたのよ。おねしよの治らない真衣ちゃんのことだから、ひよつとしたら時々はおもらしもしちゃうかもしれないな。そしたら、お出かけする時は替えのパンツを持たせてあげた方がいいのかな。でも、真衣ちゃん、もう高校生だから、替えのパンツを持たされるなんて恥ずかしがるだらうな。だったら、なるべく私が一緒にお出かけするようにして、私が替えのパンツを持っていてあげればいいのよ、なんてね。自分の子供を持つのは諦めたけど、ううん、諦めたからこそ、真衣ちゃんのことがいとおしくてたまらないの。もう高校生の真衣ちゃんが相手だけど、育児の真似事だけでもできればなあ、なんてね。うふふ。そうよ、いつまでもおねしよの治らない真衣ちゃんだからこそ、私は真衣ちゃんのことを可愛

くてたまらないの。お母様恋しさで赤ちゃん返りしちゃってる真衣ちゃんだからこそ、私にはうってつけの娘なのよ。——さ、こっちへいらっしやい。パンツを脱がせてあげるから」  
そう言つて再び真衣のショーツに手をかけた美幸の瞳は、真衣の瞳が涙でうるうるしているのとはまた違った色合いで妖しく潤んでいた。

「や……」

真衣は美幸の手を払いのけようとしたが、

「そう、そんなに外へ出たいんだ。私たちの話を聞いているかもしれない人たちが何人もいる外へ、濡れたパンツのまま」  
と囁きかけられたが最後、肩を震わせて身を固くするしかなくなってしまう。

「それでいいのよ。聞き分けのいい素直な真衣ちゃんは、そのままおとなしくしていられるものね？」

真衣がようやく観念したのを見て取った美幸は、唇の端を僅かに吊り上げて艶然と微笑み、ショーツを膝のあたりまでさつと引きおろした。

「さ、これでちゃんとお座りできるわね。スカートを汚さないよう私が裾を持ち上げておいてあげるから、上手にお座りするのよ。それとも、後ろから抱っこしておしっこさせてあげた方がいいかしら」

美幸は、おしっこに濡れたショーツのクロッチ部分が膝にあたる感触に思わず下唇を噛みしめる真衣の様子を面白そうに見ながら冗談めかして言い、力まかせに真衣の手首を掴んで手前に引いた。

ショーツが脚に絡まる上、ぐっしより濡れた生地が肌にまとわりつくため、急に手首を引っ張られた真衣は咄嗟に歩き出すことができず、そのまま真衣の胸元に顔を埋めるようにして倒れそうになってしまう。

「あらあら、真衣ちゃんはとつても甘えん坊さんだったのね。おねむの時は私のおっぱいを吸いながらおねしょしちゃうし、昼間もおしっこをする時におっぱいを吸いたがるなんて。でも、おっぱいはトイレを出てからにしましょうね。順番を待っている人がいるから、おっぱいをあげている時間はないの。真衣ちゃんはいいい子だもの、我慢できるよね」

もたれかかってきた真衣の背中をぽんぽんと叩いて、幼児を諭すように美幸は言った。

「ち、違う……そんなじゃないんだから……」

「いいのよ、恥ずかしがらなくても。真衣ちゃんが甘えてくれて、私はとっても嬉しいのよ。おっぱいをおねだりしてくれて、私は嬉しくてたまらないんだから。でも、その前におしっこよ。さ、あんよが上手じゃない真衣ちゃんは、私がお座りさせてあげるわね。ほら、もう少しだけ後ろに下がって、そうそう、それで、ちよつと脚を開くのよ。うん、とってもお上手よ。ちゃんとお座りできて、真衣ちゃんは本当にお利口さんだわ」

美幸のなすがまま半ば強引に洋式便器に座らされた真衣は羞恥のあまり顔を真っ赤にして視線を床に落とした。すると、膝頭に引っかかっている自分のショーツがいやでも目に飛び込んでくる。純白の生地で縫製され、ウエストの前部分に小さなリボンをあしらっただけの清楚なショーツの股ぐりからクロッチにかけての部分に、目を凝らすまでもなくびっしょり濡れているのがわかった。おねしょにまみれたショーツを初めて直視した時に劣らぬ、い



いようのない羞恥に胸がざわめく。

「真衣ちゃんがおしっこをしている間に、私がパンツをちゃんと脱がせておいてあげるわね。濡れたパンツがいつまでもお膝に当たっていると気持ちわるいでしょ？」

真衣が慌ててショーツから目をそらすのと同時に、美幸がすつと膝を折って言った。

真衣は

「いいです。あとで自分ですます」

と目をそらしたまま言うのだが、美幸の方はまるで取り合おうともせず、棚に置いたバッグのポケットから携帯用のソーイングセットを取り出すと、小さなハサミを手にした。

「でも、脱がせる時、おしっこを吸ったところが触れてソックスまで濡らしちゃうといけな  
いから、これで切っちゃおうね。パンツを脱ぐだけなのに、ブーツは仕方ないとしても、わ  
ざわざソックスまで脱ぐのは手間なものね」

美幸がハサミを手にする様子を横目でちらと窺い見て、いいしれぬ不安を抱いた真衣。ど  
うやら、その不吉な予感は的中してしまったようだ。

「い、いやです。ソックスを脱ぐのは手間なんかじゃありません。ブーツを脱ぐ手間に比べ  
たら、ソックスを脱ぐ手間なんてたかがしれています。だから……」

「替えの下着を持ってきてあげたのはいいけど、というっかりして、濡れたパンツを入れる  
ビニール袋を持つてくるのは忘れちゃったみたいなのよ。だから、綺麗に脱いだとしても、  
このパンツは持つて帰ることができないの。だったら、切っちゃっても一緒でしょ？ どう  
せ、ナプキンとか用の汚物入れに捨てて帰らなきゃいけないんだから」

真衣の言葉を途中で遮り、しれっとした顔で美幸は言った。

自分のショーツを汚物扱いされて屈辱の極みの真衣だが、自分のおしっこで汚してしまっ  
たものだから、それ以上は何も言い返せない。ここでショーツを持つて帰ると頑なに言い張  
ったりしたら、じゃ濡れたパンツを手を持つてみんなに見てもらいながら電車に乗ればいい  
わと冷たく言い放たれるのは目に見えている。

それでも、それまで穿いていたショーツを無残に切り裂かれたが最後、なぜだか、二度と  
ショーツを穿けなくなってしまうような漠然とした不安が募って、唯々諾々とは承服できな  
い。

「さ、お座りできたんだから、もうおしっこを出しちゃっていいのよ。パンツを汚しちゃう  
けないからって、いったんは出かけたおしっこを途中で止めて辛かったですよ？ でも、も  
ういいのよ。思い切り出して気持ちよくなればいいんだから」

恨みがましい目でちらちらとこちらを覗く真衣の横顔に向かって言った後、ふと何かを思  
いついたかのように納得顔になった美幸は、右手にハサミを持ったまま、左手だけでトイ  
レットペーパーをちぎり取り、それを手早くよってコヨリにした。

「それとも、甘えん坊の真衣ちゃんは自分でおしっこできないのかな。パンツの中にはおも  
らししちゃうくせに、トイレじゃちゃんとおしっこできないのかな。いいわ。じゃ、させて  
あげる。ほら、しーこいこい、しーこいこい」

美幸はそう言うと同時に、便器に座って両脚を小刻みに震わせている真衣の尿道を狙いす  
ましてコヨリの先端を押し当て、何度かいくいと捻るようにしてコヨリを突き立てた。

コヨリが三分の一ほどすぐにじとつと濡れる。

「や……やあ……」

ぎりぎりまで高まっていた尿意をなんとか耐えていたのを、少年たちとぶつかった衝撃で幾らかおしっこを溢れ出させてしまいがら、それでもその後をかるうじて我慢してきた真衣にしてみれば、たまったものではない。やめて、そんなことしないで！ そう叫ぶ余裕も与えられないまま、膀胱を満たしているおしっこが溢れ出した。

ぴちゃ……ぴちゃぴちゃぴちゃ。

たばたば……たばたばたば。

便器の中に溜まっている水の表面に最初は遠慮がちに一つ一つ雫になって落ちていたおしっこが、気がつけば、一筋の条になって流れ出し、便器の水の表面を勢いよく叩き始める。

「いや、見ちゃ駄目……」

真衣は、美幸が役目を終えたコヨリを便器に投げ入れ左手を引つ込めると同時に、両手をぱつと広げて太腿の上に置き、おしっこが溢れ出る秘部を覆い隠した。

「あらあら、そんなに恥ずかしがっちゃって。いいわ、見ないであげる。どうせ私は真衣ちゃんがおしっこをしている間にパンツを脱がせてあげなきゃいけないんだし」

美幸は、真衣のうろたえぶりに薄く笑い、ハサミを持った右手をすつと伸ばした。

薄い生地ならともかく、ゴムを簡単なソーイングセットの小さなハサミで切るのは、思うほど簡単なことではない。しかし、応急処置の経験も豊富なだろう、美幸は的確な手さばきでハサミを動かし、ウエスト部分と股ぐりに合計三カ所の切れ目を入れて、それまでショーツだったものをあつという間に一枚の布きれに変えると、真衣の皮膚から引き剥がした。

「さつきも言ったけど、こんなのを持って帰っても仕方ないから——」

美幸は、隅に置いてある汚物入れのペダルを踏んで蓋を開け、清掃したてらしく空っぽの汚物入れに、ショーツだった布きれを無造作に投げ込んだ。

「私の、私のお気に入りのショーツなのに……」

ショーツを捨てる時の美幸は、いかにも、用済みの汚れ物を処分するだけだといわんばかりの手つきだったが、とめどなく溢れ出るおしっこを止めることもできず、便器に座ったまま事態の推移に身をまかせているしかない真衣には、その手を押しとどめることもできず、ただ、恨みがましくも弱々しく呻くことしかできなかった。

それに対して美幸の方は澄ました顔で

「なにを言ってるの、真衣ちゃんてば。真衣ちゃんのパンツなら、ちゃんと私が持ってきてあげているわよ。真衣ちゃんが絶対に気に入ってくれる、とっておきのパンツをね」と言っつて、艶然と微笑むばかりだった。

\*

少し前にぴちちゃんと音を立てて便器に落ちた雫が最後の一滴だったのだろう、しばらく待っても、もうおしっこが流れ出る気配はなかった。

「出ちゃったみたいね。ちよつとちびつてパンツを濡らしちゃったけど、最後は上手にトイ

レにお座りしておしっこができて、本当、お利口さんだったわね。さ、あとは私がちゃんとしてあげるから、もう少しの間だけおとなしくしているのよ」

美幸は、真衣の頭を優しく撫でてそう言い、バッグの留め金を外すと、携帯用のお尻拭きの容器を取り出した。

それを見た真衣は、幼児がいよいよやをするように力なく首を振るのだが、もはや抵抗する気力も残っていないのか、何も言い返すこともせず身をすくめるのが精一杯だった。

「普通だったらトイレトペーパーで拭いてあげるだけでいいんだけど、真衣ちゃんの場合はそうはいかないのよね。毎晩おむつを汚してお尻全体がおしっこで濡れちゃってるから、こまめに綺麗にしてあげないとね。それに、さっきもパンツを汚しちゃって、女の子の恥ずかしいところだけじゃなく、太腿までびしょびしょにしちゃったんだから」

美幸は小振りの容器からお尻拭きを一枚すつと抜き出して、真衣の下腹部に押し当てた。

「ん……」

昨夜から今朝にかけて三度おむつを取り替えられた時とまるで同じ、お尻拭きのひんやりした感触に、あえかな喘ぎ声が真衣の口を衝いて出る。

「そうそう、いい子ね、真衣ちゃんは。そのままおとなしくしているのよ。——はい、今度はお尻の後ろを綺麗にするから立っちして。真衣ちゃん、上手に立っちできるかな」

美幸は、ようやく伝い歩きができるようになったばかりの幼児に対するように言いながら真衣の脇の下に両手を差し入れて便器から立たせ、改めてお尻拭きを押し当てた。

やがて、トイレトペーパーではなく乳幼児用のお尻拭きでわざとのように入念に真衣の下腹部を拭き清めていた手の動きも止まり、美幸は、くしゃくしゃになったお尻拭きを汚物入れに投げ入れた。

美幸の手から離れたお尻拭きは途中で空気をふくんでふわっと広がり、ひらひら揺れながら落ちていった。そうして、先に汚物入れの中に投げ捨てられていたショーツの上にふわりと舞いおろる。

汚物入れの中でお尻拭きに覆い隠されたショーツ。その光景に、なにやら暗示めいたものを感じて真衣の胸が不安にざわめく。

「さ、次は新しいパンツね。でも、困ったわね。汚れたパンツを脱がせてあげる時はハサミで切っちゃえばよかったけど、穿かせてあげるとなると、ブーツが邪魔になっちゃうかな。どうしてもブーツは脱がせてあげなきゃいけないけど、脱いだブーツの上に真衣ちゃんが立つと、せつかくの上質の革が駄目になっちゃうし、かといって、トイレの床に裸足で立たせるのも可哀想だしね」

困ったわねと口では言いつつ、その実まるで困ってなどいないのが明かな表情を浮かべて美幸はわざとらしい思案顔になったが、すぐににんまり笑ってこう言った。

「なんだ、簡単なことじゃない。パンツを脱ぐのもお尻を綺麗にするのも私がしてあげたんだから、新しいパンツも私が穿かせてあげればいいのよね。真衣ちゃん、もういちどお座りしてちょうだい。お座りしたらブーツを脱がせてあげるから、あんよを上げるのよ。真衣ちゃんがあんよを上げてくれたら私がパンツを穿かせてあげる。そうね、そうしましょう」

最初からそのつもりだったのだろう、言うが早い、美幸は、返事も待たずに再びスカートの裾を捲り上げ、強引に真衣を便器に座らせた。

「あ……」

叫び声をあげる暇もない。便器の上に座らされた真衣の目の前にしゃがみこんだ美幸は、いそいそとフラスナーを引き下げ、真衣が履いているブーツを両足とも脱がせると、自分の背後に押しやってしまった。

「さ、これでいいわ。あとは私がパンツを穿かせてあげるだけ。でも……」

ブーツを脱がせ、真衣の足首を掴んで両足を床から上げさせた美幸はそこまで言って、意味ありげな笑みを浮かべた。

「でも……？」

不安に駆られて真衣が聞き返す。

「おねだりして欲しいわね。『ママ、真衣にパンツを穿かせてちょうだい』って可愛らしくおねだりしてくれたら、気分良く新しいパンツを穿かせてあげられるんだけどな」

一瞬の間を置いて美幸は言った。

「……」

真衣は呆気にとられて口をつぐんでしまう。

「私は昨夜、『私は真衣ちゃんのことを実の娘として扱おうよ。でも、真衣ちゃんは私のこと、今はまだお母さんだと思わなくていい。時間が経って慣れてからでいいわ』って言ったわよね。でも、前言撤回。真衣ちゃんにも私のこと、すぐにでもお母さんだと思っしてほしいの。赤ちゃん返りして夜は何度もおむつを汚しちゃう上、昼間もパンツを濡らしちゃう真衣ちゃん。そんな真衣ちゃんのこと、私は実の娘だと思っているから喜んでお世話してあげられるよ。実の娘の、それも赤ちゃん返りしちゃった娘のおしっこを汚いって思う母親なんではないもの。だから、真衣ちゃんにも私のことを実の母親だと思っただけで甘えてもらいたいの。おしっこのお世話を赤の他人にまかせるなんてこと、恥ずかしくてたまらないわよね。でもお世話をしてくれる人が肉親、特に実の母親だったらどうかしら。ね、真衣ちゃんの心の負担をなくすためにも、私のこと、本当のお母さんだと思っただけで甘えてちょうだい」

「そんな、急に……」

「真衣ちゃんが普通の高校生だったら、私もこんなに急かさないわよ。でも、真衣ちゃん、ぱっと見た目は高校生だけど、本当はまだおむつの外れない赤ちゃんなのよ。昨夜、一緒に寝たそのことがわかったから、考えが変わったの。赤ちゃんの真衣ちゃんに何の遠慮もなく甘えてほしいから、私も何の気兼ねもなく甘えさせてあげて念入りにお世話してあげたいから、だから、一刻も早く私のこと、本当のお母さんだと思っただけで甘えなくなったの。その最初の一歩として『ママ、パンツを穿かせてちょうだい』っておねだりしてほしいのよ」

「……」

「わかってる。『お母さん』というのは、亡くなったお母様だけに許される特別の呼び方。お母様の思い出と結びついたとおきの呼び方。だから、私のことは『お母さん』と呼ばなくていい。その代わり、『ママ』って呼んでほしいの。若い頃、もしも自分に子供ができたら、そしてそれが愛くるしい娘なら、自分のことを絶対に『ママ』って呼ばせようと決め

ていたの。『ママ、絵本呼んで』『ママ、おやつ食べさせて』そんなふうに分えられる娘のことを想像してうっとりしていたの。結局、自分の子供を持つことは諦めて、結婚相手の優さんのお嬢さんが高校生だと知って、『ママ』って呼んでもらう夢も潰えたと思った。でも、真衣ちゃんは、本当は高校生なんかじゃなかった。見た目は高校生でも中身は赤ちゃんだった。それを知った時、私の胸は言葉では言い表せないほどの歓喜に震えたのよ。私も『ママ』になれるんだって」

美幸は熱に浮かされたように言った。

「さ、おねだりしてちょうだい。『ママ、真衣にパンツを穿かせてちょうだい。真衣、おしつこでパンツを汚しちゃったから、新しいパンツを穿かせてちょうだい』っておねだりしてちょうだい」

「で、でも……先生は……」

「わかってるって言った筈よ？ 私は真衣ちゃんの『お母さん』なんかじゃない。私は真衣ちゃんの『ママ』なんだから」

美幸は繰り返して決めつけ、返答を待ったが、真衣がいつまでも伏し目がちに身をすくめるばかりなのを見て取ると、真衣の顔をねめつけて酷薄そうな口調で言った。

「そう、おねだりできないの。じゃ、仕方ない。パンツは穿かなくていいから、そのままお外に出なさい。真衣ちゃんのスカート丈は膝上十五センチってどこかしら。それくらいの長さがあるなら、ちよつと用心深くしていれば裾が捲れ上がっちゃうこともないでしょうね。だったら、何も穿いていない恥ずかしいところを誰かに見られる心配もないわね。だけど、気をつけなきゃ駄目よ。ビル街はいつでもどんな突風が吹くかわからないもの。それに、一緒に歩いている私が手を動かした拍子にバッグの角がスカートに引っかかって捲り上げちゃうかもしれないし。特に、大きな買い物袋を持っている時は体のバランスが崩れやすいから尚更ね」

美幸は、真衣の顔を見据えつつ、目だけを動かして自分のバッグと家電量販店の袋に視線を走らせた。

さらつと聞き流しただけでは真衣の身を気遣っているようにも聞こえる美幸の言葉だが、それが実は何を意味しているのか、すぐに真衣にも理解できた。

一瞬にして真衣の顔が蒼褪める様子を面白そうに眺めながら、美幸は、背後に押しやったブーツをこれみよがしに真衣の目の前に突き出して更に続けた。

「それに、あんよの上手じゃない真衣ちゃんには、踵の高いブーツなんてまだ早いわね。こんなのを履いて歩いたら、すぐにころんしちゃうわね。そしたら、スカートが捲れてお尻が丸見えになっちゃうんじゃないかな。そんなことにならないよう、ブーツは私が預かっておいてあげる。だから、真衣ちゃんはそのままお外へ出るといいわ。靴もサンダルも履いていないソックスだけで人混みの中を歩くといいわ」

要するに美幸は、私の言うことがきけないなら、ソックスだけの裸足という目立つ格好でスカートの下には何も着けずに街を歩き回れと命じているのだ。それも、バッグの角でスカートの裾を捲くってあげるからせいぜい用心するがいいわという脅しも込めて。

「ひ、ひど……」

真衣は声を震わせて呻いた。

だが、美幸の方はしれっとした顔で

「なにがひどいもんですか。私は真衣ちゃんが憎くてこんなことを言っているんじゃないのよ。ただ、真衣ちゃんが精神的な負担に感じないように、そして、私に思い切り甘えることで心の鬱積を取り除いて赤ちゃん返りから抜け出せるよう、みんな真衣ちゃんのためを思って言っているんだから」

と告げ、どうするの？とでも言わんばかりに真衣の目の前でブーツを振ってみせるばかりだ。

「……わかりました」

一瞬しんと静まり返ったトイレの一室、沈黙を破ったのは、真衣の力ない声だった。

「ふうん。で、何がわかったの？ 自分のお口で説明してちょうだい」

観念するしかないと覚った真衣に、わざとすつとぼけた口調で美幸が問い質した。

「……先生にお願いします」

真衣は視線を床に落としてぼつりと応じた。

「あら、先生って誰のことかしら？ それに、お願いって何のことでしょうね？」

「……マ、ママに……お、おねだりします。だから……」

尚も追い討ちをかける美幸に、真衣は首をうなだれて言った。

「そう、ママにおねだりしてくれるのね。いいわよ、可愛い真衣ちゃんのおねだりだもの、ママ、喜んできいてあげる。それで、どんなおねだりなのかな？」

「……マ、……マ……かせてください……」

美幸に先を促されて、真衣は意を決したように言った。が、途切れ途切れの声は細く、よく注意していても殆ど聞き取れない。

「え？ なんですって？ もういちど大きな声で言ってくれないと、ママ、よく聞こえないわ。それとも真衣ちゃん、おむつ離れできない上にまだお喋りも上手にできない小っちゃな赤ちゃんだったのかな？」

美幸はわざとらしい身のこなしで自分の耳を真衣の唇に近づけた。

「……マ、……を穿かせてください。お願い、マ……」

さつきよりはまりましたが、まだ肝腎な部分が聞こえない。

「そう。やっぱり真衣ちゃんはまだお喋りもできないような赤ちゃんだったのね。でも、それなら、お尻が丸見えで人混みの中においても平気ね。だって、小っちゃな赤ちゃんは恥ずかしさなんて感じない筈だから」

美幸は耳を更に真衣の口に近づけた。

「……マ、ママ……あ、新しい……を穿かせて……」

真衣のかすれ声がようやく言葉になってきた。

だが、まだ美幸が納得する気配はない。

「誰が、新しい何を、穿かせてほしいの？ もつとちゃんとおねだりしなきゃ駄目よ」

「……ママ、わ、私に……あたらしいパ、パンツを……穿かせてください」

首をうなだれままま、やつとのこと真衣は言葉にして言った。

それでも美幸は軽くかぶりを振る。

「真衣ちゃんは何をおねだりしたいのか、やっとわかったわ。でも、わかるだけじゃいけないわね。もつと子供っぽく可愛らしい言い方でおねだりしてくれなきゃ。まず、自分のことは『私』じゃなく、『真衣』って名前で呼んでみようか。小っちゃい女の子はたいいそうするもの。それと、語尾は『ください』よりも『ちようだい』がいいわね。さ、言い直してもういちどおねだりしてちようだい」

「……ママ、真衣にあたらしいパンツを穿かせてちようだい」

真衣は何度か浅く息を吸ってから半ば自暴自棄ぎみに言った。

「いいわよ、それで——と言いたいけど、まだ足りないわね。どうして新しいパンツを穿かせてほしいのかな？ それまで穿いてたパンツはどうしちゃったの？」

美幸は嵩にかかって問い質した。

「お、おしっこ……」

「おしっこがどうしたの？」

「お、おしっこで汚しちゃって……ま、真衣、おしっこでパンツを濡らしちゃったの。だから、新しいパンツを穿かせてちようだい。真衣、ママに新しいパンツを穿かせてほしいの。おしっこで濡らしちゃったパンツの替わりに新しいパンツを穿かせてちようだい、ママ……」

とうとう真衣はそう言うのと、それまでうなだれていた顔を上げ、涙で潤んだ瞳で美幸の顔を睨みつけた。

が、美幸は動じる気配も見せない。さもそれが当然といわんばかりに満面に笑みをたたえ、「お利口ちゃんね、真衣ちゃんは。新しいパンツを穿かせてほしいっておねだりできるなんて、すっかりパンツのお姉ちゃんだわ。これなら、夜のおむつもすぐに外れるかもしれないわね。いいわ、一日でも早く本当にパンツのお姉ちゃんになれるよう、とっておきのパンツを穿かせてあげるわね」

と言いながら、自分のバッグを手元に引き寄せて留め金を外し、中に右手を差し入れた。とっておきのパンツという美幸の言葉に真衣の胸が奇妙に高鳴る。

案の定、

「ほら、これがママが真衣ちゃんのために特別に用意しておいてあげた新しいパンツよ」と面白そうに言って美幸がバッグから取り出したのは普通のショーツなどではなかった。

「そ、それって……」

思わず絶句してしまい、やや間があって再び口を開いた真衣の目に映ったのは、つるつるした淡いピンクの生地で縫製してあって、股ぐりを幅の広いバイアステープで縁取りし、お尻のところにも可愛らしいアニメキャラのアプリケがあしらわれた、見るからに厚ぼったい感じのする、股がみの深いパンツだった。

「そう、トレーニングパンツよ。トレイトレーニングを始めたばかりで普通のパンツだとしくじっちゃうような赤ちゃんが昼間に穿くトレーニングパンツ。普通のパンツだとちよっとおもしろいだけでもおしっこが漏れちゃうけど、これなら、内側が吸水パッドになってい

て表地が防水性の生地になっていて、少しくらいのおもらしなら表面に沁み出てくることもないし、匂いも漏れにくいから、おむつ離れの練習にはもってこいのパンツね。ほら、お尻のところテレビでよく見るキャラクターのアプリケがしてあるから、見た目も可愛いでしょう？ ただし、ぱつと見は赤ちゃん用だけど、サイズはうんと大きめに作ってもらってあるのよ。だって、まだおむつ離れできない赤ちゃんのくせに体の大きさだけは高校生の真衣ちゃんに穿かせてあげる特別のトレーニングパンツだもの」

美幸はわざとらしく念入りに説明してから、

「さ、あんよを上げようね。ママが穿かせてあげるから。真衣ちゃんも、こんなに可愛いトレーニングパンツ、少しでも早く穿いてみたいでしょ？」

と言って、真衣の足首を掴み、便座の高さとほぼ同じになるよう持ち上げた。

「い、いや！ そんな、そんな赤ちゃんみたいなの……」

美幸の思惑通りに『おねだり』をさせられた真衣だが、美幸の手で穿かされそうになっているのがサイズこそ大人用とはいえデザインも機能も幼児用のトレーニングそのものだとわかると、さすがにすんなりとは受け容れられない。

「いいの、そんな大声を出しちゃって？ ママと真衣ちゃんがこのトイレを随分と長いこと使っているから、外で待っている人たちの内の何人かは変に思っているかもしれないわね。」

そんな悲鳴をあげたりしたら警備員さんが強引に扉を開けて入ってくるかもしれないわよ。そんなことになって恥ずかしい目に遭うのは誰かしらね」

「で、でも……」

「でも、ま、真衣ちゃんがそんなにトレーニングパンツが嫌なら、別にいいのよ。どうしてもトレーニングパンツを穿きたくないんだったら、代わりにこれでもいいんだから」

激しく首を振る真衣の様子に美幸は苦笑交じりに言い、ふたたび自分のバッグに右手を差し入れ、淡いピンクの厚ぼったい下着のような物を掴み上げると、今度はそれをトレーニングパンツの替わりに真衣の目の前に突きつけた。

「それは……」

それは、真衣が夜ごとにお世話になっいて、昨夜は三度もおねしよで汚してしまった紙おむつだった。真衣が朝食を摂っている間に美幸が無断で部屋に入り、パッケージから抜き出してきたのに違いない。

「私、言ったわよね。『赤ちゃん返りしちゃった子でも他人の目を気にしてお出かけの時はおむつを恥ずかしがることがある。だから、家の中じゃおむつ、お出かけの時はパンツにしてあげる』って。なのに真衣ちゃんたら、うちの医院にいるんな介護用の医療を納入してくれる業者さんをお願いしてわざわざ作ってもらった特別のトレーニングパンツをそんなに嫌がっちゃって。だったら、おむつを着ければいいわ。ママ、『お出かけの最中に一度でも失敗したらずつとおむつよ』とも言ったわよね？ だけど、今度のはおしっこを全部おもらししちゃったんじゃない。ちびっちゃっただけ。だから、今回だけは特別におむつは許してパンツにしてあげるつもりだったのに、それをこんなに嫌がるだなんて。ほんと、親の心子知らずとはよく言ったものだわ。真衣ちゃんがこんなに手にかかる子だなんて思ってもいなかったわ。これからどうやって躱け直せばいいのか、ママも頭が痛いわよ。でも、今はそんな



ことを言ってる場合じゃないわね。ほら、ちゃんどあんよを上げてなさい。そんなに嫌なトレーニングパンツじゃなくて、真衣ちゃんが毎晩お世話になっていて大好きになっちゃったおむつだから、おとなしくしてられるでしょ？」

美幸は、真衣の新たな抵抗ぶりに呆れたように言って、改めて真衣の両方の足首を一つにまとめて持ち上げてから、僅かに両足を広げさせた。

「い、いや……お外でおむつだなんて、そんなの……」

真衣はさきほどにも増して激しく首を振り、足をばたつかせた。

「仕方ないでしょ、せっかく用意してあげたパンツを嫌がつてるんだから。だったら、慣れっこになっちゃったおむつの方がいいんじゃないの？」

美幸は紙おむつの股ぐりを内側から指で押し広げるようにして真衣の足首に通そうとしたと、遂に真衣がひつくひつくとしやくりあげ、涙声で訴えかける。

「おむつは嫌。たくさんの人の中でおむつなんて嫌。……パ、パンツの方がまだ……」

「やれやれ、言うところがころ変わるんだから。ま、いいわ。パンツがいいならパンツにしてあげるから、もういちど改めておねだりしてちょうだい」

美幸は紙おむつを引っ込め、再びトレーニングパンツを手にながら言った。

「マ、ママ、真衣、もう我儘言わない。もう駄々なんてこねない。いい子にする。だから、お、おむつななかじゃなくて、パンツにしてちょうだい。真衣、ママが持つて来てくれたトレーニングパンツがいいの。だから、お願い。可愛いパンツを穿かせてちょうだい、ママ」  
股ぐりが幅の広いバイアステープになっていてお尻に可愛いアツプリケをあしらったトレーニングパンツとピンクのパンツタイプ紙おむつ。方が一スカートが捲れ上がって丸見えになっちゃったならどちらも劣らず羞恥の極みで、どちらがマシなどとは決められない。それでも、『おむつ』ではない、トレーニング『パンツ』という名前だけにすぎる思いで、真衣は涙ながらに懇願するしかなかった。

「わかった。じゃ、パンツにしてあげる。でも、今度もおとなしくしてなかったら、その時はお仕置きよ。真衣ちゃんがいい子になれるよう、たっぷりお仕置きしてあげるから、そのつもりでいなさい。わかったわね？」

それこそ、ひとしきり駄々をこねてからやつとのことおとなしくなった直後の幼児に言うように美幸は真衣の耳元に囁きかけて、トレーニングパンツの股ぐりを手の指で押し広げた。

## 《七． ようやくの帰宅、だけど……》

扉を開けて二人が外に出た時には、トイレの順番を待つ客が何人かいた。しかし、「急なことでびっくりしちゃったけど、もう大丈夫よ。パンツは汚しちゃったけど、気にしちゃ駄目よ。もう処置も終わったし、平気なんだから」

と美幸が真衣に話しかける様子に、おそらく娘だろう若い方の女性に予定外の生理が訪れ経血で下着を汚してしまったのを、母親とおぼしき年長の女性が処置してやったのだろうと、自分や身近な者の経験を基に勝手に推測するものだから、不審げな表情を浮かべる者はいなかった。むしろ、いたわりの目で真衣の顔を覗き見る客が殆どだ。

だが、その視線が真衣には痛くてたまらない。「大きなりをしていくせにおもらしでパンツを汚しちゃって、お母さんにパンツを穿き替えさせてもらうだなんて、どんな子なのかしら』そんな目でじろじろ見られているように感じられてならない。しかも、汚物入れには、切れ目の入ったショーツと、高校生である真衣にはおおよそ似つかわしくないお尻拭きが残されているのだ。後からトイレを使った客がそれを見たらどう思うだろう。そう考えると、一刻でも早くこの場から立ち去りたくて仕方なかった。

しかし、いざ、その場を抜け出してホテルのレストランに場所を移しても、気分が晴れることはなかった。三部袖のワンピースになっているスカートの下に、おむつ離れの練習さなかの赤ん坊と同じトレーニングパンツを着けていることを周囲の客たちに勘づかれるのではないかと気が気ではない。その上、普段のショーツは勿論のこと渋々ながらすっかり慣れてしまった紙おむつとも異なるトレーニングパンツの肌触りに絶えず下腹部を撫でさすられていよう、せつかくのランチコースもまるで味がわからないほどだった。

更に、帰り道のことを考えると、言葉では言い表されないほどの不安に胸を締めつけられる。大勢の客が乗り合わせる電車やバスの中、他の客の荷物がスカートの裾に引っかかったり、急ブレーキのせいで真衣自身が尻餅についてスカートが捲れ上がってしまうかもしれない。そのせいでスカートの下に着けている恥ずかしい下着のことを周囲の乗客に知られでもしたら。しかも、次の駅なり停留所に着くまで、逃げる場所はないのだ。

そんな真衣の胸の内を見透かしたかのように美幸が口にしたのは「荷物も増えたから帰りはタクシーにしましょうか」という言葉だった。

思いがけないその提案を真衣が拒否するわけがなかった。

だが、美幸にしてみれば、帰り道にバスや電車ではなくタクシーを選んだのは、真衣のことを気遣ったことでは決してない。それさえも、自分の企みを進めるための手段の一つにすぎなかったのだ。

タクシーに乗り込んだ美幸は佐藤家の住所とおよその場所を要領よく運転手に伝えた。間

を置かず運転手からは、「まず国道××号線を辿って、途中から県道××号線、それから、広域道路の××号線に移ればいいですね」と確認を求める返答があったのだが、それに対して美幸は首を横に振り、「国道から県道に入った後、私が道順を指示するわ」と応じた。

言った通り、国道から県道に枝分かれした所で美幸は改めて道順を指示したのだが、それは、運転手が想定していたコースに比べるとかなりの遠回りだった。「本当にいいんですか？」と問いかける運転手に対して美幸は「いいのよ、この先に有名なケーキ屋さんがあるから寄って帰りたいの」と応じたのだが、それでようやく遠回りの意味を理解した運転手は謎が解けてほっとしたような表情を浮かべ、その後は、美幸が幾ら遠回りになりそうな道順を告げてもわざわざ聞き返すことなく指示通りに車を走らせることに専念するようになった。実際、ケーキを買った後も美幸は、やれ「慣れない土地に赴任する優さんに持たせる胃腸薬を買って忘れていた」と言っては大通りから外れてドラッグストアに寄ってみたり、「新しいネクタイじゃないといけないかしら」と言っては全国チェーンの衣料品店に寄ってみたり、「ボタンが外れかけているカッターシャツがあつたわね」と言っては手芸品店に寄ってみると、いろいろ理由をつけてはわざとのように遠回りの道を選んで運転手にあれこれと指示を出し続けた。

だが、美幸が遠回りの道を選んでいるのは、『わざとのように』などではなく、『わざと』だった。その狙いは、帰宅するのに要する時間を長くして、その間に、真衣の尿意を我慢できなくなるほどに高めるところにあった。紙おむつが吸収したおねしょの量や、家を出てから家電量販店でのおもらしまでに経過した時間、これまでの問診の内容などから、真衣の膀胱の容量がどの程度なのか、そして、真衣がどれくらいなら尿意に耐えられるのかといったことについて、美幸には、およその見当がついていた。それを基に、タクシーに乗っている時間を調整して、真衣に車内でおもらしをさせるのが美幸の魂胆だったのだ。

今朝までに三度も美幸の手でおむつを取り替えられ、家電量販店ではトイレに入る前にシヨーツを濡らしてしまい、トイレで美幸によってトレーニングパンツに穿き替えさせられた真衣だから、もう既に美幸には頭が上がりえない状態だった。その上、更に、タクシーの運転手という見ず知らずの他人の目がある前でパンツを汚すような事態になりでもしたら、これから先、真衣は美幸の言うことに僅かでも逆らうことができなくなるに違いない。

それこそが美幸の狙いだった。

そう。自分の言うことはいやでも従わざるを得なくなるような状況に真衣を追い込むことこそが、美幸の企みだったのだ。

見た目は優しそうな女医。だが、彼女の行動を律しているのは、理性などではなく、自分の子供を持つ夢を諦めたせいで奇妙に歪み肥大化してしまった異形の母性本能だった。尋常ならざる母性本能という糸によって絡め取られ気儘に動かされる狂おしく哀しい操り人形。それが、美幸の正体だった。

\*

道が空いていれば日ホテルから佐藤家までは車なら四十五分ほどの距離だ。それが、美幸

の指示する遠回りのせいで、途中に立ち寄った店での買い物に要した時間も合計すると、もうかれこれ二時間ほどになる時点で、ようやく最寄りのバス停の前に差し掛かろうかというところだった。

美幸と並んで後部座席に座っている真衣の表情が微かに変わったのは、二十分ばかり前のことだった。それが今は、見るからにこわばった顔つきで、太腿の上に置いた掌をぎゅっと握りしめ、両腕を小刻みに震わせている。呼吸も浅い上に荒く、肩で息をするのがやっとならぬ風情だ。

「お嬢さん、大丈夫ですか？ 気分がお悪いようですけど、もしも車酔いだったら、どこか木陰に車を停めましょうか？」

バックミラー越しに真衣の異変に気づいたのだろう、運転手が心配そうに言った。

「いえ、大丈夫です。もうすぐ家に着くから、車からお降りてお布団で休ませた方がいいでしょう。このままお願いします」

美幸は軽くかぶりを振って応じ、はい承知しましたと運転手が応えるのを聞きながら、「真衣ちゃん、大丈夫？ 久しぶりの人混みで疲れちゃったのかな」

といかにも気遣わしげな様子で話しかけ、真衣の細い肩を抱き寄せた。

だが美幸は、真衣の異変の原因が疲れなどでないことを充分に承知している。ホテルでトイレを済ませ、タクシーに乗って、かれこれ二時間近い。もうそろそろ、我慢の限界も目の前に迫っている頃だ。

「だ、大丈夫……」

こわばった顔ながら気丈に応じる真衣。

しかし、大丈夫でないことは明かだ。美幸は、ついさつき真衣が妙な吐息を漏らすのを聞き逃さなかった。

「本当に大丈夫？」

美幸は体温を調べてるふうを装って真衣の額に自分の額を押し当て、そのまま、真衣の体で自分の体でバックミラー越しの運転手の目から覆い隠すような姿勢を取ると、右手をスカートの中にもぐりこませた。

「大丈夫なの、おしっこは？」

ついさつきまでのよく通る声とは打って変わって、美幸は真衣の耳元に唇を寄せ、甘ったるい声で囁きかけて、スカートの中にしのばせた右手でトレーニングパンツの表面をなぞった。

「……大丈夫です……」

真衣は弱々しい声で繰り返し答えた。

「確かに大丈夫みたいね」

トレーニングパンツの表面が濡れていないのを確認した美幸はにこりと笑って言った。

「……大丈夫に決まって……」

真衣は顔をこわばらせつつも安堵の声を漏らしたが、それまで表面をなぞっていただけだった美幸の手が股ぐりを広げてトレーニングパンツの中に差し入れられる感触に、途中で言葉が失ってしまう。

「私が大丈夫って言ったのは、おしっこが表面までは沁み出していないってことよ。さすが、特別に作ってもらっただけあって、素材も縫製もしっかりしているトレーニングパンツだこと。でも、内側はびっしょりね。吸水パッドがこれだけ濡れているとすると、穿いているのが普通のパンツだったら、今ごろは座席もぐっしょりで運転手さんに迷惑をかけていたところね」

純白のバイアステープで縁取られた股ぐりを押し広げてトレーニングパンツの中に指を差し入れるや否や、美幸はさも呆れたように言った。

「でも、この様子なら、お家に着くまでは表に沁み出してこなさそうだし、匂いが漏れ出すこともなさそうね。もつとも、真衣ちゃんがこれ以上はおしっこを出しちゃわないならっていう条件付きだけど」

「……」

一瞬でもおもらしの事実をごまかしおおせるかもと期待した直後だけに、真衣の落胆は余計にひどかった。腕のみならず肩まで小刻みに震わせ、唇をぎゅつと噛みしめて屈辱に耐えるしかない。

「でも、気にすることはないのよ。そのためのトレーニングパンツなんだから。ね、わかったでしょ？ おむつ離れのできない赤ちゃんの真衣ちゃんには、お出かけの時も、まだ普通のパンツは早いよ。普通のパンツはおむつを外すお稽古を済ませてから。それまでは、ちよつとくらいちびつちやつても平気なトレーニングパンツにしようね。念のために、業者さんにお願ひしてたくさん作っておいてもらったから、いくら濡らしても大丈夫よ」

美幸は笑顔のまま言った。

そのわざとらしいにこやかな笑みが却って真衣の恥辱をこれでもかと煽る。

「真衣ちゃんはこれからずつと、おもらしとおねしょが治るまでは、お家にいる時はおむつ、お出かけの時はトレーニングパンツよ。わかったわね？ 三度もおむつを取り替えてもらって、二度もパンツを濡らしちゃったんだから、わからないとは言わせないわよ。さ、わかったら、ちゃんとお返事しようね。いい子の真衣ちゃんは、上手にお返事できるよね」

そこまでは声をひそめて囁きかけていた美幸だが、真衣が押し黙ったままなのを見て取ると、トレーニングパンツの様子を探っていた手を元に戻し、真衣の体に覆い被さるような姿勢を取っていたのをきちんと座席に座り直して、運転手の耳にもはっきり届くよう

「じゃ、お家に帰ったらちゃんとしてあげる。もうすぐだから、それまで我慢するのよ」と声を張り上げて言った。

お家に帰ったらちゃんとしあげる。それまでは我慢するのよ。運転手は、その言葉を『気分が悪いようだけど、お家で手当てしてあげるから、それまで頑張って我慢してね』という励ましの意味にとらえただろう。しかし、実のところ美幸は『お家に着いたらパンツを取り替えてあげるから、それまで、これ以上おしっこを出しちゃわないよう我慢してなさいよ』と言いつけていたのだ。

もちろん、真衣にも本当の意味はわかってる。わかった上で、運転手の手前、何も返事をしないわけにもゆかず、

「……うん、わかった。お家に着いたらちゃんとしてね」

と蚊の鳴くような声で応えるしかなかった。それが、『これからずっと、お家にいる時はおむつ、お出かけの時はトレーニングパンツ』と決めつける美幸の言葉に従いますと誓ったのと同じ意味合いを持つことを痛いほどわかりつつ。

運転手が時おりバックミラー越しにこちらの様子を覗う中、おしっこでトレーニングパンツの内側をびしょびしょにしてしまい、運転手に本当の意味を知られたわけでないとはいえず、美幸からの羞恥と屈辱に満ちた指示を受け容れると応えてしまった真衣。その時こそが、真衣が美幸の手に随った瞬間であり、美幸が『娘』という名の生きた愛玩人形を手に入れた瞬間だった。それも、本人は気づいていないが、タクシーの運転手という証人を立ち会わせた上で。

\*

ドアが開くと同時にシートベルトを外すのもどかしくタクシーをおりた真衣は、下腹部に余計な力を入れないよう注意しながら慌てて歩道を横切り、門扉の前に歩み寄った。

一方、美幸はからかうように

「ほらほら、真衣ちゃんたら、そんなに急いだりしたら、ころんしちゃうわよ。まだあんよが上手じゃないんだから、ママがお手々を引いてあげるのを待ってあげればいいのに」と言いながらわざとゆっくり歩いてくるのだが、そんな言葉、もちろん真衣の耳には届いていない。

真衣は大急ぎでポーチから取り出した鍵で門扉を開け、顔をひきつらせて玄関に向かった。門扉から玄関までは僅か数メートルという距離だが、玉砂利を敷きつめた和風仕立ての通路になっているため、やや足場が悪い。そこを限界ぎりぎりの尿意をこらえつつ、そのくせ下腹部に余計な力を入れないよう注意しながら歩いて抜けなければならぬのだから、なんでもない時から想像もできないほどの苦痛だった。

「ほら、もう少しだから頑張つて。おむつ離れのお稽古をする真衣ちゃんだもの、あんよのお稽古もちゃんとしなきゃ、姉ちゃんになれないのよ。ほら、あんよは上手」

それこそ、ようやく一人であるよができるようになったばかりの幼児がお尻を後ろに突き出しぎみにしてよちよちと歩いて行く姿そのまま、なんとも覚束ない足取りで玄関を指す真衣の後ろを、つかず離れずの距離を保ってつき従いながら、美幸は両手を打ち鳴らして囁きたてた。

そんな子供扱いは屈辱だが、今は尿意をこらえてトイレへ行くことに神経を集中するしかない。真衣は肩で息をしながら、玄関のドアを睨みつけて必死の形相で玉砂利を踏みしめた。しかし、皮肉なもので、その必死さが仇になってしまう。玄関のドアばかり見えて足元への注意が疎かになったせいで、普段は何気なく踏んで歩いている飛び石の存在にまるで意識がまわらなかつたのだ。

周囲の玉砂利に比べて一段高くなっている飛び石に躓いた真衣は、体のバランスを崩して前のめりになる。それに気づいた美幸がたつと駆け出し、前方にまわりこんで、今にも倒れそうになっている真衣の体を受け止めた。そのおかげで、玉砂利の通路に倒れることもなく、

膝を擦り剥くことも免れた真衣。

だが、全てが無事というわけではなかった。

倒れまいとして余計な力を入れてしまったのと、美幸に抱きすくめられた時の衝撃とで、それまで我慢に我慢を重ねていた尿意にとうとうこらえきれなくなつて、堰を切つたようにおしっこを溢れ出させてしまったのだ。

それまでも或る程度の量のおしっこを吸収していたトレーニングパンツの内側は、それ以上のおしっこを吸い取ることではできなかった。しかも、我慢の限界を超えて溢れ出したおしっこは、『迸り出る』という表現がふさわしいほどの勢いで流れ出るために、吸水量にまだ余裕があったとしても吸い取る速度が追いつかず、結局は外に漏れ出していたに違いない。

普通のショーツを穿いておもらしをした場合、おしっこはクロッチ部からほぼ真下へ滴り落ちるのだが、今の真衣が穿いているのは、表面が防水生地になっているトレーニングパンツだ。内側の吸水パッドに吸収されなかったおしっこは、表地に沁み出すこともできず、パイアステープで縁取りされた股ぐりと太腿の皮膚との間の僅かな隙間から漏れ出すしかなかった。そのため、おしっこは中央付近から滴り落ちるのではなく、太腿を濡らしなが



ら、両脚の肌に沿って伝い落ち、膝といわずくるぶしといわず脚全体にまわりつくようになり、最後はソックスを濡らしつつ、ブーツの内側に滴り落ちることになる。

おしっこが真下に落ちるだけなら、脚を開いて立っていれば、雫が地面に当たって周囲に飛び散る飛沫で足元が少し濡れるだけですむかもしれない。しかし、トレーニングパンツの股ぐりから漏れ出るおしっこは脚全体を濡らした上、ブーツの内側に溜まって爪先までびしょじよにしてしまう。そのせいで真衣は、自分がおもらしをしてしまっている最中なのだという意識を植え付けられてゆくのがあった。

\*

内側におしつこの溜まったブーツを美幸の手で脱がされ、玄関の上がり框に広げたバスタオルの上に立たされ、やはりこれも美幸の手によって五分袖のカーデガンと三分袖のワンピース、ぐつしより濡れたソックスとトレーニングパンツを剥ぎ取られてブラスリップ一枚だけという姿に剥かれた真衣は、浴室へ追い立てられ、シャワーを浴びなさいと命じられた。しかも、おっこの雫が少しでも残らないよう下腹部は特に念入りに綺麗にしなさいよと付け加えられて。

それに逆らったりしたら、美幸の手で強引に浴室へ連れて行かれ、無理矢理体を洗われることになるのは明かだった。それも、自分では満足に体を洗うこともできないような小さな子供扱いされて、必要以上に入念に。

それを避けるために渋々ながら自ら浴室に足を運んだのだが、頭からシャワーを浴びているうちに力ない溜息を何度もついでしまうのをどうしても止められなかった。ひよつとしたら、頬から顎先を伝い流れて胸元に滴り落ちる湯の中には、悔し涙の雫も混ざっていたかもしれない。

美幸の言いつけに従ってたっぶり時間をかけてというよりも、いささか当てつけがましく半ば意地になって延々とシャワーを浴び続けた真衣が浴室のガラス戸を引き開けたのは、浴室に追い立てられてから小一時間も経ってからのことだった。

もういちど溜息をつき、浴室に隣接する脱衣場に足を踏み入れた真衣は、床に置いてある脱衣籠を見て僅かに首をかしげた。脱衣籠には、浴室へ入る前に脱いだブラスリップの代わりに、ナイティが入っていた。おそらく、真衣がシャワーを浴びている間に美幸が部屋の整理箆箆から持ってきたのだろう。勝手に部屋に入られていい気はしないものの、三度もおむつを取り替えられ、二度もおもらしの処置をされた今となっては、それを拒む気力もないし、抗議したとしても逆にあれやこれやと反論されて結局は美幸の言いなりになってしまうのは目に見えている。だから、それは仕方ないといえれば仕方ないところだ。

真衣が訝しんだのは、そのことではなく、脱衣籠に入ってるのがナイティだということに對してだった。まだ日の高い午後四時。夜でもないのに、いくらなんでも、ナイティに着替えるにはまだ早い。



## 《八・変わり果てた整理箆筒》

真衣が脱衣籠に手を伸ばそうともせず首をかしげていると、浴室のガラス戸を開ける音に気づいたのか、美幸が姿を現した。

「シャワーは終わつみたいね。ちゃんと時間をかけてお利口さんだったわね、真衣ちゃん。でも、どうしたの？ 何をそんなに考え込んでいるのかしら？ 早くパジャマを着ないと風邪をひいちゃうわよ。あ、そうか。真衣ちゃん、ママにさせてほしいのね。そうよね、パンツはママが穿かせてあげたんだから、パジャマも着せてあげなきゃいけないわね。でも、それならそう、おねだりしてくればいいのに。電器屋さんのトイレでおねだりしたみたいに可愛らしくおねだりしてくればいいのに」

外出着からエプロン姿に着替えた美幸は、体にバスタオルを巻き付けただけの格好で脱衣籠の前に佇んでいる真衣を、相変わらず子供扱いして言った。

それに対して真衣はなんとも言えない嫌な予感を覚え、弱々しい声で訊き返す。

「どうして？ どうして、ナイティなの？ こんな時間にどうしてナイティなの？」

「どうしてって、だって、真衣ちゃんは毎晩これと同じパジャマを着て寝ているでしょ？ ボトムスとセットになってるパジャマは窮屈だし、丈の長いネグリジェは手間がかかるから、丈の短いこんなパジャマを着るんだって話してくれたじゃない。——ほら、これを着ける時に手間がかからなくて便利だからって」

真衣の問いかけに美幸はにんまり笑い、脱衣籠に入れておいたナイティを持ち上げると、その下に折りたたんで置いてある厚ぼったい下着のようなものを指差した。

それは、真衣が毎晩ショーツの代わりに身に着けている紙おむつだった。

「ど、どうして、こんな物を……」

真衣は両目を見開いて美幸に尋ねた。いや、尋ねたというよりも、呻いたといった方が正しいだろうか。

「だって、『お家にいる時はおむつ』って約束したでしょ？ それに、真衣ちゃん、タクシ—の中でママにお願いしたんじゃないか？ 『お家に着いたらちゃんとしてね』って。だから、恥ずかしい粗相をしても大丈夫なようにちゃんとしてあげるんじゃない」

「そんな……」

真衣は首をぶるんと振った。

「ママと真衣ちゃんが話していたこと、タクシ—の運転手さんにも聞こえていた筈よ。タクシ—会社の電話番号と運転手さんの名前はちゃんと記録してあるから、今から電話して確認してみましようか？ 真衣ちゃんにおねしょ癖とおもらし癖があることをきちんと話した上で、そのことについて親子で話し合っていたんですよ。そしたら私の提案を娘が快く受け容れてくれたんです。でも娘だったらいざお家に帰ったら駄々をこねるんですよ。運転手さん、娘を説得するための証人になってもらえませんか。娘はあの時、『お家に着いたらちゃんとしてね、ママ』って言ってくれましたよ。それを証言してくれるだけでいいんです。ええ、

あの時、私はおむつを勧めたんですけどよ。——そうお願いしましよるか？」

美幸はこともなげに言った。

真衣の胸がどきんと高鳴る。あの時の運転手と再び顔を会わせることはまずないだろう。けれど、美幸からそんな話を聞かされたら、真衣の顔や住所も含めて、好奇心いっぱい、面白い出来事があったんだけどさと、同僚たちに吹聴してまわるかもしれない。そんなことになったらと思うと、居ても立ってもいられない。

「い、いやあ！ 昼間からおむつだなんて、そんなの、そんなの……」

どう応じていいのか咄嗟には判断がつかず、真衣は脱衣場からたつと駆け出した。

向かう先は自分の部屋。とりあえず、まともな格好に着替えなきゃ。いつものショーツを穿いて、いつもの洋服を着て。いろいろ考えるのはそれからよ。今の真衣の頭の中をよぎるのはそんな思いだけだった。

\*

「そんな、そんなことって……」

整理筆筒の引出に手をかけたまま、真衣は呆然とした表情で立ち尽くしていた。

そこへ、少し遅れて部屋に入ってきた美幸が背後から声をかける。

「どうしたの、真衣ちゃん？ 何か困ったことでもあるの？」

「どうしたのって。これ、先生……マ、ママがしたんでしょ!!」 引出の中身を入れ替えたの、ママなんでしょ!!」

のろのろと振り返った真衣は、唇を震わせて美幸に言った。感情にまかせて食ってかかりたいところだが、これまでの出来事で立場の差を身にしみて痛いほど思い知らされてきた真衣だから、悲痛な呻き声をあげるのが精一杯だ。

一方、美幸は落ち着き払った様子で、確認するように引出の中を覗き込むと、しれっとした顔で言った。

「ええ、そうよ。引出の中に入っていた要らない物を処分して、その代わりに、いつも使う物を入れておいてあげただけけど、それがどうかしたのかしら？」

「い、要らない物って……ここに入っていたのは真衣のショーツなのよ」

真衣は、信じられない思いで聞き返した。

だが、美幸はやはり平然としたままだ。

「ええ、入っていたのは真衣ちゃんのパンツだったわ。——だから、要らない物なのよ」

美幸は言葉の最後の方を強調して言い、自分の腰に手の甲を押し当てて続けた。

「真衣ちゃんがシャワーを浴びている間に袋に詰め込んでゴミ置き場まで持って行ってあげたの。あ、でも、心配することはないわよ。時々、変な男の人がゴミ置き場を漁って若い女の子の下着をみつけると家に持ち帰っていかかわしい行為に使うらしいって聞いたことがあるから、袋に詰める前にハサミで念入りに切り刻んでおいてあげたの。袋の外からぱつと見ただけじゃ元は下着だってわからない筈だから、真衣ちゃんのパンツが変な男の人に拾われちゃう心配はしなくていいわ」

その説明に、真衣は言葉を失った。

知らぬ間に勝手に下着を処分されてしまったこともショックだが、その下着が全てハサミで切り刻まれてしまっているという事実は、それに倍する衝撃だった。この地域のゴミ収集日は月曜日と水曜日。今ならまだ、袋に詰めて捨てられてしまったショーツを回収することもできる。しかし、いざ回収できたとしても、原型をとどめぬほどに細かく切り刻まれてしまっているのは、穿くことができない。美幸は、変質者に下着を持ち帰られないようにするためハサミを入れたと言った。だが、それが実は、真衣に二度とショーツを穿かせないためなのは明かだった。

「……」

真衣は無言で何度も小さく首を振り、諦めきれない様子で、それまで自分のショーツが入っていた引出の中に改めて目を向けた。

だが、今そこにおさまっているのは、美幸が言うところの『いつも使う物』——何枚もの紙おむつとトレーニングパンツばかりで、その段だけを見れば、整理筆筒の引出というよりも、ベビー筆筒の引出と見紛わんばかりだった。

しかも、美幸が真衣の部屋から処分した『要らない物』はショーツだけにとどまらなかった。

「あ、そうそう。先に言っておくけど、洋服の中でも、おむつやトレーニングパンツの上に穿くと窮屈になりそうなボトムス類も処分しておいてあげたわよ。おむつを取り替えたりトレーニングパンツを穿き替えたりするには、やっぱり、スカートの方が手間がかからなくていいしね」

こともなげにそう言う美幸の言葉を耳にするなり、真衣は、おむつとトレーニングパンツでいっぱいになった引出を押し入れ、ボトムス類をしまつてある段の引出を慌てて引き開けた。

だが、美幸の言う通り、そこに入っている筈のデニムパンツやサロペット、キュロットに至るまで、パンツ系やズボン類のボトムスは一枚残らず姿を消していた。このぶんなら、わざわざ確認しなくても、クローゼットにしまつてあるコットンパンツやちよつとお洒落をしたい時に穿く細身のスラックスもなくなっているのは想像に難くない。

これで、真衣は、勝手に家を飛び出すことが絶対にできなくなつてしまったわけだ。紙おむつやトレーニングパンツを拒否して近くの衣料品店へショーツを買いに出ようにも、ノーパンにスカートで外出できる筈がない。たとえショーツを身に着けていなくてもジーンズなら外を歩き回ることもできるのだが、パンツ類まで処分されてしまったとあつては、そうすることもできないのだから。

「……」

真衣は無言でその場にへたりこんでしまった。

美幸は、その目の前に、脱衣場から持ってきた脱衣籠を押しやり、

「さ、いつまでもバスタオルだけじゃ風邪をひいちゃうわ。ママがちゃんとしてあげるからおとなしくしていてね」

とわざとのように優しく言って、真衣が体に巻き付けているバスタオルに指をかけた。

「……お、お父さんが……」

美幸の耳に真衣の力ない声が届いた。

「え？ お父様がどうかしたの？」

美幸はバスタオルをそつと広げながら聞き返した。

「……もうすぐお父さんが帰ってくる。なのに、おむつだなんて……」

「あ、そうか。おむつのことをお父様に知られるのが恥ずかしいのね。でも、大丈夫よ。真衣ちゃんがシャワーを浴びている間に連絡があつて、会議が思ったよりも長引いているんですって。どうやら夕方までかかりそうで、ついだから、その後、激励会を開こうかって専務さんがおっしゃってるとかで、今夜は遅くなるらしいわ。お父様が帰ってきた頃には真衣ちゃんはお布団の中だから、おむつのことを知られる心配なんてしなくていいのよ」

美幸は真衣をすっかり丸裸に剥いてしまいながら、くすりと笑って言い聞かせた。

\*

美幸に抵抗することもできず、とうとう紙おむつに丈の短いナイティだけという羞恥に満ちた姿を強要されてしまった真衣。

だが、美幸はまだ納得する様子を見せず、いったん自分の部屋に姿を消した後、しばらくしてから戻ってきた。

「それは……」

部屋に戻ってきた美幸が目の前に差し出した物を見て、真衣はなんと応じていいかわからなかった。

「真衣ちゃん、おねむの時は布団にもぐりこんでお腹が冷えないようにしているから丈の短いパジャマでも大丈夫って言ってたでしょ？ でも、おっきしている間はお布団にくるまることもできないわねよ。だから、これを持ってきてあげたの。トレーニングパンツと同じ業者さんに作ってもらったんだけど、昨日運送屋さんがこのお家に運んでくれた荷物の内どのダンボール箱に入っているのかわからなくなつて、探すのに手間取っちゃったけどね」

ナイティを着せられ紙おむつを着けられた時の姿勢のまま部屋の中ほどに立ちすくんでいる真衣の目の前で美幸がひらひら振ってみせたのは、レモンイエローのニットでできたオーバーパンツだった。トレーニングパンツのようにアニメキャラのアップリケがあしらつてあるわけではないものの、お尻の丸みに沿つて三段の飾りレースが縫い付けてある、ぱつと見には幼児がおむつの上に穿くのとまるで変わらないほど可愛らしく仕立てられたニットのオーバーパンツだった。

「それに、これなら、恥ずかしいおむつも隠れちゃうでしょ？ おむつの上にこれを書いておけば、誰も真衣ちゃんのこと、おむつの赤ちゃんだなんて思わないわよ。一人でトイレに行けるパンツのお姉ちゃんだって思ってくれるわよ。だから、さ、ころんしちゃうわないうママの肩にお手々を置いて、あんよを上げてちょうだい」

美幸は真衣の目の前で膝立ちになり、自分の肩をぼんと叩いてみせた。

これを書いていれば真衣ちゃんのこと、誰もおむつの赤ちゃんなんて思わないわよ。美幸はそう言った。(でも、私は、パンツのお姉ちゃんどころか、高校生なのよ) 真衣は叫びだしたかった。だが、一晩に三度もおむつを汚しちゃったのは誰だったかしら? お出かけの間に二度もおしっこをちびちびやったのは誰だったかしら? 玄関の前でももらしちゃうたのは誰だったかしら? そう問い詰められれば一言も反論できないのは自分でも痛いほどわかってる。だから、見ようによっては紙おむつそのものよりもずっと恥ずかしいオーバーパンツを穿かされそうになっても、惨めな思いで胸を見たしながら美幸の指示に従うしかなかった。従って、美幸の肩に体重を預け、おずおずと右脚を床から浮かせるしかなかった。

右、左と順番に足を上げさせて股ぐりを通し、そのまま手早く引き上げて紙おむつの上に乗せ、美幸が穿かせたオーバーパンツは、おへソの少し上までが隠れるほどの股がみと、紙おむつの腿のギャザーがすっぽり隠れるくらいのサイズに仕上がっている上、股ぐりのゴムがちょっときつめで太腿にびっちり食い込むような感じの穿き具合になっているため、その中に着けている紙おむつと相まって、真衣のお尻が更にぶっくり膨らんで見えた。しかも、真衣が足を動かすたびに三段の飾りレースがふわふわ揺れるものだから、まるで、赤ん坊のお尻そのままだ。

「うふふ。おむつだけの時よりもずっと可愛らしくなっちゃったわね。全身を写さないでこのお尻だけを写した写真を誰かに見せたとしても、それが女子高生のお尻だなんて思う人は一人もいないんじゃないかしら」

美幸は、所在なげに佇む真衣の下腹部を、床に膝立ちになった姿勢のまま斜め下から見上げ、ふるふる震えるお尻をオーバーパンツ越しにぼんと叩いた。

そうして、今度はエプロンのポケットから真新しいソックスを取り出すと、オーバーパンツをそうしたのと同じように真衣の目の前で振ってみせた。

「あと、あんよから体が冷えちゃうといけないから、これも履いておこうね。タクシーで帰る途中、手芸品のお店に寄ったでしょ? カッターシャツのボタン付けに糸を買うためにたまたま立ち寄ったあのお店、材料だけじゃなくて、出来合いの可愛いグッズも置いてあったのよ。その中に真衣ちゃんに似合いそうなのがあったから買ってきちゃったの」

美幸が手にしたのは、真衣がおむつの上に穿かされたオーバーパンツよりも幾らか淡い黄色の細めの毛糸でふくらはぎくらいまでの長さに編み込んであって、くるぶしにあたる位置にピンクのサクランボ形のボンボンをあしらった、見るからに可愛らしいソックスだった。

美幸はそのソックスを『たまたま立ち寄った』店で買ったと説明した。しかし、美幸が帰り道で何軒もの商店に立ち寄ったのは、決して『たまたま』などではない。前述した通り、それは、運転手にわざと遠回りの道順を指示するための口実だった。

しかし、実は、単なる口実だというわけでもない。海外出張に出る優のための買い物という名目こそ口実に過ぎなかったが、何軒もの店に立ち寄ったのには、真衣のおもらしを誘発するための時間稼ぎというどす黒い目的の他に、真衣をますます子供扱いするための道具を買い揃えるためという更に裏の目的がひそんでいたのだ。このソックスにしても、ボタン付

け用の糸を買いに入ったついでなどではなく、その手芸品店ではサンプルを兼ねた出来合いのニット製品、とりわけ子供用の可愛い衣類も数多く販売していることを予め調べておいた上で立ち寄って購入したものだし、他に立ち寄ったドラッグストアやホームセンターでも、真衣を小さな子供のように扱うための道具や小物を手に入れていた。

そういった小物類を購入する時、真衣が店内までついてきていたなら、それが何のための物かおおよその見当がついて羞恥にまみれた顔になっただろう。そんな表情の変化を眺めて楽しむこともできるし、もしも真衣がタクシーの中に残ったとしても、帰宅してからいざその恥ずかしい小物類を使わされる運びになって、「あの時、どうしても一緒に店に入らなかったんだらう。そうしていればこんな物は買わないよう説得できたかもしれないのに」という後悔の念で胸をいっばいにするにちがいない。その屈辱の表情を眺めるのも一興だ。いずれにしても、美幸は少し意地悪な悦びに心疼かせることができるのだった。

そして今、美幸の目の前で、遠回りした帰り道の途中タクシーから一度もおり立たなかった真衣が、あからさまな羞恥と屈辱に身悶えしていた。

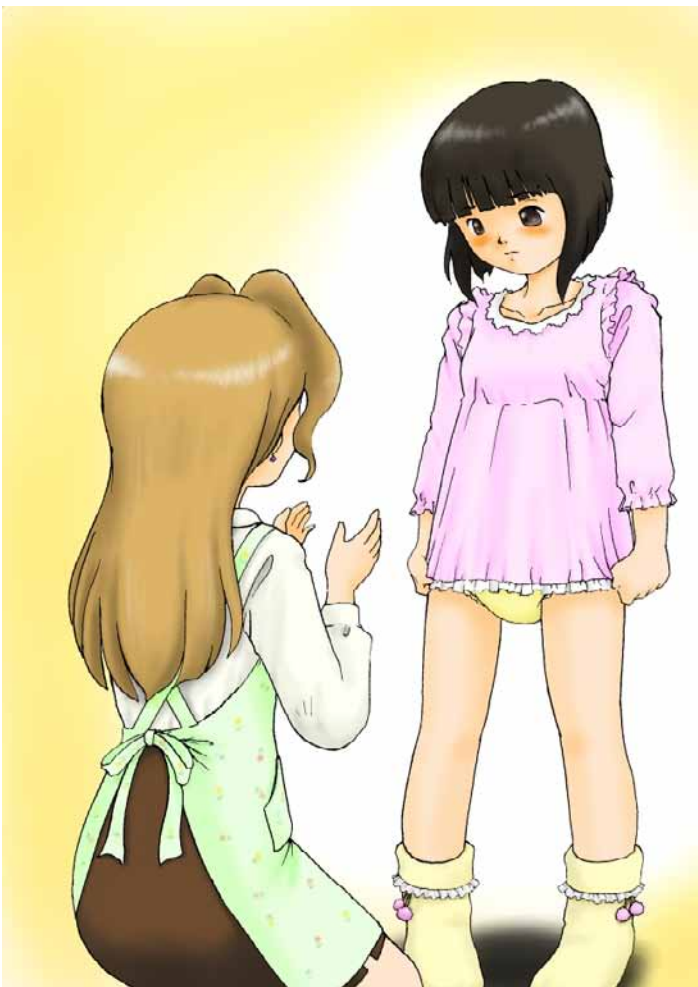
だが、それは、単に美幸と一緒に店内に入らなかったことを後悔しているだけではなく、助けを求めて美幸のもとを訪れてしまったこと、美幸をこの家に迎え入れてしまったことそのものを心から悔いているのかもしれない。なかった。

## 《九．お家にいる時は》

オーバーパンツを穿かされる前から感じ始めていた尿意は、美幸の手でニットのソックスを履かされている間に急に強まってきた。学校では休憩時間になるたびにトイレへ行かないと不安になり、美幸との外出でわかったように二時間くらいしかおしっこを我慢できない真衣だが、長めのシャワーと、脱衣籠に用意されていた予想外の衣類のために着替えに時間がかかったせいで、玄関前でしくじってしまった後、もう既に一時間半ほどが経過していた。しかも、ただでさえあと三十分くらいしか我慢できないところにもってきて、バスタオル一枚だけという格好で長い間いたため体が冷えて、限界は目前に迫っている。本当なら、そうなる前にトイレへ行かせてくれるよう訴えるところだが、紙おむつに続いてオーバーパンツ、ニットのソックスと、真衣を子供扱いするための小道具を美幸から次々に強要され続けたため、ついつい言い出しそびれてしまったのだ。

当然ながら、真衣の尿意が次第に高まってきている様子は美幸も手に取るように見透かしていた。しかし美幸は、そんなことにはまるで気がついていないふりをして、真衣の尿意がもっと強まるのをひそかに待っていた。そして今、いよいよ限界が近いことを冷徹な目で見て取り、それまでも増してねっとりとならぬと攻め立てにかかろうと心の中で舌なめずりをしてるところだった。

吸水帯を中心にふくら膨れた紙おむつをすっぽり包み込み込んでお尻をまん丸に見せると共に股ぐりが太腿にぴっちり食い込んだオーバーパンツと、くるぶしの所にボンボンをあしらったニットのソックス。そんな幼児じみた格好を強いられると、同年代の女の子の真衣が着ている丈の短いナイテイは、ややもするとベビー服めいて見える。



「さ、できた。とっても可愛らしくなったわよ、真衣ちゃん。これなら赤ちゃん返りしちゃうのも当たり前かもね」

美幸は、診察室で顔を会わせた時の制服姿と比べてひどく幼く見える真衣の姿に満足げに頷いてから、さりげなく言った。

「ところで、おしっこは大丈夫なのかな？ 玄関のおもらしから大分時間が経つけど、まだ我慢できるのかな？」

「……だ、大丈夫……」

美幸の方から問いかけられ、咄嗟にどうしようか迷ったものの、真衣は幾分うろたえぎみにそう応えた。本当はトイレへ行かせてくれるよう懇願したいところだが、なぜとはなしに躊躇われて、まともや言い出しそびれてしまう。

だが、それに対して美幸はくすつと笑うと、

「嘘おっしやい」

と、真衣の返答を言下に否定した。

「え……？」

「そんな嘘をついてもすぐにわかっちゃうのよ。ちよつとした表情の変化とか些細な仕草から子供が何を求めているのかを直感するのが母親なんだから。真衣ちゃんが今なにをしたいのか、私にわからないわけじゃないでしょう？」

「……」

「さ、真衣ちゃんは何をしたいの？」

「……ト、トイレ……」

美幸に促され、真衣は曖昧に答えた。

「そう、トイレに行きたいのね、真衣ちゃんは」

美幸はいかにも納得したといたげに、にこやかな笑みを浮かべた。

そうして、笑顔のまま短く言い放つ。

「でも、駄目よ」

「……!？」

「トイレへ行っちゃ駄目って言ったのよ」

美幸は念を押すように繰り返した。

「……ど、どうして……？」

「だって、真衣ちゃんはおむつを着けているんでしょ？ だったら、トイレなんて行かなくてもいいじゃない。おしっこはおむつの中にしちやえばいいじゃない。現に、毎晩そうしているんだから」

美幸は妖しく瞳を輝かせて言った。

「で、でも……」

そう言ったきり二の句を継げない真衣。

「下の子ばかりに向けられる母親の愛情を取り戻すために赤ちゃん返りしちゃう上の子。そんな子の年齢は、普通は二歳とか三歳、大きくてもせいぜい五歳までってところかしら。そのくらいの年の子だと、欲求をストレートに表現できるのよね。まだ理性なんてまるでないし、



恥ずかしいという気持ちも殆ど持ち合わせていない。だから、下の子みたいに甘えたい、ママのおっぱいを飲ませてくれなきゃやだ、赤ちゃんみたいにおむつをあててほしい、そんな感情を何の遠慮もなくぶつけることができるの」

美幸は真衣の正面に立つと、手早くエプロンを脱ぎ去った。

「だけど、同じように赤ちゃん返りしちやっただのに、真衣ちゃんはそう簡単に欲求を表現できないでいる。ま、それも仕方ないわよね。いくら赤ちゃん返りしちやっただといっても、高校生なんだから。理性とか恥ずかしさとかが先に立つちやっあって、自分の感情を爆発させるなんてこと、そうそう簡単にできるもんじゃやないわよね。——それに加えて、真衣ちゃんの場合は、下の子への嫉妬に起因する赤ちゃん返りじやない。今はいないお母様の愛情を求めているの赤ちゃん返り。欲求を表現しようにも、嫉妬の対象になる下の子がいるわけじゃなく、甘えの対象になるお母様もない」

「……」

「下の子への嫉妬から赤ちゃん返りしちやっただ上の子に対する一番いい対処方法は、思いきり甘えさせてあげることなのよ。その子の気がすむまで、その子の欲求通り、おっぱいを吸わせてあげたり、おむつをあててあげたりという赤ちゃん扱いも含めて、とにかく、存分に甘えさせてあげること。そうすることで、自分も母親に愛されているんだって実感させてあげること。そういうことを続けているうちに、その子の胸の内に溜まっていたもやもやが綺麗に消えちゃうの。つまり、心理学で言うところの『昇華』ってやつね。で、精神的な昇華を経験した子は、今度は逆に下の子のことを信じられなくらい可愛がるようになるのよ。それまでの嫉妬が、昇華というプロセスを経て愛情に変化するって言えばいいかしら」

美幸は、エプロンの下に着ているブラウスのボタンに指をかけた。

「これまで嫉妬の対象も甘えの対象もない真衣ちゃんは、ずっと、中途半端な赤ちゃん返りの状態に置かれていた。下の子を苛めることもできず、お母様にすがりつくこともできない。でも、今は私がいるのよ。私というママがいるのよ。ママに幾ら甘えてもいいのよ。ママは、赤ちゃんみたいに甘えてくれる真衣ちゃんのこと可愛くてたまらないんだから。甘えて甘えて、それで、胸の中のもやもやを消しちゃえばいいのよ」

美幸のはだけたブラウスの胸元からブラジャーが見えた。

「だけど、急にそんなこと言われても、簡単じゃやないわよね。欲求の赴くまま赤ちゃんみたいに振る舞っていいのよって言われても、理性や恥ずかしさが邪魔しちゃうわよね。でも、それじゃ、いつまで経っても中途半端な赤ちゃん返りのままいなきやいけないってことになっちゃうのよ。いつまでも精神的な昇華が訪れないの。——だから、私がきっかけを作ってあげる。真衣ちゃんがどんなに恥ずかしがっても、ママが真衣ちゃんを無理矢理にでも赤ちゃん扱いしてあげる。徹底的に赤ちゃん扱いして、思いきり甘えさせてあげる」

美幸が着けているのは、普通のブラジャーではなく、クロスオープンタイプの授乳用ブラだった。

「だから、おむつなのよ。これからずっと、真衣ちゃんは、お家の中にいる時はおむつの中におしっこをするのよ。おねむの時のおねしょだけじゃなく、おっきの時もおむつにおしっこなのよ。だって、真衣ちゃんは赤ちゃんだもの。まだ当分おむつ離れできない赤ちゃんだ

もの」

美幸は授乳用ブラの右側のカップを下にずらした。

「とはいつても、おねしょとは違って、おつきしている間におむつを汚すのって難しいわよね？ おねしょだったら知らないうちに出ちゃうからいいけど、おつきしている時は出ちゃいそうなのがわかるから、つつい我慢しちゃうわよね。いくら我慢しても最後はどうとう出ちゃうのがわかっていても、でも、我慢しちゃうよね。だけど、おしっこを我慢しすぎるのって体に毒なのよ。だから、いつまでも我慢してちゃいけないの。——真衣ちゃん、ママのおっぱいをちゅべちゅべしながらおねしょしちゃたよね？ だから、今もママのおっぱいを吸わせてあげる。ママのおっぱいを吸って気分が穏やかになったら体から余計な力も抜けておしっこが出やすくなるわよ。だから、さ」

美幸は、形のいい乳房を前に突き出すようにして両腕を広げた。

思わず後ずさる真衣。

だが、目の前に立ちほだかる美幸に気圧されて、それまでも知らず知らずのうちに僅かずつ身を退いていたのだろう、いつのまにか背後にはベッドがあった。

しかし、それにも気づかないまま更に後退する真衣。

と、ベッドの角が真衣の膝の内側に当たり、そのまま、へなへたとへたりこむようにしてベッドに端に腰をおろしてしまう。

その瞬間、真衣の唇が半開きになり、どこを見ているのか、目が虚ろに泳ぐ。

それを見逃す美幸ではなかった。

「お出かけの時みたいにちびっちゃった？」

右の乳房をあらわにしたまま美幸は真衣と並んでベッドに座り、さもそうするのが当たり前と言わんばかりの口調で問いかけた。

「……」

「わかってるわよ。お利口さんの真衣ちゃんは、おしっこがみんな出ちゃわないように、無理しておもらしを途中で止めたのよね？ でも、そんなことばかりしてちゃ体によくはないのよ。お出かけの時はパンツだったし、みんなに見られちゃうから途中で止めなきゃいけなかったけど、今はおむつだし、一緒にいるのはママだけ。だから、出しちゃっていいのよ。出しちゃっても、ベッドも床も平気なの。だって、おしっこが漏れちゃうパンツじゃなくて、今はおむつだもの。お家の中にいる時はおむつだもの」

美幸は、レモンイエローのオーバーパンツの上から真衣の股間をぼんと叩いてから、再び両腕を広げ、真衣の体を抱きすくめた。

「でも、出ちゃわないよう、つつい我慢しちゃうのね。だから、ママのおっぱいをちゅべちゅべすればいいのよ。おねしょの時みたいに、ママのおっぱいを吸いながらおしっこを出しちゃえばいいのよ」

美幸の腕から逃れようと身をよじるたび体に余分な力が入って、却っておしっこが止められなくなってしまう。

遂に真衣は、美幸のなすがまま、豊かな髻に顔を埋め、ぴんと勃った乳首に唇を押し当て

させられてしまった。

「いいのよ、それで。さ、たっぷり吸いなさい。真衣ちゃんだけのおっぱいなんだから、遠慮なんてしないでいいのよ。下の子と取り合いなんてしないでいい、真衣ちゃんだけのおっぱいなんだから」

美幸は半ば強引に自分の乳首を啜えさせ、真衣の背中をとんとんと叩いた。

「んむ……」

豊かな乳房に鼻を押さえつけられ、ピンクの乳首を口にふくまされた真衣の唇が躊躇いがちに動き始める。

「ママのおっぱい、上手に吸えるかな。でも、最初は上手じゃなくてもいいのよ。何度も何度も、これからずっと吸っているうちに上手になるんだから。上手におっぱいを吸えるようになって、おっぱいを吸いながらおむつにおしっこをできるようにするんだから」

美幸は、真衣の背中を叩いていた手をそろりと下におろし、今度はオーバーパンツと紙おむつ越しにお尻をリズムカルに叩き始めた。

「今、真衣ちゃんのお尻を優しく包んでいるのは何かな？ パンツ？ それとも……」

「……お、おむつ。おむつだよ、ママ」

美幸の甘ったるい囁き声に、真衣は乳首を啜えたままのため少しくぐもった声でおずおずと応えた。

「そうね、おむつね。真衣ちゃんのお尻を包んでいるのはおむつなのよ。だって、真衣ちゃんは一人でトイレへ行けない赤ちゃんなんだから。お出かけの時はお姉ちゃんぶってパンツを穿くけど、そのパンツもすぐおしっこで濡らしちゃう赤ちゃんだから。パンツのお姉ちゃんになれるのはまだまだの、おむつの赤ちゃんだから」

美幸は、お尻を叩くのをやめ、掌を真衣の股間にそっと押し当てた。

それまではなんとか途中で止めようとしていたのを、とうとう諦めたのだろう、職業柄きわめて敏感な美幸の指先の神経は、オーバーパンツと紙おむつ越しながら、真衣の恥ずかしい部分から迸り出て紙おむつの内側に広がってゆく生温かい液体の流れをはっきり感じ取った。

「それじゃ、念のために聞いておくわね。真衣ちゃん、お出かけの時は何を穿くのかな？」

紙おむつの内側に広がるおしっこの流れをオーバーパンツの上から指先でそっとなぞりながら、美幸は真衣の耳元に囁きかけた。

「お出かけの時はパンツ。真衣、お出かけの時はパンツだよ」

「そうね、お出かけの時はパンツね。でも、普通のパンツだとすぐにおしっこが漏れちゃうから、ママが用意してあげたトレーニングパンツを穿くのよ。お出かけの時はトレーニングパンツ。わかったわね？ ——じゃ、お家いる時は？」

「……お家にいる時はおむつだよ。真衣、お家にいる時はおむつなの」

一瞬の間はあったものの、虚ろな瞳で真衣は答えた。

「そうよ、お家にいる時はおむつなのよ。真衣ちゃんはママのおっぱいを吸いながらおしっこをしちゃう赤ちゃんだから。ずっとずっとおむつの外れない赤ちゃんだからね」

美幸は、右手でおしっこの様子を探りながら、左手で真衣の髪をそっと撫でつけた。

## 《十・見送りの時も》

昼間にいろいろなことがありすぎた気疲れで、その夜は美幸におむつを取り替えられても一向に気づく様子もなく、結局、真衣が目を覚ましたのは日曜日の朝も九時近くになってからのことだった。それも、自分で起き出したわけではなく、朝食の用意を終え、洗濯も済ませてから部屋へやって来た美幸に

「もうそろそろおつきして朝ご飯を食べなきゃ駄目よ。十時になったらお父様を空港へ送っていかなきゃいけないんだから」

と言つて体を揺すられてのことだ。

「あ、先生……ううん、ママ。……え？ お父さんがドイツへ行くのつて、明日じゃなかった？」

臉を少しこすつてようやく目を覚ました真衣は、枕元に置いた携帯電話の液晶に表示されている日付を確認して不思議そうに聞き返した。

「本当はそうなんだけど、急に日取りが早まったんだそうよ。お父様もそろそろ着替えてダイニングルームに来ている頃だから、自分で聞いてみるといいわ」

美幸はひよいと肩をすくめてそう説明し、真衣の掛け布団を優しく捲った。

布団の中から現れた真衣は、シャワーの後で美幸に強要されたのと同じ、ナイティと紙おむつ、それにオーバーパンツにニットのソックスという姿だった。もつとも、紙おむつは、即日夕方ベッドに腰をおろして美幸の乳首を吸いながらおしっこで汚してしまった後も夕食の後に入浴を済ませ、寝入るまでに三度おもらしをしてそのたびに美幸の手で取り替えられ、寝ついてからも、いつもの朝よりも目が覚めるのが遅かったせいでも四度もおねしよで濡らしてしまったのを、やはり美幸の手で取り替えられたため、真衣がシャワーを浴びている間に美幸が脱衣籠に入れておいたものから数えると、今オーバーパンツの下に着けているので九枚目ということになる。

「……お父さん、夕べは遅かったの？」

真衣は僅かに首を上げ、ベッドに横たわったまま胸元から爪先まで視線を走らせて自分がどんな格好をしているのか確認し、昨日のことが夢なんかじゃなかったんだとわかると、頬をピンクに染めてぽつりと訊いた。

「ええ。帰ってきたのは、夜中の十二時を過ぎてちよつとした頃だったかしら。玄関のドアが開く音が聞こえたと思つたらすぐ階段を昇る足音が聞こえて、ここ、真衣ちゃんのお部屋へやって来たのよ。よほど、真衣ちゃんのことを可愛くて仕方ないみたいね」

美幸は穏やかな声で言った。

「私が真衣ちゃんに腕枕をしてあげている様子を見た時は随分びっくしていたけど、すぐに『おや、いつの間にか随分と仲良くなったんだね。これなら、僕が出張で家にいない間もうまくやってくれそうで安心したよ』つて、嬉しそうに目を細くしていたわよ」

「え!? 真衣、ママと一緒に寝ているところをお父さんに見られちゃったの!？」

真衣は、見るからに不安そうな表情を浮かべたが、

「ええ、そうよ。でも、お布団にくるまっていたから、おむつまでは見られていないわ」という言葉が美幸から返ってくる、安堵の色を浮かべて小さな溜息をついた。

その様子をおかしそうに見ていた美幸は

「でも、お父様、どうせなら、もう少し遅く帰ってくればよかったのにね。そうしたら、真衣ちゃんがママのおっぱいを吸って離さないところが見られかもしれないのに」

と冗談めかして言い、

「さ、本当におつきしましうね。いつまでも愚図愚図していると、お父様が心配してお部屋に来ちゃうかもしれないから」

と起床を促した。

この姿を優に見られるわけにはゆかず、慌ててベッドから床におり立つ真衣。

それと同時に、美幸がすっかり慣れた手つきで真衣のクローゼットの扉を引き開け、紺のプリーツスカートとミルク色のブラウス、それにチェック柄のベストといった衣類を取り出してベッドに置いた。それと、整理箆笥からはブラスリップと、スカートと同じ色合いのハイソックス。

「お洋服はそれでいいわね？ 真衣ちゃんが待っているスカートの中で一番丈の長いのはこのプリーツスカートみたいだし」

優を空港まで見送るということで、美幸も少しは氣遣ったのだろう（もつとも、それは、真衣に対する氣遣いではなく、見送られる側の優に対する氣遣いなのは間違いないのだが）、なるべく裾が捲れ上がってしまいくようなスカートを選んでくれたようだ。もつとも、一番丈が長いとはいっても膝上十センチといったところだから、空港の展望デッキのような風の強い場所だとうなることかしかれたものではないが。とはいえ、ズボンの類は美幸によって全て捨てられてしまったから、真衣としても他に選択の余地はない。

「う……………」

いまひとつ乗り気でないふう我真衣は頷いた。いくら外見は普通のなりをしていても、下着が下着なだけに、なるべく丈の長いスカートを穿いたとしても外出は避けたいところだ。しかし、見送りに行かなかつたら優が不審がるに違いない。体調がよくないからと言いつつ、そのようななら却って心配をかけてしまいそうで、それもできない。

と、そこまで思い迷ったところで真衣はふと氣がついた。美幸が整理箆笥から持ってきたのはブラスリップとハイソックスだけだ。

「……………あ、あの、ママ……………パンツは？」

真衣はおそるおそる尋ねた。

それに対して美幸は不思議そうな顔で

「え？ パンツって、おむつの上に穿いてるでしょ、オーバーパンツは。真衣ちゃん、今朝はお目々を覚ますのが遅かったから、ついさっきもおねしよしちゃったのよ。その時におむつを取り替えてあげて、オーバーパンツもちゃんと穿かせてあげたわよ」と聞き返してきた。

「ち、違う……………パンツって、あの、トレーニングパンツのことで……………お出かけの時はトレー

ニングパンツよってママが……」

自分で口にした『お出かけの時はトレーニングパンツ』という言葉に頬を赤く染めながら、真衣はおずおずと言った。

「ああ、トレーニングパンツを穿かせてほしいのね、真衣ちゃん。うふふ、おむつの赤ちゃんのくせして、お出かけの時はパンツのお姉ちゃんぶりたくて仕方ないんだから。でも、今日は駄目よ。今日はお出かけの時もおむつなの」

ようやく美幸も真衣の意図を察したらしい。しかし、その口から返ってきたのは、思いもしない言葉だった。

「え……!？」

「だって、大きな旅行鞆を持ってかなきゃいけないから、車でお出かけするのよ。行きはお父様が運転して、帰りはママに交代してね。電車だったら途中の駅でトイレへ行くこともできるけど、お家から空港まで車でつてことになったら、途中にサーブエリアなんてないから、トイレへ行けないのよ。普通でも一時間半くらいかかるけど、最近はお休みの日になると高速道路が混んじやうから、二時間くらいはみとかなきゃね。その間、真衣ちゃん、おしっこは大丈夫？ 二時間もパンツを濡らさないで我慢できる？ いくらトレーニングパンツでも、昨日の玄関前みたいなことになっちゃわない？ そんなことになったら、お父様、真衣ちゃんのおねしょのことは知っていても、おもらしまでしちゃうようになっちゃったのかって心配で心配で、ドイツに着いてもお仕事が手につかないんじゃないかしら。だから、今日はおむつのままなのよ。スカートが捲れてもおむつだつてことがわからないよう、オーバーパンツも穿いたままにしとこうね」

顔色を失う真衣とは対照的に、美幸は澄ました顔で言った。

「そんな……」

「さ、わかったら着替えようね。さ、お手々を上げて——」

\*

午前十時ちよつと過ぎ。

家を出る直前に随分と久しぶりに感じられるちゃんとしたトイレを済ませた（とはいっても、便器に座る前後に上げ下げするのはパンツタイプの紙おむつとオーバーパンツなのだから、それを本当に『ちゃんとしたトイレ』と呼んでいいのかどうか甚だ疑問ではあるのだが）真衣と美幸を後部座席に乗せた車は、優の運転で快調に走り始めた。

だが、それも束の間。一般道から高速道路に乗り入れてしばらくすると、美幸が言った通り車列の速度が落ちてきて、遂には渋滞につかまってしまった。優たちの車が乗り入れたのは、俗称として《高速道路》と呼んでいるものの、名神高速とか東名高速とかの本来の意味の高速道路とは違い、阪神高速や首都高のような都市高速と、有料の自動車専用道路を乗り継ぐような、いわゆるバイパス路線であるため、サーブエリアが殆ど設けられていない。家に最も近い入り口から乗り入れた場合、空港へ行くのとは反対車線側に一カ所あるものの、空港方面には、空港に近い出口を過ぎた所にしかなかった。

結局、その渋滞を抜けることができたのは、家を出てから二時間近く経った頃のことだった。

「ふう、やれやれ、やっと流れ出した。このぶんどと、あと三十分ほどで空港に着くかな。余裕を見込んで早めに出発したけど、渋滞の中にいるときは流石にあせったよ」

流れに乗ってスピードを上げながら、優が苦笑交じりの声で言った。

「ま、あせったと言えば、昨日の会議の途中で急に専務が『よし、出発を早める。社の命運を賭けたプロジェクトになるから、そのつもりで一日でも早く向こうで頑張ってくれ』とか言い出して、本当に航空会社へ電話して予定より一日早い便のチケットを押さえた時にはもつとあせったけどね」

朝食の時には優が二人に話して聞かせたそんな専務の独断専行ぶりこそが、出発日が繰り上がった理由だった。分析していた資料が想定していたよりもずっと重要なものだということがわかったとかで、交渉を更に有利な条件で進めるために、他のメンバーはともかくとしても、とりあえず優だけでも一刻も早くドイツへ発つよう命じられたらしい。そのため、予定が早まったというわけだ。もつとも、そういう緊急の命令を受けるということは自分上から信頼されている証拠なんだよと、優は優で御機嫌なもの間違いないのだが。

「それにしても、向こうでは体調には気をつけてくださいよ。特に、生水は絶対飲まないように」

ハンドルを握る優の顔をバックミラー越しに覗いながら、美幸がおだやかな声で言った。「ああ、わかっているよ。これでも製薬会社の社員だからね、向こうの衛生事情はわかっているつもりさ」

優は軽く頷いた後、ちらと視線を動かして後部座席の様子を確認し、微かに怪訝な表情を浮かべた。

「ところで、なんだか真衣の様子がおかいしみたいなんだけど。——真衣、大丈夫かい？ 顔色が良くないようだけど、車に酔ったんじゃないのかい？」

車の後部座席に二人が並んで座っているところへ運転席から心配そうな声をかけられるその状況に、真衣は昨日のタクシーでの出来事を思い出した。しかも、真衣が蒼褪めた顔をしているその理由まで、昨日とまるで同じなのだ。だが、おねしよの件は知っている優も、真衣が二時間くらいしかおしっこを我慢できない体だということまでは知らない。本人の他にその事実を知っているのは、澄ました顔で隣に座っている美幸だけだ。

「あら、本当。私が調べてみるわ。優さんは、事故を起こさないよう、ちゃんと前を見て運転していてくださいね。真衣ちゃんのが気になるのはわかるけど、私にまかせておいて」

真衣の顔色が良くないことどころか、その本当の理由さえ充分に知っていないながら、さも今になって気がついたようにそう応じた美幸は、優に後部座席の方を見ないようそれとなく言い渡し、タクシーの中でそうしたのと同様に自分の額を真衣の額に押し当て、体ごと覆いかぶさるような姿勢を取ると、優に聞こえないよう声をひそめて真衣の耳元に囁きかけた。

「もう我慢できそうにないんでしょ？ ううん、我慢できなくて出ちゃうんだったらまだい

いけど、もう我慢できそうにないのが辛くて、いっそ出しちゃいたいのに出なくて、それで苦しいのよね？」

美幸の言う通りだった。

昨日、シャワーを浴びた後、おむつを着けられベッドに座って美幸の乳首を口にふくませた状態でおしっこを溢れ出させた後、真衣の体に（いや、正確には、精神に）少しばかり異変が起きていた。簡単に言うと、もうそろそろトイレへ行っておかないと不安だなと思う、尿意を感じ始めてすぐのタイミングで便器に座った場合はスムーズにおしっこが出るくせに、それを過ぎてぎりぎりまで尿意を我慢した後だと、もうこらえきれず下腹部にきりきりと痛みを覚えるようになって、おしっこがなかなか出てこないようになってしまったのだ。人混みの中やタクシーの車内でパンツにちびってしまったことに起因する表現しようのない恥辱の念に加えて、おねしょという無意識の状態ではなく、まだ太陽の光が眩しい昼間にはつきり意識のある状態で義理の母親の乳首を吸いながらおむつをおしっこで濡らすという異様きわまりない行為を強要されたせいで、或る一線を越えて高まった尿意に体と精神がうまく対応できないようになってしまったらしい。もともと、ベッドに座っておむつを汚してしまったことだけが原因だというわけではなく、その後もちよつとした事件があって、それらが相まって決定的な要因になったというのが正確なところなのだが。

その『ちよつとした事件』の原因は、美幸がタクシーを遠回りさせて立ち寄ったホームセンターで買ってきた小物にあった。その小物というのは、一人で歩けるようになった幼児や室内飼いの犬猫などが、ドアを閉め忘れていたトイレへ勝手に入って便器の中を覗き混んだり頭を突っ込んだりして不測の事故に遭うのを防ぐための、便器の蓋を簡単に開けられないようにするためのロック装置だった。便座と蓋とを同時に挟み込むような構造で、鍵を使わないと或る角度以上には動かないという仕組みになっている、一種の蝶番のような形の小物だ。普通は、それに合う鍵を、トイレの中でも幼児の手の届かない所に置いておけば大人が用を足すのには困らないわけだが、真衣がシャワーを浴びている間にそのロック装置を便器に取り付けた美幸は、その鍵を、自分しか知らない場所に隠してしまった。そのため、ベッドの端に座って美幸の乳房に顔を埋めたままおむつを汚してから二時間ほどが経ち、再び尿意を我慢できなくなった真衣が、今度はトイレで用を足そうとしたところ、便器の蓋を開けることができなくて、トイレを使わせてくれるよう美幸に懇願したものの聞き入れられず、その時はリビングルームの床に正座した美幸の太腿の上にお尻を載せた姿勢で横抱きにされて再び乳首を口にふくまされたまま紙おむつの内側をおしっこでじっとり濡らしてしまう羽目になった。その後も何度も同じような目に遭い、寝入ってから後は目を覚ますまでに幾度となく無意識のうちに美幸の乳首をネグリジェ越しに吸いながらおねしょでおむつを汚すという行為を繰り返した挙げ句、とうとう、尿意を感じてすぐの時はまだしも、尿意が高まった後は美幸の乳首を吸いながらでないとおしっこを出すのもままならないという状態になってしまったというわけだ。

もつとも、真衣が寝入った後、優が帰宅する前に美幸はその小物を便器から取り外しておいたから、真衣が家を出る直前のトイレだけは辛うじて無事に済ませることができたため、優は真衣の身に何が起きているのか、いささかも気がついていない。それどころか、真衣の



義理の母親として迎え入れた女性が経験豊富な医師だということで、海外への出張中も安心して娘をまかせておけるという安堵感を覚えていくくらいだ。もちろん、真衣がトイレを済ませた直後に美幸が再びそのロック装置を便器に取り付けたことなど知る由もない。

「だったら、出させてあげる。昨日から何回もそうしているのと同じようにしてあげる」  
家を出て一時間ほど経った頃、尿意を感じ始めた時にこのまま出しちゃおうかと思ったものの、父親が運転している車の中でそれもできず、我慢に我慢を重ねてとうとうどうしようもなくなくなってしまった真衣の耳朶に、美幸の甘ったるい声がねっとり絡みついてきた。

「……」

真衣は無言で躊躇いがちに頷いた。今の真衣には、それ以外にできることは一つもない。「いいわよ。じゃ、おねだりしてちょうだい。昨日みたいに、『ママ、真衣、一人でおしっこできないの。だから、ママのおっぱいちょうだい。そしたら真衣、上手におしっこできるから』って、思い切り甘えた声でおねだりしてちょうだい」

美幸はバックミラーに背を向けて、更に甘ったるい声で囁いた。

「で、でも……」

「嫌だったらいいのよ。どうしても嫌なら、ずっと我慢し続ければいいわ。我慢して我慢して、体がどうしても我慢しきれなくなるまで我慢なさい。でも、そんなにぎりぎりまで我慢した後だと、おしっこはとつても勢いよく溢れ出すでしょうね。それこそ、紙おむつが吸い取れる速さを超えて、ずつと勢いよく。そんなことになったら、おしっこが紙おむつのギャザーから横漏れしちゃうんじゃないかしら。横漏れして、オーバーパンツも濡らして、車の座席をびしょびしょにしちゃうんじゃないかしら。ううん、ひよつとしたら、車からおりた後かな。だったら、大勢の人がいる空港で横漏れしちゃうわね。別に、ママいいのよ、それでも」

美幸はそう囁きかけながら、熱い吐息を真衣の耳朶にふつと吹きかけた。

真衣の体がびくんと震えて、下腹部の力が抜けてしまいそうになる。

「……マ、ママ……おっぱい、ちょうだい。真衣、おしっこしたいのに出なくて……だから、ママのおっぱいが……」

とうとう真衣は顔をぎゅつと閉じて、か細い声を絞り出した。

「いいわ。本当はもっとちゃんとおねだりしてほしいんだけど、お父様に心配させちゃいけないから、今回はこれでいいってことにしてあげる。さ、こっちを向いて」

美幸はジャケットのボタンを外し、ブラウスの胸元に手を突っ込んでブラのカップをずりおろした。昨日から着用している授乳用だから、雑作もない。

真衣は躊躇ったが、それはほんの一瞬の間だけ。待つほどもなく自分から顔を美幸の胸に押し付け、ブラウス越しに乳首を咥えた。

「いいのよ、それで。ママのおっぱいを吸いながらじゃないとおしっこもできない真衣ちゃんだけど、恥ずかしがることなんてないのよ。ママはいつでも真衣ちゃんにおっぱいをあげる。だから、おしっこをしたくなるたびにおねだりするのよ」

美幸は自分の乳房に手を添え、下から持ち上げるようにして囁きかけながら、空いている

方の手を真衣の太腿に這わせた。

「ん……」

真衣がくぐもった声で呻いた。

美幸はそのままそろりそろりと手を伸ばし、股間に掌を押し当てた。

オーバーパンツの生地と紙おむつの表地越しに、生温かい液体の流れがはつきり感じられる。

「そう、いいのよ、それで。真衣ちゃんはママのおっぱいを吸いながらおむつをおしっこで濡らしちゃう赤ちゃんなんだから」

真衣の唾液でブラウスの胸元が濡れるのを気にする様子もなく、美幸はもういちど満足そうに囁きかけた。

\*

空港に着いた後、優が手続きをしている間に、昨日と同じく女性トイレへ二人で入り、おむつを取り替えた美幸は、濡れた紙おむつをビニール袋に入れ、それを更に小振りの紙袋に入れて、真衣に持たせた。その後、待ち合わせ場所にやや遅れてやって来た優が、真衣の持っている紙袋に気がつき、「おや、それ、どうしたんだい？ 家を出る時は持っていないかっただろう？」と尋ねると、美幸が澄ました顔で「お土産よ」と応じ、それに対して優が「早速、ショッピングかい。ま、空港の中にはいろんな店が入っているから気持はわかるけどね」と呆れ顔で頷くといった場面があったのだが、まさか『お土産』というのを、保育園や幼稚園でおもらしをしてしまった園児が濡れたパンツをビニール袋に入れて持って帰る行為を指すのと同じ意味で美幸が口にしてるとは夢にも思わなかったろう。

ともあれ、そういった小さなエピソードは幾つかあったものの、待ち合わせ場所の近くにあったレストランで軽い昼食も摂って無事に優の見送りを済ませた二人だった。

「……あ、あの、ママ……」

見送りを終え、飛行機が離発着する様子を一望できる展望デッキからおりてくるエスカレーターの手摺りをぎゅっと握って、思い詰めたような表情で真衣が美幸に言った。

「ん、どうしたの？」

「……お、おしっこなんだけど……」

「あ、そうか。もうそんなに時間が経ってたんだけけ」

頬を赤く染め俯きぎみに答える真衣の様子に目を細めながら、美幸はわざとらしく腕時計をちらと見て

「おもらしの後、空港までが三十分。それから、優さんの手続きが終わるのを待って、お昼ご飯を食べてから飛行機を見送って——二時間ちよつとつとつとこね、車の中でおむつを汚しちゃってから」

と応じた。

その声が周囲の客に聞こえてしまうのではないかと真衣は内心ひやひやだが、美幸は平然

としたものだ。

そんなやり取りがあつて、二人がやって来たのは、空港に着いてすぐに入ったのと同じトイレだった。そうして、昨日と同様、予定外の生理のせいで下着を汚してしまった娘とその母親という態を装いつつ、揃って一室に入り、扉を閉める。

「車の中じやお父様が一緒だったから簡単なおねだりで許してあげたけど、今度はそうはいかないわよ。さっきの分も合わせて、心を込めておねだりしてちょうだい」

美幸はジャケツトを脱いで棚に置き、これみよがしにブラウスのボタンに指をかけながら真衣に言った。

「……ママ、真衣におっぱいちょうだい。真衣、ママのおっぱいを吸わないとおしっこできないの。……だから、おっぱいをちょうだい」

躊躇いの色が顔に浮かんだのは一瞬の間だけ。よほど切羽詰まっているのだろう、美幸の豊かな胸に両目を釘付けにして、真衣はすぐるように言った。

「うふふ。昨日に比べると、おねだりのしかたが板に付いてきたじゃない。いいわ、そんなに可愛らしくおねだりしてくれるんだったら、たっぷり吸わせてあげる」

もうすっかり慣れた手つきで美幸はブラウスの胸元をはだけ、授乳用ブラのカップをずりおろした。

そうして、今にもむしゃぶりつきそうにする真衣の体を押しとどめ、便器の蓋を閉めてその上に真衣を座らせてから、改めて、ぴんと勃った乳首を突き出した。

もう一瞬の躊躇いもなかった。真衣は蓋を閉めた便器の上に座ったまま、胸の高さを真衣の唇の位置に合わせて膝を折った美幸の乳房に顔を埋めるようにして乳首を口にふくみ、はばかりことなくちゅうちゅうと音をたてて吸い始めた。

「すっかり赤ちゃんになっちゃったわね、真衣ちゃん。このぶんどと、かりそめの赤ちゃん返りなんかじゃなくて、本当の赤ちゃんになっちゃうんじゃないかしら。でも、ママはそれでもいいのよ。真衣ちゃんがママの本当の赤ちゃんになってくれたら、どんなに嬉しいかしら」

美幸は、真衣が乳首を吸いやすいよう更に胸を前に突き出して、まるで飼い猫にするように真衣の喉元を二本の指で優しく撫で、冗談めかした口調で続けて言った。

「それにしても、扉の前の人たちがこの様子を見たらびっくりするでしょうね。生理のせいでパンツを汚しちゃって、その後始末をしたらためにママと一緒にトイレへやって来た高校生の筈の女の子が、本当はおもらしでおむつを濡らしちゃうような赤ちゃんだったなん」

「……意地悪。ママの意地悪。真衣がこんなふうになっちゃったのはママのせいなのに……」

くぐもった声で真衣が拗ねたように言った。

「あらあら、何を言ってるの、真衣ちゃんたら。真衣ちゃんがこんなふうになったのはママのせいなんかじゃないわよ。もともと真衣ちゃんが赤ちゃんになりたがっていたの。赤ちゃんになって誰かに甘えたがっていたの。でも、これまでは誰に甘えていいかわからなかった。

そこへ私が現れた。だから真衣ちゃんは私にべったり甘えるようになって、そうして、念願が叶って赤ちゃんになっちゃったの。そう、真衣ちゃんはずっとずっと赤ちゃんのままだったのに、今までは無理してお姉ちゃんのふりをしていただけなのよ」

美幸は、乳首をふくんでぷっくり膨れた真衣の頬を指先でつんとつついた。

「……意地悪。ママの意地悪……」

美幸の言うことを認めるのが恥ずかしいのだろう、真衣は同じ言葉を繰り返すばかりだった。だが、さつきとは僅かながら口調が違う。顔にも、どこかうっとりした表情が浮かんでいた。

「いいわよ、意地悪で。だけど、その意地悪なママがいないとおしっこもできない赤ちゃんは誰なのかな」

真衣の口調と表情の変化に気づいた美幸はすっと目を細め、便器に座った真衣のスカートの裾を両脚の付け根あたりまで捲り上げると、オーバーパンツの股ぐりと紙おむつのギャザーを僅かに押し広げて、人差し指と中指を紙おむつの中に差し入れた。

様子を探るまでもなく紙おむつの内側はじっとり湿りついていた。

しばらくしてようやくおしっこを一滴残さず出し終えたのだろう、真衣の表情が再び変化した。最初の頃の、おしっこをしたいのに出せない切羽詰まった表情でもなく、その後の、ようやくおしっこを出せるようになった安堵と、全てを美幸の手に委ねることへのうっとりした表情でもない、はっと我に返って自分が何をしたのかを覚った、羞恥に満ちた表情だった。

真衣のそんな表情を目にした途端、いいよのなない奇妙な悦びに美幸の体が疼く。

「出ちゃったみたいね。トイレに入って便器の上に座って、なのに便器におしっこをするんじゃないくて、便器に座っているのにおむつの中にみんな出しちゃったのよね、真衣ちゃん」

美幸は、おしっこを出し終え、おずおずと乳首から口を離す真衣に向かって、自分が何をしたのか改めて思い起こさせるように言った。

「……意地悪。ママの意地悪……」

「本当のことを言っただけなのに、何が意地悪なのですか」

美幸は含み笑いを漏らし、ブラのカップとブラウスを元に戻して言った。

「次はおむつを取り替えてあげる番ね。わざわざトイレまで来てるのにおむつを汚しちゃうなんて、本当に手間のかかる赤ちゃんなんだから。――さ、お尻を上げて立っちしてちょうだい」

家電量販店のトイレでそうしたように美幸は真衣の背中にまわりこんで脇の下に両手を差し入れて体を引き起こし、その場に立たせて、オーバーパンツに指をかけた。

「お腹が冷えないように穿かせているのはいいけど、やっぱり、おむつを取り替える時はちよっと手間ね。いちいち靴まで脱がせてあげないとオーバーパンツは脱げないし、パンツタイプの紙おむつも、脱がせる時はサイドステッチを破けばいいから楽だけど、穿かせる時はパンツと同じ手間がかかるんだから」 オーバーパンツを膝まで引き下ろし、紙おむつのス

テッチを破って真衣の皮膚から引き剥がしながら、独り言めいた口調で、けれど真衣の耳にもはつきり聞こえる声で美幸は言った。

そうして、これまで何度も同じことを繰り返してきたのに違いない慣れた手つきでお尻拭きを容器から抜き出し、下腹部を拭き清める。

「はい、もういちどお座りしてちょうだい。それで、お靴を脱いだら、そのままオーバーパンツを脱がせてあげるから、あんよを上げたままにしておくのよ」

ややあって、お尻拭きを汚物入れに放り込んで、美幸は真衣を再び便器の蓋に座らせた。

薄いアルコールが染みこんだお尻拭きのせいですーすーしていたお尻から今度はひんやりした感触が伝わってきて、真衣は、自分が下腹部を剥き出しにして便器に座っていることを改めて実感させられる。

「いい子だから、そのままじつとしていてね。新しいおむつとオーバーパンツをあんよに通す間、おとなしくしているのよ」

美幸は、真衣の靴を手早く脱がせ、オーバーパンツも完全に脱がせた後、バッグから取り出した新しい紙おむつを両脚に通して膝のすぐ下まで引き上げた。

「はい、じゃ、もういちど立ちちして。もうすぐ終わるから、いい子にしているね」

紙おむつに続いて、いったん脱がせたオーバーパンツを再び両脚に通し、こちらも紙おむつの近くまで引き上げておいてから靴を履かせ、美幸はさつきと同じように真衣を立たせた。「それじゃ、おしっこが出てくる真衣ちゃんの恥ずかしい所を隠しちゃおうね。最初はおむつで隠して、それから、オーバーパンツでないしちゃうのよ。ほーら、できた」

膝のすぐ下で両脚に引っかけかかっていた紙おむつを最後まで引き上げ、内側に巻き込んだギヤザーを外側に引っ張り出してから、ニットのオーバーパンツも引き上げて紙おむつの上に乗かせた美幸は、真衣のお尻を二度ぼんぼんと叩いてから、スカートの裾の乱れを整えた。

「はい、いいわ。これで、真衣ちゃんのことをおむつの赤ちゃんだなんて思う人は一人もないわよ。みんな、パンツのお姉ちゃんだって思ってくれるに決まってる。さ、トイレから出てお家に帰りましょう」

美幸は真衣の体をじっくり眺めまわし、満足そうに頷いた。

美幸の言う通り、紺のプリーツスカートに清楚なブラウス、それにチェックのベストという姿の真衣を見て、まさかスカートの下がまだおむつ離れできない赤ん坊そのままの格好だと思ふ者はいないだろう。しかし、少し強めの風でも吹いてスカートが捲れ上がったが最後、いかにも良家の子女然とした紺のスカートの下に着けている恥ずかしい下着が誰の目にもあらわになってしまうのだ。それも、車の中で汚した分と、つい今しがた便器に座って汚した分、おしっこに濡れた紙おむつを二枚入れた紙袋を『お土産』として手に提げた格好で。

脳裏をよぎるそんな自分の姿に身震いしながらも、真衣には、美幸の言葉に従って扉を開け、順番待ちの客の列を横切って駐車場へ歩いて行くことしかできなかった。

\*

空港からの帰り道は渋滞もなく、一時間ちよつとで高速道路を出ることができた。ここか

ら家まで、車なら十五分ほどで着く。

しかし、そのまますんなりと家に向かう美幸ではなかった。高速道路をおりた美幸は、夕飯の材料を買うためといって、家とは反対方向にあるスーパーマーケットに向けて車を走らせた。

「真衣ちゃんはどうする？ ママと一緒に買い物に行く？ それとも、車で待ってる？」  
スーパーの駐車場に車を駐めた美幸は、空港のトイレでおむつを取り替えられてからまだ一時間半も経っていないのに、もう顔色を失って肩で息をしている真衣に訊いた。

「たくさんの人がいる所へ行くのは嫌。……でも……」

真衣は下腹部をぶるっと震わせて言葉を濁した。真衣がもう我慢の限界を迎えそうになっているのは一見して明かだった。「でも……」の後に真衣がどんな言葉を続けたがっているのか、美幸は充分に承知していた。

普通なら、そんな状態になるまで、直前の排尿から二時間くらいはかかる。それが今回に限ってはこんなに早く限界ぎりぎりになってしまったのは、空港の駐車場に駐めていた車に乗ってすぐ真衣がスイッチを入れたクーラーのせいだった。

四月も後半になり、日差しが強まってくると、立体駐車場の屋上階に駐めていた車の中は、むっとするような熱気がこもる。それでもまだ茹だるような夏ではなく、普段なら我慢できる場合が殆どなのだが、紙おむつの上にオーバーパンツを穿かされている真衣にしてみれば、とても耐えられるような状態ではなかった。昔に比べれば最近の物は通気性も考慮されているとはいえ、紙おむつの中はどうしても湿気がこもりがちだ。その上に、お腹が冷えないようにという口実で保温性のいいニットのオーバーパンツを穿かされているものだから、たとえ紙おむつの内側がおしっこで濡れていなくても、すぐに汗で蒸れてしまう。空港へ来る時はまだ午前中だったから幾分はマシだったが、太陽が高い所にある午後二時間近くも屋根のない屋上階に駐めていた車にこもった熱気は、紙おむつとオーバーパンツに下腹部を包まれた真衣にはとても耐えられず、車に乗ると同時にクーラーのスイッチを入れたのも無理からぬところだった。しかし、ただでさえ通気性のよくない紙おむつとニットのオーバーパンツとの重ね穿きを強いられた下腹部と、ブラウスにベストという春にしては軽装の上半身とでは、感じる暑さがまるで異なり、紙おむつの内側の湿っぽい感じをどうにかしようとしてクーラーを強めにかけて続けた結果、体全体が冷えて、尿意が普段よりも早く高まってしまったというわけだ。

「いいわよ、お買い物はママ一人で行ってくるわ。ただ、その前に真衣ちゃんにおしっこをさせてあげなきゃいけないみたいね」

下腹部だけを除いて体中が冷えてしまった真衣とは対照的に、クーラーの効きに合わせて薄手のジャケットを羽織って車を運転していた美幸は、なんともいえない笑みを浮かべた。

「……」

胸の内をすっかり見透かされ、どう応じていいのかわからずに、真衣は無言で小さく頷くだけだ。

美幸は、羽織っていたジャケットを脱ぎ、ブラウスのボタンを外し始めた。

「こ、こんな所で……!？」

真衣の声が裏返った。

しかし、美幸の方は落ち着き払ったものだ。しれっとした顔で

「あらあら、びっくりすることなんてないじゃない。だって、真衣ちゃんはおむつが外れなくてママのおっぱいが恋しくてたまらない赤ちゃんなのよ。ママが赤ちゃんに車の中でおっぱいをあげるのって、そんなにおかしなことじゃないわよ。ちよつと前までは、電車の中で胸をはだけて赤ちゃんにおっぱいをあげているお母さんだっていたくらいなのに。そんなお母さんと赤ちゃんのこと、変な目で見る人なんていなかったのよ。みんな、お母さんと赤ちゃんを微笑ましく見守っていたんだから」

と決めつけ、授乳ブラのカップをずりおろす。

「で、でも……真衣、赤ちゃんなんかじゃ……」

「やだ、まだそんなことを言ってるの、真衣ちゃんたら。だったら私も何度でも教えてあげられるけど、真衣ちゃんは赤ちゃんなのよ。ママのおっぱいを吸いながらじゃないとおしっこもできない赤ちゃんなのよ。おもらしとおねしょで一日の間に何枚もおむつを汚しちゃう赤ちゃんなのよ。お出かけの途中でパンツを何枚も濡らしちゃう赤ちゃんなのよ。だから、さ、いらっしやい」

ブラウスのボタンを三つ外し、乳房を授乳用ブラのカップから放り出すようにして、美幸は運転席の背もたれを二段階ほど後ろに倒し、助手席のシートベルトの留め金を手早く外してしまおうと、真衣の体を抱き寄せた。

「……」

躊躇うそぶりをみせていた真衣も、そうなると観念するしかなかった。両側の車の持ち主がまだ戻ってきませんようにと祈りつつ、おそろおそろ美幸の乳首を口にくむ。

\*

いつのまにか寝入ってしまったらしい。

ドアの開く音が聞こえ、車が僅かに揺れるのを感じた真衣が目を開けると、美幸が運転席に乗り込むところだった。

「あ、おっきましたのね、真衣ちゃん。もう少しゆっくりねんねしていてもよかったのに」  
美幸は、はっとしたように目を開ける真衣に向かってにこりと微笑みかけた。

真衣は美幸の言葉に応えることなく、レバーを引いて座席の背もたれを起こした。と、助手席側の窓越しに見える隣の車が別の車と入れ替わっていることに気がつく。(ああ、先に来ていたお客さんはもう買物物を済ませて帰っちゃったんだ。私ったら、クーラーが効いていて気持ちいいからついうとうとして、結局、車の中でどれくらい眠っちゃってんだろ) 真衣は何気なく窓の外を見てそんなことを思いながら、背もたれに合わせて体を起こし、なぜとはなしに自分の下半身に目をやった。

途端に、真衣の表情が凍りつく。眠りこんでしまっている間にスカートの裾が捲れ上がった、レモンイエローのオーバーパンツが半分ほど見えてしまっていた。

美幸の乳首を吸いながらおむつを汚してしまった後、トイレでおむつを取り替えてあげるという美幸の言葉を頑として聞き入れず、真衣



は独り車に残った。空港のトイレで二度も恥ずかしい目に遭った上、空港のトイレに比べれば狭く暑苦しいのに加えて防音性も劣るのが明かな、しかも夕方前で一日の中でも最も買いか客の多い時間帯のスーパリーのトイレでおむつを取り替えられるなんて、到底受け容れられるわけがなかった。結局、その時は美幸も真衣の頑なさに呆れたような溜息をついて自分だけで店内に向かったのだが、空港と同じで屋根がなく直射日光が降り注ぐ駐車場ということも考慮して、クーラーを動かすためにエンジンかけたままにしておいた。

そのため、ほどよい冷気に体をまかせて真衣は知らぬ間に眠りにおち、ぐっすり眠りかけていたというわけだが、その間に隣の車が入れ替わっていたとなると、それぞれの車を運転していた買い物客たちは、エンジンがかかったままになっている車のことが気になって、車内を覗き込んだに違いない。そこで助手席の背もたれを倒して気持ち良さそうに寝入っている真衣の姿に気づき、買い物をしている家族を待っているのだなと思っ立ち去ってくれるなら問題ないが、スカートの裾が捲れ上がったせいで半分ほどあらわになったオーバーパンツに気づかないとも限らない。それでも、オーバーパンツのことを単に季節外れの毛糸のパンツくらいに思っ済ませてくれればいいが、さほど注意深く覗き込まなかったとしても、おしっこを吸ってぷっくり膨らんだ紙おむつのせいで、その上に穿かされたオーバーパンツも、普通の毛糸のパンツとはまるで異なる丸みを帯び、真衣がスカートの中に何を着用しているのか容易に想像がついたことだろう。いや、隣の車の乗っていた人たちだけではなく、エンジンをかけたまま駐まっている車は買い物客の関心を例外なく惹くに違いないから、真衣のオーバーパンツは想像以上に大勢の目にさらされたかもしれない。

「いやあ！」

今更そんなことをしても既に手遅れだということは痛いほどわかっていながら、真衣には、慌ててスカートの裾を引っ張り、奇妙に膨れたオーバーパンツを隠すことしかできなかった。



「だから言ったのに。おしっこを出しちゃった後、ママの言う通り一緒にトイレへ行っておけばこんなことにはならなかったのよ。でも、これで、ママの言いつけをきいておけば間違いないってことがわかったでしょ？ わかったら、これからは駄々をこねないで、ママの言う通りにするのよ。真衣ちゃんはお利口さんだもの、ママの言いつけを守れるよね？ じゃ、お買い物も終わったし、お家に帰りましょうね。お家に帰ったら、真っ先に真衣ちゃんのおむつを取り替えてあげる。濡れたおむつのままだとお尻が気持ち悪いでしょうけど、もう少しだけ我慢するのよ」

真衣の狼狽えぶりを横目で眺めながら美幸は澄ました顔でそう言い、滑らかに車を発進させた。

## 《十一． おむつの中は、いつも……》

ようやく自宅に戻り、買い物袋とバッグを手に提げた美幸に続いて玄関に入った真衣だが、廊下上がる寸前のところで急に目眩を覚えて、持っていた『お土産』の紙袋を取り落とし、上がり框にへなへなと座り込んでしまった。見える物がどれもぐにやぐにや歪んで、頭がくらする

「どうしたの、真衣ちゃん!? 具合が悪いの!」

先に廊下を歩き出した美幸も異変に気づき、バッグと買い物袋を放り出すようにして真衣のかたわらに駆け寄ると、車の中でそうしたように、自分の額を真衣の額に押し当てた。だが、今度は演技ではない。

「すごい熱。歩ける、真衣ちゃん? とにかく、横になりましょう。自分のお部屋へ連れて行ってあげた方がゆっくりねんねできるんでしょうけど、階段を昇るのは無理だから、リビングルームで我慢してちょうだいね」

額を押し当ててすぐ真衣の体温が異様に高くなっていることに気づいた美幸は、真衣の左腕を自分の肩で支え上げ、腰に手をまわして抱き起こすと、そのまま、体を引きずるようにして廊下を進み、リビングルームのドアを引き開けた。

「それにしても、本当に熱が高いわね。車のクーラーをかけたままにしていたせいね、きつと」

二つ折りにした座布団を枕代わりにし、リビングルームの床に広げたバスタオルの上に寝かせた真衣の額に手の甲を押し当てて、美幸は呟いた。

空港の駐車場からクーラーをかけたっぱなしにしていた上、スーパーの駐車場ではクーラーをかけたまま眠りこんでしまった真衣。それも、起きている時はまだしも、眠っている間は自然に体温が下がるからクーラーの温度設定には気をつけなければいけないのに、紙おむつとオーバーパンツとの重ね穿きによる通気性の悪さに耐えかねて温度を低めに設定したままにしていたせいで、比較的軽装の上半身だけでなく、いつしか、おしっこを吸った紙おむつの内側まで冷たくなって体全体を冷やし続けたのが発熱の原因と断定して先ず間違いない。

その声が聞こえているのかいないのか、真衣はげえげえと喉を鳴らして浅い呼吸を繰り返すばかりだ。

「とにかく、お熱をちゃんと測ってみましょう。そうしないと、間違った対処をしちゃうかもしれないから」

瞼を閉じ時おり体をぶるると震わせる真衣の額から手を離しながら、美幸はそう言って立ち上がり、リビングルームをあとにした。

ほどなく戻ってきた美幸は、自分の部屋に置いていた簡易診療キットの入ったバッグを肩にかけ、真衣の部屋から持ってきた毛布を両手で抱えていた。

美幸は毛布をいったん部屋の一角に置き、優しい声で

「今からお熱を測るから、じっとしていてね」

と短く言つて、無造作にスカートを捲り上げ、あらわになったオーバーパンツを手早く脱がせてしまい、続けて紙おむつの側部のステッチに指をかけた。

「え？ な、なに……？」

苦しい息の下ながらも、美幸がしようとしてるのが単なる検温ではないことに気がついたのだから、真衣は二つ折りの座布団の上で弱々しく首を振った。

けれど、美幸はまるで取り合おうとしない。

「駄目よ、じっとしとかなきゃ」

とすげなく言いながら、遂に紙おむつも剥ぎ取って、真衣の下腹部を裸に剥いてしまう。

「さ、本当にじっとしていてね。じやないとお尻を怪我しちゃうかもしれないから」

美幸は真衣の左右の足首を左手でまとめて掴み、そのまま軽く差し上げた。そうすると、いやでもお尻の穴が丸見えになってしまう。

「ちよつとひんやりするけど、我慢するのよ」

美幸は、バッグの中から体温計を取り出した。表示部分は普通の大きさのデジタル表示になっているものの、全体が普通の体温計に比べて細い作りになっている、幼児用の体温計、それも、肛門に挿し入れて直腸体温を測るタイプの体温計だった。

「いや、そんなのいやあ！」

足首を差し上げられ、お尻の穴を美幸の目にさらした時点で自分が何をされようとしているのか察したのでらう、真衣は体をよじって金切り声をあげた。

しかし、両脚の自由を奪われている上に、熱のせいで体に力が入らない。しかも、対する美幸は、診察を嫌がる子供や、大人でも腹痛などに耐えかねて暴れる患者の扱いにも慣れている医師だ。真衣がその手から逃れられる筈がない。

美幸は中指の先で肛門の位置を慎重に探り、親指と人差し指で挟み持った体温計を突き立てた。

「んう！」

金切り声に代わって悲鳴めいた呻き声が真衣の口を衝いて出た。

\*

真衣の記憶は、直腸検温の後、解熱効果のある座薬を肛門に挿し入れられ、高熱が出てすぐの間は特に安静にしておかないといけないからと言いつき聞かされて鎮静剤を注射されたところで途切れていた。その後のことは、まるで気を失うようにして眠りにおちてしまったから何も憶えていない。

「う……ん」

たっぷり眠ったような気もするし一睡もしていないような気もする、奇妙な目覚めだった。真衣はのろのろと首を巡らせてガラス戸の方を見た。まだ両目の焦点は合わないものの、

外が随分明るいことだけはカーテン越しにわかる。それも、買い物を終えて帰宅した時のようなもうそろそろ日暮れが近いことを物語る頼りない明るさではなく、太陽の高さを一瞬で直感できる、そんな眩しさだ。

真衣は再びゆっくり顔を動かして、壁にかかっている時計に目をやった。古い柱時計を模したデザインの時計の針は二時半を指していた。

（やだ、昨日の夕方から眠って、もうとっくにお昼も過ぎてるんだ。丸一日近く眠ってたなんて……それに、入学してからまだ一ヶ月も経ってないのに欠席だなんて）真衣は一瞬はっとして掛時計を睨みつけたが、すぐに、（でも、仕方ないかな。もしもちゃんとした時間に目が覚めていたとしても、この調子じゃ学校なんて行けなかっただろうし）と思い直して諦めの溜息をつく。発熱直後に美幸が施した処置がよかったのだろう、倒れた時に比べると熱もかなり下がったみたいで、目の前がぐるぐる回るような感じになったりひどい悪寒を覚えるといったことはなくなっていた。ただ、まだ完治しているわけではないように、体全体が妙に怠くて、どこかをほんの少し動かすのも億劫で仕方ないといった状態だ。現に、ガラス戸の方に目をやったり時計を見上げるだけのことに、まだどこかぼんやりしている意識をありったけ集中しないと首を思うように動かせないという有様だった。

「あら、おつきしたのね、真衣ちゃん。気持よさそうにぐっすりねんねしていたわね」

真衣がもういちど溜息をつくのど殆ど同時に、ミディ丈のスカートに淡い花柄のブラウス、薄手のカーデガンといった、いかにも若奥様然としたいでたちの美幸が姿をみせた。

「学校のことは大丈夫。ママがちゃんと担任の先生に電話しておいたから。先生、近いうちに特別の行事があるわけでもないから、体に気をつけてゆっくり養生してくださいっておっしゃっていたわよ」

「え？ マ、ママが電話したの？ でも……」

美幸の説明に、真衣は訝しげな表情で聞き返した。

「ああ、真衣ちゃんがお父様と二人暮らしたということをご存じの担任の先生が私からの電話を変に思わなかったか、それが心配なのね？ でも、安心してちょうだい。私が真衣ちゃんのお父様と一緒に暮らようになるということは校長先生と教頭先生に直接お会いして予め伝えてあるのよ。その翌日には職員会議で教頭先生が先生方全員に伝えてくださっているから、担任の先生もちっとも不思議そうにはしてらっしゃらなかったわよ」

「……」

美幸の返答に、思わず真衣は押し黙ってしまった。説明の内容を訝しむのでなく、美幸が佐藤家にやって来ることを学校の先生たちが前もって知っていたと聞かされて一抹の寂しさと微かな憤りを覚えたからだ。（なによ。だったら、鈴木先生が——ママがお父さんと一緒になることを知らなかったのは私だけってことになるじゃない。そんなの、そんなのって……）真衣が胸の中でどこか恨みがましくそんなふうに呟いてしまうのも無理からぬところだろう。

「でも、それは仕方なかったのよ。だって、弟が新しく副院長に就任して、健康診断も弟が担当しますって校長先生と教頭先生には予め連絡しとかなきゃいけなかったんだもの。そんな話の流れの中で私が鈴木医院を辞める理由とか、その後どうするのかという話題になるの

も当たり前でしょう？」

美幸は僅かに肩をすくめてみせ、重ねて説明したが、それでも真衣は口をつぐんだままだった。

美幸は、真衣が唇を「へ」の字に結んだままなのを見て取ると、くすつと笑って続けた。

「あらあら、いつまでもだんまりを続けるなんて、ママが言ったことにお返事もできないような小っちゃな赤ちゃんだったのかな、真衣ちゃんは。でも、だったら仕方ないわよね。ただお喋りもできない小っちゃな赤ちゃんの真衣ちゃんにお返事してちようだいって言っても無駄なんだから」

「真衣、赤ちゃんなんかじゃない！」

これまでも何度も真衣は美幸に向かってそう抗弁してきた。そのたびに、おねしょとおもらしでおむつを汚しちやうような子が赤ちゃんじゃなくて何なんでしょうねと揶揄され、返す言葉もなく口を閉ざすしかなかったが、父親と美幸の結婚話を自分だけが直前まで聞かされていなかったという寂しさに感情の昂ぶりを抑えられず、今までになく声を荒げてしまう。

しかし、それさえ、真衣を更に子供扱いするための口実を美幸に与える結果にしかならなかった。

「ご機嫌斜めなこと。でも、そうよね。小っちゃい子は自分の思い通りにならないことがあると、それがどんな些細なことでもすぐに泣き喚いて我を通そうとするのが普通なもの、おむつの外れない真衣ちゃんがそんなふうにするのも仕方ないわよね。——それにしても、真衣ちゃんは何をそんなにむずがっているのかしら。お腹が空いちやったのかな、それとも、おむつかな」

美幸は、それこそ、目の前にいるのが本当の赤ん坊だといわんばかりの口ぶりでわざと聞こえよがしに吹き、直腸検温の後で真衣の体にかけて毛布を手早く捲り取った。

体全体があらわになった真衣は、外出時の装いではなく、美幸の手で着替えさせられたのだろう、毎夜就寝の時に身に着ける丈の短いナイティ姿をしていて、寝乱れたナイティの裾からは、これも美幸が穿き替えさせたのだろう、レモンイエローではなく淡いパステルピンクのオーバーパンツが半分ほど見えていた。両足に履いているのも、くるぶしのところ可愛らしいボンボンがあしらってあるのは同じだが、新しいオーバーパンツと同じ色合いのソックスに替わっていた。

しかし、真衣自身には、着替えさせられたという記憶はまるでない。

しかも、その時になって気づいたのだが、真衣の体を下から支えているのも、美幸が応急処置的に敷いたバスタオルではなく、ふんわりした真新しい布団だった（ただ、腿や膝の裏側から伝わってくる感触から判断するに、布団の上に直接横たわっているのではなく、体と布団の間に、なにやらパイル地らしき敷物が挟まっているようだった。それが何なのか定かではないが、普通のシーツとはまた異なる肌触りなのは確かだ）。それに合わせて、頭の下に置いてあるのも、二つ折りにした座布団などではなく、真衣が夜ごと「今夜もいい夢を見させてくださいな」とお願いをしてぼんぼんと叩いてから頭を載せる、お馴染みの枕になっ

ていた。

いくら意識が朦朧としていたとはいえ、外出着からナイテイに着替えさせられた上、バスタオルと座布団をちゃんとした布団と枕に取り替えられている最中、そのことにまるで気がつかないなどということがあるだろうか。

真衣は、やはりまだなかなか思ったように動かせない首を僅かに巡らせ、毛布をたたんでいる美幸の横顔を見上げた。

と、視線に気づいた美幸が真衣の顔を見おろし、あたかも、真衣の脳裏をよぎった疑念を見透かしたかのように軽く頷いてみせた。

それから美幸はもういちど小さく頷くと、診察室で見せるのと同じ改まった顔になって言った。

「熱が出るということは、体の免疫機能がちゃんと働いている証拠なのよ。体に侵入してきた菌やウイルスをそれ以上は体の内部に入れさせないように防御する機能を司るのがリンパ節で、リンパ節の指示によって白血球とかが菌やウイルスに攻撃をくわえるわけ。その結果として、リンパ節のある体の節々が痛んだり、熱が出たりするのね。———というか、特にウイルスに対しては、熱そのものが有効な武器になるのよ。ウイルスは一般的に、寒さには強いんだけど、高温には弱い。だから、ウイルスが体に侵入したことを感知すると、体は細胞を激しく振動させて、熱を発生させるような仕組みになっているの。この振動が、全体としては体の震えとして現れるというわけね。しかも、体をわざと震わせるために、脳が一種の暗示をかけるような仕組みにもなっているの。本能を司る脳の部分が『今、体はとっても冷たい状態にあるんだよ』って偽の情報を体に伝えるのね。そうすると、体は、凍え死んじやいけないぞってことで、熱を発生させるために頑張って細胞を振動させ始めるのね。そんな偽の寒さが、つまり、風邪をひいた時なんかの悪寒として認知されるといわけなのよ」

美幸はそこまで言っただけ間を置き、真衣の様子を窺いながら説明を続けた。

「だから、熱が高いからといって、むやみに解熱剤を投与するのも考えものなのよ。体温を平熱くらいまで下げるといことは、ウイルスを叩く有効な武器を自ら放棄することを意味しているから、免疫機能に重点を置くと、熱は高いまま維持しておきたいわけね。でも、そうすると、自分の体が保たない。そのへんの兼ね合いで、体が我慢できるかどうかというぎりぎりまで体温を高めておくのが妥当なところね。ただ、そういう状態が続くと、肉体的にはなんとかなっても、精神的にまいっちゃうことが多いの。体がだるくて、節々が痛くて、目眩も起きるとい気分が悪い状態が延々と続くから。———そのへんのところを考え合わせ、私が真衣ちゃんに施したのは、解熱剤は投与するけど、体温は体が耐えられるぎりぎりのところまでしか下げないように調整して、同時に、精神面の負担を減らすために鎮静剤を投与するという治療方法だったのよ。つまり、なるべく体温は高いままにしておいて、その間、鎮静剤の力で意識レベルを下げておくという方法ね。で、意識が戻りそうになると鎮静剤を追加するためにまた注射するということを繰り返して。これなら、真衣ちゃんが眠っている間に自分の免疫機能がウイルスと戦ってくれることになるから、あまり苦しい目に遭わずにすむのよ」

そこまで聞かされて、ようやく真衣も理解した。要するに、注射された鎮静剤のせいで殆

ど完全に意識を失ってしまったっていたわけだ。その間に着替えさせられたとしても、布団を取り替えられたとしても、気づく筈がない。

が、そのへんの事情がわかったからといって、安堵の表情を浮かべるわけにはいかなかった。ふと或ることに思い至った真衣の顔がみるみる曇る。

そんな表情の変化もたちどころに読み取ったのだろう、美幸が尚も言葉を重ねた。

「そうよ、お薬でおねむの間、真衣ちゃんは一度もトイレへ行っていないのよ。もつとも、途中で意識を取り戻してトイレへ行っていたとしても、真衣ちゃんが勝手に便器の蓋を開けることはできないから、結果は同じだったに決まっているんだけどね。ええ、そう。真衣ちゃんはおしっこをしたくなるたびにおむつを汚しちゃっていたのよ。お薬でねんねしてから今まで、何度も何度も」

美幸は『何度も何度も』という部分を強調して言い、真衣を横たわらせるために部屋の隅に片づけたガラス製の座卓の上に置いてあるリモコンを持ち上げて、テレビのスイッチを入れた。

「——にちは。天気予報をお伝えします。本日は4月××日の水曜日、四月も終盤に差し掛かり、日ごと太陽の日差しが強まってくる季節です。日焼け止めの準備を始めても決して早くありません。では、地域の予報の前に、全国各地の様子を伝えていただきます。まずは、××放送局の——」

スイッチを入れると同時に若い女性キャスターのアップが映り、それに続いて、どこかの公園の様子が映し出される。画面の女性キャスターが日付を告げた途端、真衣は両目を大きく見開いた。

（え、水曜日!? 確かに水曜日って言ったわよね。てっきり月曜日だとばかり思っていたのに……。じゃ、じゃ私は、日曜日の夕方前から今まで、丸三日間近くも眠っていたの!?）信じられない思いでテレビを睨みつける真衣だったが、画面の左上に表示されている日付も、確かに、女性キャスターが告げた通り水曜日になっていた。

「相変わらず二時間に一度の割合でおねしょしちゃうから、これまでに何枚おむつを使っちゃったかしら。真衣ちゃんが自分で買っていた分はとくに使い終わっちゃったから、新しいのを用意しなきゃいけないかったのよ。ま、とはいっても、医院に出入りしている業者さんにお願いで安く仕入れられるからいいんだけどね。それに、担当が親切な人で、別の病院へ行く途中にちょっとだけ寄り道してもらって配達もしてもらえるし」

美幸はリモコンを座卓に戻して、部屋の一角を指差した。

「……!」

のろのろと顔を動かし、美幸が指差す方に目をやった真衣の口を言葉にならない呻き声が衝いて出た。

そこにあるのは、美幸が脱衣場から持ってきたと思われる脱衣籠だったが、その大振りのバスケットの中には、真衣が遠くのドラッグストアへ足を運んで買い求めているのと同じ淡いピンクの紙おむつが何枚も重ねて入れてあった。真衣が人目を憚って買ってくる小さなパッケージには、元からそれほどの枚数が入っていない。美幸の言う通り、それが新しいパッケージ、それもかなり大きなパッケージから取り出して脱衣籠に移し替えたものなのは明か

だった。しかも、高く積み重なった紙おむつのすぐそばには、色とりどりのオーバーパンツが何枚か、きちんとたたんで収めてあった。たくさんの紙おむつと、おむつの上に穿くオーバーパンツを収納したバスケットがリビングルームの床に置いてあるその光景は、頻繁におむつを汚してしまう赤ん坊がいる家庭によく見られる光景そのままだった。

「持って来てくれた人は医院にもよく顔を見せる人なんだけど、さすがに、普通の家庭に業務用の包みを配達したのは初めてだそうで、とってもびっくりしていたわよ。『先生、鈴木医院を辞めた後、この家で介護のデーサービスでも始める計画なんですか？』だなんて訊いてくるんだもん、笑っちゃった。ちよつとワケ有りなのよってごまかしたけど、まさか、高校生の女の子が一人でそんなにたくさん紙おむつを汚しちゃうなんて思いもよらないわよね、普通は。——あ、まさか、義理の娘が使うのよなんて言っただけから心配しないでね」

最後の方は取りなすように言った美幸だが、その実、配達員とのやり取りの内容を聞かされた真衣がどんな顔をして恥ずかしがるのかを眺めて胸の中で悪戯っぽく舌を突き出しているのは言うまでもないところだ。

「本当のことを言うと業務用の包みなんて枚数が多すぎたかなとも思ったんだけど、真衣ちゃんがおむつを汚しちゃうペースを改めて考えると、すぐなくなっちゃいそうだから、無駄にならずにすみそうで安心したわ。現に、もう、包みの半分くらいしか残ってないんだもの」

美幸は真衣の羞恥を尚もくすぐるようにそう言ってから、意味ありげな笑みを浮かべてこんなことを付け加えた。

「あ、そうそう。言い忘れていたけど、鎮静剤は二種類のお薬を注射しておいたのよ。一種類は精神に作用して意識レベルを下げるお薬。もう一種類は神経系統に作用して随意筋の収縮を抑制する効果のあるお薬。最初のは、さつき説明したように、つまり、真衣ちゃんをずっとねんねさせておくためのお薬ね。それで、もう一つのは、ええと、真衣ちゃん、保健体育か理科で『随意筋』という言葉の意味は習った？ うん、そう。自分の意志でコントロールできない筋肉が不随意筋で、これは内臓の筋肉だと思えばいいわ。それと反対に自分の意志で動かせるのが、手とか脚とかの筋肉で、これが随意筋ね。で、随意筋は収縮することを出す仕組みになってるんだけど、ママが真衣ちゃんに注射したもうひとつのお薬というのは、この収縮を抑える効果を持つているの。要するに、手とか脚とか腰とかの筋肉に力を出させない、つまり、自由に動けなくするためのお薬ってこと。真衣ちゃんが無意識のうちに暴れちゃうようなことにならないよう、このお薬も注射しておいてあげたのよ。意識レベルを下げてねんねしていても、熱が高いと本能的に体が動いて、せつかく体を冷やさないと、ようかけておいてあげた毛布を跳ね飛ばしたり、へたしたら、夢遊病みたいな感じでうろついたりすることもあるから、それを防ぐためにね。真衣ちゃん、おつきしてから、私の顔を見上げる時やテレビの方に振り向く時、首や顔が思うように動かさなくてちよっぴり困ったでしょう？ それも、そのお薬が首の筋肉や顔の筋肉の動きを抑制しているからなのよ。精神に作用するお薬はそろそろ効き目がなくなってきたみたいだけど、もう一つのお薬の効果が切れるのには、最少有効投与単位とかの関係で、もう少し時間がかかるんじゃないかな。——でも、そのお薬を注射しておいたおかげで、意外なことにも役立ったのよ。ま、



今になって考えれば、そういう使い方があるのも当たり前のことだったんだけどね、実は」  
そこで少し間を空けた後、美幸は謎々の答を教えるかのような口調で続けた。

「だって、随意筋というのには、手とか脚とか腰にしかないわけじゃないんだもの。指先や唇を動かすのも随意筋の働きだし、それに、実は、内臓だって、不随意筋だけでできているわけじゃないのよ。例えば、おしっこを溜めておく膀胱もそうよ。膀胱でおしっこを出したり我慢したりする仕組みは、おおまかに言って、三つの筋肉で構成されているの。一つ目は、膀胱そのものといってもいい排尿筋で、二つめが、膀胱の出口にある内尿道括約筋。この二つは自分の意志ではコントロールできない不随意筋で、おしっこが或る程度まで溜まると、排尿筋が収縮すると同時に内尿道括約筋が弛緩しておしっこを膀胱から押し出すような動きをするの。でも、それだと我慢が利かないから、自分の意志でコントロールできる随意筋でできた三つ目の外尿道括約筋というのが組み合わさっていて、これが、おしっここの通り道を狭めたりする、蛇口みたいな働きをしているのね。それで、おしっこをしたくなってもすぐに出ちゃわないでトイレへ行くまで我慢できるようになっているのよ」

次第に真衣にも美幸が何を言おうとしているのか、おぼろげにわかってきた。

「で、今になって考えれば最初から予想できたことなんだけど、注射したもう一つのお薬は当然、膀胱の外尿道括約筋の働きも抑制するわけよ。つまり、おしっここの通り道に付いている蛇口が緩んだまま、いくら閉めようと思っても閉まらないということになるわけね、簡単に言っちゃえば。でも、そのおかげで、真衣ちゃんはおねむの間、苦しまずにすんだのよ。真衣ちゃんたら、ママのおっぱいを吸いながらじゃやないとおしっこができなくなっちゃってたわよね。それまではシーツや枕をちゅちゅしながらおねしょしてたけど、ママが初めて添い寝してあげてしばらくすると、すっかり甘えん坊さんになっちゃって、ママのおっぱいをちゅちゅばしながらじゃやないとおねしょもおもらしもできなくなっちゃったよね。でも、ママもいろいろ忙しくて、昼間も夜中も関係なしに二時間ごとにおっぱいをあげるののは難しいのよ。生まれたての赤ちゃんでも三時間ごとのおっぱいなのに、それよりも手間のかかる真衣ちゃんのペースに合わせるの大変なんだから。なのに、そうしないと、おしっこができなくて真衣ちゃんが可哀想」

美幸は自分の胸にそっと掌を押し当てた。

「でも、そのお薬のおかげで、外尿道括約筋の力が弱くなって、おしっここの通り道が簡単に広がるようになったの。だから、わざわざママがおっぱいをあげなくても、おしっこをしたくなったらすぐに出るようになったのよ。もともと、シーツや枕をちゅちゅしながらっていう癖が治ったわけじゃないし、頃合いを見計らって添い寝をしてあげたら、やっぱりママのおっぱいにむしゃぶりついてきたけどね。ま、おっぱいを吸わなくてもおしっこができるようになる効き目はあっても、おっぱい離れできるようにするためのお薬じゃないんだから、それは仕方ないかな。それに、真衣ちゃんがおっぱいを欲しがらなくなったら、ママも寂しいし」

美幸は自分の胸に押し当てていた手を動かし、人差し指の先で真衣の唇をつつとなぞった。「さ、おむつを取り替えようね。三十分ほど前に様子を見に来た時、真衣ちゃん、毛布の端をちゅちゅしそうにしていたから、もうそろそろ、おしっこ出ちゃったんじゃないかな。」

濡れたおむつのままだとお尻が気持ち悪いでしょ？ それに、おむつの中が蒸れてくるし」  
気を失ってからこちら自分がどんな状況に置かれていたのか、そればかりが気になって殆ど感じることもなかった下腹部のじととした湿っぽい肌触り。けれど、美幸の言葉を耳にした途端、これまで数え切れないほど経験してきたくせに決して慣れることのないそのじつとりのした感触を、否が応でも意識せざるを得なくなってしまう。

「真衣ちゃん、お薬のせいであんよもお手々もあまり動かせない筈なのに、一昨日のお昼過ぎくらいから、おねむしているくせに、お手々をオーバーパンツの上でもぞもぞさせているのよ。どうしてそんなことをするのか、おむつを取り替えるついでに調べてみようね」

美幸は、真衣が思わず顔をしかめる様子を眺めながら、微かに笑いを含んだ声でそう付け加えた。

無意識のまま両手をオーバーパンツの上に這わせるといふ真衣の行為の意味を、美幸はとつづくに理解している。理解していながら、真衣に自分の目でそれを確認させたくてたまらない。

「じゃ、オーバーパンツを脱がせておむつを外してあげるから、じつとしているのよ。ま、もっとも、随意筋の動きを抑制するお薬の効き目がまだ残っているから、脚をばたつかせようとしても自由にならないでしょうけど。うふふ、真衣ちゃんが駄々をこねてママの言うことをきかない時にも役に立ちそうね、このお薬。医院から持ってきておいて本当によかったわ」

美幸はオーバーパンツのウエスト部分に両手の指をかけてふくらはぎのあたりまで引き下ろし、サイドステッチを破って紙おむつを真衣の下腹部から矧ぎ取った。

「真衣ちゃんが何度か何度もおむつを汚してくれたから、膀胱にどれだけおしっこを溜められるのか、かなり正確に測ることができたのよ。誤差範囲をきちんと確定できるまで測定回数をおこなすことができた上、ママのおっぱいを吸いながらじゃないと出せないほど我慢をした後のおしっこだから、それを膀胱の限界容量と見なしても問題なさそうだという判断もできたし。ママの言いつけをまもっておしっこを我慢できて、本当にお利口さんだわ、真衣ちゃん。だから、このおむつはもうポイしちゃおうね。でも、膀胱に溜められるおしっこの量を少しでも増やすために、これからも、ぎりぎりまで我慢する練習は続けるのよ」

美幸は、おしっこを吸って重くなった紙おむつを手早く丸めてテープ留めし、ビニール袋に詰め込んだ。もともと、紙おむつが吸収したおしっこの重さを量り始めたのには、膀胱の容量を推量するという目的もあったが、それよりも、真衣の羞恥をくすぐることによって精神的に不安定な状態にさせ赤ちゃん返りを進ませるための手段という意味合いの方が強い。その企みをほぼ達成した今、わざわざ面倒くさい測定を続ける意味はない。美幸の真意は、つまり、そういうことだ。

各々の自治体によって取り扱いには異なるが、真衣の住んでいる地域では使用済みの紙おむつは燃えるゴミとして処分される。赤ん坊が汚したたくさんのおしっこを混ぜて自分のおしっこを吸い取った紙おむつが焼却炉へ向かうコンベアに載せられ運ばれて行く光景が脳裏をよぎって、真衣の頬に朱が差した。

「それにしても、こうして改めて見てみると、本当にたくさん汚しちゃったものね。この内

の何回かはおしっこが横漏れしちゃって、オーバーパンツまで濡らしちゃったのよ。ま、おねしょの回数が多いとそんなことがあるのも仕方ないんだけど。でも、お買い物に寄ったスーパーのベビー用品コーナーで念のためと思っておねしょシートを買っておいてよかったじゃないきゃ、お客様用の新しいお布団に大きなシミが付いちやうところだったわ」

美幸は、紙おむつでいっぱいになったビニール袋を両手で抱え上げて真衣に見せつけた後、真衣のお尻と布団との間に敷いたパイル地の敷物を掌でぼんと叩いた。

そう。美幸の言う通り、真衣は、布団の上に広げたおねしょシートの上に寝かされていたのだ。もつとも、それも、布団を汚さないようにするのではなく、真衣を赤ん坊扱いするための小道具の一つとして買い求めたというのが本当のところだ。ベビー服とも見紛うような丈の短いナイティの裾を捲り上げられ、ニットのオーバーパンツをふくらはぎに絡ませ、紙おむつを外されたばかりの下腹部をあらわにしておねしょシートの上に寝そべっている真衣の姿は、美幸の迷惑通り、自分では何もできない無力な赤ん坊そのままにしか見えなくなっている。しかし美幸は、そんな真衣の姿にもまだまだ満足していなかった。

「それじゃ、真衣ちゃんがオーバーパンツの上でお手々をもぞもぞしていた理由を調べてみましょうね。どこか痒いところがあつたのかな」

美幸はゆっくりとした動作で真衣の下腹部に顔を近づけた。

「いや、見ないで……やだつては……」

吐息がかかるのではないかと思うほど顔を近づけて下腹部を凝視する美幸に向かって、薬によって手足の自由を奪われてしまっている真衣は懇願するしかなかった。幼児がいやいやをするように枕の上で首を横に振るのだが、それさえも思うように動かせない。しかも、「ママが電話したの？」と聞き直した時もそうだったが、唇と舌にも薬の効き目が及んでいるせいで、悲痛な懇願さえもが、たどたどしい口調になってしまう。

「今更なにを言っているの、真衣ちゃんたら。ママは診察室でも真衣ちゃんの恥ずかしいところを丁寧に診察してあげたし、このお家に来てきからも何度もおむつを取り替えてあげているのよ。それなのに、今になってなにを恥ずかしがっているのかしら」

美幸はわざとらしい笑い声と共に真衣の下腹部を無遠慮に眺めまわした。

いや、実は、わざわざそんなことをしなくても、美幸には真衣の下腹部がどんな状態になっているのか、とつづくにわかっていた。おむつを取り替えるたびに幾度となく真衣の下腹部の様子をじっくり観察していたし、真衣が無意識のうちにオーバーパンツの上に手を這わせる様子を見た瞬間、ぴんと来るものがあつた。しかし、それを美幸の方から言葉にして伝えるのではなく、真衣に自分の目で直視させなければ面白くないから、こんな手間をかけているというわけだ。

「だ、だって……」

本当のところをいうと、真衣も自分の下腹部がどんなことになっているのか、およその想像はついていた。無意識のうちに手をもぞもぞさせていたことまでは知らなかったものの、目が覚めて意識が戻ってからは、股間からお尻にかけてのあたりが痒くて堪らないのは事実だった。それがどういふことなのか、おねしょが始まってしばらく経つた頃から渋々おむつ

を使い始め、それに対してどのようにスキンケアをしなければいけないか家庭用の医学書で調べたことのある真衣には思い当たる節があった。そして、だからこそ、真衣は美幸の視線から逃れようとして、自由にならない体で身をすくめるのだった。

「見てごらんなさい。これ、なんだと思う？」

美幸はしばらく真衣の下腹部に視線を這わせてから、簡易診療キットのバッグから大振りの手鏡を取り出し、真衣の体の上にかざすと、微妙に角度を調整した。

美幸に言われて手鏡を見上げた真衣がはっと息を飲む。そこには、自分の下腹部がくつきり映し出されていた。

「ほら、ずっとおむつにくるまれている所、特に、女の子の大事なところから太腿の内側、それにお尻にかけてのあたりが他の部分に比べて赤くなっているのがわかるでしょう？　これ、なんだと思う？　あせもかな、それとも——」

美幸は手鏡の角度を少しづつ変えながら、それが何なのかとつくにわかっているくせに、わざとらしく真衣に問いかけた。

「……」

真衣の方もそれが何なのか充分に承知していながらも、答えることはできないでいた。それは、口に出すにはあまりにも恥ずかしい言葉だった。

「おむつを取り替えてあげるたびに、お肌に残ったおしっここの雫はお尻拭きできちんと拭き取っているつもりんだけど、注意が足りなかったのかしら。可愛い娘、それも、まだおむつ離れできない赤ちゃんのお尻をこんなふうにしちゃうなんて、ママったら母親失格ね」

美幸は尚も手鏡をかざし、下腹部の様子を満遍なく真衣に見せつけながら、思わせぶりに溜息をついてみせた。

そうして、手鏡をバッグに戻し、代わりに、なにやら小振りの丸い容器を取り出す。

「でも、くよくよばかりしていてもどうしようもないわよね。どうしてこんなことになっちゃったんだろうっていつまでも思案するより、今は、これを治療する手立てを考えるのが先決なもの」

美幸は、容器の蓋をきゅつと捻った。

「皮膚科を専門にやっている知り合いのお医者様に分けてもらったの。このお薬、とっても評判がいいらしいのよ。ステロイドを含んでいないから常習性の問題はないし、患部の痛みを抑える効果もあるから、赤ちゃんのデリケートなお肌にもお勧めなんだって」

美幸は、蓋を開けた容器を真衣の目の前に突きつけた。中には、白い塗り薬が入っている。「そう、ちよつとした注意不足ですぐにおむつかぶれになっちゃうような赤ちゃんのお肌だね。わかった？　これは、おむつかぶれのお薬なのよ」

おむつかぶれ。

真衣の下腹部の皮膚が赤くなっているのは、まさしく美幸の指摘通り、おむつかぶれの症状だった。ただ、まだ程度は軽くて、皮膚が微かに赤みを帯びているものの、ひどく爛れているわけではなく、痛みよりも痒みを感じるといった段階だろう。真衣が無意識のうちにオーバーパンツの上から自分の下腹部を掻くような仕事をしていたのは、その痒さに耐えかねてのことに違いない。

高校生にもなっておむつかぶれのせいで赤くなったお尻を人目にさらす惨めさに唇を噛みしめる他ない真衣。

だが、この屈辱きわまりないおむつかぶれさえもが美幸の企みの結果だった。

真衣が嫌々ながら紙おむつを使い始めてから、既に二ヶ月ほどになる。その間、おむつを濡らさない日は一日たりとしてなかった。しかも真夜中におむつを濡らしてしまってもそれに気づくことなく朝までぐっすりだから、おむつの内側は長時間にわたって湿っぽい状態が続いていたことになる。それでも、季節柄、温度の低い日ばかりだったという事情に加え、紙おむつの上には何も穿いていなかったということもあって、おむつの中が蒸れて仕方ないというような状況には至っていなかった。なのに、美幸が佐藤家にやって来て以後は、夜は言うに及ばず昼間もおむつを着けさせられ、なおかつ、その上にオーバーパンツを穿いての生活を強要され続ける羽目になってしまった。おむつでなかったのは、ターミナル駅の商業施設に出かけた時だけだ。しかし、その時も、分厚いトレーニングパンツとニットのオーバーパンツの重ね穿きだったから、通気性の悪さではおむつと変わらない。加えて、この日曜日以後は陽気の加減で気温も上がってきたところに持って来て、体を毛布ですっぽり覆われた状態で眠り続けていたから、おむつの中の蒸れ具合は筆舌に尽くせないほどだった。それも、薬の力で意識を失わされていたから暑さを感じることもなく、たとえ暑さを感じたとしても、やはり薬のせいで手足の自由を殆ど奪われていたため、毛布を跳ね飛ばすこともかなわないという状態に置かれていたから尚更だ。

そう。それまでかろうじて免れていたおむつかぶれの症状が一昨日あたりから急に現れ出したのも、美幸の企みの結果なのだった。

「じゃ、早速お薬を塗ってあげるわね。赤ちゃんみたいにすぐおむつかぶれになっちゃう真衣ちゃんの柔らかなお肌。——あ、でも、その前に」

容器に人差し指を突っ込んで今にも薬を掬い取ろうとしていた美幸だったが、急に思わせぶりな態度で薬の容器を床に置き、自分の企みのせいで赤くなった真衣の下腹部を改めて満足そうに眺めながら

「赤ちゃんとお真衣ちゃんのここ、違うところが一つだけあるわね。真衣ちゃん、どこが赤ちゃんと違うか、自分でわかるかな？」

「ほら、どこが違うかな？」

思わず目をそむけようとする真衣の頬を美幸は掌で包み込むようにして、顔を強引に鏡の方に向けさせた。そうして、さっきのように、下腹部全体を余すところなく真衣に見せつけるために手鏡の角度を少しずつ変えてゆき、或る部分が鏡に映ったところで手の動きをびたつと止めた。

「真衣ちゃんのお肌はつるつるでぶるんぶるんだよね。おしっこの雫が付いてもすぐに弾き飛ばしちゃうほどみずみずしいし、ママの肌なんかとは比べものにならないくらい綺麗で若々しくて、本当、赤ちゃんのお肌みたいで羨ましくなっちゃう。でも、一つだけ、赤ちゃんと違うところがあるのよ。もうわかったでしょ？ そう、ここのことよ」

美幸は、真衣の実際の下腹部と鏡に映る下腹部の或る箇所とを交互に指差した。

美幸が指で差し示したのは、同年代の女の子たちと比べれば豊かとは言えないものの、その幾分まばらな感じが真衣のおとなしさを象徴しているようで却って好感の持てる下腹部の飾り毛だった。

「赤ちゃんは、おむつかぶれになっても、お薬を塗ってあげれば割と早く治るのよ。それは、赤ちゃんのお肌がお薬にも敏感だつていう理由もあるんだけど、それだけじゃなくて、赤ちゃんのここには邪魔な物が何も無いからつていう理由もあるんだそうよ。おへソのすぐ下から大事なところを通つてお尻まで何もなくて、本当につるつるだから、お薬を満遍なく塗ることができるし、それに、おしっこをした後、おしっこの雫を拭き取つてあげる時に拭き残しにならないんだつて。でも、真衣ちゃんのここには、こんな物が生えちゃつてるのよね。これじゃ、いくら綺麗に拭いてあげたつもりでも、おしっこの雫が毛の根本に残っちゃうわよね。それに、お薬をつけてあげるにしても、邪魔な物が生えていると塗り残しができちゃうし。こんなだと、いつまでもおむつかぶれが治らないかもしれないわね、真衣ちゃんは」

美幸は真衣の下腹部を黒く彩っているちぢれ毛をさわつと撫でた。

「いやつ。そんなの、駄目……」

美幸が何を言おうとしているのかようやく察した真衣は悲痛な叫び声をあげた。

だが、本人は叫んだつもりでも、薬の作用によつて舌や唇、声帯の力まで弱められてしまつているせいで、幼児が駄々をこねて泣き疲れてしまつた後のような細くたどしく声にしかならない。

「何度も教えてあげた筈よ、我儘ばかり言っちゃいけないのよつて。それとも真衣ちゃんはずっとおむつかぶれが治らなくてもいいの？ 真衣ちゃんがそれでいいつて言うんだつたら、ママもいいわよ、それで。だけど、可愛い娘がおむつかぶれになつているのにそのまま放つておくわけにはいかないから、完全には治らなくても、一応は皮膚科のお医者様に診てもらわないといけないわね。おむつかぶれのお薬を分けてくださった知り合いのお医者様つていうのはママの弟と同級生で、まだ三十歳になつていない上にハンサムだから、赤ちゃん連れの若いお母さんたちに大人気なの。真衣ちゃんもそんな格好いいお医者さまに診てもらつたら嬉しいでしょ？ 若くてハンサムなお医者様にじっくり診察してもらえつてわかつたら、今から楽しみよね。それに、真衣ちゃんはずつとおむつかぶれが治らなくてもいいんだから、いつまでもお医者様の所に通えるのよ。ママがお願いしたら毎日でも診てくれるわよ、きっと。なんなら、今からでも連れて行つてあげましょうか。今日から毎日、格好いい先生にオーバーパンツを脱がせてもらつておむつを外してもらつてじっくり診てもらつて、診察が終わつた後は、やつぱり、そのハンサムな先生におむつをあててもらえるのよ。よかつたわね、真衣ちゃん」

美幸はすつと目を細め、真衣の顔を見おろして言つた。

「だ、駄目……やだ、そんなの……」

真衣の脳裏を、若い男性医師の手でおむつを外され、飾り毛を掻き分けるようにして秘部を覗き込まれる自分の姿がよぎつた。

「じゃ、どうするの？」

美幸は鋭い声で短く言って、刃先が丸くなったハサミや鋭い刃のついた剃刀、医療用の薄いゴム手袋といった剃毛用の器具を次々にバッグから取り出し、布団の横に並べ始めた。

もう真衣の口からは、それを拒否する言葉は出てこなかった。

今の真衣にできるのは、わなわな震える唇を固く閉ざし、今は亡き母親に胸の中で救いを求めることだけだった。

（助けて、助けてよ、お母さん。真衣、このままだったら赤ちゃんになっちゃうよ。新しいママの手で赤ちゃんにされちゃうよ。だから助けてっば、お母さん）

外出時にもスカートの下にはトレーニングパンツかおむつの着用を強要され、家の中ではおむつと丈の短いナイティに可愛らしいソックスを身に着けさせられた上で、それこそ、まだおむつの外れない赤ん坊めいた生活を強いられる真衣。そんな真衣にとつて、下腹部の黒い茂みこそが、自分は大人なんだということを改めて思い起こさせてくれる唯一のシルシだった。そのたった一つ残った心の拠り所まで美幸の手で剃り落とされようとしている今、真衣は母親の面影にすがりしかなかった。

けれど、真衣の心の中にぼんやり浮かび上がった母親の面影は真衣に向かって手を差し延べようとはせず、静かな微笑みをたたえているだけだった。

「黙っているところを見ると、やっぱり、おむつかぶれを治してほしいのね？ いいわよ、わかった。それじゃ、おしっこが残らないように、それと、お薬を満遍なく濡れるように、少しでも邪魔になりそうな物は処分しちやおうね。そうすれば、真衣ちゃんのこども赤ちゃんと同じ、つるつるになるのよ。真衣ちゃんのおむつの中はいつもおしっこでびっしょり。だから、これ以上おむつかぶれがひどくならないよう綺麗にしとかないといけないのよ。いつもじっとり湿っばいおむつの中だからこそ、いつも綺麗にね」

美幸は舌なめずりせんばかりにそう言っつて、刃先が丸くなった剃毛用のハサミに手を伸ばした。

電源を入れたままになっているテレビは、いつのまにか天気予報が終わり、幼児向けの番組に替わっていた。その中で体操のお兄さんや歌のお姉さんと一緒に遊戯をしている子供たちは保育園や幼稚園に通うくらいの年頃だろうか。そんな子供たちよりも更に幼い赤ん坊に変貌させられようとしている真衣の胸の中で、母親の面影は、やはり静かに微笑んでいるだけだった。

## 《十二》 突然の来訪者》

真衣のたった一つ残っていた大人としてのシルシを剃り落してから、おむつかぶれの薬を塗り込み、直腸検温を済ませて新しいおむつを着用させた後ふと姿を消した美幸だが、ほどなく、白いプラスチック製のトレイを捧げ持ってリビングルームに戻ってきた。

真衣はその白いトレイを目にした途端なんとも言いようのない胸騒ぎを覚えたが、新しい紙おむつを着用させられ、その上に再びオーバーパンツを穿かされる間も美幸のなすがままで、しかも、今度は体全体ではなくお腹から下にかけてかけられた毛布を蹴り飛ばすこともできないくらい手足の力を弱められている身としては、美幸の動きを不安混じりの視線で追いかけるしかなかった。

一方、真衣の胸の内などすっかりお見通しの美幸はうつすらと笑みを浮かべてこちらに近づくと、横になっている真衣の顔のすぐそばにそっとトレイを置いて床の上に正座をし、

「おねむの間、ミルクは飲ませてあげていたけど、ご飯は食べさせてあげられなかったからお腹が空いたでしょう？ もう熱も下がって食欲も出てきている筈だから、ちよっと中途半端な時間だけご飯にしようね。真衣ちゃんはお手々を動かさせないけどママが食べさせてあげるから心配しなくていいのよ」

とわざと優しく話しかけながら枕をどけて、その代わりに、自分の膝頭を横から真衣の頭の下に差し入れた。

「どう、ママの膝枕は気持ちいいでしょ？ おねむの時はママの腕枕で、まんまの時はママの膝枕よ。だって、真衣ちゃんはまだ自分でまんまを食べられない赤ちゃんだものね。だから、赤ちゃん

用の食器に赤ちゃん用のまんまを入れて持ってきてあげたのよ」

美幸は自分の太腿の上に真衣の後頭部が載るように脚を動かし、トレイを手元に引き寄せ、その





上に並んでいる様々な食器を順番に指差した。

「ほら、お粥さんのお茶碗に、野菜のペーストが入ったお皿、それに、チキンスープのカップに、プリンの小さなお皿もあるでしょう？ 電子レンジでチンしたけど、あまり熱くならないよう注意しておいたから、すぐに食べさせてあげるわね」

トレイの上に並んでいるのは、可愛らしいイラストをあしらったプラスチック製の幼児用の食器ばかりだった。しかも、各々の食器に盛りつけてあるのは、レトルトパックや壺詰から移し替えて温めた離乳食。

美幸は、スプーンを持ち上げると、カップからスープを掬い取って真衣の口に押し当てた。「や、やだ……そんな、赤ちゃんのご飯なんて」

真衣は唇を閉ざし、くぐもった声で呻いた。

「だって、真衣ちゃんは赤ちゃんなのよ。赤ちゃんが赤ちゃんのまんまを嫌がるなんて変だと思わない？ それに、丸三日近くも真衣ちゃんは何も食べないでねんねしていたのよ。そんなところへ急に大人用の固いご飯を食べたりしたら、お腹の調子がおかしくなっちゃうじやない。その点、赤ちゃんのまんまはどれも柔らかいから、お腹に優しいのよ。だから、ちゃんと食べようね。やっぱり、最初はスープがいいかな」

美幸は口調こそ幼児に言い聞かせるように優しくかったが、その実、身のこなしは少しばかり強引で、スプーンをますます強く真衣の口に押し当てた。

それでも真衣は決して唇を開こうとしないものだから、とうとうスプーンが傾いてスープがこぼれてしまう。

スプーンからこぼれ出たスープは真衣の唇を濡らし、そのまま顎の方へ伝い流れて、顎先から胸元へ滴り落ちた。

「やっぱり真衣ちゃんはまだまだおっぱい離れのできない赤ちゃんなのね。離乳食の中でも一番食べやすいスープをこぼしちゃうんだもの。でも、おっぱいばかりだとおつきくなれないから、まんまを食べるお稽古もしなきゃいけないのよ。ちよっとくらいこぼしても着ている物を汚さなくてもすむようにしてあげるから、まんまのお稽古を続けようね」

真衣の顎先から胸元へ滴り落ちてナイティにシミをつくるスープの雫を目で追いながら、美幸はまるで叱責する様子もなく、むしろ思惑通りに事が運んでいることに満足するかのようにはやく笑って、すっかりスープがこぼれ出てしまったスプーンをトレイに戻し、その代わりに、やはりトレイの上に置いてあった小物を取り上げた。

それは、アニメ風なデフォルメした兎の顔を模したバネ仕掛けの二つのクリップを、表面を愛らしいイラストをあしらった布で覆った幅の広いゴム紐ではないであるという簡単な仕組みの小物だったが、何をやる物なのか一見しただけでは真衣にはわからなかった。それでも、わざわざ美幸が幼児用の食器と共に用意していた物だということを考えれば、真衣のことを赤ん坊扱いするための小道具なのは容易に想像がつく。

美幸は、やはりこれもトレイに置いて持ってきていたパイル地のフェイスタオルを両手でぱつと広げ、広げたフェイスタオルで真衣の胸元を覆うと、タオルの、真衣の喉に触れる方の縁にクリップを取り付け、二つのクリップどうしを繋いでいるゴム紐を真衣の首筋の後ろにまわして長さを調節した。こうすると、真衣の胸元を覆うタオルは美幸が手を離したり真

衣が体を動かしたりしてもずり落ちることがなくなる。美幸が用意していた小物は、フェイスタオルや比較的大きめのハンドタオルなどを即席のよだれかけとして使えるようにするためのベビータオルクリップだったというわけだ。

「さ、これでいいわ。これで着ている物を汚す心配はなくなったから、お稽古を続けようね。それに、もしもこれでも着ている物が汚れちゃうことがあってもママは絶対に真衣ちゃんのことを叱ったりしないから安心していいのよ。だって、おむつの赤ちゃんが最初から上手にまんまを食べられるわけないんだもの。ママのおっぱいをせがんで仕方ない赤ちゃんがまんまをちゃんと食べられるようになるのに、汚れ物がたくさんできちゃうのは当たり前のことだもの」

美幸は、簡易よだれかけの縁に沿って真衣の胸元を指先でつーつとなぞってから、今度はお粥をスプーンで掬い取った。

「んあ……」

再びスプーンを唇に押し当てられた真衣だが、やはり固く口を閉ざしたまま、自由にならない首を弱々しく振って頑なに離乳食を拒む。しかし、そうなることを見通していた美幸は、スプーンを支える手からふっと力を抜き、スープの時のようにお粥をわざとこぼした。

スープに比べれば多少は粘りけのあるお粥だが、離乳期の赤ん坊の負担にならないよう米粒の原型が殆ど残らないほど柔らかく炊き込んだため、やはり真衣の唇から頬を伝い、とろとろと顎先から胸元に滴り落ちて、今度はナイティではなく即席のよだれかけにシミをつくってゆく。

「あらあら、言った端からこぼしちゃって。でも、よかったわね。ちゃんとよだれかけをしておいてあげたから、着ている物は汚さずにすんで。これからは、まんまの時もおやつの時もよだれかけが手放せないわね。うふふ、もちろん、おっぱいの時も」

美幸は再びスプーンをトレイに戻し、よだれかけにできたシミの周囲に沿って真衣の胸を指先でとんとんとつきながら含み笑いを漏らした。

「それにしても、真衣ちゃんにはまだまんまは早すぎたのかしら。でも、お腹が空いたままだと可哀想だから、おねむの間と同じようにミルクにしてあげようかな」

美幸は、まるで独り言のような口調で、けれど、真衣に聞かせているのが明かな口調で言っていて、お湯に溶かした粉ミルクが三分の二ほど入った哺乳壺を持ち上げた。その哺乳壺もまた、便座のロックやおねしょシート、離乳食などと同様、真衣を赤ん坊扱いするための小道具として、タクシーでの遠回りや空港からの帰り道に立ち寄った様々な商店で買い求めた物の一つなのは言うまでもない。

「い、いやあ……」

美幸が手にした哺乳壺を目にした真衣は、美幸の太腿の上で力なく首を振った。

だが、そんなことで美幸が手の動きを止めるわけがない。

「いあ……」

美幸は、頑なに閉ざす真衣の唇を左手の指で押し開き、哺乳壺の先に付いたゴムの乳首を強引に啜えさせた。

「まんまは上手に食べられなくても、これならいいでしょ？ ママのおっぱいをせがんで仕

方のない真衣ちゃんだもの、哺乳壘のばいばいなら上手に飲めるわよね？」

美幸は真衣の左右の頬を左手の親指と中指でそっと押した。

と、傾けた哺乳壘の中でミルクの表面に小さな泡が幾つか浮かび上がり、しばらくすると、ミルクの表面に浮かんでは消える泡の数が目に見えて増えてきた。

それは、泡の数に見合った量のミルクがゴムの乳首から真衣の口の中に流れ出ていることを意味していた。

美幸は、哺乳壘の乳首の先に或る細工を施していた。買ってきたままの哺乳壘は、赤ん坊が飲むペースに合わせて中の飲み物が流れ出るように調整した小さな穴が乳首の先に開いている。美幸は、その穴を中心にして、十字の短い切れ込みを入れたのだ。こうしておく、哺乳壘を下に向けただけではゴムの弾力が勝ってミルクは自然に流れ出さないものの、真衣が一口でも乳首を吸うと、それがきっかけになってミルクが流れ出し、あとはその流れの勢いがゴムの弾力よりも強くなって、ミルクの流れが止まらなくなるのだった（そう、美幸が指先で真衣の左右の頬を押したのは、最初のきっかけをつくるためだった）。もつとも、流れが止まらないとはいっても、ぼたぼたと滴り落ちる程度のペースだから、あつというまに哺乳壘が空になってしまいうわけでもない。だが、真衣が喉を動かしてミルクを飲み込まなければ、やがてミルクは口の中に溜まり、遂には唇から溢れ出してしまうのは明かだった。

「あら、真衣ちゃんはいばいを飲むのも下手だったのかな。ママのおっぱいはいつも上手に吸ってくれるのに、哺乳壘をちゅうちゅうするのは下手だったのね」

美幸は、哺乳壘で粉ミルクを飲まされるという赤ん坊そのままの行為を受け容れられず、まるで喉を動かそうとしない真衣に向かって、わざと不思議そうな顔をして言い、それでも真衣がミルクを飲み込もうとしないのを見て取ると、カーデガンのポケットから携帯電話を取り出して動画再生のボタンを押した。

「ほら、おねむの間は真衣ちゃん、こんなに上手にばいばいを飲んでいたのよ。なのに、おつきしたら飲めなくなっちゃうだなんて、なんだか変ね」

美幸がそんなふうになぞとらしく不思議がってみせる通り、液晶画面に映った真衣は、美幸が支え持つ哺乳壘から一心にミルクを飲んでいた。

もつとも、それも、考えてみれば当たり前のことだった。日曜日の夕方前から眠りにおちたままで食べ物をお口にするのは一切できず、しかも、気温が上がってくる季節だというのに、太陽の光がさんさんと差し込む部屋でガラス戸を閉め切った上、体を毛布ですっぽり覆われているのだから、空腹と喉の渴きは並大抵ではない。そんなところへミルクの入った哺乳壘の乳首をお口にふくまされて、それを拒否できるわけがない。それも、意識を失わされ、理性や羞恥心といったもののかけらも持ち合わせていない状態でのことだから尚更だ。

「ね、おねむの間はこんなに上手なのよ。なのに、おつきしている間はちゃんと飲めないなんて、出張中だけとお父様に動画を送って見てもらった方がいいかしら。それで、どうしたらいいか相談した方がいいのかな」

美幸は液晶画面を真衣の目の前に突きつけ、聞こえよがしにそう言うってから、携帯電話をポケットにしまった。

そうしている間にも真衣の口には哺乳壘の乳首から流れ出たミルクがじわじわと溜まってきている。

意識を失って深い眠りについている時とは違い、今は理性も羞恥心も働いている。乳離れできない赤ん坊そのまま哺乳壘のミルクを飲まされる屈辱は耐え難い。

だが、哀しいかな、本人も気づかないうちに、哺乳壘の乳首からミルクを飲むという行為を体に植え付けられてしまっているのも事実だった。意識を失っている間中、真衣が空腹や喉の渇きに耐えかねて無意識のうちに唇を動かしたり、それこそ幼児さながら自分の指を吸い始める頃合いを見計らって、美幸は哺乳壘でミルクを飲ませ、哺乳壘が空になると胸元をただけて自分の乳首を吸わせるという行為を何度も何度も際限なく繰り返し返していた。「生まれたばかりの赤ちゃんよりも手間がかかるんだから」と困ったように言った美幸だが、その実、真衣の赤ちゃん返りを更に進めるための手間は惜しみなくかけていたというわけだ。そのせいで、いつしか真衣は、ミルクの匂いを嗅ぐだけで自然と唇と頬を動かすようになってしまっていたのだ。

しかも、動画を優に見られてもいいのかなという脅しめいた言葉。

「ふうん。真衣ちゃんてば、まんまを食べるのが下手なだけじゃなくて、哺乳壘のばいばいもちゃんと飲めないんだ。真衣ちゃんがお上手なのは、ママのおっぱいを吸うことだけなのね」

美幸は、真衣が逡巡しながらもミルクを飲み込むのを拒む様子をおかしそうに見やり、乳首の先からミルクの雫がぼたぼた垂れるのを気にするふうもなく哺乳壘を真衣の口からそっと離してトレイに置くと、手早く自分の胸元をほだけ、授乳用ブラのカップをずりおろして、ゴムの乳首の代わりに本物の乳首を咥えさせた。

真衣の理性の籠が外れたのは、先週の金曜日の夜に初めて一緒に寝て以来、ことあるごとに口にふくまされ、遂にはそれを吸いながらではないとおしっこもできなくなってしまった美幸の乳首が唇に触れた直後のことだった。まるで力の入らない両腕で、それでも美幸の体をかき抱くようにして乳房に顔を埋める真衣。

「そうなの。真衣ちゃんはそんなにママのおっぱいが欲しかったの。いいわよ、たっぷり吸ってちょうだい」

それまで自分の太腿に載せていた真衣の頭を下から掌で包み込むようにして持ち上げ、上半身を横抱きにして、美幸は真衣の耳元に甘く囁きかけた。

真衣は、意識を失ったまま哺乳壘の乳首を吸っていた時と同様、無心に美幸の乳首を食った。唇と頬が大きく動き、口の中に溜まっていたミルクも飲み干してしまう。

そのタイミングを見計らって、美幸は自分の乳首を真衣の唇から引き離し、いったんトレイに戻した哺乳壘を持ち上げて、再びゴムの乳首を真衣の口にふくませた。

そうになると、あとは、携帯電話の画面に映っていた姿そのままだ。真衣は美幸の手で上半身を横抱きにされたまま、哺乳壘の乳首から片時も口を離そうとはしなかった。

\*

哺乳壘のミルクがもう残り僅かになった頃合いでチャイムが鳴った。

突然のチャイムに真衣はびくんと体を震わせたが、哺乳壘の乳首は口にくんだままだ。

「はい、どちら様でしょうか」

美幸は、それまで抱え上げていた真衣の頭を太腿の上に戻し、右手で哺乳壘を支え持ったまま、左手でカーデガンのポケットから小振りの電話器を取り出し、耳に押し当てた。携帯電話に似たその電話器は、家の中ならどこにいても門柱に取り付けてあるインターフォンを通じて来訪者と会話ができるようになっていたワイヤレスのハンドセットだった。

「ああ、美沙ちゃんだったの。もうそんな時間なのね。真衣ちゃんのお世話に忙しくて、まるで気がつかなかったわ。うん、もちろんいいわよ。預けておいた鍵で門扉とドアを開けて入ってちょうだい」

美幸は親しげな様子で来訪客の名を呼び、弾んだ声で会話を交わした。

（美沙ちゃんって……ううん、まさか、そんな。で、でも……）美幸の口から来訪者の名前が聞こえた途端、真衣の体がさつきよりも大きくびくつと震えた。

待つほどもなく、玄関のドアが開閉する音が聞こえ、廊下を足音が近づいてきた。

しかし、体の自由を殆ど奪われ、哺乳壘の乳首を口から離すこともできない真衣には、その場から逃れる術はない。

（や、やだ、誰かがこつちに来るよ。ドアを開けられたら、赤ちゃんみたいな格好を見られちゃうよ。どうしたらいいの、どうしたらいいの、私!）胸の中で金切り声をあげながらも実際にはどうすることもできない。

やがて足音がリビングルームの前でびたつと止まり、かちやりと音がしてドアのノブがまわる。

ドアが開いて、身をすくめる真衣の目の前に一人の人物が姿を現した。

その人物は、美幸の太腿に頭を載せて哺乳壘の乳首を口にふくんだままの真衣の姿を目にするに、こつと微笑んで声を弾ませた。

「あ、真衣ちゃん、おつきしたんだね」

（美沙!? 美沙ちゃんって、やっぱり、あの美沙だったんだ。でも、どうして、そんな……!?）目の前に現れた人物の顔を見、その声を聞くなり、真衣は胸の中で呻いた。

リビングルームのドアを開けてすぐの所に立ってこちらの様子を興味深げに窺っているのは、真衣とは幼稚園から高校までずっと同じクラスで一番の親友である杉下美沙だった。

「お帰りなさい、美沙ちゃん。ほら、今日は真衣ちゃんもおつきして美沙ちゃんが学校から帰ってくるのを待っていたのよ」

美幸は、怯えと困惑とがない交ぜになったなんともいいようなない表情を浮かべる真衣の顔と、とびきりの笑みを浮かべた美沙の顔とを見比べて言った。

それに対して美沙が、どこかおもはゆそうに応じる。

「やめてよ、『美沙ちゃん』なんて『ちゃん』付けで名前を呼ぶのは。私はもう高校生。小っちゃな子供じゃないんだから、気をつけてよね、鈴木先生……あ、先生じゃなかった、ママ」

「うふ、そうだったわね。真衣ちゃんのことを『ちゃん』付けで呼ぶから、ついつい、美沙

のことまで『美沙ちゃん』なんて呼んじゃって、ごめんね。美沙はもう高校生、赤ちゃんの真衣ちゃんとは違うのにね。——でも、美沙も気をつけてね。ママのことを『鈴木先生』だなんて他人行儀な呼び方するのはもう二度と無しにしてちょうだい」

「へへ、じゃ、今回はお互い様ね。うん、わかった。今度から私も気をつけるから、ママも気をつけてね」

妙に親しげな様子で二人は互いにくすすと微笑み合った後、揃って真衣の顔に視線を移した。

（何？ 何なの、いったい？ 二人は何を話してるの？）二人のやり取りを耳にして、胸の中にむくむくと湧き上がってくる疑問を問い質したくて仕方ない真衣だったが、そんなことをしてミルクをこぼしてしまいでしたら、それを口実に美幸からまたどんな仕打ちを受けるかしたるものではないと思うと、躊躇いが先に立って何も言い出せない。

しかも、その時になって急に尿意を感じ始めたから尚更だ。

（や、やだ。どうして、こんな時におしっこなんてしたくなっちゃうのよ。赤ちゃんみたいに哺乳場でミルクを飲まされて、しかも、どうしてだかわかかないけど目の前に美沙がいる、こんな時に）

「それで、真衣ちゃんは今ごろお昼ご飯なの？」

ひよいと腰をかがめた美沙が、真衣の顔と美幸が支え持つ哺乳場、それに、床に置いてあるトレイや、紙おむつとオーバーパンツを収納したバスケットを順番に眺めながら穏やかな声で言った。

（どうして？ どうして美沙はこんなに落ち着いてるの？ 友だちの家に来たら知らない女の子がいて、当の友だちがその女の子に赤ちゃん扱いされているっていうのに、どうして美沙はびっくりしないの？）赤ん坊そのままの扱いを受けている親友の姿を見てもまるで動じる気配をみせない美沙の様子に、真衣は、つい恥ずかしさも忘れ、次第に高まってくる尿意に身震いしながらも、ますます疑念を膨らませるばかりだった。

しかも、美幸の方も

「そうなのよ。赤ちゃんはねんねの時間が不規則だから、こんな時間にまんまになっちゃってでも、手間がかかるけど、そのぶん可愛くて仕方ないのよね」

と澄ましたもので、なんだか、美幸と美沙は本当の母親なんじゃないかとさえ思えてくるほどだった。

「そうね、赤ちゃんは眠くなったら所かまわず寝ちゃうし、お腹が空いた時にはミルクを欲しがって泣くし、おしっこをしたくなったらおむつを汚すのが仕事みたいなもんね」

美沙は真衣の顔を覗き込んで意味ありげに笑って言い、もう殆ど空になりかけている哺乳場の中に浮かぶ泡を眺めながら、続けて言った。

「あ、そうだ。おしっこって言えば、一番近くで真衣ちゃんがおむつを汚しちゃったのはいつ？ 真衣ちゃん、なんだか、何かを我慢しているようなお顔をしているんだけど、そろそろ次のおしっこの時間じゃないかな？」

そんな美沙の言葉に、真衣の胸がどきんと高鳴る。

「確か、おつきする三十分ほど前にそんなそぶりをしていたわね。それからおむつを取り替

えてあげたりいろいろあった後、まんまを食べさせてあげて——おねしょから今までで一時間ちよつとつてところかしら」

美幸は掛時計をちらと見て答え、

「そうね、真衣ちゃんはいたい一時間ごとにおしっこをしたくなるんだったわね。二時間くらいは保つようにしなきゃいけないわよって我慢するお稽古はさせているけど、お稽古はまだ途中だし、そろそろおしっこがしたくなる頃かしら」

と、少し考えて付け加えた。

が、ついさつき感じ始めた真衣の尿意はいつになく急激に強くなり、今や『そろそろおしっこがしたくなる頃』という言い方ではとても表現できないほどになっていた。

(どうして? どうして、こんな……) 突然の親友の出現と、いつにない尿意の高まりに、真衣の感情が千々に乱れる。

真衣は気づいていないものの、実は、尿意の急激な高まりも、美幸が仕組んだことだった。美幸は、真衣が意識を失っている間中、自分の乳首と哺乳壺の乳首とを何度も繰り返し交互に吸わせていた。そうすることで、初めての添い寝以後、美幸の乳首を吸いながらのおねしょやおもしろしが習い性になってしまっている真衣に対して、ゴムの乳首を啜えても、あたかも本物の乳首を啜えているかのように無意識のうちに錯覚するように仕向けたわけだ。そうしておいて、目が覚める直前のおねしょから一時間ちよつとが経過し、そろそろ真衣がおしっこをしたくなる頃合いを見計らって、意識を失っている間に繰り返しおしっこしたのと同様、自分の乳首とミルクの入った哺乳壺の乳首とを交互に真衣に啜えさせたのだった。哺乳壺の乳首の感触と美幸の乳首の感触との区別がつかないようにさせられていた真衣にしてみれば、哺乳壺のミルクを飲んでいる間に、いつしか、美幸の乳首から流れ出る母乳を飲んでいるかのような錯覚に陥ったとしても無理からぬところだろう。そうなれば、美幸の乳首を吸いながらのおもしろしが習い性になっている真衣のこと、舌の上に広がり喉を通ってお腹の中に流れ込むミルクの感触と相まって、ゴムの乳首を吸っているうちに次第に尿意が強くなってくるのも当たり前のことだった。それに加えて、薬の力によって手足の筋肉のみならず膀胱の筋肉まで弛緩させられているものだから、いったん強くなり始めた尿意はあつという間に限界ぎりぎりに達してしまったというわけだ。

そう、それはまさしく美幸の思惑通りの結果だった。

そののみならず、美沙の出現さえもが美幸の企みの結果なのだが、それを知った時、真衣はどんな顔をするだろう。

### 《十三》 幼なじみ、親友、そして……》

真衣と美沙とが親友どうしということは前述した通りだが、それも、互いの母親どうしが親友だったという実に因縁浅からぬ間柄の二人だった。二人の母親は生家が隣どうしで幼なじみだった上、共に幼稚園から大学までずっと啓明女学院の同級で、しかも席まで殆どいつも隣どうしという仲だった。大学を卒業した後に進んだ道は異なったものの、偶然にも同じような時期に結婚し、新しく居を構えた場所はバス停で二つ離れているだけという近さであったため、結局は学生の頃と同じように頻繁に互いの家を来訪し合う仲に戻っていた。とりわけ、子供ができてからは互いの行き来の回数もますます増えて、真衣と美沙は、二人の母親の手でまるで姉妹のように育てられたのだった。

しかも、そんな二人の母親は、自らの育った環境への反動からか、自分の娘は幼い頃から青春期までずっと同じ女子校ではなく、もっと開放感のある公立学校に通わせたいという思いまで共有していた。そのため、真衣も美沙も幼稚園から中学校まで地元の公立校に通っていたのだが、どんな天の配剤なのか、まるで母親たちと同じように、二人はずっと同じクラスで隣どうしの席だった。その上、互いに申し合わせたわけでもないのに、高校は二人とも啓明女学院に進み、あまつさえ、そこでも同じクラスに振り分けられるという、神様の悪戯としか思えない境遇にあった。

ここまで読んでもうおわかりの人も多いと思うが、真衣が小学生の頃、初潮を迎え、どうしていいかわからずおろおろしている時に相談に乗ってくれた友人というのが美沙であり、処置を手伝ってくれたのが美沙の母親だった。真衣の母親が他界した後、美沙の母親は真衣のことをそれまで以上に慈しみ、血のつながった娘のようにあれこれと面倒をみてくれたのだ。

そんな、親友というよりも姉妹同然の二人だから、真衣が体調を崩して学校を休んだとなると、美沙としても平然としていられるわけがない。放課後のクラブ活動も途中で抜け出して一目散に真衣の家に駆けつけたのが、月曜日の夕方のことだった。

門柱に取り付けられたインターフォンのボタンを押すと、待つほどもなくスピーカーから「はい、どちら様でしょうか」という落ち着いた女性の声が聞こえた。

（あ、これが真衣の新しいお母さんになる人の声なのね。ふうん、なかなか優しくそんな声じゃない）インターフォンから返ってきたのは真衣本人とも優とも違う聞き慣れない女性の声だったが、美沙は驚く様子もなく納得顔で軽く頷いた。

優は、海外出張に赴くにあたり、何かと親身になって面倒をみてくれる美沙の母親に、自分が不在の間も真衣のことをよろしく頼むと依頼していたのだが、その時に、自分が再婚する予定だということも、自分の出張中に再婚相手の女性が真衣と一緒に暮らす手筈になっていることも告げていた。美沙は自分の母親からそういった事情を聞いていたため、インター



フォンから聞き慣れない声の流れれてきても驚かなかったというわけだ。

「真衣さんと同じクラスの杉下美沙といいます。真衣さんの具合はいかがでしょう？ お見舞いをさせてもらえればと思つて寄せていただきました」

美沙は神妙な声で応じた。

それに呼応して再びインターフォンから

「わかりました。すぐに鍵を開けるから、ちよつとだけ待っていてくださいね」

という声が返つてきて、ほどなく玄関のドアが開き、美幸が姿を現したのだが、ついさっきインターフォンを通して会話を交わした時にはまるで動じなかつた美沙が、門扉越しに見える美幸の顔を目にするなり

「え、鈴木先生!? 真衣の新しいお母さんになる人つて、鈴木先生だったんですか!?!」と驚きの声をあげたきり、絶句してしまった。

それに対して美幸は苦笑混じりに

「あら、一目で私のことがわかつたの？ 光栄なことだこと」

と言つて門扉を開け、こわばつた顔の美沙の目の前に歩み寄つた。

「は、はい。先生とは健康診断の時に会つただけですけど、私、その時からずっと先生に憧れているんです。穏やかな笑顔なのに、てきぱき仕事をこなして、優しそうな雰囲気なのに、

健康診断の

途中でふざ

ける生徒が

いたら厳し

く叱つて、

なんて言え

ばいいの

か、あの、

私がこんな

ことを言う

と生意気な

んですけ

ど、すごく

仕事に対し

て真面目つ

ていうか、



まっすぐ打ち込んでらっしゃるんだなつて思つて、女性でも仕事の時はこうじゃなくちやいけないんだなつて感じて、それで、私、先生に憧れちゃつて、健康診断の時から事あるごとに先生の顔を思い浮かべていて、だから——だから、玄関のドアから出てくる姿を見た瞬間、鈴木先生だつてわかつて……」

「ありがとう。私のこと、そんなふうにも思つてくれて、とても嬉しいわ。杉下さん、大学は医学部志望なの？」

美幸は、緊張のあまり声を震わて喋り続ける美沙の言葉をやんわり遮って優しく問いかけた。

「い、いいえ。私は小さな子供が好きだから、保育園か幼稚園の先生になりたいんです。ただ、お医者様にしても、幼稚園の先生にしても、お休みの日でもいざとなれば仕事場へ行かなきゃいけないこともあるし、厳しさと優しさを両立させなきゃやってけない仕事だし、共通するところが多いと思うんです。だから……」

「うふふ。そう言ってもらえると悪い気はしないわね。いいわ、真衣ちゃんのことにも気になるでしょうし、お家の中でいろいろ話しましょう」

美幸は意味ありげに笑って言い、緊張しきりの美沙の手を取ると、背中を押して家の中に招き入れた。

それこそ生まれたての赤ん坊の頃から数え切れないほど訪れて慣れ親しみ、自分の家も同然の佐藤家。それでも、憧れの美幸と一緒にだと思いと表情がこわばり、足の運びもぎこちなくなってしまう。

そんな美沙の緊張が解けたのは、リビングルームに敷いた布団の上で安らかな寝息をたてている真衣の寝顔を目にしてすぐのことだった。

「よかった、思っていたよりひどくないみたい。急な発熱で欠席って担任の先生から聞いた時はびっくりしちゃったけど、この様子だとあまり悪くないのかな。そうなんですよね、先生？ 真衣、じきによくくなりますよね？」

真衣の寝息が思ったよりも荒くないのに加え、さほど苦しそうな表情も浮かべていないことに安堵の溜息をつきながら、美沙は美幸に尋ねた。が、すぐにはとしたような表情で言い直す。

「あ、すみません。真衣じゃなくて、真衣さんですよ。つい、いつもの呼び方が出ちゃって」

「いいわよ、そんなこと気にしなくても。私も学生の時は仲のいい友だちとは『さん』も『ちゃん』も付けないで名前を呼び合っていたんだから。それに、私なんかより杉下さんの方が真衣ちゃんとはずっとつき合いが長いんだから、私がいるからって気にしないで、呼び慣れた呼び方をしてちょうだい」

恐縮顔の美沙に、取りなすように美幸は言った。

「あ、はい、ありがとうございます。そう言ってもらえると助かります。これまでずっと『真衣』『美沙』ってお互いに呼んでいたのに、『真衣さん』なんて他人行儀で、私としても妙な気分で落ち着かないんです。じゃ、遠慮しないで名前だけで呼ばせてもらいますね」

美沙の顔がぱっと輝いた。

「ええ、どうぞ。ついでだから、私も、『ですます』調の堅苦しい話し方は遠慮させてもらうわよ。だから、美沙さんも、私のこと、昔からの知り合いだと思って気軽に接してくれないかな。すぐには無理かもしれないけど、私のこと、真衣ちゃんの本当のお母さんだと思ってくれると嬉しいんだけどな」

美幸は美沙の緊張を更にほぐすようにおだやかな笑顔で言った。

「え!? 憧れの鈴木先生のこと、そんな……うん、でも、わかりました。先生の方からそんなふうに通ってもらえて、とっても嬉しいです。だから、先生の言う通りに頑張ってみます、私」

「ほらほら、言ってる端から『わかりました』とか『頑張ります』って堅苦しい言い方しちやって。もっとリラックスしていいのよ、美沙ちゃん」

美幸は少し冗談めかして言った。

「あ——う、うん、わかった。じゃ、じゃ、真衣のお母さん、真衣、すぐによくやるよね? 熱なんてじきに下がるよね?」

美沙は、『杉下さん』ではなく『美沙ちゃん』と呼ばれたことに頬を赤く染めながら、それでも満更でもなさそうな顔をして再び美幸に尋ねた。

「うん、あまり時間はかからないわよ。三日間くらいは学校を欠席しなきゃいけないと思うけど、いったん熱が下がりはじめたらすぐ平熱に戻ると思うから心配しないでちょうだい。一応、医師としての見立てだから間違いないわ」

美幸は、直腸検温の結果と、自分が投与した薬剤の効用を頭の中で思い浮かべながら軽く頷いてみせ、さりげない口調で美沙に訊き返した。

「ところで、二人はいつごろから名前だけで呼び合うようになったの? 幼稚園の頃から? それとも、最近になってから?」

「えーと、たしか、中学校に入る前くらいからだったかな。小さい頃は真衣が私のことを『美沙ちゃん』って呼んで、私は真衣のことを『真衣お姉ちゃん』って呼んでただけど、小学校の三年生くらいからお互いに『ちゃん』付けで呼ぶようになって、その後……あ、そううだ。小学校の高学年になって二人とも初めての生理が来て、それから、なんとなくお互いに名前だけで呼び合うようになったんだっけ。うん、そうよ、たしか、初めての生理がきっかけだったんだわ」

美沙は、最初は考え考えしながら、けれど最後の方は自信たっぷりに答えた。

「ふうん、そうなんだ。でも、三年生になるまで美沙ちゃんが真衣ちゃんのことを『真衣お姉ちゃん』って呼んでいたのはどうしてなの? 同じ学年の同じ年なのに」

美幸はわざと不思議そうな顔をして重ねて訊いた。

「あ、そのことだったら、私たち、厳密に言うと同じ年じゃないんだ。真衣は4月十日生まれて、私は翌年の三月二十五日だから、学年は同じでも、丸一年近く誕生日が離れてるの。大きくなったら一年くらいの差はどうでもよくなるけど、小さい頃はそんなわけにもいかななくて、体も真衣の方がずっと大きかったから、ついつい真衣ったら私のことを妹扱いして、逆に私は真衣のことをお姉ちゃんみたいに思ってた、それで」

美沙は昔のことを懐かしむようにふっと目を細くして説明した。

「そうだったの。でも、三年生くらいになると両方とも『ちゃん』付けになったのよね?」

「うん。生まれたのは真衣の方が早かったんだけど、その後の成長は私の方が早くて、小三の夏休み明けには身長も体重も負けないようになって、それで私が真衣のことを『真衣ちゃん』って呼ぶようになったの。それまでは冗談でも私がそんな呼び方をしたら真衣ったら嫌

な顔をしてただけど、その時からは何も言わなくなって。あと、私に年の離れた妹ができたのもその頃で、それで私、なんとなく、お姉ちゃんとしての自覚みたいなものを感じるようになって、そのことも影響していたんだと思う。それに、うちは父も母も体が大きい方だから、私もその血をひいたのか、私の体の大きさが真衣に追いついてからは今度は逆に私の方がどんだん大きくなっちゃって、それで真衣もますます何も言えなくなったみたい」

美沙は僅かに首をかしげ応じた。

自分でも言うように、確かに美沙は体が大きい。身長は百七十センチを優に超えているのが一目でわかるほどだし、胸の発育ぶりも美幸と負けず劣らずだ。それに対して、真衣の身長は百五十センチあるかないかといったところだろうか。

「そうだったの。そういうことだったのね、美沙ちゃんと真衣ちゃんの仲は」

美幸は、寝息をたてている真衣の顔と美沙の顔とを交互に見比べて独り言のように呟くと、どこか探るような口調で言った。

「だったら、逆に真衣ちゃんから『美沙お姉ちゃん』って呼んでもらいたとか思ったことなかった？ 特に、体の大きさが逆転してすぐの頃とか、それまでの反動でそんなふうにする時期があったんじゃない？」

「それは……」

美沙は一瞬、困ったような顔になったが、目の前で眠っている真衣の年齢のわりにはあどけない寝顔をちらと見て、ぽつりと言った。

「あるよ。それまでいつも私が妹扱いで、でも、いつのまにか私の方が大きくなって、初めて生理が来たのだったって私の方が半年ほど早くて、真衣に生理が来た時、相談に乗ってあげて——その時、なんだか真衣のことが妹みたいに思えて。そりゃ真衣の方が一年近く早く生まれたのは確かだけど、それでもって思ったことは何度かあるよ。そんなことを実際に言ったら、何バカなこと言ってるのよって嘲笑われそうだから、私のことを『美沙お姉ちゃん』って呼んでみてって口にしたことはないけど、でも、そんな言葉が喉まで出かかったことは何度かあるよ」

「やっぱりね。そんなふうと思うことってあるのよね、特に子供の頃は。真衣ちゃんが偉そうにしていたわけじゃなく、あれこれ煩わしく指図していたわけじゃなく。それに、美沙ちゃんが仕返しをしてやろうだなんて思うわけじゃなく。なのに、美沙ちゃんが真衣ちゃんのことを妹扱いしてみたくなかったことがあるっていうのは私にもわかるわよ」

美沙の返答に美幸は納得顔で頷き、「冗談とも本気ともつかない声で言った。

「だから、子供の頃になわななかったことを今やってみたらどうかな？ 今から真衣ちゃんを妹扱いしてみたいと思わない？」

「え……？」

美沙はきよんとした表情を浮かべて言葉に詰まった。

「あれ、何だと思う？」

美幸は部屋の一角を指差した。二人が並んで座っている場所からいうと、横になっている真衣の体のちよつと向こうあたりだ。

「脱衣籠だよな？ それで、中に入っているのは……!!」

美幸が指差す方を怪訝な顔で見た美沙は、そこにあるのが脱衣籠だと気づくと、脱衣籠に何が入っているのか確認するために目を凝らしたきり言葉を失い、見てはいけない物を見てしまったかのように慌てて顔をそむけた。

だが、完全に視線をそらしたわけではなく、顔はそっぽを向きながらも目だけを動かして、ちらちらと脱衣籠の中を窺い続けているのを美幸は見逃さない。

「中に入っているのは何だと思う？ 体の大きな子だっという印象が強かったから、健康診断の時に会った美沙ちゃんのこととはよく憶えているんだけど、視力も良かった筈よね」

美幸は微かに笑いを含んだ声で、脱衣籠に何が入っているか美沙にはわかつていない筈だと確信しているのが明かな口調で言った。

「あ、あの……」

しかし、美沙は口ごもるばかりだ。

「じゃ、これを見ればわかるかな」

美幸は美沙の狼狽えぶりを面白そうに眺めながら、真衣の体にかかっている毛布をぱっと捲り取った。

「……！！」

はっと息を飲み、顔をそむけることも忘れて大きく見開いた美沙の目が、真衣の下腹部に釘付けになった。

「お腹が冷えるといけないからオーバーパンツを穿かせてあげているのよ」

美幸は短く言ってから、改めて脱衣籠を指差した。

「あのバスケットに何枚も入っているのと同じオーバーパンツをね」

美沙はのろのろと視線を動かして脱衣籠を見、再び真衣の下腹部に目をやった。

「もちろん、オーバーパンツの下も、当然、あのバスケットに入っているのと同じ物よ。ほら、この通り」

美幸は、美沙が真衣の下腹部に目を向け直すのを待って、オーバーパンツを膝の上まで引きおろした。

それに対して美沙は無言のままだったが、脱衣籠に何枚か収めてあるのと同じニットのオーバーパンツを真衣が穿いているのを見て、その下に何を着用しているのかおよその見当がついていたのだろう、ついさっきのような驚いた様子はみせなかった。

「……真衣の具合、そんなに悪いの？ 自分でトイレも行けないくらい容態がひどいの？」

しばらく沈黙が続いた後、何度か浅い呼吸を繰り返してから美沙が言った。

「そうね、急な発熱があつて、なるべく苦しまないよう鎮静剤で眠らせているわけだから、自分でトイレへ行けないっていうのは本当ね。昨夜から今朝にかけては熱も高いままだったから、容態もあまりよくなかったと言っているわね」

美幸は、膝のすぐ上まで引きおろした真衣のオーバーパンツを再び穿かせようともしないと言い、すぐ横に座っている美沙の方にゆっくり振り向いて続けた。

「でも、真衣ちゃんのおむつはそれよりもずっと前からなのよ。オーバーパンツは、お腹が冷えないようになって、私がこのお家に来てから穿かせてあげるようにしたんだけど、おむつ

は、私が来る前からなのよ——」

美幸はこれまでの経緯を全て説明した。入試が負担になって体調を崩した事。それと同時におねしよが始まったこと。けれど、体調を崩したのは単なるきっかけで、おねしよの本当の原因は他にあったこと。その真の原因というのが、真衣の心の中にひそむ或る願望だったということ。そうして、その願望のせいで真衣が無意識のうちに赤ちゃん返りしてしまっていること。

自分が胸の中にひそませている妖しい欲望のことだけは巧みに隠しおおしつつ、真衣が一番の親友である美沙にさえ告げられないでいた諸々の事情を、時には偽りの事柄も取り混ぜつつ美幸は説明した。

「——というわけで、真衣ちゃんはずっかり赤ちゃんになっちゃってるの。だから、パンツじゃなくておむつだし、ほら、こんなことまでしちゃうのよ」

美沙が無言のままなのをいいことに話が自分に都合よく進むよう慎重に言葉を選んで経緯を説明し終わった美幸は、掛時計をちらと見上げて頃合いを図ると、真衣の横に寝そべって自分の胸元をはだけ、手慣れた様子でブラのカップをずりおろし、後頭部を右手の掌で包み込むようにして真衣の顔を抱き寄せた。

「……!?!」

思ってもみなかった美幸の行動に、美沙が自分の口を両手で覆い、声にならない驚きの声をあげた。

が、美幸はそんなことまるで気にするふうもなく、あらわになった自分の乳首を真衣の唇に押し当てる。

美沙が体を固くして凝視する中、真衣の唇がおずおずと動き出したかと思うと、いつしか、空腹に耐えかねて母親の乳房にむしゃぶりつく赤ん坊さながら、美幸の豊かな乳房に顔を埋めて唇と頬を大きく膨らませてはすぼめるといった動きをリズムカルに繰り返すようになっていた。

「わかったでしょう？ 真衣ちゃんはもうすっかり赤ちゃんなのよ。ママのおっぱいが恋しくてたまらない赤ちゃんなのよ」

真衣に乳首を吸わせたまま、美幸は、どこか勝ち誇ったようにも聞こえる口調で美沙に言った。

そうして、真衣の顔にとろんとした表情が浮かぶのを見て取ると、薄く笑って言葉が続ける。

「股ぐりから指を突っ込んで、おむつの中がどんなふうになっているか調べてごらんなさい。そうすれば、真衣ちゃんが赤ちゃんなっちゃったっていうのが本当のことだってわかる筈だから」

「え……？ お、おむつの中に!?!」

美沙はびくんと肩を震わせて聞き返した。

「そう、おむつの中の様子を調べるのよ。真衣ちゃんとは姉妹同然に育った美沙ちゃんだもの、できないわけないわよね」

美幸は医師としての威厳をいかに発揮し、有無を言わさぬ調子で決めつけた。

「あ、はい……」

憧れの的である美幸からそんなふうに言われて拒否できるわけがない。美沙は一瞬は躊躇いの表情を浮かべたものの、大きく息を吸い込むと、決意を固めたのが明かな顔つきになって、真衣の下腹部のそばへにじり寄った。

「そこでもいいわ。そこから手を伸ばせばすぐだから」

真衣への『授乳』を続けながら横目で様子を窺っていた美幸は、そう言って美沙を促した。美沙はもういちど息を吸ってから、おそるおそる右手を伸ばし、股ぐりのギャザーを押し広げるようにして人差し指と中指を紙おむつの中に差し入れた。

途端に

「ぬ、濡れてる。おむつの中、濡れちゃってる」

という、驚きの声が美沙の口を衝いて出た。しかし、言葉はそれだけではなかった。美沙は続けて

「あ、あの、まだ濡れ方がひどくなってる。最初はじっとりしてるだけだったのに、びしょびしょになってきて、あの……」

と戸惑いを隠せない表情で呻き、助けを求めるように美幸の顔を見つめた。

「そうよ、何度も言うけど、真衣ちゃんは赤ちゃんになっちゃったのよ。ママのおっぱいを吸いながらおしっこでおむつを汚しちゃう赤ちゃんになっちゃったのよ。だから、美沙ちゃんには真衣ちゃんのお姉ちゃんになってもらいたいの」

困惑の表情を浮かべる美沙とは対照的に、穏やかな笑顔で美幸は言っただけ。

「ずっとというのは難しいでしょうけど、真衣ちゃんのお父様が帰ってくるまでの間だけでも真衣ちゃんのお姉ちゃんになってもらいたいの。このお家にやって来てまだ間のない私を助けてほしいのよ。小っちゃい頃から真衣ちゃんのことを知っていて、今も真衣ちゃんとは大の仲良しで、学校も同じクラスで、このお家のこともよく知っている美沙ちゃんの他に、こんなことを頼める人なんていないの。だから、お願い。赤ちゃん返りしちゃった真衣ちゃんのお姉ちゃんになってあげてちょうだい」

美沙は、指先から伝わるじっとり湿っぽい感触と共に美幸の言葉が自分の心の奥底にじわじわ染みこんでくるのを感じて、ぞくりと身を震わせずにはいらなかった。

## 《十四》 新たな家族

美幸と美沙が見守る中、哺乳壺が殆ど空になり、それまで顔をこわばらせていた真衣の表情が緩んで、目つきがとろんとしてくる。

真衣の表情の変化に気づいた二人が互いに目配せを交わし合ったかと思うと、美沙が軽く領いて、横抱きにされた真衣の体から滑り落ちそうになっている毛布を捲り取って部屋の隅に移し、オーバーパンツの股ぐりを押し広げて右手の指を紙おむつの中に差し入れた。真衣は弱々しく身をよじるのだが、まだ効き目の続いている薬剤のせいで手足の自由が戻っていない上、美幸に抱きすくめられているため、美沙の手から逃れることはできない。

「どう？」

美幸は、今やそれだけで二人の意志が通じるのだということをも真衣に対して誇示するために、わざと短く美沙に訊いた。

「思った通りよ、ママ」

美沙の方も簡潔この上ない応え方をしたが、それが何を意味しているのか、二人だけでなく、真衣自身にも痛いほどわかっていた。美沙が口にした『思った通りよ』のあとに続くのは『おむつの中はぐっしよりだわ』という言葉しかない。

「おねむの間はママのおっぱいを吸いながらおねしょをしちゃうし、おっきの時は哺乳壺のミルクを飲みながらおもらしでおむつを汚しちゃうなんて、本当に赤ちゃんになっちゃったんだね、真衣ちゃんは」

おむつの中から引き抜いた指をウェットティッシュで拭きながら、美沙が呟いた。

「そうよ、真衣ちゃんは赤ちゃんになっちゃったのよ。それも、普通の赤ちゃんに比べれば、うんと体の大きな赤ちゃんに。こんなに大きな赤ちゃんのお世話、ママ一人じゃ大変だから、美沙もしっかり手伝ってね。だって、美沙は真衣ちゃんのしつかり者のお姉ちゃんなんだから」

美幸は、それまで自分の胸元まで抱え上げていた真衣の頭を太腿の上に戻し、哺乳壺の乳首を啜えさせたまま美沙に向かって軽く領いてみせた後、真衣の顔を真上から見おろして言った。

「それじゃ、美沙お姉ちゃんにおむつを取り替えてもらいましょうね。美沙お姉ちゃん、真衣ちゃんがねんねしている間も何度もおむつを取り替えてくれたのよ。だから真衣ちゃんは何も心配しないで、みんなお姉ちゃんにまかせておけばいいの。おむつを取り替えてもらう間、お口が寂しいと可哀想だから、哺乳壺はこのままにしておいてあげる。哺乳壺をちゅうちゅうしている間におむつを取り替えてもらおうね」

「い、いや…：美沙におむつを取り替えられるなんて、そんなの、いやあ！」

自由にならない首を力なく振って真衣は訴えかけた。しかし、唇も喉も薬剤の効果で力が入らないため、叫んだり喚いたりすることはかなわない。

「何を言ってるの、真衣ちゃんたら。お姉ちゃんのことを『美沙』だなんて呼び方しちゃ駄



目じやない。それに、ほらほら、そんなに暴れるからミルクがこぼれちゃって。真衣ちゃんはずっとおねむだったから憶えてないでしょうけど、美沙お姉ちゃんには、二日前の夕方にお見舞いに来てくれた時から何度もおむつを取り替えてもらっているのよ。それに、哺乳壺でミルクを飲ませてもらったこともあるし。ママも忙しいから大助かりだったわ。それで、いろいろ相談して——」

力ない動作ながらも真衣が首を振ったせいでも哺乳壺が口から離れ、僅かに残っていたミルクの雫が三つ四つ唇の下に滴り落ちる。その雫を簡易よだれかけの端で拭きながら美幸は、月曜日の夕方に美沙と交わしたやり取りの内容を手短かに話して聞かせた。

「——ということ、早速その日のうちに美沙お姉ちゃんは自分のお母様と話合せて、真衣ちゃんのお父様が出張の間、このお家に泊まり込みでママのお手伝いをしてもいいわよっていうお許しをいただいていたのよ。ええ、話し合いがスムーズに進むよう、ママも美沙お姉ちゃんのお母様には電話でいろいろお願いしたわよ。啓明女学院の校医として、真衣ちゃんの主治医として、そして、真衣ちゃんの新しいママとして。だから、遠慮なんていらないの。美沙お姉ちゃんのことを本当のお姉ちゃんだと思って甘えればいいのよ。わかるでしょ？ 真衣ちゃんには新しい家族ができたのよ。新しいママと、新しいお姉ちゃんが」

美幸は優しく言っていて聞かせるようにそう説明して、改めて美沙に向かって目配せをした。「お母さん、美幸ママと私の話を聞いて、ちよつと迷ったみたい。でも、迷ったけど、結局は『美沙も真衣ちゃんのお世話をしなさい。困ったことがあったら母さんも手伝ってあげるから、新しいママと一緒に真衣ちゃんの面倒をみてあげなさい。ただし、中途半端はいけないわよ。真衣ちゃんのお家にいる間は真衣ちゃんのことを本当の妹だと思って可愛がってあげなさい。それと、真衣ちゃんの新しいママのことも自分の本当のママだと思って言いつけを守りなさい』って言うてくれたの。それで、昨日、お家に帰ってすぐ荷物をまとめて宅配便でここに送っていただいたの。教科書も教材も着替えも、なにもかも。だから、今日からここが私のお家なのよ。でもって、真衣ちゃんが私の小っちゃな妹で、美幸ママが真衣ちゃんと私のママ」

美沙は美幸に対して軽く頷いてから、美幸と同じように真衣の顔を見おろして言った。

「美沙お姉ちゃんは何育園か幼稚園の先生になりたいそうだし、学校じゃ家庭科クラブに入っているんだそうね。偶然とは言え、本当、赤ちゃんの面倒をみるには打って付けだわ」

美沙の言葉を受けて、美幸がそんなふうにつけ加えた。

しかし、美沙が真衣の『お姉ちゃん兼お世話係』を引き受けたのは、決して偶然のたまものなどではなかった。歪んだ母性本能に操られるまま育児の真似事を楽しむために真衣を自分の赤ん坊に変貌させてしまうという企みを実行に移すにあたって、美幸は、校医としての立場を存分に活用して、真衣の友人関係を慎重に調べたのだが、そこで目をつけたのが美沙だった。むろん、企みをなるべく円滑に進めるための協力者に仕立てるためだ。そして、目をつけた美沙の性格と家庭環境、周囲の人間関係や真衣との幼い頃からの間柄などを更に徹底的に調べ上げた美幸は、真衣が体調を崩して学校を休みでもしたら美沙がその日のうち

に見舞いに駆けつけるに違いないという確信を抱くに至り、その好機を逃さないよう入念に計画を練り、真衣の幼なじみであり一番の親友である美沙をまんまと自分の企みに引き入れることに成功したというわけだ。

だが、美沙にしてみれば、美幸の妖しい企みを手助けする立場に自分が置かれたという自覚はまるでない。幼い頃は姉ぶっていた真衣のことを今度は逆に小さな妹扱いしてみるのも面白いかなというちよっとした悪戯心がきっかけになって、気がつけば佐藤家に住み込んで真衣の面倒をみるようになったものの、そんな状況についても、さほど奇異に感じることもなく、滅多に経験できないちよっと刺激的な遊びくらいにしか思っていない。それは、あまり細かいことを気にしない美沙の性格のためということもあるが、美幸の誘い込みがそれほどまでに巧みだったせいとも言える。

「さ、お話はこのくらいにして、美沙お姉ちゃんにおむつを取り替えてもらおうね。いつまでも濡れたおむつのままだとまた熱が出てくるかもしれないし、それに、おむつかぶれがひどくなっちゃうから」

美幸は、真衣の顔を覗き込んでいる美沙の横顔をちらと見て満足げに微笑み、わざと優しい声で言った。

「え？ 真衣ちゃん、やつぱり、おむつかぶれになっちゃったの？」

美幸に向かって美沙が確認するように聞き返した。驚いたような様子はまるでなく、『やつぱり』と、まるで、そうなることを予想していたような口ぶりだ。

「ええ、そうなのよ。二日前、美沙が初めておむつを取り替えてくれた時、真衣ちゃんのあそこ、うっすらと赤くなっていたわよね。それで、ひよっとしたらおむつかぶれになりかけているんじゃないかなって二人で話したけど、心配通りになっちゃって」

美幸はわざとらしく眉をひそめてそう応じた。その口調が少しばかり説明くさいのは真衣に聞かせるためだろう。

「ふうん、そうなんだ」

それまで床に手をついて真衣の顔を覗き込んでいた美沙が、きちんと座り直して僅かに顔を曇らせた。

だが、すぐに思い直したようににこやかな笑みを浮かべて、リビングルームに入る時に入り口のすぐそばに通学鞆と一緒に置いた二つの大きな紙袋のうちの一つを手元に引き寄せて明るい声で言った。

「だったら、やつぱり、これが役にたちそうだね。一昨日も昨日も、家に帰ってすぐミシンを独り占めにしてちゃんとしてきたんだよ。全部仕上がったのが昨夜の夜中だったから、他の荷物と一緒に宅配便で送れなくて、いったん学校まで持って行っちゃった」

「ああ、なんだか大きな紙袋を二つも持っているから何かと思っていたんだけど、そういうことだったの。でも、袋の中、誰かに見られなかった？ もしも見られたりしたら、変に思われちゃうんじゃないの？」

美幸は、美沙が紙袋の中をまさぐる様子を眺めながら、どこか悪戯っぽく笑って言った。

「ううん、それは大丈夫。目立つ荷物だから同じクラスの子の何人かに見られたけど、家庭科クラブ恒例のボランティア行事に使うのって説明したら簡単に納得しちゃったから。うち

の家庭科クラブ、毎年、春と秋に県内の介護施設とかに部員が作ったいろいろな物を寄付するのが恒例になってるんだけど、この春は児童養護施設と託児所が寄付先になっているの。そこへ贈る物だよって言ったたら、みんな納得しちゃった。ま、そうだよ。こんな物、そんな理由でもなきやわざわざ学校へ持って来る人なんていないよね」

美沙は軽かぶりを見ると、紙袋の中に差し入れていた右手をそっと引き戻し、紙袋から取り出したばかりの『こんな物』を真衣の目の前でひらひら振ってみせた。

「あ……」

真衣は一瞬、それが何なのかわからなかった。だが、じきに、美沙が目の前で振っている布地の正体に気づき、大きく目を見張って唇を震わせた。

「ま、確かにそうかもね」

美幸がくすつと笑って肩をひよいとすくめてみせた。

「そういうこと。ただ、端っこの刺繍まで見られていたら私も説明のしようがなかったけど」

大きな瞳をくりりとさせて、美沙もくすりと笑った。

「そりゃそうよね。おむつに刺繍してある名前まで見られたりしたら、どう説明していいか、美沙じゃなくても困っちゃうわよね。でも、誰もそこまで気がつかなかったんでしょ？ だったら、それでいいじゃない」

美幸は美沙から布地を受け取ると、それを両手で広げ、その端にピンクの糸で刺繍してある『さとうまい』という文字を真衣の目の前でわざとゆっくり指でなぞってみせた。

そう、美沙が紙袋にぎっしり詰め込んで持ってきたのは、水玉模様や動物柄の布おむつだった。それも、ご丁寧に真衣の名前の刺繍を施した布おむつ。

「ど、どうして……」

真衣は、自分の名前が平仮名で刺繍してある水玉模様の布おむつから目をそむけ、唇を噛んだ。

「真衣ちゃんのおむつかぶれがこれ以上ひどくならないようによ。そのためにわざわざ美沙お姉ちゃんが用意してくれたんだから」

呻き声をあげる真衣に向かって、美幸はしれっとした顔で言った。

「二日前、真衣ちゃんがおむつかぶれになりかけていることに気がついた私たちはいろいろ相談したんだけど、おしっこをしても汗で蒸れることもあるから、こまめにおむつを取り替えてあげるのが一番だということになったの。でも、紙おむつだと、もともと吸水性がいいから、おしっこをしちゃっても少しの間くらいならいいかなって、ついそのままにしちゃう心配があるのよね。現に、私がお家に来るまでは、夜中におねしよで紙おむつを汚しちゃっても、真衣ちゃん自身がそれに気がつかなくて朝までぐっすりだったんだもの。それに比べて、布おむつだと、もともと蒸れやすいものだってわかってるから、こちらも気になって、結果として、なるべくこまめに取り替えてあげることになるんじゃないかなってという結論になったのよ」

「うん、そういうこと。それに、嘘か本当か知らないけど、紙おむつよりも布おむつの方がおむつ離れが早いっていう話もよく聞くしね。だから、私が用意してあげることにしたの。」

私が赤ちゃんの頃に使っていたおむつは親戚の子にあげちゃったらしいけど、妹が赤ちゃんの時に使っていたのはまだ押し入れの奥にしまっているのよっていつだったかお母さんが言っていたのを思い出したから、それを使えばいいかなって思ってた」

美沙が美幸の言葉を引き継いで言い、別の布おむつを紙袋から取り出して続けた。

「でも、妹のお下がりをもそのまま使わせるんじゃないや真衣ちゃんが可哀想かなと思ったから、私の愛情のシルシとして、おむつに一枚一枚、真衣ちゃんの名前を刺繍してあげることにしたのよ」

美沙はそう言って、美幸がついさつきしてみせたように、布おむつの端に刺繍した真衣の名前を指先でなぞった。

「妹さんは美沙とは十歳違いなんだそうね。だったら、妹さんが赤ちゃんの頃は美沙がおむつを取り替えてあげたこともあったの？」 美幸は、美沙の家族構成も、美沙が家族とどういう生活を送っているのかも熟知していながら、わざとらしい口調で尋ねた。

「うん、あるよ。私が赤ちゃんの時にはもう紙おむつが当たり前になっていたのに、うちのお母さん、布おむつの方が愛情がこもっているような気がするからって妙に意固地になっちゃって、私も妹も布おむつだったんだけど、お母さんがちよっと買物に出た時とかに妹がおむつを汚しちゃったら、私を取り替えてあげたの。最初は見様見真似だったけど、回数をこなすうちにどんどん上手になっていって、すぐお母さんに褒められるようになったんだから」

美沙はにこやかな笑顔で応えた。

「だったら、ますます、真衣ちゃんのお世話をまかせても大丈夫ね。それに、これからは、本当の妹さんにあててあげていた布おむつを使うことになるんだから尚更。ね、真衣ちゃんもそう思うでしょう？」

美幸は、簡易よだれかけで覆われた真衣の胸元をぽんぽんと叩いて言った。

その間に美沙の手がすつと伸びてオーバーパンツに指がかかる。

そのことに気づいた真衣が慌てて身をよじるが、なにほどの抵抗ができるものでもない。

美沙はオーバーパンツを真衣の膝の上まで手早く引きおろして、あらわになった紙おむつに目をやった。

股間からお尻にかけての吸収帯がおしっこを吸ってぷっくり膨らんでいるのが一目でわかる。

「やだあ！」

突然、真衣がそれまでになく悲痛な叫び声をあげ、体全体を強引に捻ったかと思うと、あらん限りの力で手足をばたつかせ、布団の上からフローリングの床に転がり出た。

幼なじみで一番の親友である美沙の手でおむつを取り替えられる屈辱に耐えかね、どうしようもなく感情が高ぶっているところへ、ちよっと、筋肉の力を弱める薬の効果が薄れてきたのだろう、それまでの弱々しい抵抗とはいささか異なり、今度こそようやく美幸の手から逃れることができた真衣。

しかし、それで完全に逃げおおせるわけではない。薄れてきたとはいっても薬剤の効果は

まだまだ残っている上、体を殆ど動かしていない生活が三日間近くも続いたせいで、本来の手足の筋力も目に見えて落ちてきているものだから、床に手をつけて上半身を起こすのが精一杯という状態だ。

それでも真衣は体を引きずるようにしてリビングルームの入り口へいざり寄ると、必死の思いで伸ばした手でドアのノブをつかみ、膝を床について、そのままじりじりと体を引き上げるようにして立ち上がった。が、真衣にできるのはここまでだ。



壁に体をもたせかけるようにしておそるおそる足を踏み出したものの、ただでさえ力が入りにくいところに持つてきて、膝の上まで引きおろされたオーバーパンツに脚を絡め取られて、ぐじゅつという鈍い音と共にその場に尻餅をついてしまう。

布おむつと違って、紙おむつの場合は、吸収帯の中に仕込んである高分子吸水材がおしっこをゼリー状に固めるため、いったん吸い取られたおしっこが沁み出す心配は少ない。とはいっても、全てのおしっこが吸収帯に吸い取られるわけではなく、幾らかは紙おむつの内側全体を構成する不織布に沁みこむため、或る程度の荷重をかけると、おしっこが逆流して沁み出すことも珍しくない。特に、尻餅をついたような急激な荷重のかけ方だと尚更だ。

真衣の場合も例外ではなかった。不織布から沁み出たおしっこは、ギャザーからの横漏れになって腿の皮膚を伝い流れ、僅かながら、真衣の脚とフローリングの床をじとじと濡らしてしまう。

「い、いやあ……」

さつきと比べれば随分と弱々しい悲鳴をあげながら、真衣は、床と腿から伝わってくるじとじと湿っぽい感覚から逃れようとしてお尻を浮かせた。だが、慌てたせいか今度はノブを上手くつかむことができなくて、そのまま前方にゆっくり倒れこみ、両手を床について四つん這いの姿勢になってしまう。

「駄目よ、真衣ちゃん。早く取り替えないとおむつかぶれがひどくなっちゃうってば」

「そうよ。お姉ちゃんがおむつを取り替えてあげるからおとなしくしてようね」

それまで真衣の行動を面白そうに眺めていた美幸と美沙だったが、そろそろいいかなどもいうように互いに頷き合うと、二人揃って立ち上がり、四つん這いの姿勢でドアに体を擦りつけるようにして身をすくめる真衣に向かって足を踏み出した。

「やあ……」

迫ってくる美幸と美沙の手から逃れるため、真衣は、少しは自由に動かせるようになったもののまだまだ力の入らない手足を無理矢理動かし、四つん這いの姿勢のまま壁に沿って体を動かし始めた。

おしっこを吸ってぷっくり膨れた吸収帯の目立つ紙おむつに包まれたお尻を左右に振りながら手足をぎこちなく動かしてのろろ這い進む真衣の姿は、ようやく這い這いができるようになった赤ん坊そのままだった。それも、おむつの交換を嫌がってオーバーパンツを両脚に絡ませたまま母親の手から逃れようとする聞きわけの悪い赤ん坊。

「待ちなさいったら、真衣ちゃん。ちよつと這い這いができるようになったらこれなんだから、お転婆にもほどがあるわ」

「本当にそうね。こら、待ちなさい、真衣ちゃんったら。這い這いで遊ぶのはおむつを取り替えてからよ」

のろのろとしか移動できない真衣が相手だから、捕まえようと思えばすぐにでも捕まえることはできる。だが、美幸と美沙は互いにしめしあわせて、わざとゆっくり真衣を追いかけた。そんなことをするのは、もちろん、おむつの交換を嫌がって逃げまわる赤ん坊さながらの真衣の姿をたっぷり眺めると同時に、ある意味、「狩り」の楽しみを味わうためだった。けれど、真衣の方は、そんな二人の胸の内にはまるで気づかず、ただひたすら、自分を絡め取ろう迫ってくる四本の手から逃れるために自由に動かない手足を動かし、床に落ちそうになるお尻を持ち上げて左右に振りつつ、息を切らせて部屋中を這い這いでうろろするばかりだった。その姿に背後の二人が妖しい悦びに胸を満たしていようななどとはまるで思いもせずに。

\*

「ほら、つかまえた。本当に真衣ちゃんは悪戯っ子なんだから。でも、もうここまでよ。おむつを取り替えたなら一緒に遊んであげるから、それまではおとなしくしてなきや駄目よ」

およそ二十分間ほど追いかけてしまった後、美幸は、とうとう力尽きて四つん這いの姿勢のまま動きを止めた真衣の腰を両手でつかまえた。

「いや……美沙におむつを取り替えられるなんて、そんなの絶対いやあ！」

もう息も絶え絶えだというのに、美幸と並んで膝立ちになっている美沙の顔を見ないようにして、真衣は力なく首を振って声を震わせた。

「やれやれ、まだそんなことを言ってるんだ、真衣ちゃんたら。おねむの間に何度も美沙お姉ちゃんにおむつを取り替えてもらっているのに、今更なに言っているのかしらね」

美幸はわざとおおげさに呆れてみせてから、美沙に向かって言った。

「いいわ、言ってもわからないみたいだから、このまま取り替えちゃいましょう。真衣ちゃんだって、新しいおむつに取り替えてもらったらお尻が気持ちよくなって、もうこれからは逃げまわらなくなるでしょうから。私が真衣ちゃんをつかまえているから、美沙は、お布団の上からあるおねしょシーツをここに持ってきて敷いてちょうだい。これだけ暴れまわった後だと、おむつのサイドステッチを破った途端おしっこが沁み出してきて床を濡らしちゃうかもしれないから」

「うん、わかった。ここに敷けばいいのね。——はい、いいわよ。ここにころんしてちょうだい、真衣ちゃん」

言われた美沙は身軽に立ち上がると、布団の上に敷いてあったパイル地のおねしょシーツを床に敷き直し、掌でぼんぼんと叩いてみせた。

「さ、いつまでも這い這いじや疲れちゃうから、ほら、ころんして」

美沙がおねしょシーツを敷き終わるのを待って、美幸は腰を両手で持ち上げるようにして真衣の体を移動させた。それから、おもむろに、おねしょシーツの真ん中にお尻が載るように位置を合わせて真衣の体を横たわらせる。

「いや、いやだってば……」

真衣は口では嫌がるものの、二人に追いかけてまわされた結果、目を覚ました直後と比べても尚のこと抵抗する力は残っていなかった。

「ところで、ママ。ママが用意してくれることになっている物、どこにあるの？」

美沙は、真衣が仰向けに寝かされる様子を見守りながら、美幸に尋ねた。

「あ、そうだったわね。真衣ちゃんを追いかけるのに夢中になっちゃって忘れてたわ。美沙、これまで何度もこのお家に来ているんだったら、真衣ちゃんの部屋は知っているわよね？」

真衣ちゃんのお部屋の隣が二つ空いているから、一つを美沙のお部屋、もう一つを真衣ちゃんの新しいお部屋に使うことにしたの。美沙のお部屋はこれまでの真衣ちゃんのお部屋に近い方で、真衣ちゃんの新しいお部屋は美沙のお部屋の隣にしたいんだけど、その新しい方の真衣ちゃんのお部屋に置いておいたから持って来てちょうだい。ついでに、学校の鞆は自分のお部屋に置いてくるといいわ。——真衣ちゃんは、美沙お姉ちゃんが戻ってくるまでおとなしく待つてようね。はい、お口が寂しくないようにこれをちゅうちゅうして」

美幸は美沙に言うてから、改めて自分の太腿に真衣の頭を載せさせ、再び手にした哺乳壘の乳首を唇に押し当てた。

「うん、わかった。じゃ、ちょっと二階へ行ってくるね。お姉ちゃんが戻ってくるまで、真衣ちゃんはママと一緒に待っていてね。すぐに戻ってくるから寂しくなんかないよね」

美沙は、哺乳壘の乳首を強引に口にくくまされた真衣に向かって優しく微笑んでみせた後、足早にリビングルームをあとにした。

## 《十五．特別仕立てのおむつカバー》

しばらくして戻ってきた美沙は、両方の手にバスケットを一つずつ提げていた。どちらも、紙おむつやオーバーパンツを入れてリビングルームに置いてある脱衣籠と同じ藤製だが、脱衣籠の方は実用本位であり飾り気がないのに対して、こちらの方は二つとも取手が柔らかな布地で覆ってあったり、バスケットの周囲が飾りレースで縁取ってあったりと、それが育児用の藤籠だということが一目で見取れる。

「これでいいの、ママ？」

美沙は、二階の部屋から持ってきたバスケットを一つずつ美幸の目の前に置いて尋ね、先に床におろした方のバスケットに向かって手を伸ばした。

そちらのバスケットに何が入っているかは、美幸の太腿に頭を載せてこちらの様子をおらずと窺っている真衣にも丸見えだ。

「……！」

「いいわよ、これで」

バスケットに収められている物を目にした途端はっと息を飲む真衣とは対照的に、美幸は澄ました顔で頷いた。

「よかった、間違つてなくて。でも、ま、間違いようなんてないかな。だって、真衣ちゃんの新しいお部屋に置いてあったんだし、それに、こんなに大きなおむつカバーを使うの、真衣ちゃんの他にはいないもん」

美沙がわざわざ美幸に尋ねたのは、自分が持ってきたバスケットで間違いがないかどうか確認するためというよりも、バスケットに何が入っているかを、目だけではなく、はっきりと言葉で真衣に告げるためなのに違いない。それは、きちんとたたんでバスケットに収納してあるおむつカバーの内の一枚をこれみよがしに真衣の目の前で広げてみせる行為からも明かだ。

「それにしても、こんなに大きなおむつカバーなんて初めて見たわ。どこで買ったの、ママ？」

美沙は聞こえよがしに『こんなに大きなおむつカバー』という部分を強調して言いながら、両手で広げ持ったおむつカバーを興味津々といった顔つきで眺めまわした。

「買ったんじゃないくて、医院と取引のある業者さんをお願いして特別につくってもらったのよ。ただ、トレーニングパンツは前もってお願いしていたから問題なかったんだけど、おむつカバーは、美沙と相談して布おむつを使ってみようかってことになってからお願ひしたもんだから、業者さんにも悪いことしちゃった。でも、介護用の衣料を専門に手がけている。パタンナーの人とか少量注文を一手にこなしているお針子さんとかの協力で昨日のうちにつくってもらえて、今朝、配達してもらったのよ。それに、私が手芸品店で買っておいた生地を表地に使うてもらったこともできたし。ほんと、日ごろからのおつきあいが大切だったこと、改めて知ったわ。それに、ほら——」



美幸は美沙に説明しながら、左手で哺乳壺を支え持ったまま右手でバスケットからおむつカバーをもう一枚取り出した。

「美沙が持っているのとママが持っているの、形が違うのよ。業者さんにはおむつカバーを二種類お願いしたんだけど、それも嫌な顔一つせずに引き受けてくれたの。二種類のおむつカバー、どこが違うか美沙にわかるかな？」

言われた美沙は、それまで持っていたおむつカバーをバスケットに戻し、その代わりに、美幸から手渡されたおむつカバーを両手で広げた。

「あ、本当だ、形が違う。最初のはなんとなく全体的にずんぐりした感じだったけど、これはすつきりしてる。なんだか、幅も違うし、股がみもこっちの方が浅いのかな。なんていえばいいんだろう、最初のが昔ふうのズロースだとしたら、こっちはビキニっぽいつて感じ？」

「はい、よくできました。昔は、股当てのおむつと横当てのおむつとをアルファベットの『T』の字の形になるように組み合わせ使っていたの。でも、横当てを使う方法だと赤ちゃんと股関節脱臼になりやすいつてことがわかってきて、結局、股当てのおむつだけを使う方法が主流になったのよ。美沙が最初に広げたのが、昔ながらのおむつの当て方に合わせたおむつカバーで、後で私が渡したのが、新しいあて方、つまり、股おむつ用のおむつカバーつてわけ。ベビー用品のお店に行くとかわかんと思うけど、今じゃ、股おむつ用のカバーしか置いてない筈よ」

美幸は、美沙がバスケットに戻したおむつカバーを持ち上げ、美沙が持っている股おむつ用のカバーに重ねてみせた。

「じゃ、どうして、業者さんの手を煩わせてまで、そんな昔ふうのおむつカバーまでつくつてもらったの？ 股おむつ用のカバーだけでいいと思うんだけど」

「うん、確かに、横当てを使う方法は股関節脱臼になりやすいつていう欠点はあるんだけど、それは、赤ちゃんに使う時だけの問題なのよ。体がちゃんと成育した大人に使うぶんには何の問題もないの。それどころか、横当てを使う方法だと、前当てから沁み出したおしっこもきちんと受け止めてくれるから、漏れ出しにくいっていうメリットがあるの。だから、怪我や病気で体を動かかせない寝たきりの患者さんとかお年寄りとか、大人でもおむつのお世話にならなきゃいけない人には今もこの方法でおむつをあててあげることが多いのよ。だから、こういう昔ながらのおむつカバーも用意しておいたの。いくら赤ちゃん返りしちゃったとはいっても、真衣ちゃん、体だけは高校生だから、もう股関節脱臼になる心配はないものね。それに、本当の赤ちゃんに比べればおしっこの量も多いし」

「でも、だったら、逆に、昔ふうのカバーばかりでもよかつたんじゃないの？」

「まあ、実用性だけでいったら、それでもよかつたんだけどね。でも、よそのお家の赤ちゃんが今ふうの股おむつなのに、うちの真衣ちゃんだけ古い型のおむつカバーだなんて、ちょっと寂しいと思わない？ だいいち、真衣ちゃん本人が可哀想よ。うんとおめかしさせて公園デビューって時に、一人だけちよつと野暮ったいおむつカバーだと仲間に入れてもらえないかもしれないじゃない。だから、お家にいる時は横漏れ防止の実用性重視で横当てを使うやり方にして、お出かけの時は見た目すっきりの股おむつにするとか、場所と場面に応じて

使いわけられるようにしておいた方がいいかなと思つて、業者さんが型紙を二種類用意してくちやいけないのは申し訳ないんだけど両方お願いしたのよ。——私が買った生地を使つてくれるようお願いしたのも同じ理由からなのよ。介護衣料の業者さんにまかせきりだと、どうしても、病院で使つておむつカバーみたいな薄いブルーとかベージュとか、そんな地味な色合いの生地になっちゃうの。でも、せつかくだから、真衣ちゃんが喜んでくれるような可愛いおむつカバーに仕上げしてほしいじゃない？ だから、ひよつとしたら必要になるかもしれないと思つて手芸用品のお店で買つておいた生地を使つてもらふことにしたの」

「へーえ、そういうことか。いろいろ考えてるんだね、ママ」

「そうよ、初めての赤ちゃんの時は、そんなふうにいる頑張っちゃうものなのよ。美沙もいずれ赤ちゃんができたらかわがると思うけど」

にこやかな笑顔でそんなふう語り合う二人のやり取りを聞いていると、あたかも、赤ん坊ができたばかりの家庭で育児用品談義に花を咲かせる母親と娘としか思えない。だが、二人の目の前に横たわっているのは生まれたばかりの赤ん坊ではなく、女子高生の真衣なのだ。「さ、説明はこのくらしにして真衣ちゃんのおむつを取り替えてあげましょう。本当の赤ちゃんよりもずつとおしつこの量が多いからおむつも厚めにあててあげなきゃいけないけど、あまり厚くしすぎるとおむつカバーの股ぐりが広がって横漏れしちゃうから、股当ては八枚くらいにしてみようか。あと、横当ては、赤ちゃん用の布おむつをそのまま使っちゃ短いから、二枚のおむつの端どうしをちよつとずらして重ねて使えばいいわ」

顔をあらぬ方にそむけて両目をぎゅつと閉じている真衣の横顔をちらと見おろして、美幸は股おむつ用のカバーをバスケットに戻すと、昔ながらの少しずんぐりした感じのおむつカバーのホックを手早く外し、前当てを開いて美沙の目の前に置いた。

「うん、わかった。ええと、おむつカバーの横羽根を広げて、その上に横当て用のおむつを二枚。それから、それと直角になるように股当てを八枚、と——これでいいのかな」

美沙は指示通りおむつカバーの上に布おむつを重ねて美幸に確認を求めた。妹が赤ん坊の時におむつを取り替えてやった経験があるとはいえ、その手際の良さは、あらかじめ美幸から十分な説明を受けていたのが明かだ。

「それでいいわ。じゃ、次は紙おむつを外してあげて」

美幸は、端に真衣の名前が刺繍してある布おむつが何枚もおむつカバーの上に重ねて敷いてある様子を見て満足げに頷き、美沙に次の行動を指示した。

「うん、ママ。じゃ、真衣ちゃん、おしつこで汚れた紙おむつを外してあげるからおとなしくしててね」

美沙の指が紙おむつのサイドステッチにかかった。

抵抗しようにも、精も根も尽き果てて手足を僅かに動かす力も残っていない真衣には、美幸と美沙のなすがままにされるしかない。それをいいことに、美沙はいとも簡単にステッチを破り、もうすつかり手慣れた様子で紙おむつを真衣の下腹部から矧ぎ取った。

その瞬間、真衣が両脚を擦り合わせる。

しかし、そんなことで無毛の下腹部を隠せるわけがない。

「あ、真衣ちゃん、本当の赤ちゃんみたい。つるつるですすべにしてもらったんだね」

美沙は、飾り毛を一本残らず剃り落とされた真衣の下腹部を目にするなり嬌声をあげた。だが、すぐに顔を曇らせ、痛まじげな口調で言葉を続ける。

「でも、せっかくなすべすべにしてももらった綺麗なお肌が赤くなっちゃってる。だけど、ママとお姉ちゃんがこまめにおむつを取り替えてあげるから、もう大丈夫よ。ちゃんとお手入れして少しでも早くおむつかぶれを治そうね」

むろん、そんな美沙の言葉に真衣からの返答はない。だが、美沙はそんなことにはまるでお構いなしにお尻拭きを一枚さつと容器から抜き取って真衣の股間に押し当てた。

「あ……」

おむつかぶれのせいでむず痒さを抑えられないところへアルコール系の薬剤を染みこませたお尻拭きを押し当てられ、そのひんやりした肌触りに、真衣の口をあえかな喘ぎ声が衝いて出た。

「気持ちいいのね、真衣ちゃん。おしっこで濡れたおむつのまま逃げまわったりするから、ずつとお尻が気持ちわるかったんでしよう？ でも、すぐに綺麗綺麗してあげるからね。綺麗綺麗して、ふかふかのおむつをあててあげるからね。何度も何度もお洗濯を繰り返してうんと柔らかくなったら、妹のお下がりのおむつをあててあげるからね」

入念にとよりより、執拗に真衣の下腹部を拭き清めながら、美沙は頬を紅潮させてねっとりした口調で言った。

そんな美沙の様子に、美幸は、協力者として美沙に目を付けた自分の判断が間違っていないかっただけという満足感をますます強くし、胸の中でほくそ笑む。

\*

お尻拭きのあとは、いよいよ、おむつだ。

美沙は真衣の左右の足首を右手で一つにまとめてつかみ、そのまま高々と差し上げた。そうすると、真衣のお尻がおねしょシートから僅かに浮き上がる。

美沙は、真衣のお尻とおねしょシートとの間に、おむつかバーと布おむつを敷き込んだ。

「あん……」

お尻から伝わってくる布おむつの肌触りは想像していたよりもずっと柔らかかった。普通の下着では絶対に味わえない、肌を撫でさすられるようで、ありったけの羞恥をくすぐられてならない、そんな柔らかさだった。喘ぎ声とも呻き声ともつかない、どこか艶めかしい声が真衣の口から漏れ出るのも仕方ない。

美沙は、真衣のお尻の下に敷き込んだおむつの位置を細かく調節してから、いったん高々と差し上げた足首をそつと床の上に戻し、美幸が差し出した丸い容器を受け取った。言うまでもなく、おむつかぶれの薬が入った容器だ。

だが、容器はそれだけではなかった。美幸は、もう一つ色違いの容器を

「これもおむつかぶれの薬なんだけど、特に、おしっこで汚れやすい箇所塗るお薬なの。最初にこつちをおしっこが出てくる所を中心に念入りに塗り込んでから、最初に渡したお薬をお尻も含めて満遍なく塗ってあげるといいわ」

という言葉と共に美沙に手渡したのだ。

「あ、そうなんだ。妹、生まれたのが夏だったからすぐおむつかぶれになっちゃって、お母さんがお薬を塗ってあげているところをよく見てたけど、チューブ入りのが一種類だけだったよ。ま、あれは薬屋さんでお母さんが買ってきたものだから仕方ないけど、お医者様がちゃんと用意すると、塗る箇所ごとにお薬も二種類になるんだ。やつぱり、専門家はすごいな」

色違いの容器を二つ受け取った美沙は、後から渡された方の蓋をきゅっと捻りながら、自分の妹がおむつかぶれになった時のことを思い出し、感心しきりに言った。

しかし、今まさに美沙が真衣の秘部に塗るために指先で掬い取ったのは、実はおむつかぶれの治療薬ではなく、美幸が皮膚科の医師に言葉巧みに処方させた脱毛クリームだった。美幸は真衣の下腹部の飾り毛を一本残らず剃り落として童女さながらに変貌させただけでは飽き足りず、もう二度と茂みが生えてこないよう徹底的な処置を施すつもりなのだ。それも、自らの手を煩わすことなく、真衣の幼なじみであり一番の親友である美沙の手によつて。もちろん、美沙自身は美幸がそんな企みを仕組んでいることなどまるで気づいていない。クラスメートを赤ちゃん扱いするという、普通なら絶対に経験できない背德的な刺激に満ちた行為に妙な胸の高鳴りを覚えつつ、優しげな姉という役割を与えられるまま、その妖しい世界における自分を演じているだけだ。

「さ、できた。言いつけを守っておとなしくしていたわね。真衣ちゃんは本当にいい子だわ。そのまま、あとちよとの間だけいい子にしていってね」

美幸の指示に従って脱毛クリームとおむつかぶれの治療薬を真衣の下腹部の肌に入念に塗り込んだ美沙は、床の上に戻した真衣の両方の足首を今度は各々両手で持ち、軽く左右に開かせると同時に、両脚の膝を「へ」の字にの形になるよう折り曲げさせた。

「はい、おむつをあてるから、このままあんよを動かさないでね」

美沙は股当ての布おむつの端を持ち上げ、真衣の両脚の間を通して、おヘソのすぐ下にまわした。

「あ……」

それまではお尻の下からしか伝わってこなかった使い込んだ布おむつの柔らかな肌触りが股間から下腹部いっぱいに包み込むように広がり、真衣は再び熱い吐息を漏らしてしまう。

母親が亡くなった後は、こちらから美沙の家を訪ねることが多くなったものだから、真衣も美沙の妹のことは生まれた時からよく知っている。いや、よく知っているというよりも、妹も含めて三人姉妹同然に育ったといった方が正確だろう。その妹が赤ん坊の頃に使っていた布おむつをお下がりとして今度は自分が使わされるのだ。しかも、友人である美沙の手で名前を刺繍されたおむつを。

「その次は横当てのおむつね。妹さんの時は股おむつだったから横当てなんて知らないでしょうけど、あまり難しく考えないで、股当ての上にしっかり重ねればいいのよ」

股当てに続いて横当てのおむつの端を持ち上げたものの、少しばかり戸惑う様子をみせる美沙に向かって、美幸は落ち着いた声で言った。

美幸に言われるまま美沙は横当てのおむつを股当てに重ねた後、おむつカバーの左右の横羽根を持ち上げて、横当てのおむつの上で互いの端を重ね合わせ、マジックテープでしっかり留めた。

「そう、それから、おむつカバーの前当てよ。股ぐりのところからウエストまでホックが四つ並んでいるでしょう？ それを、おむつがずれないように下から順に留めていくのよ。——うん、そうそう、それから、ウエストの紐を結わえればいいの」

美幸の言葉に合わせて美沙の手が動き続け、いつしか、真衣の下腹部は、水玉模様の布おむつと、大小様々なキャンデー柄をプリントしたおむつカバーにびっちり包まれてしまう。

最後の仕上げに、おむつカバーの股ぐりからはみ出ている布おむつをおむつカバーの中に丁寧に押し込めば、それでおしまいだ。

「はい、できた。言いつけを守っていい子にしていたわね、真衣ちゃん。あとは、オーバーパーツだけだからね」

美沙は、紙おむつと比べても尚のこと丸く膨らんだおむつカバーの上から真衣のお尻をぽんと叩いた。が、真衣にしてみれば、おとなしくしていたのではなく、抵抗する力を全て失って、おとなしくせざるを得なかったというのが本当のところだ。

そんな真衣の胸の内を知ってか知らずか、美沙は、膝の上まで引きおろしていたオーバーパーツを引き上げ、おむつカバーの上に重ね穿きさせた後、少し感心したように言った。

「パンツタイプの紙おむつだと、外すのはいいとしても、穿かせる時にはオーバーパーツをいったん脱がせなきゃいけないかったけど、布おむつとおむつカバーだと、おむつを外すのも新しいおむつをあてるのも、オーバーパーツはちよつとずらしておけばできちゃうんだ。おむつをあてるのは少しコツが要るけど、こういうのは便利かな」

「そうね。マジックテープで留めるタイプの紙おむつでもオーバーパーツを脱がせる手間は省けるんだけど、でも、ついついこっちが交換をさぼっちゃって真衣ちゃんのおむつかぶれがひどくなるかもしれないから、やつぱり、二人で相談して決めた通り布おむつにして正解ね」

美幸は真衣に対して美沙との関係を殊更強調するかのようになり、『二人で相談して決めた通り』という部分をそれとなく強調して相槌を打った。

「本当、布おむつにしてあげてよかった。妹も、赤ちゃんの時に使っていたおむつをどここの誰とも知らない子に使われるより、真衣ちゃんに使ってもらった方が嬉しいだろうし。いつか、妹を連れて来ようかな。小っちゃい時にいろいろ面倒をみてくれた真衣お姉ちゃんが赤ちゃん返りして今は真衣ちゃんになっちゃったんだから今度はあんたが可愛がってあげなきゃ駄目よとか言って、妹にも真衣ちゃんのお世話を手伝わせちゃおうかな」

真衣も相槌を打ち返して、冗談とも本気ともつかない口調で言った。

その言葉に、美沙の妹の手でおむつを取り替えられる場面が頭をよぎり、真衣は思わず身震いしてしまう。

## 《十六． 屈辱の衣裳》

「あれ？ 寒いのかな、真衣ちゃんは？」

一瞬とはいえ真衣の体がぶるつと震えるのを見逃すことなく、美幸が、なにやら含むところのありそうな口調で言い、真衣に気づかれぬよう美沙に向かってそつと目配せをした。

「そういえば、真衣ちゃん、おねむの間はずつと丈の短いパジャマばかりだったんだよね。汗でびっしりになるたびにママと私で着替えさせてあげたけど、真衣ちゃんの箆筒に入っている寝間着はどれも同じようなパジャマばかりで、いくらおむつの上にオーバーパンツを穿かせてあげても、こんな丈の短いパジャマじゃお腹が冷えちゃうんじゃないかな」

美幸からの目配せを受けて、美沙は今更ながらのように言った。

「そうね。それに、さっきはおむつの交換を嫌がって這い這いで逃げ回ったりしたし。そんなお転婆の真衣ちゃんには丈の短いパジャマなんかじゃなくて、もっとちゃんとお腹が出ないようなものを着せてあげた方がいいのかしら」

美幸は自分の顎先に人差し指を押し当てて考え考え言った。

しかし、美幸が何を言おうとしているのか、美沙にはすっかりわかっている。

「だったら、ママ、こんなのはどうかな。昨夜、おむつに刺繍をし終わった後、一着だけつくってみたの。たくさんつくってサイズが合わなかったらいけないから、とりあえず、お試し用なだけだね。これでサイズがぴったりだったら、いろんなデザインで何着もつくってあげてもいいなと思ってるんだ」

前もって美幸と口裏を合わせておいた美沙は、布おむつを詰め込んできたのとは別のもう一つの紙袋に右手を突っ込んで、淡いパステルピンクの生地でできた衣類を一着つかみ上げた。

「ほら、これなら真衣ちゃんがいくら動きまわってもお腹は出ないわよ。だから、おねむの間に毛布を跳ね飛ばしちやってもお腹が冷える心配はないし」

今度は美沙が美幸に向かって目配せを返しながら、紙袋から取り出した衣類をさつと広げた。

美沙が両手で広げ持った衣類は、一見したところでは、丸っこく仕立てたパフスリーブの三部袖と全体のふんわりしたラインが愛らしいワンピースのようだった。だが、スカートの下にブルマーのようなボトムスが一体になっていることから、それが普通のワンピースではないことが明かだ。しかも、ブルマー型をしたボトムスの股間には、大きなボタンが四つ並んでいる。

「このボタンを外すと、ほら、こんなふうにお尻のところが大きく開くようになってるのよ。ね、真衣ちゃん、なんのためにこんなふうになっていると思う？」

美沙は、スカートと一体になっているボトムスのボタンを四つとも手早く外し、股間の布を大きく前後に広げた。

それを見た真衣の頬にさつと朱が差す。

何のためにそんなところにボタンが付いているのか、そして、その洋服がどういう種類の衣類なのか、真衣にもすぐにわかった。わかったけれど、羞恥と屈辱のあまり、それを口に出すことはできない。

「これはね、ロンパースっていうお洋服なのよ。もう少し正確に言うと、女の子用のスカート付きロンパースね。うちの妹も二歳くらいまで着ていたの、真衣ちゃんも憶えてるでしょう？」

真衣が答えるわけがないことを見越して、美沙は、その後に関いたボトムスの

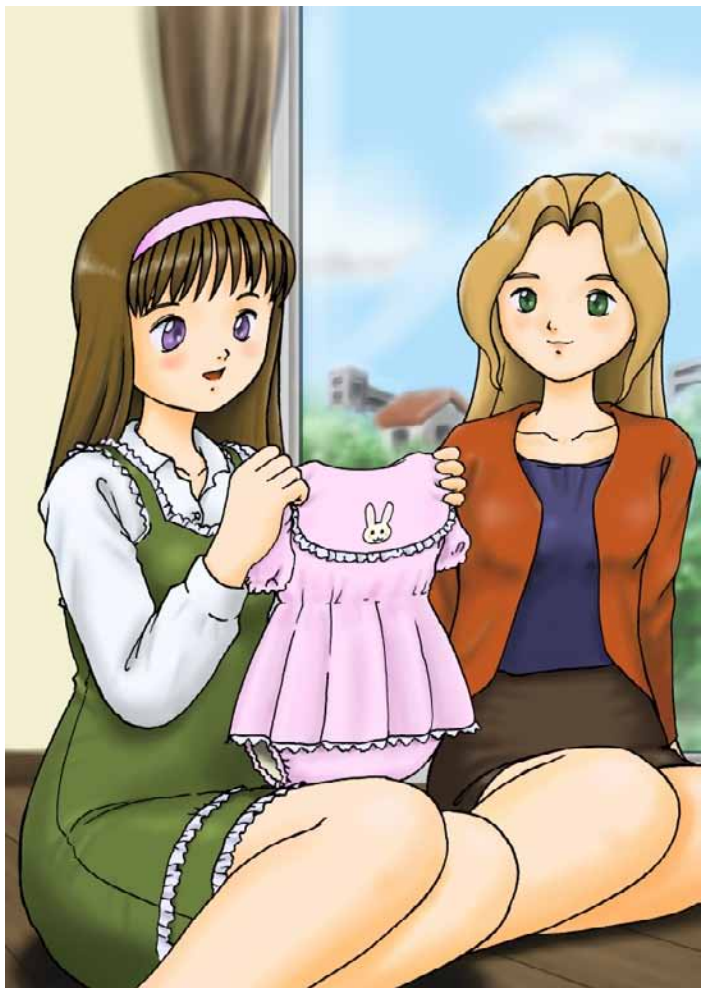
部分を指差しながら念を押すように言った。

「だったら、どうしてお尻のところがこんなふうになんかに開くようになっていいるのかもわかるよね？ お母さんや私が妹のおむつを取り替えてあげるところ、真衣ちゃんも見ていたんだから。ううん、そのうち何度かは、真衣ちゃんがおむつを取り替えてくれたんだものね。妹が着ていたロンパースのお尻のところを広げて」

美沙の言う通り、真衣も何度か美沙の妹のおむつを取り替えてあげたことがある。だから、もちろん、ロンパースのボトムスに付いているボタンが何のためのものなのか、充分にわかっている。わかっているけど、でも……。

「おむつを取り替えるたびにわざわざお洋服を脱がせる手間を省くためにこんな所にボタンがついているんじゃないか？ 日に一度とか二度くらいならお洋服を脱がせてもいいけど、三時間ごととか二時間ごとにおむつを汚しちゃうような子を相手に、そのたびにお洋服を脱がせたり着せたりしたら大変で仕方ないものね。初めて妹のロンパースのボタンを外してみせてあげた時、真衣ちゃんたら、へえっ言っつてすごく感心していたじゃない」

口をつぐむ真衣の顔を真上から見おろして美沙は言った。  
「よかったわね、真衣ちゃん、こんなに可愛いロンパースを美沙お姉ちゃんにつくってもらえて。確かに、これならお腹が冷える心配はないわね。オーバーパンツだけじゃちよつと不安だったけど、これで安心だわ。それに、おむつを取り替える時の手間も少しは省けるし」  
美幸は、美沙が広げ持っているロンパースの肌触りを確かめるように、袖口を指先で軽く



揉みながら言った。

「い、いや……そんな、赤ちゃんが着るような洋服なんて絶対にいや！ 真衣、真衣、赤ちゃんなんかじゃ……」

哺乳壘の乳首を咥えたままそれまで固く口を閉ざしていた真衣だが、とうとう耐えきれなくなったのか、美幸の太腿の上で首を振り、金切り声をあげた。筋肉を弱体化させる薬剤の効果がますます薄まってきたのだろう、それまでよりもずっとはっきりした声なだけに、感情の高ぶり具合が明瞭に伝わってくる。

だが、美幸が

「いい加減になさい。同じことを何度言えば気がすむの、真衣ちゃんは？ 赤ちゃんじゃない。私、赤ちゃじゃないからおむつはいや。赤ちゃんじゃないからトレーニングパンツはいや。赤ちゃんじゃないから哺乳壘なんていや。そんなことばかり言っていて、でも、そのたびにおむつやトレーニングパンツをおしっこで汚しちゃったのは誰だった？ スープとお粥をちやんと食べられなくて哺乳壘のミルクを飲ませてもらったのは誰だったのかしら？ なのに、また、赤ちゃんじゃないからロンパースはいやだなんて、いつまで駄々をこねれば気が済むの？ ——そんなに聞き分けのない子に構っている時間はママにも美沙お姉ちゃんにも無いのよ。まだ駄々をこねるんだったら、玄関の外に立ってなさい。三十分くらい経ったらお家に入れてあげるから、それまで、自分がどれだけ悪い子か、お外でたっぷり反省するといいわ」

とびしゃりと言っていて、真衣の言葉を途中で遮ってしまう。

強い調子でそんなふうに言われると、ショッピングセンターや空港でおもらしを強要された経験から、美幸がいったん口にしたことはそれがどんなとんでもないことでも必ず実際に行動に移す性格の持ち主だということをも身をもって思い知らされてきた真衣にはもう、

「ご、ごめんなさい、ママ。お、お外はいや。真衣、いい子にする。いい子にするから、お外に出すのは許して」  
と、懇願するしかなかった。

美幸が佐藤家にやって来てすぐ「自分のことを『真衣』って呼んで、子供らしく可愛らしい喋り方をしなきゃ駄目よ」と言いつけられ、幼児めいた口調を強要されていたものの、クラスメートである美沙の前では自分のことを『私』と呼び、実際の年齢相応の喋り方をするのでかろうじてプライドを保っていた真衣だが、もうそんなことに構っていられるだけの余裕も失ってしまった。今はただ、丈の短いナイテイや即席のよだれかけに、たっぷりあてられた布おむつのせいで丸く膨らんだおむつカバーとオーバーパンツという赤ん坊さながらの姿で家から追い出されまいとして、母親に叱られた幼児そのまま、いつ泣き出してもおかしくないほど情けない声で許しを乞うしかなかった。元来、優が海外へ赴任している間この家の主は真衣で、美幸も美沙も、敢えてきつい言葉で表現するなら新参者でしかない。しかし、いつのまにか、その新参者、とりわけ美幸に主導権を奪われて、真衣は、自分では何もできない無力な幼児になり果てようとしていた。

「いいわ、今回だけは許してあげる。でも、今度また同じようなことがあったら、その時は本当にお仕置きよ」



美幸は厳しい姿勢を崩さずに念押しした。

「……」

「黙ってちゃわからないでしょ。真衣ちゃん、お返事は？」

「……う、うん、ママ。真衣、いい子にする。だから……」

「いいわ、いい子にするのね。だったら、美沙お姉ちゃんに真衣ちゃんからお願いしなさい。お姉ちゃんがつくってくれた可愛いロンパースを真衣に着せてちょうだいって自分でおねだりするのよ」

「そ、そんな……」

美幸の言いつけには従うしかない。しかし、クラスメートである美沙にまで幼児めいた口調で『おねだり』するのは……。

躊躇いがちな真衣の言葉を聞くなり、美幸は、啞えさせていた哺乳壺をトレイに戻すと、両手で真衣の手首をつかみ、体を引き起こしながら

「ふうん、まだわかってないんだ、真衣ちゃんたら。いいわ、お外へ連れて行ってあげる。

玄関じゃなく、門扉の外に出してあげるから、前の道路を歩いている人たちに自分がどんな格好をしているかたっぷり見てもらうといいわ。そうしたら、自分が赤ちゃんなんだってことがちゃんとわかるから」

と冷たく言い放った。

「や、やだ。ごめんなさい。ごめんなさいったら、ママ。真衣、美沙に……美沙お姉ちゃんにおねだりする。ロンパースを着せてっておねだりする。だから、お外はいや」

真衣はありったけの力で美幸の手をかるうじて振り払い、身をすくめた。

「本当に？ 本当に、おねだりできるのね？ だったら、ちゃんとおねだりできて、美沙お姉ちゃんにロンパースを着せてもらったら、お外は無しにしてあげる」

「うん、おねだりする。真衣、ちゃんとおねだりしてロンパースを着せてもらう」

真衣はこくと頷き、恭順の態度を示すかのように自ら美幸の太腿に頭を載せ、今にも泣き出しそうな顔をして美沙の顔を見上げた。

「み、美沙……美沙お姉ちゃん。真衣に、ロ、ロンパースを着せてちょうだい。真衣、美沙……お姉ちゃんがつくってくれた可愛いロンパースを着たいの。だから、お願い」

時おり言葉に詰まりながらも、ようやくそう『おねだり』し終えた真衣に対して、今度は美沙が僅かに首をかしげて言った。

「でも、真衣ちゃん、ついさっき、ママに『私、赤ちゃんなんかじゃない』って言ってたじゃない。だけど、ロンパースは赤ちゃんが着るお洋服なのよ。赤ちゃんじゃない真衣ちゃんが着るなんて変じゃないかな？」

「あっ……ま、真衣、そんなこと言っちゃったけど、でも、違うの。真衣、早くパンツのお姉ちゃんになりたくて、それで、赤ちゃんじゃないって言っちゃったけど、でも、真衣……」

「でも、何なの？」

言い淀む真衣に対して、美幸が短く続きを促す。

「真衣……あ、赤ちゃんなの。真衣、パンツのお姉ちゃんじゃなくて、おむつの赤ちゃんな

の。おねむの間はおねしよしちゃうし、おっきの時はおもらししちゃう赤ちゃんなの。だから、美沙お姉ちゃんをつくってくれたロンパースを……」

「ふうん、そうなんだ。じゃ、『真衣、赤ちゃんじゃない』って言ったのは間違いだったのね。真衣ちゃんは赤ちゃんなのね？」

美沙はわざとらしくおおげさに頷いてから、探るような口調で重ねて言った。

「いいわ、だったらロンパースを着せてあげる。でも、その前に、どうしてロンパースが赤ちゃんのお洋服なのか、もういちど説明しておいてあげるわね。さっきも言ったけど、このボタンを外すと、お尻のところが開けられるようになってるのよ。こんなふうになっているのは、一日のうちに何度も何度もおしっこをしちゃう赤ちゃんのおむつを取り替えやすくするためのよ。だから、一日に一度とか二度くらいしかおむつを汚さないような子にはロンパースは必要ないの。——それでも、真衣ちゃんはロンパースを着せてほしいのね？ 真衣ちゃんもロンパースがお似合いの赤ちゃんなのね？」

「真衣……お、おむつの赤ちゃんなの。真衣、おねしよとおもらしで一日に何回もおむつを汚しちゃう赤ちゃんなの。パンツのお姉ちゃんになれるのなんてずっとずっと先の、おむつを汚してばかりの赤ちゃんなの。だから……」

突き刺すような美幸の視線を痛いほど感じながら、真衣は幼児の口調を真似て哀願した。

自分が日に何度もおむつを汚してしまう赤ん坊だと自ら告げる屈辱に胸が張り裂けそうになる。しかし、そうしなければ、『躰けのためのお仕置き』と称して、とてもではないが人目にはさらせない格好のまま家から追い出されてしまうのだ。

「わかった。真衣ちゃんがおむつを汚しちゃうのは一日に一回とか二回とかじゃすまないのね。だったらロンパースが要るから着せてあげる」

涙目で訴えかける真衣に、美沙がわざとらしい納得顔で言った。

ようやくの美沙からの応諾に、真衣は思わず安堵の溜息を漏らしてしまう。だが、それはなんと羞恥に満ちた安堵だろう。

「じゃ、ママ、真衣ちゃんの体を起こしてあげて。ねんねのままじゃ着替えさせられないから。あ、でも、その前に——」

真衣を膝枕させている美幸に向かってそう言った美沙だが、ふと何か思いついたような顔になると、二階の部屋から持ってきたバスケットの一つに目をやった。二つのバスケットの内、美幸が業者に特別注文でつくらせたおむつカバーを収納してある大きめのバスケットとは別の、やや小振りな方だ。おむつカバーが剥き出しで入っている方のバスケットとは異なり、そちらのバスケットには、埃を防ぐための、ガーゼのハンカチが覆いとしてかかっている、そこに何が入っているのか真衣には判然としない。だが、美沙は、そこに何があるのかとつく知っているようだ。

「さっき、真衣ちゃんをお外へ連れて行きそうになった時、ママ、哺乳壺をトレイに戻しちゃったよね。そのせいで、真衣ちゃん、寂しそうなお顔をしているわよ。このままだと可哀想なんだけど、でも、哺乳壺を啜えたまま着替えさせるのは無理だし、何かいい物はないかしら」

二階から運んで来る際にバスケットに何が入っているのか予め確認しておいた美沙にとって、それを前もって用意していた美幸の意図を察するのは容易なことだった。

「そうね、確かに、哺乳壺を啜えたままだと着替えは無理ね。じゃ、これでどうかしら」

美沙の言葉を受けて、真衣をおねしょシーツの上に座らせた美幸は、やや小振りな方のバスケットにかかっているガーゼの覆いをどけた。

途端に、パイル地のおねしょシーツの上にお尻をぺたんとして座らされた真衣が、はつとしたように息を飲んだ。

小振りのバスケットには、ソックスやフェイスタオル、直腸体温計のケースといった小物が入っていたが、真衣が恥辱のあまり息を飲んだのはそんな物のせいではなく、そういった物と一緒に収納してある玩具のせいだった。バスケットには、布製の柔らかそうなボールや積木といった幼児向けの玩具だけでなく、手で振るとかろやかな音をたてるプラスチック製のガラガラや、子熊のヌイグルミに加え、シリコンゴムのおしゃぶりと聞いた、いかにも赤ん坊が喜びそうな玩具が取り揃え収められていたのだ。

「これなら、口に啜えたままでも着替えの邪魔にはならないわよね」

真衣の様子を窺いながらそう言っ、美幸はおもむろにバスケットからおしゃぶりをつかみ上げた。

それを見た瞬間、弱々しく首を振り、思わず

「おしゃぶりなんていや。真衣、赤ちゃんじゃ……」

と言いかけた真衣だったが、慌てて自分の口を掌で押さえて言葉を飲み込んでしまう。

だが、途中まで出かかった言葉を美幸と美沙は聞き逃さなかった。

「あれ？ 真衣ちゃんたら変なことを言わなかった？」

「そうね。私の聞き間違いかもしれないけど、『真衣、赤ちゃんじゃない』とか言いそうになつていたような気がするんだけど？」

二人は声を合わせてそう言い、怯えきつた表情を浮かべる真衣の顔に視線を注いだ。

「……そんなこと言ってない。真衣、そんなこと言ってないもん」

真衣は力なく目をそらし、ごくりと唾を飲み込んで震える声で言った。

一瞬の間の後、二人が無言で頷き合う気配があつて、ねっとり絡みつくような美幸の声が真衣の耳に届いた。

「そうよね。ロンパースを着せてちょうだいってあんなに美沙お姉ちゃんにせがんだ真衣ちゃんが赤ちゃんじゃないわけないわよね。おむつの赤ちゃんなんだから、おしゃぶりを嫌がるわけないわよね」

そんな美幸の言葉に、もう真衣は首を横に振ることはできなかった。

「ほら、真衣ちゃんの大好きなおしゃぶりをママが用意してくれたんだから、ちゃんとおねだりしなきゃ駄目じゃない。真衣ちゃん、さつきはお姉ちゃんにロンパースを着せてって上手におねだりできたでしょう？ 今度はママにおしゃぶりをおねだりする番よ。お姉ちゃんも見ていてあげるから、思いきり甘えん坊さんになってママにおねだりしてごらん」

美幸に続いて美沙も、言葉こそ優しいくせにその実、有無を言わさぬ調子で真衣に迫る。

「……真衣、赤ちゃんだから、お……おしゃぶりが大好きなの。真衣の大好きなおしゃぶりを

を用意してくれて、ありがとう、ママ。……でも、真衣、赤ちゃんだから、自分でおしゃぶりを啜えられないの。お願い、ママ。真衣のお口におしゃぶりを入れてちょうだい」

屈辱に体を小刻みに震わせながら、それでも真衣は外に出されるのを恐れるあまり上目遣いにそう言い終え、耐えようのない屈辱感と共に首をうなだれた。

「はい、よくできました。いいわ、じゃ、真衣ちゃんの大好きなおしゃぶりを啜えさせてあげる。気の済むまでちゅうちゅうするといいわ」

二人と目を合わすまいとして視線を落とす真衣の顎先に人差指をかけ、くいつと顔を上げさせてから、美幸は、わなわな震える唇におしゃぶりを押し当てた。

一瞬、真衣はおしゃぶりを舌で押し返しそうになる。

しかし結局、すぐ目の前でこちらの様子をじっと窺っている美幸の瞳の異様な煌めきに気圧され、おずおずと唇を動かして、シリコンゴムのおしゃぶりを口にくまざるを得なかった。

「もともと可愛い真衣ちゃんだけど、そんなふうになるとこれまでよりずっと赤ちゃんぽくなって、うんと可愛くなるのね。まさか、私とクラスメートで、生まれ月でいえば私より一年近く早く生まれた真衣ちゃんがこんな可愛い赤ちゃんになっちゃうなんて思いもしなかったわ」

おしゃぶりを啜えていかにも恥ずかしそうな表情を浮かべる真衣に対して、美幸が少し意地悪な口調で言った。

「そんな、そんな言い方……」

思わず真衣が声を荒げる。

だが、おしゃぶりのせいで唇と舌の動きが妨げられ、どこか舌足らずな喋り方になってしまいう上、啜え慣れない物を口にくんだまま唇と舌を動かすものだから、危うくおしゃぶりを落としてしまいそうになる。

「ほら、すっかり啜えてなきや駄目じゃない。赤ちゃんはみんなおしゃぶりが大好きだから、滅多なことじゃ、お口からおしゃぶりを離すことなんてないのよ。風邪をひいた小っちゃな子供を診察する時、おしゃぶりを強引に口から引き離してどんなに泣き喚かれたことか、その時の泣き声が今でも耳についているくらいなのよ。なにに美沙お姉ちゃんからちよつとからかわれただけでおしゃぶりを落とすようになるなんて、真衣ちゃん、本当は赤ちゃんなんかじゃないのかもね」

唇から離れそうになるおしゃぶりを再び真衣の口の中に押し込みながら、美幸は揶揄するような口調で言った。

「真衣は……あ、赤ちゃんなの。真衣、おしゃぶりが大好きな赤ちゃんなの。おねしょとおもらしでおむつをたくさん汚しちゃう赤ちゃんなの。だから、もうおしゃぶりを落とさない。落とさないから、お外はいやあー！」

美幸は面白そうに「本当は赤ちゃんなんかじゃないのかもね」と言った。しかし、本当も何も、実際、真衣は赤ん坊などではない。体調を崩しながらも難しい入学試験に挑んで第一志望の学校に入学した高校生だ。しかし、ここにいる誰も、真衣のことを赤ん坊扱いしてやまない。それどころか、おむつ姿で外へ連れ出すという羞恥に満ちた『お仕置き』の力でも

って、真衣自らが自分のことを赤ん坊だと認めざるを得ないよう仕向けることにさえ美幸は成功しつつあるのだ。

「ふうん。真衣ちゃん、おしゃぶりが大好きなんだ。じゃ、こんなことをされたらどうするのかな」

美幸が真衣に再びおしゃぶりを啜えさせたのを見届けた美沙が、そのおしゃぶりをぱっと奪い取った。

美沙の真意を図りかねる真衣。けれど、興味深げにこちらの様子を窺う美幸の視線を感じるや、二人の意図を瞬時に察した。

「返してよ。真衣のおしゃぶりなんだから返してよ、美沙お姉ちゃんてば」

(もしもおしゃぶりを取られたら私がどんな行動をするのか試す気なんだ)二人の狙いを直感した真衣。とはいえ、選択肢が一つしかないのは明かだった。大好きなおしゃぶりを返してくれるよう姉にせがむ幼児を真似て美沙のあとを追いかけるより他にとるべき行動はない。そうしなければ、『おしゃぶりがあまり好きじゃない子は赤ちゃんじゃない』という口実を外に連れ出され、おむつ姿を通行人たちにさらす羽目になってしまう。

「そんなに大好きなおしゃぶりだったら取り返してごらん。ほら、こっちよ、真衣ちゃん」

美沙は元いた場所から少しだけ離れた所で立ち止まり、指先につまんだおしゃぶりをこれみよがしに差し上げた。

「真衣の……真衣のおしゃぶりなんだから返してよ。真衣の大好きなおしゃぶりなんだから」

真衣は幼児めいた口調を真似て繰り返し言い、両脚を踏ん張った。

薬剤の効果がますます薄れてきているところに持つてきて、二人の手から這い這いで逃げまわって使い果たした手足の力も少しは戻ってきているため、かろうじて立ち上がることはできた。だが、三日間に渡って寝たままの生活をおくってきたせいで本来の筋力が衰えてしまっているのはどうしようもない。立ち上がりはしたものの、走って美沙を追いかけることはかなわない。いや、走るところか、歩くことさえ難しいというのが実情だった。

「返してよ、真衣のおしゃぶり返してよ、美沙お姉ちゃん」

真衣は悲痛な声で言い、美沙がいる方に向かって足を踏み出した。

けれど、歩幅は小さく、足取りはおぼつかない。それでも真衣には、歩みを止めることはできなかった。そんなことをすれば、おしゃぶりを取り返すことができず、外へ連れ出されてしまう。

足を踏み出すたびに重心がぶれて倒れそうになるのを両脚をふるふる震わせて堪え、おそれるおそれる次の一步を踏み出す真衣。前のめりになるのを防ぐため、おむつのせいでまん丸に膨らんだお尻を後ろに突き出し、これもおむつのせいでぴったり閉じることのできない両脚を少し開きぎみにし、自分の足元を確認することも忘れてただ前方だけをみつめておぼつかない足取りで歩いてゆくその姿は、よちよち歩きができるようになったばかりの幼い子供さながらだった。

「ほら、こっちよ。真衣ちゃんの大好きなおしゃぶりはここよ」

ゆっくり近づいてくる真衣に向かって、美沙は、肩の高さまで差し上げたおしゃぶりを振

つてみせた。

「真衣のおしゃぶり。それ、真衣のおしゃぶりなんだから。ママがお口に入れてくれた真衣のおしゃぶりなんだから」

ようやく美沙のそばまで歩み寄った真衣は拗ねたような口調で言っつて、目の前のおしゃぶりに向かって手を伸ばした。

が、美沙がひよいと体かわし、素早い身のこなしで真衣の背後にまわりこむ。

それにつられて真衣も慌てて体の向きを変えた。だが、おぼつかない足取りに加えて、右手を伸ばしたまま上半身をのけぞらせたものだから、大きく姿勢を崩して、真衣はそのままフローリングの床に尻餅をついてしまった。

「真衣のおしゃぶりのに……真衣のおしゃぶりのに……美沙の、美沙お姉ちゃんのバカ〜！ 真衣のおしゃぶり返してよ、返してったら！」

一瞬、唇を「へ」の字に結んで美沙の顔を見上げた真衣だったが、じきに細い肩と薄い胸を震わせたかと思うと、両目いっぱい涙を溜めて金切り声をあげた。

が、美沙はおしゃぶりを返す気配をまるでみせず、床にべたんとお尻をつけて恨めしそうにこちらを睨み付けている真衣の目の前で改めておしゃぶりをこれみよがしに振ってから、膝立ちの姿勢で後ずさりして再び真衣のそばを離れた。

「意地悪、美沙お姉ちゃんの意地悪！ どうしておしゃぶり返してくれないのよお」

尻餅をついた拍子にナイティの裾が捲れ上がりオーバーパンツが丸見えになってしまった姿で、真衣は美沙に向かってもういちど手を伸ばした。が、もう少しというところで届かない。真衣は涙声で呻きつつ、のろのろとお尻を上げて掌と膝を床につき、真衣の目の高さに合わせておしゃぶりを振ってみせる美沙のいる方に向かって這い進み始めた。

「おしゃぶりはこつちよ。大好きなおしゃぶりが欲しかったら、ここまでおいで。ほら、頑張れ頑張れ」

ぎこちなく手足を動かして這い這いで近づいてくる真衣に向かって美沙は両手をばんばんと打ち鳴らし、囃したてるように声をかける。

「おしゃぶり、真衣のおしゃぶりなんだから……」

うわごとのように何度も何度も『真衣のおしゃぶり』という言葉を繰り返しながら、おむつで膨らんだオーバーパンツのお尻を左右に振り、即席のよだれかけを首の下に垂らして、一心不乱におしゃぶりを求めて這い這いを続ける真衣。しばらく前にはおむつの交換を嫌がって、やはり這い這いで二人の手から逃げまわっていた真衣。

美幸は、自分の目に映るそんな真衣の姿に、胸の中で会心の笑みを浮かべずにはいられなかった。

## 《十七》 恥辱の食事風景

わざとゆっくり逃げる美沙のあとを追いかけ続ける真衣。けれど、もう少しというところで美沙がひよいと体をかわず。

そんなことを何度も繰り返した後、とうとう真衣はお尻を床にぺたんとつけ、これみよがしにおしやぶりを振ってみせる美沙に向かって両手を伸ばした格好で、両目から涙を溢れさせ、声を震わせて泣き出してしまった。その時になってようやく美沙は真衣の口におしやぶりを戻したのだが、そんなことで真衣の感情の高ぶりは鎮まらず、幼い子供のように、フロアリングの固い床の上を這いまわり続けたせいで疲れ果て自由に動かせなくなった手足を苛立ちのあまりばたつかせ、「お姉ちゃんの意地悪、美沙お姉ちゃんの馬鹿あ」と泣き声で繰り返した。それに対して美幸が小振りのバスケットからガラガラを取り上げて顔の前で振ってみせたものの、そんな赤ん坊扱いが却って真衣の感情をますます昂ぶらせ、それこそ赤ん坊そのまま、火の付いたように泣きじゃくりだす有様だった（もつとも、それも美幸の企みの内だったに違いないのだが）。

結局それから三十分間近くも泣き続け、ようやく泣き疲れて、それまでの手のつけられない泣きようが、次第に、ひつくひつくとしやくりあげるような泣き方に変わってきた頃合いを見計らって、真衣はナイティを脱がされ、その代わりに美沙がつくったロンパースを着せられた後、ダイニングルームの椅子に座らされた。場所がリビングルームからダイニングルームに替わったのは、真衣を着替えさせ終えて一息ついたところで、哺乳壺と一緒にトレイの上に並んでいる食器が殆ど手付かずなことに気がついた美沙が「真衣ちゃんにご飯を食べさせてる途中だったんだったら、少し早いけど私たちも夕飯にしようよ」と言い出したからだ。

「それで、今日の夕飯は何なの？　なんだか、とつてもいい匂いがしてるんだけど」

真衣をダイニングルームの椅子に座らせた後、自分も二階の部屋で制服から室内着に着替えて戻ってきた美沙は、鼻をひくつかせながら言った。

「クリームシチューよ。金曜日、私が初めてこのお家にやって来た日、真衣ちゃんが大好きだったというからつくってあげたのがクリームシチューだったのよ。真衣ちゃんたら、とつてもおいしそうに食べてくれてね。それで、今日から真衣ちゃんのお姉ちゃんになった美沙にも味見をしてみらおうと思って、真衣ちゃんがおねむの間に昼過ぎから煮込んでいたの」

「あ、真衣ちゃんの大好物なんだ。だったら、真衣ちゃんも私たちと一緒に食べるんだよね」

美沙は、胴の長い鍋を玉杓子で掻き混ぜている美幸の傍らに立ち、椅子に座っている真衣と鍋の中のシチューとをちらと見比べた。

「食べさせてあげたいけど、でも、駄目よ。初めてクリームシチューをつくってあげた時は高校生だったから安心して食べさせてあげられたけど、今の真衣ちゃんは赤ちゃんだもの。」

私は大きめに切った野菜でシチューをつくるのが好きだけど、ごろごろ野菜がたっぷり  
のシチューを赤ちゃんに食べさせられるわけないでしょう？ それに、真衣ちゃんは三日間、  
何も食べないでおねむだったのよ。そんなところへ固形物なんて食べさせたら、すぐにお腹  
をこわしちゃうわよ」

美幸は、自分よりも幾らか背の高い美沙の目を僅かに見上げるようにして首を振った。  
「あ、そうか。ちよつと悪戯でおしゃぶりを取っただけで泣いちゃうような赤ちゃんの真衣  
ちゃんに大きな野菜を食べさせるなんて駄目だよね」

美沙は『おしゃぶりを取っただけで泣いちゃう』という部分を強調して言い、改めて真衣  
の姿をしげしげと眺めた。

もともと、ダイニングルームのテーブルには椅子が四脚セットになっている。ところが、  
真衣が意識を失っていたこの三日間の内に美幸が片付けたのだろう、真衣が座っている方の  
辺に二脚、その向かい側の辺に一脚という配置で、今は椅子が三脚に減らされてしまってい  
た。しかも、二脚並んでいる椅子の内一つは元々テーブルとセットになっていたダイニン  
グチェアではなく、サイズこそ大人が座っても窮屈ではないくらい大きさがあるものの、  
その形は、座面の端に滑り止めのベルトを設け、左右の肘掛けの間に丸や四角の凹みをつけ  
た木製の簡易テーブルが渡してあるという、赤ん坊に食事をさせるためのベビーチェアを模  
したデザインになっていた。いや、ベビーチェアを模したデザインというよりも、その椅子  
は、大人の体に合わせて仕上げた大きなベビーチェアそのものだった。

むろん、勝手に動き回れないよう太腿を滑り止めのベルトでしっかり固定されてその大き  
なベビーチェアに座らされているのが真衣なのと言うまでもない。

大きなベビーチェアに座らされた真衣は、ようやく返してもらったおしゃぶりを口に咥え  
たままだ。しかも、「いつもおしゃぶりを咥えたままだとお口からよだれがこぼれてお洋服  
を汚しちゃうから」という口実で、胸元は大きなよだれかけで覆われていた。

しかし、実際、真衣は、意識を失っている間に何度となく美幸の乳首を吸わされたり哺乳  
壺のミルクを飲まされたりしているうちに、いつしか、口に何かをふくむとすぐに唾が湧き  
出し、ちよつと油断するとその唾がよだれになって唇の端から溢れ出るようになってしまっ  
ていたため、あながち、単なる口実というわけでもなかった。事実、淡いパステルピンク  
のロンパースの上に着けさせられた大きなよだれかけの所々には、うすく小さなシミが既に  
点々となっていた。そして、そのよだれかけも、フェイスタオルに市販のクリップで付けた  
即席のよだれかけではなく、小さなフリルになった飾りレースタイプのバイアステープで周  
囲を縁取りし、首筋の後ろと背中を紐を結わえるようになっていて、ちゃんとしたよだれか  
けだった。もつとも、真衣の胸元を覆うような大きさのよだれかけが市販されているわけが  
なく、それは、ロンパースと同様、手芸品店で買い揃えた素材を使って美沙がミシン掛けと  
丁寧な手縫いで仕上げたものだった。

つまり真衣は、美沙の妹からのお下りの布おむつと美幸が特別注文でつくらせたおむつ  
カバーのせいでぶっくり膨らんだお尻を更に特製のオーバーパンツで包んだ上、美沙が手作  
りした大きなロンパースと大きなよだれかけを身に着け、美幸が買い求めた女児用のソックス  
を履いた、体の大きささえ気に留めなければ赤ん坊そのままの姿でベビーチェアに座って



いるというわけだ。しかも、口にはおしゃぶりをふくみ、ベビーチェアの左右の肘掛けの間に渡してある簡易テーブルには離乳食の食器とミルクの哺乳壺を並べた状態で。

「でも、食器の中身が殆ど減つてないとところを見ると、真衣ちゃん、離乳食が好きじゃないみたいだね。なのに、ママのクリームシチューも食べられないなんて、本当に可哀想だよ」と

美幸の傍らを離れて真衣のすぐそばに歩み寄った美沙は、ベビーチェアの肘掛けに嵌め込みになつている簡易テーブルの上に並んだ食器を一つ一つ見渡し、苦笑混じりに言った。

「可哀想だけど仕方ないのよ。いいことはいい、駄目なことは駄目って、小っちゃい時からちゃんと躡けておかないと、結局その子のためにならないんだから。美沙も真衣ちゃんのこと可可愛くしてほしいが、可可愛くないでしょうけど、可愛がってばかりじゃ駄目よ。叱らなきゃいけない時はちゃんと叱ってあげなさい。それがお姉ちゃんの役目なんだから」

少し躡けにうるさい母親と、まだ赤ん坊の妹のことを甘やかせたくて仕方のない姉。それは、どこにでもありそうな食卓の光景だ。ただ、ベビーチェアに座っておしゃぶりを吸っている赤ん坊姿の真衣の実際の年齢を除けば。

そうこうしているうちにサラダの盛りつけやパンの切り分けも済んで配膳が始まった。思えば、先週の土曜日の朝、美幸が調理した味噌汁のお椀や焼き魚の皿を真衣がいそいそと食卓に並べたあの日から、まだ一週間も経っていない。なのに、気がつけば、美幸の指図に従ってサラダボウルやシチュー皿を運ぶのは、真衣ではなく美沙の役割に替わっていた。当の真衣は勝手に動きまわれないよう特製のベビーチェアに座らされて太腿をベルトで固定され、絶えず口にくんだままのおしゃぶりのせいで時おり唇の端から溢れ出るよだれで大きなよだれかけにうっすらとシミを付けながら、美幸と美沙の動きを虚ろな瞳でぼんやり眺めているだけだ。

「さ、できた。じゃ、いただきます」

心ここにあらずといった感じで視線を宙にさまよわせていた真衣だが、すぐ隣で聞こえる美沙の声に、はっと我に返った。

横目でちらと見た真衣の瞳に、自分の隣の椅子に腰かけている美沙と、美沙の向かい側に座っている美幸の姿が映る。美幸が座っている席は、いつもなら佐藤家の主である優が陣取る場所で、他の三脚に比べると僅かながら手の込んだ装飾を施し、食後のブランデーをゆったり楽しめるように幅の広い肘掛けも備えた椅子になつている。そして、今は美沙が占めている、これまでなら優の向かい側のその場所こそ、本来の真衣の席だった。こちらは他の二脚と同様のシンプルな造りのダイニングチェアだが、これまでずっとそこに座って食事をとってきた、真衣にとってはおかけがえのない、思い出の染みこんだ椅子だ。なのに、今や、もともとの優の席には美幸が、真衣の席には美沙が悠然と座り、真衣は、普段なら使うことのない予備の場所に置かれた、赤ん坊に食事をさせるためのベビーチェアそのままの特製の椅子に座らされているのだ。その席順と椅子の種類とが現在の佐藤家における力関係を無言で物語っているのかと思うと、やるせなさで胸が張り裂けそうになる。

「あ、おいしくい。このクリームシチュー、本当においしいよ、ママ」

真衣の胸の内などまるで気に留めるふうもなく、シチューを一口頬張るなり、美沙が歓声をあげた。

「ありがとう。そう言ってもらうと、長いこと時間をかけて煮込んだ甲斐があるわ」

美幸は相手を崩して応じたが、ふと美沙の顔に目を留め、くすつと笑って言った。

「よっぽどお腹が空いていたのかもしれないけど、あんまり急いで食べるから、シチューの雫がほっぺに付いちちゃってるわよ。このぶんだと、美沙にもよだれかけが要りそうね」

「よだれかけだなんて、ママ、ひどい。私は高校生なのよ。赤ちゃんじゃないんだから、よだれかけなんて要るわけじゃないじゃない」

美沙は慌ててポケットからハンカチを取り出し、シチューの雫を拭い取って綺麗になった頬をふつと膨らませた。

「うふふ。そうよね、美沙はもう高校生。いつまでも赤ちゃんの真衣ちゃんとは違うんだから、よだれかけなんて要らないわよね。でも、だったら、お姉ちゃんらしく、小っちゃな妹のお手本になれるよう、ちゃんと食べなきゃ駄目よ」

「はいはい、わかりました」

美沙は頬を膨らませたまま拗ねたように言った。だが、実際に拗ねているわけではなく、互いに軽口を叩き合える二人の仲を真衣に対して誇示するためにそうしているのは明かだ。

「それじゃ、頼りになるお姉ちゃんらしく、私が真衣ちゃんにご飯を食べさせてあげようかな」

もともとそのつもりだったのだろう、美沙はぱつと表情を変えて真衣の方に向き直ると、ペビーチェアの簡易テーブルの様子を改めて眺めまわし、やれやれとでもいうようにひよいと肩をすくめた。

「本当に、離乳食にはまるで手を付けないんだから。好きじゃなくても、ちゃんとまんまを食べないと大きくなれないわよ。大きくなれなくて、いつまでも赤ちゃんのままでもいいのかな、真衣ちゃんは？」

高校生の真衣を自分たちの手で強引に赤ん坊に仕立てておきながら、そんなことまるで知らぬげに美沙は言って、今更ながら気づいたかのようにぼんと両手を打ち鳴らした。

「あ、そうか。おしゃぶりを啜えたままじゃ、ご飯なんて食べられないよね。まんまの時まで啜えたままだなんて、本当に真衣ちゃんはおしゃぶりが大好きなんだから。でも、今はまんま時間だから、おしゃぶりはしないしておこうね」

少し呆れたようにそう言って、美沙は、真衣が口にくくんでいるおしゃぶりに指をかけた。途端に真衣が激しく首を振る。おしゃぶりを口から離したら、それを口実に美幸の手で外へ連れ出されるのではないかという怯えが先に立って、片時もおしゃぶりを離すまいとして

反射的に身構えてしまうのだ。

だが、そんな真衣の気持ちを知ってか知らすが、美沙は背の高さと腕の長さを活かして真衣の口からあっさりとおしゃぶりを奪い取り、食卓の隅に置いてしまった。

それに合わせて、美幸の絡みつくような視線が真衣の方に向けられる。

「や、やだ。おしゃぶり取っちゃやだ。返してよ、真衣のおしゃぶりなんだから」

美幸の視線を感じた真衣はびくんと体を震わせ、慌てて立ち上がりかけた。

だが、太腿をベルトで座面に固定されてしまっているため、下半身はまるで身動きが取れない。しかも、左右の肘掛けの間に嵌め込みになっている簡易テーブルに阻まれて上半身を前のめりにすることもできず、かろうじて、美沙に近い方の左腕を伸ばすのが精一杯だった。しかし、そんなことで、食卓の隅のおしゃぶりに指が届くわけがない。

「返してよ。真衣のおしゃぶり、早く返してつてばあ」

ますますねっとり絡みついてくる美幸の視線に、真衣は涙声で喚き、滑り止めのベルトで締め付けられた太腿をひくひく震わせた。

不意に、食卓の向こう側からがたんという音が聞こえた。はつとして音のする方を見た真衣の目に、椅子から立ち上がる美幸の姿が映った。

「ち、違うの。真衣がおしゃぶりを嫌がったんじゃないの。美沙が、美沙お姉ちゃんが真衣のおしゃぶりを取り上げちゃったの。だから、だから……え、ひ、ひつく……ふえくん」

ナイティからロンパースに着替えさせられ一分の隙もなく赤ん坊の装いに包まれた姿で外に連れ出されるのかもしれないという恐怖から、遂に真衣は両目からぼろぼろと涙をこぼして泣き始めてしまった。それも、さめざめと涙を流したり、嗚咽を漏らすというような年齢相応の泣き方ではなく、悪戯をみつかった幼児が母親から叱責されることを恐れて泣くのと同じ、まるで手放しの泣きじやくりようだった。買物物を終えてタクシーで帰宅した土曜日の夕方、真衣は尿意に耐えかねて玄関先でおもらしをしてみました。あの時はたまたま通行人がいなかった上、門扉の内側のできことだったから恥ずかしい現場を誰にも見られずに済んだものの、それでも、あの時の記憶は真衣の精神に深い傷をつけ、今も大きなトラウマになって残っている。それが、今度は門扉の外へ連れ出されるかもしれないのだ。

「やだ、お外はやだ。真衣、悪くないもん。美沙お姉ちゃんがいけないんだもん。だから、お外はいや〜」

美幸がこちらに向かって歩いて来る気配に、真衣は激しく身をよじり、自由にならない脚で地団駄を踏まんばかりにして泣き喚いた。

「お外はいやなの。真衣、お家の中がいいの。だから、だから、ママ……ひつく、ひつく、ふえ、ええくん」

いよいよ美幸がベビーチェアのすぐそばまでやって来ると、真衣の泣き声は一段と大きくなった。

が、美幸はひよいと腰をかかめると、ベビーチェアの簡易テーブルを食器ごと注意深く持ち上げ、食卓の上に置いてから、両目に涙を溜めて怯えきった表情でこちらの様子を窺っている真衣の体を正面からそつと抱きすくめた。

「え……？」

おしゃぶりを美沙に奪われたまま取り返せないことを口実にまたしても理不尽な仕打ちを与えられるとばかり思っていた真衣は、美幸の予想外の行動に、泣き喚くのも忘れ、きよとんとした顔になった。

「わかってるわよ。私は真衣ちゃんのママだもの、今回のことは真衣ちゃんが悪くないってこと、ちゃんとわかっているのよ。そうよね、みんな、意地悪な美沙お姉ちゃんがいけないのよね。真衣ちゃんがおしゃぶりを返してつて頼んでも返してくれない美沙お姉ちゃんが

いけないの。だから、真衣ちゃんはずっとも悪くないのよ。なのに、こんなに泣いちゃって。おお、よしよし。もう泣かなくていいのよ。真衣ちゃんはいいい子だもの。ママのご自慢のとってもいい子だもの。ママが美沙お姉ちゃんにめっ！しておいてあげるから、真衣ちゃんもう泣きやもうね」

美幸は真衣の髪を二度三度と優しく撫でつけ、頭の後ろを右手の掌で包み込むようにして自分の胸元に引き寄せた。

肘掛けの間に渡していた簡易テーブルは取り外してあるから、真衣がベビーチェアに座ったまま上半身だけを前のめりにし、そのまま美幸の乳房に顔を埋めるのを阻む物はない。

「マ、ママ……真衣、悪くないんだよね。美沙お姉ちゃんがいけないんだよね。美沙お姉ちゃんたら、真衣がいくらお願いしてもおしゃぶりを返してくれないんだよ。だから、真衣……ふえ、わ、うわらん、ママあ」

きよとんとした顔でいったんは泣きやんだ真衣。けれど、初めての添い寝から始まって、タクシーの中や優が運転する車の中はいうに及ばず、空港のトイレやスパーの駐車場に駐めた車の中、そして意識を失っていた三日間に渡り何度も何度も乳首を吸った美幸の乳房に顔を埋めた途端、なんともいい匂いのように包まれて、またもや涙が溢れ出す。しかし、今度は、お仕置きに怯えて泣き喚くのではなく、全てを無条件に赦し癒してくれる母親に甘えて泣きじゃくりながらこぼす温かな涙だ。

「あらあら、真衣ちゃんは本当に甘えん坊さんだこと。でも、いいわ。気が済むまでお泣きなさい。真衣ちゃんの涙が涸れるまで、ママがこうして抱っこしてあげてるから」

美幸は真衣の耳元に優しく囁きかけ、小刻みに震える背中を何度も優しく掌で叩いた。

そうして、こちらの様子を興味深げに窺っている美沙を、わざと怖い声で

「こら、駄目じゃない、美沙。可愛い妹を苛めちゃいけないでしょ。今度こんなことをしたらお仕置きよ。本当に、めっ！だからね」と叱ってみせる。

だが、本気で叱責していいのではないことは、真衣の体を抱き寄せながらも、真衣に気づかれないよう注意しつつ美沙に向かって意味ありげな目配せをしてみせたことからも明かだ。いわば、鉛と鞭。今回は美沙が鞭の役を、そして美幸が鉛の役。二人はそうやって、真衣の赤ちゃん返りの度合いをますます進めさせることに成功したというわけだった。

\*

ようやく真衣が泣きやみ、美幸がベビーチェアのそばを離れて自分の席に戻ったのは、それから二十分ばかり経ってからのことだった。

さすがに、感情の高ぶりが鎮まり気持ちが落ち着いてくると、自分の振る舞いがいかにも幼児めいていることに気がついて、ついさっきまで美幸の乳房に顔を埋めて泣きじゃくっていた真衣が、これ以上はないくらいに羞じらしいの表情を浮かべ、ベビーチェアの上で今にも消え入りそうにしている。

「真衣ちゃん、そろそろご機嫌はなおった？　なおったんだったら、お姉ちゃんがまんまを

食べさせてあげる。さっきはごめんね。お姉ちゃん、ママに叱られちゃった。だから、ごめんさいのシルシに、真衣ちゃんの好物を食べさせてあげるね」

食卓に置いたままになっている簡易テーブルからガーゼのハンカチをつかみ上げ、真衣の顔に残る涙の跡を拭き取りながら、美沙が優しく言った。

「大好物？」

顔を拭かれながら真衣がふと食卓を見ると、美沙の席に置かれた皿にはシチューがまだ半分ほど残っていた。

「真衣ちゃんはママの胸に顔を埋めたまま泣き通しだったからちゃんと聞いてなかったでしょうけど、美沙お姉ちゃんたら、真衣ちゃんを泣かせちゃったお詫びに、シチューを食べさせてあげるんだってママに言ったのよ。あまり好きじゃないお粥とか野菜のペーストだけじゃ真衣ちゃんが可哀想だから、自分のシチューを分けてあげるんだって。なにも自分のをあげなくても、まだお鍋にはたっぷり残っているから真衣ちゃんにはそっちでもいいんじゃないってママは言ったんだけど、先にお皿に入っていた自分のシチューの方が冷めるのが早いから真衣ちゃんに食べさせてあげやすいつて言うのよ。大きなお野菜はどうするの？って訊いたんだけど、それもちゃんとしてあげるからって。だから、本当は赤ちゃんに大人の食べ物はいけないんだけど、今回だけ大目に見てあげることにしたの。それで美沙お姉ちゃんと真衣ちゃんが仲良くなってくれるんだって」

真衣の視線に気づいた美幸が鷹揚に頷いて経緯を手短に説明した。

「さ、できた。これで真衣ちゃんのお顔は元通り綺麗になったから、大好物のシチューを食べようね」

美幸が説明している間に真衣の頬に残る涙の跡を拭き取った美沙が、ガーゼのハンカチを簡易テーブルに戻し、自分のシチュー皿を真衣の目の前に押しやってスプーンを持ち上げた。

「で、でも……」

あれほど「赤ちゃんに大人の食べ物なんて駄目よ」と言い、強引に離乳食を食べさせようとしていた美幸の様変わり、真衣は躊躇いがちに首を振った。

「いいのよ、ママも許してくれたんだから」

戸惑いの表情を浮かべる真衣に向かっておだやかな笑顔でそう言い、美沙は肉や野菜の塊を除けてシチューをスプーンに半分ほど掬い取って真衣の口に近づけた。

途端に、真衣のお腹が鳴る。考えてみれば、この三日間、意識を失っている間、哺乳壇のミルクの他は何も口にしていない。それでも目が覚めた直後なら食欲も湧かないかもしれないが、意識が戻ってからもうすっかり時間が経っている上、おむつの交換を嫌がって逃げまわったり、おしゃぶりを取り返すために這い這いで美沙を追いかけたりして体もかなり動かした後だから、シチューのいい匂いを嗅いだ瞬間、それまで忘れていた空腹に気づくのも当然のことだ。

「あまり急いで食べちゃ駄目よ。シチューはまだお皿に半分くらい残っているし、それで足りなかつたらお鍋にもたっぷり残っているんだから」

美沙は、自分のさっきまでの幼児めいた行為に恥じ入ることも忘れたかのようにお腹を鳴らす真衣の様子に苦笑を浮かべながら、スプーンの先を上下の唇の間に押し当てた。

大きなベビーチェアに座らされて他人の手で食事を与えられる屈辱に一瞬は躊躇いを覚えた真衣だが、三日間に渡る絶食による空腹には勝てず、おずおずと舌を伸ばして、唇の隙間に差し入れられたスプーンの先端をそっと嘗めた。それだけで、濃厚なチーズとクリームの風味が口の中いっぱい広がって、もういちど、今度はさっきより大きな音でお腹が鳴る。もう、そうになると、それ以上の我慢は到底不可能だ。自分では意識しないまま真衣の喉がぐびりと鳴り、スプーンを丸ごと啜え込むようにして、決して上品とは言えない音をたてるのもお構いなしに、そのままシチューを飲み込んでしまう。

二口目も三口目も同じだった。

そうして、四口目。それまではシチューのお汁ばかりを真衣に与えていた美沙が、今度は大きなジャガイモをスプーンの手先で崩して小分けにし、その内の一つを掬い取った。お腹が空いている時に少しだけ食物を口にする、却って空腹感が増す。シチューのお汁を三口だけ与えられた真衣は、まさにその状態だった。小分けにしたジャガイモを掬ったスプーンが近づいてくるのを待ちかね、かろうじて自由になる上半身を思わず前のめりにする。

だが、美沙は、手にしたスプーンを真衣の口に近づけることなく、そのまま、自分の口に運んでしまった。

「あ……」

思ってもみなかった美沙の行動に、真衣の瞳が涙で潤む。ご飯を思うように食べさせてもらえないくらいのこと涙を浮かべるなど、およそ、高校生に似つかわしい反応ではない。しかし、今の真衣は、それほどまでに空腹感の虜になっていた。食べさせてもらえると思っていたシチューのジャガイモを誰かに横取りされただけで泣き出しそうになるほどの空腹感に。

しかし、泣き出す寸前のところで、真衣の口は封じられてしまった。

真衣の口を封じたのは、美沙の唇だった。

真衣の顎先を中指と人差指で押し上げるようにしながら、美沙が、真衣の唇に自分の唇を重ねたのだ。

「ぐ……む!？」

突然のことに一瞬何が起きたのかわからず、涙に潤む両目を真衣が大きく見開いた直後、唇になにやら柔らかな物が触れた。

それは、美沙の舌だった。

真衣と唇を重ね合わせたまま、美沙が、真衣の上下の唇の隙間に自分の舌を差し入れてきたのだ。

真衣は反射的に身を退こうとしたが、両脚はベルトで固定されて自由に動かせず、ベビーチェアの背もたれに阻まれて上半身を後ろに倒すこともできない。

「んん……」

力ない抵抗がいつまでも続くことはなかった。

いつしか真衣の唇がこじ開けられ、遂には美沙の舌の侵入を許してしまう。

舌と舌とが触れ合う感触があった。

と、シチューを飲み込んだわけでもないのに、どういうわけか、口の中にチーズとクリー

ムの匂いがふわっと広がる。

続いて、とろっとした食感が口の中に流れ込んできた。

「ん!？」

はっとして、真衣は、すぐ目の前にある美沙の顔を見た。

美沙は唇を重ねたままなんとも表現しようのない笑みを浮かべて軽くウインクしてみせる。それからしばらく、美沙の唇と舌が動き続ける間、とろっとした食感が絶え間なく真衣の口の中に流れ込み、やがて、それまでよりも少し粘り気の少ない汁が流れ込んできたかと思うと、チーズとミルクの匂いがいつそう強くなって、ようやく美沙の唇が離れた。

「よかったわね、美沙お姉ちゃんに口移しでシチューを食べさせてもらえて。これなら、大きな野菜も安心だわ」

美沙の唇が離れた後、自分の唇に中指の腹を押し当てて呆然とした表情を浮かべる真衣に向かつて、美幸はすっと目を細めて言った。

「でしょ？ こんなふうにしてあげたら赤ちゃんの真衣ちゃんでもお野菜を食べられるでしょ？ それに、私が、小さく小さく、とろとろになるくらい噛んでから食べさせてあげるんだから、空っぽのお腹にも優しいし。これだったら、シチューをもっともって真衣ちゃんに食べさせてあげてもいいよね？」

美幸の言葉を受けて、美沙が、いかにも自慢げな様子で軽く胸を張ってみせた。

その時になって、ようやく真衣も、唇を重ね合わせていた時に口の中に流れこんできたのが、美沙が細かく噛み砕き咀嚼したジャガイモだということに気がつく。

「ええ、いいわよ。美沙がお口の中で小さく柔らかくしてあげた食べ物なら、赤ちゃんの真衣ちゃんのお腹にも優しいもの。これからも、口移しでたくさん食べさせてあげてね。でも、真衣ちゃんの好物ばかりじゃ駄目よ。お粥とか野菜のペーストとか、離乳食もちゃんと食べさせてあげないとね。じゃないと、好き嫌いの激しい子になっちゃうから」

美幸はこともなげに言って、食卓の上に置いた簡易テーブルに並んでいる離乳食の食器をちらと見た。

「うん、わかった。じゃ、もう一口だけシチューを食べさせてあげて、その次はお粥にするね。それで、またシチューで、その後は野菜のペースト。こうやって順番に食べさせてあげたら、真衣ちゃん、離乳食もちゃんと食べると思うから」

美沙は大きく頷いてから、今度はシチュー皿からニンジン細かく砕いて掬い取り、再び自分の口に運んだ。

まだ歯の生え揃っていない赤ん坊そのまま、誰かが予めどろどろになるまで咀嚼した食物を口移しで食べさせられる屈辱。しかし、その屈辱も、三日間に渡る絶食の後に与えられた大好物の味を改めて知ってしまった真衣の行動を押しとどめることはできない。

さっきは美沙に唇を重ねられて呆然とした表情を浮かべた真衣だったが、気がつけば、今度はこちらから美沙の唇を求めて体を前のめりにしていた。

美沙は、そんな真衣の背中に両腕をまわして優しく抱き寄せ、大きな体で覆いかぶさるようにして唇を重ね合わせるのだった。

## 《十八》 トイレはすぐそこなのに……》

シチューと離乳食を平らげた後、哺乳壺でミルクを飲まされている最中、不意に真衣の体がぶるつと震えた。

「あれ、寒いのかな、真衣ちゃん。でも、そんな筈ないよね。お姉ちゃんお手製のロンパースを着せてあげているんだから」

自分の食事もそこそこに、真衣に口移しでシチューと離乳食を食べさせてから、ミルクが半分ほど残っている哺乳壺を支え持ったまま、美沙が僅かに首をかしげて真衣の顔を覗き込んだ。だが、口では不思議そうに「あれ、寒いのかな」と言ったものの、実は、真衣が体を震わせた理由などとつくにお見通しなのは言うまでもない。

口移しという手間のかかる食べ方をさせたせいで、食事にはたっぷり時間をかける必要があった。しかも、その前には奪い取られたおしゃぶりを取り返すために美沙を追いかけ、そのあげく三十分近くも泣きじゃくっていたし、更にそれ以前には、おむつの交換を嫌がって美幸と美沙から逃げまわっていた真衣だ。意識を取り戻してすぐ哺乳壺のミルクを飲みながらおむつを汚してしまった時からだと、もうそろそろおしっこをしたくてたまらなくなっているのは明かだ。

それをわかっていながら美沙は哺乳壺を真衣の口から引き離すと、  
「どうしたの、真衣ちゃん？ ロンパースだけじゃ寒いんだったら、膝掛けの代わりにタオルケットをあんよに掛けてあげようか？」

と、わざと優しく尋ねた。

それに対して真衣はもういちどぶるつと体を震わせ、

「お、おし……」

と言いかけたが、出かかった言葉を途中で飲み込んで俯いてしまう。

「駄目よ、ちゃんと言わなきゃわからないでしょ？ どうしたの？ お姉ちゃんに何をしてもらいたいのかな、真衣ちゃんは？」

美沙は真衣の顎先に指をかけ、強引に顔を上げさせて訊いた。

「お、おしっこ……」

美幸と美沙を相手にこのまま黙りおおせるわけがないことは痛いほどわかっている。真衣は観念して、蚊の鳴くような声で言った。

「あ、おしっこだったの。大変、大変。早くおむつを取り替えてあげないとお尻が気持ちわるいわね。ちよつと待っててね。すぐに準備するから。ママ、大変よ、真衣ちゃんが……」

美沙は返答を聞くなり、さも真衣が哺乳壺のミルクを飲みながらおむつを汚してしまったと言わんばかりにわざとおおげさに騒ぎたてた。

「ち、違うの。出ちゃったんじゃないの。出ちゃいそうなの」

シンクに向かって洗い物をしている美幸に大声で叫ぶ美沙の言葉を遠慮がちに遮って、真衣は弱々しく首を振った。



「あ、出ちゃったんじゃないかって、出ちゃいそうなんだ。おしっこをちゃんと教えられるなんて、お利口さんね、真衣ちゃんは。このぶんどと、すぐにパンツのお姉ちゃんになれるかもよ」

真衣がおしっこを告げたことをおおげさにほめそやし、美沙は何度も真衣の頭を撫でた。その間にも尿意はじわじわ高まってくる。

「ト、トイレ……トイレへ行ってもいいでしょ、お姉ちゃん」

真衣は、口の中に残っているミルクをぐくりと飲み込み、助けを求めるように言った。美沙にそんなことを懇願しても一蹴されるのは目に見えている。しかし、相手が美沙なら。一縷の望みをかけて、真衣は美沙の顔をおおげさに見上げた。

「いいわよ」

半ば拒まれることを予想して懇願した真衣だったが、美沙は意外にもあっさり願いを応諾した。

「……本当にいいの？」

あっけない返答に、どこか信じられない思いで真衣はおそるおそる聞き返した。

「いいに決まってるじゃない。せつかくおしっこを教えてくれた真衣ちゃんをトイレへ行かせないなんて、そんなことするわけないでしょう？ さ、間に合わなくなったらいけないから、急ごうね」

美沙はこともなげに言って、真衣の太腿を座面に固定しているベルトを手早く外し、真衣の両脇に手を差し入れてベビーカーから抱きおろして、ダイニングルームの床に立たせた。が、薬の効果は切れているものの、三日間に渡って殆ど動かしていない真衣の両脚はすっかり弱体化していて、その場に立っているだけでも太腿からふくらはぎにかけてふるふる震え、今にも倒れそうになってしまう。

「ほら、ちゃんとおしっこを教えられたのに、いつまでも愚図愚図していると間に合わなくなっちゃうわよ」

言葉こそ優しいものの、美沙が笑い声で言っているのがわかる。

その時になって、ようやく真衣も、美沙が予想に反してあっさりと望みを聞き入れてくれた理由に思い至った。美沙は、真衣が自力でトイレまで行けるわけがないと高をくくっているに違いない。

「うう……」

真相に思い至った真衣は涙声で呻きながらも、まるで力の入らない両脚を必死の思いで動かし、ようやくのこと、最初の一步を踏み出した。

途端に体のバランスが崩れて、そのまま前のめりに倒れそうになる。それを、こちらも自由にならない両腕を振り回して堪えたものの、両脚の踏ん張りがまるで利かず、結局は、フロアリングの固い床に膝頭をしたたか打ち付けるようにして、膝立ちの姿勢を取るのが精一杯という有様だった。

真衣は、二メートルほど先にあるドアを睨みつけるようにして、尚も両脚に力を入れた。だが、その途端、下腹部に鈍い痛みを覚え、思わず身をすくめてしまう。

心理的な理由もあって、およそ一時間ごとに尿意を感じるというおしっこに近い体質の持

ち主である真衣は、学校でも休憩時間のたびにトイレへ行くのが習い性になっている。それを、おねしよの治療という名目でトイレに行く回数をこれまでの半分に減らしなさいと美幸から指図され、事実、美幸が佐藤家にやって来てからはトイレを自由に使わせてもらえない日々の連続だった。しかも、尿意が限界寸前まで高まる頃合いを見計らって美幸の乳首を口にくくまされ、乳首を吸いながらおしっこをさせられるという生活が続いたものだから、気がつけば、美幸の乳首なり哺乳壘の乳首なりを啜っていたら、どんなに尿意が高まっても、自分の意志では排尿もままならない体になってしまっていた。要するに真衣は、一時間ごとに感じる初期の尿意の段階では自分の意志でおしっこを出すことは可能だが、そうすることは美幸に許してもらえず、それ以上に我慢して尿意が我慢の限界ぎりぎりまで高まると、今度は、美幸の許しが出たとしても、乳首を思わせる何かを吸いながらではないとおしっこを出すことができないという厄介な習性を身に付けさせられてしまったというわけだ。

しかも、我慢の限界ぎりぎりまで尿意を堪え続けると、膀胱を中心として下腹部全体が時にはきりきりと鋭い、また、時にはずしんと重い痛みに襲われ、ますます体の自由が奪われてしまう。今、膝立ちになると同時に真衣が感じた鈍い痛みも、そんな症状の表れだった。もうこうなると、歩きまわることはおろか、その場に立ち上ることさえ難しい。

おそらく美沙は、筋力の弱体化のみならず、耐え難い尿意の高まるに伴う下腹部の痛みみで見越してトイレの使用を真衣に許したのだろう。そして、その背後に美幸の意志が働いているのは火を見るより明らかだった。

やがて、膝立ちでいるのも困難になってきたのか、真衣はそのまま崩れ落ちるようにして前のめりになって床に両手を床につき、おむつの交換を嫌がって逃げまわったり、美沙の手からおしやぶりを取り返すために追いかけてたりした時と同様、四つん這いになってしまった。こうすると、体重が下腹部に集中するのを幾らか防げるため、少しは痛みも和らぐ。

「どうしたの、真衣ちゃん？ トイレへ行くんじゃないの？」

四つん這いになって肩で息をする真衣のかたわらに膝をついた美沙が、腰をかがめ、真衣と目の高さを合わせて言った。

だが、真衣には、無言で弱々しく首を振ることしかできない。

「あ、そうか。真衣ちゃん、まだあんよが上手じゃなかったんだっけ。だから、這い這いでトイレへ行くのね。あんよも上手じゃないのにおしっこを教えられるなんて、とってもお利口さんね、真衣ちゃんは」

美沙は澄ました顔でそう言い、膝立ちのまま真衣の前にまわりこむと、ジーンズのポケットから鍵の束を取り出した。

「ほら、これが何だかわかる？ そうよ、便器の蓋の鍵よ。これがないと、せっかくトイレへ行っても便器を使えないから、お姉ちゃんも一緒にいってあげる。ついていって、便器の鍵を外してあげる」

美沙は、束の中でも特に小振りの鍵を真衣の目の前で振ってみせた。

「真衣ちゃんみたいな小っちゃい子が勝手に便器の蓋を開けて中を覗き込んだりしたら便器の中にころんしちゃうかもしれないって心配したママが、便器の蓋を勝手に開けられないよ

うにしたんだってね。これが、それを開ける鍵よ。もちろん、ママも鍵を持っているけど、お姉ちゃんもスペアを預かっているの」

真衣は、美沙がこれみよがしに目の前で振る小さな鍵を求めて、僅かに体を前に進めた。それに合わせて美沙がすつと身を退き、またしても、じやらじやら音を立てて鍵束を振ってみせる。

そんなことを繰り返して、リビングルームを出て廊下を這い進んだ真衣だが、下腹部の痛みを我慢しながらの上、筋力が戻っていない手足では美沙に追いつけるわけがない。

とうとう真衣は追いかけるのを諦め、廊下の真ん中にぺたんとお尻をつけて座り込んでしまった。

「どうしたの、真衣ちゃん？ 鬼ごっこはもいいのか？ でも、ちょうどいいわ。ほら、追いかけてっこをしているうちにトイレのすぐ近くまで来ちゃったから」

くすりと笑って美沙はそう言い、目の前のドアを押し開けた。

その向こうには、確かに、いかにも清潔そうな純白の便器があった。

美沙は真衣がじつとみつめる中、小振りの鍵を使ってロックを外し、便器の蓋を引き開けた。

「さ、いいわよ。ちゃんと蓋を開けてあげたから、トイレでおしっこをするといいわ」

美沙は再び廊下に膝をつき、真衣と目の高さを合わせて、蓋の開いた便器を視線で指し示した。

「ト、トイレ……トイレでおしっこ……」

トイレの使用を許してもらうのは何日ぶりのことだろう。真衣は瞳を輝かせ、両手で自分の下腹部をまさぐり始めた。もちろん、美沙の手で着せられたロンパースの股間に並ぶボタンを外すためだ。

だが、次第に真衣の顔色が変わって呼吸が荒くなってくる。

「どうしたの？ せつかくトイレまで来たのに、早くしないと間に合わなくなっちゃうんじゃないのかな？」

いつまでもロンパースの股間をまさぐっている真衣に向かって、美沙がわざと不思議そうな表情を浮かべて声をかけた。

「……外れないの。ボタンが外れないの……」

焦りの色を満面に浮かべて、真衣が涙声で言った。

「ロンパースのボタンが外れないの？ 変ね、そんな筈ないんだけど」

美沙は訝るように言って、四つ並んでいるボタンの内の一つ人に指をかけ、一カ所に力を集めるようにして上下に引っ張った。

と、ぷつんと小さな音がして、スナップボタンの噛み合いが離れる。

「ね、簡単でしょ？ どうして真衣ちゃんにはできないのかな？ もういちど試してごらん」

美沙は、自分が外したスナップボタンを指差した後、再びぷつんという音とともに嵌め込んで閉じてしまった。

「あ、せっかく開いたのに……」

真衣は、そう叫び出しそうになるのを堪え、美沙の顔を恨みがましく睨みつけてから、改めてロンパースの股間に手を伸ばした。

だが、美沙の時とは違って、真衣がどんなふうにも指を動かしても、やはりロンパースのボタンが外れる気配はなかった。

実は、それには理由があった。もともと、スナップボタンは、金具部分の真球度のばらつきや僅かな歪みなどのせいで製造ロットごとに噛み合いの強さが異なる場合が少なくない。それをメーカーは或る程度の基準内にある物を商品として出荷しているのだが、保育園や幼稚園に通うような小さな子供に持たせる手提げ鞆等を母親が市販のスナップボタンを使って手作りした時など、母親の力では簡単に開けられるのに、小さな子供の力ではボタンを開けられないといったことがないわけではない。そんな時は噛み合いが緩めのスナップボタンに付け替えて対処する場合もあるが、付け替えが面倒な時は、スナップボタンの裏側に付いている金属球をペンチ等で僅かに変形させることで噛み合いの強さを調節することもできる。家庭科クラブに所属していて、そういった細かいテクニクにも通じている美沙は、手芸店でわざわざ噛み合いの強いスナップボタンを選んで買い求め、なおかつ、先の細いペンチで金属球に細工を施して、噛み合いを更に強くしておいたのだ。

美沙が指先に力を集めてやつと外すことのできる程度に噛み合いを強くしたスナップボタンを、もともと美沙よりも小柄で非力な真衣が、這い這いで力を使い果たした後で開けられるわけがない。それを見越した上で、美沙は真衣をわざわざトイレのすぐ近くまで連れて来たのだった。

「……外れない、外れないよお」

美沙がスナップボタンに細工を施したことにまるで気づいていない真衣は、尚もロンパースの股間をまさぐっていたが、やがて諦めの表情を浮かべると、おそろおそるといった様子で美沙の顔を見上げ、おずおずと言った。

「お、お願い、お姉ちゃん……ボタンを外して。真衣、自分じゃロンパースのボタンを外せないから、お姉ちゃんに外してほしいの。お願いだから、お姉ちゃん」  
「いいわよ、じゃ、お姉ちゃんがロンパースのボタンを外してあげる」

よく注意していないと聞き逃してしまいそうになるほど弱々しい声ながら切羽詰まった調子で懇願する真衣に、美沙はわざとにこやかな笑みを浮かべて応じ、涙で潤む瞳を覗き込むようにして続けた。

「その代わり、自分が赤ちゃんだったことをもういちどよく思い出すのよ。もう二度とパンツのお姉ちゃんになりたいだなんて思わないこと。それが約束できるんだったら、お姉ちゃんがボタンを外してあげる」

「そ、そんな……」

思わず抗弁しかける真衣。

だが、すぐに思い直して、出かかった言葉を飲み込んでしまう。このままあと三十分もすれば、我慢の限界を通り越して膀胱の緊張が勝手に解け、口に何も啜えていなくてもおしっこが溢れ出すだろう。しかし、これまで、下腹部全体を包み込む痛みを耐えかねて、一度も

そこまで我慢をし通すことのできなかつた真衣だ。今回もこれ以上の我慢を続けられるわけがないことは自分自身がよく知っている。それに、もしも我慢し通すことができたとしても、我慢の限界を通り越して勝手におしっこが溢れ出したりしたら、おむつが吸い取れる量を超えて、オーバーパンツもロンパースもびしょびしょにした上、廊下に生温かい水溜まりをつくってしまう羽目になるのは目に見えている。

「……う、うん、わかった。真衣、パンツのお姉ちゃんになりたいだなんて言わない。真衣……おむつの赤ちゃんだから。ママと美沙お姉ちゃんがいないと何もできない小っちゃな赤ちゃんだから……」

美沙の顔を見ないようにしながら真衣はぽつりと云った。

「それでいいわ。お姉ちゃんがボタンを外してあげる。それと、試しにつくってあげたロンパース、真衣ちゃんの体にびったりみたいだから、同じサイズでもっとたくさんつくってあげるね。一着だけじゃ、まんまを食べる時に汚しちゃうたら着替えの分がないもの。それに、おっきの時とおねむの時に同じロンパースっていうのも変だし。だから、お家にいる時はいつもロンパースを着るのよ。そうしないと、お転婆の真衣ちゃんのことだから、お腹が出ちゃって、おもらしやおねしょが今よりもひどくなっちゃうものね。お家にいる時はおむつってママと約束したんでしょう？ だったら、ロンパースがお似合いよね。あ、でも、ロンパースばかりだと可哀想だから、うんと可愛いワンピースやサンドドレスもつくってあげなきゃいけないかな。あんよが上手じゃない真衣ちゃんに着せるワンピースだから、脚にまとわりつかないよう、スカートは短くしてあげないといけないわね。スカートの裾からぷっくり膨らんだおむつカバーをちよつとだけ見せてよちよち歩きする真衣ちゃん、可愛いでしょうね。それとも、おむつカバーが見えるのが恥ずかしいんだったら、ロンパースみたいに、お尻のところボタンが並んだブルマーみたいなボトムスとセットにしてあげた方がいいかしら。うふふ、デザインを考えるのが今から楽しみだわ。あと、真衣ちゃんは大好きなおしゃぶりをずっと啜えているんだから、よだれかけもたくさんつくってあげないとね。とりあえず、三枚はつくっておいたけど、それだけじゃ、すぐにどれもよだれでべとべとになっちゃううだし。いつまでも赤ちゃん、いつまで経ってもパンツのお姉ちゃんになれない真衣ちゃんに着せる物だもの、いくらたくさんつくっても足りないかしら」

「そ、そんな……」

「だって、真衣ちゃん、自分で言ったのよ。真衣はパンツのお姉ちゃんにならないって。そう約束したから、お姉ちゃんはロンパースのボタンを外してあげるのよ」

美沙は、何か言いたそうにする真衣の唇に自分の指先を押し当てて黙らせ、念を押すように云った。

そうして、真衣が視線を床に落として押し黙るのを見て取ると、やおら、自分が着ているトレーナーの裾を胸元まで捲り上げ、あらわになったブラジャーのカップを真衣の目の前に突きつけて、どことなく艶然とした笑い声で言葉を続けた。

「ほら、こつちを見てごらん。これ、昨日、ママがお姉ちゃんにプレゼントしてくれたのよ。これが何だか、真衣ちゃんにもわかるよね？ だって、ママのおっぱいを何度も何度も吸ったことがあるんだから」

美沙の乳房を包み込んでいるのは、美幸が佐藤家にやって着てすぐ着用するようになったのと同じクロスオープンタイプの授乳用ブラジャーだった。

「……！」

そのことに気づいた真衣が驚きのあまりあつと声をあげそうになって、唇が半分ほど開いた。

美沙はそれを見逃さず、昨日から練習を重ねてきたのだろう、慣れた手つきで授乳用ブラのカップをさっと引きおろすと、半開きになった真衣の唇に自分の乳房を押し付けた。

「な、何を……こ、こんなことしないで、ボタンを……早く、ボタンを……」

くぐもった呻き声をあげ、ロンパースのボタンを外してくれるよう懇願する真衣だが、その微かな声さえ、強引にふくまされた乳房のせいで途中で遮られてしまう。

「わかってるわよ。ロンパースのボタンを外してほしいのね？ それに、おむつも外してほしいのね？ いいわよ、真衣ちゃんのお願いはお姉ちゃんがきいてあげる」

真衣に自分の乳房を啜えさせた美沙は、頬を上気させ、甘ったるい声で言った。

「だけど、今すぐじゃないわよ。真衣ちゃんがおむつを汚しちゃった後でロンパースのボタンを外して、おむつも外してあげる。それでもボタンを外してあげることに違いはないんだから、約束を破ったことにはならないわよ。だから、真衣ちゃんも約束を守って、ずっとおむつの赤ちゃんんでいるのよ。今まで我慢してきて辛かったでしょう？ でも、もういいのよ。ママのおっぱいを吸いながらおむつを汚すのと一緒に、お姉ちゃんのおっぱいを吸いながらおしっこをたくさん出すといいわ。おしっこを我慢しすぎてお腹が痛いんでしょう？ おむつの中におしっこを出しちゃって楽になるうね。だから、さ、お姉ちゃんのおっぱいを思いきり吸ってちょうだい」

「や、やだ……こんな、こんなことされたら……」

廊下にお尻をぺたんとなつけた格好のまま美沙に抱きすくめられ、身をひくくともできずに、真衣は、唇と乳房の僅かな隙間から息を吐き出すようにして、聞こえるか聞こえないかの声を絞り出した。

「こんなことされたらどうなっちゃうのかな、真衣ちゃんは？」

体を押し返そうとする真衣の手を軽く振り払って、美沙は更に強く乳房を押し付けながら言った。

「こんなことされたら……こんなことされたら、おしっこが……」

「こんなことされたら、おしっこが出ちゃうのね。でも、それでいいじゃない。真衣ちゃんも赤ちゃんなんだから、おむつをおしっこで汚しちゃうとも変じゃないじゃない」  
ますます上気した顔で美沙が言った。

おしっこを出して一時間くらい経ち、新たな尿意を覚えた時なら自然な排尿ができるが、それを通り越して我慢し、二時間くらいになると、美幸の乳房や、それを思わせる物を吸いながらでないと排尿できない体になってしまった真衣。それは、逆に言えば、限界ぎりぎりまで尿意を我慢している時に乳房を口にくまされると、自分の意志とはまるで無関係におしっこを溢れ出させる体になってしまったということだ。そんな真衣に自分の乳房を与える美沙。その狙いが、自分が刺繍を施した布おむつを真衣におしっこで汚させるところにある

のは明かだった。

「さ、いつまでも我慢してちゃ体に毒だから、おしっこを出しちゃおうね。出しちゃっても平気なのよ。お姉ちゃんが真衣ちゃんのお名前を刺繍してあげたおむつがおしっこをちゃんと受け止めてくれるから。妹のお下がりのおむつが真衣ちゃんのおしっこをみんな吸い取ってくれるんだから」

美沙は左手を真衣の背中にまわしてこちらに引き寄せたまま、おむつでぷっくり膨れたお尻をロンパースの上からぼんぼんと叩いた。

「い、いや。美沙のおっぱいを吸いながらおしっこだなんて、そんなの、そんなの……」

それまで美幸の指図に従って『美沙お姉ちゃん』と呼んでいたのを、あまりの屈辱に耐えかねて『美沙』と呼び捨てにして、真衣は弱々しく首を振った。しかし、美沙の手で力いっぱい体を抱き寄せられ 豊かな乳房に顔を埋めたままだから、首の動きは殆どわからない。

「いいのよ、いつまでも強情を張って我慢しなくても。真衣ちゃんはママのおっぱいを吸いながらおもらしをするのが大好きなんですよ？ だったら、お姉ちゃんのおっぱいを吸いながらおむつを汚すのも大好きなんじゃないのかな」

美沙は真衣の耳元に唇を寄せて甘ったるく囁きかけた。

「やだ。やだつてば……美沙のおっぱいを吸いながらおむつを汚すだなんて……そんなの、やなんだから」

何度も何度も『やだ』を繰り返しながらも、真衣の瞳が次第にとろんとしてくる。

「でも、真衣ちゃんは赤ちゃんなんですよ？ 赤ちゃんがおしっこでおむつを汚すのを嫌がるだなんて、その方が変だよ。赤ちゃんがおっぱいを嫌がるだなんて、そんなの変だよ。ママのおっぱいじゃなくてご機嫌斜めなのかもしれないけど、でも、お姉ちゃんのおっぱいもぶりぶりしてて気持ちいいでしょう？ だから、ほら」

美沙は真衣の背中を優しく撫でさすった。

「だつて、だつて……」

とろんとしていた瞳が虚ろになって、真衣の頬にさつと朱が差した。

途端に、美沙の乳首に鋭い痛みが走る。

「っっ！」

思わず美沙は悲鳴をあげた。

だが、悲痛な声を漏らしたのはその一度きりで、あとは僅かな呻き声をあげることもなく、表情も変わらない。真衣に乳首を吸わせる悦びに上気した顔にどこかうっとりした表情を浮かべて、自分の乳首を盛んに吸う真衣の顔をいとおしげにみつめるばかりだ。

その表情が、異形の母性本能の表れなのか、あるいは、思春期の少女どうしの甘酸っぱくちよつと倒錯めいた恋心の発露なのか、それは判然としない。しかし、美沙の顔に浮かぶ悦びの色だけは本物だった。それに応えるかのように、真衣の顔を彩る表情もまた。

「あ……」

美沙の口を衝いて出た悲鳴を耳にするなり、真衣がはつとしたような顔になった。

だが美沙は

「いいのよ。真衣ちゃんが心配することなんて一つもないの。真衣ちゃんはただお姉ちゃん

のおっぱいを吸いながらおしっこでおむつを濡らせばいいのよ」と優しく言い聞かせるだけだ。

それは、真衣が美沙の乳首に歯を立てた理由を充分に理解しているからこそ口にできる言葉に他ならなかった。

それまで限界ぎりぎりまで尿意に耐えていたのを、乳首を口に含まされたせいであろう堪えきれなくなり、膀胱の緊張を解いてしまった瞬間。それこそが、意識しないまま真衣が美沙の乳首を噛んでしまった瞬間に違いない。そのことを直感したから、美沙は短い悲鳴をあげただけで、あとはひたすらいとおしげに真衣の髪を何度も撫でつけるのだった。

いったん出かかったおしっこを止めることはもうできない。それまでは美沙が真衣の体を抱き寄せていたのが、今度は逆に、真衣が美沙の背中に両腕をまわし、啜えた乳首を離すまいとしてすがりつく。そうなれば、美沙の両手は自由だ。

美沙は、廊下にお尻をぺたんとしてつけ両脚をだらしなく開いた真衣の股間に手を伸ばして、ロンパースのボタンに指をかけた。真衣があれほど苦勞をし、結局は外すことを諦めざるを得なかったスナップボタンだが、美沙の巧みな指運びにかかれば、きつい噛み合わせを離すこともさほど難しくない。

ぶつぶつんという微かな音が続けて聞こえ、美沙はボタンを四つとも手早く外してしまつた。

そうして美沙は、ロンパースの股間の布地を大きく前後に開くと、乳首を真衣の口にふくませたまま、右手の人差し指と中指をおむつカバーの中にそろりと差し入れる。

指を差し入れた直後に感じたのは、汗によるじっとりした湿り気だけだったが、さほど時間が経たないうちに、布おむつがおしっこを吸ってぐっしり濡れてゆく様子が指先から伝わってきた。

「そうよ、それでいいのよ。真衣ちゃんは赤ちゃんなんだから、お姉ちゃんのおっぱいを吸いながらおしっこでおむつを濡らしちゃっていいのよ」

美沙は、これまで何度も口にしたのと同じ言葉を今また真衣の耳元に囁きかけた。

「やだ、そんなこと言っちゃやだ……」

真衣は美沙の乳首を啜えたまま、どこか甘えるような仕草でかぶりを振った。

「やだじゃないわよ。お姉ちゃんには本当のことしか言っていないんだから」

美沙はくすりと笑って、自分の乳房をそっと支え持ち上げた。

\*

それからしばらく経ち、真衣がおしっこを出しきった頃合いを見計らって美幸が美沙に声をかけた。

「バスケット、ここに置くわよ。それと、バスタオルも敷いておくわね」

言うと同時に、真衣が座り込んでいる場所のすぐそばに美幸は大振りのバスタオルを敷き広げ、リビングルームから運んできたバスケットを二つ、そっと置いた。



大きい方のバスケットには、美幸が業者に依頼して特別につくってもらった大きなおむつカバーと共に、紙袋から取り出し、一枚ずつ丁寧にたたんで重ねた状態で布おむつが何枚も収めてあった。そして、ひう一つの小さなバスケットにも、赤ちゃん用の玩具やおむつかぶれの薬の容器といった小物類と一緒に、ロンパースと同じく美沙が試しにつくった三枚の大きなよだれかけの内の二枚が、きちんと重ねて収納してあった（ちなみに、既に真衣の胸元を覆っているのが、残りのもう一枚だ）。

「ありがとう、ママ。——じゃ、ママがちゃんと用意してくれたから、急いでおむつを取り替えようね。いつまでも濡れたおむつのままじゃお尻が気持ち悪いし、おむつかぶれがひどくなっちゃうもの」

美沙は、おしっこを出しきった後も乳首を咥えて離さない真衣に向かって、諭すように言った。

けれど、真衣が美沙の乳首から唇を離す気配はまるでない。それどころか、むしろますます強く美沙の乳房に顔を押し当ててくる。

「あらあら、まだお姉ちゃんのおっぱいがほしいの？ 本当に真衣ちゃんは甘えん坊さんなんだから」

美沙は、真衣の頬を人差し指り先でつんとつついた。

しかし、それは決して美沙に甘えてのことなどではない。それこそ本当に乳離れできない赤ん坊そのまま乳首を口にふくんでおむつを汚してしまった羞恥に、二人と目を合わすまいとして美沙の豊かな乳房に顔を埋めているのだった。

美沙にしても、そんなことは充分に承知している。承知していながら真衣のことをこれでもかと赤ん坊扱いして楽しんでる様子がありありだ。

「いつまでもそんなことしてちゃ駄目よ。ほら、もうおっぱいを離してちょうだい。おむつを取り替えたらまた吸わせてあげるから、ちよつとの間だけ我慢するのよ」

本当のところを言えば、美沙にしても、このままずっと真衣に乳首をふくませていたい。同じ年頃の女の子どうし、こんなことをしてちゃいけないかという思いがちらと浮かぶが、姉妹同然に育った幼なじみであり一番の親友である真衣に乳首を吸われる倒錯的な悦びの前には、そんな思いさえもがほどよいスパイスにすぎなかった。それでも、美沙は一時の快樂に身をまかせることなく、それまで前のめりだった体を僅かに後ろにそらした。

それに抗して真衣が、美沙の背中にまわした両腕を離すまいとして、更に強くすがりつく。

そこへ横合いから飛んできたのは美幸の声だった。

「いいわよ、そんなに美沙お姉ちゃんのおっぱいを吸っていたいのなら、いつまでも吸っていればいいわ」

これまで同様、なにやら含むところのありそうな口調だった。

「でも、気をつけなきゃ駄目よ。真衣ちゃん、さっき、おしっこが出そうになった時、美沙お姉ちゃんのおっぱいを噛んじゃったでしょう？ いくら真衣ちゃんがおむつの赤ちゃんだつていつても、本当の赤ちゃんとは比べれば、大人の歯も生え揃っているし、顎の力も強いし、噛まれた美沙お姉ちゃんはとっても痛かったでしょうね」

美幸は、美沙の乳房と真衣の顔をちらと見比べて続けた。

「いつまでも吸ってたら、いつまた美沙お姉ちゃんのおっぱいを噛んじゃうかわからないわよね。長いこと吸い続けていけば続けているほど、噛んじゃう回数も増えちゃうわよね。そんなことになったら、美沙お姉ちゃんも堪らないんじゃないかな」

美幸は、目をすつと細めて真衣の顔を見おろした。

「でも、真衣ちゃんはいつまでも美沙お姉ちゃんのおっぱいを吸っていたい。ま、それならそれでいいわ。間違つて真衣ちゃんが美沙お姉ちゃんのおっぱいを噛んじゃつてもお姉ちゃんのおっぱいに傷がつかないようにしておいてあげればいいんだから。おっぱいを噛まれても美沙お姉ちゃんが痛がらないようにしておいてあげればいいんだからね」

そう言つて艶然と微笑む美幸の様子に、真衣の背中がぞくつと震える。

「仕事柄、当たり前のことだけど、ママは歯医者さんともたくさんおつきあいがあるのよ。その中にはいろいろ新しい治療方法に挑戦しているお医者様もいてね。たとえば、ひどい歯周病のせいで歯をみんな抜いちやわなきやいけなくなつた患者さんがいたとするじゃない？ま、そのあとは総入れ歯を使うとか、生活そのものには支障のないようケアするのは当然なんだけど、入れ歯だと、寝る時なんかに外すと、唇のあたりがぎゅつとすばまつて人相が変わつちゃうのよ。そんな寝顔を見られるのが嫌で旅行に出かけられない人も少なくないんだつて。そんな人のために、歯をみんな抜いちやつたあとに別の素材を埋め込むことで人相が変わるのを防ぐ技術を研究しているお医者様もママの知り合いの中にはいるの。そのお医者様にお願ひして、真衣ちゃんの歯をみんな抜いてもらつて、そのあとに、ぷにぷにした柔らかい素材を埋め込んでもらうこともできるのよ。そんなふうにしてもらつたら、間違つてママや美沙お姉ちゃんのおっぱいを噛んじゃつても、噛まれた方はちつとも痛くないし、おっぱいに傷がつくことも防げるわよ。そうしたら真衣ちゃんも遠慮なくママやお姉ちゃんのおっぱいを吸つてられるから、その先生にママからお願ひしておいてあげようか？」

あながち冗談とも思えない口調でそう言つて、美幸はもういちど真衣の顔をねめつめた。

「は、歯をみんな……」

どこまで本気か想像もつかない美幸の口調に、真衣はひきつた顔で息を飲んだ。

「だって、真衣ちゃんは美沙お姉ちゃんから口移しで食べさせてもらわないとまんまもちゃんと食べられない赤ちゃんなんでしょう？口移しのまんまはとつても柔らかいから歯で噛む必要なんてないじゃない。それに、哺乳壺を吸うのも、歯の代わりに柔らかい素材で間に合うし。現に、まるで歯の生えていない赤ちゃんだつて上手にミルクを飲んでるじゃない？だから、真衣ちゃんにも歯なんて要らないのよ」

美幸は、ぞくりとするような流し目をくれた。

「いや。歯をみんな抜いちやうだなんて、そんなの……」

真衣は美幸と目を合わすまいとしますます強く美沙の乳房に顔を埋めた。

だが、

「あれもいや、これもいや。いやいやばかりじゃ、どうしてほしいのかわからないでしょ？歯を抜いてもらつてこのままずっと美沙お姉ちゃんのおっぱいを吸っていたいの？それとも、おむつを取り替えてもらいたいの？歯を抜いてもらいたいんだつたら、すぐにでも

先生に連絡してあげるわ。緊急用の往診セットを持って今から来てくださいって。麻酔や助手が必要なら私が手伝うし、私の診療キットのお薬を自由に使っていたら結構です、だから今すぐ来てくださいって」

と迫られると、それ以上は何も言えなくなってしまふ。

「……お、おむつを取り替えてもらおうから、歯を抜くのは……」

真衣は怯えきった表情で力なくかぶりを振り、美沙の乳首からおずおずと口を離した。

「おっぱいはあとにして、おむつを取り替えてもらいたいのね？」

「……うん」

「だったら、美沙お姉ちゃんにおねだりしなきゃ駄目でしょ？ どんなふうにおねだりすればいいかは真衣ちゃんが自分で考えなさい」

嵩にかかって指図する美幸に、けれど真衣は従うしかない。

「お姉ちゃん……美沙お姉ちゃん。お……おむつ、汚しちゃったの。おむつ、おしっこでびしょびしょにしちゃったの。だから、取り替えてほしいんだけど……」

真衣は胸が張り裂けそうになる羞恥と屈辱にまみれながらも、乳首から口を離れた後も二人と目を合わすまいとして俯いたまま、幼児めいた口調を真似て言った。

「そう、おむつを取り替えてもらいたいんだ。それで、誰のおむつを取り替えてもらいたいのかな？」

美沙が、豊かな乳房をブラのカップに収め、トレーナーの裾を引きおろしながら聞き返した。

「……ま、真衣の……真衣のおむつ。真衣、おしっこでおむつを汚しちゃったの。だから、真衣のおむつを……」

「ふうん、真衣ちゃんのおむつを取り替えてあげればいいのね。でも、取り替えてあげるのは今回だけでいいの？」

「あ、あの……これから、ずっと取り替えてほしいの。真衣、何回も何回もおしっこでおむつをびしょびしょにしちゃうから、そのたびに……」

「今回だけじゃなくて、真衣ちゃんがおもらしやおねしょしちゃうたびにおむつを取り替えてあげればいいのね。うん、わかった。真衣ちゃんは、いつになったらおむつ離れできるかわからない赤ちゃんだもんね。それで、ちよつと訊きたいんだけど、私の本当の妹と、真衣ちゃん、どっちがお姉ちゃんだと思う？」

「……妹。お姉ちゃんの妹の方が真衣よりもお姉ちゃん……」

「へーえ、ちゃんとわかっているんだ。真衣ちゃんは赤ちゃんだけど、私の妹は幼稚園の年長さん。真衣ちゃんの下着はおむつだけど、妹が穿いているのはパンツ。だったら、私の妹の方がずつとずつとお姉ちゃんだよ。私の妹は誕生日が八月だから、まだ五歳。真衣ちゃんの誕生日はちよつと前に来たから、もう十六歳。でも、妹の方がお姉ちゃんなんだよね。だから、真衣ちゃんは私の妹からお下がりのおむつを貰えたんだよね」

「……」

「うん、わかった。つまり真衣ちゃんは、自分よりも年下のお姉ちゃんからお下がりで貰ったおむつをおしっこで汚しちゃったから取り替えてほしいのね？ それも、今回だけじゃな

くて、これからもずっと、おむつを汚しちゃうたびに取り替えてほしいのね？ お姉ちゃんがお名前を刺繍してあげたおむつを」

美沙は執拗に何度も訊き返し、自分がおむつの赤ちゃんだということを真衣に改めて思い知らせてからようやく納得顔で頷くと、

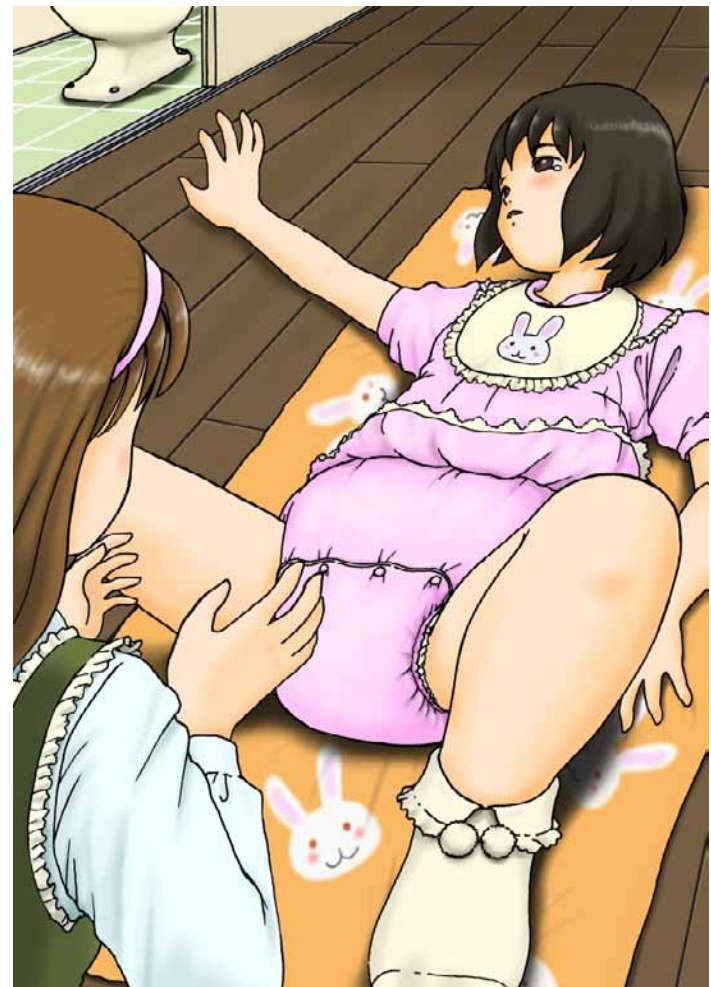
「わかったから、おむつを取り替えてあげる。じゃ、ママが用意してくれたバスタオルの上にごろんしようね。ごろんして、おむつを取り替えようね」

とわざと優しく言って、真衣をバスタオルの上に横たわらせた。

バスタオルに横たわると、頭がちょうどトイレの入り口と真正面から向き合う位置に来て、便座の蓋を開けたままになっている便器が丸見えになる。

(トイレ……トイレでおしっこ……) 真衣は、諦めきれない表情で、意識しないまま、トイ

レの入り口に向かって力なく右手を差し伸べた。



「おしっこを教えてくれたからトイレへ連れてきてあげたけど、間に合わなかったね。でも、いいのよ。トイレに間に合わなくても大丈夫なおむつをあてているんだから。いつおしっこをおもらししちゃってもいいようにおむつをあてているんだから。だって、真衣ちゃんはまだあんよも上手にできない赤ちゃんなんだから」

美沙が、真衣の胸の内を見透かしたかのように言った。

途端に、真衣の瞳がじわっと潤んだかと思うと、その直後、大粒の涙が次々にこぼれ出す。すると美幸が

「あらあら。おむつを汚して泣いちやうなんて本当に赤ちゃんだこと。赤ちゃんでも、おむつ離れが近い子は、おむつを汚しちゃうと『ママ、ちっちゃい出たあ』とか言って教えてくれるものなのに、それもできなくて泣くだけなんて、おむつが外れるのはまだまだ先のことみたいね。でも、そんな真衣ちゃんだから可愛いんだけど。——ほらほら、あまりむずがっちゃ駄目よ。真衣ちゃんの大好きな玩具を持たせてあげるから、ご機嫌をなおしてね。赤ちゃん

は音の出る玩具が大好きだから、ほら、これを持って振ってごらん」

と、それこそ幼児をあやすように言って、感情の高ぶりに耐えられず遂に泣き出してしまった真衣の目の前で、小さい方のバスケットから取り出したガラガラを振ってみせた。

もちろん、そんなことで真衣が泣きやむわけがない。しかし、美幸にしても、それは承知の上だ。

からころ。からころ。

美幸が手を振るたびに、かるやかな音がガラガラから流れ出る。

美幸は自分で何度か振ってから、ガラガラを真衣の右手に持たせた。

が、そんな赤ん坊の玩具を真衣が自ら握ろうとする筈もなく、すぐに手を離してしまう。

「あらあら、おかしいわね。赤ちゃんが大好きな音の出る玩具なのに。ママの持たせ方が悪かったのかしら」

廊下に転がったガラガラを拾い上げながら美幸はわざと不思議そうに言い、拾い上げたガラガラをもういちど真衣の手に押し付けた。

だが、やはり真衣はガラガラの柄を握ろうとしない。かるやかな音をたててガラガラは再び廊下に転がってしまった。

「あら、また落としちゃった。ひよつとしたら、真衣ちゃん、まだお手々もちゃんと動かさないくらい小っちゃな赤ちゃんだったのかしら」

廊下に転がったガラガラを今度は拾い上げようとせず、美幸は、トイレの方に向かって差し伸べられた真衣の右手をじっと見て言った。

「ま、それならそれでいいわ。赤ちゃんはおねむの時、顔が痒かったら遠慮なしに自分の爪で搔いて柔らかい肌に傷を付けちゃうことが多いんだけど、お手々が自由に動かせないんだつたら、その心配もないし。でも、中途半端に動かせると却って危ないから、どうせだったら、おいたができないようにちゃんとしておいてあげた方がいいわね」

真衣に聞こえるよう意識しつつ、けれど誰にもなく呟くふうを装って美幸はそう言い、バスケットやバスタオルと一緒にリビングルームから持ってきていた簡易診療キットの蓋を開けた。

胸騒ぎを覚えた真衣が体を起こそうとしたが、美幸に目配せされた美沙が肩をバスタオルの上に押さえつけてしまう。

その直後、消毒用のアルコールを染みこませたコットンを右腕の手首に押し付けられるひんやりした感触があり、続いて、ちくりとした痛みが走る。更に、同様の感触が左腕にも。

「……！」

「心配しなくてもいいわよ、怖いお薬じゃないから。発熱の治療のために鎮静剤と一緒に筋肉の力を弱める注射を打ってあげたことは話したわよね？ それと同じ系統のお薬を、効き目を弱くして注射してあげただけなのよ。ま、同じ系統とはいっても、効き方はちよつと違うんだけどね」

わけのわからない注射を打たれ声にならない悲鳴をあげる真衣とは対照的に、澄ました顔で美幸は言った。

「鎮静剤と一緒に注射したのは、どちらかというと、筋肉を弛緩させるように効くお薬だっ

ただ今、今のお薬は筋肉を硬直させる効き目がある。微妙なメスさばきが必要な手術の時なんかには、患者さんの体位を固定する目的で使うことがあるのよ。ただ、効果が及ぶ範囲は限定的で、今の真衣ちゃんみたいに手首を注射した場合だと、肘から先の筋肉は硬直するけど、肘から肩にかけては自由に動かせる筈よ」

美幸はそう説明した後、注射器をケースにしまってから、廊下に転がったままになっているガラガラを拾い上げ、力なく広げた真衣の掌の上に置くと、指を一本一本注意深く折り曲げた。

そうになると、もう真衣の意志では掌を開くことができなくなる。美幸の手で指を折り曲げられた形の通りガラガラの柄を握ったままになってしまふのだ。

「や、やだ、こんなの、やだ。真衣の手が……真衣の手なのに……」

意志に反してまるで指を開こうとしない自分の掌の様子に、真衣は再び両目から大粒の涙を溢れさせ、泣き声をあげて身をよじったた。

その反動で、肘から先が自由にならない右腕が勝手に動き、ガラガラを揺らしてしまう。からころ。からころ。

美幸が比べた時と比べれば弱々しいものの、やはり変わらぬかろやかな音が流れ出て周りの空気を優しく震わせた。

「よかったわね、大好きなガラガラを振れるようになって。そうよ、その調子でどンドン振るといいわ」

美幸は、拳に握った真衣の掌を自分の掌ですっぽり覆うようにして強引にガラガラを振らせた。

「ち、違う。真衣が振ってるんじゃない。真衣がガラガラなんて……」

自分の意志とはまるで無関係にガラガラを振らされる屈辱に、真衣は金切り声をあげ、頬を涙に濡らしながら首を振った。だが、両腕とも肘から先の自由を奪われているため、美幸の手を振り払うこともできない。

「やれやれ、困った子だこと。大好きなガラガラを持てたのに、まだ泣きやまないなんて。美沙お姉ちゃんのおっぱいが吸えなくてお口が寂しいのかな。じゃ、おむつを取り替えてもらう間、これを啜えているといいわ」

まるで泣きやむ心配のない真衣の様子に、美幸は、困るところか、むしろ満足そうに言うて、バスケットからおしゃぶりをつまみ上げ、唇に押し当てた。

おしゃぶりに唇と舌を押しさえつけられ、真衣の泣き声はそれまでよりも低くなったものの、やはり、まだ泣きやもうとはしない。

「まだ泣き止まないなんて変ね。あ、そうか。おむつが濡れているんだったわね。大好きなガラガラを持たせてもらっても、お気に入りのおしゃぶりを啜えさせてもらっても、おむつが濡れているんだったら、泣きやまないのも仕方ないわね。まだお喋りのできない赤ちゃんは、そうするしか、おむつが濡れていることを知らせる方法はないんだから。——じゃ、あとは美沙、お願いね」

真衣が泣き続ける理由をわざと取り違えて美幸は白々しく頷き、改めて美沙に向かっておむつの交換を指示した。

\*

インターフォンのチャイムが鳴ったのは、美沙が美幸に指図されるまま、真衣のおむつを取り替えるためにオーバーパンツを膝の上まで引き下ろし、おむつカバーの腰紐をほどいて、一番上のスナップボタンに指をかけた時のことだった。

「はい、どちら様でしょうか。——ええ、はい。あ、そうなんですか。はい、門扉は開いていますから、どうぞお入りください。玄関もすぐに開けますので」

ポケットから取り出したインターフォン用の受話器を耳に当て、最初は怪訝そうにしていた美幸だが、途中からはすっかり納得顔で頷いて、廊下を玄関に向かって歩き出した。

「誰か来たの、ママ？」

真衣のおむつカバーの前当てを開きながら美沙が尋ねた。

「新聞の集金よ」

美幸は振り向きもせずに短く応え、足早に玄関に向かう。

「い、いや。集金のおばさんを玄関に入れちゃ駄目！」

美幸の返答を聞くなり、真衣が、おしゃぶりを啜えているせいでくもりながらも悲痛な声で叫んだ。

「何を言ってるの、真衣ちゃんてば。もう日も暮れてお外は真っ暗なのよ。せっかく集金に来てくださったのに、そんな失礼なことできるわけないじゃない」

おむつカバーの横羽根を左右に開きながら美沙が教え諭すように言った。

「だって、だって……」

このままじゃ、おむつを取り替えられてるところを見られちゃう。涙声でそう言いかけた真衣だが、もうその時には美幸がドアを開け、中年の女性を玄関の中に招き入れたため、喉まで出かかった言葉を飲み込むしかなかった。

「初めました。数日前から同居している者です」

自分の方に注意を惹かぬよう言葉を飲み込み泣き声も押し殺す真衣の様子をちらと窺ってから、美幸は、集金の女性にお辞儀をした。

「先月の集金の時に、ご主人からお話はいかがしています。これからもご臍に、よろしくお願いいたします。こちらのお宅はご主人と学生の娘さんということで昼間はお留守のことが多いから夕方になってから集金にうかがわせているんです。もしも夕飯時でしたらご迷惑をおかけして申し訳ございません」

女性も恐縮ぎみに深々と頭を下げる。

「迷惑だなんて、とんでもありません。こちらこそ、うちの事情に合わせていただいてあげてください」

初対面の挨拶をかねた二人のとりとめのない会話はいつまでも続きそう、廊下の真ん中に敷いたバスタオルに横たわっておむつを取り替えられている真衣としては、集金の女性の注意がいつこちらに向けられるかと気が気ではない。今はただ、少しでも体を動かさないよ

う気をつけ、息をひそめているしかない。

だが、真衣のそんな様子を面白そうに眺めていた美沙が、悪戯めいた笑みを浮かべたかと思うと

「あら、どうしたの。大好きなガラガラを持たせてもらったんだから、思いきり振っていいよ。ほら、ころころ〜」

とわざと大きな声で言い、美幸を真似て真衣の掌を自分の掌で包み込んで、強引にガラガラを振らせた。

もうすっかり聞き慣れたかるやかな音が廊下に響き渡った。

途端に、それまでは初対面の美幸とのやり取りに夢中だった女性の注意が美沙たちの方に向けられる。

「あら、お嬢さんもらっしやっただんですね。気がつきませんで、申し訳ありません。私がこちらに寄せていただいたおりに時々顔を会わせるお嬢さんとは違いますわね——あの、失礼なことを伺うようですけど、奥様の方のお嬢様ですか？」

美幸の肩越しに廊下の奥へ目を向けた女性は、美沙にの存在に気がつくと、少し慌てたような表情を浮かべつつも、いかにも興味津々といった様子で問いかけた。

「ええ、そうなんです。美沙と違って、高校の一年生なんです。この子が対応に出た時もあるしくお願います。——美沙、あなたからも御挨拶なさい」

美幸は、女性の誤解をいいことに、すっかり母親然とした様子で美沙に声をかけた。

「初めまして。あの、ちよつと手が離せないもんだから、こんな格好で失礼ですけど、これからよろしくお願います」

美沙は、体は真衣の方に向けたまま、首だけを巡らせて女性の方に向き直り、ちよこんと頭を下げた。

「いいえ、そんな、お気になさらなくて結構です。見たところ、赤ちゃんのお世話にお忙しいですから。こちらこそ、お取り込みの最中に伺ってごめんなさい。おむつを取り替えてあげている赤ちゃんは——妹さんかしら？」

廊下の真ん中あたりに美沙がいることに気づいた女性は、美沙の体のすぐそばにおいてあるバスケットに目をやると、少し考えてから言った。

玄關に入つてすぐの所に立っている女性からだ、バスケットの中が手に取るように見えるわけではない。それでも、大きい方のバスケットに重ねて収められているのが布おむつとおむつカバーだということはおぼつと見ただけでわかるし、小さい方のバスケットに収納してある小物類が何なのかも、さほど目を凝らさなくても簡単に見て取れる筈だ。二つのバスケットに収められているおむつカバーの表地やよだれかけの生地の色合いから、それを使うのが女の子だと判断するのも難しいことではない。

「はい、そうです。妹で、名前は真衣っていいいます。私と追いかけて遊んでたんですけど、途中でおむつを汚しちゃったもんだから、ここで取り替えてあげているんです」

美沙の大きな体に遮られて、女性のいる位置からだ、真衣の姿は殆ど見えない。実際、真衣の方からも美沙の体しか見え、集金の女性は声が聞こえるだけだ。それでも、赤ん坊そのままの格好をさせられて廊下の真ん中でおむつを取り替えられている場面に新聞店の顔



馴染みの女性が現れたものだから、どうしていいかわからず、ただただ身をすくめるしかできないでいるところに、美沙が真衣の名前を告げたものだから、それこそ、わっと叫んでその場から逃げ出しそうになってしまう。

が、幸いなことに、いくら顔馴染みとはいっても、配達先の家族一人一人のことまで詳しく憶えているわけではなさそうで、『真衣』という名前を聞いても女性は興味をしめすことなく、

「そう、お名前は真衣ちゃんというの。しっかりお世話をしてあげてね。——面倒見のいいお嬢さんをお持ちで羨ましいですわ。うちの上の子なんて、下の面倒なんてちつともみないで遊びあるいてばかりで」

と、再び美幸との会話に戻った。

しかし、自分への興味が薄れたと思って真衣が安堵の溜息をついたのも束の間。美沙がまたもや真衣の掌を持って強引にガラガラを振らせたものだから、その音につられて、女性の関心が改めて真衣の方に向けられる。

「それにしても、体の大きな赤ちゃんのようなですね。いえ、上のお嬢さんの向こうにいるからよくは見えないんですけど、ガラガラを持つている右手だけは見えるものですから」

女性の言葉に、真衣の顔がこわばった。

便器に座ってのおしっこを最後まで諦めきれずにトイレに向かって右手を差し伸べ、その差し伸べた手にガラガラを握らされたものだから、右手だけは美沙の体に遮られることなく女性の視界に入っているもおかしくない。赤ん坊の玩具であるガラガラに対して、それを持つ掌の異様に大きなことに女性が気づいても不思議ではない。それでも、まさか、時おり応対に出てくる少女が廊下の真ん中でおむつを取り替えられている赤ん坊と同一人物だなどとは想像もつかない女性にしてみれば、いささかの違和感を覚えつつも、随分と体の大きな赤ちゃんだなと思うのがせいぜいだった。

「でも、上のお嬢さんもまだ高校生のわりに体が大きくなっていらっしやるし。将来はお二人とも宝塚のスターにでもなれるんじゃないかしら。——あら、もうこんな時間。明日も早いんだから、うちも急いで夕飯にしないと。では、こちらが領収書になります。すっかり長居をしまして申し訳ございません。どうぞ、これからもご最良に」

どこか釈然としない思いを抱きながらも、女性は無理矢理自分を納得させるように言ってお世辞笑いを浮かべ、ちらと腕時計に目をやると、少し慌てた様子で、そそくさと踵を返した。

「いいえ、こちらこそ」

「また来てくださいね。その時は真衣ちゃんの顔を見てやってください。——ほら、真衣ちゃんもお見送りするのよ」

玄関を出て行く女性の後ろ姿に向かって二人は揃って挨拶をし、美沙は真衣にガラガラを振らせた。

ガラガラがかるやかな音をたてる中、女性の姿が見えなくなるまでのほんの僅かな間が、真衣にとっては、いつ終わるともしれない長い長い時間に感じられてならなかった。

## 《十九 偽りの日常》

集金の女性が帰り、テレビの幼児番組を見せられた後、真衣を待っていたのは入浴の時間だった。むろん、投与された薬剤のため両手の自由を奪われた真衣が衣類を脱がされる時も二人のなすがままだったの言うまでもない。

まず、脱衣場の床にぺたんとお尻をつけて座らされた真衣の背後にまわった美幸が、背中と首筋の後ろとで結んである紐をほどいてよだれかけを外してから、真衣の腕を上げさせるのに合わせて、予めロンパースの股間のボタンを外し終えていた美沙が、ロンパースの脇の部分の布地をつかんで引き上げ、そのまま脱がせてしまう。それから、真衣を横たわらせ、キャンデー柄のおむつカバーの腰紐を手早くほどいて、上下に四つ並んでいるスナップボタンを左右ともふつぷつという小さな音をたてて外し、左右に開かせた両脚の間に前当てを広げた。続いてマジックテープを外しておむつカバーの横当てを開くと、汗でしっとり湿った布おむつがあらわになる。美沙は真衣の左右の足首を一つにつかんでそのまま高々と差し上げ、布おむつを手前にたぐり寄せて、美幸が差し出したポリバケツの中に滑らせた。

最後に残ったソックスも脱がされ、一糸まとわぬ姿に剥かれた真衣は、やはり生まれたままの姿になった美幸と美沙に手を引かれて浴室に連れて行かれ、二人がバスチェアに腰かけるのに対して、一人だけ、バスマットのの上に直に座らされた。もともと、子供は最低でも三人はほしいと思い、それを前提に家の間取りを考えていた優だから、親子揃って入浴できるような浴室も面積をたっぷりとするよう工務店に依頼していた。そのため、美幸と美沙、それに真衣の三人が一緒に入っても、浴室はさほど窮屈ではない。だが、体格がいい上にバスチェアに腰をおろす美幸と美沙との間にはさまれ、バスマットの上に直にお尻をつけて座らされた真衣にしてみれば、二人の豊かな乳房を下から見上げるような格好になり、自分が本当に小さな子供になってしまったように思えてくる。

「三日間もお風呂に入らずにおねむだったから、今日は特に綺麗にしてあげないとね。明日からはまた学校へ行くんだし」

掛金具からシャワーを外し、湯の温度を調節しながら、美幸が真衣の全身を無遠慮に眺めまわして言った。

「ママが体を洗ってくれるみたいだから、お姉ちゃんも頭を綺麗綺麗してあげるね。ほら、シャンプーがお目々に入らないよう、これをかぶって」

美沙はそう言って真衣の頭に子供用のシャンプーハットをかぶらせ、浴室の壁に嵌め込みになっている鏡の方に向き直らせた。大柄な女性二人の間に挟まれて、頭にシャンプーハットをかぶり、バスマットにちよこんと座って鏡に映る真衣の姿は、まだ幼稚園にも上がっていない幼女さながらだ。

「や、やだ、こんな小っちゃな子みたいな格好……」

真衣は慌てて鏡から目をそらし、拗ねたように言うのだが、両腕が自由にならないものだ

から、シャンプーハットを脱ぐことはできない。

「何をいつてるの、真衣ちゃんたら。小っちゃい子って言うけど、赤ちゃんよりはよっぽどお姉ちゃんなのよ、シャンプーハットをかぶらせてもらえるのは。うちの妹も、初めてシャンプーハットを使ったのは三歳になってからなんだから。妹みたいに『わーい、お姉ちゃんになっちゃった』って喜ぶのが本当なのに」

美沙が皮肉交じりにそう言い、美幸に向かって目で合図を送った。

と、美幸がシャワーを全開にして、頭といわず体といわず、真衣の全身に湯をかけ始める。「きゃっ！」

突然のことに真衣が悲鳴をあげ、頭をぶるんと振った。顔にかかった湯を掌で拭おうにも、両手が自由に動かせないから、それもままならない。しかも、美幸は容赦なく真衣に向かって湯をかけ続ける。

「ほら、ちゃんとお目々をつぶってなきや駄目よ。でも、シャンプーハットをかぶっていいよかったでしょう？ かぶってなかったら、もっとお顔が濡れちゃってたんだから」

バスマットにお尻をつけて座ったまま上半身だけを動かしてシャワーの湯から逃れようとする真衣の顔に乾いたタオルを押し当て、目のまわりについた雫を拭き取ってやりながら美沙は恩着せがましく言ってから、小さな容器に入ったベビーシャンプーを掌に掬い取って、真衣の髪を洗い始めた。

「じゃ、ママも体を綺麗綺麗してあげようかな」

美沙が真衣の髪を洗い始めたのを見て、美幸はシャワーのコックを閉じ、バスタブの湯を洗面器いっぱいに汲み取った。そうして、美沙が手にしたシャンプーと同様、可愛らしい赤ん坊のイラストが描かれた容器を軽く握ると、ベビー用のボディソープをたっぷり洗面器の湯に溶かし、しばらく洗面器の湯を掻き回して、盛んに泡をたてた。

「これでいいかな」

美幸は誰にともなく呟くと、泡立ちの具合を確認するために純白の泡を掌に掬い取って満足そうに頷き、洗面器を持ち上げ、きめの細かい無数の泡ごと、程よく温度の湯を真衣の肩からかけた。

続いて美幸は湯にくぐらせたタオルにボディソープを染みこませ、こちらも盛大に泡を立ててから、真衣の肌を押し当てて優しく体を洗い始める。

ほどなく、真衣の体は、頭のとっぺんから足の爪先まで、ふんわりした真っ白の泡に包まれてしまった。もちろん、下腹部からお尻にかけての股間のあたりも例外ではない。

本来、おむつかぶれや汗疹で荒れた肌を石鹸やボディソープで洗うのは禁物だ。ベビー用とはいっても石鹸やボディソープを使うと、含まれている成分に皮膚が刺激されて、おむつかぶれや汗疹の症状がひどくなってしまうことが少なくないからだ。育児の経験のない真衣にしてみればそのあたりの知識がなくても仕方ないが、医師である美幸がそのことを知らないわけがない。なのに美幸が

「ここはいつもおしっこで汚れているから、特に綺麗にしとかないとね」

と言いつつもおしっこで汚れているから、特に綺麗にしとかないとね、ボディソープによる肌への刺激を逆

に利用して、おむつかぶれがすぐには治らないようにするためだった。口ではおむつかぶれを治療するためと言いながら、それを口実に、二度と下腹部の飾り毛が生えないようにするための脱毛クリームをおむつ交換のたびに真衣の股間に塗り込んでいるのだが、その効果が現れるまでの時間を確保するために、本来は避けなければならぬボディソープの泡で、おむつかぶれで赤くなった股間を一部の空きもなく覆ってしまったというわけだ。

しかも美幸は、真衣の下腹部を泡まみれにする際、手を滑らせたふりをしつつ、無数の泡で真つ白になったタオルを真衣の秘部に押し当て、恥ずかしい部分をタオル越しに指で撫でさすっていた。

トイレを目の前にしておむつを汚してしまっただけから今まで、集金の女性の来訪のせいでおむつの交換に時間がかかり、その後もテレビの幼児向け番組を見せられたりして、既に一時間ほどが経過している。もうそろそろ尿意を覚えてもおかしくない頃合いだ。それを見透かして恥ずかしい部分をいじられたものだから、真衣にしてみれば堪らない。

「あん……」

真衣は微かな喘ぎ声をあげて体をびくんと震わせた。

「どうしたの、真衣ちゃん？ ひよっとして、おしっこかな？」

予め美幸としめし合わせていた美沙が、髪を洗う手を止めて真衣の顔を覗き込んだ。

「そういえば、廊下でおむつを汚しちゃってから、もうそろそろ一時間ね」

今さら『そういえば』も何も、それを見越しての自分の行為なのに、そんなことまるでおくびにも出さず、美幸はしれっとした顔で言い、さりげなく真衣の秘部をタオルの縁ですつと撫でた。

「やあ……」

真衣の口から再び喘ぎ声が漏れる。

それを耳にした美幸は、すっと目を細めて真衣に囁きかけた。

「いいわよ、出しちゃって。おしっこ、したいんでしょ？」

「え……？」

思いがけない美幸の言葉に、真衣がきよとんとした顔になる。

「おしっこを出しちゃってもいいわよって言うてるのよ。トイレが近いのを治すために二時間は我慢しなきゃいけないのよって言ったけど、我慢ばかりしてちゃ精神的な負担になって却って逆効果になることもあるから、日に一度か二度くらいは、したくなったらすぐ出しちゃうことがあってもいいのよ。特に、今みたいな、気分的にリラックスしているお風呂の時間なんかにはね」

美幸は澄ました顔で説明した。ちよっと聞いただけでは、もっともらしい説明だ。しかし、美幸が真衣の精神状態など気遣うわけがない。尿意を感じても二時間はトイレを我慢しなさいという指示にしたところが、おねしよの治療の一環という触れ込みだが、実は、真衣におもらしをさせ、おむつを着用させるための口実に過ぎない。今の説明にしたって、真衣に二人の監視の中でおもらしをさせるのが目的なだけだ。

「そ、そんな……」

真衣は弱々しく首を振って身をよじった。美幸の真意に気づいたわけではないが、二人

の視線を浴びながら膀胱の緊張を解ける筈がない。

真衣のそんな様子を目にした美幸は

「いいのよ、そんなに遠慮しなくても。これまでにも何度も真衣ちゃんのおしっこで汚れたおむつを取り替えてあげた仲なんだから」

とこれ以上はないくらい笑顔で言うと、やおら立ち上がり、予備のシャンプーや詰め替え用のリンスを収納してある棚に手を伸ばした。

「あ……」

浴室の壁に造り付けになっている棚から美幸がつまみ上げた物を見て、真衣の顔がこわばった。

それは、リビングルームやダイニングルームでも幾度となく口にふくまれたおしやぶりであった。どうやら、タオルの中にでも隠して浴室まで持ってきて、棚に置いておいたらしい。「さ、これを啜えて気分を落ち着かせるといいわ。本当はママか美沙お姉ちゃんのおっぱいをあげられればいいんだけど、二人とも真衣ちゃんの髪や体を洗っていておっぱいまでボディソープやシャンプーの泡だらけになっちゃってるから、それはできないの。でも、おしやぶりでいいよね？ だって、真衣ちゃんたら、哺乳壺をちゅうちゅうしながらでもおむつを汚しちゃうんだもの、おしやぶりも同じよね。それと、まさか、大好きなおしやぶりを真衣ちゃんが吐き出しちゃうなんてことはないわよね？」

美幸は真衣の口におしやぶりの先を押し当て、唇をこじ開けるようにして、おしやぶりを口から離したりしたらお仕置きよと言外に匂わせながら、そのまま強引に啜えさせた。

美幸が再びバスチェアに座ると、それまで遮られていた視界が開けて、シャンプーハットを頭にかぶって全身を泡まみれにし、おしやぶりを啜えた真衣の姿が大きな鏡に映った。これまで何度もおしやぶりを口にふくまれた真衣だが、おしやぶりを啜えた自分の姿を目にするのは、これが初めてだった。

その羞恥に満ちた姿に、頬にさつと朱が差し、慌てて視線を床に落としてしまう。

だが、そこへ美幸が

「おしやぶりを啜えた自分を見た感想はどう？ すっかり小っちゃい子らしくなっちゃって、とっても可愛いでしょう？ でも、お風呂に入る前の真衣ちゃんもともとと可愛かったのよ。おむつでぷっくり膨れたお尻をロンパースで包んで、よだれの薄いシミがついたよだれかけを首に巻き付けて、おしやぶりをちゅうちゅうしてる真衣ちゃん、とっても可愛かったのよ。だから、お風呂からあがったら、すぐにまたおむつをあててロンパースを着せてあげる。今も可愛い真衣ちゃんだけど、もともとと可愛らしくしてあげる。今はシャンプーハットのお姉ちゃんを、よだれかけとおむつの赤ちゃんに戻して、うんと可愛らしくしてあげる」

と囁きかけて、更に羞恥を煽りたてる。

「ま、真衣、赤ちゃんなんかじゃ……」

「赤ちゃんなんかじゃないって言うの？ おしやぶりを啜えて、おしっこを出したそうにもじもじしている真衣ちゃんが？」

真衣の弱々しい反論を封じて決めつける美幸の言う通りだった。尿意を二時間近く堪えた後は乳首を吸いながらでないかと排尿できないようになってしまった真衣だが、尿意を覚えてすぐなら自分の意志でおしっこを出すことができる。その場合は必ずしも乳首を口にふくんでいる必要はないものの、何かを吸っていけば出しやすいことは確かだ。いや、出しやすいというよりも、少しでも尿意を覚えた時点で乳首なりおしやぶりなりを口にふくんだ瞬間、自分の意志に反して膀胱の緊張が解けてしまうような体になってしまったと言ったほうが正確だろう。

「ほら、いつまでも我慢してないで、楽になっちゃいなさい。おしっこを我慢する赤ちゃんなんて変よ」

今にもおしっこを溢れ出させそうになっている真衣の恥ずかしい部分に、美幸が今度は中指の先を突き立てた。無数の細かい泡のために、つるんという感じで僅かながら指先が秘部に侵入する。

「……！」

真衣は声にならない声をあげて体をのけぞらせた。

同時に、真衣がお尻をつけているあたりに、シャワーの湯とは微妙に異なる、薄く黄色に染まった温水がじわっと広がり、ボディソープの細かい泡とはまた違う少し大きめの泡が、薄黄色の温水の表面に幾つか浮かぶ。

「あーあ、とうとう出しちゃった。お買い物に行けばショッピングセンターのトイレの床をびしょびしょにしちゃうし、帰ってきたらトレーニングパンツからも沁み出すようなおしっこで玄関先を汚しちゃう。それに、おねむの間に何度もおむつを汚しちゃうだけじゃなくて、せっかくおしっこを教えるもトイレに間に合わなくて、おっきしている間も廊下の真ん中でおむつを汚しちゃうたと思ったら、今度はお風呂場で我慢できなくなってママとお姉ちゃん目の前でももらしちゃうなんて、本当、すっかり手間にかかる赤ちゃんになっちゃったんだから、真衣ちゃんは」

それまでのわざとらしくも優しい口調はそのまま、真衣のこれまでの痴態を改めて思い出させるために、美幸はわざわざ指を折りながら、おもらしに至った状況を一つ一つ数え上げた。

「ま、真衣……」

真衣、赤ちゃんなんかじゃない。これまでも何度か弱々しく口にした惨めな抗弁。だが、二人の視線を浴びながらバスマットを薄黄色に染めている最中の真衣がその言葉を今ここで口にできるわけがない。

「これで自分でもよおくわかったわね？ 真衣ちゃんは赤ちゃんなのよ。おむつ離れなんてずっとずっと先の、ママと美沙お姉ちゃんにお世話をしてもらわないと自分じゃ何もできない赤ちゃんなのよ」

真衣の力ない抗弁を封じて、美幸が有無を言わさぬ調子で決めつけた。

\*

入浴を終えた二人は、予め準備しておいた新しいおむつかバーと布おむつにお尻を載せた格好で真衣を脱衣場のバスタオルの上に横たわらせ、美幸はネグリジェを、美沙はパジャマをそれぞれ身に着けた。

しかし、着替えを終えた後も、ドライヤーを使ったり、髪をブラッシングしたりしながら、二人でなにやら楽しそうに談笑するばかりで、なかなか真衣のことを構おうとはしない。

「マ、ママ  
…美沙お  
姉ちゃん…  
…」



両腕を自由にかせないから床に手をつくこともできず、背筋や脚力も弱体化したままのため、寝返りを打つのが精一杯で自力では体を起こせない真衣が、長時間の放置に耐えかね、さすがに不安にかられた様子で二人に向かって声をかけた。

「うん？ ママとお姉ちゃんに何かご用かな、真衣ちゃんは？」

それまで談笑を続けていた二人が同時に振り向き、美幸が真衣の顔を見おろして聞き返した。

「ご用っていうか…あの、いつまでこのままいなきやいけないのかなと思って、その…」

思い余って声はかけたものの、その後どう言えばいいのかわからず、真衣は曖昧に言葉を濁した。

「いつまでこのままいなきやいけないのかな、ですって？ あらあら、そんなことを言うなんて変ね。赤ちゃんはいつもおむつをあてられているから、たまに裸になるととっても嬉しがって、お風呂からあがっておむつをあてられたりお洋服を着せられそうになると逃げるのが普通なのに」

今度は美沙が、いかにも不思議そうな口調で言った。

「で、でも…」

「それに、真衣ちゃんはおむつかぶれになっちゃってるじゃない？ おむつかぶれを少しでも早く治すには、なるべく乾いた状態にしておくのが一番なのよ。だから、お風呂からあが

つてもすぐにはおむつをあてないようにしてあげているんだけど……」

どう反応すればいいかわからないながらも、それでも何か言いたそうにする真衣の言葉に重ねて美幸は言い、少し悪戯めいた表情を浮かべてこんなふうにした。

「……でも、いつまでもこのままじゃ嫌なのかな、真衣ちゃん？ あ、ひよつとして、おむつが大好きになっちゃったとか？ だから、早くおむつをあててほしいのに二人ともお喋りに夢中になっちゃってなかなかおむつをあててくれないからご機嫌斜めだったりするのかな？」

「そんな……」

真衣は涙袋のあたりをぱつと赤く染めて首を振った。

「あら、違うの？ だったら、当分は裸ん坊のままでもいいわね。大嫌いなおむつをあてられずにすむ時間は少しでも長い方がいいわよね？」

首を振る真衣に美沙が念を押すように言い、

体の横にだらんと伸びた両腕の手首をつかんで引つ張りながら

「でも、ころんしてるだけだったら退屈だから、おつきさせてあげるね。おつきして、廊下であんよのお稽古をするといいわ。おむつをあててないから、両脚の間に邪魔な物がはさまってなくて、少し歩きやすいんじゃないかな」と続けた。

「……いや！ こんな格好で廊下はいやあ！」

美沙のなすがまま体を引き起こされそうになった真衣だが、じきにはつとしたような顔になり、激しく身をよじった。

おむつにロンパース、それによだれかけという赤ん坊そのままの格好を強要されるくらいなら、いつそ丸裸の方がマシかもしれない。しかし、浴室でおしっこを溢れ出させた恥ずかしい部分、それも、飾り毛を一本残らず剃り落とされて童女と同じにされてしまった秘部を二人の目にさらして平気でいられるわけがない。しかも、丸裸のまま脱衣場から廊下へ追いつ出されたところへ、新聞店の集金のように突然の来訪者があったとしても、両腕が自由にならない真衣は、どこかの部屋へ逃げ込むこともままならないのだ。浴室で口にくまされたおしゃぶりを咥えたまま丸裸で身をすくめる姿を誰かに見られたらと思うと、美沙の手を振り払わずにはいられなかった。

だが、真衣が思わず取ったそんな行為さえ、二人は、真衣をますます赤ん坊扱いするため絶好の口実にしてしまう。

「ふうん。裸ん坊でいるのが嫌なんだ、真衣ちゃん。じゃ、お手々を離してあげる」

美沙は、どこか含むところのありそうな口調で言い、いったんは体を引き起こしかけた真衣の手首を意外にもあつけなく離れた。

「裸ん坊が嫌だったことは、真衣ちゃん、やつぱり、おむつが大好きになっちゃったってことね。いいわ。だったら、すぐにおむつをあててあげる。だから、おねだりしてちょうだい。大好きなおむつ、早く真衣にあててちょうだいっておねだりするのよ」

美幸が両目をすつと細め、再びおむつの上にお尻を載せて横たわった真衣の顔を見おろして言った。



「ち、違う。おむつが大好きだなんて、そんなこと……」

「だったら、裸ん坊がいいのね？ 裸ん坊で廊下に出てあんよのお稽古をするのね？」

「それは……」

「やれやれ、自分がどうしたいのか、それもわからないなんて、やっぱり真衣ちゃんはまだまだ赤ちゃんね。だったら、お風呂場でおしっこは出したけど、いつまたおもらしちゃうかわからないから、やっぱり、おむつをあててあげないとね。さ、おねだりしてちょうだい。おねだりしないんだったら、裸ん坊で廊下よ」

「……」

選べるわけのない選択。

だが、いつまでも黙りこくっていると、再び美沙が真衣の手首をつかもうとして腕を伸ばしてくる。

「……お、おむつ……」

真衣は口にくんだままのおしゃぶりをきゅつと噛み、二人の目を見ないようにして、今にも消え入りそうな声で言った。

「おむつをどうしてもらいたいの？」

美幸が短く聞き返した。

「……おむつ……おむつをあててほしいの……」

「じゃ、やっぱり、おむつが大好きになったのね？」

「そ、そんなじゃ……」

「だったら、裸ん坊であんよのお稽古をしたいのかな？ 誰かが急に來たら裸ん坊の真衣ちゃんが丸見えになっちゃう廊下で」

「……ま、真衣……おむつが大好きなの。……いつまでもおもらしの治らない赤ちゃんだから、だから、おむつが大好きで……真衣、美沙お姉ちゃんにおむつをあててほしいの。真衣の大好きなおむつを……」

美幸に言葉で追い詰められ、美沙に腕力でねじ伏せられて、真衣にはそう応じるしかなかった。

「はい、よくできました。でも、一つ足りないわね。おむつをあててもらう前に、おむつかぶれのお薬を塗ってもらわないといけないんじゃないかな？ それもちゃんとおねだりしなきゃ駄目よ」

ようやくのこと『おむつのおねだり』を言い終えた真衣だが、美幸はそれだけでは満足せず、更に屈辱にみちたおねだりを強要する。

真衣は一瞬、恨めしげな目で美幸の顔を見上げたが、再び下唇の代わりにおしゃぶりをきゅつと噛みしめ、

「美沙……美沙お姉ちゃん。真衣に、お、おむつかぶれのお薬をつけてちょうだい。真衣、いつもおしっこでおむつを汚してばかりだから、おむつかぶれになっちゃって……だから、おむつをあてる前に、おむつかぶれのお薬をつけてほしいの。お願い、美沙お姉ちゃん」と、よく注意していないと聞き逃してしまいそうになるほど小さな声で言って視線を落とす。

「うん、わかった。じゃ、おむつの前にお薬を塗っておこうね。ちよつとでも早く治るよう  
に、たつぷり塗ってあげる」

真衣からの途切れ途切れの『おねだり』に美沙は相好を崩して大きく頷き、真衣を脱衣場  
へ連れて来る時に美幸と一つずつ分担して運んできたバスケットから丸い容器を二つ取り出  
した。

「たくさん塗ったからって早く効くわけじゃないけど……ま、いいか」

それが幼なじみの下腹部を童女のままにしておくためのクリームだということを知らず、  
美沙が手早く蓋を開け塗り薬を指先にたつぷり掬い取るのを見て、美幸は苦笑を浮かべたが、  
もちろん口出にはしなかった。真衣の股間に二度と飾り毛が生えてこないようにするための  
脱毛クリームは、たとえ予定よりも早くなくなつたとしても、知り合いの皮膚科の医師に話  
つけていくらでも用意することができる。それよりも、塗り残しになる部分がないようにす  
ることの方が肝要だった。

「そうね、たくさん塗っておいてあげなさい。真衣ちゃんのアそこが少しでも早くつるつる  
になるように」

美幸が少し皮肉めいた様子で口にした『つるつるに』という言葉の本当の意味に思い至る  
筈もなく、一番の親友の手でおむつかぶれの治療薬を股間に塗り込まれる羞恥に、真衣はぎ  
ゅつと目を閉じ小刻みに体を震わせて耐えるしかなかった。

\*

再び布おむつをたつぷりあてられてお尻をぶつくり膨らませた上からロンパースを着せら  
れ、ボンボンの付いたソックスを履かされて、胸元を大きなよだれかけで覆わた真衣は、自  
分の意志では動かせない右手にガラガラを握らされ、浴室で口にふくまされたおしゃぶりは  
そのまま、美幸に手を引かれて脱衣所から連れ出された。

向かう先は二階。

美幸が先に立ち、美沙が後ろについて、二人に挟まれる格好で一段ずつゆっくり階段を昇  
りきつてすぐの所、二階の廊下に沿って並んでいる五つの部屋の内、一番手前にあるのが真  
衣の部屋だ。

ずっと家の中にいながら、自分の部屋どころか、階段を昇って二階までやって来るのが随  
分と久しぶりに感じられてならない。それに、この前ここへ来た時にはまだ年齢にふさわし  
い格好をしていたのだと思うと、やるせなさで胸が張り裂けそうになる。

「ほら、こんな所で立ち止まっちゃ駄目じゃない。小っちゃい子はもうおねむの時間なんだ  
から、自分のお部屋へ行かなきゃいけないのよ」

自分の部屋の前で脚を止めた真衣に向かって、後ろを歩いていた美沙が背中から声をかけ、  
さつさと歩きなさいとでもいうように、ロンパースの上からぽんとお尻を叩いた。

そう、真衣が二階へ連れて来られたのは、『もうおねむの時間だから、自分のお部屋でね  
んねしましうね』という美幸の言葉に従ったことだった。早めの夕飯をとって少しテレ

ビを見た後、入浴を終えて間もないから、普通に考えれば就寝には随分と早い時間だ。しかし、『小っちゃい子はおねむの時間』と美幸に決めつけられると、逆らうことはできなかった。

そんなふうにして連れて来られた真衣だったが、自分の部屋の前で立ち止まったにもかかわらず、もっと先へ進むよう指図されて戸惑いの表情を浮かべてしまう。

「このお部屋も確かに真衣ちゃんのお部屋よ。でも、ここは、高校生の真衣ちゃんのお部屋なの。真衣ちゃん、明日からまた学校へ行くことになるんだけど、その時になるまではこのお部屋には入らなくていいのよ。だって、今の真衣ちゃんは赤ちゃんだもの。赤ちゃんが高校の教科書を見ても何が書いてあるのか難しくてわからないし、このお部屋には赤ちゃんの真衣ちゃんにお似合いのお洋服なんて無いもの。赤ちゃんの真衣ちゃんには新しいお部屋を用意しておいてあげたから、さ、こっちへいらっしやい」

真衣が立ち止まる気配を察して自分も少し先で足を止め、こちらに振り返って美幸が手招きをしながら言った。

その時になって真衣は、美幸と美沙がリビングルームで交わっていた会話の中に出てきた『真衣ちゃんの新しいお部屋』という言葉を思い出した。そう、確か美幸は美沙に「美沙のお部屋はこれまでの真衣ちゃんのお部屋に近い方で、真衣ちゃんの新しいお部屋は美沙のお部屋の隣にしたのよ」と話していた筈だ。

そのことを思い出した真衣がおそるおそる隣の部屋に目をやると、はたせるかな、ドアの上の方に『美沙の部屋』と書かれた木製のプレートが取り付けられてあった。そうして、どうして今まで気づかなかったのか、自分の部屋のドアにも、隣の部屋のドアと同じ高さの所に『真衣の部屋』というプレートが取り付けられているのが目に留まる。

「ほら、真衣ちゃんの新しいお部屋はこつちよ。早くいらっしやい」

なんとなく状況は把握したものの、それでも納得のゆかない表情で二枚のプレートを見比べている真衣に向かって、美幸が再び手招きをした。

「そうよ、こつちの二つは高校生のお姉ちゃんのお部屋なんだから、赤ちゃんの真衣ちゃんには新しいお部屋に行かなきゃ。一番奥がお父様のお部屋で、その手前がママのお部屋。真衣ちゃんの新しいお部屋は、ママのお部屋とお姉ちゃんのお部屋に挟まれたあのお部屋よ。さ、行きましよう」

美幸の手招きを受けて、五つ並んでいる内の真ん中のドアを指差し、美沙はもういちど真衣のお尻をぼんと叩くと、後ろから真衣の背中を押すようにして歩き出した。

そうされると、渋々ながらも真衣も足を動かすしかない。

「ほら、ここが真衣ちゃんの新しいお部屋よ」

覚束ない足取りで真衣が近づくの待って、美幸が、それまでの他の部屋とは違ってドアの中ほどに取り付けてある木製のプレートを指差した。他の部屋のプレートには『真衣の部屋』や『美沙の部屋』と黒色の漢字で記してあるのに、そのプレートにはピンクの平仮名で『まいちゃんのおへや』という文字が書いてあった。

そのネームプレートを目にした瞬間、真衣の胸を嫌な予感がよぎる。

事実、美幸がドアを大きく開け放った瞬間、真衣は、自分の予感が的中したことを実感せざるを得なかった。

「うんと可愛いお部屋に仕上げてちょうだいって、医院にも出入りしている内装工事の業者さんにお願ひしたのよ。それに、ダイニングルームに置いてあった椅子と同じ、介護用ベッドなんかを取り扱っている業者さんにお願ひして、新しいお部屋にお似合いの可愛い家具も特別に用意してもらったの。もちろん、真衣ちゃんも気に入ってくれるわよね？」

美幸はそう言つて、昨日リフォームが済んだばかりの部屋に真衣を押しやり、自分も足を踏み入れた。

「これだけ可愛いお部屋なんだもん、気に入るに決まつてるよ。ね、真衣ちゃん？」

二人に続いて部屋に入ってきた美沙が決めつけるように言った。

だが、声を弾ませる二人とは対照的に、真衣は固く唇を閉ざし、小刻みに肩を震わせるだけだ。

もつとも、真衣の顔がこわばっているのも道理で、その新しい部屋は、もともとの真衣の部屋とは似ても似つかぬ内装に仕立てられていた。部屋全体はパステルカラーの壁紙に覆われ、壁際には淡いピンクの木製のベビー箆箆が置いてあり、その横に様々な幼児用のオモチャが入った玩具箱が並んでいるのに加え、部屋のほぼ真ん中には純白のベビーベッドが据え置かれ、しかも、その真上の天井にはカラフルな色合いのサークルメリーが吊つてあるといった具合で、中学生や高校生の勉強部屋はおろか、幼稚園児くらいの幼児が使う子供部屋でさえもなく、赤ん坊の面倒をみるための育児室そのままに仕立てられていた。その上、部屋の中央に据えてあるベッドは、デザインこそ赤ん坊を寝かしつけるためのベビーベッドにして見えないが、サイズは、大人が寝ても決して窮屈ではないくらいの大きさになっているのが一目でわかる。

真衣に弟や妹が生まれたら使うことになつていながら長きにわたつて放置されていた部屋。その部屋が、新しく『まいちゃんのおへや』として、『赤ちゃん返りしてしまつた真衣ちゃん』の世話をするための部屋に仕立て直されて、今まさに新しい主人を招き入れたというわけだ。

「さ、いつまでもそんな所にいないで、こっちへいらつしやい。ふかふかの新しいお布団にねんねするのよ」

こわばつた顔で『育児室』の入り口に立ちすくむ真衣に向かって声をかけながら、美幸はベビーベッドの側部に付いている留め金を解除して背の高いサイドレールを倒し、ベッドの上に敷いてある真新しいベビー布団（とはいつても、ベビー用なのはデザインだけで、こちらもサイズは充分に大人用だ）をぼんぼんと叩いてみせた。

「そうよ、いつまでもこんな所で愚図愚図してないで、新しいベッドでねんねしようね。ほら、お姉ちゃんが連れて行つてあげるから、ちゃんといつてくるのよ」

美幸がベビーベッドのサイドレールを倒すのと同時に、美沙が真衣の手首をつかんで歩き出す。

「い、いや、あんな赤ちゃんのベッドで寝るなんて、そんなの、そんなの……」

そう言って拒み、首を横に振るだが、体格差がある上に両腕の自由を奪われている真衣はいとも簡単に美沙に引きずられてしまう。

「やれやれ、またそんなことを言ってる。本当に、同じことを何度言えば気がすむのかしらね、我儘真衣ちゃんはお風呂からあがって、おむつをせがんだのは誰だったの？ おむつかぶれのお薬をつけてちようだいつてお姉ちゃんにおねだりしたのは誰だったかのしら？」

美沙は真衣の体を引きずってベッドに向かって歩きながら、わざと呆れたように言った。

「……ま、真衣。おねだりしたのは真衣だよ。でも、でも……」

引きずられつつも真衣は時おり身をよじって美沙の手から逃れようとする。そのたびに、右手に握らされたガラガラからかろやかな音が流れ出て、真衣の羞恥をくすぐる。しかも、おしやぶりを唾えたまま抗弁するものだから、唇の端からよだれが溢れ出て、胸元を覆うよだれかけのシミがますます大きくなってゆく。

「そう、赤ちゃんのベッドでねんねするのがそんなに嫌なの、真衣ちゃんは。だったら、いわ。赤ちゃんのベッドが嫌なら、お外へ連れて行ってあげる。赤ちゃんのベッドを嫌がるってことは、真衣ちゃんはまだ赤ちゃんじゃないってことよね。自分だけでなんでもできるお姉ちゃんだってことよね。だったら、お外へ行って困らないでしょう？ お友達のお家にも行ってお泊まりさせてもらえばいいんだから」

無駄だと知りつつも抵抗をやめない真衣に、美幸が冷たい声で言った。

効果はてきめんだ。美幸がそう言った途端、さんざん嫌がっていたおしやぶりを自ら口にふくむようになった時と同様、今回も、屈辱に満ちた表情を浮かべながらも、真衣は美沙につき従って歩き始めた。

「それでいいのよ。さ、ふかふかのお布団でねんねしようね」

ついさっきの冷たい声が嘘のように美幸はぱっと表情を和らげ、もういちど大きなベビー布団を叩いた。

二人に体を抱え上げられてベビーベッドに横たわらされた真衣だったが、普段に比べればずっと早いそんな時間に眠れるわけがない。

「あら、どうしたの？ ママに添い寝してもらわないとねんねできないのかな、甘えん坊の真衣ちゃん」

育児室の真ん中に置いた大きなベビーベッドに寝かされ、拗ねたような顔をして天井を睨みつけている真衣に向かって、わざと気遣わしげに美沙が言った。

「でも、お姉ちゃん用の大きなベッドとは違ってベビーベッドには一人しかねんねできないから、添い寝はしてあげられないの。その代わりに子守唄を歌ってあげるから、それで機嫌を直してねんねしてちょうだいね」

美沙の言葉を引き取って美幸が言い、すっと腕を伸ばすと、天井に吊ってあるサークルメリーのスイツチを入れた。色とりどりの小さな飾り付けがくるくる廻り出し、ガラガラから流れ出るのによく似たかろやかな音色が優しいメロディーを奏で始める。

途端に、それまで険しかった真衣の表情がふっと緩み、天井を睨み付けていた目が穏やかになる。

「♪ねーむれ、ねーむれ、はーはのむーねーに——♪」

真衣の顔に表れた変化を見て取った美幸は、満足そうな笑みを浮かべると、真衣のお腹をぼんぼんと優しく叩きながら、涼やかな声で子守唄を口ずさんだ。

と、真衣の顔にどこかうっとりしたような表情が浮かんで、瞼がゆっくり閉じ始める。真衣が自分の意志に反していつのまにか眠りに誘い込まれそうになっているのは、後催眠と呼ばれる一種の精神療法のせいだった。患者を催眠状態に置いた上で何らかの指示を与えておき、催眠状態が解けた後に或る合図を送ることによって、その合図をきっかけに、患者にそれと意識させないまま、催眠時に与えられた指示通りの行動を取らせることができる。これを後催眠と呼ぶのだが、美幸は、この三日間に渡り、真衣に対して様々な器具を使って後催眠の準備を着々と進めてきていた。美幸は真衣が目を覚ましそうになるたび鎮静剤を投与して強引に眠りにつかせていたわけだが、その際、真衣の意識が薄れてゆく僅かの間に、予め録音しておいたサークルメリーの音を聞かせると同時に、真衣のお腹をぼんぼんと優しく叩きながら、甘い声で子守唄を歌って聞かせるといふ行為を何度も繰り返していったのだ。そうすることで美幸は、熱が下がって意識を取り戻す頃には、サークルメリーの音が流れる中、お腹を優しく叩かれて子守唄を聞かされると、自分の意志とはまるで無関係に気分が和らぎ、そのまま眠りにつくという習性を真衣の精神の奥底に植え付けたのだった。

こうして美幸は真衣の眠りをも自分の管理下に置くことに成功していた。そう、今まさに真衣が眠りにつこうとしているのも、美幸の企みによって知らぬ間に身に付けさせられた習性のためだった。

「そうよ、そのままねんねすればいいのよ。楽しい夢を見ながらぐっすりねんねしなさい」  
もう少しで瞼が完全に閉じるといふ頃合いを見計らって、美幸は真衣の耳元に甘ったるい声で囁きかけた。そうして、まだ真衣に幾らか意識が残っているのを確認した上で

「それに、おねむの間におねしよしちやっても、ママか美沙お姉ちゃんがおむつを取り替えてあげるから心配しなくていいのよ。ただ、添い寝をしてあげられないから、真衣ちゃんのおむつが濡れてもママや美沙お姉ちゃんにはわからないの。だから、おねしよしちやったら、すぐママかお姉ちゃんを呼んでちょうだいね。ほら、ここにマイクが付いてるでしょう？ 真衣ちゃんが夜泣きしてないかどうかママたちの部屋で確認できるように取り付けておいたの。このマイクを通してママとお姉ちゃんのお部屋に真衣ちゃんの声が聞こえるようになってるから、すぐに呼ぶのよ。じゃないと、おむつからおしっこが横漏れして、せつかくの新しいお布団が汚れちゃうかもしれないから。せつかくのふかふかのお布団を濡らしちゃったら、大変なもの。だから、すぐに呼ぶのよ」

と、ベビーベッドの枕元を指差して説明してから、あらためて子守唄を歌い出した。

サークルメリーの優しいメロディと美幸が口ずさむ子守唄とのハーモニーに抗しきれず、真衣が瞼を閉じ、やすらかな寝息をたて始めるのに、それからさほど時間はかからなかった。「あらあら、ママにお腹を叩いてもらって子守唄を歌ってもらっただけでこんなに簡単にねんねしちゃうなんて」

あれだけ恨めしげに天井を睨みつけていたくせに美幸の手にかかった途端いとも簡単に寝か

しつけられてしまった真衣の様子に、美沙が半ば呆れたように言った。

「だって、真衣ちゃんは赤ちゃんだもの。ママに寝かしつけてもらったらすぐにねんねしちゃうのが当たり前よ。ほら、見てごらんなさい。おしゃぶりをちゅうちゅう吸いながら気持ちよさそうにねんねしてるところなんて、本当に赤ちゃんそのものよ」

真衣の寝息を確認して子守唄を歌うのをやめた美幸が、にっと笑って応じた。

「そうね、本当に気持ちよさそうにちゅうちゅうしちゃうって。こんな真衣ちゃんが本当は私の幼なじみで、一年近く私より年上だなんてね」

美沙は苦笑交じりに言い、眠りにおちた真衣の唇から力が抜け、おしゃぶりが落ちそうになっていることに気がつくのと、ベビー筆筒の上に置いてある小物入れからおしゃぶりストラップを取り出し、紐の端をおしゃぶりのリングに通して固く結わえ、もう一方の端についているクリップをよだれかけの縁に取り付けた。

「これでいいわね。これで、おしゃぶりが口から離れてもベッドから落ちちゃう心配はないわね。それにしても、十一ヶ月年上の幼なじみが今じゃ赤ちゃんなんだから。それも、私たちがいないと何もできない赤ちゃんなんだから」

美沙は、おしゃぶりをストラップのクリップを取り付けたよだれかけの上から真衣の胸をつんとつつき、なんとも表現しようのない笑みを浮かべた。

\*

時計のない真新しい『育児室』。カーテンの向こうが真っ暗だからまだ朝でないことだけはわかるものの、今が何時ごろなのか、およその見当もつかない中、真衣は目を覚ました。

もうサークルメリーのスイッチも切れて、部屋の中はしんと静まり返っている。

目が覚めたのは、下腹部から伝わってくるぐっしり濡れた感触のせいだった。

これまで使っていた紙おむつなら、全ては無理としても、おしっこのかかなりの部分は高分子吸水材が吸い取ってゲル状に固めてくれたから、じとっと湿った感じはあったものの、ひどく気になるほどではなく、夜中におねしよをしてもそのまま朝までぐっすり眠っていた。だが、美沙の手であてられた布おむつは紙おむつと違い、おしっこを吸ったおむつがぐっしり濡れて肌に貼り付き、自分が恥ずかしい粗相をしたという事実を嫌でも実感させられてしまう。深い眠りにおちて意識しないままおしっこを溢れさせたとしても、下腹部全体を包み込むぐっしり濡れた感触のせいで、すぐに現実の世界に引き戻され、目を覚まさせられてしまうのだ。しかも、時間が経てば経つほど、おしっこを吸った布おむつが冷えてきて、なんとも表現しようのない不快感を覚えずにはいられなくなってくる。その上、美沙の手で恥ずかしい部分に何度も薬を塗り込まれた感触が妙に鮮やかによみがえってきて、いつまでも濡れたおむつのままでいると、恥ずかしいおむつかぶれがますますひどくなってしまうのではないかという不安にかられ、どうしようもなくなってくるのだった。

「マ、ママ……美沙お姉ちゃん……聞こえてるんでしょ？ 聞こえてるんだったら、お、おむつを取り替えて」

洪々ながらも意を決した真衣は、自分が寝かされている大きなベビーベッドの枕元に取り

付けてあるマイクを通して美幸と美沙に助けを求めた。

だが、二人からの返答はない。

「聞こえてるんでしよう？ 真衣の声、ママとお姉ちゃんに聞こえてるんでしょ!? だったら、早く……」

注射された薬剤の効き目がまだ薄れていないため、体を起こすことはできない。それに、もしも立ち上がったとしても、背の高いサイドレールは内側からは倒せないような構造になっているから、ベビーベッドから床におり立つことは不可能だ。しかも、強引に体を動かしただ拍子におむつカバーからおしっこが横漏れして真新しい布団を汚してもしたら、それを口実にまたどんな仕打ちを受けるか知れたものではない。

「早く来てよお。真衣のお部屋に来て、早くおむつを取り替えてっば……」

いくら呼んでも姿を二人が現さないどころか一言の返答もないことに、真衣の顔には次第にあせりの色が浮かんできて、マイクに向かって呼びかける声も涙声になってくる。

「早くっば……おむつが冷たいよお。や、やだよお。こんなの、やだよお……ひ、ひっく……ひっく、う、うえくん……ママあ、お姉ちゃん……うえくん、あん、ああん……」

遂に真衣は身をよじって泣き声をあげてしまった。

右手に握らされたままになっているガラガラが小さく震えて、しんと静まり返った部屋の中にかかるやかな音色がさざ波のように広がってゆく。おしゃぶりが口から離れて頬の横に落ちたが、美沙が用意したおしゃぶりストラップのせいで、それ以上はどこへも転がって行かない。

「ああん、ああん、うえくん、ひ、ひっく……」

いったん泣き出すと、これまで受けてきた数々の屈辱的な仕打ちとも相まって更に感情が高ぶり、気持ちを鎮められなくなる。真衣は、今は動いていないサークルメリーを見上げ、それこそ火がついたように泣き始めた。

美幸と美沙が姿を現したのは、真衣が手放して泣き始めた直後のことだった。

二人揃って部屋に入ってきたタイミングを考えると、美幸と美沙とで予めしめし合わせていたとしか思えない。おそらく美幸と美沙は、真衣が二人に言葉で助けを求めるのを諦めて赤ん坊のように泣き始めるまで育児室に足を踏み入れないように、前もって申し合わせていたのだろう。

「あらあら、どうしたの、真衣ちゃん？ 怖い夢でも見たのかな」

「それとも、喉が渴いたのかしら。真衣ちゃん、一日に何度もおむつを汚しちゃうから、そのぶん喉が渴くのも早いんじゃないかな」

あれだけマイクを通して「おむつを取り替えて」と哀願したのだから、真衣が泣いている理由を二人が知らないわけがない。なのに美幸も美沙も、本当の理由にはまるで見当もつかないかのふうを装った会話を交わしながらベビーベッドにゆっくり近づいた。

「怖い夢を見たとしても、もう大丈夫よ。ママもお姉ちゃんもいるから安心なさい。そうそう、真衣ちゃんの大好きなサークルメリーを廻してあげるわね。この音を聞けば楽しくなつて、怖い夢のことなんてすぐに忘れちゃうわよ」



「湯冷ましを用意してあげるから、たくさん飲むといいわ。すぐに哺乳壺をあげるから、上手にちゅうちゅうするのよ」

大きなベビーベッドの傍らに立った後も真衣が泣いている本当の理由には気づかないふりをつけ、サークルメリーのスイッチを入れたり、ポットのぬるま湯を哺乳壺に入れたりしつつ、互いにそっと目配せを交わす二人。

一方、高校生の身でありながら赤ん坊そのままの格好を強要され、特製の大きなベビーベッドに寝かされた真衣の感情の昂ぶりが鎮まる気配はまるでない。むしろ、サークルメリーのかろやかな音を聞かされたり、哺乳壺の乳首を唇に押し当てられたりと、更に赤ん坊扱いされて、羞恥と屈辱に、ますます泣き声が大きくなるばかりだ。

「何をむずがっているのかしら、真衣ちゃんたら」

「本当、いつまでもご機嫌斜めなんだから、手間のかかる子なこと」

美幸は真衣の右手に自分の手を添えてガラガラを振らせ、美沙は湯冷ましの入った哺乳壺を支え持ったまま、いつまでも泣きやまない大きな赤ん坊の顔を見て二人はもういちど目配せを交わした。

そうして、おもむろに美幸が美沙に話しかける。

「美沙は幼稚園か保育園の先生になりたいのよね？ だったら、まだお喋りのできない赤ちゃんと何をしてもらいたがっているのか、泣き声から判断する練習もしておいた方がいいんじゃないかしら。幼稚園はいいとしても、保育園だったら、二歳児クラスがある所も多いし、新生児から預かる所も少なくないらしいから」

「たしかに、ママの言う通りね。じゃ、どうして真衣ちゃんが泣きやまないのか、考えてみるね。えーと、ママと私が近くにいるサークルメリーの音が聞こえているのに泣いているってことは、寂しいわけじゃないわよね。それに、たぶん、怖い夢を見て私たちを呼んだわけでもないということね。それと、哺乳壺を吸わせてあげても湯冷ましを飲もうとしないところを見ると、喉が渴いているわけでもなさそうだし。季節柄、部屋の温度もちょうどいい感じだし、あと考えられるのは——」

美幸に言われて美沙はわざとらしく思案な表情を浮かべ、しばらくしてから

「あ、おむつかな。ひよつとしたら、おむつが濡れてお尻が気持ち悪いんじゃないかしら」と今更ながら気がついたように言っただけで哺乳壺をベビーベッドの枕元に置くと、掛布団をぱつと捲り上げてロンパースの股間に並ぶボタンを手早く外し、おむつカバーの中に指を差し入れた。

「やっぱりだ。おむつ、ぐっしより濡れちゃってる」

最初から結果を知っているのだから当然のことながら、おむつカバーの中に指を差し入れてすぐ、美沙は美幸と真衣の顔とを交互に見て言った。

「そう、おむつだったの。泣いてばかりだからどうしてもらいたいのかわからなかったけど、さすが、お姉ちゃんだわ。これなら、保育士さんになって新生児クラスをまかされても大丈夫ね」

こちらでも真衣が泣いている理由を充分に承知しながら美幸は美沙を褒めそやし、改めて真衣の顔を見おろして言った。

「よかったわね、真衣ちゃん、お姉ちゃんにわかってもらえて。ちょっと泣くだけで真衣ちゃんはどうしてほいいのかお姉ちゃんにはお見通しみたいだから、この調子だと真衣ちゃん、お家の中じゃ、おむつを取り替えてほしいとかミルクを飲ませてほしいとか、いちいち言葉に出して言わなくてもいいんじゃないかな。うん、そうね。美沙お姉ちゃんが保育士さんになるためのお稽古にもなるから、これからは真衣ちゃん、何かしてほしいことがあったら泣いて知らせなさい。つまり、お家の中じゃお喋りは禁止ってこと。わかったわね？」

それまで泣き続けていた真衣だが、有無を言わさぬ調子で決めつける美幸の言葉に怯えの表情を浮かべ、力なく首を振った。両目からぼろぼろ涙を流しながら弱々しく首を振る姿は、母親に叱られていやいやをする幼児さながらだ。

「嫌がっても駄目よ、ママが決めたことなんだから。それでも、どうしても嫌だっというんだったら、真衣ちゃんを聞き分けのいい子にするためにお仕置きをしなければならなくなっちゃうわね。ママも可愛い真衣ちゃんにお仕置きするなんて嫌だけど、お父様が出張中に真衣ちゃんが我儘ばかり言う子になっちゃったらママの責任だから、厳しくしないとね。――濡れたおむつのままお外に立ってどうすればいいか考える？ それとも、お家の中じゃお喋りをしないで約束する？」

美幸は、真衣の頬を両手の掌で包み込むようにして首を振るのをやめさせ、真衣の顔を正面から覗き込んで問い質した。

美幸の全身から漂い出る威圧感に気圧され、知らず知らずのうちに泣き声が小さくなり、涙も止まって、真衣はいつしか泣きやんでしまう。

「約束できる？」

美幸はもういちど、語気を強めて訊いた。

だが、真衣からの返事はない。

「じゃ、お仕置がいいのね。お外に立っていたいのね？」

美幸は更に語気を強め、念を押すように言った。

「い、いや……お仕置はいや……」

真衣の顔に浮かぶ怯えの色がますます濃くなる。

「お仕置きがいやだったらどうすればいいか、お利口な真衣ちゃんにはわかってるわよね？」

美幸は、一転して優しい声で訊いた。

「や、約束する。約束するから……」

約束するからお仕置きは無しにして。そう懇願しかけた真衣だったが、美幸の瞳に宿る妖しい光を見た瞬間、言葉で許しを乞うても聞き入れられそうにないことを直感した。

今の真衣にできるのは、ぎゅっとと脛を閉じて再び泣き声をあげることだけだった。

「ひ、ひっく……ああん、うわああん……」

いったんは泣きやんだ真衣だったが、再び涙がこぼれてきた。最初は泣き真似だったかもしれないが、言葉さえ奪われて泣くことでしか意志を表示できなくさせられる屈辱に胸が張り裂けそうになって、じきに、演技でもなんでもなく、心の底から手放して泣き始めてしまう。

だが、美幸はまだ満足しない。

「元気に泣くのはいいけど、なんだか、幼稚園とか保育園のお姉ちゃんみたいな泣き方ね。真衣ちゃんはまだパンツのお姉ちゃんじゃないでしょう？ おむつの赤ちゃんなんでしょう？ 赤ちゃんはどんな泣き方をするんだったかな。よく思い出して、ちゃんと赤ちゃんらしく泣かなきゃ駄目よ。もしも赤ちゃんの泣き方がわからないんだったら、今から知り合いの産院に連れて行ってあげようか？ 生まれたばかりの赤ちゃんと一緒に新生児室で赤ちゃんらしい泣き方をお稽古させてあげてもいいのよ」

美幸は膝を折り、腰をかがめて、真衣の耳元に囁きかけた。

瞬間、部屋の中がしんと静まり返る。

だが、その直後、再び真衣の泣き声が響き渡った。

「……やあ、ほ、ほぎやあ……おぎや、おぎやあ……」

「そう、それでいいのよ。真衣ちゃんは赤ちゃんだもの、お家にいる時はどんなことでも泣いて知らせるのよ。でも、お出かけの時はちゃんとお喋りさせてあげる。だって、お出かけの時はパンツのお姉ちゃんにならなきゃいけないんだから」

美幸は、真衣が赤ん坊を真似て泣き出したことでようやく満足そうに微笑み、美沙の方に向き直って言った。

「いいわね、美沙。これがおむつが濡れた時の泣き方だから、これからは、真衣ちゃんがこなふうに泣いたら最初におむつの具合を確かめてあげてちょうだい」

「うん、わかった。あと、お腹が空いた時の泣き方や、おむつかぶれでお尻が痛かったり痒かったりする時の泣き方なんか憶えるよう頑張るね」

赤ん坊そのままの真衣の泣き声に耳を傾けながら、美沙は大きく頷いた。

「それでこそ、頼りになるお姉ちゃんね。それに比べて、真衣ちゃんはいつまでも手間のかかる赤ちゃんなんだから。でも、それが可愛いんだけど」

美幸も大きく頷き返し、二人はくすくと笑い合った。

真衣はその後もおねしよでおむつを濡らしては目を覚まし、泣き声でおむつの交換をせがむということを朝になるまで何度も繰り返して強要された。

高校生なのに、いつまでもおむつの外れない赤ん坊として扱われる、それまで想像さえしたこともない新たな『日常』。

けれど、美幸の出現と共に新しく始まった生活が本当に偽りの日常なのか、それとも、これまで送ってきた高校生としての日々こそが偽りだったのか。いつしか真衣の中では、判然としなくなりつつあった。

朝になって太陽の光を浴びれば、またいつもの日常が始まるかもしれない。しかし、始まるに違いないと信じるに足るだけの根拠はどこにもない。

今はただ、美幸にガラガラであやされながら美沙の手でおむつを取り替えてもらうしかない真衣だった。

## 《二十。久々の登校》

おねしよをするたびに下腹部が気持ち悪くなって目を覚まし、泣き声で美幸と美沙を呼んでおむつを取り替えてもらおうということは何度も繰り返して、ようやく朝を迎えた。

夜の間は二人揃って育児室にやって来ていたのだが、今は美幸は朝食の準備をしているのだろう、真衣を起こしに部屋へやって来たのは、もうすっかり通学支度を調べて制服に身を包んだ美沙だけだった。

「そろそろおつきして、学校へ行く支度をしなきゃいけないわよ。真衣ちゃんがおむつの赤ちゃんからパンツのお姉ちゃんになる時間が来たんだから」

すっかり慣れた様子でサイドレールを倒して掛布団を捲り上げた美沙は、背中と膝の裏側に手を差し入れ、特製のベビーベッドから真衣の体をおろして床に立たせると、胸元を覆う大きなよだれかけと、赤ん坊の装いそのままのロンパースと、ボンボンのついた女兒用のソックスを手早く脱がせ、残るはおむつカバーだけという姿に剥いてしまった。

だが、美沙はそこで手を止め、

「さ、下着はどうしようかな。真衣ちゃん、おむつとパンツ、どっちがいい？」

と、たつぷりの布おむつのせいでふっくり膨らんだおむつカバーだけの姿で床に立っている真衣に向かって問いかけた。

「え？ どっちって、さっき、『おむつの赤ちゃんからパンツのお姉ちゃんになる時間よ』って美沙お姉ちゃんが言ったんじゃない。だったら、パンツに決まってるでしょ？」

真衣は要領を得ない顔で訊き返した。

「うん、確かにそう言ったし、お姉ちゃんは真衣ちゃんにパンツを穿かせてあげてもいいと思うてる」

美沙は軽く頷いた後、真衣の顔をじつと見て言った。

「でも、真衣ちゃんは本当にそれでいいの？ 本当にパンツでいいの？」

「……？」

「だって、この何日もの間、真衣ちゃんはおむつを汚してばっかりだったのよ。それに、ママとお出かけした時もパンツを濡らしちゃったんでしょ？ そんな真衣ちゃんがパンツで学校へ行って大丈夫？ よそへお出かけした時だったらおもらしをしちゃっても逃げて帰ればいいけど、学校だったら、真衣ちゃんの知り合いばかりなのよ。一度でもしくじったら、それから毎日、お友達から冷たい目で見られるようになっちゃうのよ。——それでも本当にパンツで大丈夫？」

「それは……」

美沙に言われて、真衣の顔に躊躇いの色が浮かんだ。が、迷っていられる状況ではない。真衣はすっと息を吸い込むと、意を決して応じた。

「……だ、大丈夫。大丈夫だから、パンツを穿いて学校へ行く」

正直いささかの不安はあったが、まさか制服のスカートの下におむつをあてて学校へ行く

るわけもなく、真衣はそう応えるしかなかった。

「わかった。本人が大丈夫って言うんだったら、信じてあげる。じゃ、おむつを外したら、真衣ちゃんの元の部屋へ行って制服を着ようね」

美沙は軽く頷いて膝立ちの姿勢になり、真衣の下腹部をくるんでいる大きなおむつカバーの腰紐に指をかけた。

\*

美沙はおむつを外した後、下腹部をお尻拭きで綺麗にし、慣れた手つきで二種類の塗り薬を丹念に塗り込んでから、真衣を元の部屋の前に連れて行った。

「私の部屋……私の本当の部屋」

真衣は自分が丸裸なのもすっかり忘れたかのように、秘部を掌で覆い隠すこともせず、ドアのノブに手をかけた。投与された薬剤はすっかり効き目が消えて、両手の自由も戻っていた。

だが、ドアはびくりとも動かない。

「無理よ。お姉ちゃんが開けてあげるから、ちょっとだけ待ってなさい」

あせりの色を濃くしてドアを何度も押しついたり引いたりする真衣の様子をしばらく眺めてから、それまで一步退いた所にいた美沙がドアのすぐ前に進み出た。

「無理ってどういうこと？ 私の部屋なのに、どうして美沙に開けてもらわなきゃいけないのよ!？」

ようやく高校生に戻れるという気負いからか、自分のことを名前ではなく『私』と呼び、美沙のことも『美沙お姉ちゃん』ではなく名前だけで呼んで、真衣は少しばかり気色ばんだ表情で問い質した。

だが、美沙の方は澄ましたものだ。おもむろに制服のポケットから取り出したキーホルダーを

「だって、鍵がかかっているんだもん。これがないと開けられないのよ」

と、真衣の目の前でこれみよがしに振ってみせる。

途端に真衣がはっとしたように両目を見開き、美沙が手にしたキーホルダーを凝視して言った。

「それ……それ、私のキーホルダーじゃない!? どうしてそれを美沙が持ってるのよ!」

そう。それは確かに、玄関や門扉のみならず、各々の部屋の鍵をまとめて取り付けてある真衣の大事なキーホルダーだった。

「だって、美沙が持ってたさってママが私にくれたんだもん」

真衣の取り乱しようとは対照的に、美沙はこともなげに応じた。

その時になつて真衣は、美幸がインターフォン越しに美沙に言った『預けておいた鍵で門扉とドアを開けて入ってちょうだい』という言葉思い出した。

「大事なキーホルダーを真衣ちゃんに持たせるわけにはいかないわよ。鍵は小っちゃい子の玩具じゃないんだから、ちゃんとお姉ちゃんに預かっておいてもらわないとね」

不意に聞こえた声に、真衣はびくんと体を震わせて、声のする方に振り向いた。

いつのまに來ていたのか、階段の最上段に美幸の姿があった。

「ママの言う通りよ。家中の鍵が一つになつてゐる大事なキーホルダーを赤ちゃんに持たせておいて無くしたり落したりしたら大変だからね」

美沙は、階段を昇りきつて廊下をゆっくりこちらに近づいてくる美幸の顔と真衣の顔を見比べて言った。

美幸がこの家にやつて來た金曜日の夜、夕飯の後で、優が家にいない間、鍵の管理をどうするか三人で相談した。もともと、家中の鍵は丈夫なキーホルダーに束ねて優と真衣が一組ずつ持つてゐるのだが、もう一組、美幸が持つスペアキーを作つたらどうだろうと優が提案したのが発端だった。いずれ美幸は正式に佐藤家の人間になるのだからそれがいいと真衣も思ったのだが、意外なことに、美幸本人が「スペアキーを作るのはまだ先でいいんじゃないかしら。優さんが出張の間は、私が優さんのキーホルダーを預かつていればいいんだから。無闇にスペアキーを増やすのは、防犯上どうかと思うのよ」と優の提案をやりわり拒んだものだから、結局その話はお流れになつた。

だが、今にして思えば、スペアキーを作ることに美幸が反対したのは、防犯上の懸念からなどではなく、家中の鍵を真衣に自由に使わせないようにするためだったに違いない。優が持つていたキーホルダーを美幸が管理し、もともと真衣が持つていたキーホルダーを美沙に預けてしまえば、門扉や玄関のみならず、自分の部屋のドアを開閉することさえ真衣にはできなくなるのだ。

「さ、いつまでも裸ん坊のままだとまた熱が出るから、早くお部屋に入りましょう」

思つてもみなかつた事の成り行きに唇を噛みしめる真衣を尻目に、美沙はキーホルダーから一本の鍵を選んで鍵穴に差し込み、ノブをまわしてドアを大きく開け放つた。

「久しぶりの登校なのに遅刻しちやいけないわよ。ほら、教科書や持ち物は美沙お姉ちゃんに前もつて用意してくれているから、あとは制服を着るだけよ。真衣ちゃん、今から高校生に戻るんだから、自分で着られるわよね？ それとも、すっかり甘えん坊の赤ちゃんになつちやつた真衣ちゃんには、ママやお姉ちゃんが着せてあげないと駄目かしら？」

自分の部屋なのになぜか足を踏み入れることを躊躇つてゐる真衣の背中を美幸がぼんと押した。

「じ、自分で着る。自分の制服だから、自分で着る」

ここでもたついて遅刻でもしたら、それを口実にまたどんな目に遭わされるかしかれたものではないと思うと、ぎこちない身のこなしで制服を着るしかなかった。

真衣は肩を落とし、セーラー服がかかつてゐる壁際のハンガーに向かつておそおすと歩き出した。

だが、ベッドの上に置いてある下着に気づいた途端、さっと頬に朱が差して脚が止まつてしまう。

ベッドの上の下着は、ブラスリップとパンツだった。だが、ブラスリップはいいとしても、パンツは普通のショーツではなく、トイレトレーニングを始めたばかりの幼児が穿くような

パンツをそのまま大きくした厚手のトレーニングパンツだった。しかも、その横には、トレーニングパンツの上に穿くオーバーパンツまで用意してある。

真衣は一瞬、何かを訴えかけるような目で美幸の顔を見た。が、ショーツをゴミとして捨ててしまった美幸に助けを求めても無駄なことは火を見るより明らかだった。

「どうしたの？ やっぱり、ママかお姉ちゃんにパンツを穿かせてほしいのかな、真衣ちゃんは」

ベッドの上に並ぶ二枚のパンツを目にして体の動きを止めた真衣に向かって、美沙がくすつと笑って言った。

「は、穿く……パンツくらい、自分で穿けるわよ」

真衣はもういちど唇を噛みしめ、弱々しく首を振った。

「そう？ だったら、見ていてあげるから、自分でパンツを穿いてごらんなさい。ちゃんと穿けたら、さすがパンツのお姉ちゃんはお利口さんねって褒めてあげる」

そう言う美幸の顔を真衣は一瞬だけ恨みがましく睨みつけ、浅い呼吸を何度か繰り返してから、トレーニングパンツをおそろおそろつかみ上げた。

普通のショーツとはまるで違う 内側が厚い吸水パッドになっているトレーニングのなんとも表現しようのない肌触り。何度か味わったその恥ずかしい感触が嫌でも思い出されて堪らない。

それでも真衣は意を決して、大きなトレーニングパンツのウエスト部分を両手で広げるようにしながら右足を股ぐりに通した。そうして、次に左足。

やや覚束ない足取りながら右足と左足を交互に上げて両脚を股ぐりに通したものの、それ以上トレーニングパンツを引き上げる段になって、真衣の手の動きがのろくなった。パンツとはいつても、普通のショーツではない。おむつと同じくらい恥ずかしいトレーニングパンツだ。制服のスカートの下にこれ穿くのかと思うと手の動きが遅くなるのも仕方ない。

「あれ？ やっぱり自分じゃ穿けないのかな。だったら、穿かせてあげる。あ、でも、パンツも自分で穿けないんじゃない、お姉ちゃんじゃなくて赤ちゃんだよ。だったら、パンツはまだ早いからおむつにしないかやいけなかな。ま、それでもいいかな。真衣ちゃんは制服のスカートの下におむつをあてて学校へ行くのよ。でも、その方がいいよね。おもらししちゃってもスカートや教室の椅子を濡らさなくていいから、おむつの方が安心だよ」

美沙が、こちらに向かってわざとゆっくり足を踏み出しながら言った。

「こっちに来ちゃ駄目！ 来ないでってば……自分で穿けるんだから」

ここで愚図愚図していると本当にまたおむつをあてられた上に制服を着せられて学校へ連れて行かれてしまう。美沙が冗談で言っているのではないことは、これまでの言動から明かだった。真衣は弱々しく首を振り、いったん止まりかけた両手を泣きそうになりながら再び動かし始めた。

\*

ようやくのこと自分の手でトレーニングパンツとオーバーパンツを穿き、ブラスリップの

上に制服を着終わった真衣は、その後、ダイニングルームで朝食を摂ったのだが、食事の内容は昨夜のような離乳食や哺乳壺のミルクではなく、トーストにハムエッグ、グリーンサラダという、ごく普通のメニューだった。それに、座らされたのも、場所こそ夕飯の時と同じ美沙の隣だったが、椅子は特製のベビーチェアからいつものダイニングチェアに戻されていて、まるで昨夜のことが夢の中の出来事のように思えるほどだった。

しかも美幸は、真衣がトイレを使うことまで許したのだ。便座の蓋の開閉は美幸の手に委ねなければならなかったが、用を足す間だけでも一人静かに便器に座っていられるのは、真衣にとっては信じ難い出来事だった。

だが、そういった一連の事々も、実は、美幸が自らの企みを進めるためのステップの一つにすぎない。いったん、ごく普通の日常生活に引き戻した後、改めて羞恥と屈辱のどん底に突き落とす。こうすることで美幸は真衣の精神状態をより激しく掻き乱し、自分に対する依存心をますます強固にするつもりなのだ。

美幸のそんな狙い通り、また新たな羞恥の生活が、今度は学校を舞台に始まるうとしていた。

美沙が玄関と門扉に鍵をかけ二人一緒に歩道へ出た所で待っていたのは、車に乗った美幸だった。



「……？」  
「ほら、ぼんやりしてないで、早く乗るのよ。他の車はあまり走ってないけど、いつまでも道の脇に停まっちゃ迷惑なんだから」

車の窓ガラス越しに美幸の顔をきよとした表情で眺める真衣の手を引いて、美沙がさっさと後部座席に乗り込んだ。  
「あ、あの……」

手を引かれて強引に美沙の隣に座らされた真衣だが、咄嗟に状況が把握できるわけもなく、ルームミラー越しに美幸の顔をちらと見て、すぐに美沙の方に目を向け直す。

「ママも学校に用事があるから送ってあげるわ。バスと電車を乗り継いで行くよりいいでしょ」



よ？」

美幸もルームミラー越しに真衣の顔を見返し、こともなげに言った。

「……」

バスを待っている間にスカートが風に煽られたり電車のホームに向かう階段で下からスカートの中を覗き見られたりして、どんな下着を身に着けているのか他人に知られることを考えれば、車で学校へ行けるにこしたことはない。だが、美幸の言う『用事』が何を意味するのか判然としないままでは、咄嗟にはなんと応じていいのかわからない。

だが、美幸は真衣の返答を待つこともなく

「じゃ、出すわよ」

と短く言って滑らかに車を発進させた。

バスと電車の乗り継ぎで四十五分ほど必要な通学路だが、車なら、家を出て三十分もしないうちに校門が見えてくる。

ただ、名門で知られている啓明女学院だから、出入りのチェックも厳重だ。制服を着ている生徒でも警備員に写真入りの学生証を見せて本人確認を済ませないと校門をくぐれないようになっているほどで、外部の人間が車で乗りつけた場合、入門申請書に名前と住所、電話番号、車のナンバープレートや来校の目的などを記入した上で、運転免許証を提示して許可を取るという手順を踏まなければ、一歩たりとも敷地内に入ることができない決まりになっている。だから、ここでちよっと手間取っちゃうかなと真衣が思ったのも当たり前のことだった。

だが、実際は、美幸がバッグから取り出したプレートをかざすだけで（もちろん、後部座席の真衣と美沙も各々の学生証を警備員に提示する必要はあったのだが）、誰から咎められることもなく車を校門の中に入り入れることができた。しかも美幸は、校門をくぐってからもまるで逡巡するふうもなく車を進め、職員専用のパーキングエリアに駐めさえたのだった。

その後、美幸は、さっさと運転席からおり立って身を翻し、校舎の中に姿を消してしまっ

た。かたや真衣の方は、美沙に促されるまで、きよとんとした表情を浮かべて後部座席に座ったままだった。

\*

美沙が用意した通学鞆の中を確認し、久しぶりに顔を会わせた級友たちと少しばかりぎこちない会話を交わしているうちに、チャイムが鳴って朝のホームルームが始まった。

「おはようございます。今日も気持ちのいい天気ですね。最近の気候もいいし、みなさん、もうそろそろ新しい環境にも慣れてきて、これからいよいよ本格的に高校生活が始まるとうとうとところだと思えます。卒業までの三年間、勉強に、部活に、思いきり打ち込んでくださ

い。それに、月曜日から欠席だった佐藤さんも今日から出席ということで、久しぶりにみんな揃ったわけです。五月の半ばには春の体育大会があるから、他のクラスに負けないよう、みんな、気持ちを一つにして頑張ってください。来週の金曜日には、誰がどの種目に出るのか決めなきゃいけないし、今からいろいろ考えておいてくださいね」

週番の合図に合わせてお馴染みの「起立、礼、着席」を済ませた後、担任の女性教師が穏やかな声で言ってから、どことなく気遣わしげな視線を真衣の顔にちらと向けて続けた。

「但し、佐藤さんを競技に参加させるのはお医者様から止められているから、彼女には応援の方で頑張ってもらいます。みなさん、そのあたりのことも考え合わせて、誰がどの競技に向いているか意見を出し合うようにしてください」

「あの、どういうことでしょうか、先生？ 佐藤さん、まだ体調が思わしくないんでしょうか」

担任の言葉が終わるのを待って、体育委員をまかされている生徒が遠慮がちに訊いた。

「ええ。ぱっと見ただけじゃ顔色もいいし、今は熱も高くないんですけど、外からじゃわからない体の内側にまだ本調子じゃないところがあるとお医者様がおっしゃっておられました。だから、体育の授業も見学ですませるようにした方がいいということだそうですね」

「お医者様がおっしゃっておられたって——先生、お医者様から直接お聞きになったんですか。なんていうか、その、診断書に書いてあったとか、そういうのじゃなくて」

体育委員の女生徒が、どことなく訝しげに重ねて訊いた。

「よく気がつきましたね。そう、私だけでなく、今朝の職員会議で先生方みなさん、お医者様から直接そのように指示を受けました。——最初にこのことを言っておいた方がよかったですね。そのお医者様というのは、みなさんもよく知っている鈴木先生のことです。初等部や中等部から啓明に通っている人はこれまでも健康診断だけでなくいろいろお世話になっているし、高等部から啓明に入学した人も、健康診断からまだ日も経っていないから、顔を憶えていることと思います。実は、佐藤さんの診察に当たっておられるのが鈴木先生で、鈴木先生が今朝の職員会議で佐藤さんの容態について詳しく説明してくださいというわけです」

担任は軽く頷いて説明した。

「じゃ、鈴木先生は、佐藤さんの様子を説明するためにわざわざ学校へいらしたんですか？」

そう尋ねたのは、クラス委員長だった。

と、教室のあちらこちらで

「そういえば、鈴木先生、健康診断の時は助手の人に車を運転してもらって学校へ来るのに、今日は自分で運転して来てたわよね」

「あ、私も見たわよ。後ろに誰か乗せてなかったっけ？」

「たしか、それって、佐藤さんじゃなかったかな。ただ、後ろに乗ってるのは一人じゃなかったような気がするけど」

と生徒どうし囁き交わす声が湧き起こって、大勢の視線が一斉に真衣に集まる。

級友たちの視線を浴びて身をすくめた真衣だが、担任が

「こらこら、私語は慎みなさい」

と言いながらばんばんと手を打ち鳴らすと同時に、教室中の視線が再び教壇の方に向き直るのを感じて、ひとまずは胸を撫でおろすことができた。

「鈴木先生は、少し事情があつて、鈴木医院をおやめになりました。今は鈴木先生の代わりに弟さんが副院長として医院を取り仕切つてらっしゃいます」

担任は生徒たちの顔をぐるりと見回しながら言った。

途端に、再び教室のここから嬌声があがる。

「え〜。じゃ、秋の健康診断は鈴木先生の弟さんが担当になるんですか!？」

「やだ。鈴木先生の弟さんだったら、まだ三十歳くらいなんでしょ？ そんな若い男の先生に診てもらうなんて」

「そうよそうよ、鈴木先生だから健康診断も気にならなかったのに」

それに対して担任はもういちど両手を打ち鳴らして生徒たちを静かにさせ、軽く首を振つて言った。

「そのことなら心配しなくて大丈夫です。みなさん知つての通り、保健室の斉藤先生がおめでたのため、産休に入ることになっています。本当は三学期が終わつた時点でお休みされる予定になつていたのですが、斉藤先生がお休みの間、代わりに保健室を担当してくださいました。その手配がなかなかつかなくて、新学期が始まつても無理を押しして来てくださった。そこへ、鈴木先生が医院をお辞めになるといふお話があつたものだから、校長先生と教頭先生が是非にとお願いして、鈴木先生に保健室をみていただくことになりました。幸い鈴木先生と斉藤先生は懇意になさつておいででしたから、十日ほど前からお手すきの時間をみつけて連絡を取り合い、引き継ぎも滞りなく済ませられたそうで、今日から鈴木先生が保健室をまかされることになつたというわけです。みなさんもこれで安心でしょう？ 特に、運動部に所属している人は、怪我をしてもすぐに本職のお医者様に的確な処置をしていただけることになるから余計にね」

そう言つて担任が口を閉じると、教室中の生徒が安堵の溜息をついた。

だが、説明はまだ終わつたわけではなかった。担任は改めて軽く頷き、真衣の顔に視線を向けて続けて言った。

「それと、鈴木先生のご好意で、病気が完治するまでの間、鈴木先生がお車で佐藤さんを学校まで送り迎えしてくださることになりました。鈴木先生の診察によると、通学の間に体調を崩してしまう恐れが高いそうで、思わぬアクシデントに見舞われないよう万全を期した方がいいからということですよ。これは依怙贖戻とか特別扱いとかいうものではありませんから、みなさん、そのところ、妙な誤解をしないよう注意してください」

担任は真衣の顔から視線を外し、生徒たちの様子をぐるりと見渡してから、今度は美沙の方に目を向けて付け加へ言った。

「一学期の保健委員は杉下さんでしたね。幼稚園の頃からずっと同じクラスだと聞いていますし、席も隣どうしですから、佐藤さんの様子にはくれぐれも注意を払つてあげてくださいね。佐藤さん、少し遠慮がちなところがあるから、気分が悪くなつても自分から言い出さないかもありません。そんな時は杉下さんが、授業中でもかまいませんから、担当の先生に申

し出て、すぐに佐藤さんを保健室へ連れて行ってあげてください。——鈴木先生が佐藤さんのお家に往診された時、お見舞いに訪れていた杉下さんが鈴木先生のお手伝いをしたそうです。鈴木先生、随分と杉下さんのことを褒めておられましたよ。それと、これも鈴木先生からうかがったのですが、佐藤さんのお父様は外国へ出張中らしいですね。そのぶん、幼なじみの杉下さんが家族の代わりになって佐藤さんを支えてあげてください」

「はい、わかりました」

担任の言葉に、美沙は殊勝げに頷いた。その澄ました顔つきから推し量るに、美幸が今日から啓明の保健室をまかされる手筈になっていることを美沙が前もって知っていたのは明かだ。おそらく、美幸自身の口から聞かされていたのだろう。

だが、その事実を、今の今まで真衣は知る由もなかった。校医を辞した美幸がまさか保健室の主として学校でまで自分を管理のもとに置こうとしているなど、思ってもみなかった。

「よかったね、真衣ちゃん。学校でもママやお姉ちゃんと一緒にいられるから寂しくなくて」

困惑の表情で顔をこわばらせる真衣に向かって、隣の席に座っている美沙が、殊勝な顔つきから一転、いかにも面白そうな表情を浮かべ、声をひそめて言った。

「やめてよ、そんな言い方。誰かに聞かれたら……」

「いいじゃない、本当のことなんだから。それに、私、真衣ちゃんの面倒をみてあげてねって先生から直々に言われちゃったんだもん」

力なくかぶりを振る真衣の言葉を遮って、美沙はおかしそうに言った。

担任からの思いがけない説明に教室中がざわめいた雰囲気に包まれている中、誰にも美沙の声は聞こえないだろう。しかし、万が一にでも……。そう思うと真衣は気が気ではない。

いや、真衣が気になってならないのは、それだけではなかった。

（ママったら、先生たちにごまで話したんだろ？ 体の内側に本調子じゃないところがあるって先生たちに説明してみたんだけど、それって、普通に胃とか腸とかじゃなくて、おしっこに関係あるところのことなんだってごまで話しちゃったのかな。それとも、うまくぼやかしてくれたのかしら。通学の途中に体調を崩してしまう恐れが高いって、まさか、おもらしをしちゃうかもしれないってごまで話したわけじゃないよね？）そう、真衣が気になって仕方ないのは、そのところだった。

つい最近まで校医として学校に出入りしていた女医が生徒の父親と再婚するといった事情を話せば思春期の少女たちに無用の刺激を与えることになるかと判断してのことだろう、美幸が真衣の義理の母親になることを担任は敢えて説明しなかった。それと同時に、真衣の病気というのがどんな症状なのか、それも担任は曖昧にしか説明しなかった。そのせいで、美幸が教師たちにごまで話したのか、真衣にはまるで推察がつかない。かといって、美幸から何か聞かされているか美沙に尋ねるわけにもゆかない。

「ということ、佐藤さんと鈴木先生についてのお話は以上の通りです。あと、来月の下旬に行われる模試について——」

「あの、先生……トイレへ行ってもいいでしょうか。今朝、遅刻しそうになったものだから

慌てて家を飛び出して、そのままなんです」

担任が出席簿の縁で教卓をとんと叩いて別の話題に移ると同時に、教室の真ん中あたりの席に座っている生徒がおおずと手を挙げて遠慮がちに言った。

「あらあら、高校生にもなって何を言っているんですか。幼稚舎や初等部低学年の子供じゃないんですから、休憩時間にトイレへ行きそびれただなんて言い訳は通用しません。ホームルームが終わるまでの間くらい我慢なさい」

手を挙げた生徒に対して担任はびしやりと言った。

が、その直後、ふと何かに気づいた様子で真衣の方に向き直り、氣遣わしげな口調で話しかける。

「でも、佐藤さんはいいのよ。トイレへ……あ、いいえ、気分が悪くなったらすぐに言ってください。ホームルームの途中でも授業中でも、本当に遠慮することはありませんから。それと、さっきも話したけど、杉下さんは、佐藤さんが遠慮していると思ったら、代わりに申し出てあげてくださいね。そのまま佐藤さんがしくじったり……容態が悪くなったりしたら大変ですから」

最後の方は美沙に向かって言った後、担任は改めて真衣の顔をいたわるような目で見た。

途端に真衣が、はっと息を飲む。

途中で何度か慌てて言い直したことといい、どこか憐れむようなその目つきといい、担任が真衣の『容態』についてかなり詳しく知っているのは間違いないさそうだ。いや、担任だけではないだろう。美幸は、職員室にいた教師たち全員に真衣の『病状』を事細かに話して聞かされたに違いない。それも、自分の都合のいいように。

家からも学校からも、そして通学の途中からさえ、もはや逃げ道がどこからもなくなってしまうことを真衣は思い知らされざるを得なかった。

美沙が真衣の異変に気づいたのは、一時間目の授業が始まって三十分ほど経った頃のことだった。

いや、正確にいうと、それまでも真衣が何かに耐えるように拳をぎゅっと握りしめたり、どこか辛そうに肩で息をするといった仕草を目にしていたものの、わざと無視していたというのが本当のところだ。だが、もうそろそろいだろうと判断し、今更ながら気づいたかのように行動を起こすことにしたというわけだった。

「先生、ちよつとよろしいでしょうか」

美沙は、背中を丸めて唇を噛みしめている真衣の様子をちらちら窺いながら、さつと右手を挙げた。

「はい、どうかしましたか？」

それまで黒板に向かって板書をしていた教師がくると振り向き、美沙の顔を教壇から真つ直ぐ見て言った。

「あの、授業中に申し訳ないんですけど、佐藤さんの具合が悪いようなので保健室へ連れて行ってあげたいんです。許可していただけるでしょうか」

美沙は、いかにも級友の体調を案じる保健委員然とした殊勝な態度で応じた。

「あ、そうなんですか。私の方こそ気づいてあげられなくてごめんなさい。つい授業に夢中になっちゃって。もちろん、いいわよ。大変なことにならないうちに早く連れて行ってあげなさい」

教師は、机に突っ伏せんばかりにしている真衣を見て、少し慌てたような様子で美沙に指示した。しかし、どこか好奇に満ちた口調で『大変なことにならないうちに』と言ったことから察するに、この教師も真衣の『病状』がどんなものなのか美幸から聞かされているのは明かだ。

「わかりました。じゃ、佐藤さんを保健室へ連れて行きます。——さ、保健室へ行きましょう。鈴木先生に診てもらえば、すぐに具合もよくなるから」

美沙は教師に向かって恭しくお辞儀をしてから自分の席を離れ、真衣の傍らに立って優しく声をかけた。

が、真衣はなかなか椅子から立ち上がろうとしない。もともと弱気なところのある真衣だから、級友たちの視線を浴びながら教室をあとにするのが躊躇われるという理由もあるが、それ以上に、このまま、美幸が待つ保健室に連れて行かれてどんな目に遭わされるのかと思うと、美沙の言葉に易々と従うことはできない。

そんな真衣の態度に、美沙は腰をかがめ、真衣の耳元に唇を寄せてこんなふうに囁きかけた。

「いつまでも愚図愚図していると、真衣ちゃんがどんな病気で学校を欠席していたのか、みんなに話しちゃうわよ。ママ、先生方には本当のことを話したけど、今のところ、生徒には

伝わっていないみたいね。でも、真衣ちゃんがお姉ちゃんの言うことに逆らったりしたら、私からみんなに話すことにするわ。みんなに話して、真衣ちゃんのお世話を手伝ってもらおうのじゃないと、言いつけを守らない我儘な真衣ちゃんの面倒なんてみきれないもの」

その言葉に、一瞬だけ恨みがましい目で美沙の顔を睨みつけた真衣だが、結局は、のろのろと立ち上がり、悄然とした様子で自分の席を離れるしかなかった。

「すぐに保健室へ連れて行ってあげるから、心配しなくていいのよ」

ようやく立ち上がった真衣の肩を抱き寄せて、美沙は、いかにもしつかり者の保健委員という演技を崩さずに言った。真衣の肩を抱き寄せたのが、真衣のことを氣遣ったのころなどではなく、真衣が逃げ出すのを防ぐためなのを言うまでもないところだ。

\*

担任からの連絡事項が多くていつになくホームルームが長引き、ホームルームと一時間目の授業との間の休憩時間が殆ど取れなくなってしまうたせいでトイレへ行きそびれ（もともと、休憩時間がたっぷりあったとしても、トイレへ行くことは美沙に妨げられていたに違いないのだが）、限界近くまで高まった尿意のためにそれまでも覚束ない足取りだったのが、教室を出て廊下を進み、一階へおりの階段の途中にある踊り場で、とうとう真衣はそれ以上歩けなくなってしまうた。

「どうしたの、真衣ちゃん？　こんな所にいつまでもいたりしたら、恥ずかしい失敗をしちゃうんじゃないかな。保健室へ連れて行ってあげるっていうのは口実で、本当はトイレへ連れて行ってあげようとしてるんだってことは真衣ちゃんにもわかってるでしょ？　だから、ほら、おしっこで階段を汚しちゃう前にさっさと歩かなきゃ」

真衣の足が止まってしまった理由を充分に承知していながら、美沙は僅かに首をかしげて言った。

しかし、真衣は息も絶え絶えだ。

「や、やだ……もう歩けない。お腹が痛くて、もう歩けないんだから」

一時間目の授業に遅れるのを覚悟の上で美沙の目を盗んでもトイレへ行っていればこんなことにならずに済んだかもしれないが、そんなことをして後でどんな仕打ちを受けるかしたるものではないという怯えが先にたつて、次第に高まってきた尿意を堪えて授業に臨んだため、とうとう自分で尿意をコントロールできる範囲を超えてしまい、下腹部に痛みを覚えるまでになって、教室に戻ることもかなわず、トイレへ向かって歩き続けることもできないという惨めな状態に陥ってしまった真衣だった。

「そう。もう歩けないの。じゃ、仕方がないわね。ここで出しちゃいましょう」

真衣の力ない返答を耳にするなり、まるで逡巡するふうもなく美沙は言った。

「そ、そんな……」

「だって、仕方ないでしょ？」

「でも、でも、もうすぐ一時間目が終わって休憩時間になっちゃうんだよ。ここを通る誰か

が階段が濡れることに気づいたら……」

両脚の内腿を擦り合わせ、顔色を失って尿意を堪えながら、真衣は弱々しく首を振った。それに対して美沙はこともなげに

「そうね、いくらトレーニングパンツとオーバーパンツを重ね穿きしているといっても、おむつじゃないんだから、外へ漏れ出しちゃうでしょうね。だったら、こうすればいいじゃない」

と言うと、教室を出る時から持ってきていた布製の手提げ袋を真衣の目の前に突き出した。

「え……？」

思いがけない美沙の行動に、真衣は内腿を擦り合わせながら要領を得ない表情を浮かべて美沙の顔を見上げた。

「替えのパンツを入れてきた袋なんだけど、念のために、こんなのも持ってきたのよ。よかつたわ、無駄にならなくて」

きよんとする真衣の目の前で、美沙は手提げ袋を左手で底から抱え上げるようにして口を広げ、無造作に右手を突っ込むと、水玉模様の布地をつかみ上げた。

布地の端には、『さとうまい』という名前がピンクの糸で刺繍してあった。

「……！」

「そうよ、昨夜から真衣ちゃんにあててあげている布おむつよ。お家じゃおむつの赤ちゃんだけど、お外じゃパンツのお姉ちゃんの真衣ちゃんだから要らないかなと思っただけど、念のために持ってきておいたの。でも、まさか、本当に役に立つことになるなんてね」

美沙は、手にした布おむつをこれみよがしに振ってみせてから手提げ袋を踊り場に置き、おむつをいったん袋に戻すと、真衣のすぐ目の前に歩み寄り、制服のスカートをぱつと捲り上げた。

「な、なに……!？」

慌ててスカート裾を押さえた真衣だが、もう手遅れだった。トレーニングパンツの上に重ね穿きしたオーバーパンツが丸見えになってしまふ。

「あまり大きな声を出すと、職員室に聞こえるわよ。そしたら、何があつたのかと思つて先生方が来ちゃうんじゃないかな」

美沙は、悲鳴をあげかける真衣をやんわりと制し、丸見えになったオーバーパンツのウエスト部分に両手の指をかけて、トレーニングパンツと共に膝の上までさつと引きおろした。

再び喚き出しそうになつた真衣だが、悲鳴を聞きつけた教師が駆けつけ、恥ずかしい姿を見られたらと思うと、そこまで出かかった声を飲み込むしかなかった。

「それでいいのよ。いい子ね、真衣ちゃんは」

美沙はにまっと笑つて、踊り場に置いた手提げ袋に改めて右手を突っ込み、今度は布おむつを六く七枚まとめてつかみ上げたかと思うと、それを手早く広げて、膝のすぐ上まで引きおろしたトレーニングパンツの内側に重ね入れた。

「……!？」

真衣の口から声にならない悲鳴が漏れる。

美沙は、布おむつがトレーニングパンツの中で丸まってしまうまいよう両側の端を軽く引



っ張るようにしながら、オーバーパンツとトレーニングパンツをまとめて手早く引き上げた。そうすると、再び真衣の下腹部はパンツに覆い隠されるのだが、トレーニングパンツのバック部分の厚みに布おむつの厚みも加わって、オーバーパンツがますます丸く膨らみ、それが普通の下着などでないことが一目でわかるようになってしまふ。しかも、トレーニングパンツもオーバーパンツも股がみは浅くないのだが、美沙の重ね入れ加減のためだろう、布おむつの両端がオーバーパンツのウエスト部分からはみ出て名前の刺繍が見え隠れし、真衣の羞恥をこれでもかと煽りたてるのだった。

「さ、これで、おもらしをしちゃっても階段を濡らさずにすむわよ。トレーニングパンツもオーバーパンツもおむつカバーみたいに防水性の生地できていてるわけじゃないけど、中にこれだけ布おむつを重ねておけば、そう簡単におしっこが沁み出してくることはない筈だもの」

美沙は、ももこに膨らんだオーバーパンツの上から真衣のお尻をぼんと叩いてから、ようやく制服のスカートをおろした。

だが、これで済んだわけではない。

本当の恥辱はこれからだ。

「だから、安心して、さ、いらつしやい」

美沙は自分のセーラー服のリボンをすつと緩め、手早く胸当てを外すと、胸元を大きくはだけ、美幸からプレゼントしてもらった授乳用ブラのカップをおもむろにずりおろした。

と、セーラー服の胸元から、張りのある乳房がいささか窮屈そうに現れ、ぴんと勃った乳首が丸見えになる。

「こ、こんな所で……!？」

真衣は思わず体を退いた。

だが、いつのまにか壁際に追い込まれていたようで、一步も後ずさりできない。

「おしっこを我慢しすぎてお腹が痛いんでしょう？ それで、もう、トイレまで歩くこともできないんでしょう？ だから、私がちゃんとしてあげたんじゃない。ここでおしっこを出しちゃっても大丈夫なように、トレーニングパンツの中におむつを重ねてあげたんじゃないだから、さ」

美沙は、怯えきった表情で弱々しく首を振ることしかできないでいる真衣の後頭部を右手の掌でそつと包み込み、大きくはだけただけ自分の胸元に引き寄せて、階段を一段だけ昇った。もともと真衣よりも頭一つ背の高い美沙がそうすると、美沙の胸元と真衣の顔とが殆ど同じ高さになる。

美沙は右手で真衣の頭を手前に引き寄せながら、左手を裾の方から自分の制服に差し入れて、あらわになった乳房を下から支え待ち、ぴんと勃った乳首を真衣の唇に押し当てた。

「いや！ やだつてば、こんな所で……」

首の動きを封じられ、唇をこじ開けるようにして美沙の乳首が入ってくるのを感じながら、真衣は喘ぐように言った。

「駄目、いつまでも駄々をこねてないで、おしっこをするのよ。早くしないと、授業が終わって、みんながここを通るのよ。みんなが見ている前でおむつとトレーニングパンツをおし

ついで汚したいの？」

美沙は、自分の乳首を真衣の口にくまませ、真衣の耳元でねっとり絡みつくように囁きかけた。

「いや、そんなの、いや……」

真衣は、よく注意していないとわからないほど小さく首を振った。言われなくても、いつまでもそうしていられるわけがないことも痛いほどわかっている。わかっているのだけけれど……。

「そうよね、そんなの、いやよね。だから、ほら」

美沙は、真衣に自分の乳首を咥えさせたまま軽く胸を反らせた。

一瞬だけ間があって、真衣の唇がおずおずと動き始める。

「そう、それでいいのよ。お姉ちゃんのおっぱいをたっぷり吸って、たくさんおしっこするといいわ。真衣ちゃんはママやお姉ちゃんのおっぱいを吸いながらじゃないとおしっこもできない甘えん坊さんなのよ。高校の制服を着ている、赤ちゃんそのままオーバーパンツとトレーニングパンツと布おむつでお尻をくるんでいる甘えん坊さんなのよ。だから、お姉ちゃんがおっぱいをちゅうちゅうさせてあげている間におしっこを出しちゃおうね」

もう押さえつけていなくても大丈夫と判断した美沙は、真衣の後頭部から右手を離してそのままそつ

とおろし、

背中を優しく

くとんとん

と叩いて言

った。

「そうし

て、真衣が

躊躇いつつ

も微かに頷

くのを見て

取ると、右

手を更にお

ろし、今度

は、スカー

トの裾をそ

ろりと掻き分けて、ぷっくり膨れたオーバーパンツの股間に掌をそつと押し当てた。

「あ……」

真衣の口から細かい喘ぎ声が漏れた。

けれど、美沙の乳首から口を離す気配はない。

「学校へ来る時はパンツのお姉ちゃん。それも、きちんと制服を着た女子高生。でも、結局それは見た目だけだったわね。本当は真衣ちゃん、お家にいる時も、よそにお出かけする時



も、学校へ行く時も、いつもいつも、おむつの赤ちゃんのままなのよ。だから、恥ずかしがらないでおしっこしちゃおうね。大丈夫よ、トレーニングパンツの中のおむつがちゃんと吸い取ってくれるから」

美沙は、それまで自分の乳房を支え持っていた左手を制服の裾から抜き、人差し指と中指で真衣の喉を撫でた。

「やだ、そんなこと言っちゃ。いじわる、美沙お姉ちゃんのいじわる……」  
拗ねたように、けれど聞きようによっては甘えてでもいるかのようにそう言う真衣の腰がびくと震えた。

その直後、美沙の右手の掌に微かな感触が伝わってくる。

ニットのオーバーパンツ越しに伝わってくるそれは、生温かい液体が真衣の恥ずかしい部分から溢れ出して布おむつに吸い取られながらじわっと広がってゆく感触に他ならなかった。「意地悪なんかじゃないわよ。本当のことしか言っていないんだから」

美沙はオーバーパンツから手を離し、もういちど真衣の背中を撫でさすって、微かに笑いを含んだ声で囁きかけた。

「だって、だって……」

真衣は、自分の方から体をすり寄せるようにして乳首を吸いながら、上目遣いに美沙の顔を見て言った。

「いいから、今はおしっこを出しちやいなさい。授業が終わるまでに出しちやって、パンツを替えに保健室へ行かなきゃいけないんだから。真衣ちゃん、こんな格好を誰かに見られるのはいやなんでしょう？」

美沙は、それまで指先で真衣の喉を撫でていた左手をそっと広げ、今度は真衣の頬を掌で包み込んで言い、それに対して真衣がいかにも恥ずかしそうに目をそらすのを見て、悪戯めいた口調で付け加えた。

「でも、お姉ちゃんはそれでもいいんだけどな。いっていうより、こうしてるところ、誰かに見てほしいくらいなんだけどな。だって、そうしたら、お姉ちゃんと真衣ちゃんとの関係を誰にも遠慮せずにおおっぴらにできるんだもの」

「いじわる。お姉ちゃんてば、本当にいじわるなんだから……」

真衣は『いじわる』という言葉を繰り返し口にしつつも、美沙の乳首をちゅぱちゅぱ音をたてて吸うのはやめなかった。

もちろん、その間、おしっこもとめどなく溢れ出ておむつを濡らし続けている。

「また、そんなことを言う。でも、そんな真衣ちゃんが可愛くてたまないんだけど」  
美沙はくすつと笑って真衣の頬を指先でつんとつついた。

こつこつという硬い足音が階下から聞こえてきたのは、まさにその時だった。

はっとした様子で真衣は美沙の乳首から口を離そうとした。

しかし、美沙が

「駄目よ。まだおしっこを出しきっちゃってないでしょ？」

と、やんわり叱りつけるように言って却って強く体を抱き寄せるものだから、その場から逃

れることはできない。

「や、やだ……」

真衣は乳首を咥えたままのくぐもった声で呻いた。

「平気よ。こうしておけば、真衣ちゃんが何をしているかわからなくなるから」

小刻みに肩と腰を震わせる真衣の体を抱きすくめたまま、美沙は微妙に立ち位置を変えた。こうすると、階段を昇ってきた者が二人に目を向けても、美沙の広い背中陰になって、真衣が美沙の乳首を口にふくんでいるところまでは見えない。

「本当？ 本当に平気？」

真衣はいかにも不安そうな面持ちで美沙の顔を見上げ、助けを求めるように頬を乳房に押し当てた。

それは、まるで、人見知りの激しい幼児が初めて訪れる場所で誰かが近づいて来る気配に怯え、母親の胸にすがりつくかのような仕草だった。

「大丈夫だから、お姉ちゃんにまかせておきなさい」

美沙は真衣の髪をそつと撫でつけた。

その間にも、足音は次第に大きくなってくる。

そうして、いよいよ。

「あら、こんな所で何をしているの？」

二人のすぐ近くでびたつと足音が止まり、代わりに、訝しげな声が飛んできた。

声の主は担任の教師だった。

「はい、あの、佐藤さんが授業中に気分が悪くなったから、保健室へ連れて行くところなんです。ただ、途中でますます具合が悪くなっちゃったらしく、歩くのもやつとみたいだから、介抱してあげているんです」

美沙はまるで慌てる様子もなく、わざとおおげさな身のこなしで真衣の背中をさすってやりながら、しれっとした顔で応じた。

「そうだったの。だったら、職員室に残っている先生方をお願いして、佐藤さんを保健室へ連れて行くのを手伝っていただくようにしましょうか？ 少しでも人手があつた方がいいでしょう？」

美沙の背中に阻まれて、真衣が実際は美沙の乳首を口にふくんで乳房に顔を埋めているところまでは見えない。窺い知ることができるのは、真衣が踊り場の壁にもたれかかるようにして顔を美沙の胸元に押し当てているらしいということくらいだ。担任は美沙の言葉を簡単に信じ込んで、いかにも心配そうに言った。

「あ、いいえ、大丈夫です。もうかなりましになってきたみたいですから。そうよね、真衣ち……佐藤さん？」

美沙は落ち着き払った物腰で応え、真衣の背中をとんとんと叩いた。

「だ、大丈夫です。お姉ち……杉下さんが介抱してくれたおかげで大分よくなりましたから。……杉下さんに保健室まで連れて行ってもらえば、もう平気です」

美沙に促されて、真衣は途切れ途切れに応えた。

「そう。なら、いいんだけど。じゃ、私は次の授業の準備で資料室へ行かなきゃいけないか

ら、あとのことは杉下さん、お願いね」

真衣の声がくぐもっていたが、担任は、貧血ぎみになった真衣が倒れるのを防ぐために美沙の胸元に顔を押し当てているせいだろうと勝手に思い込み、まるで怪しむふうもなく、あつさり頷いた。

と、踊り場に置いたままになっている手提げ袋が担任の目に留まる。美沙が布オムツを取り出すために広げた口がそのままだから、手提げ袋の中は丸見えだ。

「これは……」

手提げ袋の中には、替えのトレーニングパンツや、美沙がつかみ上げた残りの布おむつが入っていた。それを目にした担任の口を困ったような声が衝いて出る。

その瞬間、担任に何を見られたのか、真衣にもおおよその見当がついた。

だが、担任は慌てて声を飲み込むと、僅かな間を置いて

「……それじゃ杉下さん、佐藤さんのことはくれぐれもよろしくね」と言い残し、さつとその場を離れた。

「もういいかな。おしっこはもうみんな出ちゃったみたいね」

真衣と体を密着させていた美沙は、担任の姿が階上に消えるのとほぼ同時に真衣の腰がぶるつと震えるのを感じて、これ以上はないくらい優しい口調で念を押すように問いかけた。

そうして、美沙の乳首を咥えたまま喘ぐように熱い吐息を漏らしている唇をそつと押し離し、左手で真衣のスカートの裾をそつと捲り上げると同時に、右手の掌を両脚の間、普通のショーツならちようどクロッチ部にあたるところに押し当てた。

「あらあら、中に布おむつを重ねておいたから大丈夫かなと思っていたけど、おむつカバーと違って、トレーニングパンツじゃおしっこが沁み出すのを防ぐのは無理だったみたい。このままだとせつかくおむつが吸い取ってくれたおしっこが漏れてきちゃうから、早く保健室へ行ってママに取り替えてもらわないといけないわね」

掌を押し当ててすぐ、おしっこがオーバーパンツの表面まで沁み出しているのが感じ取れた。しかし美沙は何度も右手を離したり押し当てたりを繰り返し、わざと手間をかけてパンツの様子を探ってから言った。

「が、じきに思い直したようにおおげさな仕草で首を振り、真衣の顔を見おろしてこう告げる。」

「あ、でも、その前に真衣ちゃんにしてもらわなきゃいけないことがあったわね。お姉ちゃんが調べてあげただけじゃ思い違いってこともあるから、真衣ちゃん本人から教えてもらわなきゃいけないんだったわ。どう、真衣ちゃん？ おしっこしちゃったの？」

だが、真衣は何も応えられない。学校の階段の踊り場で、そんなことを聞かれても応えられないわけがない。

しかし、美沙は澄ましたものだ。

「いいわよ、だんまりを続けたいなら続けていても。ただ、もうすぐ授業が終わって、みんながここを通るのよ。その頃には、おしっこがオーバーパンツの表面から雫になってぼたぼた滴り落ちていられるかもしれないわね。いいのね？ おしっこを漏らしてるところを同級生や

先輩たちに見られても」

と冷たく言い放つと、手の甲を腰に押し当てて真衣の目を見据える。

「い、いや……そんなの、いやっ」

美沙に言われて真衣は身をすくめた。

「じゃ、ちゃんと教えられるわね。あ、そうそう。どうやって教えればいいか、それもわかってるでしょうね？ 夜のうちに何度も同じようにしてママやお姉ちゃんにおしっこを教えてくれたんだから、まさか忘れてないわよね？」

美沙は嵩にかかって言った。

「どうやっておしっこを教えればいいかって……」

一瞬、要領を得ない顔になる真衣。

だが、美幸にお腹を叩かれ子守唄を聴かされながら寝かしつけられた後、今朝になるまで何度もおむつを濡らすたびマイクを通して二人を呼ばされたあの屈辱に満ちた光景が脳裏にありありとよみがえってくる。

「忘れてなんかいないわよね？」

美沙は有無を言わさぬ調子で決めつけた。

「……」

為すすべなく押し黙ってしまふ真衣。

「忘れてなんかいないわよね？」

美沙はしれっとした顔で、けれど執拗に繰り返した。

追いつめられて、とうとう真衣は微かに、それこそ、瞬きしている間に見落としてしまいうるほど僅かに頷いた。

そうして、弱々しく息を吸い込むと、

「……おぎやあ……」

と、昨夜から今朝にかけて何度も繰り返したように、赤ん坊の鳴き真似をしてみせる。「それでいいのよ。おしっこをちゃんと教えられるなんて、本当に真衣ちゃんはいい子だわ」

美沙は真衣の頭を何度も撫でながら、含み笑いを漏らして言った。

\*

保健室の入り口に取り付けてあるインターフォンのボタンを押すと、少しだけ待って

『お待たせしました。クラスと氏名をお願いします』

という事務的な声がスピーカーから流れてきた。

それに対して

「一年三組の杉下美沙です。同じクラスの佐藤真衣さんが気分が悪いようなので連れてきました」

と、こちらも事務的に美沙が応じると、

『わかりました。入ってください』

という返答があつて、ドアのあたりからカチャリという微かな機械音が聞こえた。

保健室の中では、様々な診察や相談、カウンセリングが行われる。時には、上半身のみならず下半身まで裸になることもあるし、他人には聞かせられないような深刻な相談が持ち込まれることもある。そういった生徒のプライバシーを守るため、啓明女学院では、担当教諭の許可がないと保健室に入室できないようになっていると共に、保健室内の話し声が外に漏れないよう、厳重な防音措置が施されているのだ。そのため、保健室に用がある者は、まずインターフォンで来意を告げ、中にいる教諭に遠隔操作式の電磁錠を開けてもらうという手順を踏む決まりになっている。

美沙が押し開いたドアから保健室の中に足を踏み入れた真衣が最初に見たのは、白衣をまとった美幸の姿だった。

「あら、まだ一時間目も終わってないのに、早速なの？」

おどおどした様子で入り口の近くに佇む真衣の姿を目にするなり、もう誰かに聞かれる心配もなくなったためだろう、インターフォン越しに聞こえた事務的な声とは打って変わって、くだけた口調で美幸は言った。いかにも呆れたような様子なのは、美沙が真衣を連れてきた理由をすっかりお見通しだからに違いない。

「そうなのよ。お家にいる時と同じ、学校でも二時間くらいが精一杯みたい」

こちらも廊下からインターフォン越しに話していた時の殊勝な様子はすっかりなりをひそめ、馴れ馴れしい調子で美沙が短く応じた。真衣がこれまでに数え切れなくらい何度も恥ずかしい粗相を繰り返したせいで、たったそれだけの説明で全てが通じてしまう。

「やれやれ、困った子だこと。それで、廊下や階段は濡らさなかったの？」

「それは大丈夫よ。ほら、こうしてあげたから」

美沙は、入り口の近くに立ちすくむ真衣のスカートをぱつと捲り上げた。

股間のあたりがじっとり濡れたオーバーパンツと、パンツの股がみから端だけが見えている布おむつがあらわになる。

「ああ、そういうことなのね。いいわ、じゃ、パンツからぼたぼた滴り落ちるようになる前に替えてあげましょう」

美幸は一目で事情を察し、にっと笑って頷いた。

「でも、困ったな。一応、替えのトレーニングパンツは持ってきたけど、久しぶりの登校早々トイレに間に合わなかったくらいだから、これからどうなるか心配で。授業中、私が気がつかないままだったら、教室の椅子に座ったままとうとう我慢できなくなってしくじっていたかもしれないのよ。そんなことになったら、トレーニングパンツとオーバーパンツじゃ、おしっこを吸い取れるわけがないし。今みたいにトレーニングパンツの中に布おむつを重ねるにしたって、あと一回分しか残ってないんだもの」

大きく頷く美幸に向かって、口では『困ったな』と言いながら実はまるで困った様子もみせずに美沙が言った。

それに対して、執務机の椅子に腰かけていた美幸がおもむろに立ち上がりながら言った。「別に、困ることなんてないわよ。こっちへいらっしやい。ちょうど乾燥も終わったところ

だから」

「え？ 乾燥って？」

美沙が聞き返した。

だが、真衣に気づかれないよう互いに目配せを交し合ったところを見ると、美幸となにやら前もって打ち合わせを済ませているのは明かだ。

「ほら、こっちよ」

執務机から離れた美幸は足早に室内を横切り、奥まったところにある目立たないドアを引き開け、美沙に向かって目で合図を送った。

「ママは何をしたのかしら。ほら、真衣ちゃんも一緒に見に行きましょう」

合図を受けた美沙は真衣の手首をつかんで、強引に奥のドアの前に連れて行った。

奥まったところにあるドアの先は、薬品棚や、健康診断の時に使う身長計や体重計、肺活量を測定する器具等を収納しておく器具庫になっていた。

だが、その一角に新品の洗濯機が置いてあるのがなんとも場違いな感じがして、美沙に促されて器具庫の中を覗き込んだ真衣は思わず首をかしげてしまう。

「授業が終わっても、ママは部活がみんな終わるまで保健室にいなきゃいけないの。特に運動部の生徒が練習中に怪我をすることがあるからね。それに、美沙お姉ちゃんも自分の部活があるから、真衣ちゃんをお家に連れて帰ってあげられない。だから、私たちがお家に帰るのは、どうしても七時前くらいになっちゃうの。でも、そうすると、朝に洗濯物をして干してきたりすると、お家に帰った頃はとっくにお日様も沈んでいるから、せつかく干してきた洗濯物がまた湿気を吸っちゃってるのよ。寝る前に出た洗濯物だったら全自動の洗濯機に放り込んでおけば朝になったら乾燥も終わってるけど、お出かけ前ギリギリに出た洗濯物はそうもいかないの。そのくらいのこと、真衣ちゃんにもわかるわよね？」

真衣の疑念を察した美幸はそう説明して、家にあるのと同じように乾燥機能の付いた真新しい洗濯機の前に歩み寄った。

そうして、真衣の顔を見据えて意味ありげに微笑み、こんなふうに問いかける。

「もちろん、お利口さんの真衣ちゃんだもの、朝のお出かけ前ギリギリに出る洗濯物っていうのが何なのか、それもわかるわよね？」

「あ……」

一瞬は怪訝な表情を浮かべた真衣だが、すぐに美幸が言わんとしていることに見当がついた。

「そうよ。だから、お家から持ってきて、学校でお洗濯をすることにしたの。ここに洗濯機を置かせてもらうことについては、前もって校長先生のお許しもいただいているから心配しなくて大丈夫よ」

美幸は改めてにっこり笑い、洗濯機の扉を引き開けた。

洗濯機の中には、昨夜から今朝にかけて真衣が汚した布おむつの山ができていた。

「美沙お姉ちゃんの妹さんからお下がりのおむつを貰えたのはいいけど、枚数がギリギリなのよ。本当の赤ちゃんだったら一度にあてるのはせいぜい三枚くらいだけど、真衣ちゃん



場合は一度に十枚近くあてなきゃいけない上に、二時間に一度はおむつを汚しちゃうから、汚したらずぐ洗濯しておかないと、一日もつかどうかってところかな。だから、汚れたおむつをそのままお家に置いとけなくて、洗濯機を置かせてもらえるよう校長先生にお願いしたのよ」

真衣がおむつを汚すようになってしまったのは自分の企みのせいなのに、そんなことはまらしておくにも出さず、美幸はどこか恩着せがましい口調で言った。

「よかったね、真衣ちゃん。この洗濯機なら、洗濯から乾燥まで二時間くらいで済んじゃうよ。これなら、学校でもパンツやおむつを幾ら汚しちゃっても大丈夫ね」

洗濯機の中から布おむつを何枚か取り出しながら、美沙が明るい声で言った。

そして、おむつの山の下の方に埋もれているカラフルな布地に気づくと、尚さら声を弾ませる。

「あ、おむつカバーも洗濯してたんだ。そうだよね、おむつカバーも汚れたらすぐ洗濯しとかないとシミになって取れなくなっちゃうもんね」

美沙は弾んだそう言うのと、さっと広げた布おむつを自分の肘にかけ、改めて洗濯機に右手を突っ込んだ。

美沙が洗濯機から取り出したおむつカバーは二枚。一枚は、昨日の夕方から今朝まで真衣のお尻を包み込んでいた、横当てのおむつを使うタイプのおむつカバー。もう一枚は、真新しい股おむつ用のカバーだ。

「あれ？ こっちも洗濯したの？」

美沙は、一枚目のおむつカバーを布おむつに重ねて肘にかけ、後から取り出した股おむつ用のカバーを両手で広げて美幸に尋ねた。

「そうよ。汚れていたのは昔ながらのおむつカバーだけなんだけど、股おむつ用の方も水通しをしておきたかったから。それに、洗濯をして乾燥すると生地によっては縮むことがあるから、そのへんがどうなのか確かめたかったっていうこともあるから。——でも、これなら大丈夫ね。さすが、しっかりした縫製だわ」

美幸は、美沙の手から股おむつ用のカバーを受け取り、サイズや生地の上れ具合を確認して満足そうに頷いた。

「あ、そういうことだったんだ」

美幸の説明に美沙も頷き返し、きらりと瞳を輝かせて言った。

「じゃ、どうせだから、そのおむつカバーを使って真衣ちゃんにはきちんとおむつをあててあげた方がいいんじゃないかしら。お出かけの時はパンツってことになってるけど、現に今だって、トレーニングパンツの中に重ねたおむつを汚しちゃってるんだし。だいいち、パンツだけだったら、私が気づかないうちに授業中にしくじって、おしっこが椅子や床をびしょびしょにしちゃうかもしれないじゃない？ そんなことになったら教室中が大騒ぎになって、先生たちに迷惑をかけちゃうもの。トレーニングパンツの中におむつを重ねても、時間が経ったら結局おしっこが沁み出してきちゃうんだから、おむつカバーを使ってきちんとおむつをあててあげた方が真衣ちゃんのためになるんじゃないかしら」

「ま、待ってよ。そんな、学校でもおむつだなんて、そんな……」

「そうね、その方がいいかもしれないわね。パンツだったら、絶対に失敗しちゃういけないって精神的な負担になるけど、きちんとおむつをあてておいてあげれば、いつしくじってもいいやつて気分が楽になって、却っておしっこを我慢できるかもしれないわね。実際しくじっちゃっても、保健室に来れば誰にも知られずに取り替えてあげられるんだし。どうせ洗濯機も用意したんだから、おむつを汚しても、そのたびに洗って乾かしてあげられるしね」

顔色を失って首を振る真衣の言葉を遮って美幸が同意した。

「じゃ、決まりね。昨日の夕方、ママ、説明してくれたよね。股おむつ用のカバーの方が少しは見た目がすっきりしているから、もしもお出かけの時に股おむつをあててあげるんだったら、こっちの方がいいのよって。だから、そっちにしましょう。昨夜のおむつカバーと見た目がどれくらい違うのか興味もあるし」

言葉を遮られてもまだ弱々しく首を振る真衣のことなどまるで眼中にないかのようには美沙は決めつけると、いったん美幸に手渡した股おむつ用のカバーを再び手にして踵を返し、窓寄りの場所に二つ並んで据え付けてあるベッドに向かって歩き出した。

「さ、真衣ちゃんも行くのよ。いつまでも濡れたおむつとパンツのままじゃ体によくないわ」

美沙が歩き出すと同時に、美幸が真衣の背中をぼんと押した。

\*

美沙が手前のベッドにおむつカバーを広げ、その上に洗濯したての布おむつを重ねる様子を窺い見ながら、美幸は、ベッドから少し離れた所に立たせた真衣のスカートに指をかけ、サイドフアスナーをさっと引き下げた。

ウエストの締めつけがなくなったスカートはなんの抵抗もなくぱさっと床に落ち、今にもおしっこの雫が滴り落ちんばかりになっているオーバーパンツが丸見えになる。

「さ、美沙お姉ちゃんがおむつの用意をしてくれている間にママがパンツを脱ぎ脱ぎさせてあげるわね。あ、その前に靴を脱ぎ脱ぎさせてあげなきゃいけないんだっけ。——でも、こうしていると、先週のことを思い出しちゃうわね。お買い物に出かけた時とか、パパをお見送りに空港に行った時も、ママはこんなふうにして真衣ちゃんのパンツや紙おむつを脱がせてあげたんだっただわよね」

美幸は膝を折ってその場にしゃがみこみ、ショッピングセンターや空港のトイレでの恥ずかしい場面を真衣に思い出させながら学校指定の革靴を右足、左足と順番に脱がせ、続いてオーバーパンツのウエスト部分に指をかけて、足首のすぐ上のところまで引きおろした。そうして、靴を脱がせたのと同じ順序で足を交互に上げさせ、ぐっしより濡れた布おむつやトレーニングパンツごとオーバーパンツを脱がせてしまう。

その後、美幸は再び器具庫に向かい、洗濯機の横に置いておいたバケツの中に脱がせたばかりのパンツや布おむつを滑り込ませてから、ぐるりと壁際に沿って歩き、幾つか並んでいる収納棚の内の一つの前に立って、一番上の小振りの引出を開けると、家から持ってきていたお尻拭きの容器と塗り薬の容器を取り出して、おむつの用意を終えたばかりの美沙に手

渡した。

「まさか、学校でもこれを使うことになるなんて思ってもみななかったわね。でも、トイレまで我慢できなく階段の途中でおもらしをしちゃうような真衣ちゃんだもん、まだパンツのお姉ちゃんにはなれそうにないから仕方ないわね」

保健室のベッドの上に広げられた布おむつとおむつカバーを目の前にし、下半身を丸裸に剥かれて唇を噛みしめるばかりの真衣に向かって少しばかり皮肉めいた口調で言っ、美沙は保健室の床に膝立ちになった。

「ん……」

もう数え切れないくらい繰り返し経験してきたのに、決して慣れることのないひんやりした感触が下腹部から伝わってきて、か細い喘ぎ声が真衣の口を衝いて出る。

それに続いて、ねっとりした塗り薬を二種類、恥ずかしい部分に丹念に塗り込まれる、羞恥きわまりないのに、どこかぞくぞくするような感触。

教室に比べ幾らか明るさを抑えた照明になっっている保健室の中で繰り返し広げられる一連の出来事。それが、どこか遠い世界の情景みたいに感じられて仕方ない。けれど、それは、紛うことなき自らの身の上で起こっている羞恥と屈辱に満ちた出来事に他ならない。

丹念に薬を塗り込まれた後、真衣は二人に体を抱え上げられるようにして、おむつの上にお尻をおろしてベッドに横たわらされた。

「や……」

こちらでも決して慣れることのない、布おむつの想像以上に柔らかな肌触り。

「すぐに済むからおとなしくしててね、上はセーラー服だけど、下はおむつのおもらし赤ちゃん」

美沙は真衣の左右の足首を左手で一つにまとめつつかみ、高々と差し上げた。そうして、お尻の下に敷いてある布おむつを、わざと丁寧に一枚ずつ両脚の間を通して、その端をおへソのすぐ下まで持ってゆき、じつくり時間をかけて真衣の下腹部を自分の妹からのお下りの柔らかなおむつで包みこんでゆく。

と、布おむつを半分ほどあてたところで、壁に取り付けてある小振りのスピーカーから一時間目の終わりを告げるチャイムが聞こえ、それに続いて、おむつを全部あて終えて真衣の足をベッドにおろしたところで、今度はインターフォンの呼び出し音が鳴った。

「はい、どうしました？」

ふと手を止めた美沙の顔にちらと視線を走らせて、美幸が、執務机の上に置いてあるインターフォンに向かって話しかけた。

『一年三組の園田です。同じクラスの佐藤さんの容態を確認に伺いました』

美幸の問いかけに応じて返ってきたのは、真衣たちのクラスの委員長・園田茉莉の落ち着いた声だった。

「わかりました。すぐに鍵を開けるから、少しだけ待っていてください」

美幸も落ち着いた声でそう応え、美沙の方に振り返って目配せをした。

それに対して美沙も無言で頷き返し、持ち上げかけていたおむつカバーの横羽根をそのま

まにし、真衣のお腹の上に毛布をかけて下半身を隠してしまう。

その間に美幸は執務机から離れて器具庫のドアを閉め、そのすぐそばに落ちていた真衣のスカート拾い上げると、ベッド脇に置いてある付き添い用の椅子の背もたれに掛けて、収納棚の引出がちゃんと閉まっていることを確認してから、遠隔操作式の鍵を開けるボタンを押した。

「いいですよ、入ってください」

カチャリという音が聞こえて鍵が開いたのを確認し、美幸は改めてインターフォンに向かって言った。

「失礼します」

待つほどもなくドアが開いて、縁の太い眼鏡に三つ編みのお下げ髪といういかにも優等生然とした茉莉が姿を見せ、美幸に向かって恭しくお辞儀をしてから、つかつかとベッドに近づき、横たわっている真衣の顔をそっと見おろして確認するように言った。

「熱があるんでしょうか。なんだか、佐藤さん、顔が赤いみたいですけど」

真衣の顔が赤いのは、学校の保健室のベッドでおむつをあてられるという想像もできないほどの羞恥に満ちた仕打ちのせいだ。しかも、かろうじて毛布一枚だけで隠されているとはいえ、おむつをあてられる途中の下腹部を級友の目にさらしているのだから尚更だった。が、茉莉が本当の理由に気づく由もない。真衣の体調を気遣って発したその言葉が、ますます真衣の恥辱を煽りたてる。

「ええ、少し熱が高くなっただけみたいね。私としては、もう少し、ここで様子を見た方がいいと思っっているの」

美幸はさりげなく茉莉に話を合わせ、胸の中で舌を突き出しながら、事務的な口調で応えた。

「そうですか。じゃ、次の授業は体育なんですけど、見学も無理ですね。わかりました。体育の先生には、佐藤さんが欠席すること、私から伝えておきます」

眼鏡越しに尚も真衣の顔色を窺いつつ、茉莉が言った。

「ええ、そうしてあげて。一時間ゆっくり休めば元気になるでしょうから」

悠揚迫らぬ様子で美幸は頷き、ベッドの横に佇んでいる美沙の方に向き直って言った。

「それじゃ、杉下さんも授業に戻ってください。佐藤さんのことは私にまかせてもらえばいいから」

「わかりました。体育の授業が終わったらすぐに着替えて、佐藤さんを迎えにきます」

本当は美幸と一緒にずっと真衣の世話をしていたくてたまらないが、必要以上に保健室に居残ったりすれば茉莉に怪しまれるかもしれない。咄嗟にそう判断した美沙は美幸の言葉に素直に応じることにした。お楽しみはこれからだ。今はまだ、三人の関係を誰にも気づかせないわけにはゆかない。

\*

美沙と茉莉が出て行くのを待って、美幸は、保健室の窓にかかっているブラインドを開けた。

窓から見える校庭は、春盛りの太陽の光を浴びて眩いほどだ。が、保健室の方は、ブラインドを全て開け放つても方角の都合で直射日光が差し込まず、室内の明るさが幾らか増しただけだった。しかし、美幸がブラインドを開けたのは室内を明るくするためではなく、保健室から校庭をよく見渡せるようにするためだった。校舎と校庭とは木々の植え込みで隔てられているものの、季節柄まだ葉完全には生い茂っていないため、ブラインドを開けてしまえば意外に視界が開けるのだった。

だが、それは、逆に言えば、校庭から保健室の様子を窺い知ることができるといにもなる。

「閉めて、早くブラインドを閉めて……」

もう少しで美沙以外の級友にまでおむつ姿を見られるところだった恥辱にまだ頬を赤く染めながら、真衣はベッドの上で首を振った。

「だって、美沙お姉ちゃんが保健室からいなくなっちゃって寂しいでしょう？ でも、次の授業は体育らしいから、こうしておけば、元気に走り回るお姉ちゃんの姿を見ていられるよ。真衣ちゃんが寂しがらないようにお姉ちゃんの方からも手を振ってくれるかもしれないじゃない。だから、しばらくこうしておこうね」

ブラインドを開けるためにそれまで窓際に立って真衣に背中を向けていた美幸だが、視界を遮らないようベッドをはさんで窓と反対側に移動しながら、むずがる幼児をあやすように言った。

そうこうしているうちにも着替えを終えた級友たちが二人三人と校庭に姿を現し、最後に、美沙と茉莉が少し遅れて級友たちの輪に加わるのが、窓ガラス越しに見えた。

真衣がベッドの上で身をすくめると同時に、二時間目の始まりを告げるチャイムが鳴った。体育を受け持つ教師が大きく右手を挙げてホイッスルを吹き鳴らし、それまで思い思いに体を動かしていた生徒たちが一斉に駆け出して校庭の真ん中に整列する。

「さ、体育の授業が始まったことだし、真衣ちゃんはおむつをあてちゃおうね。美沙お姉ちゃんが見えるから寂しくなんてないでしょう？」

美幸がわざと優しく微笑みかけて言い、真衣のお腹にかかっている毛布に手をかけた。

「だ、駄目。これを取っちゃ駄目。みんなにおむつを見られちゃう。だから取らないで。お願い、先生」

真衣は慌てて両手で毛布の端をつかんだ。保健室のベッドに横たわった状態で美幸のことを『ママ』と呼ぶのも躊躇われて、今にも泣き出しそうな声で懇願する。

「あら、また、私のことを『先生』だなんて呼んでる。たしかにここは学校だから、誰かがいる所じゃ『先生』って呼ばなきゃ変に思われるけど、私や美沙お姉ちゃんしかいない所じゃお家と同じ『ママ』と『お姉ちゃん』でいいのよ」

美幸は優しく教え諭すように言い、そのままの口調でこんなふうにした。

「おむつを見られちゃうから毛布を取っちゃ駄目ですって？ でも、仕方ないじゃない。真

衣ちゃんはセーラー服を着ていても、おしもはおむつの赤ちゃんだから、おむつを見られても仕方ないじゃない。それとも、もうすっかりパンツのお姉ちゃんになった気ではないのかな？　じゃ、いいわよ。着替える時、たっぷりのおむつでぶっくり膨らんだおむつカバーをクラスの人みんなに見られるのが恥ずかしいだろうなって思ったから、体調がまだ思わしくないからって口実で真衣ちゃんの体育は見学で済ませてもらえよう先生方にお願いたんだけども、パンツなら見られても恥ずかしくないわよね？　だったら、クラスの人と一緒に着替えることもできるから、きちんと体育の授業を受けられるわね。いいわ、明日の朝の連絡会議で、体調も戻ってきたからもう体育の授業も大丈夫ですって伝えておくことにする。――トレーニングパンツとオーバーパンツもパンツには違いはないんだから、見られても平気よね？」

「……」

これ以上の懇願と抵抗は無意味だということを感じほいほい知らされ、真衣は返す言葉を失った。返す言葉を失って、のろのろと毛布から手を離すしかなかった。

「やっと聞き分けのいい真衣ちゃんに戻ってくれたみたいね。いいわ、やっぱり、当分は体育の授業は見学でお願いしますって先生方にもういちど言っておいてあげる。それでいいのね？」

それでいいのね？　念を押すように美沙が言った言葉に二つの意味が込められているのは明白だった。一つは、文字通り、体育の授業は見学でいいのね？という意味。そしてもう一つは、これからは学校でもパンツじゃなくておむつよ、それでいいのね？という意味に他ならない。

だが、なすすべなく毛布から手を離してしまった真衣には、二つの意味合いを同時に受け容れるしかなかった。

「じゃ、いつまたおもらししちゃってもいいように、おむつをちゃんとあてちゃおうね。おむつをあてておけば、授業中でも朝礼の途中でも、いつしくじっちゃっても大丈夫だから」  
美幸は改めて真衣の体から毛布を剥ぎ取った。

その間に、春の体育大会に向けた準備の一環なのだろう、校庭では級友たちが幾つかのグループに分かれて互いに短距離走や走り幅跳び、ハードル走といった種目のタイムや距離を測り始めていた。

と、自分の計測までに間ができたのか、美沙が、体育の教師に気づかれないようさりげなく、こちらに向かって手を振ってみせた。

それに気づいて、真衣の胸がどきんと高鳴り、羞恥のあまり頬ががごと熱くなる。

「は、早くして……早くおむつをあてちゃって……」

頬を真っ赤に染めながら、真衣は窓からも美幸の顔からも視線をそらして弱々しく訴えかけた。

「あら、どうしたの？　おむつなんて嫌じゃなかったの？」

真衣の胸の内などすっかりお見通しのくせに、美幸はわざと不思議そうに聞き返した。

「だって、だって……」

美沙を真似て他の級友たちもいつ何時こちらの様子を窺おうとするかもしれない。現に、真衣の具合を確認するために保健室にやって来た茉莉も、さりげくこちらに向かつてちらちらと視線を走らせているのだ。級友たちは最初の集合場所よりも向こう側でタイムを測定し合っているから保健室からはかなり距離があり、真衣がおむつの上にお尻を載せた状態でベッドに横たわっていることを前もって知らなければ、今の光景も、美幸らしき人影が保健室の中で動いているみたいだなという程度にしか判別できないだろう。が、たとえば記録用紙が風に飛ばされ、それを追いかけて保健室の近くまで走ってきた級友がひよいと窓を覗き込むようなことがあったりしたら、美幸の手で真衣がおむつをあてられている場面を目の当たりにすることにもなりかねない。

今の真衣には、少しでも早くおむつをあて終えて再び体に毛布をかけてくれるよう美幸に哀願することしかできなかった。

だが、真衣のそんな思いをわざと取り違えてみせ、ようやく事情がわかったとでもいうようにぱつと顔を輝かせて美幸はこう言った。

「ふうん、そうなんだ。真衣ちゃん、お家でも『早くおむつをあてて』って言ったことがあるし、やっぱり本当はおむつが大好きになっちゃったのね。でも、そうよね。おむつをあてていけば、お家だったらトイレに間に合わなくてもいいし、学校でも無理して休憩時間になるまでおしっこを我慢しないでいいんだから、おむつを好きになっちゃうのも当たり前よね。いいわ、わかった。じゃ、すぐにおむつをあててあげる。真衣ちゃんの大好きなおむつをね。その代わり、当分はパンツのお姉ちゃんにはなれないのよ。でも、それでいいよね。だって真衣ちゃんはおむつが大好きな、いつまでもおむつ離れできない赤ちゃんだから」

美幸は優しい声ながらも有無を言わさぬ調子で言い、あらためて真衣の下腹部を眺めて、こう決めつけた。

「うふふ。やっぱり、そうみたいね。もしもおむつが嫌だったら脚や体を動かして少しでもおむつをどけようとする筈なのに、真衣ちゃんのおむつ、美沙お姉ちゃんに途中まであててもらってから今まで、全然ずれたりしてないわよ。これって、柔らかくて優しいおむつの肌触りが気持ちいいからおとなしくしてたってことよね」

美幸はそう決めつけて妖しく微笑む。しかし、途中まであてられたおむつから真衣が逃れようとしなかったのは、体から毛布が滑り落ちるのを恐れていたことだった。変に体を動かして、そのせいで毛布が滑り落ちてもしたら、おむつに包まれた下腹部を茉莉の目にさらすことになってしまうのだ。だが、そう説明したところで、美幸は取り合おうともしないに違いない。

「早く、早くってば……お願いだから、ママ……」

おむつが好きになってしまったと決めつけられても、何も言い返せない。今の真衣には、一刻も早くおむつをあててくれるようせがむことしかできなかった。

## 《二二》 それぞれの想い》

焦らすようにしてわざとたっぷり時間をかけておむつをあて、おむつカバーの前当てを留めて、股ぐりからはみ出ているおむつを入念に押し込めば、それでおしまいだ。昨夜までならおむつカバーの上にオーバーパンツを穿かせていたところだが、真衣の下腹部がおむつかぶれで僅かに赤くなり、脱毛クリームを塗布するための口実には事欠かない今、おむつカバーの内側を蒸れやすくするためのオーバーパンツはもう不要。これからは、スカートの下にすぐおむつカバーという姿にさせて、真衣が羞じらいの表情を浮かべる様子を楽しむ番だ。おむつをあてて体に毛布をかけてやると、窓の外から覗かれても恥ずかしい下着を目撃されずにすむという安堵感からだろう、羞恥の色を満面にたたえつつも、真衣の顔に僅かながらほっとしたような表情が浮かんだ。

「どうせだから、二時間目が終わるまでねんねしてようか。美沙お姉ちゃんが迎えにくるまで退屈だもんね」

美幸は、羞じらいながらも少し落ち着いてきた様子の真衣に向かって囁きかけ、昨夜と同じように毛布の上からお腹をぼんぼんと優しく叩きながら子守唄を歌って聴かせた。

途端に、真衣の瞳がとろんとしてくる。学校でもおむつをあてられ、保健室のベッドで赤ん坊みたいにして寝かしつけられる屈辱に、真衣は首を振って抵抗するのだが、美幸が念入りに施した後催眠の効果はきめんだ。真衣が両目を閉じ、安らかな寝息をたてるようになるのに、さして時間はかからなかった。

（それにしても、不思議な縁ね。あの憧れだった先輩のお嬢さんが、こうやって私の娘になっちゃうなんて）真衣の寝顔を見ながら美幸は胸の中で呟いた。

真衣や美沙にはまだ話していないが、二人の母親と同様、美幸も啓明女学院の卒業生だ。それも、真衣や美沙のように途中から入学したのではなく、幼稚園からの生え抜きだった。

そんな美幸が、今は亡き真衣の母親と初めて出会ったのは、真衣の母親が初等部の六年生で、美幸が幼稚園から初等部上がった入学式のことだった。真衣の記憶の中の母親は物静かで家庭的な女性という印象が強いのだが、それは幼い真衣に接する時のことで、実は、子供の頃からきわめて活動的で理知的な上、リーダーシップにも富んだ人物だった。啓明でも初等部では児童会の会長を、中等部と高等部でも生徒会の会長をつとめ、他の生徒たちからも教師たちからも絶大な信頼を寄せられていた。美幸が初等部の入学式で初めて目にした母親も、児童会長として挨拶をした際の姿なのだが、その時も体育館の演壇において大人顔負けの堂々とした態度と話し口調をみせ、新入生や保護者を一目で虜にしてしまったほどだ。その中でも特に美幸は言葉では表現できないほどの憧憬を母親に対して抱き、初等部の生活に慣れた頃には、廊下を歩いている母親を見かけた際にわざと目の前で転び、保健室へ連れて行ってもらおうといったことさえしでかしたくらいだった。

もともと一本気で、これと決めたら梃子でも動かない頑なさに加え、いったん欲しいと思



った物は自分の手に入れるまで絶対に諦めないという、良く言えば粘り強い、悪く言えば執念深い性格を併せ持つ美幸は、それからもことあるごとに母親への接近を謀り、親しくならうと試みた。そのために、母親が中等部の三年生で生徒会長になった時は、生徒会・児童会合同連絡会議への参加を目論んで、まだ初等部四年生の身でありながら児童会の役員に立候補したほどだし、母親が高等部の生徒会長になった際も、中等部一年生ながら生徒会役員を目指しさえした。

だが、結局、母親は高等部を卒業すると、エスカレーター式に進学できる啓明女子大学ではなく地元ながら別の大学に進み、その後、製菓会社に就職して、社内恋愛の末、どこにでもいそうな主婦の座におさまってしまったのだった。母親が啓明を離れた後は疎遠になり、年月を経て、憧れの的だった母親が家庭におさまって子供をもうけたと風の便りに聞いた時、生家である医院を継ぐために医大に進んでいた美幸はひどく落胆し、母親に対して憎しみをいた感情さえ抱いた。(あの煌めくような才能を持ちながら、それを華やかに開花させずに生涯を過ごそうとするなんて、そんなの許せない)その時の美幸の心中を簡単に表現しようとするなら、そんな言葉になるだろうか。とにかく、自分が胸の中に抱いた限らない憧憬を打ち砕かれ、自分自身をも否定されるような思いにとらわれる美幸だった。

しかし、当の母親にしてみれば、美幸が覚えたような悲壮感など微塵も感じてはいない。自分の持つ才能や性格が、努力や苦勞の末に獲得されたものなら、それを捨て去る気には絶対なれないだろう。しかし、それが生まれながらにして持ち合わせたものだったら——自らの努力によって勝ち得たものでない才能なら、それを發揮するために努力する必要とも義務とも意義ともまるで無縁だったとしても、それはそれで仕方のないところだろう。むしろ、その煌めくような才覚やパーソナリティによって人々の渦の中心にいてることを義務づけられるような学生時代を過ごした母親にしてみれば、たまたま持ち合わせた才覚を疎ましく思い、衣服にまとわりつく綿埃を払い落とすのと同じような感覚で、まるで無造作に捨て去る方を選んだとしても、それはごく自然なことなのかもしれない。

だが、人一倍努力家なところに加えて、あまり気乗りせぬままながら弟までの繋ぎ役という立場を甘んじて受け入れて医師になるために勉強に打ち込むような性格の持ち主である美幸には、真衣の母親のそんな心の動きなどまるで想像の埒外で、その心中を推し量ることなど到底できる筈がなかった。

そんな経緯で、真衣の母親という憧憬の対象を手に入れることがかなわなかったせいもあって独身を貫き通し、これまで精神的には孤独な人生を歩んできた美幸の目の前に現れたのが真衣の父親である優だったというのは、どんな天の悪戯なのだろう。そうして、思わぬ形でかつて懂れてやまなかつた女性の忘れ形見の少女が、義理とはいえ自分の娘になろうとは。かつての憧れの的を奪い去っていった男と、その一人娘。美幸にとって真衣は、『愛憎半ばする』という言葉ではとうてい表現できないほどの存在だ。美幸が真衣に対して、想像を絶するいとおしさと、それと同等の憎しみを抱いたとして、誰がそのことを責められるだろう。

どれくらいの間、感慨に耽っていただろう。

インターフォンの呼び出し音に、美幸はようやく我に返った。

「はい、どうしました？」

美幸はベッド脇の付き添い椅子から執務机に戻り、インターフォンのボタンを押して誰何した。

それに対して、どこか遠慮がちな

『佐藤さんの容態について鈴木先生に伺いたいことがあってまいりました』  
という女性の声が返ってくる。

声を聞いた途端、名前を確認する前にそれが誰なのか即座に目星をつけた美幸はすぐに錠を解除し、自らドアを引き開けて、声の主を保健室の中に招き入れた。

ちょうどその頃、走り幅跳びの距離測定を終えた美沙は、次の測定を待つ間、手持ち無沙汰な様子で保健室の方に視線を向けた。

と、美幸らしき人影がドアを開けて、誰かを招き入れているとおぼしき光景が目映る。  
美沙がいる場所から保健室まではかなり距離がある上、まだ葉がまばらとはいえ植え込みによって視界が幾らか遮られるものだから、よほど目を凝らしてもそれ以上のことはわからなかったが、着衣や体格から、保健室に招き入れられた人物が誰なのか、美沙にはおおよその見当がついた。ひょっとしたら、茉莉を初め級友たちの中にも、真衣の容態を気にして、詳しい様子が見て取れるわけでもないのに保健室の様子をちらちら窺い見ている者が何人かいるかもしれない。その級友たちも、顔の見分けがつかなくても、おそらく、保健室に入ってきたのが誰なのか察しがついていることだろう。美幸が招き入れたのは、それほどに馴染みのある人物だった。

\*

「……なさい。ほら、美沙お姉ちゃんが迎えに来てくれているから、おつきしなきや駄目よ」

美幸の声が聞こえ、体を優しく揺すられて、真衣はのろのろと目を開けた。

両目の焦点がまだ合わず、自分がどこにいいのか一瞬わからない。

「気持ちよさそうにねんねしてたね、真衣ちゃん。昨夜みたいにママに子守唄を歌ってもらったのかな」

美幸に代わって、美沙がベッドを見おろして笑顔で言った。

「ん……」

ようやく焦点が合ってきた両目を瞼の上からぐりぐりしながら、真衣が何か言おうとして唇を動かした。

その拍子に、口から何かがぼろりと落ちて、ベッドに横たわっている真衣の頬のすぐ横まで転がってくる。

「え……？」

寝惚けまなこのまま真衣がそろりと手を伸ばし、拾い上げてみると、シーツの上に落ちた

のは、昨日の夕方から何度も繰り返し口にふくまされたおしゃぶりだった。

「真衣ちゃんたら、ねんねしてすぐの頃は気持ちよさそうに寝息をたてていたけど、しばらくすると、お口が寂しくなってきたのか、お指をちゅぽちゅぽし始めたのよ。だから、お尻拭きやおむつかぶれのお薬と一緒にお家から持ってきておいたおしゃぶりを啜えさせてあげたの。そしたら、ご機嫌な寝顔になって、ちっともぐずらずにおねむだったのよ」

自分が拾い上げたのがおしゃぶりだと気づいて頬を真っ赤にする真衣に向かって、おかしそうに美幸は言った。

「でも、おしゃぶりを啜えたままねんねしてたから、よだれもこぼしちゃったのよね、真衣ちゃんたら。ついさっき、お姉ちゃんが迎えにきてあげた時も、ママが真衣ちゃんのほっぺをハンカチで拭いてあげているところだったもの」

美沙はく  
すくす笑っ  
て言いなが  
ら、真衣の  
背中の下に  
右手を差し  
入れ、上半  
身を優しく  
抱え起こし  
た。

と、真衣  
の体にかか  
っていた毛  
布がすつと  
滑り落ち、  
おむつかバ  
ーが半分ほどあらわになる。



美沙は、真衣の下腹部の中ほどまで滑り落ちた毛布を手元にたぐり寄せると、真衣の背中とお尻を両手で支えるようにしてベッドから床におろし、その場に立たせた。

そこへ美幸が、付き添い用の椅子の背もたれにかけておいたスカートをつかみ上げ、サイドファスナーを引きおろして広げたウエスト部分を真衣のくるぶしの高さくらいに合わせてすつと差し出した。

「ほら、早くしないと授業に遅刻しちゃうわよ。三時間目は担任の瀬尾先生の授業だから、特に遅刻は禁物よ」

美沙は真衣の目の前に膝をつき、交互に足を上げさせた。真衣が足を上げ下げするたび、おむつかバーの生地が微妙に伸び縮みし、見ようによってはひどくなまめかしい皺になって蠢く。

両脚が通るのを待って、美幸はスカートを持ち上げ、サイドファスナーを引き上げてから裾を何度か引つ張り、乱れを整えてやると、真衣の腰回りをぐるりと無遠慮に眺めてから「これでいいわ。これなら、真衣ちゃんがパンツを穿く代わりにおむつをあててるなんて誰にも気づかれないわよ」

と言って、スカートの上からお尻をぼんと叩いた。

「……」

自分の下腹部を包み込んでいるのがショーツではなくおむつだということを改めて思い知らされ、力なく顔を伏せる真衣。

だが、それで保健室から出て行けるわけではなかった。まだ、最後の仕上げが残っている。「せっかくおむつをあててあげたのはいいけど、真衣ちゃん、我慢しすぎると、ママやお姉ちゃんのおっぱいを吸いながらじゃないとおしっこをしたくても出せないんだよね。だったら、せっかくママがお家からおしゃぶりを持ってきてくれたのに、保健室に置いておくのは勿体ないんじゃないかな。お家じゃ、おっぱいの代わりにおしゃぶりでもおしっこできたんだし、真衣ちゃんがなくなったらいつでもおしっこできるようにこうしておいてあげる」

美沙は、真衣がベッドからおりる時に枕元に置いたおしゃぶりをつかみ上げると、真衣の制服の胸ポケットに押し込み、おしゃぶりストラップのクリップを胸当てにしっかり留めた。「いいわね？ もう我慢できないくらいおしっこをしたくなってもお姉ちゃんが近くにいない時は、このおしゃぶりを吸っておしっこをするのよ。今度はおむつの外はちゃんとしたおむつかバーで、おしっこが漏れ出す心配はないんだから、安心して出しちゃっていいのよ」美沙は、ポケットの外側からおしゃぶりをぼんと叩いて言い聞かせた。

\*

三時間目の始まりを告げるチャイムが鳴ると同時に、真衣たちの担任でもある家庭科担当の教師が姿を現し、それまでざわめいていた教室が一気に静かになった。

「家庭科の授業はこれまで、裁縫の中でも特に運針を中心に進めてきましたが、みなさんが真面目に取り組んでくれたおかげで、指運びや手首の返しも最初の頃に比べると見違えるほど滑らかになってきています。ですから、もうそろそろ採寸や型紙起こしの段階に進んでもいい頃かなと考えています」

担任は、空いた席がないかどうか教室中を一通りぐるりと見渡した後、よく通る声で話し始めた。

「そこで、次の段階に進む前に、運針の総仕上げの課題をこなしてもらうことにしました。これから課題用の生地を配りますから、私の指示通りに縫い上げてください。もつとも、課題といっても実技試験というわけではありませんから、あまり緊張する必要はありません。但し、大切な課題ですから、心を込めて縫い上げてください。それでは、各列一番前の席の人、課題用の生地が入った袋を取りに来てください。席に戻ったら、袋から自分の分を取り出して後ろの席に袋を渡すこと。一番後ろの人は、空になった袋をとりあえず自分の机の近くに置いておいてください。あとで、縫い上がった作品をその袋に入れて集めますから」

担任がそう言って手招きをすると、一番前の席に座っている生徒たちが椅子から立ち上がって教卓に歩み寄り、それぞれ大振りの紙袋を受け取って再び席についた。  
が、次の瞬間、

「え？ これって……」

と、最も早く自分の席に戻って紙袋から課題用の生地を取り出した生徒の口から戸惑いの声が漏れる。

それに続いて教室のあちらこちらから

「これ……おむつじゃないの？」

「そうだよね、おむつ反っていうんだっけ、まだ縫ってないおむつ用の生地」

「そうそう。家庭科の教科書を先まで読んだことがあるけど、たしか、育児の単元でこんな反物の写真が載ってたよ」

といった、ちよつと驚いたような、ちよつと訝しむような声があがった。

「はい、静かにしてください。後ろの席まで行き渡りましたか？ ——それでは説明します。課題用の生地は、みんなが思っている通り、布おむつ用の反物です。動物柄や水玉模様など柄はいろいろですが、素材はドビー織りの綿で揃えてあります。じゃ、教科書のXXページを開けて」

課題用の生地を全員が手にしたことを確認して、担任は自分も教科書の頁を繰りながら生徒たちに指示した。

「開いてもらうのは育児の単元のページになっていて、そのページから三ページほど、おむつの種類や布おむつの縫い方といった項目が記載されています。そこに載っている文章と写真を参考にして、各自、反物を裁ち鋏で裁断するところから始めて布おむつに縫い上げてください。裁縫の単元が終わったら育児の単元になります。育児実習では赤ちゃんに見立てた人形を使うこととなります。実習でその人形にあててあげるおむつをこれからみなさんに縫ってもらうわけですから、最初に言った通り、愛情いっぱい心を込めて縫い上げてください。——はい、それじゃ、めいめい作業に取りかかってください。教科書だけではわかりにくいところもあると思いますが、その時は大きく手を挙げて私を呼んでください」

担任はそう言うのもういちど教室中を見渡した後、教壇をおりて、こつこつと足音を響かせながら生徒たちの席を巡り始めた。

一人で黙々と教科書に目を通し、先ず説明の文章を頭に入れようとする者。図解だけを見ながら、すぐにも鋏を手にして生地を裁ち始める者。早速、隣の席の生徒に助けを求める者。生徒たちの課題への取り組み方は様々だった。

そんな中、右手を高々と挙げる生徒がいた。クラス委員長の茉莉だ。

「珍しいですね、園田さんにわからないところがあるなんて」

担任は茉莉の席に歩み寄り、すつと腰をかがめた。

「いえ、わからないところがあるというわけではないんですけど……私の姉も従姉妹も啓明の卒業で、家庭科は瀬尾先生に教えていただいたそうです。それで、先生の授業のおよその流れについて前もって教えてもらっていて、裁縫の単元で運針の仕上げに課題が出るから身

を入れて練習しておきなさいっていうアドバイスも貰いました。ただ、二人からは、課題として雑巾と布巾を縫うことで厚手の生地と薄手の生地、どちらでも通用する滑らかな針運びをチェックされるから、そのつもりで練習しておくというのを聞かされていたんです。なのに……あ、いえ、これまで通りの課題じゃないと困るとか、そういう身勝手なことを言いたいわけじゃありません。ただ、何か方針を変更することになったきっかけみたいがあったのかなとか、そういうことが気になって課題に集中できないもので、その……」

茉莉は、ケースの蓋を開けただけで全く手を付けていない裁縫セットをちらちら見ながら、遠慮がちな声で問いかけた。

「ああ、そういうことですか。園田さんの疑問が身勝手なことだなんてちつとも思わないから、気にしないでください。高等部に上がるにあたっては、中等部とはまた環境が変わるわけですから、いろいろと情報を集めるのも当たり前のことだと思えます。それに、高等部で新しい生活が始まってまだ一ヶ月も経っていないわけですから、前もって調べておいたことと異なる状況に遭遇すると戸惑うこともあるでしょう。園田さんの気持ちはよくわかりますよ」

担任は茉莉の肩に手を置いて優しく微笑みかけ、茉莉の裁縫セットの中から裁ち鋏を取り上げて、折り目に合わせて裁てばちょうど布おむつ一枚分の寸法になるように折りたたんである市販のおむつ反に鋏の刃を押し当てながら続けて言った。

「ただ、どうして今回は雑巾や布巾じゃなくしておむつなのかという質問には、残念だけど、これといってはっきりした理由を答えることはできません。正直なところ、私の気まぐれとやってみてもいいくらいですし、ま、強いて言えば、同じ課題ばかりが続くと、そのことを前もって知ることができる生徒とそうじゃない生徒との間で不公平感が出てくる心配があるから、それを防ぐためというところでしょうか。あ、不公平というのは、園田さんのことを言っているんじゃないから、誤解しないでくださいね」

担任はそう説明して反物を折り目に沿って裁ち切り、鋏を茉莉に手渡した。

「……はい」

裁ち鋏を受け取りながら茉莉は頷いた。だが、とてもではないが心から納得したとは言いかねる、ひどく曖昧な頷きようだった。

それは周りの生徒たちも同様だったようで、耳をそば立てて茉莉と担任との会話に聞き入っていた生徒たちも、要領を得ない表情で互いに顔を見合わせるばかりだ。

だが、そんな中でただ一人、美沙だけは担任の真意が奈辺にあるのかおよその察しがついていた。茉莉に対して曖昧な説明をしながら、時おり真衣の顔を気遣わしげに、それでいてどこか好奇に満ちた視線をちらちら繰り返し向けていた担任の様子を見れば、課題が雑巾や布巾からおむつに替わった理由に見当をつけるのは、美沙にとってさほど難しいことではなかった。

\*

「布おむつって、こんなに柔らかいんだね。従姉妹んちに赤ちゃんがいるんだけど、紙おむ

つしか使っていないから知らなかったよ」

「でも、洗濯が大変そうじゃない？ 将来、私だったらどっちにするかなあ」

「そりゃ、おむつカバーも要るし、いろいろ大変そうだけどさ、お腹の中に赤ちゃんがいる間に布おむつを手縫いなんて、ちよつと素敵っぽくない？」

「私はやだな。そんな、いかにもって感じのはちよつと苦手かも」

「そんなこと言うけど、紙にしても布にしても、要は赤ちゃんにとってどっちが気持ちいいかでしょ？」

「ええ、そうかな？ 育てる方の手間も考えなきゃ、結局、長続きしないんじゃないの？」

「だよね。だいいち、どっちが気持ちいいかっていっても、おむつを使うような赤ちゃんなんてまだお喋りができないんだから、確かめようかないじゃん」

「だけど、だったら、自分で試してみるっていう手もあるよ。なんなら、学校が終わったら薬局で大人用の紙おむつを買って帰ってみたら？ そんなで、たった今縫ったばかりの布おむつを何枚か提出しないでこっそり持って帰って、肌触りを比べてみるとか」

「あはは、冗談でもよしてよね。高校生にもなっておむつだなんて、超恥ずいんですけど」

「でも、まじ、便利かもよ。真冬の夜中にトイレへ行きたくなくなった時なんか、このままなんとかならないかなって思うことあるもん」

「あ、そんなこと言ってる。よし、あんた、育児実習になったら人形の代わり決定ね。あたしが縫ったおむつ、あんたにあててあげる。そんで、気持ちいいかどうか詳しくレポートにまとめること。うんうん、うちの班、そのレポートで決定ね」

「ひええ、そればかりはご勘弁を」

あと十五分ほどで授業時間が終わるといふ頃になると、大半の生徒が課題をこなし、配られた生地を十枚の布おむつに縫いあげて、嬌声をあげてお喋りに夢中になるグループも見受けられるようになっていた。中には手の遅い生徒も何人かいるが、彼女たちも担任の指導を仰いだり隣の席の生徒に手伝ってもらったりして、もう少しというところまで漕ぎつけている。

しかし、一人、真衣だけは違っていた。級友たちの嬌声が聞こえるたび顔を伏せ、弱々しく首を振る真衣の目の前にあるのは、まだ寸法に合わせて裁ち切ってもいない、紙袋から取り出したままの反物だ。

だが、自分のお尻を包み込んでいるのと同じような布おむつを縫いなさいと指示されて、すんなりと応じられるわけがないのも、仕方のないところだろう。級友たちにとっては授業の課題に過ぎない布きれであるおむつも、今の真衣にとって、単なる生地や反物などではなく、特別の意味を持つ恥ずかしい『下着』なのだから。

「どうしたの、佐藤さん？ 早くしないと時間中に間に合わないんじゃない？」

見かねた美沙が自分の席から身を乗り出し、わざとみんなに聞こえるよう意識して声をかけた。

だが、真衣からの返事はない。

もっとも、それも、真衣の胸の内を手取るように見通してしまっている美沙にとっては予想の範囲内だ。

しかも、家庭科の授業が始まってからもうかなり時間が経っている。担任の受け持ち科目に遅刻しちやいけなからといって美沙に急かされ、三時間が始まる前の休憩時間にトイレへ行くことができなかつたせいで、一時間目の途中と同様、尿意が限界近くまで高まっている。そのため、肩で息をし、体を小刻みに震わせるばかりで、鉢を手にすることもできない真衣だった。

そこへ、少し急ぎ足で担任が歩み寄ってきた。

しかし、手の遅い生徒たちには事細かに手順を説明し、反物をおむつに縫い上げるよう指導してきた担任だが、真衣に対しては、そつと手元を覗き込み、課題がまるで進んでいないことを確認しても、少し困ったような表情を浮かべるだけで、敢えて指導らしい指導をしようとはしなかつた。いや、それどころか、早くおむつを縫い上げるよう真衣を促す美沙のことを

「こういうことは得手不得手というものもあるし、あまり急かすのは感心しませんね。幼なじみだし席も隣どうしだから佐藤さんのことが何かと気になるのはわかりますけど、あまり構い過ぎるのもどうかと思いますよ」と、やんわりとながらたしなめさえたのだ。

けれど、それは、おかしな話だった。母親と死別した真衣が幼い頃から家事をこなしてきたことは担任も知っている。当然、真衣が裁縫を苦手としている筈がないことも。なのに担任は、課題を途中で放棄したようにさえ見える真衣を叱責することもなく、むしろ、どこか遠慮がちに庇おうとする。

そんな担任の態度に、美沙は或る確信を抱いた。課題が雑巾からおむつへと変更になった理由を、担任の様子から美沙はそれとなく推察していたのだが、今の担任の真衣に対する接し方を見て、それが単なる推察から疑いのような確信へと姿を変えたのだった。

「わかりました、これから気をつけます。——ごめんなさい佐藤さん、余計な口出ししちゃうって」

美沙はわざと殊勝に応じ、真衣に向かってでも軽く頭を下げてみせた。

「それで結構です」

担任は短く言い、まだ課題を仕上げていない生徒の席に向かって踵を返した。

「やれやれ、瀬尾先生ったら、真衣ちゃんには甘いんだから。依怙最厚なんかする先生じゃないのに、どうして今回に限って真衣ちゃんだけには甘いのかしらね」

担任の後ろ姿を見送りながら、美沙は自分の席から立ち上がらんばかりにして、真衣に向かって思わせぶりの口調で囁きかけた。

だが、真衣からの返答はない。それどころではないといった様子がありありだ。

「ま、いいわ。そんなこと考える余裕なんてないわよね、今の真衣ちゃんには。おしっこをしたくて堪らないでしょ？」

美沙はまるで遠慮することなくずけつと言った。



けれど、それに対しても真衣からの返答はない。美沙に指摘された通り、もう限界間近なのだが、それを口に出したり態度にしめしたりするのも憚られてならない。

しかし、真衣が何の反応もみせなくても、美沙にはお見通しだ。

「さつき先生が来た時に言えばよかったのに、愚図愚図してばかりなんだから。いいわ、一時間目と同じように、先生にお許しをもらって、保健室へ連れて行くってことにしてトイレに連れて行ってあげる。だから、もう少し我慢するのよ」

美沙は声をひそめたままそう言って、すつと右手を挙げかけた。

が、その手を真衣が慌てて押しとどめる。尿意の高まりに切羽詰まった状態にあるのが信じられないほど素早い身の動きだった。

久しぶりの登校でまだ昼休みにもなっていないのに、一時間目に続いて三時間目まで途中で授業を抜け出して美沙に保健室へ連れて行ってもらったりしたら、さすがに級友たちも変に思うかもしれない。下手をしたら、級友たちが胸の中に抱いた疑念がきっかけになって、本当のところが知れ渡ってしまうかもしれない。そう考えると、真衣が咄嗟に美沙の手を押さえつけるのも無理からぬところだろう。

「なによ、変な子ね。トイレへ行きたいんじゃないの？」

担任や周りの生徒に気づかれないうち注意を払いながらも必死の面持ちで首を振る真衣に向かって、美沙は呆れたように言った。もつとも、美沙にしても、真衣の胸の内は承知の上だ。承知の上だからこそ、真衣がトイレへ行くのを拒む理由を訝しげに尋ねるのではなく、わざと呆れてみせるのだった。

そうして美沙は、

「ま、いいわ。行きたくないなら行きたくないで、私はちつとも構わないんだから」

と冷たく言い放ち、ひよいと肩をすくめた。

真衣が今スカートの下に着けているのはパンツではなくおむつとおむつカバーだから、たとえ恥ずかしい粗相をしてしまったとしても椅子や床がおしっこまみれになることもなく、教室が大騒ぎになる心配もない。ぐっしより濡れたおむつの恥ずかしい感触に真衣が耐えればそれで済む。真衣をなだめすかしてまでトイレへ連れて行く必要はまるでないのだ。

美沙のそんな素っ気ない態度が何を意味しているのか、真衣にも痛いほどわかっている。わかっているながら、今は為す術なく尿意に耐えて弱々しい呼吸を繰り返すだけの真衣だった。

## 《二三》二度目の保健室

「お手伝いします、先生」

終業を知らせるチャイムが鳴り、生徒たちの縫い上げた布おむつを詰め込んだ紙袋を持って担任が教室から出て行くところへ美沙が足早に駆けつけた。

「え？ でも……」

美沙からの思いがけない申し出に、担任が戸惑いの表情を浮かべる。

「こんなにたくさん荷物を運ぶのは大変でしょう？ 先生にはいつも部活でもお世話になっているし、こんな時くらいお手伝いさせてください」

殊勝な顔つきで美沙は言った。

受け持ち教科が家庭科ということもあって、担任は家庭科クラブの顧問をつとめている。その家庭科クラブに所属している美沙が手伝いを申し出ても不思議ではない。しかし、美沙の口調からは、それだけでは説明できない何か別の意味が含まれていそうに聞こえてならない。

「それじゃ、半分は私が運びますね」

美沙は半ば強引に幾つかの紙袋を奪い取り、担任の返事も待たずにさっさと歩き出した。

「ち、ちよつと、杉下さん……」

担任も慌てて歩き出し、美沙に並んだ。

と、美沙が振り向き、意味ありげな笑みを浮かべて担任に問いかけた。

「そういえば、この紙袋、どこへ運べばいいかまだ聞いていませんでした。資料室の奥の収納庫でいいんでしょうか？ 家庭科実習室ですか？ それとも……」

前半こそはつきりした声で訊ねる美沙だったが、『それとも……』の後は、級友たちに聞こえないよう声をひそめ、担任の耳元に囁きかける。

美沙の囁き声が告げる行き先を耳にした途端、担任は、はっとして息を飲んだ。

しばらく後、保健室のドアの前に二人の姿があった。

インターフォンを通して解錠を依頼し、ドアが開くと同時に入室したのは担任だったが、それに続いて美沙が保健室に入ってくるのを目にしても、美幸は全く驚く様子を見せなかった。

「やっぱり美沙も来たのね」

まるで美沙が担任と一緒に保健室へやって来るのを予想していたかのように美幸は短く言った。しかも、担任の目の前だというのに、『杉下さん』ではなく、家にいる時と同じように『美沙』と呼びさえして。

「え？ 『美沙』って……」

思わず担任が聞き返す。

だが、美幸は澄ましたものだ。平然とした態度で

「いいのよ、美沙で」

と言つてのけ、美沙のことを名前で呼んだだけではなく

「私と美沙の関係がどうなっているか、瀬尾さんに説明してあげる。もちろん、美沙には、私と瀬尾さんとの間柄を教えてあげるわね」

と、担任に対しても『瀬尾先生』ではなく馴れ馴れしい口調で『瀬尾さん』と呼びかけ、二人に椅子を勧めてから、事情を説明し始めた――。

美幸が啓明の卒業生だというのは前述した通りだが、実は、真衣や美沙の担任である瀬尾と、保健室の前任者である斉藤も啓明の卒業生だ。年齢的には瀬尾と斉藤が同級生で、美幸よりも五つ下なのだが、二人とも、美幸が真衣の母親に対して抱いたのと同様の感情を美幸に対して抱いていた。そもそも、二人が美幸と初めて出会ったのは、美幸が真衣の母親の姿を初めて目にしたのと同じ、幼稚舎から初等部上がった時の入学式でのことだった。真衣の母親に憧れ、それがきっかけになって早くから児童会の役員になっていた美幸が、二人が初等部上がる時には六年生になって、かつての真衣の母親と同様、児童会の会長に就任して入学式で新入生を迎える挨拶をしたのだが、その時の美幸の凛々しい姿に憧れて、今度は瀬尾と斉藤が美幸を追いかける巡り合わせになったのだった。ただ、結局は疎遠になってしまった真衣の母親と美幸との関係とは異なっていて、美幸は二人の想いに応え、機会あるごとに二人と親しく接し続けていたため、その間柄が途切れることはなかった。

啓明女学院は、その校風を次の世代に確実に伝える目的で、卒業生を積極的に教職員として採用する方針を昔から堅持している。そのため、啓明女子大学に進んで養護教諭の資格を取った斉藤や、同じく家政科の教育免許を取得した瀬尾も母校の教諭として迎え入れられ、指定校医として時おり啓明を訪れている美幸とは更に親交を深める機会に恵まれたのだが、美幸の持つて生まれた威厳に満ちた雰囲気にも影響され、美幸に対して限りない憧憬を抱いていた二人は、いつしか、良く言えば美幸に対して極めて従順に、悪く言えば言いなりに近い存在になってゆき、今でもその関係は変わることなく継続しているのだという。

――そういった経緯を注意深く言葉を選びながら美幸は美沙に説明し、その後、担任に向かつて、美幸と真衣に加えて美沙の三人が今や擬似的な家族関係にあることを、やはり自分に都合のいいように巧みに言葉を選んで説明したのだった。

「それでわかったわ。初等部から高等部まで、ずっと、真衣ちゃんのお母さんのことを慕ってことあるごとに近づいて来る後輩がいたって私の母さんが時々話してくれていたんだけど、それって、ママのことだったのね」

これまでの経緯を聞き終えた美沙が、くすつと笑って言った。

美沙が美幸のことを『ママ』と呼ぶのを耳にした担任も、美幸と真衣と美沙との間柄を聞かされた今となっては、それに対して疑念を抱くこともない。

「そう、私のことよ。今から思えば、迷惑になるくらいしつこくつきまどっていたわね、私っつたら」

美幸は苦笑交じりに頷いたが、二人が運んできた幾つもの紙袋に目をやると、満足そうな笑みを浮かべて言った。

「これね、私が瀬尾さんをお願いしておいたのは。生徒さんたち、疑わずに縫ってくれた？」

「はい。初めて手にするおむつ反に最初はびっくりしていましたが、育児実習に使うからって説明したらすんなり納得してくれました。さすが、啓明の生徒たちはみんな素直ない子ばかりです」

担任は少し緊張した面持ちで応えた。

そこへ、屈託のない声で美沙が横合いから割って入る。

「うん、先生は育児実習用のおむつだって説明してくれたよ。でも、本当は、これって真衣ちゃんのおむつなんでしょ？ そうだよな、ママ？」

躊躇うふうもなくそう断言する美沙に向かって、美幸は口角を吊り上げるような笑みを浮かべて応じた。

「美沙にかかっちゃ、みんなお見通しみたいね。すぐにわかった？」

「うん。だって、体育の授業中、順番を待っている間に保健室の方にちらちら目をやってたら、瀬尾先生が入ってくるのが見えたんだもん。あ、ううん、遠かったからはっきり見えたわけじゃないけど、背格好とか着ている物とか、そういうのから考えて瀬尾先生以外にはいないなって。——そうですよ？ 二時間目の途中に保健室にいらしたの、先生ですよ？」

最後の方は担任の顔をしげしげと眺めながら、美沙はきっぱりと言った。

「ええ、私です。一時間目と二時間目が空きだったから、三時間目の授業に必要な物を用意しておこうと思って資料室に行きかけた途中で杉下さんと佐藤さんに会って……」

軽く頷いて応じた担任だったが、途中から言葉を濁してしまふ。

「いいわよ、この子の前で気を遣わなくても。佐藤さん——真衣ちゃんの話は、この子にずっと面倒をみてもらっているんだから」

遠慮がちに言葉を飲み込んだ担任に向かって美幸が取りなすように言い、美沙の顔をちらと見た。

すると、相変わらず屈託のない声で美沙が担任に、同意を求めるように言った。

「私たちが階段の踊り場にいるところに出くわした先生は、私が床に置いた手提げ袋の中を見ちゃったんですよ？ 手提げ袋に入っていたオーバーパンツやトレーニングパンツや、それに、おむつを」

「その通りです。それに、杉下さんのかげになってよくは見えなかったけど、ちらと見えた佐藤さんの膝のあたりを小さな筆が伝い落ちるのを」

美幸の取りなしに、もう担任は逡巡することなく美沙の言葉を引き継いだ。

「それで先生は保健室へいらしたんですね。真衣ちゃんの本当の『病状』を確かめるために。それに、先生らしき人影がが保健室へいらした後、ママが真衣ちゃんの毛布を捲り上げたり、収納棚の前でござごそしてからベッドの枕元で何かしている様子も見えました。そういったことから判断すると、ママから何もかもお聞きになったんですよ、先生は」

担任の言葉が終わるのを待ち、体育の授業中に校庭から見た光景を思い出しながら目を細めて美沙が言った。

「そういうこと。美沙の想像通りよ。今朝の職員会議で、真衣ちゃんの具合について、私は先生方にごく簡単な説明しかしなかったの。もともと真衣ちゃんのトイレが近いことは殆どの先生方がご存じだったから、欠席している間に膀胱に変調をきたして、それまでよりもまた排尿の頻度が高くなっているから、授業中でも積極的にトイレへ行かせてあげるよう注意してくださいって伝えただけなのよ。ああ、それと、体育の先生に、腹圧の関係で、余計な力が体に入ると失禁しやすくなっているから、膀胱が本来の機能を取り戻すまで体育の授業は見学で済ませてくれるようお願いしたくらいかな」

美沙の言葉に対して美幸が職員会議の様子を手短かに説明し、その後を担当が続けた。「そうですね。たしかに、鈴木先生が職員会議でなさったのは、そういった簡単な説明だけでした。ただ、職員会議の間中、意味ありげに私の方をちらちらご覧になっていらしたから、ここでは話せない何かがありそうだなとは思っていました。そうしてしばらくしたら、踊り場での出来事でしょうか？ 最初は杉下さんの説明に納得しましたが、手提げ袋の中に入っている物や、佐藤さんの膝の雫を見た途端、ぴんとくるものがありました。それで、次の授業の準備もそこそこに済ませて、二時間目の途中、意を決して保健室を訪れたという次第です」

そこまで言って担任は美幸の顔を見た。

美幸は、二時間目の授業が終わるまで真衣が横たわっていたベッドの方に目をやって担任の言葉を引き取った。

「そこで、私は洗いざらい説明したのよ。ねんねしている真衣ちゃんの体にかけておいた毛布を捲り上げて、お尻をくるんでいるおむつカバーを見せてあげたついでに、収納棚の引出に入れておいたおしゃぶりを真衣ちゃんに啞えさせてあげて、それで、実は真衣ちゃんが赤ちゃんになりたがっているってことを説明したの。真衣ちゃんの本当の『病状』は、おしっこが近いだけじゃなくて、いっどこでもおもらしをしちゃうかわからないからおむつが必要な体になってしまっていることを。そして、それどころか、無意識のうちに赤ちゃん返りしてしまっているってことを」

「それで、ママったら、仲のいい瀬尾先生にお願いすることにしたのね？」

美沙がくすつと笑って、二人で運んできた紙袋を指差した。

「瀬尾先生は育児実習用の準備だって説明したけど、本当はそうじゃないのよね？ 妹のお下がりのおむつだけじゃ足りないかもしれないから、真衣ちゃんのおむつをクラスみんなで縫ってもらえるよう、ママが瀬尾先生にお願いしたのよね？」

「そこまでわかっているんだったら話が早いわ。じゃ、クラスのみんなが真衣ちゃんのために縫ってくれた布おむつ、収納棚の引出に入れておいて。せっかくみんなが愛情を込めて縫ってくれたおむつなんだから、丁寧ね」

美幸は自分の席から立ち上がり、家から持ってきた小物類をしまっているのと同じ収納棚の上から二番目の引出を開けて美沙に指図した。

言われた美沙は椅子から立ち上がると、紙袋を両手に提げて収納棚に歩み寄り、ふと引出の中を覗き込んだが、その途端、瞳を輝かせて声を弾ませた。

「あ、おむつカバーが増えてる。どうしたの、これ？」

「例の業者さんが追加分を学校へ配達してくれたのよ。真衣ちゃんを寝かしつけた後、瀬尾さんがここへ来るまでのちよっとした間だったわね。その時におむつ反も持ってきてもらっていたの。美沙に手伝ってもらって自分たちで縫い上げるつもりで配達をお願いしたんだけど、ちょうど業者さんと入れ違いに瀬尾さんがやって来たものだから、クラスみんなに縫ってもらうことを思いついたのよ。お友達の愛情たっぷりのおむつの方が真衣ちゃんも喜んでくれるに決まっているからね。それにしても、無理なお願いを聞いてくれる人が身近にいるという助かるわ。斉藤さんには、産休に入る前に備品を整理して収納棚を一つ真衣ちゃん専用に使わせてもらえるようにしてもらったり、洗濯機を置く場所を器具庫の中に用意してもらったり。今度会ったらお礼を言っとかなきゃね」

本当のことを知った時、真衣はどんな顔をするだろう。頬を真っ赤に染めて羞恥に身悶えする真衣の様子を胸の中に思い浮かべながら、美幸は説明を続けた。

\*

四時間目の授業が始まってすぐ、うっという真衣の呻き声が美沙の耳に届いた。素早く教室中を見渡し、長い数式と複雑なグラフを書き連ねている最中の教師も、板書を自分のノートに書き写すのに精一杯な級友たちも当分はこちらの様子を気に留めることもなさそうだと判断した美沙は、隣の席に座っている真衣の様子を無遠慮に眺めまわした。

弱々しく肩で息をつきながら背中を丸めているのは一時間目と同じだが、その時とは違って、今は、右手の掌を下腹部に押し当て、時おり微かながら苦痛の表情を浮かべることもあった。そして、そのたびに、痛々しい呻き声が真衣の口から漏れ聞こえる。

「だいぶ苦しそうだけど、どうしたの？」

しばらく様子を眺めてから、美沙は自分の席から身を乗り出し、真衣に向かってひそひそ声で尋ねた。

「どうしたのって……知ってるくせに。知ってるくせにそんなこと訊くなんて、お姉ちゃんの意地悪」

真衣は、再び呻き声をあげそうになるのをぐっと堪え、恨めしそうな声で応じた。

「何が意地悪よ。お姉ちゃん、真衣ちゃんに意地悪なんて、これっぽっちもしてないわよ」

美沙は、真衣が何を言いたいのかわかっていながら、わざときよんとした顔で聞き返した。

「だって……だって、四時間目が始まる前の休憩時間、お姉ちゃんたら瀬尾先生と一緒に教室を出て行っちゃって、真衣をトイレへ連れて行ってくれなかったじゃない」

まわりの級友たちに聞こえないよう注意を払いながらも、真衣は今にも泣き出しそうな声で言った。

「あらあら、何を言ってるのかしら、真衣ちゃんたら。真衣ちゃん、本当は高校生なんですよ？ だったら、誰かに連れて行ってもらわなくても、トイレくらい自分で行ける筈じゃない？ 保育園や幼稚園の年少さんじゃあるまいし」

美沙は突き放すような調子で応じた。

「……意地悪、お姉ちゃんの意地悪。真衣が一人でトイレへ行ってもどうしようもないことを知っててそんなこと言うんだから……」

真衣は唇を『へ』の字に曲げた。

二時間目と三時間目の間の休憩時間なら、まだ真衣も自分の意志でおしっこを出すことができただろう。しかし、その休憩時間は保健室から教室へ戻るのが精一杯でトイレへ行くことがかなわず、三時間目の家庭科の授業が始まって、まわりの生徒たちが育児実習用の（と真衣自身と級友たちは思い込んでいたが、実は真衣のお尻をくるむことになる）布おむつをせつせと縫っている間中、もう限界が迫ろうとしている尿意に耐え続け、ついには、自分の意志では排尿できない段階に達してしまっていた。それでも、美沙と一緒にトイレへ行ってくれるよう頼み込み、二人で入った個室で美沙の乳首を口にふくませてもらえれば下腹部に痛みさえ覚える尿意から解放されるんだと何度も自分自身に言い聞かせ、ようやく授業時間乗り切ることができた。なのに、恥辱に耐えつつ真衣がトイレへの同行を依頼する寸前、美沙は担任のもとに駆け寄り、何事か囁き交わすと、そのまま紙袋を分け持って教室から出て行ってしまったのだ。教室を出て行く美沙の姿を無言で見送る真衣の胸の中は、言葉では表現できないほどの寂寥感と絶望感に満たされていた。教室にぼつんと残された真衣は、知らぬ土地で母親とはぐれ、途方もない不安と寂しさに胸を痛める、まだ自分ではトイレへ行くこともできない幼い子供さながらの顔をしていた。

その後、美沙が教室に戻ってのきたのは、四時間目の始業を知らせるチャイムが鳴るのと同様同時だった。そのため、真衣は結局、トイレへ行くことがかなわないまま次の授業を受ける羽目になったのだった。

「うふふ、そうだったわね。見た目は高校生でも、一人じゃおしっこもできない赤ちゃんなのよね、真衣ちゃんは。ママかお姉ちゃんがトイレへ連れて行っておっぱいをあげないとおしっこもできないおむつの赤ちゃん」

美沙は含み笑いを漏らしながらすっと右手を伸ばし、伸ばした右手をスカートの中に忍び込ませておむつカバリの表面を指先でそつとなぞった。それに対して、真衣は両脚の腿をきゅつと擦り合わせ、両目を閉じて力なく首を振るばかりだ。

「でも、本当は、一人でトイレへ行ってもなんとかなった筈よ。ほら、これのこと、忘れちゃったのかな？」

美沙は、真衣の頬がほんのりピンクに染まる様子を満足そうに眺めながら、右手をスカートの中から抜き、真衣が着ているセーラー服の胸ポケットをぼんと叩いた。

はっとした顔で真衣が美沙の顔をみつめる。

そこには、美幸が家から持ってきたおしゃぶりが入っていた。保健室で美沙が胸ポケットに押し込み、転げ落ちないようストラップのクリップを胸当てに留めたおしゃぶりだ。

「お姉ちゃんが近くにいない時のためにこのおしゃぶりをポケットに入れておいてあげたのに、肝腎な時に忘れちゃうなんて」

美沙は勝手に胸ポケットに右手を突っ込んでおしゃぶりを取り出し、真衣の目の前で振ってみせた。

「やめてよ、みんなに見られたらどうするのよ!?!」

教師も生徒たちもまだ板書に意識が集中していて、誰もこちらに振り向く気配はない。だが、二人の囁き交わす声に誰が気づくかもしれないのだ。真衣は慌てておしゃぶりをつかみ取ると、おずおずと顔を伏せ、蚊の鳴くような声で言った。

「……忘れてたんじゃない。忘れてたわけじゃないけど、でも……」

そう、真衣は決しておしゃぶりのことを忘れていたわけではない。忘れようとしても制服の生地を通して胸に当たる感触と、視線を落とすたびに映るおしゃぶりストラップのせいで忘れることなどできない。けれど、自分でスカートを捲り上げ、おむつを外して便座に腰かけ、一人おしゃぶりを啜えておしっこをした後、自らの手で再びおむつをあてなければならぬと思うと、どうしてもトイレへ行くことができなかったのだ。おしゃぶりを吸いながらおしっこを出しきって、その後おむつをあてずに教室へ戻ることも考えたが、そうするとあてずにすませたおむつをどこに隠せばいいのか悩ましいところだし、だいいち、スカートの下が丸裸のまま授業を受けられるわけもない。

「せっかく念のためを思っておしゃぶりまで用意しておいてあげたのに、それも使えないなんて、本当に赤ちゃんなんだから。結局、ママかお姉ちゃんがトイレへ連れて行っておむつを外してあげなきゃいけないわけね。でも、だったら、トイレするのも教室でするのも一緒だから、ここでおしゃぶりを啜えておしっこしちゃいなさいな。おむつが濡れたら保健室へ連れて行って取り替えてあげる。それでいいでしょ？ だいいち、おしっこを我慢しすぎてお腹が痛いんじゃない、トレイまで歩くこともできないんだし」

美沙は、いったん真衣がつかみ取ったおしゃぶりを再び奪い取り、真衣の唇に強引に押し付けた。

「ぐ……」

それまで顔を伏せぎみにしていた真衣が首をのけぞらせ、口にふくまされたおしゃぶりを吐き出そうとする。しかし、級友たちの注意を惹かないようあまり体をよじることもできず、悲鳴をあげることもかなわなかったため、美沙の手から逃れることはできない。

「ほら、真衣ちゃんの大好きなおしゃぶりよ。ちゅうちゅうしながらおしっこを出しちゃいなさい」

美沙は幼児をあやすように、しかし、それでいて有無を言わさぬ調子で言って、真衣の口におしゃぶりを押し込む手にますます力を入れた。

「んむ……」

力ない抵抗も虚しく、とうとう教室の中でおしゃぶりを啜えさせられてしまう真衣。

と、下腹部がぶるっと震えて表情が変わる。

「そう、それでいいのよ。今まで我慢してきたで辛かったですよ？ でも、もういいの。おしゃぶりをちゅうちゅうしながらおしっこを出しちゃっていいのよ。出しちゃっても、おむつがちゃんと吸い取ってくれるんだから」

真衣の表情が変わった意味を瞬時に理解した美沙は、もうおしゃぶりを支え持っている手を離しても大丈夫と判断し、すっと身を退いて自分の席に座り直した。だが、僅かに首だけを巡らして横目で真衣の様子を窺うことは忘れない。

美沙が判断した通り、もう真衣がおしゃぶりを吐き出すことはなかった。気持ちとしては



吐き出したくてたまらないのだが、おしっこが出かかって膀胱の負担が僅かながら減少し、それまで絶えず苦しめられていた下腹部の痛みが少しとはいえ楽になるのを感じると、今や排尿には欠かせない小物になってしまったおしゃぶりを口から離すことなど到底できないのだった。

（それでいいわ。クラスのみんなに囲まれておしゃぶりを吸いながらおしっこでおむつを汚しちゃえばいいのよ、これから先もパンツのお姉ちゃんになれない赤ちゃんのままの真衣ちゃん（は）美沙は口には出さず、胸の中で囁きかけてにまっと笑った。

しばらくして、再び下腹部をぶるつと震わせた真衣が呆けたような顔でおしゃぶりを口から離し、それを美沙が胸ポケットに戻してやるのと、長い板書を終えて数学担当の教師が生徒たちの方に振り返るのが殆ど同時だった。

それまで黒板に向かい合っていた教師は板書を終えてこちらに向き直った後、生徒たちが板書の内容をノートに書き写している様子を確認しながら教室内を歩き出したが、真衣の席に近づくと、真衣が鉛筆も持たずに体をこわばらせ、赤い顔をして唇を震わせているのがつくくと、

「どうしたの、佐藤さん？ 気分が悪いんじゃないの？」  
と心配そうに声をかけた。

しかし、真衣は担任と目を合わさないよう視線をそらし、唇をきゅつと噛みしめるばかりだ。

「杉下さんは、佐藤さんが調子悪そうにしていたのがいつごろからかわかる？」

真衣が何も応えようとしないのを見て取った教師は、少し慌てた様子で今度は美沙に問いかけた。

「はい。ひどくなったのは、少し前からです。授業が始まってすぐの頃からちよつとどうかなどという感じだったんですけど、先生が黒板にかかりきりになっている間に急に辛そうにしないで……」

美沙は努めて冷静な口調で応じた。

「そう。だったら、愚図愚図していられないわね。確か、このクラスの保健委員は杉下さんだったわね。急いで佐藤さんを保健室へ連れて行ってあげなさい」

数学担当の教師にしてみれば、今朝の職員会議で真衣の病状について、膀胱の機能に少し変動をきたしている頻尿の傾向が見受けられ、体調を崩しやすくなっているということしか聞かされていないから、真衣の顔が赤いのが、まさか教室でおむつを汚してしまった羞恥のせいだとは想像もつかず、急な発熱のためだと判断して美沙にそう指示するしかなかった。

「わかりました。すぐ連れて行きます」

美沙は、赤い舌を胸の中でべろつと突き出してみせながら、口調だけは冷静さを装って応え、素早い身のこなしで自分の席を立て真衣の肩に手を置くと、

「さ、保健室へ行くわよ、佐藤さん。大丈夫？ 自分で立てる？」

と、いかにも気遣わしげに声をかけた。

教師や生徒たちには、それが、級友の体調を心配する保健委員の言葉にしか聞こえないだ

ろう。しかし、当の真衣にとつては、

「じゃ、ママがいる保健室へ行こうね、真衣ちゃん。大丈夫かな？ 一人でちゃんと立つちできるかな？」

と、級友たちの目の前で幼児扱いされているとしか受け止められない。そのせいで思わず首を振り、体をすくめてしまう。

それに対して美沙は

「そう、自分で立てないの。いいわ、私が立たせてあげる」

と素っ気なく言った後、両手を真衣の脇の下に差し入れると、耳元で

「自分で立つちもできないなんて、本当にまだまだ赤ちゃんなんだから。でも、いいのよ。お姉ちゃんが抱っこして立つちさせてあげるから、ちよっとの間だけじっとしてなさい」と甘ったるい声で囁きかけ、真衣の体を抱えるようにして椅子から立たせた。

と、おしっこをたっぷり吸った布おむつの重みでおむつカバーがずり落ちてしまいそうになる。

真衣は両脚の太腿を擦り合わせておむつカバーがずり下がるのをかるうじて防ぎ、ますます顔を赤く染めて、助けを求めるような目で美沙の顔を見上げた。

「大丈夫、お姉ちゃんが後ろからついて歩いてあげるから。おしっこの重みはお尻の方にかかっているから、少しくらいおむつがずり下がったとしても、前からじゃ殆どわからない筈よ。だから、後ろさえ私の体で隠しちゃえば、真衣ちゃんが恥ずかしい粗相をして恥ずかしい下着を汚しちゃったことなんて誰も気がつかないわよ」

美沙は真衣の背後にまわりこみながら、羞恥を煽るように囁きかけた。

だが、真衣は何も言い返せない。一人で行ってもどうしようもないからとトイレへ行くことさえ諦め、美沙の手でおしやぶりを啜えさせてもらわれないとおしっこをすることもできず、下腹部の痛みを伴う尿意からやと解放されたと思えば、それは赤ん坊そのままおむつを汚してしまった結果だ。しかも、おむつを取り替えてもらうために保健室へ行こうとしても、美沙の庇護のもとでなければ、それさえかなわない。

真衣は、自分が美幸や美沙の手を煩わせなければ一人では何もできない、それこそ手のかかる幼児めいた存在になり果ててしまったことを改めて痛いほど思い知らされた。同時に、美幸と真衣に対する依存心が胸の奥底で次第次第に膨れあがってきているのだが、どうやら、そのことにはまだ自分では気がついていないようだった。

半ば強引に椅子から立ち上がらされ、ずり落ちそうになるおむつを誰にも気づかれないように、幼い子供が母親にすぎる姿そのまま美沙の体に寄り添うようにしてゆっくり歩き出す真衣。教師と級友たちは、教室を出て行くそんな真衣と美沙の後ろ姿を気遣わしげな視線で見守っていた。だが、ただ一人、園田茉莉だけは、視界を阻む美沙の体を見透かしてしまいそうなほどじっと目を凝らして真衣の下腹部のあたりを見据えていた。

幾つもの視線を一身に集めて教室をあとにして廊下を歩き、階段をおりて、一階にある保健室へ向かう真衣の足取りは重かった。いや、重いというよりも、覚束ないと表現した方が正確だろう。たっぷりおしっこを吸って今にもずり落ちそうになるおむつを両脚の腿を擦り

合わせるこ  
とでかろう  
じて支え、  
下腹部にま  
とわりつく  
ぐっしより  
濡れた感触  
に耐えて歩  
くのだから  
そうなって  
しまうのも  
仕方ないの  
だが、すぐ  
後ろに大柄  
な美沙が寄  
り添い歩い



ているものだから、その対比もあって、小さな歩幅でゆっくり足を進める真衣の姿は、ようやくよちよち歩きが出来るようになったばかりの幼児さながらだ。

それに、授業中とはいっても、廊下や階段に人影がまるで無いわけではない。校内の見回りをする教頭や、次の授業に備えて資料室や各教科の準備室に入ったりする教師たちと時おりすれ違う。そのたびに真衣はおどおどと美沙の背後に隠れようとするのだが、美沙はそんな真衣をわざと前に押しやり、自分が会釈するのに合わせて真衣にも頭を下げさせるのだった。対照的なそんな二人の様子は、とてもではないが同級生とは思えない。ましてや、本当は真衣の方が美沙よりも一年近く年上だと言っても信じる者など一人もいないに違いない。

\*

「やっと来たわね。そろそろかなと思って待っていたのよ」

美沙に手を引かれて覚束ない足取りで保健室に入ってきた真衣の姿を見るなり、美幸はすつと目を細め、待ちかねたかのように言った。

「うふふ。可愛い娘と離れ離れになって寂しかった？ でも、ちゃんと連れてきてあげたわよ」

美沙が悪戯めいた口調で言い、真衣のお尻をぼんと叩いた。

その拍子に、真衣は思わずとつとつという感じで美幸のすぐそばまで押しやられ、前のめりに倒れまいとして脚を踏ん張ったものだから、それまでなんとか受け止めていたおむつが幾らかずり下がってしまう。同時にスカートの裾がふわっと舞い上がり、おしっこを吸った布おむつの重みでお尻の部分が垂れ下がりがみになっているおむつカバーが三分の一ほどあらわになった。

「授業中にしくじっちゃうなんて本当に困った子だこと。ま、ばつと見た目は高校生だけど中身はおむつの赤ちゃんなんだから仕方ないんだけど」

美幸はひよいと腰をかがめると、真衣の両脚の間に右手を差し入れ、おしっこを吸ったおむつの重さを確かめるかのようにおむつカバーの垂れ下がった部分を掌に載せて言った。口先では『困った子』と言いなながらも、顔には満足げな笑みを浮かべている。けれど、美幸の本心がどちらにあるかは、これまでの言動を思い出せば明らかだろう。

それを受けて美沙が

「そうよ、本当に困った子なのよ。休憩時間に自分でトイレをすませておくわけでもないし、おしっこをしたくなって堪らなくなっても私がおしやぶりを啜えさせてあげないとできないし、やつとできたと思ったらおむつを汚しちゃうし。このぶんだと、午後も授業中に教室を抜け出さなきゃなるでしょうね。一日に何度も授業を中断させるだなんて、先生方にもクラスのみんなにも迷惑がかかるから、どうにかしなきゃいけないんじゃないかしら」

と、こちらはわざと呆れたように言って、何の予告もなしに真衣のスカートのサイドファスナーを手早く引き下げた。

「たしかに、このままじゃ、高校生の中に幼稚舎の年少さんが紛れ込んでるようなものだから、みんなに迷惑がかかってしょうがないかもしれないわね。わかった、どうすればいいか考えておくわ」

空気をふくんでばさつと落ちてくる真衣のスカートを、それまでオムツカバーに押し当てていた右手で巧みに受け止め、腰を伸ばしながら、美幸は意味ありげな口調で応じた。

美幸の瞳に宿る妖しい光に気づいた真衣の胸が不安にざわめく。

「でも、それは後のこと。今はおむつを取り替えてあげるのが先決ね」

不安の色をたたえる真衣の顔を見てくすつと笑いながら、美幸は右手のスカートを付き添い椅子の背もたれにかけ、二時間目が終わるまで真衣を寝かせていたベッドの毛布を捲り上げた。

途端に真衣の頬がかつと火照る。

毛布の下にはおねしょシートが敷いてあった。

「例の業者さんが、追加分のおむつカバーを配達してくれた時、サービスについてこれも持つてきてくれたの。おむつカバーを使うのがどういう人かわかりませんが、おむつを取り替える時に保健室のベッドを汚したりしたら後々手間がかかることになるんじゃないか心配だからとか言って気を遣ってくれてね。お家から持ってこようかとも思ったんだけど嵩張るから取り敢えず見合わせていたんだけど、これで安心ね。というわけで、当分、このベッドは真衣ちゃんの専用かな」

美幸は、真衣にはではなく、わざとらしく美沙に向かって説明した。美沙が真衣の保護者だということ態度でしめすためのなの言うまでもない。

「よかったわね、真衣ちゃん。これで、おむつを取り替えてもらう時、少しくらい暴れても大丈夫よ。おむつの交換を嫌がって逃げ回ったり、おしやぶりを取り戻そうとしてお姉ちゃんのことを追いかけてまわすようなお転婆さんにはびったりじゃない。今度、その業者さんに会ったらお礼を言わなきゃいけないわね。可愛いおねしょシートをありがとうって。それと、

こんなに可愛らしいおむつカバーをつくってくれてあるがどうって、スカートを捲って、おむつカバーを見てもらいながらお礼を言わなきゃね。——あ、そうそう。ママから聞いたんだけど、その業者さん、追加分のおむつカバーをわざわざ学校まで配達してくれたんだそうよ。せっかくだから、新しいおむつカバーも使ってみようね」

美沙が真新しいおねしょシートと真衣の顔を見比べながら言い、収納棚の前に移動して、上から二番目の引出を開けた。

「ほら、新しいおむつカバーはこんな柄になっているのよ。ママが手芸用品のお店で選んでくれた生地できてるの。今のもいいけど、これも真衣ちゃんのお気に入りになりそうね」引出から取り出した新しいおむつカバーを両手で広げ持ち、わざと丁寧に裏返してみせたり、マジックテープを外して内側をみせたりして美沙は言った。それから、真新しいおむつカバーをベッドの端にそっと置いた後、もういちど収納棚の引出に両手を突っ込んで、やはり真新しい布おむつを十枚ほど抱え上げると、

「あ、それと、これもね。せっかく新しいおむつカバーを使うんだもの、おむつも新しいのにしてあげる」

と、真衣の目の前に歩み寄って、水玉模様や動物柄のおむつをこれみよがしに突きつけた。

目の前に差し出されたのは、何度も洗濯を繰り返したおむつではなく、端に真衣の名前を刺繍したおむつではなかった。美沙が両手で抱えているのは、まだ水通しもししていない真っ新のおむつだった。しかも目を凝らせば、市販の仕上がりおむつに比べて縫い目が幾らか雑なのが見て取れる。その上、おむつの柄には見覚えがあった。

「……！」

それがどういうおむつなのか気づいた真衣は今にも叫び出しそうな顔になったが、わなわな震える唇からは弱々しい呻き声も漏れ聞こえない。

「何度も洗濯をしたお下がりの柔らかいおむつもいいけど、同じクラスのお友達が愛情を込めて縫ってくれたおむつも素敵だと思うわよ。みんな、真衣ちゃんが教室を出て保健室へ来るのを、心配そうに見送ってくれたでしょう？ あんなに友達思いのクラスメートが縫ってくれたおむつだもの、水通しなんてしてなくても真衣ちゃんのお尻を優しく包んでくれる筈よ」

美沙は真衣の目の前を離れ、ベッドの端に置いたおむつカバーの上に、十枚ほどの布おむつを一枚ずつ丁寧に重ね置いてから、再び真衣のもとに歩み寄り、手首をつかんでベッドの脇に引き寄せた。

「で、でも、それって育児実習の……」

およその事情を理解しながらも、自分の理解の仕方が間違いであつてくれと祈るような気持ちで真衣は力なく抗弁した。だが、語尾が震えて最後まで言葉にならない。

「うふふ。確かに、瀬尾先生はそんなふうの説明してみんなにおむつを縫わせたわね。真衣ちゃんがそう思い込みたいなら思ってもいいのよ。瀬尾先生にちよつとお願いすれば、それも嘘じゃなくなるんだから」

美沙は自分の腕を真衣の背中とお尻にまわし、横抱きに抱えあげるようにして真衣をベッドの上に押し上げながら意味ありげに含み笑いを漏らした。

「え……？」

真衣の顔に、不安に満ちた表情がみるみる浮かぶ。

「簡単なことよ。育児実習っていつても、実習用の人形しか使っちゃいけないってわけじゃないんだから。人形の代わりに真衣ちゃんを練習台にしておむつのあて方を教えてくれるよ。瀬尾先生にお願いすることもできるのよ。そうしたら、育児実習に使って、同時に、真衣ちゃんがおもらしをしても大丈夫なようにも使えるじゃない？ 瀬尾先生は家庭科クラブの顧問だもん、私からお願いでお願いしてあげようか？」

美沙は、真衣をおねしょシーツの上に横たわらせ、おむつカバーに重ねたおむつの内の一枚をつかみ上げると、くすつと笑って言った。

途端に、真衣の頭の中に、級友たちがまわりを取り囲む家庭科実習室の大きな机の上に横たわらされてお尻の下に水玉模様の布おむつを敷き込まれた自分の姿が浮かび上がる。

「い、いや……そんなの、そんなの、絶対にいやなんだからあ！」

真衣は悲鳴じみた声をあげた。

「そう、いやなの。だったら、このおむつは育児実習じゃないってことでいいわね？」

美沙にかわって美幸が念を押すように言った。

「……」

真衣はぎゅつと両目を閉じ、顔をそむけた。

「ふうん、じゃ、やつぱり、育児実習にしか使っちゃいけないのかな」

美幸はわざと優しい口調で重ねて訊いた。

それに対して真衣は目を閉じたまま力なく首を振る。

「育児実習じゃなくていいのね？」

美幸は、優しい声のまま、これが最後よとでもいうように短く訊いた。

一瞬だけ間があって、おねしょシーツの上に横たわったまま、真衣が、よく見ていないとわからないほど小さく頷いた。

「それでいいのよ。最初からそんなふうに聞き分けよくしていればよかったのに」

つかみ上げた布おむつを再びおむつカバーの上に戻し、美沙はひよいと肩をすくめた。

「それじゃ、あとは私にまかせて、美沙は教室に戻りなさい。あまり長居しすぎると変に思われるかもしれないから」

美幸は、ベッドの周囲を移動し、目の前に横たわっている真衣のセーラー服の裾を少し捲り上げ、おむつカバーの前当てに指をかけながら美沙に言った。

「私は別に変に思われてもいいんだけどな。っていうか、変に思われて、それがきっかけになって本当のことをみんなに知ってもらいたいくらいなんだけどな」

美沙は冗談めかして言ったが、真衣が弱々しく首を振るのを目にする

「ま、いいや。とりあえず、教室に戻るね。四時間目が終わったらお弁当を持ってきてあげるから、真衣ちゃんは、ママにおむつを取り替えてもらった後もおとなしくねんねしているといいわ。お口が寂しくなったら、ポケットの中のおしゃぶりをちゅうちゅうしてればいいから、むずがっちゃ駄目よ」

と、くすりと笑って言い、何度か真衣の様子を窺うように振り返りながら保健室から出て行

った。

「さ、お姉ちゃんも言っていた通り、お口が寂しくないようにしておむつを取り替えようね」

美沙が出て行くのを確認してドアに錠をおろしてから、美幸が真衣の制服の胸ポケットをまさぐっておしやぶりを取り出し、唇に押し当てた。

それを真衣が反射的に舌の先で押し返そうとする。

「ふうん、おしやぶりがなくてもお口は寂しくないんだ。だったら、もう真衣ちゃんは赤ちゃんとじゃなくてお姉ちゃんね。お姉ちゃんだから、体育の授業になったらみんなと一緒に教室でお着替えできるわね」

美幸は、昨日の夕方おしやぶりをいやがった真衣に対して言ったのと同じような言葉を囁きかけた。

途端に真衣の唇がのろろ開いて、おずおずとおしやぶりを啜える。

「なあんだ、やつぱりお口が寂しかったんじゃない。遠慮なんてしなくてもいいのよ、おしやぶりをちゅうちゅうしたくなったらいつでも啜えさせてあげるから」

美幸は、真衣がくちゅくちゅとおしやぶりを吸うのを見て満足そうな笑みを浮かべ、今や真衣専用になった収納棚の前に移動すると、小振りの引出からお尻拭きと薬の容器を取り出した。

と、からんかろんという軽やかな音色が保健室の中に響き渡る。

はっとした顔で眼を開き、音のする方に顔を向けた真衣の目に映ったのは、美幸が右手で振っているガラガラだった。

「お口だけじゃ駄目だったわよね。真衣ちゃんはお手々が寂しいとご機嫌斜めになっちゃうから、これもお家から持ってきておいてあげたのよ。さ、自分で持つてからころしようにね」

わざと大きな仕草でガラガラを振ってみせながら元の場所に戻ってきた美幸は、お尻拭きや薬の容器をベッドの端、美沙が用意したおむつのすぐそばに置いて、真衣にガラガラを握らせた。もちろん、

「赤ちゃんがおしやぶりと同じくらい大好きなおモチヤだから、勝手にガラガラから手を離すことなんてないわよね。もしもガラガラを持ってないとしたらお手々の力が弱くなっているってことだから、ちゃんと握れるようになるお薬を注射してあげないとね」

と、勝手にガラガラを放り出したりしたら昨日の筋肉をこわばらせてしまう薬剤を投与するわよと仄めかすのを忘れない。

真衣には、唇の代わりにおしやぶりをきゅつと噛みしめてガラガラを受け取るしかなかった。

けれど、まだ辱めが終わったわけではない。美幸が家から持つてきて引出にしまっておいたのは、それだけではなかった。

「おしやぶりをちゅうちゅうしていると、よだれがこぼれちゃうわよね。制服の胸当てや大きな襟によだれの跡が付いちちゃって、それに誰かが気づいたりしたら、恥ずかしい目に遭うのは真衣ちゃんだもん、そんなことにならないよう、これをしておこうね」

美幸は、右手にガラガラを持ち、口におしゃぶりをふくんだ真衣のセーラー服の胸元を大きなよだれかけで覆った。

「い、いや……」

おしゃぶりに抑えつけられて舌と唇が思うように動かせない真衣がぐもった声で呻いた。途端に、おしゃぶりを吸っているせいで口の中にじわじわ溜まってきた唾がよだれになって唇の端から溢れ出し、一条の筋になって頬を濡らす。

「ほら、言ってる端から。だから、ちゃんとしておかないといけないのよ」

美幸はよだれかけの端で真衣の唇と頬を拭い、首筋の後ろと背中とでよだれかけの紐を手早く結わえた。

「うん、これでいいわ。じゃ、少しの間だけおとなしくしているのよ」

スカートを脱がされた下半身はおむつカバー、上半身はセーラー服を着ているものの、その胸元はよだれかけに覆われて、制服のリボンを半分ほど覗かせ、右手にはガラガラを持って口におしゃぶりをふくんでいるという、なんとも奇妙で、同時にひどく倒錯的な艶めかしさを漂わせる真衣の姿を無遠慮に眺めまわして、美幸はおむつカバーに指をかけた。

「いや……」

思わず真衣は身をよじって呻き声をあげた。今度はよだれが顎先から胸元に伝い落ちてよだれかけを濡らす。

「おとなしくしてなきや駄目よ。暴れたりしたら、おしっこがおむつから沁み出して制服の裾を濡らしちゃうから。そんなことになったら困るでしょう？」

自分はまるで困るふうもなくそう言い、美幸はマジックテープを剥がして外したおむつカバーの前当てを真衣の両脚の間に広げると、続いて横羽根に手を伸ばした。

「あらあら、たくさん出しちゃったのね。でも、ママの言いつけを守ってちゃんと二時間以上我慢できたんだもの、お利口さんだったわね。これからもこの調子でなるべくトイレの回数を減らすように頑張ろうね。我慢すぎて授業中にしくじっちゃってもおむつが吸い取ってくれるんだから安心だし」

前当てを外すと、おしっこを吸って薄い茶黄色に染まったおむつがあらわになる。美幸は、まだ湯気を立てていそうなおむつに目をやりながらおむつカバーの横羽根を真衣の体の左右に広げ、両足の足首を左手で一つにまとめてつかんで、そのまま高々と差し上げた。

「でも、おむつを汚しちゃうたら、すぐに美沙お姉ちゃんに教えなきや駄目よ。濡れたおむつのままでいると、おむつかぶれが余計にひどくなっちゃうんだから。おむつかぶれを若い男のお医者様に診ていただくのは恥ずかしいでしょう？」

真衣の両足を高く差し上げたまま、美幸は、ぐっしり濡れて下腹部の肌にまとわりつく布おむつの端を空いている方の右手で持ち上げ、おむつカバーの前当ての上に重ねた。そうして、そのままおむつカバーごと手前にたぐり寄せ、おむつカバーで丸く包むようにしてベツドの隅に置く。

「さ、おむつを取り替えるたびに美沙お姉ちゃんが丁寧に薬を塗ってくれるから、おむつかぶれは少しマシになったかな。優しくお世話をしてくれる妹思いの美沙お姉ちゃんにありがとうを言っておかないといけないわね」



美幸は右手でお尻拭きを容器から抜き取り、目の前にある真衣の下腹部に押し当てた。

「ん……」

真衣の体が僅かにのけぞり、あえかな喘ぎ声が唇を衝いて出る。

「おむつカバーの中はどうしても蒸れちゃうわよね。ただでさえ通気性が良くないからすぐに湿っぽくなるのに、たくさんおしっこをしちゃったら、いやっていうほど蒸れちゃうわよね。だから、おむつを外してもらってお尻拭きで綺麗綺麗してもらおうと気持ちがいいでしょう？」

美幸は、真衣の下腹部がひくひく震える様子を凝視しながらひとしきりお尻拭きを動かし、しばらくして、塗り薬を人差指の先に掬い取った。

「さ、おしっこの跡を綺麗にした後は、おむつかぶれのお薬よ。これを塗っておけば、赤くなっちゃった真衣ちゃんのお肌もじきに元通りのつるつるになるからね」

美幸は先ず、先に掬い取った薬を真衣の下腹部に満遍なく塗りつけた。こちらは、皮膚の炎症を抑えて元通りの瑞々しさを取り戻す効能を持つ薬だ。そうして、次の容器から別の薬を掬い取り、今度は秘部を中心に、今は一本残らず剃り落としてしまった飾り毛が生えているあたりに、さつきとは比べようもないほど入念に塗り込んでゆく。こちらこそ、真衣の下腹部の肌を文字通り『つるつる』にするための薬だった。そう、まだ初潮を迎える前、ちぢれた飾り毛など一本も生えていない頃の童女の肌に戻すための。

「準備はこれでいいわね。さ、お待ちかねの新しいおむつよ。真衣ちゃんのクラスメートが愛情を込めて縫ってくれた新しいおむつは、ふかふかで優しい肌触りに仕上がっているわよ」

続いて美幸は、美沙が用意していたおむつとおむつかバーを引き寄せ、真衣の足首を更にも高く差し上げて、お尻の下にそっと敷き込んだ。

「あ……」

真衣のから再びなまめかしい喘ぎ声が漏れ、よだれが細い条になってよだれかけに滴り落ちる。

「とつても柔らかでしょう？ 同じクラスのお友達が縫ってくれたおむつはとっても柔らかで気持ちいいでしょう？」

美幸は、布おむつを一枚ずつわざとゆっくり真衣の両脚の間を通してお腹の上にまわし、無毛の下腹部を包み込んでゆく。

「そりゃ、美沙お姉ちゃんの妹から貰ったお下がりの方がずっと柔らかいわよ。でも、大丈夫。これから真衣ちゃんは何度も何度もおもらしやおねしよで新しいおむつを汚すの。そのたびにママやお姉ちゃんがお洗濯をしてあげる。そうやって繰り返しお洗濯をしているうちに、新しいおむつも、お下がりのおむつと同じくらい柔らかくなってくるんだから。そうよ、真衣ちゃんがしくじるたびに、おむつはどんどん柔らかくお肌に優しくなっていくのよ」

十枚ほどのおむつを残らずあて終えた美幸は真衣の足をベッドの上におろし、改めておむつの位置を整えてから、左右の横羽根をおへソのすぐ下でしっかり留めた。

「さつきはおしっこを吸ったおむつがずり落ちそうになっていたわね。だから、今度は横羽

根をしつかり留めておいてあげる。それに、横羽根に重ねる前当ても。こうしておけばたっぷりおしっこを吸ってももうおむつカバーがずり落ちることはないから心配しなくていいわ。安心して、たくさんおしっこを出しちゃっていいのよ」

美幸は、左右の横羽根どうしが互いにしつかり留まっていることを確認してから、おむつカバーの前当てを重ね、これもマジックテープでしつかり固定した。それから、おむつカバーの股ぐりからはみ出しているおむつを指の腹で丁寧におむつカバーの中に押し込んでゆく。「これでいいわ。これで、真衣ちゃんがいっもおもらしをしちゃっても大丈夫。クラスのみんなが縫ってくれたおむつがちゃんと吸い取ってくれるから」

美幸は、息がかかるほど真衣の下腹部に顔を近づけ、はみ出しているおむつがもう無いことを確認して、にこりと微笑んでみせた。これ以上はないくらい優しい養護教諭としての表情と、愛娘を慈しんでやまない母親としての表情とがない混ぜになった、とびきり優しそうな微笑み。その裏に想像を絶するほどに歪んだ異形の母性本能がひそんでいるなどと誰が想像できるだろう。

「それじゃ、ママは、真衣ちゃんが一時間に汚しちゃったおむつと、今取り替えてあげたばかりのおむつをお洗濯しておくから、その間、真衣ちゃんはねんねしててね。クラスのみんなが新しいおむつを縫ってくれたからもう枚数は充分だけど、汚れたおむつをバケツに入れたまま長いこと放っておくとおしっここの匂いがこもっちゃうから。さ、子守唄を歌ってあげるから、いい夢を見るのよ」

四時間目になって気温が上がってきたところに、ブラインドを開け放った窓からは春のうららかな日光が差し込んでいるものだから、保健室の中は暖かいというよりも、いささか汗ばむほどだ。美幸は真衣の体に毛布をかけることもせず、お腹をぼんぼんと優しく叩きながら、よく通る声で子守唄を口ずさんだ。

「い、いや……こんな、おむつカバーやよだれかけが丸見えのまま眠るなんて、そんなの、そんなの……」

真衣は美幸に向かって弱々しい声で訴えかけた。しかし、毛布をかけて恥ずかしいおむつカバーや大きなよだれかけを覆い隠してくれるよう懇願する前に言葉が途切れ、すやすやと寝息をたて始めてしまう。

「せっかく可愛らしい格好をしているんだから、毛布で隠しちゃうなんて勿体ないわよ。それに、これだけ暖かいと、毛布をかけなくても、おむつかぶれが簡単には治らないくらいにおむつカバーの中が蒸れるでしょうしね。いちいち毛布をかける手間が省けて助かるわ」

後催眠の効果によって瞬く間に眠りに墜ちた真衣の寝顔をいとおしげに見おろす美幸の瞳が妖しく輝いた。

## 《二四》 クラスメートの目の前で》

体を揺すられて真衣が目を覚ますと、膝に広げたハンカチの上に小振りの弁当箱を置いた美沙がベッド脇の椅子に腰かけてこちらの様子をじっと窺っており、真衣の臉が開いたのを見て取る。

「二時間目が終わって迎えにきてあげた時と同じで、気持ちよさそうにねんねしてたわね」と、真衣の頬をつんとつつき、自分の膝の上の弁当箱を持ち上げた。

「ほら、お弁当を持ってきてあげたから一緒に食べようね。ここならママと一緒に家族水入らずで食べられるわよ」

そう言われて真衣が反射的に首を動かし、執務机の方に目をやると、たしかに、事務椅子に腰かけている美幸の目の前に、美沙の膝の上に乗っているのよりも幾らか大きな弁当箱が二つ並んで置いてあるのが見えた。どうやら、その二つが美幸と美沙の分らしい。

「さ、おつきさせてあげるから、まんまにしようね。お姉ちゃんが食べさせてくれるから、真衣ちゃんは何もしなくていいのよ。ただ、ベッドの上におとなしくお座りしてればいいの」

真衣の返事を待つこともなく、事務椅子から立ち上がった美幸が真衣の背中に手をまわして上半身を抱え起こした。

その拍子に、右手に持ったままのガラガラが揺れて、からころと音をたてる。赤ん坊なら、その軽やかな音色にきやつきやつと声をあげて喜ぶところが、高校生の真衣にとつては羞恥を掻き立てられるばかりだ。だが、ここでガラガラを放り出したりしたら、それを口実にどんな仕打ちが待っているかしたくない。

「ママの言う通り、まんまはお姉ちゃんが食べさせてあげるから、真衣ちゃんは大好きなガラガラを持ったままでいいのよ。うふふ。それに、おしゃぶりもちゃんと啜えたままねんねしていたのね。そうよ、それでいいのよ。真衣ちゃんはおしゃぶりが大好きだから。おしゃぶりを啜えさせてもらおうと嬉しくなっておもらしをしちゃうほどおしゃぶりが大好きなんだから。でも、まんまの時はないしておこうね。おしゃぶりを啜えたままだとまんまを食べさせてあげられないもんね」

美沙は、真衣が持ったままのガラガラを人差指の先でぴんと弾くと、やはりこちらも寝つかされる時に啜えさせられたままになっているおしゃぶりの胴の部分の人差指と親指の先で挟んできゅっきゅとしぼませたり膨らませたりしてみせてから、そとつかみ取った。そうして、手にしたおしゃぶりの口にくむ部分を、真衣の胸元を覆っている大きなよだれかけで丁寧に拭い、制服の胸ポケットに押し込む。

その後、美沙は膝の上に乗せた弁当箱の蓋を取り、色とりどりのおかずの中から卵焼きを選んで箸でつかみ上げ、真衣の口ではなく自分の口の中に放り込んだ。もちろん、昨日の夕飯と同様、口移しで真衣に食べさせるためだ。

「や、やだ……」

昨夜は空腹のあまり美沙が咀嚼した食べ物を口移しで食べた真衣だったが、学校の保健室で同じことをさせられるとなると、思わず身を退いてしまう。しかし、美幸の手に阻まれて後ずさりもできない。抵抗も虚しく、あつという間に真衣の唇に美沙の唇が重ね合わされた。だが、それでも真衣は口をつぐみ、美沙が舌で押し出すどろどろになった卵焼きを頑なに拒み通す。

やがて、行き場を失った卵焼きが真衣の唇を汚しながら溢れ出し、セーラー服の胸元を覆っているよだれかけに向かって、唇から顎先にかけて残るよだれの跡に沿うようにしてねとつと伝い落ちた。

「どうしたの、真衣ちゃん？ 昨日の夕方は美沙お姉ちゃんの口移しであんなに美味しそうにまんまを食べていたのに、どうして今日は駄目なの？ ほら、ちゃんと食べないとお腹が空いちやうわよ」

真衣の上半身を支えている手で背中をぼんぼんと叩きながら、美幸がわざと不思議そうに言った。

だが、真衣は何も応えない。応えないというよりも、僅かでも口を開いたら、そこから原型を残さないほど咀嚼された卵焼きを強引に押し入れられそう、応えられない。

「ひよつとしたらお目々が覚めたばかりでお腹が空いてないのかしら。だったら、無理に食べさせるのは可哀ね。いいわ、真衣ちゃんはこのままにしておいて、私たちだけ先に食べちゃいましょう。真衣ちゃんにかかりきりで美沙が五時間目の授業に遅刻したら大変だから」

顎先とよだれかけを黄色に汚したままだんまりを決め込む真衣の顔を覗き込んだ後、美幸は美沙に向かって言い、再び真衣の方に向き直ってこんなふうにつけ加えた。

「でも、まんまを食べないで午後の授業を受けたら途中でお腹が空いちやうでしょうね。あ、だけど、おしゃぶりがあるからいいのかな。お腹がすいても、おしゃぶりをちゅうちゅうしていれば我慢できそうだもんね。ただ、おしゃぶりをちゅうちゅうしてるとどうしてもよだれがこぼれちやうから、よだれかけはこのまま着けておかなきゃね。うん、それでいいわ。授業中もちゃんとよだれかけを着けておしゃぶりを啜えているんだったら、今はまんまを食べなくても、ママ、真衣ちゃんのこと叱ったりしないわよ」

真衣の顔色が変わった。美幸が冗談で言っているのではないことは明かだ。このまま口移しの食事を拒み続けたら、本当によだれかけを着けたまま保健室から追い出されてしまうに違いない。

真衣が逡巡したのは、一瞬だけのことだった。

「ご、ごめんなさい。ちゃんと食べる。食べるから許して……お、お姉ちゃん。真衣にまんまを食べさせて。昨日みたいに優しく口移しで食べさせて、お願いだから」

美沙と目を合わせないようにして、真衣は今にも消え入りそうな声で言った。

「いいわよ。まんまをおねだりする可愛い妹を邪険に扱うお姉ちゃんなんているわけないもん、ちゃんと食べさせてあげる。じゃ、今度はほうれん草のおひたしね」

美沙はこともなげに応えて弁当箱からほうれん草をつかみ上げて自分の口に放り込むと、緑色のペーストみたいになるまで入念に咀嚼してから真衣と唇を重ね合わせた。

それから美沙が様々な食物をどろどろになるまで咀嚼し、真衣と繰り返し唇を重ね慌て弁当箱が半分ほど空になった頃、インターフォンの呼び出し音が鳴った。

「はい、どうしました？」

真衣と美沙の食事風景を見守っていた美幸がくるりと体の向きをかえてインターフォンの応答ボタンを押す。

『一年三組の園田です。佐藤さんの具合を伺いに参りました』

返ってきたのは、一時間目の途中と同様、茉莉の声だった。

「わかりました。すぐに開けます」

事務的な声で応じると同時に、美幸は美沙に向かって目配せをした。

咄嗟に美沙は弁当箱を包んでいたハンカチで真衣の顎に残るねっとりした卵焼きの跡を拭き取り、そのままベッドに横たえさせて、その上から毛布をかけた。胸元まで毛布で覆ってしまえば、おむつカバーやよだれかけが目につくこともない。おしゃぶりは既に胸ポケットの中だし、ガラガラも、手に持ったまま毛布の中に隠せば見られずにすむ。

茉莉を迎え入れる準備を手早く済ませた美沙が無言で目配せをし返すと同時に、美幸がドアの錠を解いた。

音もなく開いたドアから入ってきた茉莉はベッドに横たわっている真衣と、そのすぐそばの椅子に腰かけている美沙の方にちらと目をやってから、真っ直ぐに美幸の目の前まで歩み寄り

「佐藤さん、五時間目の授業には出席できそうでしょうか？ もしもまだ無理のようなら今から職員室にまわって連絡をしておきたいと思います。その方が先生のご迷惑になりませんから」

と、相変わらず落ち着き払った声で尋ねた。

「いえ、もう大丈夫よ。昼休みの間だけ休んでいれば五時間目の授業には出席できるから、受け持ちの先生に連絡するには及ばないわ」

茉莉の問いかけに、美幸が少し考えるふりをしてから応える。

「わかりました。それでは私は教室に戻りますが、佐藤さんのことはよろしくお願いします」

茉莉はそう言って深々と頭を下げた。

と、執務机の上に二つ並んで置いてある弁当箱が目映る。どちらも、蓋は外れているものの、まだ全くの手つかずだ。

「あ、佐藤さんに付ききりでお昼がまだお済みじゃなかったんですね。杉下さんもまだお弁当を食べてないみたいだし、あまり無理をして自分が体をこわさないよう気をつけなきゃ駄目よ」

中身がまるで減っていない弁当箱を目にした茉莉は二人に向かって気遣わしげに言った。

だが、美沙の膝の上に載っている小振りの弁当箱に気がつく、訝しげな表情を浮かべて問い質した。

「それ、佐藤さんのお弁当でしょう？ どうして、半分ほど空になっているの？ 横になっ

たままなのを見ると佐藤さん、食欲がなさそうに思えるんだけど、鈴木先生も杉下さんもまだお弁当を食べていないのに、どうして佐藤さんのお弁当が減っているの？」

「いえ、これは……」

思いがけない問いかけに美沙は言葉に詰まった。

そこへ追い討ちをかけるように、茉莉は美沙の顔と真衣の顔を交互に見比べ、ますます疑惑の色を濃くして重ねて訊いた。

「杉下さんの唇も佐藤さんの唇もなんだか緑色になってるんだけど、それってどうしたの？ うっすらとだからよくはわからないけど、薬か何かの色素とかじゃなくて、野菜みたいな自然な緑色に見えるんだけど、それって何の色？ どうして二人揃って唇にそんな色が付いているのかしら？」

「あ、あの……」

どろどろの卵焼きが伝い流れた跡は拭い去ったものの、茉莉に指摘されるまでさつき口移して食べさせたばかりのほうれん草の色が自分と真衣の唇に付着したままなことに気づかずにいた美沙は、普段の済まし顔からは想像もつかないほどの困惑の表情を浮かべた。

（や、やだ。このままだったら、園田さんに私たちの関係を気づかれちゃう。そんなことになったら。そんなことになったら……）一方、ぎゅっと目を閉じて美沙と茉莉の会話を耳を傾けていた真衣は不安のあまり身をすくめるばかりだ。その拍子に、毛布の下で右手が無意気のうちに動き、右手に握ったままのガラガラを僅かながら振ってしまう。

からころ。

からころ。

意識して振ったわけではなく、毛布越しだから、ガラガラが奏でる音はいつもよりも弱い。それでも、そこに居合わせた四人の耳に届くには充分な音の大きさだった。

「今のは……？」

高校の保健室にはおよそ似つかわしくない音色を耳にした途端、美沙を問い詰めんばかりにしていた茉莉の顔にきよとんとした表情が浮かんだ。だが、まさか赤ん坊が大好きな玩具の音がこんな所に響き渡るなどとは想像もつかず、聞こえたのも僅かな間だけだったため音の出所を探ることもかなわず、あたりをきよるきよる見まわすばかりだ。

そこへ、今度は、ピピピという電子音が四人の耳を打つ。

茉莉が、はっとしたような顔になって音のする方に振り向いた。僅かな間しか聞こえなかったガラガラの音色とは違ってまだ鳴りやまないから、どこから聞こえるか見当がつけやすい。

「何かの警告音でしょうか。まさか火事じゃないとは思いますが、見てきます」

ガラガラの軽やかな音色とは対照的な無機質な電子音を耳にしてこれ以上はないくらい真剣な表情を浮かべた茉莉は、日頃の生真面目な性格を発揮し、保健室の奥にあるドア越しに電子音が聞こえていることを確認すると、そちらに向かって緊張した面持ちで歩き出した。

対照的に、電子音の正体を知っている美幸は、美沙に向かって苦笑交じりに軽く肩をすくめてみせるばかりだ。

「え……!？」

どこかおそるおそるといった様子で奥のドアを開けた茉莉は、電子音の出所を確認した途端、それまでの緊張した面持ちから呆気にとられたような顔に変わった。

電子音を出しているのは、ドアを開けてすぐの所にある洗濯機だった。大きな液晶パネルに表示されている作動模式図に目をやると、洗濯機能から乾燥機能に移行したことを告げるおしらせアラームが電子音の正体らしいということが見て取れる。

「ごめんなさい、びっくりさせちゃって。ドアを開ける前に教えようとしたんだけど、園田さんがあまり真剣な表情だったから、つい言いそびれちゃって」

哑然とした表情で洗濯機をみつめる茉莉に、背後から美幸が声をかけた。

「……いえ。危ないことじゃなくてほっとしました。私こそ早とちりしてしまっただけです。申し訳ありません」

茉莉はぶるんと首を振って気を取り直し、いつもの生真面目な顔に戻って応じた。

だが、目の前で動いている洗濯機を見ているうちに、再び訝しげな表情が浮かんでくる。

洗濯機が洗濯機能から乾燥機能に移行してすぐの頃は、洗濯物はまだ脱水が終わったばかりで、斜めドラムの中でもあまり大きくは動かない。それが少し時間が経って次第に乾いてくると、ドラムの回転に合わせ、温風をふくんでふわっと広がり、ドラムの中いっぱいを舞うようになる。乾燥機能付きの斜めドラム式洗濯機は扉が透明になっているため、乾燥が進むにつれ次第にドラムの中を軽々と動きまわるようになる洗濯物の様子を目視で確認することも簡単だ。

最初は何気なく透明な扉越しに洗濯機の中に目をやった茉莉だが、ドラムの中で温風をふくんでふわふわ舞う布地を見ているうちに、いつしか怪訝な顔つきになってきたのだ。

「どうしたの？ 何か腑に落ちないような顔をしているわね」

思わず腰をかがめて洗濯機の中をじっと覗き込みそうになる茉莉に、さつきと同様、背後から美幸が声をかけた。

「あ、い、いいえ……」

はっと我に戻ったような顔になって茉莉は振り返り、尚もどこか釈然としない様子でぎこちなく首を振った。

「じゃ、危ないことは何もないということがわかったんだし、戻りましょう。いつまでもここにいても仕方ないから」

洗濯物の正体に茉莉がおよその見当をつけたらしいことを見て取った美幸はわざと素っ気なくそう言って、さりげなく茉莉の手を取り、ベッドのそばに連れ戻した。

器具庫から離れて元の場所に戻ってくる間も茉莉は好奇の念にかられて何度か後ろを振り返り、静かに回転している洗濯機のドラムにちらちら目をやっては、そのたびに何か問いたげに口をおずおすと動かしかけるのだが、結局は何も言えずに美幸につき従って歩を進めるのだった。

元の場所に戻ってきた茉莉がベッドに横たわる真衣の姿を見おろす目には、なんともいえない好奇の色が浮かんでいた。真衣の体にかかっている毛布がずり落ちそうになっていたた

め乱れを整えてやろうと手を伸ばしたのだが、毛布の端から覗く真衣の胸元が見慣れない布地で覆われていることに気がついたからだ。

セーラー服の胸当てとはまるで異なるその布地が何なのか、すぐには判断がつかなかった。だが、よく目を凝らしてみれば、薄く黄色いシミがついていることがわかる。そして、そのシミのすぐ横に、美沙や真衣の唇に付着しているのと同じ緑色のシミ。それに、生地そのものも、制服には全く使われていない、吸水性の良さそうな起毛生地だということも見て取れる。

茉莉は毛布を真衣の首筋まで引つ張り上げるふりをして深く腰をかがめ、茉莉の胸元を覆っている布地に更に目を凝らした。と、布地の縁から幅広の紐が伸びて、首筋の後ろで結わえられているのがわかる。

そのことに気づいた瞬間、茉莉はその布地の正体に思い至った。思い至ると同時に、頬がかつと上気して、胸がどくんと高鳴る。

「……あ、あの、私はこれで教室に戻ります。あとのことはよろしくお願いします。もしもやっぱり佐藤さんが五時間目の授業に出られないようなら、なるべく早く受け持ちの先生に連絡してあげてください」

茉莉は慌てて毛布を引つ張り上げ、自分の頬が赤く染まっていることを美幸や美沙に気づかれまいとして顔を伏せたままくると踵を返し、ドアに向かって足早に歩き出した。

「気がついたみたいね、園田さん。全部わかったかどうかはなんとも言えないけど、変に思っていることは確かね」

保健室をあとにする茉莉の後ろ姿を見送りながら、美幸が美沙の耳元に囁きかけた。

「そりやそうよ。ママったら、真面目なクラス委員長の園田さんが真衣ちゃんの容態を確認するためにここへ来るのがわかっていて、真衣ちゃんが一時間目と三時間目に汚しちゃったおむつをの洗濯をしていたんでしょ？ それも、園田さんがここにいる間にアラームが鳴るよう時間を見計らって洗濯機のスイッチを入れておいたとしか思えないわね、あのタイミングは」

美沙も美幸の耳元に口を近づけて囁き返し、少し呆れたような様子で続けた。

「それだけじゃないわ。園田さんに続いて器具庫の方へ歩き出した時、わざと何かに躓いたふりをして真衣ちゃんがねんねしているベッドに手をついたわよね？ その時、毛布をずらしたでしょ？ よだれかけがちよっとだけ見えるように少ししかずらしてなかったから真衣ちゃん本人は気づいていないみたいだけど、そばで見えていた私の目は誤魔化せないわよ」

「やれやれ、よく見ていたわね。美沙の言う通りよ。でも、私の方から進んで園田さんに教えてあげたわけじゃないわ。あくまでも、真衣ちゃんに気取られない程度のささやかなヒントを散りばめておいただけよ。そのヒントをもとにどこまで気がつくかは園田さん次第よ」

美幸は悪戯っぽくにつと笑ってみせ、腕時計にちらっと目をやって真衣にもなく美沙にもなく言った。

「さあさ、早くお昼ご飯を食べちゃいましょう。もうすぐ五時間目の授業が始まっちゃうわよ。遅刻したら、せつかく気を遣って真衣ちゃんの様子をみにきてくれた園田さんに申し訳



ないわ」

\*

五時間目の授業は英語だった。

「——ということになります。じゃ、説明した構文を使って例文を作ってもらわね。黒板を右と左にわけて、二人にやってもらいます。自信のある人、手を挙げて」

英語担当の教師が生徒たちの顔をぐるりと見まわして言った。

教室のあちらこちらで手が挙がる。

真衣にしても自信がないわけではないが、スカートの下におむつを着用している状態では手を挙げられるわけではない。

なのに、教師と目を合わさないよう顔を伏せる真衣の隙をついて美沙が自分の席から手を伸ばし、真衣の肘をつかんで、そのまま高々と差し上げたからたまらない。

「それじゃ、一人は、最初に手を挙げてくれた前田さんにお願いしようかな。もう一人は、最後に手を挙げた佐藤さん。はい、二人とも前に出てきて。前田さんは黒板の廊下側ね。佐藤さんは窓側を使って、自分で考えた例文を書いてちょうだい。みんなに見えるよう、なるべく大きな字で、なるべく高い所に書いてちょうだい。みんなに見えるよう、なるべく大きな字で、なるべく高い所に書いてちょうだい。みんなに見えるよう、なるべく大きな字で、なるべく高い所に書いてちょうだい。」

級友たちが一通り手を挙げた後に一人遅れて手を挙げたものだから妙に目立って、たちどころに真衣も指名されてしまう。

「ほら、さつさと前へ出なきゃ駄目じゃない。一時間目と三時間目の授業を中断させてみんなに迷惑をかけているのに、五時間目も愚図愚図して無駄な時間を使わせる気なの？」

最初に指名された生徒が勢いよく椅子から立ち上がり、もう黒板の前に立っているというのに、なかなか自分の席を離れようとしないうちに真衣の耳元で美沙が叱責するように言った。

「だ、だって……」

「いいから、早くしなさい。いつまでも愚図っていると、どうして佐藤さんはいつまでも前へ出ないんだろうって却ってあやしまれちゃうわよ。あやしまれて、前へ出られない理由をみんなに知られちゃってもいいの？」

「何をしているの、佐藤さん？ 自信がなくてもいいから、とにかく思いついた例文を黒板に書いてごらんさい。構文の使い方が間違っているなら間違っているで、正しい使い方をみんなで考える教材になるんだから」

「……はい、わかりました」

美沙にせつつかれても立とうとしなかった真衣だが、教師から促されては返す言葉もない。それに、このまま前へ出るのを拒み続けていけば、美沙の言う通り、級友たちに疑惑の念を抱かせることになるのも間違いない。

真衣は恨みがましい目で美沙の顔を睨みつけてからのろのろと立ち上がり、何かの拍子でスカートが捲れ上がってしまうのを防ぐため、お尻の方に両手を回して裾を押さえて、いかにも渋々といった感じで歩き出した。

(やっぱりだ。今もお尻が少し膨らんでいるのがスカートの上からでもわかるわ)自分の席の横を通り過ぎて前方へ歩いて行く真衣の後ろ姿をじつとみつめて、茉莉が心の中で呟いた。久しぶりに登校してきた真衣の様子が欠席前と比べてなんだか変わっているような気がしてそれとなく観察していた茉莉が先ず気づいたのは、真衣が異様なほどスカートの様子を気にしているということだった。なんととっても年ごろの少女だからスカートの乱れが気になるのはわかるが、男子の目がない女子校ということもあって、少しくらいスカートが捲れあがってパンツが見えたりしても気にも留めない生徒が少なくない中、もともと少し内気なところがあつて恥ずかしがり屋の真衣だといつても、常にスカートの裾を引つ張る様子は明らかに異様だった。これが、入学時からずっとそんなだったら茉莉も気にしなかったのかもしれないが、欠席前と比べて明らかに過敏になっていいるから余計に気にかかってしようがなかった。

そして茉莉が更に気になったのは、教師たちの真衣への気の遣いようだった。いくら校医から指示を受けているとはいえ、授業中でもことあるごとに保健室へ行くよう勧めるさまは尋常ではないように感じられてならない。

しかも、一時間目の途中に授業を抜け出して二時間目を欠席し、三時間目の直前になって教室へ戻ってきた真衣のお尻が、僅かとはいえ、よく注意して目を凝らすとスカートの上からでもそれとなくわかるほどに膨らんでいることに気がついたのだ。他の級友たちは高等部になって初めての模擬試験や体育大会の話題に夢中でそれどころではないようだったが、もともと生真面目で細かな気配りを欠かさない性格の茉莉だから、保健室へ行く前と戻ってきた後の真衣の変化もすぐに目に留まったのだった。

とはいえ、その時には、それがどういうことなのか判断に苦しんだものだ。四月とはいえまだ急に寒くなることも珍しくないから、体調を崩しているという真衣が体を冷やさないよう、例えばショーツの上から毛糸のパンツを穿くよう保健室で勧められたとしても不思議ではないし、あるいは、急に生理が始まって厚手のサニタリーショーツに穿き替えてきたとも考えられる。だが、真衣のお尻が、そういったありふれた事情で膨らんでいるのではなさそうに思えてならないのも事実だった。

様々に絡み合う疑惑の念がピークに達したのは、家庭科の授業が終わると同時に美沙が教師のもとに駆け寄り、何やら囁き交わした後、二人で紙袋を持って教室から出て行く様子を目撃した時だった。最初に声をかけた美沙のなんとも表現しようのない表情と、それに対してどこか困ったようなおどおどした態度で応じる教師。その対比に違和感を覚え、さりげなくあとを追った茉莉が見たのは、保健室に入って行く二人の姿だった。育児実習に使う筈の布おむつを詰め込んだ紙袋を、家庭科実習室ではなく、なぜ保健室なんかへ運び込んだりするのだろうか。そこに、なにやら窺い知れない秘密の匂いを嗅ぎつけた茉莉だった。

そんな経緯があつて、茉莉は昼食をそそくさと済ませ、保健室に向かうことにした。一時間目と二時間目との間の休憩時間に保健室を訪れたのは、純粹に真衣の体調を気遣つてのことだった。だが、昼休みにもういちど保健室に足を踏み入れたのは、真衣の容態を気遣うふうを装いつつ、何か自分の知らない真実を突き止めることができるのではないかと思つてのことだった。

そして、とうとう。真衣は保健室で、思いもしなかった様々な物を目撃してしまった。美沙の唇と真衣の唇とが揃って淡く緑色に染まっている様子。僅かの間だけ聞こえた、赤ん坊の玩具がたてているとしか思えない軽やかな音色。洗濯機の中で温風を受けてくるくる舞う柔らかな水玉模様や動物柄の布地と、一瞬だけ目に映った、その布地の端に刺繍された『さとうまい』という文字。真衣の胸元を覆う吸水性のよさそうな布地。それらはどれも、およそ高校の保健室には似つかわしくない物ばかりだった。

そんな一連の出来事があった、遂に茉莉は、真衣のお尻が丸く膨らんでいる理由に思い至ったのだった。

茉莉がどんな思いを胸に抱いて自分の後ろ姿をみつめているか知る由もなく、真衣は、机と机の間をゆっくり歩いて行く。スカートが僅かでも捲れ上がらないようにと気を遣うあまり、体の後ろにまわしてスカートの裾を押さえる両手に余分な力が入ってしまい、おむつで膨らんだお尻の丸みが却ってくつきり目立ってしまうことに気づかないまま、小さな歩幅でゆっくりと。

「それじゃ、さつきも言った通り、後ろの席まで見えるよう大きな字でお願いね。それと、あとからみんなで例文の内容をいろいろ考えてみたいから、なるべく長い文章にしてちょうだい。できれば、教科書に出てくるトムとスージーの会話形式で十行以上にしてもらえるかな。その代わり、例文を書くのに授業時間の半分くらい使っていいわ。あと、文章の量のこともあるから、これもさつき言ったように、できるだけ黒板の上の方から書き始めること。いいわね？」

教師は黒板の前に立った二人に細かく指示をしてから、残りの生徒たちの方に振り向き「あとのみんなも、二人の例文を見ているだけじゃ駄目よ。めいめい、自分のノートに自分の例文を書いてちょうだい。あとで何人か指名してノートの例文を読んでもらうから、その時にできてませんかということにならないよう、ちゃんとしておくのよ。じゃ、始めて」と言って、ぱんと両手を打ち鳴らした。

黒板の上の方から書き始めなさいと言われても、どちらかというの小柄な真衣が指図されたようにしようとする、思いきり背伸びをしなければならない。しかし、そうやってチョークを持つ手を精一杯伸ばしたりしたら、制服の上衣もスカートもずり上がって、おむつカバーが見えてしまうかもしれない。

「佐藤さんの自由記述の英文、いつも活き活きした文体だから感心しているのよ。今だって、構文の部分が強調されていけば、他の細かな文法は気にしなくていいから、思ったように書いてごらんなさい」

どきどき高鳴る胸を押さえてどうしようどうしようと思いつつも真衣に向かって、なかなか黒板にチョークを走らせようとしない本当の理由など知る由もない教師は、優しく励ますように言った。

いつまでも愚図愚図してちゃ却ってあやしまれるのよ。席を立つ前に美沙から言われた言葉が蘇ってくる。言われなくても、級友たちの前に立っている時間が長引けば長引くほど、スカートの下の恥ずかしい秘密を知られる恐れが大きくなることくらい真衣にも痛いほどわ

かっていた。

真衣はおそろおそろ後ろを振り返って級友たちの様子を探ったが、誰もが、教師の指示に従って自分のノートにびっしりと英文を書き込んでいるようだった。

(今の内だわ) 黒板の高い所さえ埋めてしまえば、あとはスカートの裾を押しえながらでもチヨークを走らせることができる。咄嗟にそう判断した真衣は、すっと息を吸い込んで、思いつくまま黒板に英文を書き連ね始めた。

だが、実は、教室の全員が一斉にノートに鉛筆を走らせている中、茉莉だけはノートに向かわず、真衣の後ろ姿をじっとみつめていた。その視線は、主に真衣の腰から下にかけて注がれ、真衣が黒板の上の方に英文を書くために体を捻った時などスカートがふわっと舞い、同時にお尻の丸みが強調される様子を目にしている、満足そうにうっすらと笑っているようだった。



「どうしたの、園田さん。手が止まっているわよ。いつも真面目な委員長さんがぼんやり前を見ているなんて、どういう風の吹き回し？」

不意に真衣の耳を教師の声が打った。

真衣はびくんと肩を震わせ、一瞬だけ躊躇った後、首だけを巡らせておずおずと振り返った。

と、鉛筆を持つともせずじっとこちらをみつめている茉莉と目が合う。

教室中の全員が自分のノートと向き合っているものだとばかり思い込んでいた真衣は、そうでない者が一人いたことを知って思わず悲鳴をあげそうになった。だが、そんなことをすれば他の生徒たちの注意を惹いてしまうと咄嗟に思い至り、掌で自分の唇を押さえて、今にも口を衝いて出そうになっていた金切り声をかろうじて飲み込む。

そんな真衣とは対照的に、茉莉の方は、真衣に向かってふっと笑ってみせると、生徒たちの授業態度を見まわっていた教師の注意を受けて鉛筆を手にし、もういちど上目遣いに真衣

の顔を見てから自分のノートに英文を書き綴り始めた。

(や、やだ。ひよっとしたら気づかれちゃったのかな、園田さんに) 茉莉がノートに鉛筆を走らせ始めたのを見届けた後、真衣はおずおずとスカートの裾を下に引っぱり、胸の高鳴りを鎮めるために何度も息を吸ってから、再び黒板に向き直った。

と、その時、半分ほど開けている窓から春の突風が吹き込んできて、生徒たちのノートや教科書のページをばらばらと勝手にめくり、教室のあちらこちらで黄色い声があがった。真衣は顔色を変えてスカートを押しさえたが、一瞬遅く、風に煽られてスカートの裾が太腿のあたりまで舞い上がってしまった。

それを慌てて整えようとして体をよじった時、再び茉莉と目が合う。目が合っても、茉莉はともなげにノートのページを繰り、素っ気ない態度で鉛筆を走らせたが、真衣がスカートの下に着けている恥ずかしい下着をくつきりと両目に焼き付けたことは確実だった。

幸い、他の級友たちや教師は突風に乱されたノートや髪を整えるのに夢中で、茉莉の他に真衣の秘密に気づいた者はいないようだった。だが、それはなんの慰めにもならない。

真衣は頬をかつと熱くし、下唇を噛みしめて顔をそむけ、のろのろと茉莉に背中を向けるしかなかった。

その後、わっと叫んで教室から逃げ出しそうになる衝動をかるうじて抑えこみ、あまりの羞恥に気が遠くなりそうになるのを必死に堪え、ようやく黒板の三分の二ほどを英文で埋めた頃、真衣の口から、うっとうしい呻き声が漏れた。誰の耳にも届いていないと思われるような小さな声だったが、課題の例文を綴りながら注意深く真衣の様子を見守っていた美沙は、微かな肩の震えや、控えめながらもじもじと両脚の腿を擦り合わせる様子から、たった今真衣が呻き声を漏らしたことを我がことのように見透かしていた。

むろん、真衣が呻き声を漏らした理由も充分に承知している。

(さ、これからどうするのか、真衣ちゃん？ 全部書き終えるまで自分の席へは戻れないわよ。かといって、私がそっちへ行行ってなんとかしてあげることもできないし。どうやって切り抜けるか、楽しく見物させてもらおうわね) 美沙はそれまでの文章を吟味するふりをしてノートを鉛筆の先でとんとん叩きながら、上目遣いに真衣の後ろ姿を見据えた。

四時間目の途中におむつを濡らしてしまっからおよそ二時間。教師から指名された時には既に自分の意志で排尿もままならない段階に達し、黒板に向かって例文を書き始めて少し経った頃には、時おり下腹部に鈍痛を覚えるまでになっていた。それが、いよいよ、その場に立っているのがやっとうという状況にまで追い込まれてしまったのだ。

真衣はおそるおそる振り向き、涙で潤む瞳をきよときよとさせて級友たちの様子を探ったが、誰もまだ課題を済ませていないようで、全員がノートと向かい合ったままなのを確認すると、教師に見咎められないよう書きを装って右手のチョークを黒板に押し当て、次の文章を考えてでもいるかのように僅かに首をかしげつつ、左手で注意深く制服の胸ポケットをまさぐった。

お目当ての物はすぐ指に触れた。

真衣は浅い呼吸を何度か繰り返してから、指先に触れたそれを親指と人差し指ではさみ持っ

た。だが、いったんは決心したものの、いざとなると、それを胸ポケットから取り出すことはなかなかできない。

けれど、それが当たり前だ。級友たちに背を向けているとはいえ、教室の中でも一番目立つ所にある黒板と向かい合った状態でおしゃぶりを口にふくむことなど、そう易々と実行に移せるわけではない。

しかし、このまま立ちすくんでいれば、いずれ、更に高まる尿意と下腹部の鈍痛に耐えかねて、この場にしゃがみこんでしまうことになるのは目に見えている。そんなことになって真衣の体調を気遣う級友たちや教師に体のあちらこちらの様子を探られでもしたら、胸ポケットに隠し持っているおしゃぶりやショーツの代わりに身に着けているおむつが、たちまちのうちに大勢の目にさらされてしまうに違いない。それどころか、更に尿意に耐え続けているうち、突如として本当の我慢の限界を迎えて、級友たちの目の前でおむつを汚してしまうことにさえなりかねない。我慢に我慢を重ねた後の粗相になれば、おしゃぶりを啜えてじわじわ漏らすのとは比べようもないほどのおしっここの量と勢いになるだろう。おむつが吸収しきれなかったおしっこがおむつカバーから沁み出して真衣の足を伝い落ち、足元に恥ずかしい水溜まりをつくる恐れも充分にある。

真衣はもういちど浅い呼吸を繰り返すと、級友たちの席をちらちら見渡して意を決し、胸ポケットからおしゃぶりをそと取り出して口にふくんだ。

口にふくんだおしゃぶりを一度だけちゅうと吸った途端、たちまちにして膀胱の緊張が解け、下腹部の鈍痛がすつと消えると同時に、生温かい液体がじわつと溢れ出る感触があった。（わ、私、なんてことしてるんだろう。みんなの目の前で赤ちゃんみたいにおしゃぶりなんか啜えて、小っちゃい子みたいにおもらしをしちゃってるんだ。それも、赤ちゃんそのまま、おむつの中に。や、やだ。本当に私つたら、なんてことを。でも、でも……）最初はじくつと湿っぽい感じがあっただけに、それがすぐにじわじわ広がって、すぐにぐっしより濡れた感じに変わってゆく。真衣は、自分の下腹部から伝わってくる恥ずかしい感触に今にも膝から下が崩れ落ちそうになるのをなけなしの気力を振り絞って堪え、おしゃぶりを啜えているせいで口の中に溜まってくる唾をぐくりと飲み込みながら、痛みの消えた下腹部にそれまで感じたことのないじんじん疼くような痺れを覚え、それが何なのか自分自身でわからないことに戸惑いつつも、その奇妙な感覚に身をまかせていた。

そんなどこか恍惚とした表情を浮かべる真衣の横顔は、春の日差しを受けて、うつすらとながら窓ガラスに映っていた。そのことに真衣自身はおろか教師や生徒たちも気づいていない。だが、級友たちの中でただ二人、美沙と茉莉は、窓ガラスに映るおしゃぶりを啜えた真衣の横顔を目にして、なんともいいようのない笑みを浮かべていた。

## 《二五》 もうひとりのお姉ちゃん

『はい、どうしました？』

インターフォンから美幸の声が聞こえた。相変わらぬ事務的な口調だ。それに対して

「一年三組の園田です。同じクラスの佐藤さんの体調が思わしくないので連れてきました」と応えたのは、これまでとは違い、美沙ではなく茉莉だった。

——黒板に向かって課題の例文を書いている途中、とうとう我慢できなくなった真衣は、こっそりとおしゃぶりを啜え、級友たちの目を盗んでおむつを汚した。だが、耐えに耐え続けた尿意と、尿意に起因する下腹部の鈍痛から解放され、おむつをぐっしより濡らしておしっこを出しきった直後、それまでの緊張の反動と、なにやらわからぬ下腹部の疼きのせいで膝から下の力がすつと抜けてしまった。咄嗟に黒板に手をついたおかげで転倒は免れたが、それ以上は板書が続けることもままならず、肩で息をつきながら、空いている方の手でおしゃぶりを胸ポケットに戻すのがやっとだった。

やがて級友たちが真衣の異変に気づいて教室中がざわつき出し、誰かが足早に近づいてくる気配があった。

振り返ることもままならないまま真衣は足音の主が美沙だとばかり思っていたが、

「大丈夫、佐藤さん？」

と背中から声をかけたのは茉莉だった。そして茉莉は

「保健室へ行きましょう。私が連れて行ってあげるから」

と畳みかけるように言い、真衣の返事も待たずに肩を抱き寄せたのだ。

そこへ少し遅れて美沙が駆けつけ、茉莉に向かって

「佐藤さんを保健室へ連れて行くのは私の役目だから、あとはまかせておいて」

と言ったのだが、茉莉はまるで取り合おうともせず、

「杉下さんこそ席に戻っていいわよ。一時間目も三時間目も杉下さんが佐藤さんを連れて行ったでしょう？　なのに、今度もまただなんて、いくら保健委員でも、杉下さんばかりに負担をかけるわけにはいかないわ。今回はクラス委員長の私にまかせておいて」と応じて首を振るばかりだった。

そんな経緯があって、結局、茉莉が真衣を保健室へ連れて来たのだが――。

保健室に足を踏み入れた茉莉は、真衣をベッドのそばまで押しやり、

「佐藤さんの様子を確かめるためにここへ来るたび、その椅子の背もたれに佐藤さんの物らしきスカートがかかっていました。それを、私は、少しでも体の締め付けを減らすためだとばかり思っていました。でも、本当はこういうことだったんですね」

と言って付き添い用の椅子に視線を走らせたかと思うと、真衣のスカートのサイドファスナーに手を伸ばしてさっと引きおろしてしまった。

スカートが、なんの抵抗もなく、ぱさつと床に落ちる。

スカートを脱がされて、真衣のお尻を包み込んでいるおむつカバーが丸見えになった。横羽根と前当てをしつかり留めておいたから全体がずり落ちそうになるのは免れているもののおしっこを吸ったおむつの重みでお尻の方が垂れ下がりがみになっている、見るからに恥ずかしいおむつカバーだ。

「杉下さんは最初からこのことを知っていたんですね？」

なす術なくベッドの脇に立ちすくむ真衣の傍らで、茉莉は、騒ぎ立てることもなく、むしろいつもよりも冷静な声で美幸に言った。

「ええ、私が説明しておいたから。佐藤さんのお世話を手伝ってもらうためには全て説明しておかないといけないものね」

美幸は穏やかな声で応えた。

「佐藤さんのお世話を手伝ってもらうためにですか。でも、たぶん、それって、学校のことだけじゃありませんよね？ これは私の勘ですけど、ひよつとして、先生と杉下さんと佐藤さんはプライベートでも、他人どうしとは思えないくらい親密になさっておいでじゃないんですか？」

慇懃な言葉遣いながら、きっぱりと断定するような調子で茉莉は言った。

「どうしてそう思うの？」

美幸が短く問い返した。

「お昼休みにここへ来た時、先生の机の上にお弁当箱が二つ並んでいました。まだ手つかずで、二つともまるで同じ中身でした。それに、佐藤さんのお弁当箱は半分ほど空になっていましたけど、残ったオカズは他の二つのお弁当箱に入っているのと同じでした。しかも、杉下さんの唇と佐藤さんの唇が揃って薄い緑色に染まっていました。あと、杉下さんが先生や佐藤さんに接する態度とか、先生が杉下さんに指図する時の様子とか、ベッドに寝ている佐藤さんの雰囲気とか、そういった全体の感じから想像したんです。想像だけど、私、勘が当たる方なんです」

茉莉はすっと目を細めて美幸の顔を正面から見た。

「なるほど。確かに勘が鋭いわね。それに、細かいことも見逃さない注意深さもあるみたいだし。——園田さんの想像通りよ。ちよつとした事情があって、私たち三人は家族みたいな間柄になっているの」

「やっぱりそうだったんですね。それでは、勘が当たっていたことを確認できた上で、私から先生と佐藤さんにお願ひしたいことがあります」

茉莉は納得顔で頷き、美幸の顔と真衣の顔を見比べて言った。

次の瞬間、真衣の顔がみるみるこわばる。茉莉が『お願ひ』と称して

「私も佐藤さんや鈴木先生、杉下さんと家族みたい間柄になりたいんです。簡単なことですよね？ 私のお願ひをきいていただけるなら、三人の間柄は一言も口外しません。もちろろん、佐藤さんがパンツの代わりにおむつを着けていることも誰にも話しません。いかがでしょう、私のお願ひを聞き入れていただけますか？」

と、とんでもないことを口にしたからだ。



「え!? で、でも、どうして、そんな……」

訊き返す真衣の声が裏返った。

「佐藤さんと杉下さんのことをもつとよく知りたいからよ。私は幼稚舎から啓明で、自慢じゃないけど、初等部の一年生から今まで、ずっとクラス委員長を務めてきたの。それも、クラス運営で問題を起こしたことは一度もなくね。だけど、問題がなかったのは、外の学校から来た子のいるクラスに当たらなかったからじゃないかなと今になって思うことがあるの。佐藤さんや杉下さんみたいに中学まで公立で過ごしてきた子が初めてクラスメートになった今になって。だから、これからも問題なくクラスを運営していくためにも、どうしてもあなたちのことをもつと詳しく知りたいのよ。プライベートな生活も含めて」

真衣に向かって茉莉が説明した理由は、なるほど、一聞したところでは理にかなっているようにも思える。

しかし、それが本当の理由かどうか判断する術を持たない真衣には返答のしようがなかった。

そこへ美幸がくすつと笑って横合いから割って入る。

「いいんじゃないかしら、園田さんのお願いをきいてあげても。園田さんみたいな真面目な生徒が委員長を務めるクラスに入ったのも何かの縁だし」

こわばった顔つきの真衣とは対照的に美幸はこともなげに言い、僅かに首をかしげ続けた。

「それに、お願いをきいてあげなかったら、真衣ちゃんの恥ずかしい秘密がみんなに知られちゃうのよ。そんなことになるよりは、味方になってくれそうな人を一人でも増やしておいた方がいいんじゃないかしら」

「……わかった。ママがそう言うんだったら……」

茉莉と美幸の真意がどこにあるのか、真衣には及びもつかない。しかし、自分の秘密を知っている二人からそんなふうに迫られて拒むことはできない。

「ふうん、鈴木先生は佐藤さんのことを『真衣ちゃん』って呼んでるんだ。でもって、佐藤さんが先生を呼ぶ時は『ママ』なのね」

真衣が不承不承といった態で力なく頷くのを見て、茉莉はいかにも興味津々といった感じと言った。

「じゃ、杉下さんとはどんなふう呼び合っているのかしら？」

「私は杉下さんのことを『美沙』って呼び捨てにしているわよ。それと、真衣ちゃんが杉下さんのことを呼ぶ時は『お姉ちゃん』ね。あと、杉下さんは私を真衣ちゃんと同じように『ママ』って呼んでいるの」

好奇に満ちた茉莉の問いかけに対して、美幸は再びくすつと笑って説明した。

「へーえ、杉下さんは真衣ちゃんの『お姉ちゃん』なんだ。じゃ、私も『お姉ちゃん』になるのかな。一番目のお姉ちゃんが杉下さんで、私が二番目のお姉ちゃん。それでいいわよね、佐藤さん——ううん、真衣ちゃん」

茉莉は瞳をきらきら輝かせて決めつけた。

「……」

「ほら、黙ってちゃ駄目でしょ。ちゃんと呼んでほしいわね、『茉莉お姉ちゃん』って」  
「で、でも……」

「あら、私は真衣ちゃんの家族に入れてもらえないのかな。真衣ちゃんに気に入ってもらえないんだったらそれも仕方ないわね。だけど、家族でもない子の秘密を胸の中にしまっておく必要なんてないわよね。可愛い妹の恥ずかしい秘密をよその人に教えるようなお姉ちゃんなんていないけど、赤の他人だったらどうでもいいわよね」

日頃の丁寧な喋り方とは打って変わった馴れ馴れしい口調で茉莉は言った。

「い、いや！ それは、それだけは……」

「だったら、私のこと、茉莉お姉ちゃんって呼んでくれるわね？」

茉莉は真衣の目を正面から覗き込んで言った。

「……お願い、みんなには秘密にしておいて。お願いだから、園田さ……茉莉……茉莉お姉ちゃん」

ことここに至っては、おずおずと目をそらして弱々しく懇願するしかなかった。

「そう、真衣ちゃんは私にお姉ちゃんになってもらいたいのね。うん、わかった。美沙お姉ちゃんに負けないくらい優しいお姉ちゃんになってあげる。——鈴木先生もそれでよろしいですね？ 佐藤さんや杉下さんと同じように私も先生のことを『ママ』とお呼びしてもよろしいですよね？」

茉莉は、おむつ姿で立ちすくんでいる真衣の頭をそつと撫でつけ、美幸の方に向き直って同意を求めた。

「もちろん、大歓迎よ。真衣ちゃんが選んだお姉ちゃんだから」

美幸に否はなかった。教職員の中から瀬尾を自分の仲間仕立て、生徒の中からも美沙に加えてもう一人誰かを引き入れようと企んで狙いをつけたのが茉莉だ。茉莉の目の前に様々なヒントをばら蒔き、茉莉を真衣の恥ずかしい秘密に辿り着かせた今、その申し出を拒む理由などあるわけがない。

「ありがとうございます。——さ、これで私も家族の仲間入りね。じゃ、お姉ちゃんが見ていてあげるから、真衣ちゃんはママにおむつを取り替えてもらいなさい。いつもは寂しくないように美沙お姉ちゃんに見てもらっているんでしょう？ だったら、今は代わりに私が一緒にいてあげる。真衣ちゃんのベッドはこっちだったかな」

茉莉は美幸に向かって恭しくお辞儀をした後、昼休みに真衣が横たわっていたベッドの毛布を捲り上げた。

と、敷いたままになっていたおねしょシーツや置きっぱなしになっていたガラガラとよだれかけが毛布の下から現れる。

「あ……」

真衣は慌ててガラガラやよだれかけをつかみ上げようとしたが、伸ばした手を茉莉に押さえつけられてしまう。

「お昼休みにちよつとだけ聞こえた音が何だったのか、やつとわかったわ。それに、真衣ちゃんの胸元を覆っていたのが何だったのかも。ひよつとしたらとは思っていたんだけど、やっぱりそうだったのね」

真衣の手を押しとどめ、代わりに自分がガラガラとよだれかけをベッドからつかみ上げた茉莉は、よだれかけに付いているシミをしげしげ眺めて興味深げに呟いた。

そうして、ガラガラを真衣の目の前で振ってみせながら

「でも、だとすると、真衣ちゃんがおむつをあてているのは、病気のせいなんかじゃないってことになるわね。病気の治療にガラガラやよだれかけが要るわけじゃないもの。——病気のせいで仕方なくおむつを汚しちゃうってるんだったら、そのことを誰かに話すだなんて可哀想なことはできないけど、そうじゃないとなると事情は変わってくるわね。真衣ちゃんが赤ちゃんなみたによだれかけを着けたりガラガラを持ったりして保健室でおむつを取り替えてもらっているって知ったら、クラスのみんな、どう思うかしら」と、おおげさに肩をすくめて付け加える。

「やだ。誰にも言っちゃやだ……」

真衣は涙声で訴えかけた。

それに対して茉莉は少し考えるふりをしてから溜息交じりに

「じゃ、私の言うことには絶対に逆らわない？ お姉ちゃんの言いつけはどんなことでもちゃんと守る聞き分けのいい妹になれるんだったら、しばらくはみんなに黙っていてあげるわよ」

と問い質した。

「……なる。聞き分けのいい妹になる。だから、みんなには……」

よく通る茉莉の声とは対照的に、耳をそばだてて注意していないと聞き逃しそうになるような弱々しい声で真衣は言った。

「わかった。当分の間は秘密にしておいてあげる。じゃ、そうと決まったら、ママにおむつを取り替えてもらおうね。びしょびしょのおむつのままじゃお尻が気持ちわるいでしょ？」

あ、でも、その前に——」

真衣の言葉が終わる前に茉莉は弾んだ声で言い、自分が手にしている小物類に目をやって悪戯っぽい笑みを浮かべると、空いている方の手を真衣の制服の胸ポケットに突っ込んでおしゃぶりを取り出し、わなわな震える唇に押し付けた。

「真衣ちゃんはおしゃぶりが大好きみたいだから、おむつを取り替えてもらう間、お口が寂しくないよう存分に吸っているといいわ。なにせ、教室の中でもクラスのみんなの視線も気にならないくらい夢中になってちゅうちゅうしていたんだもの」

その時になって、ようやく真衣は、自分が黒板の前でおしゃぶりを口にふくんでいるところを茉莉に目撃されてしまったらしいことに気がついた。だが、今更どんな言い訳もかなわない。クラスのみんなの前でおしゃぶりを吸いながらおむつを汚してしまったのは紛れもない事実なのだから。

真衣は一瞬だけ躊躇った後、おずおずとおしゃぶりを口にふくんだ。

と、嵩にかかって茉莉が更にこんなことを言い出す。

「でも、おしゃぶりをちゅうちゅうしていると、よだれがこぼれちゃうわね。だから、ママか美沙お姉ちゃんがよだれかけを用意してくれていたのね。いいわ、新しくお姉ちゃんになった私がよだれかけを着けてあげる。すぐに済むからじっとしているのよ」

それを真衣が拒めるわけがない。

茉莉は身をすくめる真衣の後ろにまわってよだれかけを首筋に巻き付け、首の後ろと背中  
で手早く紐を結わえると、再び真衣の目の前に戻って、制服の胸元を覆うよだれかけについ  
ている薄いシミの縁を指先でつつとなぞりながら、ねっとり絡みつくような声で言った。

「これって、お弁当のオカズの跡なんでしょう？ 美沙お姉ちゃん、口移しでお弁当を食べさせてもらっ  
ているように緑色になっていたってことは、真衣ちゃん、口移しでお弁当を食べてもらっ  
ていたのかな？ 本当に仲良し姉妹なこと。私も負けないよう頑張らないとね」

そう言って茉莉はにまっと笑い、真衣の右手にガラガラを握らせて、ベッドの上のおねし  
よシーツをぼんぼんと叩いた。

ベッドに横たわった真衣のお尻をくるむおむつカバーの前当てと横羽根がおねしよシーツ  
の上に広げられると、ぐっしより濡れた布おむつがあらわになる。

「あ、これ、私が縫ったおむつじゃないかしら。うん、この水玉模様、間違いないみたい。  
うふふ。私が縫ってあげたおむつが一番に真衣ちゃんのお尻を優しく包んでいたなんて、こ  
んなに嬉しいことはないわね」

薄く茶黄色に染まった水玉模様の布おむつを目にするなり、茉莉が嬌声をあげた。

「そう、これは茉莉が縫ったおむつだったの。それが誰のより真つ先に真衣ちゃんのおしつ  
こを吸い取っていたなんて、すごい偶然もあるものね」

美幸は、真衣のお尻の下から手元に引き寄せたおむつを洗剤を張ったポリバケツに滑り込  
ませながら相槌を打った。

それに対して茉莉は

「違うわよ、ママ。これは偶然なんかじゃなくて、神様の思し召しなの。私、ずっとずっと  
妹が欲しかったの。でも、いろいろ事情があって、一人っ子のままだった。だから、うちの  
お父さんもお母さんも私に過剰な期待をかけちゃって、それで私、子供の頃から好きなこと  
なんて殆どさせてもらえなかったの。まわりの子供たちが楽しそうに遊んでいるのに、小さ  
い頃から塾に行かされて、いつもいつも、行儀良くしなさいとか、世間様の目があるのよと  
かってお小言ばかり貰って。それで、ずっと思っていたの。妹でもいてくれたら、両親の関  
心がそっちに向いて私はもう少し伸び伸びした生活を送れたんじゃないかなって。そんな私  
のお願いを聞き入れてくれて神様がプレゼントしてくれたのよ、真衣ちゃんっていう可愛い妹  
を。だから、クラスみんなが縫ったおむつの中でも最初に真衣ちゃんが使ったのが私の縫  
ったおむつなのも、偶然なんかじゃないの。私が縫ったおむつを最初に使うよう、神様が選  
んでくれたに決まってる」

と、異様とも思えるほど瞳をきらめかせ、熱に浮かされてでもいるかのように言い募った。  
しかも、それはその時だけでなく、その後も、真衣の無毛の股間がさらけ出されると

「あ、真衣ちゃんのここ、つるつるだ。でも、それでいいんだよね。元々こんなのだったの  
かママに綺麗にしてもらったのかは知らないけど、私の可愛い妹になる真衣ちゃんにはこの  
方がお似合いだもんね」

と顔を輝かせ、お尻拭きを使った美幸の巧みな指運びで秘部を攻められて真衣が喘ぎ声を漏

らした時は

「うふふ。真衣ちゃんたら嬉しそうな声を出しちゃって。あそこを綺麗綺麗してもらうのがそんなに気持ちいいんだ。うん、そうだよね。びしょびしょに濡れたおむつを外してもらっておしつこの雫を拭いてもらったら気持ちいいに決まってるよね。次は新しいふかふかのおむつをあててもらえるんだって嬉しそうにしている真衣ちゃん、なんて可愛いのかしら。そうよ、これでこそ、私がずっとずっと待ち望んでいた妹なのよ」

と、感情の昂ぶりを抑えきれないかのような茉莉の能弁は、真衣のおむつの交換が終わるまで延々と続いたのだった。

\*

六時間目はどうか無事に授業を受け、放課後になって、真衣を連れだした美沙が保健室にやって来た。

美沙はこれから部活ということのでゆっくりしている暇はないのだが、出て行こうとするところを美幸に呼び止められ、五時間目の途中に保健室で茉莉と美幸や真衣との間に交わされたやり取りの内容を聞かされると、とびきりの笑顔で

「よかつたじゃない、真衣ちゃん。これまで一人っ子で寂しかった真衣ちゃんなのに、これでお姉ちゃんが二人もできることになったんだから。茉莉お姉ちゃんも一人っ子なんだって？ だったら、余計に可愛がってもらえそうじゃない」

と言い、ぼんと手を打って

「じゃ、私も茉莉お姉ちゃんに負けないよう頑張らなきゃね。真衣ちゃんにお似合いの可愛いお洋服を腕によりをかけてつくってきてもあげる」と付け加えた。

美沙が口にした『真衣ちゃんにお似合いの可愛いお洋服』という言葉に、真衣はいやな予感を覚えた。だが、その言葉を拒むこともかなわず、笑顔のまま保健室をあとにして部室に向かう美沙の後ろ姿をじつと見送ることしか今の真衣にはできなかった。

放課後になったといっても、真衣はまだ帰宅することができない。バスや電車の定期券を美幸に取り上げられてしまっている上、かりに定期券を返してもらったとしても、スカートの下におむつを着けている身では、大勢の客で混み合うバスや電車に乗る気にはとてもではないがなれない。しかも、家に帰りついたとしても、真衣のキーホルダーは美沙が持ったままだから、玄関のドアはおろか門扉を開けることさえできないのだ。となると、全ての部活が終わって怪我人の出る恐れがなくなった後によく一日の職務から解放される保健室の主である美幸の車に乗せてもらう他に帰路につく方法はない。

そんなわけで、授業が終わってから保健室が閉まるまでの間が、真衣にとっては宿題や授業の復習を済ませることができ唯一の貴重な時間ということになる。家に帰った後は美幸と美沙の手で高校の制服を脱がされ、赤ん坊そのままの姿にさせられた上で自由を奪われるの

は火を見るより明らかだから、勉強にあてられる時間など持てるわけがないのだ。

しかし、宿題に取りかかるとより前に済ませておくべきことが真衣にはあった。

「六時間目の途中にはおむつを汚さずにすんだみたいだけど、もうそろそろじゃないの？ 教室と違ってここにいる間はいつでも取り替えてあげられるから我慢しないで出しちゃっていいのよ」

美沙に連れられて保健室に足を踏み入れた時から真衣がもじもじしているのを見て取った美幸は、真衣の顎先を人差指の先でくいと持ち上げ、大きな瞳を正面から覗き込んで言った。

「……」

尿意の高まりを美幸に気取られていることは真衣にもわかっていた。だが、応えようがなく、口をつぐむしかできない。

「一時間目の途中は階段の踊り場で美沙お姉ちゃんにおっぱいを吸わせてもらっておしっこができたけど、その後はおしやぶりばかりだったのよね？ それじゃ可哀想だから、今度はママのおっぱいを吸わせてあげる。ママに思いきり甘えながらおしっこをするといいわ」

美幸は、空いている方の手を真衣の背中にまわして体を引き寄せると、真衣の胸元に自分の乳房を着衣越しに押し当てた後、ベッドの端に腰かけさせ、真衣の体からそっと両手を離して自分の白衣を手早く脱ぎ去った。そうして、白衣の中に着ているブラウスのボタンを外して胸元を大きくはだけ、あらわになった美沙とお揃いの授乳用ブラを無造作にずりおろし、張りのある乳房を支え持つて真衣の目の前に突きつける。

「で、でも、誰かが来たら……」

ぴんと勃った乳首に両目を釘付けにしながらも真衣は躊躇いがちに言った。

「大丈夫よ。ママが錠を開けなきゃ誰も入ってこれないんだから。それに、茉莉お姉ちゃんも週に一度クラス委員長が全員集まる定例会議だって言っていたから、真衣ちゃんがママのおっぱいを吸ってるところを見られてひやかされることもないし」

美幸もベッドの端に腰かけ、左手で真衣の肩を引き寄せて、綺麗なピンクの乳首を唇に押し当てた。

もう真衣は抗わなかった。それどころか、はにかんだような表情を浮かべつつも、殆ど躊躇うふうもなく唇を開き、一瞬だけ間を置いた後、ちゅぱちゅぱと音をたてて美幸の乳首を吸い始める。

「そうよ、それでいいのよ。真衣ちゃんはママの可愛い娘。美沙お姉ちゃんと茉莉お姉ちゃんの可愛い妹。体は大きいけど、自分じゃ何もできない、いつまでもおむつ離れできない赤ちゃん。ママのおっぱいをたっぷり吸って、おしっこをたくさん出しちゃおうね」

美幸は、うっすらと血管の浮く自分の乳房をますます前に突き出し、右手の掌をおむつカバーの上から真衣の股間に押し当てた。

待っほどもなく真衣がびくんと肩を震わせ、口にふくんだ乳首を甘噛みする。

「教室でみんながいる中でおむつを汚すのは恥ずかしかつたでしょう？ でも、ここにはママと真衣ちゃんしかいないのよ。だから、恥ずかしがることなんて全然ないの。出したいだけ出しちゃっていいのよ。汚したいだけおむつを汚しちゃっていいのよ」

美幸は、掌から伝わってくる生温かい奔流の微かな感触にすっと目を細め、真衣の耳元に甘い声で囁きかけた。

\*

学校の保健室で義理の母の乳首を吸いながら汚したおむつを、やはり保健室のベッドで取り替えてもらうという異様な体験のために昂ぶりがおさまらない感情をなんとか鎮め、真衣がようやく宿題を済ませた頃、定例会議を終えた茉莉が姿を現し、それからほんの少し遅れて、今度は美沙が保健室に戻ってきた。

「あれ？ どうしたの、杉下さん——ううん、美沙。部活の時間はまだ一時間ほど残っているんじゃないの？」

幼稚舎からずっと啓明の茉莉と、中学校までは公立だった美沙との間には、まだどこかよそよそしいところが残っていた。それが、美幸の企みによって擬似的な姉妹関係になったことで互いの溝が埋まったのか、これまでになく親しげな口調で茉莉が美沙に話しかける。

「うん、時間はまだ残ってるんだけどさ、こんなのを作ってみたから、少しでも早く真衣ちゃんに着てもらいたくて、部活を抜け出してきちゃった。部長は厳しいんだけど、瀬尾先生がうまく取りなしてくるから助かるわ」

美沙の方もすっかり打ち解けた様子で茉莉に応じ、大事そうに両手で抱えている布地を三人の目の前でさっと広げてみせた。

途端に、二人の歓声と一人の悲鳴が同時にあがった。歓声をあげたのは美幸と茉莉。対して悲鳴の主は真衣だ。

美沙が両手で広げ持ったのは、春らしいピンクの生地でできた長袖のワンピースだった。それも、ようやくよちよち歩きができるようになったばかりの赤ん坊に着せるような、ロンパースと同様に股間の部分にボタンが並んでいるボトムスとスカートが一体になった、見るからに可愛らしいデザインの女児用のワンピースだ。

「へーえ、可愛いじゃない。これ、家庭科クラブで仕上げてきたの？」

美幸は美沙からワンピースを受け取り、ためつすがめつしながら言った。

「本当に可愛いワンピースだこと。こんなのを手作りできるなんて、美沙ったらすごいよね。……え？ でも……」

茉莉もワンピースに手を伸ばし、縫製の具合や生地の手触りを確認して感心しきりだったが、ふと何かに気づいたかのように首をかしげ、戸惑いの色を浮かべて遠慮がちに言った。

「……あの、これって、赤ちゃんに着せるには大きすぎるんじゃない？ 縫製の腕がすごいのは認めるけど、型紙を起こす時にうっかりして単位を間違ったとかいうことない？ たとえば、センチと寸を取り違えたとか」

「やだ、そんな基本的なところを間違えるわけじゃないでしょ。いいのよ、これで。最初からこの大ききで作る予定だったんだから。——ほら、これでどう？」

美沙はあっけらかんとした顔で応え、美幸から再びワンピースを受け取ると、大きな執務机の隅を借りて宿題を終えたばかりの真衣の体に押し当てた。

「そ、そのワンピース、真衣ちゃんのだったの!? 赤ちゃんのじゃなくて!」

どう見ても赤ん坊用のものと思えないデザインワンピースなのにサイズは真衣の体にぴったりなのを見て取った茉莉は両目を大きく見開いて驚きの声をあげた。

「そんなにびっくりすることないじゃない、最初から『こんなのを作ってみたから、少しでも早く真衣ちゃんに着てもらいたくて』って言ってるんだから」

美沙は茉莉の驚きように対しておかしそうに言い、美幸の方に振り向いて悪戯っぽい口調で問いかけた。

「ひよつとして、ママ、茉莉にまだあのことを話してないの？ 真衣ちゃんがお家でどんなふうに暮らしているのか」

「そういえばそうだったかしら。おしっこが近いから真衣ちゃんはなかなかおむつ離れできそうにないってことを説明して、私たちが家族みたいな間柄だったことを話した後、茉莉が真衣ちゃんによだれかけを着けてあげたりガラガラを持たせてあげたりしていたからそれとなく察しているものだとばかり思い込んでいたけど、たしかに、まだちゃんとは話してなかったわね、真衣ちゃんのお家での生活ぶりについては」

美沙に言われて美幸は小さく頷き、ポケットを探って携帯電話を取り出した。

それを目にした真衣が慌てて椅子から立ち上がりかけたが、美沙に肩を押さえつけられずししまう。

「じゃ、少し遅くなったけど、茉莉に見せてあげる。普段、お家で真衣ちゃんがどんな生活をしているか」

美幸は携帯電話の液晶画面を茉莉の目の前で広げてキーを操作した。

最初はあからさまに驚きの表情を浮かべていた茉莉だが、真衣が美幸の乳房に顔を埋めてすやすや眠っている場面、真衣のお尻が載っているあたりのシャツが次第にシミになってゆく場面、真衣がどこかのトイレで美幸にトレーニングパンツを穿かせてもらっている場面、車の座席をリクライニングさせてうつらうつらしている真衣のスカートの裾からオーバーパンツが見えている場面、真衣が美沙の手でロンパースを着せてもらっている場面、美沙が廊下で真衣のロンパースのボタンを外している場面、真衣が大きなベビーチェアに座って哺乳瓶でミルクを飲ませてもらっている場面、ベビーベッドに横たわった真衣が子守唄を口ずさむ美幸にお腹を叩いてもらって寝かしつけられる場面といった様々なシーンの写真や動画が次々に液晶画面に映し出されてゆくのがわかるほど頬をほてらせるようになっていた。

そうして遂には、五時間目の途中で真衣が美幸の手でおむつを取り替えられる場面に立ち会った時と同様、熱に浮かされたようにとろんとした顔つきになってゆく。

「なんて……なんて可愛いのかしら、真衣ちゃんてば。制服におむつカバーとよだれかけも可愛いけど、赤ちゃんになりきった真衣ちゃん、それより何倍も可愛じゃない! いいわ、早くそのワンピースを着せてあげて。私の妹の真衣ちゃんはそのワンピースを着てどれほど可愛らしくなるのか、少しでも早く見てみたいのよ。だから、早くってば、美沙!」

最後の場面を見終わった茉莉は上気した顔を上げ、美沙に向かって、叫び出さんばかりに



して言った。

「やれやれ、随分とご執心なこと。私の方が先に真衣ちゃんのお姉ちゃんになったのに、ひよっとしたら真衣ちゃんのこと、茉莉に独り占めされちゃうかもね」

美沙は苦笑交じりに呟き、真衣の脇の下に手を差し入れて椅子から立たせた。

「や、やだ……こんな所でそんな格好するなんて、そんなの……」

真衣は身をよじって弱々しく首を振った。

だが、自分よりも大柄な三人の前では抵抗も虚しい。あっという間に美沙たちは真衣の制服を短ぎ取り、おむつカバーを丸見えにしたかと思うと、特製のワンピースを着せ、背中のファスナーをさっと引き上げて股間のボタンを手早く留めてしまった。

丈の短いスカートの裾からはブルマー型のボトムスが三分の一ほど見えているが、それがおむつの厚みでふつくりと丸く膨らみ、ワンピース全体のふんわりしたシルエツトと相まって、もともと童顔の真衣をますますあどけなく見せている。

「やだっ、想像していたよりも可愛いわ。体の大きさをええ気にしなかったら赤ちゃんそのままね」

ワンピース姿になった真衣に茉莉は嬌声をあげた。

その隣で美沙が相槌を打ち、美幸も満足そうに頷きながら、真衣の専用となった収納棚から四角い紙箱を取り出し、真衣の足元に置いて蓋を開けた。

箱に入っているのは、おそらく美幸が例の業者に依頼して作らせたのだろう、これも特製の靴だった。ナース用の院内履に手を加えたのか、甲の部分が幅の広いゴムベルトになったゴム底の靴だが、色合いがパステル調のピンクに仕上がっていて、甲のゴムベルトにはアニメキャラがプリントされた、美沙お手製のワンピースにお似合いの、よちよち歩きを始めたばかりの赤ん坊を公園デビューさせる時に履かせるようなデザインの、しかしサイズだけは真衣の足に合わせた、特別仕立てのトドラーシューズだ。

こちらにも、美沙と茉莉の手によって瞬く間に履き替えさせられてしまう。それも、通学用の紺の靴下を脱がされ、家で履かされているのと同じ、くるぶしのところにサクランボを模したボンボンが付いたソックスを履かされた上でだ。

しかし、真衣の着替えがこれで済んだわけではなかった。

ボトムスがふつくり膨らんだワンピースと特別仕立てのトドラーシューズ姿で羞恥に身を震わせる真衣の目の前で、どこに隠し持っていたのか、美沙がもう一枚の布地をさっと広げた。それは、細かなフリルになった飾りレースで縁取りした真新しいよだれかけだった。

「せっかくの新しいお洋服を汚しちゃいけないから、よだれかけも作ってきてあげたのよ。お家から持ってきたよだれかけは、真衣ちゃんが上手に食べられなくてこぼしちゃったままのシミが付いちちゃってるもんね」

美沙はしれっとした顔でそう言い、真衣に着せたワンピースの胸物をシミ一つないよだれかけで覆って留め紐をきゅつと結わえた。

「よかつたわね、美沙お姉ちゃんに新しいよだれかけまで作ってもらって。これで幾らよだれをこぼしても新しいお洋服を汚す心配はなくなったから、大好きなおしゃぶりをちゅうちゅうでできるわね」

美幸が人差し指の指先を真衣の唇につんと押し当ててから、ついさつき脱がせた制服を探つて胸ポケットからおしゃぶりを取り出して啜えさせた。もちろん、おしゃぶりストラップのクリップをよだれかけの縁に留めるのも忘れない。

「あ、だったら、これも」

美沙がよだれかけを着け、美幸がおしゃぶりを啜えさせるのを見て、茉莉がベッドの毛布を捲り上げ、毛布の下に隠れていたガラガラを持ち上げて真衣に握らせた。

そうする

と、本当は高校の保健室だというのに、まるでどこかの託児所の一室で、預けられている幼児を職場体験の高校生が面倒をみてでもいるかのような光景になつてしま



う。しかも、それは見た目だけではない。放課後になってすぐ保健室にやって来た真衣が宿題を始める直前におむつを汚してから今で一時間半ほどになる。まだ尿意は我慢の限界ぎりぎりという段階ではないが、乳首や哺乳壺、おしゃぶりといった物を口にくむと勝手におしっこが出てしまうという段階には達している。そんなところへ美幸の手でおしゃぶりを強引に啜えさせられたものだから堪らない。真衣は不安げな様子で三人の顔をきよときよと見比べたかと思うと、その目にじわっと涙を浮かべ、傍で見ていてもわかるほどぶるつと腰を震わせた。そう、おしゃぶりを啜え、丈の短いワンピースの胸元を大きなよだれかけで覆われ、右手にガラガラを持ってトドラーシューズを履いた、託児所に預けられた幼児と言われなくても違和感のない外見そのまま、真衣は、スカートの裾から三分の一ほど見える丸く膨らんだボトムスの中に隠したおむつを、じわじわと溢れ出るおしっこで濡らし始めてしまったのだ。

しかも、意地悪な神様の悪戯なのか、恥辱の連鎖が途切れることはない。

真衣が身震いしながらおむつを汚している最中にインターフォンの呼び出し音が鳴り響いた。

「はい、どうしました？」

ただでさえ涙目なのに今こんなところに誰か入って来たらと思うと今にも声をあげて泣き出しそうになる真衣の顔を面白そうに見やっつて、美幸は相も変わらぬ事務的な声で応じた。『ソフトボール部の者です。走塁の練習中、選手どうしがぶつかって一人が怪我をしました。診ていただけますか』

インターフォンから返ってきたのは、慌てた様子の声だった。

「わかりました。すぐに開けるから、そのまま連れて入ってください」

怪我人と聞いては美幸ものんびりしていられない。美沙たちに向かって目配せをすると、返事を待つこともなく解錠ボタンを押した。

「や、やだ……」

どうしていいかわからない真衣は、下腹部から伝わってくるぐっしり濡れた感触に両脚をもじもじ擦り合わせながら、美沙と茉莉に向かって助けを求めにうな目を向けるだけだ。「茉莉、ベッドの毛布をもっと大きく捲り上げて。そう、それでいいわ。真衣ちゃんも急いでベッドに上がるのよ。着替えている暇なんてないから、そのまま体の上から毛布をかぶってごまかすの」

美沙は、茉莉が毛布を足元の位置まで捲り上げるのを待って、真衣の体をベッドの上に抱き上げた。

その間、真衣はただ身をすくめ、言われるまま美沙の背中に腕をまわしたり、すぐるようにつかんだ手を握ったり離したりするだけだった。もつとも、溢れ出るおしっこでおむつを濡らしている最中にてきぱき動けるわけもないから、それも仕方のないことではあるのだが、それにしても、その仕草は、まだ自分では何もできない幼児そのままだった。

ソフトボール部のマネージャーらしきジャージ姿の生徒がユニフォーム姿の生徒を連れて保健室に入ってきたのは、美沙が真衣をベッドに横たえさせ、鼻のすぐ下まで体を毛布で覆い隠してしまつた直後のことだった。

「お願いします、先生」

ジャージ姿の生徒はユニフォーム姿の生徒を美幸の向かいの椅子に座らせ、いかにも心配そうに言った。

「わかりました。じゃ、先ず外傷の確認から始めるわね。ぶつかつた拍子に転倒して地面に膝を擦つたのかな。とにかく、消毒をして、それから——」

美幸はすぐに真剣な面持ちで診察を始めた。

一方、てきぱきと処置してゆく美幸の姿に、ジャージ姿の生徒は安堵の溜息をつき、診察の邪魔にならないよう身を退いた。

と、その時になってようやく美沙たちがいることに気がついたのか、少し驚いたような顔になる。

「誰かと思ったら、三沢さんじゃない。そういえば、中等部からソフトボール部の敏腕マネージャーだったっけ。練習試合の相手をみつ付けてくるのもうまいって聞いたことがあるわよ」

こちらでも突然のことにいささか慌てた様子の茉莉だったが、ジャージ姿の生徒が同じクラスの級友だと気づくと、打ち解けた様子で声をかけた。

「あら、園田さんと杉下さんだったのね。佐藤さんの付き添い？ クラス委員長や保健委員とはいつても、今日は朝から大変だったわね」

話しかけられた級友は、茉莉と美沙の顔を順番に見た後、毛布にくるまってベッドに横たわっている真衣に気がついて、ねぎらうように言った。

が、毛布が真衣の鼻のすぐ下までかかっているのを見ると、怪訝な表情を浮かべて

「それにしても、これじゃ佐藤さんが暑がるんじゃない？ 毛布はもう少し下までの方が……」

と言つて、毛布に手を伸ばしかける。

それを美沙が

「あ、いいのよ、そのまま。佐藤さん、悪寒がするってさっきまで震えていたの。だから、毛布はそのままにしておいて」

と説明して、今にも毛布に届きそうになっている級友の手をやんわり押しとどめた。

もちろん、美沙の説明は事実とは異なる。真衣にしても、もうすぐ五月というこの季節、毛布にすっぽりくるまって暑くないわけがない。しかし、もしなければならぬ理由があった。それは、啞えたままになっているおしゃぶりのせいだ。おむつを汚している最中にインターネットの呼び出し音が鳴ったものだから、真衣は反射的におしっこの流れを止めようとした。だが、いったん溢れ出したおしっこを止めることはできない。それでも誰かが保健室に入ってくるといふ怯えのせいで、ついつい、なんと少しでもおしっこを止めようと無駄な努力をしてしまう。そのせめぎ合いで、おしっこは勢いよく迸り出ることもかなわず、かといって完全に流れが止まるわけでもない、少しずつじくじくと溢れ出るような状態になってしまい、その結果、膀胱が空になるまでには普段に比べて何倍も長い時間が必要になってしまった。その間も、下腹部に肉体的な痛みまで覚えるあの苦痛きわまりない尿意がいつまた高まつてくるかもしれないという恐怖が先に立って、尿意から解放される唯一の拠り所であるおしゃぶりを口から離すことができないでいた。そのおしゃぶりを級友の目から隠すためには、どうしても毛布を口まで覆いかぶせる必要があったのだ。

「そうだったの？ でも、佐藤さん、なんだか顔が赤いわよ。やつぱり暑いんじゃないかな。ま、鈴木先生が一緒だから大丈夫だとは思うけど」

美沙の説明を受けた級友はそれでもまだ納得できない顔つきながら、同じクラブの仲間を診察してくれている美幸の顔にちらと目をやっつて、不承不承といった様子で手を引つ込めたが、その言葉通り、真衣の顔は真っ赤に上気していた。

しかし、それが、暑いからではなく、級友の目の前で赤ん坊そのままの格好をしてベッドに横たわり、級友たちが縫い上げたおむつをとめどなく溢れ出るおしっこで濡らす羞恥のせいなのは言うまでもない。おねしょシーツの上に横たわっておむつをじくじく濡らす真衣には、一刻も早く保健室に静寂が戻るよう願うことしかできなかった。

## 《二六》 特別補習

久々の登校から十日ほどが経って四月も終わりに近づき、ゴールデンウィークが始まってすぐの土曜日。休日だというのに、いつもと同じように車で学院の正門をくぐる美幸の姿があった。

だが、いつものカジュアルな装いではなく、何か特別な行事でもあるのか、胸に小振りのコサージュをあしらったオフホワイトのスーツに真珠のネックレスといういでたちだ。しかも、正門を通り抜けた美幸の車は、高等部の職員専用の駐車場に向かうコースを逸れて走り続ける。

結局、美幸が車を駐めたのは、学院の敷地の中でも最も奥まった場所にある駐車場の一角だった。

「さ、着いたわよ。おりてらっしゃい」

美幸は、休日ということで他の車が一台も駐まっていない広々した駐車場で自分の車のドアを目一杯に引き開け、後部座席に座っている真衣に向かって声をかけた。

「い、いや……こんなこと、許して。……お願いだから」

真衣は座席で身をすくめ、激しく首を振るばかりで、なかなか車からおりようとしない。

「今更なにを言っているの。せっかく高等部の校長先生と教頭先生が幼稚舎の園長先生にお願いして特別にお許しをいただいでくださったのに、そのご厚意を無駄にする気なの？」

美幸は大きく開け放ったドアから上半身を車の中に突っ込み、真衣の体を固定しているシートベルトの金具に指をかけた。

「や、やだったら……どうしてこんなことをしなきゃいけないのよ」

真衣は体をよじった。

だが、そんなことで美幸の手から逃れることはできない。なにせ、真衣の体を固定しているのは普通のシートベルトではなく、医院に療養装具を納入している業者に依頼して造ってもらった特製のチャイルドシートなのだから。

「どうしてこんなことを言うけど、仕方ないでしょ？ 一昨日、真衣ちゃんが保健室で宿題をしている時、わざわざ教頭先生がいらして、授業の出席時間が不足しそうだから、このままじゃ進級できそうにありませんっておっしゃったんじゃないやなかったっけ？ でも、お父様が外国へ出張中にそんなことが決まっちゃったら大変だから、なんとかありませんかってママが教頭先生にお願いで、いろいろ考えていただいたんじゃない。それで、結局、校長先生と教頭先生のご尽力で、こっちへ出席した時間を高等部の授業時間に振り替えていた、だからできるようにしていただけたのよ。まさか、先生方にご迷惑をかけたこと、忘れたわけじゃないでしょうね？」

美幸はチャイルドシートのベルトを外しながら、強い調子で言った。

叱責するような調子でそう言われた真衣は、しよげ返った表情で黙りこんでしまう。

「ほら、おりてらっしゃいたら」

美幸はチャイルドシートのベルトを外し、言い返す言葉をみつけれず押し黙ってしまった。真衣の手首をつかんで強引に車から引きおろした。

そこへ、五月を目前に控えて若葉の匂いがしそうな爽やかな風が吹き渡り、制服のスカートをふわっと舞い上がらせた。

「いやっ！」

真衣が金切り声をあげてスカートの裾を押さえようとする。

しかし、今日の真衣が着ているのは、制服とはいってもいつものセーラー服ではないためスカート丈も異なり、裾を押さえるのに手間取って、もたもたしている間に、布おむつでぷっくり膨れたおむつカバーが丸見えになってしまっていた。

しかも、風がおさまってスカートが元通りになっても、セーラー服に比べると丈が短いせいで、かろうじて隠れるか隠れないかといったおむつカバーが、そよ風が吹いて少し揺れるだけでも僅かながら見えてしまう。

「うふふ。さすが、お裁縫が得意な美沙お姉ちゃんだこと。スカート丈もちよい感じに仕上がっているわ」

美幸は、真衣のスカートの裾から微かに見え隠れするおむつカバーを面白そうに眺めながら含み笑いを漏らした。

「ちよūdなんかない。こんな、こんな……おむつカバーが見えちゃうような短いスカートがちよūdいいわけなんてない」

美幸の含み笑いを耳にした真衣は、今にも消え入りそうな声で弱々しく言った。

「何を言っているの。やつとよちよち歩きができるようになったばかりの小っちゃい子には、うんと短いスカートがお似合いなのよ。じゃないと、スカートがまとわりついて上手にあんよが出来ないんだから。——ほら、ここになんて書いてある？」

美幸はあやすように言って、真衣が着ている制服の胸元を指差した。そこには、黄色いひよこの形をした名札が安全ピンで留めてあり、その名札には

「……けいめいじよがくいん、よ、ようちしや……ねんしようクラス……ひよこぐみ、さとうまい」

と、美幸に強要されて真衣が渋々読み上げる通り、『啓明女学院幼稚舎 年少クラス・ひよこ組 佐藤真衣』という文字が平仮名で記されていた。

「わかったでしょう？ 年少さんの、それもまだおむつの外れない真衣ちゃんが丈の長いスカートなんか穿いたら、あんよがスカートに絡まってすぐにころんしちゃうのよ。そんなことにならないよう、美沙お姉ちゃんが気を遣って作ってくれたんだから」

美幸は勝ち誇ったように言って、満足げに微笑んだ。

美幸が車を駐めたのは、幼稚舎の職員が使う駐車場だった。そして、真衣が身に着けている制服こそ、啓明女学院幼稚舎の制服だ。

啓明女学院は幼稚舎から高等部まで、一貫してセーラータイプの制服を採用している。高等部の制服はいつも真衣が身に着けているものだし、中等部の制服は、高等部の制服に似ているが、一つ一つのラインや襟の縁などに幾らか丸みをもたせたデザインに仕上がっている

ため、両者を区別するのは難しくない。初等部の制服は、高等部や中等部と同じく上下セパレートにはなっているものの、一年生と六年生との体格差が大きいということもあって、中に着る物や成長度合いに合わせてサイズを調整しやすいようにタックやプリーツを多用し、体のラインがなるべく目立たない仕立てになっている。そして、幼稚舎になると、セーラー服とはいっても、上下が分かれているのではなく、やや薄手の生地でできた上衣の裾を柔らかいラインで下の方まで伸ばし、その伸ばした部分がそのままふんわりしたスカートになるようにデザインされたワンピースタイプのセーラーズーツになっていた。幼児が着たり脱いだりしやすいように大きく開けた胸元を、着用した時にはポーター柄の中ほどに啓明女学院の院章をあしらった胸当てで塞ぎ、純白の大きな襟の縁取りラインが鮮やかな、おしゃまな感じと子供らしい可愛らしさとを併せ持つ、いかにも幼い女の子の憧れの的といった仕上がりのセーラーズーツだ。

今日の真衣が身に着けているのは、そんな、啓明女学院幼稚舎の制服だ。もっとも、真衣がいくら小柄だといっても、幼稚舎の制服を着られるわけではない。そこで、美沙がお得意の裁縫で縫い上げたのが、今まさに真衣が着ているセーラーズーツというわけだった。しかし、お手製ながら、生地は本物の制服を取り扱っている業者から取り寄せた物だし、基本的なラインにしたって、これも業者から取り寄せた型紙を拡大し、それを元に真衣の体つきに合わせて細部をアレンジした上で美沙が入念に手縫いで仕上げたわけだから、破綻なく綺麗にまとまっている。そこにひよこの形をした名札を安全ピンで留めれば、どこからどう見ても、啓明女学院幼稚舎の正式な制服そのものだ。

幼稚舎の制服であるセーラーズーツを着て、名札と同じ黄色の通園鞆を肩から掛けた真衣と、上品なおフホワイトのズーツ姿の美幸とが並ぶと、まるで、幼稚舎の入園式に臨む親子連れさながらだった。

いや、実は『さながら』どころか、これから二人は、実際に啓明女学院幼稚舎の入園式に出席するために、休日だというのに学院を訪れているのだった――。

二日前、いつものように保健室で執務機の一角を借りて宿題に取りかかろうとしていた真衣のもとへ教頭が訪れた。そして、いささか言いにくそうにしながら、このままだと授業への出席時間が不足するため進級できなくなりそうだと言われ、出席時間に振り替えることができる特別補習を受けるよう真衣に勧めたのだった。

ただ、特別補習といっても、教頭の簡単な説明によると、出席時間が不足する教科ごとに正規時間外の追加授業を行うわけではなく、その代替措置として、伝統を重んずる啓明女学院の歴史と校風について再教育を施すことに主眼を置いた内容になっているということだった。茉莉たち生え抜きの生徒とは違って真衣や美沙のように途中から啓明に入学した生徒は、入学式の前に二日間、啓明女学院の成り立ちから現在までの歴史や校風をみっちり教えこまれる。もちろん、真衣も高等部の入学式を迎える直前の二日間、他の中学校からやって来た生徒たちと一緒に事前説明会として理事長や校長から直々に啓明の歴史を聞かされ、啓明の生徒として遵守すべき事柄を微に入り細をうがって教えられたのだが、そういった説明会の発展版のようなものを真衣に受けさせて、それをもって不足する授業時間に振り替えること

が可能だというのだ。本来なら、出席時間が不足する教科ごとに補習を受けることが望ましいのだが、真衣の場合は日に何度も途中で授業を抜け出すため、特定の教科の補習では間に合わず、かといって全ての教科において補習を実施するとなると教師にかかる負担が重くなりすぎるから、教科ごとの補習は現実的ではないと判断された結果の、ぎりぎり実施可能な代替措置というわけだった。

むろん、真衣に否のあろう筈がない。簡単な説明を聞いただけで、真衣は教頭の申し出を即座に受諾してしまった。

まさか、それが、これまで以上の羞恥と屈辱を真衣に受け容れさせるために美幸が仕掛けた畏だとも知らずに。

実は、学校側としては、出席日数さえ足りていれば、各々の教科ごとの出席時間まで進級の可否を判定する材料にするつもりはなかった。登校した日数が足りていて定期テストでそれなりの点数を取れば、真衣を進級させることになんら問題は無いという判断だった。それが、ある日、美幸の方から、他の生徒にしめしをつけるためにも進級の判定は厳しく行うべきだという申し出があったのだ。それも、申し出が聞き入れられない場合は辞職も厭われないという、いささか穏やかならざる言葉まで添えて。名門といわれる啓明でも生徒を募集する際に困難が伴う少子化のこの時勢、卒業生であり経験豊かな女医である美幸の存在は、入校希望者を集めるための格好の宣伝材料になる。ここで美幸を手放すわけにはゆかないという判断もあって、結局、美幸の意向に沿うような形で教頭が真衣に特別補習を勧めたというのが真相だった。それも、真衣だけのために美幸がカリキュラムを組んだ、文字通り『特別な』内容の補習を。

特別補習は、通常の授業の妨げにならないよう、学校が休みになる土曜日と日曜日を使って行われることになった。その初日こそが、ゴールデンウィークが始まってすぐの土曜日というわけだった。

そして、その日の朝、大きなベビーベッドの上で目覚めた真衣は、美幸の手で、高等部の制服であるセーラー服ではなく、幼稚舎の制服であるセーラースーツを着せられたのだ。それも、年少クラスを示す名札が胸元に留められた、スカート丈の短いセーラースーツを。この時になってようやく真衣は美幸の企みに気がついた。しかし、もはや全ては手遅れだった。

——そんな経緯があって、特別補習という口実のもと、高校生の身でありながら土曜日と日曜日は幼稚舎への通園を強要されることとなった真衣。

「ほら、いつまでもこんな所でぐずってちゃ駄目でしょ。せつかくの入園式に遅刻したらどうするの」

美幸は、スカートの裾を押さえたきりなかなか歩き出そうとしない真衣のお尻をおむつカバーの上からぼんと叩くと、華奢な手首をつかんでさっさと歩き出した。

\*

駐車場から塀沿いにしばらく通路を歩くと幼稚舎の表門が見えてくる。



「ほら、見てごらん。真衣ちゃんのために先生方が用意してくださったのよ」

真衣の手を引いて歩きながら、近づいて来る表門を美幸が指差した。

幼稚舎の門をアーチ型に彩る飾り付け、門の横に立てかけられた『けいめいじよがくいんようちしやりんじにゆうえんしき』と記された大きめの看板や、それに寄り添うように立てかけられた『さとうまいちゃんにゆうえんおめでとう』と記された小振りの看板といった物が、言われて渋々視線を向けた真衣の目に映る。

「ま、真衣……本当に幼稚舎に……」

真衣は、自分の名前が平仮名で書かれた看板と、セーラースーツの胸元の名札とをおずおずと見比べ、スカートの裾を押さえることも忘れて弱々しく呟いた。けれど、最後まで言葉にできずに途中で口をつぐんでしまう。

「そうよ、今日と明日の二日間、真衣ちゃんは幼稚舎に通うのよ。そうして、月曜日がきたら高校生に戻るの。でも、その次のお休みの日になったら、また可愛い幼稚園児になるのよ。そんなことを何度も何度も繰り返してから、次は初等部に入学して、やっぱり同じように高等部と初等部の生活を交互に経験して、その後は中等部。そんなふうにして、中等部の出席日数もいっぱいになって、啓明女学院にふさわしい女の子に成長したら、今度こそ本当の高等部の生徒になって二年生に進級できるのよ」

美幸は教諭すように言い、門の向こう側からこちらに向かって歩いてくる人影に気づくと、

「ほら、先生方がいらっしやるから、ちゃんと御挨拶しなきや駄目よ」

と真衣の肩を叩いて、ゆっくり近づいて来る二つの人影の方に顔を向けさせた。

と、向こうもこちらに気がついたのだろう、それまでゆっくり歩いてきた二つの人影が揃って足早になったかと思うと、その内の一人が大きく手を振ってみせ、

「やっほ、真衣ちゃん。今朝は入園式の準備をするために真衣ちゃんよりもずっと早く出かけなきやいけなかったから、お家でおはようの挨拶をできなかったわね。だから、その代わり、ここでしておくわね。改めて、おはよう、真衣ちゃん」

と、弾んだ声で話しかけてきた。

「え……?」

不意に名前を呼ばれた真衣は一瞬きよとした表情になったが、駆け寄ってくる人影に目を凝らし、それが誰なのかわかると、目を大きく見開いて驚きの声をあげた。

「お、お姉ちゃん!? 美沙お姉ちゃんと茉莉お姉ちゃんがどうしてこんな所に!?!」

真衣が驚くのも無理はない。先生方だと言って美幸が指差した人影が美沙と茉莉だったのだから。しかも二人とも、いつものセーラー服ではなく、実際の年齢よりもずっと大人びて見えるツーピースのシックなスーツを身に着けた上に、髪をアップにまとめているから尚更だ。

一方、美幸は

「ほらほら、そんな態度じゃ駄目でしょ、美沙。ここにいる間は美沙も茉莉も真衣ちゃんのお姉ちゃんじゃなくて啓明女学院幼稚舎・年少クラス・ひよこ組の臨時担任教諭と副担任なんだから、もう少し威厳をしめさなきや」

と、美沙に向かって注意を促す。しかし、どこかおどけた様子なのも隠そうとはしない。

「あ、ごめん、ママ。——ううん、じゃなかった、佐藤真衣ちゃんのお母様。担任としての自覚が足りませんでした。これから注意しますので、今回の件はお許しください」

美幸に合わせて美沙が、やはり少し悪戯めいた口調で応じた。

「先生……お姉ちゃんたちが幼稚舎の先生？」

まだ驚きがおさまらない真衣は、きよとんとした顔で誰にともなく聞き返した。

「そうよ、美沙お姉ちゃんが担任の先生で、茉莉お姉ちゃんが副担任の先生。もちろん、真衣ちゃんが入る年少クラス・ひばり組のね」

美幸は三人の顔を順番に見まわしてそう言い、くすりと笑って付け加えた。

「もつとも、ひよこ組には真衣ちゃん一人しかいないから、先生の方が多くなっちゃうんだけど。でも、幼稚舎のお姉ちゃんなのにおむつ離れできないような手のかかる真衣ちゃんのお世話をしなきゃいけないんだから、先生の数は多いにこしたことはないかな」

厚生労働省が所管する保育園だと、三年保育の所が当たり前だし、二歳児クラスを設けたり月齢六ヶ月くらいの赤ん坊から預かる施設も少なくない。それに対して、文部科学省の所管になる幼稚園の場合、長くても二年保育というのが一般的だ。啓明女学院幼稚舎も例外ではなく、年中クラスと年長クラスでの保育を原則とし、年中クラスには『すずめ組』と『ひばり組』、年長クラスには『はと組』と『かもめ組』というふうに、それぞれのクラスに二つずつ組を設置した編成になっている。啓明女学院幼稚舎の組織図を丹念に眺めても、真衣が入ることになっている『年少クラス』という名も『ひよこ組』という名も見当たらない。その事実からも、『年少クラス・ひよこ組』というのが真衣だけのために特別に設けられた学級だということが明かだ。

「で、でも……」

「あら、お姉ちゃんたちに先生になつてもらうのはいやなのかな？ だったら、幼稚舎の正式な先生に真衣ちゃんのお世話をお願いしなきゃいけないわね。いいわよ、それでも。高等部の校長先生を通してお願いすれば幼稚舎の園長先生も快く承諾してくださるでしょうし」

思わず抗弁しかける真衣の言葉を遮って、美幸はしれっとした顔で言った。しかし、そんなことになったら、恥ずかしい秘密を幼稚舎の教諭たちにまで知られてしまう。取り澄ました顔でもなげにそう言う美幸の前に、真衣は押し黙るしかなかった。

「どうやら、お姉ちゃんたちが先生になつてくれた方がいいって真衣ちゃんにもわかったみたいね。これでこそ、校長先生にお願いした甲斐があるってものだわ。大学は幼児教育科に進んで将来は保育園か幼稚園の先生を目指している美沙お姉ちゃんと、幼稚舎からずっと啓明に通っていて、一度も外れることなくクラス委員長をずっと務めている茉莉お姉ちゃん。この二人の組み合わせなら、きつと真衣ちゃんを啓明女学院の幼稚舎にふさわしい素直で可愛い園児さんに躰け直してくれるわよ」

しよげ返った顔つきで口をつぐむ真衣に向かって念を押すように言ってから、美幸はスーツ姿の二人に目配せをした。

「それでは、あとのことは私たちにおまかせください。お子様に入園式の手順を説明してから改めてお連れしますので、お母様は、ここから、入園式の会場にお入りいただいて結構で

す。本来ですと入園式は講堂で行われるのですが、一人だけの臨時入園式ということで、教室を会場として使うことになっていきます。ただ、真衣ちゃん一人のために新しい教室を用意することもできませんので、年中クラス・すずめ組の教室を借りて、これからの保育も本日の臨時入園式も、そちらで進める手筈になっています。お間違えのないよう、そちらへお願いいたします」

合図を受けた茉莉が、いかにも幼稚舎の教諭然としたふうを装い、如才ない口ぶりで美幸に説明した。

「承知しました。娘のことはよろしくお願いいたします。——いいわね、真衣ちゃん。先生方の言いつけをちゃんと守って、いい子にするのよ。ママは先に入園式の会場へ行って保護者席で待っているから、寂しくても泣いちゃ駄目よ」

美幸も調子を合わせ、我が子を幼稚舎の教諭に預ける母親を演じてそう言うと、わざとのように恭しくお辞儀をして、入園式の会場に向かった。

\*

臨時入園式の会場にあてられている年中クラス・すずめ組の教室は、椅子や机の半分ほどが後ろの方に押しやられて部屋の前側が空けられ、入り口の縁に沿って紅白の造花が幾つも飾り付けられていて、小振りの黒板にはピンクのチョークで書かれた『さとうまいちゃん、おめでとう』という花文字が躍っていた。

靴をスリッパに履き替え、少し窮屈な思いをしながら子供用の椅子に腰かけて美幸が待っている、ほどなくビバルディ作曲の《春・第一楽章》がスピーカーから流れ出し、

「ただいまより、平成××年度、啓明女学院幼稚舎の臨時入園式を執り行います。本日、入園を許可された者、佐藤真衣、以上一名。今日から新しく当幼稚舎の園児の仲間入りをする児童が入場しますので、保護者の方は拍手でお迎えください」という美沙の声がマイクを通して重なった。

と、造花に縁取りされた扉が開いて、スーツ姿の茉莉が入ってきた。そのあとに、手を引かれた真衣が続く。通園用の靴から履き替えさせられた上履きの底ゴムが板張りの床と擦れ合って歩を進めるたびにきゅっきゅ鳴るのがいかにも幼児めいた感じで、真衣の頬がうっすらとピンクに染まる。

それを見た美幸が両手を打ち鳴らして、時ならぬ入園式が始まった。

美沙と茉莉が交互に園長や育友会々長の代役を演じて歓迎の言葉や祝辞を述べ、テープによる園歌の演奏があつて、一人きりの臨時入園式は滞りなく進行し、やがて式次第は新入園児による挨拶の順番になった。

「はい、これを読んでちょうだい。啓明の幼稚舎に入る子は入園前でも平仮名くらいは読めるようになっていてる筈だから、真衣ちゃんも大丈夫だよ？ でも、もしも読めない字があったら先生に言ってね。助けてあげるから」

式次第の進行を示すめくりの頁を繰ってから、茉莉が、スーツのポケットから取り出した

四つ折りの紙を広げて真衣に手渡し、背中を押して前方に押しやった。

保護者席の美幸と目が合った真衣は思わず視線を床に落としたが、マイクスタンドを運んできた美沙に、挨拶文を書いた紙を正面に持ってちゃんと前を向きなさいと叱責され、強引に顔を上げさせられてしまう。

再び美幸と目が合った真衣は、顔を伏せる代わりに、挨拶文の用紙を凝視するしかなかった。そうして、三人の視線を痛いほど感じつつ、紙に書かれた『ごあいさつ』を口に出して読むしか。

「……にゆうえんのごあいさつ。とつてもきもちのいいはるになって、まち……まちこがれていたようちしゃにはいれることになりました。……ここにはないけど、ねんちようクラスとねんちゆうクラスのねえさん。きようからけいめいじよがくいんようち……ようちしやのなかまになるさとうまいです」

マイクを

通して聞こえる真衣の声は、羞恥のため小刻みに震えていた。しかも、平仮名ばかりの文章は意外に読みにくく、所々言葉に詰まってしまう。

そのため、どこかたど



たどしく舌足らずな幼児めいた口調になってしまるのが自分でも情けない。

「わ、わたしは、ねんちゆうクラスにはいれないから、とくべつに、ねんしようクラスにいられてもらうことになりました。どうしてねんちゆうクラスにはいれないかというと、まだ、お……おもらしがなおらなくて……お、おむ……」

それまでも言葉に詰まりぎみだった真衣だが、とうとう今度は完全に口をつぐんでしまう。「あら、どうしたの？ 今までは上手に読めていたのに、知らない字が出てきたのかな？ だったら先生が読み方を教えてあげるから、見せてごらん」

壁際に立つてこの成り行きを見守っていた茉莉が歩み寄って、真衣が小刻みに震える手で持っている紙を覗きこんだ。

「ああ、これはね、『おむつ』って読むのよ。いい？ お・む・つ、よ。わかるわよね、だって、こうして真衣ちゃんもあてているんだもの、おむつを。さ、わかったら続きを読んで

ちようだい」

改めて『おむつ』という言葉を書きとすると、恥ずかしさのあまり口に出して読むことができなくなってしまう。そんな真衣の胸の内を充分に承知しながら、茉莉は何度も繰り返し『おむつ』という言葉を書いて聞かせ、おむつで丸く膨らんだ真衣のお尻をスカート越しにぼんと叩いた。

「……お、おむつがはずれないからです。だから、もうおむつじゃなくてパンツのおねえちゃんになったねんちゆうくらすのおねえさんたちとちがつて、ひとりだけ、ねんしゆうクラスにはいることになりました。……それと、わたし、ほんとうは、じゅ、じゅ……」

茉莉に促され、マイクを通して聞かせるか聞こえないかの力ない声を振り絞る真衣だったが、そこまで読んだところで再び押し黙ってしまった。

「今度はどんな字が読めないのかな？」

いったん壁際に退いた茉莉が改めて真衣の傍らにやって来て、どこで詰まっているのか前もってわかっているくせに、わざと挨拶文に目を通してしばらく考えるふりをしてから

「ああ、数字が読めなかったのね。そうね、二桁の数字だもん、読めなくても仕方ないわよね。じゃ、先生が教えてあげるわね。いい？ 最初は1で『いち』、次の6で『ろく』なんだけど、続けて読む時は『いちろく』じゃなくて『じゅうろく』って読むのよ。さ、お口に出して読んでごらん」

と、これ以上はないくらい優しい声で教え、必要もないのに、これみよがしにマイクスタンドの位置を調整した。

「……わたし、ほ、ほんとうは、じゅう……ろく……じゅうろくさいなのに、まだおむつばなれできないから、ねんしゆうクラスにいれてもらうことになりました。ねんしゆうクラスだから、ねんちゆうクラスやねんちゆうクラスのおねえさんたちからみると、まだなにもできないもつとです。と、としはわたしのほうがうえだけど、ほんとうはいもつとです。だから……かわいがってくださいね、ここにはいないねんちゆうクラスとねんちゆうクラスのおねえさん。それと、わたしがけいめいじよがくいんようちしやのえんじとしていけないことをしたら、ちゃんとしかってください。おねがいします」

自分の実際の年齢をわざと文字にして改めて思い知らされ、その上、本当は自分よりもずっと年下の（たとえ、この場にはいないとしても）幼児を『お姉さん』と呼ばされる屈辱に、真衣の胸は今にも張り裂けそうだった。しかし、口をつぐんだままだと、今度はどんな目に遭わされるかしたくない。

真衣には、浅い呼吸を何度か繰り返してから、続きの文章を口にするしかなかった。

「それと、おとうさん、おかあさん、わたしをいまままでそだててくれてありがとう。これまではわがままをいってばかりのあかちゃんだったけど、きょうからようちしやのおねえちゃんです。……うえのクラスのおねえさんたちにくらべるとまだあかちゃんだけど、でも、おねえさんたちをみならって、もつともつとすなおないこになるようがんばります。だけど、あまえんぼうなのはなおらないから、ようちしやにいるあいだはおねえちゃんになってがんばるけど、おうちにかえたらおもいきりあまえさせてください」

その言葉に、美幸がとびきりの笑顔になって大きく頷いている。美幸と目に合わさらないよ

う挨拶文から視線を外そうとしない真衣にも、その様子がありありと伝わってきた。

（おかあさん……十何年も前、私が本当の幼稚園に入園した日、私が幼稚園の門をくぐるのをどんな気持ちで見ているくれたんだろう。私が上級生のお姉さんに手を引いてもらってステージに上がるのを父兄席からどんな顔で見ているくれたんだろう。お母さん……あの時の私、もうおむつなんて外れていたよね。なのに、今の私、幼稚園の制服の裾からおむつカバーをみせて、十六歳のくせして、幼稚舎の入園式にいるんだよ。お母さん、私……私、どうなっちゃうの!）真衣は、鼻の奥がつんと痛くなるのを感じながら、胸の中で切なく呟いた。しかし、そんな真衣の胸の内を知ってか知らずか、茉莉がぽんとお尻を叩いて尚も先を促す。

「さいごに、せんせいगतにおねがいがあります。いちばんおくれてようちしゃにはいるわたしは、ようちしゃのなかでいちばんいもうとだから、いろいろごめいわくをかけるとおもいます。でも、せんせいがたのいいつけをまもつていいことになるようがんばるから、いろいろおしえてください。きょうからよろしくおねがいます。へいせい××ねんしがつ××にち。けいめいじよがくいんようちしゃ、しんにゆうえんじだいひよう、ねんししようクラスひよこぐみ、さとうまい」

どうにか最後まで挨拶文を読み上げた真衣がおそろおそろお辞儀をするのを待って、美沙がマイクを握った。

「新入園児を代表して、ひよこ組の佐藤真衣ちゃんをご挨拶してくれました。ちよつと緊張していたみたいだけど、わからない字を先生に教えてもらったのは二回だけで、年少クラスとは思えないほどしっかり読めましたね。この調子なら、上のクラスのお姉さんたちを見習って、いい子になってくれること間違いありません。今はおむつの真衣ちゃんだけど、早くパンツのお姉ちゃんになれるよう頑張ろうね。お母様も温かい目で気長に見守ってくださいますよう、担任の私からお願い申し上げます。——それでは、新入園児が退場します。どうか、大きな拍手で送ってあげてください」

満面の笑みを浮かべて美沙がそう言うのと同時にスピーカーから《小さな世界》の明るいまろデイが流れ出し、茉莉が真衣の手を引いて扉の方に歩き出した。保護者席の美幸は、リズムに合わせてテンポよく手拍子を奏でている。

「以上をもちまして、平成××年度の臨時入園式はつつがなく終了いたしました。引き続き、園児・父兄・教諭を交えた入園時オリエンテーションを行いますので、保護者の皆様はそのままの席でお待ちください。園児を連れて教諭が戻り次第、オリエンテーションを開始いたします」

茉莉と真衣の姿が扉から消えるのを待って、美沙がマイクを通して告げた。保護者の皆様も何も、保護者席には美幸しかないのだが、真衣を徹底的に新入園児扱いするために、本当の入学式当日の行事を残さずなぞっている様子がありありだ。

待つほどもなく、いったん教室から出て行った真衣が、入園式の最中はどこかに置いておいたらしい通園鞆を再び肩に掛け、茉莉に手を引かれて戻ってきた。

待っている間に美沙が手早く椅子と机を動かしてすっかり元の教室に配置を戻しており、

戻ってきた真衣は美幸のすぐそばの椅子に座らされ、茉莉は、美幸や真衣と机を挟んで向かい合う位置に置いてある椅子に、美沙と並んで腰をおろした。

「ご挨拶もちゃんとできて、とつてもお上手だったわよ、佐藤真衣ちゃん。この調子でこれからも頑張ろうね」

まず、真衣の向かい側に腰かけた美沙が、少しよそよそしい口調で話しかけた。

それに対して真衣が弱々しく首を振りながら

「やめようよ。何の冗談か知らないけど、こんな馬鹿げたこと、もうやめようよ」

と訴えかける。

すると、それまでにこやかな笑みを浮かべていた美幸が突如として厳しい顔つきになり、これ以上はないくらい真剣な声で

「馬鹿げたことじゃありません！ 高等部の校長先生や教頭先生、それに幼稚舎の園長先生は、なんとかして真衣ちゃんが進級できるようにご尽力してくださいのよ。それに、こんな特別補習を高等部の先生方や幼稚舎の先生方にお願いでいいわけがないから、お姉ちゃんたちがせっかくのお休みの日だつていうのに手伝ってくれているんじゃないの。それなんですか、馬鹿げたことだなんて！」

と叱責する。

「だ、だつて……」

これまで経験したことのない美幸の剣幕に、まだ何か言いたそうにしながらも、つい真衣はたじろんでしまう。

そこへ、更に嵩にかかって美幸が続けた。

「真衣ちゃんは中学校まで公立だったから知らないと思うけど、進級できないってことは、啓明じゃ大変なことなのよ。あまり不安にさせるといけないから『進級できない』なんて穏やかな表見をしているけど、それって、『落第』のことだからね。真衣ちゃん、啓明で『落第』するってことがどういうことか知らないから、みんなが真衣ちゃんのためを思つてやってくれていることを馬鹿げたことだなんて言えるのよ」

ついさっきに比べれば少しは穏やかな声に戻っているものの、まだ憤懣やるかたないといった美幸の口調だ。

そこへ茉莉が横合いから割って入って美幸をなだめる。

「ちよつと、ママも落ち着いてちょうだい。ママは啓明の卒業生だし私は幼稚舎から啓明だったからよく知っているけど、真衣ちゃんは中学まで別の学校だったから、まだ知らないことはたくさんあるのよ。それをそんな頭ごなしに叱りつけるのは感心しないわね。ここは、ちゃんと説明してあげなきゃ」

幼稚舎の臨時教諭からいつもの生真面目な委員長に戻った茉莉が取りなすように言つて真衣の方に向き直り、落ち着いた声で続けた。

「啓明では、落第処分が二段階になっているの。たとえば、高等部一年生で第一段階の落第処分を課された場合、次の年度も一年生をやり直さなきゃいけないんだけど、ま、これは他の学校でいうところの落第と同じね。でも、啓明だと、第一段階の落第処分で昨年度と同じ学年をやり直してもまだ進級できるレベルに達しないと判断された場合は、第二段階の落

第処分として、強制的に学年を下げられてしまうのよ。それも、たとえば高等部一年生から中等部三年生へ一学年落ちるだけっていうふうに限定されるわけじゃないの。担任と学年主任と教頭先生が相談して、その生徒の学力や態度にふさわしい学年まで何年分も一気に下げられることだってあるの。場合によっては、高等部一年生から初等部まで落とされることもね。しかも、高等部から初等部に落とされて、もうこの学校でやっていく自信をなくして自主的に退学したりすると、学歴としては初等部中退ということになって、別の学校へ転校しようとしても、小学校からのやり直しになっちゃうの。公立の幼稚園、小学校、中学校を卒業して高等部から啓明に入って、啓明で高等部から初等部に落とされたりしたら、公立での小学校卒業と中学校卒業の経歴まで取り消されちゃうことになるのよ。それほど、啓明女学院というところは教育界で力を持っているの。——真衣ちゃんがそんな目に遭わないように、先生方もママも私たちも必死なの。これで、ママが真衣ちゃんのことをこれまでにないほど厳しく叱った理由がわかってもらえたかな？」

穏やかな声でそう説明する茉莉の言葉を聞いているうちに真衣の顔がこわばり、顔色を失ってしまふ。

そこへ、追い討ちをかけるように、美幸が茉莉の言葉を引き継いで言った。

「第二段階の落第処分で、高等部から幼稚舎へ落とすこともできるのよ。真衣ちゃんの我儘がひどくて、私たちの言いつけをちつともきかないようなら、真衣ちゃんをこのまま本当に幼稚舎に入れちゃってくださいって高等部の校長先生に進言しなきゃいけないくなるかもね。そしたら、真衣ちゃん、私たちが納得するまで、年少クラス・ひよこ組に何年間も通園することになるのよ。今は年中さんの園児が年長さんになって初等部に入學して、初等部を卒業して中等部に入って、それから高等部も卒業して短大に入學して、保育実習でこの幼稚舎に戻ってくるかもしれない。その時もまだ真衣ちゃんは年少クラスのまま、保育実習にやって来た十何年前の年中さんにおむつを取り替えてもらうことになるかもしれないわね。それでもいいの？」

「……いい、いや！ やだ、そんなの！」

真衣は我を忘れて悲鳴をあげた。

「そうだよ。いやだよ。そんなの。だったら、いい子にして土曜日と日曜日はちゃんと幼稚舎に通おうね。第二段階の落第処分になったら何年間も毎日幼稚舎だけど、いい子にしていたら何ヶ月間の土曜日と日曜日だけでいいんだもの。それが終わって初等部と中等部をやっぱり何ヶ月間か経験すればちゃんと高等部に戻れるんだもの、いい子にしてられるよね？」

怯えの色を浮かべる真衣の耳元で美幸が甘く囁きかけた。

真衣としては、力なく頷くしかなかった。

それを見た美幸と茉莉がそっと目配せを交わし合う。いくら啓明が教育界において影響力の大きな教育法人とはいえ、生徒のそれまでの学歴、それも義務教育の終了履歴を無効にすることなどできるわけがない。しかし、今の真衣は、二人の説明に対して疑念を抱く余裕もなくしていた。それを見越して美幸と茉莉が行った説明に真衣はまんまとはめられ、高校生でありながら休日には年少クラスの児童として幼稚舎に通うという、特別補習を口実にした羞



恥きわまりない仕打ちを受け容れることに同意してしまったのだった。

## 《二七》 抑えきれない想い》

「それじゃ、真衣ちゃんも聞きわけよくしてくれるようだから、改めてオリエンテーションを続けましょう。——まず、お母様。お子さんを幼稚園に預けるにあたって、何か不安に思っておられることがおありでしたら遠慮無くおっしゃってください」

真衣が唇を噛みしめて顔を伏せると同時に、芝居がかった口調で美沙が言った。

「はい、やはり一番の心配事は、挨拶の中でこの子が自分でも申しましたように、まだおむつ離れできないことでしょうか。なんというか、よそさまのお子さんに比べて全体的に発育が遅れているようなところがありまして、それが気がかりで」

美沙の問いかけに、こちらも芝居気たっぷりに美幸が応じる。

「たしかに、そういうところが見受けられますね。特に、十六歳になってもまだおむつが外れないところなど、お母様としては不安に感じられるかもしれません。けれど、そのための年少クラスですからご安心ください。とつくにおむつ離れた年中さんには厳しくすることもあります、たとえ十六歳のお子様も相手でも年少さんにはできる限り優しく接します。おむつのお世話も私どもがちゃんとしたしますので心配なさらないでください。」

安心どころか、真衣にとっては何の慰めにもならない、むしろ屈辱きわまりない返答を美沙がする。

「それでしたらよろしいのですけれど。でも、おむつのことだけじゃなく、この子ったら、まだまだ甘えん坊さんで。幼稚園に入るのに、こんなことでいいのかどうか。——これを読んでいただけますか」

美幸は、真衣が肩に掛けたままにしている通園鞆の蓋を開けると、表紙に『れんらくちゅう ひよこぐみ・さとうまい』と書いてあるノートを取り出し、美沙の目の前に差し出した。「お預かりいたします。——ああ、なるほど。まだお母様のおっぱいをせがんだり、子守唄を歌ってあげないと寝つかないわけですか。——それに、離乳食がメインで、普通のご飯はお姉様に口移しで食べさせてもらっていると。遊ぶ時はガラガラで、おしゃぶりも手放せないということのようですね。承知しました。たしかに、幼稚園に入るような年ごろのお子様としては随分と甘えん坊さんのようです。しかも、本当は十六歳という年のお子様にしては、いえ、前もってこういうことを知らせておいていただければ、それに合わせた保育カリキュラムを組ませていただきますから、お母様はご安心ください。それと、お預かりしている間におむつをどれくらい汚したかとか、自分でご飯を食べられたかとか、そういったことはこちらが連絡帳に書いて通園鞆に入れておきますので、ご家庭でご覧になって、お子様の発育具合をご確認いただければと思います」

中学二年生の時に職場体験で行った近くの幼稚園での様子を思い出しながら美沙は如才なく応え、連絡帳を閉じて机の隅に置いた。

その後を、今度は茉莉が引き継ぐ。

「それでは、次に、忘れ物がないかどうか確認させていただきます。通園鞆を預かってもし

ろしいでしょうか」

いささか棒読みぎみに茉莉は言つて通園靴を受け取り、中に入っている物を一つずつ机の上に並べていった。

「まず、園田先生が預かった連絡帳。それから、小さなお子さんは汗をかきやすいのでガーゼのハンカチが二枚に、ティッシュ。はい、お弁当も忘れていませんね。それに、お絵描き帳とクレヨンもちゃんと入っています。結構です。あら、これは……」

最後に茉莉が苦笑交じりに通園靴から取り出したのは、高等部の制服を着ている時も胸ポケットに入れて真衣が肌身離す持たされているおしゃぶりだった。

「これは本来なら幼稚園に入るようなお子さんには必要のない物かと思われませんが、特別に認めることにしましょう。——あと、着替え類はお母様がお持ちのバッグの中でしょうか」

おしゃぶりをクレヨンの箱の隣に並べ、通園靴の中を確認し終わった茉莉は、次に、美幸が手に提げて持つてきている大きなバッグに視線を向けた。

「はい、園内着などはこちらに入れて持つてきています。ご確認ください」

「それでは拝見いたします」

通園靴に続いて大振りのバッグを受け取った茉莉は手早くファスナーを開け、中を覗き込んだが、しばらくすると小さく頷いて、顔を伏せたままの真衣に向かって声をかけた。

「どうやら忘れ物はないみたいだから、真衣ちゃん、先生と一緒に来てちょうだい」

その声に、不安に満ちた表情で真衣がおそろおそろ顔を上げる。

「そんなに心配しなくても大丈夫よ。幼稚園の子供たちは、通園する時は制服だけど、園にいる時は体操服とスモックに着替える決まりになっているの。それで、脱いだ制服は自分で各々の籠に入れて、体操服なんかを入れてきた袋や通園靴と一緒に棚に置くことになっているのよ。だから真衣ちゃんも、自分で着替えて、制服なんかを籠に入れて棚に置くお稽古をしようね。真衣ちゃんは年少さんだから、まだきちんとできないかもしれないけど、先生が手伝ってあげるから心配しなくていいのよ」

茉莉はそう言つてバッグの把手をつかみ、すっと立ち上がった。

それと同時に、美幸が真衣の腰を持つて強引に椅子から立たせ、背中をとんと押す。

茉莉が真衣を連れて行つたのは、教室の後ろの方の壁際に造り付けになっている二段の棚の前だった。棚とはいっても園児の身長に合わせてかなり低い位置にあり、二段の棚は更に幾つもの区画に仕切られていて、それぞれの区画に、名札の付いた収納籠が収めてあつた。

その棚の端に、籠が二つ並べて収めてある、他の倍ほどある大きさの区画が設けられていた。見ると、二つの籠にはどちらも『ひよこぐみ・さとうまい』と記された名札が付いている。

「真衣ちゃんは何の園児に比べて体が大きいから制服も嵩張るでしょう？ それに、他の子供たちには必要ない着替えも入れておかなきゃいけないから、籠の数を増やして、大きな棚を用意しておいたのよ。じゃ、お母様が持つて来てくださった靴に入っている物を籠に入れてからお着替えを始めようね」

自分用の区画が他の園児の区画よりもずっと大きいことに怪訝な表情を浮かべる真衣に向

かって茉莉は『他の子供たちには必要のない着替えも入れておかないといけない』という部分を強調して言い、収納籠を二つとも棚からおろして板張りの床に置くと、美幸から預かったバッグを真衣の目の前に押しやった。

「さ、最初は何が出てくるかな。真衣ちゃんが自分で鞆から出して籠に入れるのよ。上手にできるかどうか、先生、ここで見てあげてあげるわね」

茉莉にそう言われ、真衣は、少し離れた所に座っている美幸と美沙の顔をちらと見た。二人とも、こちらをじっとみつめている。ここで茉莉の言いつけに逆らったりしたら手痛い仕打ちが待ち受けているのは明かだった。

真衣はバッグの中におおずとおずと両手を差し入れ、最初に触れた衣類をつかみ上げた。

真衣がバッグから取り出したのは、園内で体操服の上に着るスモックだった。もちろん、制服と同様、真衣の体に合うようなサイズのスモックなどあるわけがないから、これも美沙の手作りだ。

「一番目はスモックだったわね。じゃ、次は何かな」

茉莉は、真衣がスモックをきちんと折りたたんで籠に入れるのを見届けてから、先を促した。

「あら、今度もスモックね。どうして真衣ちゃんのお母様は同じスモックを二着も用意してくださったのかしら」

茉莉の言う通り、真衣が二番目に取り出したのも、一着目とまるで同じスモックだった。それを見た茉莉は要領を得ない顔になったが、続けて真衣がバッグからつかみ上げた生地を目にした途端、納得顔になった。

「あ、そうか。真衣ちゃんは年少さんだもん、まだ上手にお弁当を食べられなくてスモックを汚しちゃうかもしれないのね。だからお母様は念のためによだれかけを持たせてくださったけど、それだけじゃ心配で、替えのスモックも用意してくださったみたいね。よかったわね、優しいお母様で」

そう、真衣がスモックの後でバッグから取り出したのは、細かなフリルの飾りレースで縁取りした大きなよだれかけだった。バッグに何が入っているか知らされていないまま手探りで順番に衣類をつかみ上げてゆく真衣がよだれかけを引っ張り出して頬を赤く染める様子をおかしそうに眺めながら、茉莉はくすすと笑って言った。

よだれかけをさっさと丸めるようにして籠に放り込んだ真衣がその次に取り出したのは、肩口から袖先にかけてピンクのラインが入った半袖の体操着の上衣が、替えの分も入っているのかスモックと同じように二着と、それに続いて、ハーフパンツタイプの体操服の下衣が、これもやはり二着だった。そこでいったんは真衣も幾らか落ち着いた表情になったのだが、体操服の後でつかみ上げた布地を目にした途端、再び顔を真っ赤に染め、取り出しかけた布地を慌ててバッグの中に押し込んでしまう。

「あら、駄目じゃない。せつかく取り出した物をまたしまっちゃうなんて。次は何が入っていたのか、先生に見せてちょうだい」

真衣がつかみ上げかけたのが何なのか、すぐに見当をつけた茉莉がバッグに右手を突っ込み、再びしまいこまれた布地を引っ張り出した。

案の定、それは、真衣の名前を刺繍した布おむつだった。それも、今度は名前だけでなく『ひよこぐみ』という文字が追加してあった。級友たちが縫いあげたおむつに美沙が刺繍を施したものに違いない。

「他の子供たちは体操服やスモックを小さな可愛い布袋に入れて持ってきているのに、真衣ちゃんのお母様が大きな靴を持ってきていたのは、こういうことだったのね。そうね、替えのおむつをたくさん持ってこなきゃいけないんだもの、小さな布袋じゃ入りきらないわよね。だから、他の子供たちと違って、真衣ちゃんだけ籠が二つも要るのよね」

茉莉は大きさに頷き、まだ何も入っていない方の籠を手前に引き寄せた。

「それじゃ、体操服やスモックみたいな普通の着替えはそっちの籠に入れておいて、真衣ちゃんにしか必要のないおむつはこっちの籠に入れておこうね。でも、たくさんのおむつだから入りきらないかしら」

茉莉は『真衣ちゃんにしか必要のない』という部分と『たくさんのおむつ』という部分を改めて強調して言い、真衣が自分ではなかなか手を動かそうとしないのを無視して、次々におむつをバッグから引っ張り出し、きちんと三つ折りにして収納籠に積み重ねていった。

だが、さすがに『たくさんのおむつ』だ。バッグに入っていたおむつを半分ほど移すと、もう収納籠がいっぱいになってしまう。

「仕方ないわね、残りは鞆に入れてたまま棚の近くに置いておきましょう。でも、これだけたくさんあれば今日と明日の分には充分だし、かなり余るかもしれないわね。だったら、余った分はこのまま籠に入れて来週の通園日まで棚に置いたままにしておくといいわ。いちいち持って帰ったり、また持って来たりするのは大変なもの」

おむつでいっぱいになった籠を棚に置き、まだ半分ほどおむつが残っているバッグを棚の下に置きながら、茉莉はこともなげに言った。

それを聞いた真衣の顔がこわばる。

「ま、待ってよ、茉莉お姉ちゃん。おむつをこのまま置いておくだなんて……」

真衣は引きつった表情で訴えかけた。

だが、真衣の言葉が終わらないうちに、論すように茉莉が言う。

「お姉ちゃんじゃないわよ。ここにいる間はひよこ組の副担任・園田先生なんだから忘れちゃ駄目よ。――ま、それはいいとして、おむつは置いたままでかまわないのよ。他の子供たちだって、汚さなかった着替えは三日に一度くらいしか持って帰らないことがあるんだもの。汗を吸う体操服は毎日持って帰って次の日にまた持って来るのが普通だけど、スモックとかは、クレヨンやお弁当で汚さなかったら一週間に二回くらいしか持って帰らなくてもいいのよ。だから、使わなかった替えのおむつも置いておけばいいの」

「でも、だって……」

茉莉はなんでもないように言うが、真衣にしてみれば、言われるがままになるわけにはゆかない。

「うふふ。月曜日になって私たちが高等部に戻った時、ここには幼稚舎の年中さんがいるわよね。その子たちにおむつを見られるかもしれないって、それが心配なのかな」

「……」

茉莉が指摘する通りだった。しかし、そうだと頷くのも躊躇われる、

「大丈夫よ、気にしなくても。幼稚舎の園長先生には本当の事情を高等部の校長先生から話してもらっているけど、幼稚舎の他の先生方や園児たちには園長先生が、幼稚舎がお休みの日に何ヶ月間か、入園を希望している子をお試し保育で預かることになったって説明してくれているの。来年入園する子をお試し保育で預かるんだから、その子、今はまだ年少クラスの子だってことになるでしょ？ 年少さんだったら、おむつのお世話になっていても不思議じゃないもの、おむつの入った籠が置いてあっても誰も変に思わないわよ。『ひよこぐみ・さとうまい』って刺繍してあるんだもの、まさか、このおむつのお世話になっているのが高等部の佐藤真衣さんっていう大きなお姉さんだなんて思う子や先生は一人もない筈よ」

「でも、おむつカバーが……」

真衣はぶるんと首を振って言い募った。

美幸がバッグに入れて持ってきたのは布おむつだけではない。替えのおむつカバーも持ってきているのは当然だ。むろん、茉莉は特製の大きなおむつカバーも収納籠に入れておいた。「ああ、そうだったわね。おむつは赤ちゃん用のサイズに縫ったのをそのまま使っているけど、おむつカバーは十六歳の真衣ちゃんのお尻の大きさに合わせて特別につくってもらったのを使っているから、それを見られたら変に思われちゃうかもね」

茉莉はにっと笑って言った。

「だ、だったら……」

「それでも心配することなんてないわよ。ほら、こうしておけば、もう大丈夫。——啓明に入る子は躰も行き届いているから、みだりに他の子の棚を覗き込んだりしないもの。幼稚舎からずっと啓明の私が言うんだから間違いないわ」

茉莉は、真衣の心配を余所に、籠の中の布おむつでおむつカバーを覆い隠し、これでよしとでもいうように両手をぱんと打ち鳴らした。

「でも、そんなじゃ見えちゃう。それだけじゃ、いつおむつカバーがみつっちゃうかしれないよ」

おむつカバーをバッグに戻そうとして真衣が棚の上の収納籠に手を伸ばしかけた。

と、それまでこの成り行きを見守っていた美沙がさっと立ち上がり、真衣の背後から敵しい声をかける。

「駄目よ！ せっかく園田先生がちゃんとしてくれたんだから、勝手にいじっちゃ駄目！」  
突然の美沙からの叱責に、びくっと体を震わせて真衣が振り返った。

美沙は、机の上からおしゃぶりをつかみ上げ、こちらに向き直った真衣の唇に押し当てる。いつしかすっきりそれが習い性になってしまっている真衣は、反射的におしゃぶりを口にふくんだ。

「入園式の日から先生に反抗しちゃ駄目でしょ。しばらく、そうやって静かにしてなさい」  
真衣が啞えたおしゃぶりを美沙は指の先でぴんと弾き、穏やかな口調に戻って言った。

「……」

真衣の顔に絶望の表情が浮かぶ。

建物の中ほどにあってあまり日の当たらない底冷えのする教室にずっといたため、臨時入園式が始まる直前から感じていた尿意がいつもより早く強まってきていた。そんなところへ日頃から排尿のきつかけとして啞えさせられているおしゃぶりを口にふくまれたのだから堪らない。

おしゃぶりの先が唇に触れた瞬間、最初の数滴がじくつと漏れ溢れ出たかと思うと、おしゃぶりを啞えた時には、もうとてもではないが我慢できずにじわつと溢れ出し、布おむつをじっとり湿らせていた。

「あ、ああ……」

今の真衣には、湿っぽい感触がおむつカバーの内側いっぱい広がってゆくのを感じながら、収納籠に手を伸ばすのも忘れ、替えのおむつを収納した棚の前に立ちすくみ、虚ろな目で美沙の顔を見上げるのが精一杯だった。

\*

しばらくして、真衣の腰と太腿がぶるつと震えた。

「もういいの？ もう出ちゃったのかな？」

真衣の様子をじっと見守っていた美沙が、確認するように言った。

だが、真衣からの返答はない。

すると美沙はすつと手を伸ばして真衣が啞えているおしゃぶりをつかみ取り、あやすような口調で重ねて言った。

「出ちゃったら先生に教えてくれなきゃ駄目よ。幼稚舎だからって遠慮することはないの。お家でお母様に教えている通りすればいいのよ。さ、おむつが濡れたこと、いつもはどうやって教えているのかな」

おしゃぶりを奪い取られた真衣は、どこか遠くを見ているような目を美沙の顔に向けたまま、僅かに口を動かした。

やがて、よく見ていないとわからないほど小刻みに震える唇から、弱々しい泣き声が漏れる。

「……おぎやあ……」

「そう。真衣ちゃんは赤ちゃんみたいに泣き声でおむつが濡れちゃったことを知らせるの。でも、恥ずかしがることなんてないのよ。真衣ちゃんはまだ年少さん、赤ちゃんと同じようなものなんだから」

粗相のたびに泣いて教えるよう繰り返し躡けてきた成果を真衣が幼稚舎の教室でも發揮したことに満足げな笑みを浮かべた美沙は、真衣の背中に両腕をまわしてそつと体を抱き寄せ、耳元に囁きかけた。

「高等部の教室でも泣き声で知らせる真衣ちゃんだもの、幼稚舎で同じことをしても恥ずかしいわけがないわよね」

その言葉に、真衣が頬をかつと赤らめ、誰とも目を合わすまいとして美沙の胸元に顔を埋める。

「あらあら、連絡帳にも書いてあった通り、本当に甘えん坊さんだこと。真衣ちゃんはお家でもこんなに甘えん坊さんなのかな」

家庭での真衣の生活ぶりや、真衣が顔を隠した本当の理由を充分に承知していながら、美沙は、いかにも呆れたというふうな口調で言った。

言われて、真衣は美沙の胸元にまます深く顔を埋める。

そんな二人の様子を美幸は穏やかな笑顔で見守っていたが、ふと、茉莉の方に視線を転じて、きらりと瞳を輝かせた。

何日ぶりに登校した日の五時間目、真衣は茉莉が見守る中、美幸の手でおむつを取り替えられた。息をこらしてその様子を見つめていた時の、熱に浮かされたような茉莉の顔つきそれから数え切れないくらいの回数にわたって、真衣は茉莉の目の前でおむつを取り替えられた。そのたび、茉莉はやはり、我を忘れたかのようにうっとりした表情を浮かべ、とろんとした目で真衣の下腹部を繰り返し舐めるようにみつめていた。

今も、そうだ。

(やっぱり、私の勘は当たっていたようね) 胸の中で美幸は短く呟いて舌なめずりをした。

「……先生、園田先生? ——ちよつと、茉莉、どうしちゃったのよ、茉莉ったら!」

初めの方は幼稚舎・ひよこ組の担任教諭を演じて茉莉に呼びかけていた美沙だが、なかなか返事をしようとしないうちに痺れをきらしたのか、最後の方は声高に茉莉の名を呼んだ。

「あ……」

その時になってようやく我に返ったかのように茉莉は瞬きを繰り返し、まだどこことなくろんとしたままの目で美沙の顔を見た。

「……ご、ごめんなさい。私ったらぼんやりしちゃって。でも、もう大丈夫だから、用事があるなら言っちゃうだい、美沙——あ、ううん、杉下先生」

「しっかりしてちょうだいよ。私たちは幼稚舎の先生。預かった子供のお世話をないがしろにしちゃいけないのよ。それも、自分じゃ何もできない年少さんを預かっているんだから尚更よ。このまま真衣ちゃんを放っておいたらお尻が気持ち悪くて可哀想でしょ?」

美沙は軽く溜息をつき、取りなすように続けた。

「ま、おむつを汚しちゃったのが恥ずかしくて私のおっぱいに顔をないしちゃう真衣ちゃんの可愛らしさにうっとりする気持ちはわかるけどさ。じゃ、おねしょシートを広げてちょうだい。少しでも早くちゃんとしあげないと、せつかく治ったおむつかぶれがぶり返しちゃうから」

「あ、う、うん。ごめんね、真衣ちゃん。すぐに用意するから、ちよつとの間だけ待っていてね」

日頃の生真面目さはどこへ行ってしまったのか、少し慌てた様子で茉莉は言い、教室の隅に置いてある大きな紙袋からおねしょシートを取り出して、収納籠が置いてある棚のすぐ前の床に敷いた。そうして、もういちど紙袋に手を差し入れ、様々な形の容器を幾つか抱えて戻ってくると、おねしょシートのそばに並べる。

おねしょシートも幾つかの容器も、今朝のうちに美沙と茉莉が保健室から幼稚舎の教室へ



運んできた物だ。いつもなら真衣と一緒に美幸の車で通学する美沙だが、今日は朝から臨時入園式用に門を飾りたてたり教室を片付けたりするために電車とバスを乗り継いで早めに学院にやって来て、茉莉と一緒に（ちなみに、疑似家族とはいっても、茉莉は美幸たちと同居しているわけではなく、自分の家から通っているのだが、今朝は美沙としめし合わせて同じ時間に学院へ来ていた）、真衣だけのための入園式の用意をし、真衣の世話をするのに必要な小物類を高等部の保健室からこちらへ運び込んで、美幸と真衣が来る前にすっかり準備を済ませていたというわけだ。

「さ、いいわよ。いつまでもお顔をないしないで、おむつを取り替えようね」

準備が整ったのを見て取った美沙は、まだ顔を自分の乳房に押し付けている真衣の体を優しく後ろに押しやった。

だが、真衣が美沙の体から離れる様子はない。

「ほら、駄目でしょ、杉下先生に甘えてばかりじゃ。いつまでも甘えん坊でって、お母様が心配なさるわよ」

なかなか美沙から離れようとしないう真衣の腰に手をかけて茉莉が言い、強引に後ろへ引く張った。

その様子は、いかにも、大好きな先生にすがり付いて離れない聞き分けの悪い園児と、それをたしなめる幼稚舎の教諭さながらだ。

しかし、そうしている間にも、自分よりも体の大きな二人の手で真衣は易々と美沙の体から引き離され、もうすっかりお馴染みになったおねしょシーツの上に寝かされてしまう。

「さ、おむつを取り替えようね。はい、お口が寂しくないように、お母様が鞆に入れておいてくださったこれをちゅうちゅうするといいわ。それと、これを振って遊んでいてね。その間にすぐに取り替えてあげるから」

美沙は、おねしょシーツの上に横たわった真衣の口に、いったんつかみ取ったおしゃぶりを再び咥えさせ、保健室から持ってきておいたガラガラを握らせた。ロンパースやベビーワンプイスに比べれば幼稚舎の制服を着せられた真衣はちよっぴりお姉ちゃんの筈だが、まだおむつの外れない年少さんという設定だから、赤ちゃん扱いもあながち的外れではない（もともと、十六歳という実際の年齢を考えなければの話だが）。

美沙は、美幸の方にとらと振り返って意味ありげに頷いてみせてから、真衣が着ているセーラーズーツの裾をお腹の上まで捲り上げ、丸見えになったおむつカバーの前当てに指をかけた。

マジックテープを剥がすべりりという音が教室の空気を震わせ、真衣の羞恥をくすぐる。

美沙は、真衣の両脚をO形に曲げさせ、外した前当てを両脚の間を通しておねしょシーツの上に広げた。それから、互いに重ねて留めてある横羽根を外して真衣の腰の左右に広げる。あらわになったおむつの端には、収納籠にしまったおむつとは違って、『さとうまい』という名前だけが刺繍してあった。それに、よく目を凝らして見てみれば、幾らか布地がくたびれぎみなのが見て取れる。そう、今、真衣のお尻を包み込んでいるのは、美沙の妹からお下がりにもらった方の布おむつだった。「うちの家は、お父さんの考えで、義務教育の間は公立っていう方針になっているのよ。でも、妹ったら、啓明の幼稚舎の制服が気に入っちゃ

って、啓明に行くんだ啓明に行くんだって駄々をこねていたの。ま、今は両親に説得されて公立の幼稚園に通ってるんだけどね。でも、そんな妹の願いが通じたのかしら。こうして、妹のおむつだけでも啓明に通えることになったんだもの。妹のおむつを貰ってくれた真衣ちゃんに感謝しなきゃいけないわね」

おしっこを吸い取ったばかりでまだ冷えきっていないおむつに目をやって美沙はどこか感慨深げに言い、続けて、真衣の顔を覗き込んでからかうような口調で付け加えた。

「でも、皮肉なものね。妹は幼稚園に上がるずっと前におむつ離れしていたから、真衣ちゃんに使ってもらわなかったら、このおむつも啓明の幼稚舎へ来ることなんてなかった筈なのよ」

そう言われて、真衣は、唇の代わりにおしゃぶりを噛みしめ、顔をそむけることしかできなかった。

と、そらした視線の先に何十枚もの絵が壁に貼ってあることに気がつく。幼稚舎に通園させられることになった羞恥と屈辱とでまわりの様子を窺う余裕もなくしていたのが、おねしょシーツの上に横たわらされて壁の上の方に目を向けるしかない今になってようやく目に留まった絵だ。

どの絵にも、幼い子供の姿がクレヨンで描かれていた。顔だけの絵もあれば、バストショットもあるし、全身像もあったが、少しだどどしい描線と、描かれた子供たちが着ている衣類から判断するに、どうやら、この教室の本当の主である年中クラス・すずめ組の園児たちが級友どうし互いの姿を描きあったもののようなのだ。そう思っよくよく目を凝らしてみれば、何枚かの絵はかなり詳しい描き込みがしてあって、描かれた園児が身に着けているセーラースーツの胸元に留められた名札には、『年中クラス・すずめ組』というクラス名と園児の名前がちゃんと漢字で書かれたものも混じっていた。

「どれも上手でしょう？ 年中クラスのお姉さんたちはみんなお絵描きもうまいし、漢字だって書けるのよ。真衣ちゃんはまだ年少さんだから平仮名しか読めないけど、頑張ってお稽古すれば漢字だって読んだり書けたりするようになるからね。——あ、でも、ご挨拶の中の『おむつ』や『十六さい』が読めなかったから、平仮名と数字のお勉強をもっとちゃんと済ませてからじゃないと無理かな」

美沙は手を休めることなくおむつの交換を続けながら、壁に貼っている絵に視線を向けて言った。そうして、もういちど真衣の顔を覗き込んで、わざと優しく言うて聞かせる。

「でも、よかったわね。絵だけど、おむつを取り替えてもらうところをお姉さんたちに見てもらえて。今はまだおむつの外れない年少さんだけど、早くパンツのお姉ちゃんになれるといいねって、みんなで応援してくれているみたいじゃない？ 幼稚舎じゃ、こうしてお姉さんたちに励ましてもらって、高等部じゃ、クラスのみんなにおむつを縫ってもらって。本当に真衣ちゃんは幸せなこと」

「やめて……そんなこと言っちゃやだ」

おしゃぶりを咥えているせいのかぐもった声で真衣は懇願するように言った。

そこへ、茉莉のかすれた声が割って入る。

「本当に、なんて幸せなのかしら、真衣ちゃんは。本当に——本当に、なんて羨ましいのか

しら、真衣ちゃんてば。本当に、なんて、なんて……」

「……!?!」

いつもとはまるで違う、なんだか喘いでいるかのような声に、真衣は思わず大きく目を見開いて茉莉の顔を見上げた。

茉莉は、瞬き一つせずに、じっと真衣を見据えていた。

真衣は戸惑いの表情を浮かべ、ごくりと唾を飲み込んだ。

と、美幸がゆっくり椅子から立ち上がり、足音を忍ばせて美沙のそばに歩み寄る。

「そろそろかしら」

美沙の傍らに立った美幸はすつと腰をかがめて美沙に耳打ちした。

それに対して美沙も声をひそめ、なんともいいようのない笑みを浮かべて美幸に囁き返す。「もう、いい頃だと思うわよ。朝早くから二人でいろいろ準備をしてきたけど、その間、茉莉は一度もトイレへ行っていないもの。幼稚舎には私たちしかいないから、鍵を開けてもらっているのは表門と正面入り口、それに、この教室だけで、トイレへ行こうと思っても教室から廊下に出てすぐの所にある防犯シャツターが開まっているから行けないようになっていた。だから、おしっこをしたくなったら、休みの日でもクラブ活動で校舎の鍵が開いている中等部か高等部のトイレを使わなきゃいけないんだけど、ここからだとかなり遠くて、よほど切羽詰まらなきゃなかなか行く気にならないし、茉莉がトイレへ行きそうなそぶりをみせたら、私が用事を頼んでわざと行けないようにしておいたのよ。私は保健室から荷物を持って来る時に行っておいたから大丈夫だけど、茉莉にはその時もトイレへ行かせないようにしておいたから、もうそろそろその筈よ」

真衣のお尻の下に新しいおむつを敷き込みながらそう囁く美沙の言葉に、美幸はすつと目を細めて小さく頷き、美沙のもとを離れて、茉莉がいる方に向かって静かに足を踏み出した。

茉莉の方に歩を進める美幸の背中をちらと見てから、美沙は、おねしょシーツのそばに置いてある丸い容器の蓋を開けた。と、どこか懐かしいような甘い香りがふわっと広がる。

美沙が蓋を開けたのは、塗り薬ではなく、ベビーパウダーの容器だった。

「いい匂いでしょ？ もっと早くこの匂いを真衣ちゃんに嗅がせてあげたかったんだけど、おむつかぶれで赤くなってお尻にベビーパウダーを使うと却ってひどくなっちゃうから、これまでママに止められていたの。でも、昨夜、おねしょで汚しちゃったおむつを取り替える時、ママがお尻の具合を丹念に診て、もうおむつかぶれはすっかり良くなったみたいだからって、今日からベビーパウダーを使わせてくれることになったのよ。またおむつかぶれにならないよう、ちゃんとぱたぱたしておこうね。でも、それにしても、おむつかぶれが治った真衣ちゃんのお肌は本当にすべすべでつるつるね。とても十六歳とは思えないわ。本当の赤ちゃんみたいで、ちよっぴり羨ましくなっちゃうわね」

甘い香りに引き寄せられたかのように顔をこちらに向けた真衣にそう話しかけて、美沙はベビーパウダーのパフを手を取った。

ベビーパウダーには皮膚をさらさらに保つ効果があり、おむつかバーに包まれて湿っぽくなりがちな赤ん坊の下腹部がおむつかぶれにならないよう予防する目的で使うのが一般的だ。

しかし、おむつを治療する効果があるわけではなく、逆に、おむつかぶれになってしまった皮膚に塗布すると、皮膚を刺激して症状を悪化させる場合も少なくない。そのため、おむつかぶれになってしまった場合はベビーパウダーの使用をいったん中止しなければならぬ。真衣の場合は、美幸の企みで、わざとおむつかぶれにさせられていたせいで、これまでベビーパウダーを使う機会はなかった。なのに美幸が美沙に向かってベビーパウダーを使うよう指示したということは、美幸の企みが目的を果たしたということ他ならない。そう、自分が本当は何のための薬を塗っているのか正確なことを知らぬまま美沙が真衣の股間に繰り返し塗り続けた脱毛クリームのおかげで、真衣の股間は、美沙が弾んだ声で言った通り、これ以上はないくらい『すべすべでつるつる』になってしまったのだ。いみじくもこれも美沙が口にした通り、『本当の赤ちゃんみたい』に。美幸の手で飾り毛を剃り落とされた時に残っていた毛根は綺麗に姿を消し、今や、微かな痕跡も残っていなかった。

僅かな産毛の影もない真衣の秘部に沿って美沙が手にした柔らかなパフが動きまわり、童女そのままに化した下腹部にうっすらと白化粧を施してゆく。

一方、美幸は、ベビーパウダーの優しく甘い香りが漂う中、美沙と真衣から目を離せないでいる茉莉のすぐそばに歩み寄り、耳朶に唇を触れ合わせんばかりにして囁きかけた。

「羨ましいんでしょう、真衣ちゃんが？ 羨ましくて仕方ないのよね、真衣ちゃんのことか？」

美幸が近づいてきていることにも気づかず、真衣のおむつを取り替える美沙の手元をじっと凝視していた茉莉は、はっとした表情で振り向いた。

「いいのよ、口に出して言わなくても。園田先生、——いいえ、茉莉、——ううん、茉莉ちゃん。あなたがどんな気持ちを抱いているかなんて、ママにはすっかりお見通しなんだから」

こちらに振り向いたきり何も言えずにいる茉莉の耳元で尚も囁きかけてから、美幸はおもむろに自分の首筋に手を伸ばし、真珠のネックレスをゆっくり外した。

その時になってもまだ茉莉は唇を小さく震わせて立ちすくんだままだ。

外したネックレスを棚の端に置いた美幸は、茉莉の目の前でスーツの上衣を脱ぎ去り、体を反らしぎみにしてブラウスのボタンを外し、胸元をはだけた。

「え……!？」

ようやく茉莉の口から声が漏れ出た。しかし、それは、まるで言葉にならない短くあえかな呻き声だった。

「真衣ちゃんはママや美沙お姉ちゃんのおっぱいを吸いながらおむつを汚すのが癖になっちゃってるの。今はおっぱいじゃなくおしやぶりのことも多いけど、もともとはおっぱいだっただのよ。そのことは茉莉ちゃんもよく知っているわよね？ 知っていて、それが羨ましくて仕方なかったのよね？」

美幸は、胸元がはだけてあらわになった授乳用ブラのカップをまるで躊躇することなくずりおろし、豊かな乳房を前方に突き出して、ねっとり絡みつくような声で語りかけた。

「だから、さ、いらっしやい。ママのおっぱいが欲しいんでしょう？ 真衣ちゃんみたいに

ママのおっぱいにむしゃぶりつきたいんでしょう？ 真衣ちゃんはおしゃぶりを咥えて美沙お姉ちゃんにおむつを取り替えてもらっているから、今は、ママのおっぱいは茉莉ちゃんだけのものなのよ。だから、遠慮なんてしなくていいの。さ、いらっしやい」

美幸は茉莉の背中に腕をまわして手前に引き寄せた。

一瞬は身を退こうとした茉莉だが、すぐに、まるで崩れ落ちるようにして美幸の体にもたれかかり、豊かな乳房に顔を埋めてしまう。

「そう、それでいいのよ。今の茉莉ちゃんは大人のお洋服を着て幼稚舎の先生になっているけど、それは『ごっこ遊び』なのよ。茉莉ちゃんは『幼稚舎の先生ごっこ』をしているだけなの。だって本当の茉莉ちゃんは、ママのおっぱいを吸いながらおしっこをしちゃうような小っちゃな子なんだから」

美幸はあやすように言いながら、美沙に向かって目で合図を送った。

真衣に新しいおむつをあて、おむつカバーの前当てを留め終えた美沙は、美幸からの合図を受けてすっと立ち上がり、棚の下に置いてあるバッグから布おむつを何枚か取り出すと、茉莉の背後に忍び寄った。

自分の乳首を茉莉の唇に押し当てながら、美幸がもういちど合図を送る。

美沙はその場で膝立ちになり、やおら茉莉のスカートを捲り上げると、あらわになったショーツに手を伸ばして、そのまま膝のあたりまで引きおろした。

思わず茉莉は振り返りかけたが、美幸の手で阻まれてしまう。

「気にしなくていいのよ。美沙お姉ちゃんも茉莉ちゃんがママのおっぱいを吸いながらおしっこをしちゃうっても大丈夫なようにしてくれているだけなんだから」

茉莉の後頭部を掌で包み込むようにして、美幸はわざと優しく言い聞かせた。

「で、でも……」

強引に美幸の乳首を口にふくまれたせいでくぐもった声になりながらも、茉莉は喘ぎ声とも悲鳴ともつかぬ声を漏らした。

その間に美沙は、膝まで引きおろした茉莉のショーツの内側に、バッグから取り出した布おむつを重ね入れて再び引き上げた。真衣に穿かせていたトレーニングパンツとは違って普通のショーツだからあまりたくさんのおむつを重ね入れることはできないものの、久々に登校した日に階段の踊り場で真衣に対してそうしたのと同じ措置だ。

「ち、ちよっと、美沙、何してるのよ!?!」

思ってもみなかった仕打ちに、茉莉はくぐもった声で喚いた。

それを美幸が少しきつい調子でたしなめる。

「なんて言葉遣いをするの、茉莉ちゃんたら。『美沙』じゃなくて『美沙お姉ちゃん』でしょ？ それに、美沙お姉ちゃんは、茉莉ちゃんがおしっこをしちゃうっても床を汚さないようにしてくれているんじゃないの。それを『何してるのよ』なんて言っちゃ駄目じゃない」

「な、なに馬鹿なこと言ってるのよ。どうして私が美沙のことを『美沙お姉ちゃん』なんて呼ばなきゃいけないのよ。だいいち、私がおしっこをしちゃうだなんて……」

茉莉は幾らか激昂した様子で喚いた。だが、美幸の手で後頭部を押さえられ乳首を口にふくんだままな上、そろりと手を伸ばした美沙にショーツと布おむつの上から恥ずかしい部分

をいじくら  
れたせい  
で、言葉が  
最後まで続  
かない。

「だって、  
茉莉ちゃん  
は真衣ちゃ  
んのことが  
羨ましくてた  
まらないん  
でしょう？  
おしっこ  
をしたくな  
ったらいっ  
でもしちゃ  
って、ママや美沙お姉ちゃんにおむつを取り替えてもらっている真衣ちゃんのことを羨ましくて仕方ないんでしょう？」

美幸は茉莉の耳元で甘く囁きかけた。

「よ、よしてよ、冗談は。あ……」

再び抗弁しかけた茉莉だが、美沙の巧みな指運びで秘部を責めたてられ、やはり途中で言葉を飲み込んでしまう。

「いつまでも強情を張ってないで、正直になった方がいいわよ。このままじゃ辛くなるばかりなんじゃないかしら？ ——自分でもわかってる筈よ。真衣ちゃんの秘密を知った時、茉莉ちゃんは『ずっと妹が欲しかった』と言って私たちの仲間になったんだったわよね。あの時は私もそれで納得して茉莉ちゃんを迎え入れたわ。でも、その後の茉莉ちゃんの様子を見ていると、ちよつと違うんじゃないかなと思いはじめようになったの」

「……」

「茉莉ちゃん、本当は妹が欲しいんじゃないの？ 自分が妹になりたいんじゃないの？ 『妹がいれば両親の関心が二人に分かれて自分はおもつと伸び伸び育つことができたと思う』って茉莉ちゃんは言ったけど、本当は『頼りになるお姉ちゃんがいてくれれば、私は両親の目なんか気にせずに好きなようにできた筈』って思っているんじゃないの？ ううん、好きなようにできたっていいっても、茉莉ちゃんが我儘でそんなことを考えていたとは私は思わない。もつと素直に、まわりのお友達と好きなだけ遊べたらいいなっていう気持ちになって、それがちよつと高じちゃっただけだと思う。それに、お友達と遊ぶにしても、みんなの前に立つんじゃないかって誰からも庇ってもらえる、そんな存在になりたいとも思っていたでしょう？」

「……」

「でも、いいのよ。小さい頃からずっと素直ないい子で、みんなの期待を一身に集めて、学



校へ入ってからはずっとクラス委員長を通している茉莉ちゃん。いつも重い荷物を背負って、辛かったでしょう？　いつ目に見えない重圧に押しつぶされてもおかしくないほど辛かったんでしょ？　そんな茉莉ちゃんもつと本当の自分でいたいと願っても、ちつとも変じやないわ。小さい頃に戻って、仲良しのお友達ときゃつきゃつって走り回りたくなつたとしても、それは当たり前のことだわ。みんなの前に立つばかりじゃなく、みんなの後ろからよちよちついていって、みんなから庇ってもらいたくなくても、全然おかしくなんてない。――本当は、そうなんでしょう？　自分の気持ちをどうやって言葉にしているのか自分でもわからなく、ついつい『妹が欲しかった』って言っちゃつたんだよね？」

「……」

「真衣ちゃんのお姉さんになりたかつたんじゃないやなくて、真衣ちゃんと同じになりたかつたのよね？」

最後に美幸は穏やかな声ながら有無を言わさぬ調子で決めつけた。

「そんな……真衣ちゃんと同じになりたかつただなんて……ずつとクラス委員長の私が、高校生のくせにおむつ離れできない真衣ちゃんと同じになりたいだなんて……」

茉莉はもう喚き立てることもなく、美幸の乳首を啞えたまま、呟くようにぼつりと言つた。「そんなに我を張らずに自分の気持ちに正直になつちやつた方が楽なのに。いいわ、じゃ、茉莉ちゃんに選ばせてあげる。――美沙、もういいわよ。あとは茉莉ちゃん自身の問題だから、どうするのか、本人に選んでもらいましょ」

美幸は穏やかな声で言い、それまで茉莉の頭を押さえつけていた手を離すと、目の前で膝立ちになっている美沙に向かって指示してから、改めて茉莉の耳元に囁きかけた。

「おしっこが溜まっているところに、このまま美沙お姉ちゃんに恥ずかしい部分をいじられていたら、間違いなくしくじつていたでしょうね。でも、ママが美沙お姉ちゃんに言いつけて、茉莉ちゃんの大事なところをいじるのはやめさせてあげたわよ。それに、無理矢理おっぱいを吸わせるのもやめてあげた。だから、あとは茉莉ちゃん本人の問題よ。茉莉ちゃんはどうしたい？　ママのおっぱいから口を離してトイレへ行くこともできるわよ。そしたら、また幼稚舎の先生に戻ることもできるし、真衣ちゃんのお姉ちゃんに同じことをすることもできる。だけど、このままママのおっぱいを吸いながら、おむつとパンツをおしっこでびしょびしょにしちやつてもいいのよ。その時は、真衣ちゃんと同じ、ママの娘で美沙お姉ちゃんの可愛い妹にしてあげる。――さ、どっちがいい？」

朝早くからトイレへ行きそびれた上、美沙の指で秘部をいじられたせいで、おしっこは今にも溢れそうになっている。迷っていられる時間はもう殆ど無い。

茉莉は一度だけすつと大きく息を吸い込んで、美幸の体にしがみついた。

## 《二八。再び流れ始める時間》

それからしばらく後、おねしょシーツの上に横たわる茉莉の姿があった。とうとう我慢できなくなつて溢れ出したおしっこを吸収したショーツと布おむつはもちろん、おしっこの飛沫に濡れたソックスやスカートだけでなく、スーツの上衣にブラウス、インナーシャツとブラまで短ぎ取られて丸裸にされた、あられもない姿だ。

そして、その傍らには、お尻を床にぺたんとして座り、茉莉の様子をみつめている真衣の姿。おむつを取り替えられた後、セーラーズーツを脱がされ、園内着に着替えさせられた真衣は、体操服の上に、制服に付いているのと同じひよこ形の名札を胸元に安全ピンで留めたスモックといういでたちだった。ただ、おむつでふっくり膨らんだお尻には体操服の下衣であるハーフパンツが窮屈で穿けなかったせいで、腰骨よりも少し下くらいの丈しかないスモックの裾からおむつカバーが半分ほど見えてしまっている（もつとも、ハーフパンツについては、おむつのお尻に窮屈なのは前もってわかっていたくせに、実際に穿かせてみて駄目なことを身をもつて思いしらせ、真衣に更なる羞恥を与える目的で美幸が美沙に指示してわざわざ用意させていたのだった）。しかも、おしやぶりを口にふくまされ右手にはガラガラを持たされたままといい、実際の年少さんよりも幼児めいて見える姿だ。

「さ、今度はちゃんとおむつをあてようね。さつきはおしっこが飛び散らないようにするためにパンツの中におむつを重ねただけだったけど、今度はおむつカバーも使つてちゃんとあてあげるから、いくらおもらししちゃつても大丈夫よ」

棚の下からバッグを持つてきた美沙が、おねしょシーツのすぐそばに膝をついて言い、バッグから取り出した十枚ほどの布おむつを茉莉の目の前に差し出した。

と、おむつの端に施された『ひよこごみ そのだまり』という刺繍が目にと留まって、それまで呆けたような顔をしていた茉莉の頬に朱が差す。

「随分たくさんのおむつだなんて思っていたでしょ？ 二日分なら、籠にしまったので充分いくら念のためだとはいっても、バッグに残った分は余計なんじゃないかな。そう思っていたでしょ？ そうね、真衣ちゃんが一人で使うには充分過ぎて余っちゃうわよね。でも、バッグに残っていたのは真衣ちゃんのおむつじゃないのよ。わかるでしょ？ ほら、ちゃんと茉莉ちゃんの名前を刺繍しておいてあげたんじゃもん、わからないわけないわよね。これもクラスのみなさんが縫ってくれたおむつなのよ。ひよつとしたら、茉莉ちゃん自身が縫ったおむつもこの中に混じっているかもしれないわね」

美沙はそう言いながらおむつの端の刺繍を指先でなぞってみせてから、次にバッグから新しいおむつカバーを取り出した。

「こっちは、ママがわざわざ茉莉ちゃんのために追加注文してつくってもらったおむつカバーよ。真衣ちゃんのおむつカバーを茉莉ちゃんに使わせてもいいけど、茉莉ちゃんが真衣ちゃんと同じくらい一日に何度もおむつを汚しちゃうと、枚数が足りなくなっちゃうもんね」



あらかじめ茉莉の名前を刺繍しておいた布おむつと、前もって追加注文しておいたおむつカバー。そんな物が準備されているところを見れば、茉莉が真衣と同じようにおむつを受け容れるに違いないと美幸と美沙が思っていたのは明かだ。

茉莉はまず頬を赤らめ、羞恥に顔を歪めた。

それを見た美幸が、すっと目を細めて真衣に話しかける。

「ほら、茉莉ちゃんがむずがっているわよ。真衣ちゃんはお姉ちゃんだから、おしやぶりを茉莉ちゃんにあげなさい。可愛い妹がむずがらないようにね」

「え？ ……茉莉お姉ちゃんが真衣の妹？」 思ってもみなかった美幸の言葉に、真衣は怪訝な表情で訊き返した。

「そうよ。もう茉莉ちゃんは幼稚舎の園田先生でもないし、茉莉お姉ちゃんでもないの。それどころか、真衣ちゃんよりも後で年少さんになったんだから、真衣ちゃんの妹なのよ。だから、これまでは『園田先生』とか『茉莉お姉ちゃん』とか呼んでいたけど、これからは『茉莉ちゃん』って呼んで可愛がってあげなきゃ駄目よ。だって、真衣ちゃんの方がお姉さんになるんだもの。だから、おしやぶりをあげてちょうだい。それが、茉莉ちゃんが真衣ちゃんの妹になったシルシなのよ」

美幸はこともなげにそう言って真衣の口からおしやぶりをつまみ取り、真衣の掌を広げさせて、その上におしやぶりをそっと置いた。

屈辱に満ちた表情で茉莉は顔をそむけたが、美沙の両手で頬を包み込まれ、強引に真衣の方に顔を向け直させられてしまう。

「あ、あの、茉莉……ちゃん、これ……」

しばらく躊躇った後、真衣がおずおずとおしやぶりを差し出した。

だが、茉莉は唇に力を入れて頑なおしやぶりを拒む。

そこへ、笑いを含んだ美幸の声が飛んできた。

「いつまでも我を張ってないで正直になりなさいって言ったでしょ？ だいいち、これを見れば茉莉ちゃんの本心なんてお見通しなんだから、今さら恥ずかしがっても無駄よ」

美幸は笑い声で『これ』と言いながら、茉莉の股間を指先でつつとなぞった。

そこには、本来なら豊かに生え揃っている筈の恥毛が一本も見当たらなかった。しかし、美幸の指先に伝わる感触から、生まれつきの無毛でないことは明かだ。

「自分で剃ったのね？ 真衣ちゃんのことを羨ましくて自分で剃ったんでしょ？ 真衣ちゃんみたいになりたくて」

美幸は、生えかけの飾り毛がちくちく触れる下腹部から指を離し、その指先を茉莉の目の前に突きつけて言った。

茉莉からの返事はない。

「でも、このぶんどと、剃ったのは一回だけかな。一回だけ剃って、もう生えかけてきているのに、あとは何もしていないみたいね」

美幸は、いたわるように言った。

それに対してようやく茉莉が口を開く。

「……怖かったから。……真衣ちゃんみたいになりたくて自分で剃ってつるつるにしたのは

いいけど、赤ちゃんみたいになっちゃった自分のあそこを見て、私ったらなんて馬鹿なことをしてるんだろって後悔して……剃った毛が生えてきてちくちくするけど、今度また剃ったりしたら、取り返しのことになっちゃいそうな気がして……自分が自分じゃなくなっちゃいそうな気がして……だから……」

「そう、自分が自分じゃなくなっちゃいそうだって思ったの。でも、それは違うわよ。茉莉ちゃんが自分の本当の気持ちに気がついて、本当の自分に戻るためには、もっと綺麗にして、真衣ちゃんみたいになるのすべすべにしなきゃいけないのよ。——自分でするのが怖いんだったら、ママがちゃんとしてあげる。魔法の薬を使って、すべすべにしてあげる」

諦めの表情を浮かべ言葉を探し探し応じる茉莉に向かって美幸はなんとも表現しようのない笑顔で言い、ベビーパウダーの容器の横に置いてある小さな丸い容器を持ち上げた。

「あ、それ……」

美幸が『魔法の薬』と言いながら手に取ったのがおむつかぶれの薬の容器だということに気がついて、真衣が怪訝そうな声をあげた。

「そうよ、真衣ちゃんが美沙お姉ちゃんに昨夜まで塗ってもらっていたお薬の内の一つよ。このお薬はね、普通のおむつかぶれのお薬よりもずっとよく効くお薬なの。おむつかぶれを治すだけじゃなく、おむつかぶれになりにくいようにする効き目もあるのよ」

美幸は素っ気なく言った後、僅かな間を置き、微かに語気を強めて付け加えた。

「それに、女の子の大事などころをつるつるすべすべにしてくれる効き目もね」

真衣の股間を見た茉莉が感情の昂ぶりを抑えきれずに自ら飾り毛を剃り落としたとしたら、それは、真衣が美幸の手で黒い茂みを処分されてから何日も後のことの筈だ。なのに、茉莉の股間には再び恥毛が生えかけているというのに、それよりもずっと前に処置を受けた真衣の股間にはその気配さえないどころか、今や僅かな痕跡も残っていないという事実。そして、意味ありげに美幸が付け加えた言葉。

「……!」

真衣は、はっと息を飲んだ。

だが、本当のことを知るのが怖くて、美幸を追求する言葉を口にすることはできない。

美沙も自分が真衣の下腹部に塗り込んでいた薬の正体に今更ながら薄々気づいたようで、美幸が手にした容器を凝視したまま身じろぎ一つしない。

一瞬、教室の中がしんと静まりかえる。

その静寂を破ったのは、美幸が容器の蓋を捻る、きゅっという音だった。

「ほら、可愛い妹におしゃぶりを啜えさせてあげるのよ、真衣ちゃん。茉莉ちゃんはさつきからずつと、お姉ちゃんにおしゃぶりを啜えさせてほしくてうずうずしているんだから」

美幸はおむつかぶれの薬（という口実の、実は強力な脱毛クリーム）を指先に掬い取り、真衣の顔を横目で見て言ってから、薬を掬い取った指先を秘部の周辺に軽く押し当て、茉莉の顔を覗き込むようにして念を押した。

「そうよね、茉莉ちゃん？ 真衣お姉ちゃんの可愛い妹になった茉莉ちゃんは、真衣お姉ちゃんがちゅうちゅうしていたおしゃぶりを自分もちゅうちゅうしたくて我慢できないのよね？ だったら、ちゃんとおねだりしなきゃ駄目よ」

自ら恥毛を剃り落とした恥ずかしい秘部をあらわにした姿でおねしょシーツの上に横たわる茉莉が、美幸の言葉を拒むことなどできる筈がない。

「ま、真衣……真衣お……真衣お姉ちゃん、茉莉もおしゃぶりをちゅうちゅうしたいの。……真衣お姉ちゃんのお、おしゃぶり、茉莉にちょうだい」

茉莉は真衣と目を合わさないようぎゅゅと瞼を閉じ、震える声で途切れ途切れに言った。

「……」

思ってもみかかった事の成り行きに、真衣はどうしていいのかわからない。

だが、真衣にしても、美幸の言葉を拒むことができないのは茉莉と同じだ。茉莉の下腹部に脱毛クリームを丹念に塗り込み続ける美幸から

「どうしたの、真衣お姉ちゃん？ 早くおしゃぶりをあげないと、可愛い妹の茉莉ちゃんがべそをかいちゃうわよ」

と言われると、下唇をぎゅゅと噛みしめて右手を動かし、茉莉の唇におしゃぶりを押し当ててしまう。

「よかったわね、茉莉ちゃん。優しい真衣お姉ちゃんにおしゃぶりを啜えさせてもらって。

二人は仲良しだから、これからも一つのおしゃぶりを二人で順番にちゅうちゅうするのよ」

限らない羞恥のせいでひりひりに乾いた唇に真衣の唾に濡れたおしゃぶりが触れるぬめつとした感触に身震いしながら、茉莉は、なぜだか下腹部がじんじん痺れてくるのを抑えられないでいた。

「じゃ、いつ失敗しちゃってもいいように、おむつをあてようね。あ、そうそう。鞆の中に残っているおむつは、茉莉ちゃん用の籠の中にしまっておいてもらえるよう杉下先生にお願いしておくわね」

茉莉がおしゃぶりをおぼろげと口にふくむ様子を満足げに眺めながら、美幸は、真衣の棚の下段に二つ並べて置いてある籠に『ひよこぐみ そのだまり』という名札を取り付けながら、バッグに残っているおむつとおむつカバーを籠に収納しておくよう美沙に指示した。もちろん、バッグの中の布おむつに名札と同じ文字の刺繍が施してあることはいままでもない。

たくさんのおむつを入れた籠が上下二段に並んでいれば、さすがに目立つ。しかも、幼稚舎から高等部まで一貫教育をモットーにしている啓明だから、幼稚舎の教諭が高等部の生徒の名前を知っていても不思議ではなく、たとえ『ひよこぐみ』というクラス名が付け加えてあったとしても、『さとうまい』と『そのだまり』という、どこかで目にしたような憶えのある名前が並んでいれば、お話し保育で休日に預かっている年少クラスの子供というのが本当は誰なのか、おぼろげながら見当をつける教諭もいるかもしれない。しかし、そうなったからそうなった時のこと。その教諭も企みの協力者に仕立ててしまえば問題はない。もうすっかり慣れた手つきで美沙が茉莉のおむつを収納籠にしまう様子をちらと見て、美幸は、新しいおむつカバーに布おむつをいそいそと敷き重ねた。

\*

その後、茉莉は、自分の名前を刺繍したおむつをあてられてから、先に園内着に着替えさ

せられた真衣と同様、体操服の上衣の上にスモックを重ね着し、スモックの裾からおむつカバーを半分ほど覗かせた、実際の幼稚舎の園児と比べても尚いっそう幼児めいて見える装いを強要された。美幸が持つて来ていたバッグに体操服やスモックが二着ずつ入っていたのは前述した通りだが、茉莉はそれを、真衣が汚してしまった時の着替えだと思っていた。しかし実は、その内の一着ずつこそが、予め茉莉のために用意されていた園内着だったのだ。

おむつをあてられ、腰骨のあたりまでしかないスモックを着せられて、真衣と共に絵本を読んでも聞かせてもらったり、真衣とお揃いのよだれかけで胸元を覆われて美幸から口移しでお弁当を食べさせてもらう茉莉には、日頃の生真面目なクラス委員長や茉莉お姉ちゃんとしての面影など微塵も残っていないかった。いつしか茉莉は、真衣と同様、自分では何もできない甘えん坊の年少さんになり果てていた。

いや、年少さんどころか、美幸の手によって眼鏡を外されてしまったせいで教室の中を歩くのも覚束ず、ちよつとしたことですぐに尻餅をついてしまうものだから、それこそ、ようやくよちよち歩きができるようになったばかりの赤ん坊といった方が近いかもしれない。近眼のため度の強い眼鏡をかけている茉莉だが、いつもの教室ならどこに何があるかわかっているから、視界がぼやけていても、微かに見える輪郭を頼りに障害物を避けて歩き回ることもできる。しかし、十数年ぶりに訪れて記憶も定かではない上に昔と比べれば備品の配置もまるで変わってしまったっている幼稚舎の教室を眼鏡無しでちゃんと歩けるわけがない。一歩進むにも、足元に何かがあるのではないかとおどおどしっぱなしで、頼りなげに両手を前に広げ、おむつでぷっくり膨れたお尻を後ろに突き出した、見るからに危なっかしい歩き方になってしまふのも当たり前だ。

そんな茉莉が、再びじわじわ強まってきた尿意にとうとう我慢できなくなったのは、午後二時ごろの少し早いオヤツの時間、温かいミルクが入った哺乳壘の乳首を強引に啜えさせられてすぐのことだった。

「ち、ちよつと待って、お願いだから、哺乳壘を離して」

美沙が支え持つ哺乳壘からミルクを飲んでいる真衣と向き合う格好で椅子に座り、腰をかがめた美幸の手で哺乳壘の乳首を唇に押し当てられた茉莉は、羞恥に顔を歪めながら懇願した。

「どうしたの？ 喉が渴いてないのかな？」

わざと不思議そうな表情で美幸は茉莉に訊き返した。

「……お、おしっこなの……」

哺乳壘の乳首を口にふくまされたまま、茉莉は微かに首を振った。

「なんだ、おしっこなの。だったら、そのまましちゃえばいいのよ。たぶん、お姉ちゃんのお真衣ちゃんだってミルクを飲みながらしちやつてると思うわよ。だから、妹の茉莉ちゃんが遠慮することなんてないの。そのためのおむつなんだから、哺乳壘をちゅうちゅうしながらしちやいなさい。今日から年少さんになったばかりの茉莉ちゃんは赤ちゃんと同じなんだから、ミルクをちゅうちゅうしながらおむつを汚しちやつても、お行儀がわるいなんて誰も思わないから」

家で真衣に使わされている哺乳壘と同様、茉莉に啜えさせた哺乳壘の乳首にも細工がしてあ

って、茉莉が吸わなくてもミルクが勝手に流れ出るようになってるから、哺乳壘の乳首を口にふくんだまま喋ると、唇の端からミルクが溢れ出してしまふ。美幸は、こぼれ出たミルクの雫をガーゼのハンカチで拭き取りながら、あやすように言った。

そこへ美沙が、こちらまあやすような口調で話しかけてきた。

「そうよ、茉莉ちゃん。真衣お姉ちゃんなんて、もうおむつをびしょびしょにしちゃってるんだから、妹の茉莉ちゃんがしくじっても、ちっとも恥ずかしくなんてないわよ」

そう言う美沙は、左手で哺乳壘支え持ったまま、右手の指を真衣のおむつカバーの中に差し入れて、おむつの様子を確認していた。

「ほら、思った通りだ。だから、さ、茉莉ちゃんも」

美幸は哺乳壘を茉莉の口にあてがったまま、空いている方のおむつカバーの股間をぼんと叩いた。

と、茉莉がぶるんと首を振って哺乳壘の乳首から口を離し、椅子からぱっと立ち上がった。「急にどうしたの、茉莉ちゃん。何をそんなにむずがっているの？」

美幸は、かがめていた腰をすっと伸ばし、後ずさりする茉莉の顔を正面から見つめた。

茉莉の唇からミルクの雫がこぼれ出し、顎先から伝い落ちて、スモックの胸元にうつすらとシミをつくる。

「お、おむつにおしっこだなんて、いや。わ、私は真衣ちゃんじゃないんだから、ちゃんとトイレへ行くの」

茉莉はセーラーズーツの胸元が濡れるのもかまわず震える声でそう言い、唇を「へ」の時に曲げた。

胸の奥底にひそんでいた想いを美幸に見透かされ、豊かな乳房に顔を埋めた瞬間、その想いを抑えきれなくなつてショーツとおむつを汚してしまった茉莉。その時は感情の昂ぶりを鎮められず、思いの丈を爆発させてしまったものの、いざ本当におむつをあてられ、真衣と同じように幼稚舎の園児そのままの格好を強要された今になってみると、このまま尿意に耐えかねておむつを汚したが最後、もう二度と引き返せない道に足を踏み入れてしまふような気がして、尿意のせいだけでなくぶるると体が震える。排尿障害という病気を言い訳にできる真衣とは違って、健康そのものの茉莉にとって、おむつが自分のおしっこでじわじわ生温かくなつてゆく感触を正当化できる口実など、一つもないのだ。

正門と教室の他はどこも鍵がかかっていて幼稚舎のトイレは使えない状態だから、おしっこをしたくなつたら、中等部か高等部の校舎へ行くしかない。だが、丈の短いスモックにおむつカバーという姿で幼稚舎の建物から出られるわけもない。自分でもそんなことはわかっているのだが、今の茉莉には、踵を返し、教室の入り口に向かって駆け出すことしかできなかった。

しかし、眼鏡を奪い取られたせいで周囲の様子がよく見えなくて勢いよく駆け出したものだから、足元に転がっていた布製のボールを踏みつけて体のバランスを崩し、三步も進まないうちに、板張りの床に尻餅をついてしまふ。

直後、茉莉の顔に絶望的な表情が浮かんだ。

その表情が何を意味するのか、それとまるで同じ表情が何度も真衣の顔に浮かぶのを目に

してきた美幸と美沙にはすっかりお見通しだった。

「あらあら、茉莉ちゃん、やんてば、思っていたよりもずっとお転婆さんだったのね。でも、小っちゃい子はそれくらい元気な

方がいいわね。それに、今はとってもお転婆で手のかかる茉莉ちゃんも、すぐにおとなしくなるに決まっているもの。そうよね、最初のお転婆ぶりが嘘みたいに見えるほど素直ない子になった真衣お姉ちゃんの妹なんだから。——さ、急に走って喉が渴いたでしょう？ 飲みかけだったミルクを最後まで飲んじゃいましょうね。おむつはミルクを飲み終わった後で取り替えてあげるから、ミルクを飲みながらおしっこをたっぷり出しちゃいなさい」

床に尻餅をついて入り口の方に虚ろな目を向ける茉莉の口に、膝立ちになった美幸が改めて哺乳壺の乳首をふくませた。

「入園のお祝いに真衣ちゃんにミルク飲み人形をプレゼントしようかなって思っていたんだけど、この調子じゃ、わざわざ買う必要はなさそうね。だって、人形を買わなくても、ミルクを飲みながらおむつを汚しちゃう茉莉ちゃんっていう妹ができたんだもの。それに、茉莉ちゃんがミルク飲み人形で遊びたくなったら、その時は真衣ちゃんに哺乳壺でミルクをあげれば、真衣ちゃんもすぐにおしっこでおむつを濡らしちゃうし。うふふ。二人が仲良く一緒にいれば、お互いに、自分専用の生きたミルク飲み人形を持っているのと同じってことになるわね」

真衣に哺乳壺のミルクを飲ませながら二人の様子を眺めていた美沙が、笑いを含んだ声で言った。

茉莉は、限らない羞恥で身を焼かれる思いだった。けれど、その羞恥が被虐的な悦びを与えてくれるのも、また、事実だった。

これから、茉莉のおむつを取り替えるたびに、おそらく美幸と美沙は、茉莉の秘部が奇妙な濡れ方をしていることに気づくことだろう。さらりとしたおしっこだけでは説明のつかない、もつと粘りけのあるぬるぬるした濡れ方をしていることに。だが、それに気づいても、二人はそっと目を合わせて互いに無言で頷き合うだけに違いない。



それから更に時間が経って午後の五時になると、真衣と茉莉は園内着からセーラーズに着替えさせられ、運転席に美幸が、助手席に美沙が乗る車の後部座席に座らされた。もちろん、特製のチャイルドシートに二人並んでだ。茉莉は真衣たちとは一緒に暮らしていないのだが、幼稚舎を出る前に美幸が茉莉の家に電話をかけ、保健委員会のことで打ち合わせをしたいから今夜は茉莉をこちらで預かると告げて母親の許しを得た上で車に同乗させたのだった。

入門の時だけでなく門を出る際にも職員証や学生証の確認が行われるのだが、何の問題もなくすんなりパスしたのは美幸だけだった。幼稚舎の教諭に扮した美沙が職員証ではなく学生証を提示すると、係員は不審げな表情を浮かべ、学生証の写真と美沙の顔とを何度も見比べたのだが、その間、幼稚舎の制服を着せられてチャイルドシートに座らされた真衣と茉莉は高等部の学生証をおさおすと提示して、後部座席を確認する別の係員に訝られていた。結局は体育大会に行われる仮装行列の準備と練習だという美幸の偽りの説明でなんとかおとなきを得たものの、平仮名で名前を記した名札を付けたセーラーズを着せられ、身動きが取れないようにチャイルドシートに座らされた状態でスカートの裾からおむつカバーを覗かせた自分たちの姿を係員にじろじろ眺めまわされる間、二人は羞恥に身を焼かれる思いだった。

しかし、車がようやくやく正門を通り抜けて道路に出ても、二人の羞恥がおさまることはなく、家に辿り着くまでの間、隣の車線を並走する車の窓からの視線がたまらないほど痛かった。辛い信号待ちや渋滞に引つかかることは殆どなく、車が停車している間にじろじろ覗き込まれることはなかったものの、まわりの車に乗っている人たちが怪訝な表情を浮かべているのは、こちらからも容易に窺いしれた。襟の広いセーラーズの胸元に付けた黄色の名札は意外に目立つし、隣を走るのがワゴンや四輪駆動車など背の高い車だと、高い位置から見おろされる格好になって、窓越しとはいえ、上半身だけではなく、おむつカバーまで目についてしまう。追い越しざまに見られるだけならともかく、同じような速度で並走していると、何気なくこちらの様子を目に留め、小さな女の子が下着を丸見えにしてチャイルドシートに座っているんだなと思って最初は気にも留めなかった相手が、やがて不思議そうな視線を何度も向けるようになり、いつしか、乗り合わせた者どうし明かな好奇の表情で何やら会話を交わし始めるのが二人には耐えられなかった。

しかも、美幸がわざと遠回りをし、余分な時間をかけて車を走らせるものだから、オヤツの時間にたっぷりミルクを飲まされた真衣と茉莉は、じわじわと尿意が高まってくるのを抑えられないでいた。

二人が揃って内腿を擦り合わせるのをルームミラー越しに確認した美幸は、助手席の美沙に向かって無言で頷いてみせた。

合図を受けた美沙が、体を捻るようにして後ろに振り向き、長い腕をいっぱい伸ばして、

真衣の口におしゃぶりをふくませる。

オヤツのミルクを飲みながらしくじった後、二時間ほどして再びおむつを汚してしまい、それから更に二時間弱が経過した今、排尿のきつかけになるおしゃぶりを啜えさせられて、それ以上の我慢などできるわけがなかった。真衣は、隣を走る車の窓からの視線を痛いほど感じながら、チャイルドシートの上で膀胱の緊張を解いた。いや、意識して緊張を解いたのではなく、勝手に解けてしまったという方が正確だろう。いずれにせよ、おむつかバーの中にじわじわ広がってゆくぬくもりに、真衣は身震いを止められないでいた。

その後、真衣の腰がひときわ大きくぶるっと震えるのを見届けた美沙は、真衣の口からおしゃぶりをつかみ取り、続けて茉莉の唇に押し当てた。

真衣とは異なりさほどおしっこが近いわけではない茉莉だが、床に尻餅をついた拍子におむつを汚してしまっただけからもう四時間近く経つわけだから、こちらもとくに我慢の限界を迎えていた。それでも内腿をもじもじ擦り合わせながらなんとか耐えていたところに、おしゃぶりを口にくくまされたものだから堪らない。真衣がおしゃぶりを啜えておむつを汚す場面をこれまでに何度も繰り返し目撃してきたのに加え、ついに今日は、美幸の乳首を吸いながら、或いは哺乳壺のミルクを飲みながら、自分がおむつを汚してしまっただけだ。想像を絶する羞恥に満ちたその体験によって心の奥底が激しく揺さぶられ、意識しないまま、真衣を真似るかのようにおしゃぶりを啜えた瞬間、下腹部の力を抜いてしまったとしても不思議ではない。もちろん、他の車からの視線が気にならないわけがない。眼鏡を外されたままだから、隣の車に乗っている者がこちらを凝視していたとしても茉莉にはその表情を読み取ることもなかなかわかないが、それでも、まわりの様子がよく見えないぶん却って感覚が鋭く研ぎ澄まされ、隣の車線を並走する車からの視線が痛いほど感じられるのだ。しかし、いったん溢れ出したおしっこの流れを止めることなどできるわけがない。

おしゃぶりを啜えて下腹部を震わせる茉莉の様子を見ると、ついさっきまでの自分自身の姿をみせつけられているような気がしてきて、たまたま、真衣は視線を窓の外に向けてしまう。

と、記憶のある建物が目に映った。

どこにもありそうな鉄筋コンクリート造りのその建物は、この三月に真衣が卒業したばかりの中学校に違いなかった。

そうして、しばらく車が走って次に見えてきたのは、こちらもやはり真衣が卒業した小学校だった。それからしばらくして、今度は、十年余り前に卒業した幼稚園の建物が近づいてくる。

美幸は、あてもなく車を走らせているのではなかった。真衣と茉莉におむつを汚させるために、本当なら三十分ほどで家へ帰りつく道を、わざと遠回りして余計な時間をかけているのだが、美幸の目的はそれだけではなかった。むしろ、本当の目的は、真衣に、自分が卒業した学校や幼稚園の建物を改めてみせつけることにあった。それも、卒業した順番とは逆に、中学校、小学校、幼稚園という順序で。

幼稚園にあがる前には昼のおむつも夜のおむつも外れていた真衣。なのに、高校生になっ



た筈の今、幼稚園の前を車で通る真衣のお尻はぐっしり濡れたおむつに包まれている。じわじわ冷えてきたおむつのせいで小刻みな身震いを止められないまま、卒業した順番とは逆に所縁のある学校を巡るささやかなドライブは、自分の置かれた立場をこれでもかというくらい真衣に思い知らせるために美幸が仕組んだ少し意地悪な小旅行だった。

\*

ぐるりと遠回りした末によく帰りついた佐藤家。

車からおりた真衣と茉莉はリビングルームへ連れて行かれ、床に敷いたバスタオルの上に二人並んで寝かされて、真衣は美沙の手で茉莉は美幸の手でスカート裾のお腹の上まで塗り上げられた。

「初めての幼稚舎で緊張したでしょ？ でも、もういいのよ。お家に帰ってきたんだから、いつもの赤ちゃんに戻ってママやお姉ちゃんに甘えていればいいの。真衣ちゃんがしてほしいことは、これまでと同じようにママとお姉ちゃんがみんなしてあげるから」

丸見えになったおむつカバーの前当てに指をかけて、美沙は、とびきり優しい声で真衣に言った。

その隣では、美幸が茉莉のおむつカバーに手を伸ばしながら、これ以上はないくらい優しい声をかけている。

「お家にはちゃんと連絡しておいてあげたから心配しなくていいのよ。明日の夕方にはお家に送ってあげるから、それまでの間は真衣ちゃんの妹になってママとお姉ちゃんにたっぷり甘えてちょうだい。これから茉莉ちゃんは週末のたびに幼稚舎の年少さんになって、土曜日の夜はこのお家で赤ちゃんになるのよ。羨ましくて仕方なかった真衣ちゃんと同じ赤ちゃんに——ううん、真衣お姉ちゃんの可愛い妹に」

甘ったるい声でそんなふうに話しかけ、揃って目の前の真衣と茉莉のおむつを取り替える美幸と美沙の姿は、まるで、いつまでもおむつ離れできない甘えん坊の双子の幼稚園児を甲斐甲斐しく世話する優しい母親としっかり者の姉さながらだ。

やがて、おむつカバーの前当てと横羽根が広げられて、ぐっしり濡れたおむつがあらわになる。どちらも、名前と幼稚舎のクラスとを刺繍した、高等部のクラスメート手縫いのおむつだ。美幸と美沙は同時に真衣と茉莉の左右の足首を一つにまとめ持って高々と差し上げると、おしっこを吸って重くなったおむつを手前にたぐり寄せてポリバケツに入れてから、差し上げていた足をバスタオルの上に戻した。

そうして、その後は、

「さ、おむつかぶれが治った真衣ちゃんは、またおむつかぶれにならないようにばたばたしておこうね。ほら、いい匂いでしょ」

「今日からおむつのお世話になる茉莉ちゃんは、おむつかぶれになりにくいように、お肌をつるつるのすべすべにするお薬を塗っておこうね。おむつがよく似合う、赤ちゃんのお肌になれるお薬を」

と、それまで揃って同じように動いていた美幸と美沙の手が今度ばかりは別々に動き、美沙

はベビーパウダーの蓋を開けて、パフを真衣の下腹部に押し当て、美幸は脱毛クリームを指先に掬い取って茉莉の下腹部に入念に塗り込みでゆく。その間、真衣と茉莉はぎゅっと顔を閉じたままだ。おむつカバーに包まれた自分の下腹部や、おむつカバーとおむつを広げられてあらわになった自分の無毛の股間を目にするのは耐え難いし、隣でおむつを取り替えられている級友の姿を目の当たりにするのも、それがそのまま自分の姿なのだと思ひ知らされることになるから、とてもではないが我慢できるものではなかった。

少しの間だけ別々の動きをした美幸の手と美沙の手が、ベビーパウダーと脱毛クリームの塗布が終わると再びびったり息を合わせて動き出し、すっかり手慣れた様子で真衣と茉莉のお尻の下に新しいおむつを敷き込み、おむつカバーの横羽根と前当てをマジックテープで留め、おむつカバーからはみ出た布おむつをおむつカバーの中に押し込めば、それでおしまいだ。

二人同時に新しいおむつをあて終えた美幸と美沙は、真衣と茉莉をバスタオルの上に立たせると、続いてセーラーズを脱がせ、室内着に着替えさせた。

「真衣ちゃんは今日から幼稚園に通うようになったし、可愛い妹もできたから、これまでよりもちょっぴりお姉さんらしいドレスにしようね」

そう言つて美沙が真衣に着せたのは、昨日までのベビーワンピースではなく、アリスタイプのエプロンドレスだった。ただ、『ちょっぴりお姉さんらしく』とはいっても、背中のエプロンの結び目や肘のあたりを飾り立てるフリルがベビーワンピースに比べれば本当にちょっとだけおしゃまな感じがするものの、全体のふんわりしたラインや、ワンピースと同じベビーワンピースの生地で縫製してあるところなど、いかにも、小さな女の子向けの仕立てになっているのは変わらない。しかも、普通のアリスドレスならスカートとパニエとの組み合わせになっている筈なのに、美沙が真衣に着せたエプロンドレスのスカートの内側は、ロンパースや昨日までのベビーワンピースと同様、おむつを取り替えやすいよう股間にボタンが並んだゆつたりしたボトムスが縫い付けになっていた。

一方、美幸は

「茉莉ちゃんは今日からおむつのお世話になるようになったばかりの赤ちゃんだから、これを着せてあげるわね。そのうち美沙お姉ちゃんに新しい洋服をつくってもらうけど、それまでは真衣お姉ちゃんのお下がりでご我慢してちょうだい」

と話しかけながら、昨日まで真衣が着せられていたベビーワンピースの内の一着を茉莉に着せていた。

揃ってセーラーズを着ている時はまるで双子のような雰囲気さえあった二人だが、片やエプロンドレス、片やベビーワンピースといういでたちになると、茉莉と同じようにおむつでお尻をぷっくり膨らませ、茉莉よりも幾らか背の低い真衣でも、『ちょっぴりお姉さん』に見えなくもない。しかも、茉莉の方は「赤ちゃんなんだから、これもちゃんとしておこうね」と、ワンピースの胸元を大きなよだれかけで覆われたから尚更だ。

「うふふ。二人ともとっても似合っているわよ。じゃ、着替えも終わったし、夕飯にしましよう。今日は帰りが遅くなっちゃったから、途中で買ってきたコンビニのお弁当だけど仕方がないわね。あ、でも、真衣ちゃんと茉莉ちゃんは、買い置きのベビーフードよ。コンビニの

お弁当みたいな香辛料をたくさん使った食べ物をつちやい子に食べさせるわけにはいかないもの」

帰りが遅くなったのは自分がわざと遠回りしたせいなのに、そんなことはおくびにも出さずに美幸はしれっとした顔で言い、茉莉の手を引いてリビングルームをあとにした。

美沙に手を引かれた真衣が、歩を進めるたびにふわっと舞い上がるアリスドレスの裾を片手で押さえながら二人に続く。

替えのおむつを収めたバスケットや、ひよこの形をした名札を胸元に付けたセーラーズーツと、洗剤を溶かした水を張って汚れた布おむつを浸けたポリバケツ。人影が消えてしんと静まり返ったリビングルームに残された数々の物を見て、ついさっきまでそこでおむつを取り替えられていたのが実は高校生だと言いついて当てる者など皆無だろう。真実を知っているのは、薄いカーテンの隙間から室内の様子をじっと見守っている銀色の月だけに違いない。

\*

それから更に数時間後。

もう随分と高いところまで昇った月の光が差し込む自分の部屋で、美幸は、机の上に置いた二つの写真立てをじっとみつめていた。

向かって左側にある写真立てには、真衣の部屋の机に置いてある写真立てに入っているのと同じものを焼き増した写真が収まっていた。そして、右側の写真立てには、幼稚舎の臨時入園式の様子をデジカメで撮影し、遠回りした帰り道の途中に立ち寄った写真店でプリントした写真の中の一枚。

左側の写真に写っているのは、幼い頃の真衣と、若い母親。公立幼稚園の入園式に臨み、華やかに飾りたてられた正門の前で二人仲良く並ぶ、笑顔が眩い母娘連れの姿だ。一方、右側の写真には、啓明女学院幼稚舎の表門の前に並んでいる真衣、美幸、茉莉の姿があった。

（結局、あなたとは離れ離れになったままでしたね。自分のものにしたかと思っただけでも手に入れてきた私がたつた一つだけこの手にできなかったのが、あなたです）

美幸は、写真に写っている若かりし頃の真衣の母親に向かって心の中で囁きかけた。

（でも、そんなあなたも、大切なお嬢さんを独り残すのは気がかりだったんですね。だから、あなたは、真衣ちゃんを私に託すことにした。——いいえ、今はいないあなたの本心がわかる筈なんてありません。でも私は、愛おしくてたまらないお嬢さんをあなたが私に託してくれたと信じることにしたんです。私に託すために、私と真衣ちゃんを引き合わせてくれたんだと信じることにしたんです。優さんとの出会いは、私と真衣ちゃんが出会うためのきっかけにすぎなかった。そうなんでしょう？）

写真から返答があるわけがない。しかし、かまわず美幸は胸の中で囁きかけ続けた。

（あなたがいなくなつてすぐ、真衣ちゃんの頻尿症状が出現した。そして、あなたと私が卒業した啓明に入学した時期と前後して真衣ちゃんの夜尿が始まった。それもみんな、私と真衣ちゃんとの出会いの機会をつくるために天国のあなたが神様にお願ひしてくれたからだ）

信じることにしたんです)

無言で囁きかける美幸の瞳が、月の光を受けて銀色に煌めいた。

(あなたの大切な宝物のことは私にまかせてください。傷一つ付けないよう大切に守ります。どんなことがあっても傷が付かないよう、この世で最も柔らかな布にそっと包んで、一生に渡って守り抜きます。そう、これ以上ははいくらしい優しく柔らかなおむつにずっと包み込んで)

美幸はふっと溜息をついて、机の隅に据えた小さなスピーカーの方に振り向いた。特製のベビーベッドの枕元にセットしたマイクが拾った音を伝えてくれるスピーカーだ。

今、スピーカーから微かに聞こえてくるのは、やすらかな寝息だけだった。寝息は二人分。一人は真衣、もう一人は茉莉だ。

夕飯と入浴を済ませた後、育児室そのままにしつらえられた真衣の部屋に連れて行かれた二人は、一緒に、特製の大きなベビーベッドに寝かされた。もうすっかりそれが習い性になってしまっている真衣は、サークルメリーがかかるやかなメロディを奏でる中、美幸が口ずさむ子守唄を聴きながら、ぼんぼんとお腹を叩かれてすぐに寝かしつけられてしまったし、一方の茉莉も、夕飯のベビーフードに美幸が混入した睡眠導入剤のせいで階段を昇る途中からうとうとし始めており、こちらも、まるで意識を失うようにすつと眠りに墜ちてしまうのに、まるで時間はかからなかった。

(でも、もうすぐ、この寝息が泣き声に変わるんですよ。おむつが濡れちゃったことを教える泣き声にね。最初にべそをかくのは真衣ちゃんでしょうね。でも、真衣ちゃんの泣き声です。すぐ、茉莉ちゃんもべそをかくと思いますよ。だって、二人は本当に仲のいい姉妹になっちゃったんだから)

スピーカーから聞こえる寝息に耳を傾けながら、美幸は、悪戯めいた笑みを浮かべて、再び真衣の母親の写真に向かって胸の中で囁きかけた。

(だから、安心してください。あなたがいなくなっても、思いきり甘えられる相手を失った真衣ちゃんは、無理に無理を重ねて、小さいうちから何でも自分でこなすことをおぼえてしまいました。実際の年齢とはまるで似つかわしくないほどしっかりとしなやかと事あるごとに自分に言い聞かせて育ちました。その時から、真衣ちゃんの時間は止まってしまったんです。自然にゆっくり過ぎてゆく時間から、一足跳びで大人になる時間に飛び移ってしまったんです。そして茉莉ちゃんは、両親の期待に応えようとして、真衣ちゃんとは別の意味で、やはりこちらも、急いで大人になる時間に取り換えてしまったんです)

美幸は、幼稚舎の表門の前でおむつカバーが見えないようにセーラーズーツの裾をさかんに引っ張っている写真の中の真衣と茉莉に視線を転じた。

(そんな二人と、美沙さんと、そして私が出会った。それは偶然なんかじゃなく、必然だったんです。いいえ、あなたがそうさせてくれたんだと信じています。私たちが出会って、真衣ちゃんも茉莉ちゃんも、本当の自分の時間に戻る決心を強くしたんです。大急ぎの時間からおろりて、ゆっくり流れる時間へ、もういちど乗り換えようとしていります。私と美沙さんは、それを手伝ってあげたいんです。飛び越えてしまった時間を巻き戻して、もういちど最初からやり直させてあげたいんです。そう、あなたがいなくなってしまった時に戻って。

幼稚園の入園式の日を迎えて笑顔いっぱいだったあの頃に真衣ちゃんを戻してあげたいんです」

美幸は、写真の中の真衣と茉莉の羞恥に満ちた表情を目にしてくすくすと笑い、母親の写真に視線を向け直した。

（今はこんなに恥ずかしそうにしている二人だけど、すぐに笑顔を取り戻しますよ。心の一番深い所に身を隠していた幼い時の本当の自分がひょっこり姿を現して、嬉しそうに笑うに決まっています。土曜日の夜だけこのお家に預かることにした茉莉ちゃんも、すぐになんかここにいたいって言い出すに決まっています。高等部の授業を受けている途中でも、真衣ちゃんみたいにセーラー服の下におむつをあててほしくて、私がいる保健室へやって来るに違いありません。いつもずっと真衣ちゃんや美沙さんと一緒にいたいって言い出すのは目に見えているんです）

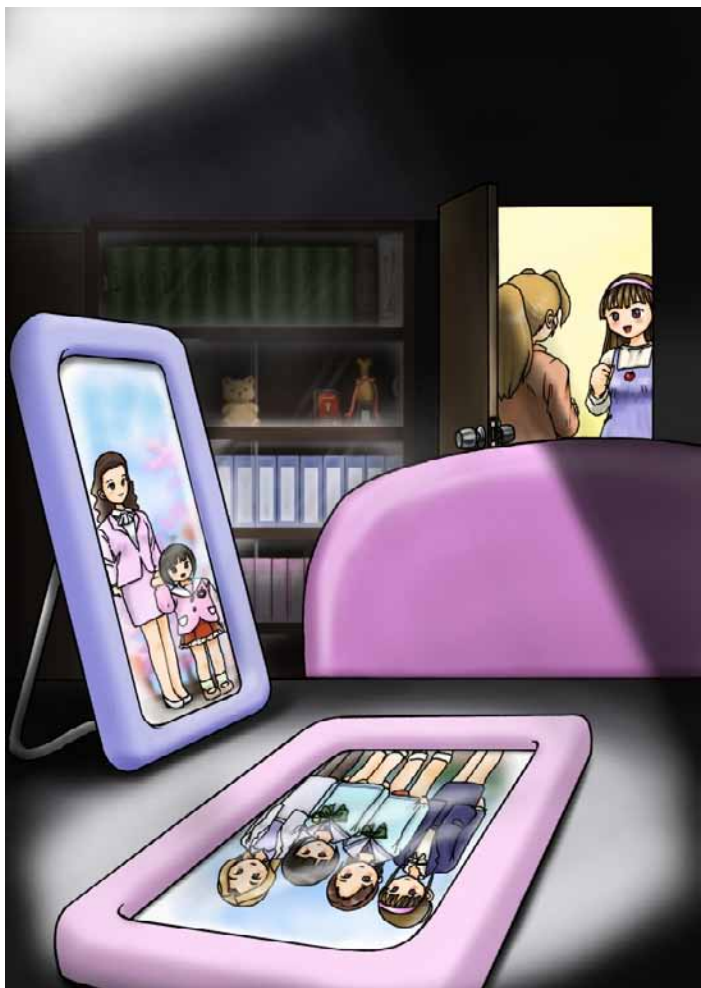
美幸はそつと瞼を閉じた。

（優さん、海外出張から帰ってきたらびっくりするでしょうね。だって、真衣ちゃんがすっかり赤ちゃん返りしちゃった上に、知らないうちに真衣ちゃんにお姉ちゃんと妹ができていくんですもの。でも、かまいませんよね？　だって、優さん、子供が大好きで、子供がたくさんできてもいいように部屋数を増やすよう工務店の人をお願いしていたんでしょう？　だったら、娘が三人になっても喜んでくれますよね？　いいえ、喜んでくれるに違いありません。だって、私がそう決めたんですから）

再び瞼を開けた美幸の瞳は、月の光とはまるで異なる妖しい輝きをたたえていた。そこへ、とんとんとドアをノックする音が美幸の耳を打つ。

「ちよつといいかな、ママ。茉莉ちゃんに着せてあげるベビー服のデザインを考えているんだけど、生地を組み合わせて迷っているのよ。気に入った柄が多すぎて、私だけじゃ決められないみたい」

美幸の返事も待たずにドアを開け、顔を見せたのは美沙だった。  
「帰り道の途中に立ち寄った手芸店で買った生地でしょう？　あそこにあるのはどれも可



愛いから、あれこれ迷っちゃうのも仕方ないわよね。いいわ、私も一緒に組み合わせを考え  
てあげる」

美幸は鷹揚に頷いて椅子から立ち上がり、自分の部屋から廊下に出ると、妖しい光を宿し  
た目を再び母親の写真に向けてから、ゆっくりドアを閉めた。

主のいなくなった部屋に残された写真立ての中、窓から差し込む冷たい月の光を浴びて、  
真衣の母親は相変わらぬ優しい笑みを浮かべていた。

「完」